岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 165

立石遺跡
大開遺跡
六番丁場遺跡
九番丁場遺跡

一般国道179号道路改築工事に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 165

立石遺跡
大開遺跡
六番丁場遺跡
九番丁場遺跡

一般国道179号道路改築工事に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

1．竪穴住居７

2．人形土製品

序

岡山県の三大河川の一つであります、吉井川は、中国山地にその源を発し、流域の水を集めながらその規模を大きくしながら流れ下ります。その吉井川が、最初に出会う大きな平地が津山盆地であります。この津山盆地は、その中心に津山市が、東に勝央町が、南に久米町が、西に鏡野町が立地しており、それら市町には多くの遺跡が存在することが知られております。

国道179号は、苫田ダムの工事に伴い新たな改良工事を必要とすることになりました。また、鏡野町の中心部を貫通するこの道路も、近年の交通事情から、その改良も求められてきました。こういった情勢のなかで、岡山県教育委員会は、おおまかな路線が決定した後、担当部局と埋蔵文化財の保護・保存について協議を進め、まず遺跡の分布調査を行い、必要に応じて確認調査を実施しました。その確認調査の結果を基に、遺跡の存在する部分については、記録による保存処置をとることにしました。

発掘調査は、工事工程や、用地の買収に合わせて、まず平成元年度・２年度に立石遺跡について実施しました。以後、平成７年度に大開遺跡のすべてと、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡の一部、平成９年度には、六番丁場遺跡の残り部分と、九番丁場遺跡の一部、また、平成11年度には、九番丁場遺跡の残り部分の発掘調査を実施しました。そして、これらの結果を平成10・11・12年度に整理し、報告書にまとめることができました。

本報告書に収載した遺跡を通じて、とくに注目すべき成果に、縄文時代早期の遺構、遺物の発見があります。弥生時代では、直径で約12ｍを測る竪穴住居が発見され、これは岡山県下最大級の規模を持ち、注目されると思います。古代では、大形の掘立柱建物が、布原の台地上に点々と存在しています。また、古代に属する製鉄遺構を発見しており、美作国が古代において産鉄国として注目されている状況を垣間見る事が出来るような遺構であるだけに、その存在は大きいものがあると思います。

この報告書が、今後の歴史研究を進める上での基礎資料となり、さらに埋蔵文化財の保護、保存のために有効に活用されることを希望しております。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、種々の御教授と御指導下さった方々、地元町内会など発掘調査に御協力戴いた方々、また、暖かい御理解と御協力をいただいた津山地方振興局、関係諸機関に、あらためてまして衷心より厚く御礼申し上げます。

平成14年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正岡睦夫

例　言

1　本書は、一般国道179号道路改築工事に伴い、津山地方振興局土木部より委託を受けて、岡山県教育委員会が実施した発掘調査の報告書である。

2　調査した遺跡とその所在地、調査年次は、次に記すとおりである。

立石遺跡	苫田郡鏡野町小座	平成元年度、平成２年度調査
大開遺跡	苫田郡鏡野町布原	平成７年度調査
六番丁場遺跡	苫田郡鏡野町布原	平成７年度、平成９年度調査
九番丁場遺跡	苫田郡鏡野町布原	平成７年度、平成９年度、平成11年度調査

3　発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

4　発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎、水内昌康両委員から有益な助言、指導を得た。

5　専門分野における鑑定、分析等については、次の方々から有益な御教授を頂いた。また、科学的分析については、報告文を得た。記して感謝の意を表します。

石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学）
鉄滓等の鑑定、分析	大沢正己（九州テクノリサーチ）

6　本報告書の作成は、平成９年度までに完了していた遺跡については、（故）平井　勝が、平成11年度に調査した遺跡については、井上　弘が担当した。

7　遺物の写真撮影には、江尻泰幸氏の援助と協力を得た。

8　本報告書の執筆は、第１章は時實奈歩、第４章は椿　真治、第５章は金田善敬、第６章は井上が担当した。第２、３、７章については、調査担当者が分担し、各節、各項目、あるいは遺構ごとに文末に文責を記した。

9　本報告書の編集は、当初（故）平井　勝が担当した。それを井上が引き継ぎ、最終的な編集は井上が行った。

10　出土遺物、図面、写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

1　本報告書に使用した標高は、海抜高である。

2　大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡の遺構全体図のグリッドは、国土座標系の座標に準拠し、その座標北を使用している。

3　本報告書に用いた時代、時期区分は統一していない。一般的な政治史区分を用い、それを補うために世紀などを使用している。

4　本報告書の遺構と実測図の縮尺は、一部例外もあるが、基本的に次のように統一している。

遺構

竪穴住居・掘立柱建物（1/80）　土壙・溝（1/30）

遺物

土器（1/2・1/4）　土製品（1/1・1/2）　金属製品（1/2）

玉類（1/1）　石製品（1/2・1/4）

5　遺構配置図に示す遺構名は、次のように略した。

竪穴住居「住」　掘立柱建物「建」　土壙「土」

6　本報告書の挿図番号、表番号、図版番号は、章をとおしての連続番号であるが、遺物については、各遺跡ごとに番号を付けた。

7　遺物番号は、土器、土製品、石製品、ガラス製品、金属製品に分類し、それぞれに通し番号を付けた。また、土器以外には、その材質を示し、他と区別できるように次の略号を番号の前に付けた。

土製品：C　石製品：S　ガラス製品：G　金属製品：M

8　土器実測図で、中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元が不確実な物を示す。

9　本報告書第1章第2図は、国土地理院の1/25000地形図「津山西部」「香々美」を複製し、加筆した。

目　次

序
例言
目次
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……1
第２章　発掘調査および報告書作成の経緯……5
　第１節　調査に至る経緯……5
　第２節　調査と整理の体制……6
　第３節　調査の経過と報告書の作成……8
第３章　確認調査の概要……9
　第１節　立石遺跡……9
　第２節　竹田～吉原地区……10
　第３節　大開遺跡・六番丁場遺跡・九番丁場遺跡……18
第４章　立石遺跡……19
　第１節　調査区の概要……19
　第２節　遺構と遺物……22
　　1　竪穴住居……22
　　2　掘立柱建物……28
　　3　その他の建物……34
　　4　鍛冶炉……34
　　5　土壙……36
　　6　溝……46
　　7　包含層・その他出土遺物……48
　第３節　まとめ……49
第５章　大開遺跡……51
　第１節　調査区の概要……51
　第２節　遺構と遺物……55
　　1　竪穴住居……55
　　2　掘立柱建物……57
　　3　土壙・溝……57
　　4　風倒木痕……60
　　5　包含層・その他出土遺物……62
　第３節　まとめ……64
第６章　六番丁場遺跡……65
　第１節　調査区の概要……65

第２節　遺構と遺物……70
1　掘立柱建物……70
2　土壙……71
3　溝……75
4　包含層・その他出土遺物……76
第３節　まとめ……82
第７章　九番丁場遺跡……83
第１節　調査区の概要……83
第２節　遺構と遺物……90
1　竪穴住居……90
2　掘立柱建物……108
3　土壙……118
4　溝……144
5　製鉄遺構ほか……152
6　包含層・その他出土遺物……155
第３節　まとめ……160
1　遺跡の概要……160
2　九番丁場遺跡２区で確認された大形住居（竪穴住居７）について……161

付載　九番丁場遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査……173

表　目　次

表１　弥生時代後期における美作の大形住居一覧表……164
表２　土器観察表……165
表３　石製品・土製品・鉄製品・ガラス製品一覧表……171
表４　新旧遺構名対照表……172
Table. 1　供試材の履歴と調査項目……178
Table. 2　供試材の組成……179
Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ……178

図　目　次

第１図　遺跡の位置
第２図　周辺の遺跡分布図
第３図　路線と遺跡の位置
第４図　確認調査出土遺物
第５図　確認調査のトレンチ位置図
（S＝1/3000）
第６図　確認調査の地区
（S＝1/25000）
第７図　確認調査のトレンチ位置図
（S＝1/3000）
第８図　確認調査のトレンチ位置図
（S＝1/3000）
第９図　確認調査のトレンチ位置図
（S＝1/3000）
第10図　確認調査の土層柱状図
第11図　確認調査のトレンチ断面図
（S＝1/60）
第12図　確認調査のトレンチ断面図
（S＝1/60）
第13図　確認調査出土遺物
第14図　立石遺跡全体図（S=1/2000）
第15図　Ａ区・Ｂ区の遺構配置図
（S＝1/400）
第16図　Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区の遺構配置図
（S＝1/400）
第17図　竪穴住居１・２と
竪穴住居２の出土遺物
第18図　竪穴住居２の出土遺物
第19図　竪穴住居３
第20図　竪穴住居４と出土遺物
第21図　竪穴住居５
第22図　竪穴住居５の出土遺物
第23図　竪穴住居６と出土遺物
第24図　竪穴住居７
第25図　掘立柱建物１と出土遺物
第26図　掘立柱建物２
第27図　掘立柱建物３
第28図　掘立柱建物４
第29図　掘立柱建物５
第30図　掘立柱建物６と出土遺物
第31図　掘立柱建物７
第32図　掘立柱建物８
第33図　掘立柱建物９
第34図　掘立柱建物10
第35図　掘立柱建物11
第36図　建物１と出土遺物
第37図　鍛冶炉１
第38図　土壙１と出土遺物
第39図　土壙２と出土遺物
第40図　土壙３
第41図　土壙４と出土遺物
第42図　土壙５
第43図　土壙５の出土遺物
第44図　土壙６
第45図　土壙７と出土遺物
第46図　土壙８と出土遺物
第47図　土壙９と出土遺物
第48図　土壙10と出土遺物
第49図　土壙11
第50図　土壙12
第51図　土壙12の出土遺物
第52図　土壙13と出土遺物
第53図　土壙14と出土遺物
第54図　土壙15と出土遺物
第55図　土壙16と出土遺物
第56図　土壙17
第57図　土壙18
第58図　土壙19
第59図　土壙20
第60図　溝１と出土遺物
第61図　溝４（左）５（中）・６（右）
溝４の出土遺物
第62図　溝８
第63図　溝７と出土遺物
第64図　Ａ地区出土遺物
第65図　Ｂ地区出土遺物
第66図　Ｃ地区出土遺物
第67図　Ｄ地区出土遺物
第68図　大開遺跡全体図
（S＝1/3000）
第69図　１区東壁の土層断面図（S＝1/60）
第70図　２区東壁の土層断面図（S＝1/60）
第71図　３区東壁の土層断面図（S＝1/60）
第72図　大開遺跡の遺構全体図
（S＝1/600）
第73図　竪穴住居１と出土遺物
第74図　掘立柱建物１
第75図　掘立柱建物２
第76図　土壙１（左）・２（中）・３（右）
第77図　土壙４と出土遺物
第78図　土壙５
第79図　土壙６
第80図　風倒木痕２
第81図　包含層・その他出土土器

第82図　包含層・その他出土石器
第83図　六番丁場遺跡全体図
（S＝1/3000）
第84図　１区東壁土層断面図
第85図　２区東壁土層断面図
第86図　３区東壁土層断面図
第87図　４区東壁土層断面図
第88図　六番丁場遺跡の遺構全体図
（S＝1/600）
第89図　掘立柱建物１
第90図　掘立柱建物２
第91図　掘立柱建物３
第92図　掘立柱建物４
第93図　土壙１
第94図　土壙２
第95図　土壙３
第96図　土壙４
第97図　土壙６と出土遺物
第98図　土壙８と出土遺物
第99図　土壙７
第100図　土壙９
第101図　土壙９の出土遺物
第102図　溝１（左）・溝２（右）
第103図　溝３と出土遺物
第104図　１区出土土器
第105図　２区出土土器
第106図　１区出土石器
第107図　２区出土石器
第108図　３区出土縄文土器
第109図　３区出土土器
第110図　３区出土石器
第111図　４区出土土器
第112図　九番丁場遺跡全体図（S＝1/2000）
第113図　４区・１区・３区　東壁土層断面図
第114図　６区・９区　西壁土層断面図
第115図　７区・10区トレンチ位置図（1/1500）
第116図　７区トレンチ土層断面図（1/60）
第117図　４区・１区　遺構配置図（S＝1/400）
第118図　２区・９区　遺構配置図（S＝1/400）
第119図　３区・５区・６区・８区遺構配置図
（S＝1/400）
第120図　竪穴住居１と出土遺物
第121図　竪穴住居２と出土遺物
第122図　竪穴住居３と出土遺物
第123図　竪穴住居４と出土遺物
第124図　竪穴住居５と出土遺物
第125図　竪穴住居６と出土遺物
第126図　竪穴住居７の平面図・土層断面図
第127図　竪穴住居７の断面図
第128図　竪穴住居７の排水溝と出土遺物
第129図　竪穴住居７の出土遺物（１）
第130図　竪穴住居７の出土遺物（２）
第131図　竪穴住居８と出土遺物
第132図　竪穴住居９
第133図　竪穴住居10と出土遺物
第134図　竪穴住居11
第135図　竪穴住居12と出土遺物
第136図　竪穴住居13と出土遺物
第137図　竪穴住居14と出土遺物
第138図　竪穴住居15と出土遺物
第139図　竪穴住居16と出土遺物
第140図　竪穴住居17と出土遺物
第141図　掘立柱建物１
第142図　掘立柱建物２
第143図　掘立柱建物３
第144図　掘立柱建物４
第145図　掘立柱建物５
第146図　掘立柱建物６
第147図　掘立柱建物７
第148図　掘立柱建物８
第149図　掘立柱建物９
第150図　掘立柱建物10と出土遺物
第151図　掘立柱建物11
第152図　掘立柱建物12と出土遺物
第153図　掘立柱建物13と出土遺物
第154図　掘立柱建物14
第155図　掘立柱建物15
第156図　掘立柱建物16
第157図　掘立柱建物17
第158図　掘立柱建物18と出土遺物
第159図　掘立柱建物19
第160図　掘立柱建物20
第161図　掘立柱建物21
第162図　掘立柱建物22
第163図　土壙１
第164図　土壙２
第165図　土壙３
第166図　土壙４
第167図　土壙５
第168図　土壙６
第169図　土壙７
第170図　土壙８
第171図　土壙９と出土遺物
第172図　土壙10
第173図　土壙11
第174図　土壙12（右）・13（左）
第175図　土壙14・15と出土遺物
第176図　土壙16と出土遺物
第177図　土壙17と出土遺物
第178図　土壙18
第179図　土壙19
第180図　土壙20と出土遺物

第181図　土壙21
第182図　土壙22
第183図　土壙23
第184図　土壙24
第185図　土壙25と出土遺物
第186図　土壙26
第187図　土壙27
第188図　土壙28
第189図　土壙29
第190図　土壙30
第191図　土壙31
第192図　土壙32
第193図　土壙33・34と出土遺物
第194図　土壙35・36
第195図　土壙37・38と出土遺物
第196図　土壙39と出土遺物
第197図　土壙40と出土遺物
第198図　土壙41と出土遺物
第199図　土壙42と出土遺物
第200図　土壙43
第201図　土壙44
第202図　土壙45
第203図　土壙46と出土遺物
第204図　土壙47と出土遺物
第205図　土壙48
第206図　土壙49
第207図　土壙50と出土遺物
第208図　土壙51
第209図　土壙52と出土遺物
第210図　土壙53
第211図　土壙54
第212図　土壙55と出土遺物
第213図　土壙56
第214図　土壙57
第215図　土壙58と出土遺物
第216図　土壙59
第217図　土壙60・溝25
第218図　土壙61と出土遺物
第219図　土壙62と出土遺物
第220図　土壙63と出土遺物
第221図　土壙64
第222図　土壙65
第223図　土壙66
第224図　土壙67
第225図　土壙68
第226図　土壙69
第227図　土壙70
第228図　溝１・２・５
第229図　溝３
第230図　溝４
第231図　溝８
第232図　溝３・５・９の出土遺物
第233図　溝７
第234図　溝９
第235図　溝10
第236図　溝11と出土遺物
第237図　溝12・溝23と出土遺物
第238図　溝13と出土遺物
第239図　溝14と出土遺物
第240図　溝15
第241図　溝16
第242図　溝17と出土遺物
第243図　溝17の出土遺物
第244図　溝18
第245図　溝19
第246図　溝20
第247図　溝21
第248図　溝22
第249図　溝24
第250図　溝25の出土遺物
第251図　製鉄遺構全体図（S=1/40）
第252図　製鉄遺構部分図（S=1/30）
第253図　製鉄遺構の出土遺物
第254図　分析資料採集位置図
第255図　被熱遺構
第256図　４区の出土遺物
第257図　１区の出土遺物
第258図　２区の出土遺物（１）
第259図　２区の出土遺物（２）
第260図　３区の出土遺物
第261図　６区・８区・９区の出土遺物
第262図　６区・８区・10区の出土遺物

図版目次

巻頭図版１．竪穴住居７（北から）
　　２．人形土製品

図版１－１．Ａ地区全景（北西から）
　　２．Ｂ地区全景（南東から）
　　３．Ａ～Ｃ地区全景（北から）

図版２－１．Ｄ地区全景（南東から）
　　２．Ｃ～Ｅ地区全景（東から）
　　３．竪穴住居１・２（北西から）
図版３－１．建物１（北西から）
　　２．竪穴住居３（南東から）
　　３．竪穴住居４（北西から）

図版４－１．竪穴住居５（北西から）
２．竪穴住居６（南西から）
３．竪穴住居７（南西から）
図版５－１．掘立柱建物１・２（南東から）
２．掘立柱建物７（南東から）
３．掘立柱建物８（北から）
図版６－１．土壙９（南東から）
２．土壙20
３．ピット内の押形文土器（Ｂ区）
図版７　竪穴住居２の出土遺物
図版８－１．竪穴住居６の出土遺物
２．土壙12の出土遺物
３．土壙５の出土遺物（１）
図版９－１．土壙５の出土遺物（２）
２．土壙16の出土遺物
３．溝７の出土遺物
４．Ｃ地区出土遺物
図版10－１．２区調査前の全景（北から）
２．３区調査前の全景（北から）
３．竪穴住居１（北から）
図版11－１．掘立柱建物１（南から）
２．掘立柱建物２（北から）
３．土壙３（南から）
図版12－１．包含層出土の土器
２．包含層出土の石器
図版13－１．調査前の全景（北から）
２．掘立柱建物１（南から）
３．掘立柱建物３（北から）
図版14－１．土壙１（東から）
２．土壙３（南から）
３．土壙６・７・８・９（北から）
図版15－１．土壙７（北西から）
２．土壙７出土の炭化米
３．溝３（南東から）
４．溝３の断面
図版16　土壙９出土の縄文土器
図版17－１．溝３出土の石器
２．３区出土の縄文土器
図版18－１．３区出土の縄文土器
２．３区出土の石器
図版19－１．４区全景（南から）
２．竪穴住居１（北西から）
３．竪穴住居２（西から）
図版20－１．１区全景（北から）
２．竪穴住居３（西から）
３．竪穴住居４（東から）
図版21－１．竪穴住居５（西から）
２．２区全景（北から）
３．竪穴住居６（南から）
図版22－１．竪穴住居８（南東から）
２．竪穴住居10（東から）
３．３区全景（北から）
図版23－１．竪穴住居11（東から）
２．竪穴住居12（東から）
３．竪穴住居13（東から）
図版24－１．竪穴住居14（東から）
２．竪穴住居15（北から）
３．竪穴住居16（東から）
図版25－１．竪穴住居17（東から）
２．掘立柱建物２（東から）
３．掘立柱建物６（南東から）
図版26－１．掘立柱建物10（北から）
２．掘立柱建物12・13（東から）
３．掘立柱建物14・15（北から）
図版27－１．掘立柱建物16（西南西から）
２．掘立柱建物17（東から）
３．掘立柱建物18（東から）
図版28－１．土壙11（南西から）
２．土壙12(左側)・13（右側）（西から）
３．土壙29（南東から）
図版29－１．土壙37・38（東から）
２．土壙39（西から）
３．土壙43（北から）
図版30－１．土壙47（東から）
２．土壙50（東から）
３．土壙58（西から）
図版31－１．土壙62（南から）
２．土壙64（北から）
３．土壙66（東から）
図版32－１．溝１・２・３・５（北西から）
２．溝１・２の断面
３．溝11・12（北から）
４．溝14（東から）
図版33－１．溝17（東から）
２．製鉄遺構全景（北から）
３．製鉄遺構中心部（北から）
図版34－１．九番丁場遺跡の遠景（南上空から）
２．８区の全景（上空から）
３．６区・９区遠景（上空から）
図版35－１．竪穴住居３の出土遺物
２．竪穴住居５の出土遺物
３．竪穴住居６の出土遺物
図版36　竪穴住居７の出土遺物（１）
図版37－１．竪穴住居７の出土遺物（２）
２．土壙25の出土遺物
図版38　出土遺物
図版39－１．溝の出土遺物
２．包含層出土遺物（１）
図版40　包含層出土遺物（２）

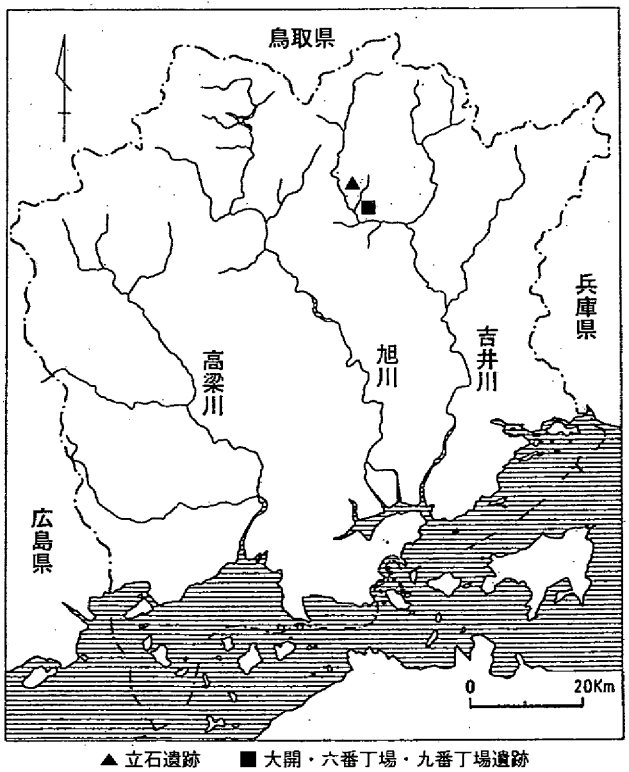
第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の所在する鏡野町は岡山県の北部に位置し、境を上斎原村・奥津町・富村・加茂町・津山市・久米町・久世町に接している。町域の西北から南にかけて吉井川が貫流しており、その支流である香々美川とともに大きな沖積地を作り出して、山間地に開けた小盆地を形成している。

鏡野町小座に所在する立石遺跡は、香々美川の支流である山人川によって形成された南北に長い沖積地を望む、花知仙山塊から派生する丘陵上に立地する。また、鏡野町布原に所在する大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡は、香々美川の東岸で吉井川と合流する北東部分に形成された河岸段丘上に立地している。この河岸段丘は、香々美川の東岸に沿って広く平野を成している。

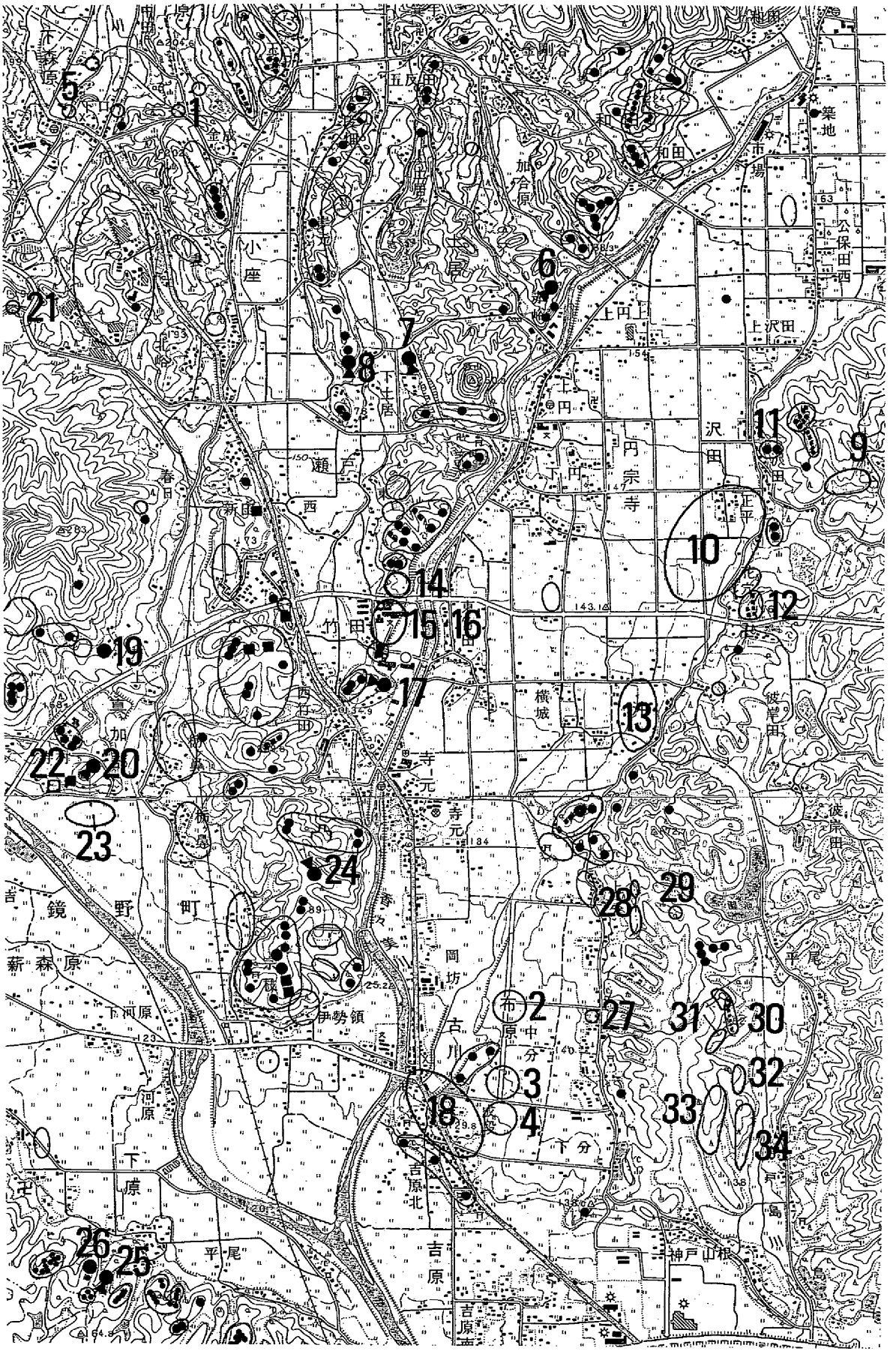
周辺の遺跡の中でもっとも古い時期のものとしては香々美川西岸の丘陵上に立地し、縄文早期中葉の二重の杭列が楕円形に並ぶ住居跡が５軒検出された竹田遺跡があり、粗大押型文土器等を多く出土して広く知られている。成段・宝性寺遺跡や酒居敷散布地、六番丁場遺跡でも、遺構は検出されていないものの早期中葉の土器が出土している。前期・中期の遺跡は確認されず空白期間をおいて、後期になると隠峪東谷散布地で土器片が採集されており、今回の調査で六番丁場遺跡では土壙が検出されている。

弥生時代は前期では前期後半の土器片が沢田遺跡で出土しているにとどまり、中期以降になると遺跡数は増加するようである。津山総合流通センターの建設に伴って行われた調査において、大開遺跡や六番丁場遺跡の位置している河岸段丘を西に望む丘陵上に弥生時代中期から後期にかけての集落が存在することが明らかになった。上遠戸嶋遺跡、男戸嶋遺跡は中期後半の集落である。葡萄田頭遺跡では中期後葉から後期初頭にかけての集落が検出された。また、この集落とは時期が後出するものの、46基からなる土壙墓群も検出されている。有本遺跡は、後期の集落と140基の集団墓からなり、溝や石列による区画が３基存在する。荒神峪遺跡は後期の集落で、住居跡には直径が11ｍを測る大形の竪穴住居があり、青銅製の銅釧、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。吉井川東岸の河岸段丘上に位置する薬師前遺跡では後期末の集落が確認され、また、香々美川東岸の河岸段丘上でも、三番丁場遺跡で中期後半の集落を確認している。また特に注目されるものとしては、竹田八号弥生墳丘墓が挙げられる。時期は後期初頭～前葉にかけてのもので、香々美川



▲ 立石遺跡　■ 大開・六番丁場・九番丁場遺跡

第１図　遺跡の位置



第２図　周辺の遺跡分布図

遺跡名(第２図)

1	立石遺跡	2	大開遺跡	3	六番丁場遺跡	4	九番丁場遺跡	5	酒居屋敷遺跡
6	赤峪古墳	7	土居天王山古墳	8	土居妙見山古墳	9	隠峪東谷散布地	10	沢田遺跡
11	加市古墳群	12	東花穴古墳	13	沖そね遺跡	14	竹田遺跡	15	竹田八号弥生墳丘墓
16	竹田古墳群	17	竹田妙見山古墳	18	成段・宝性寺遺跡	19	井上大塚古墳	20	真可部９号墳
21	大唐谷遺跡	22	鳴津の構	23	薬師前遺跡	24	古川３号墳	25	郷観音山古墳
26	大山古墳	27	三番丁場遺跡	28	葡萄田頭遺跡	29	上遠戸嶋遺跡	30	有本古墳群
31	有本遺跡	32	有元遺跡	33	男戸嶋遺跡	34	荒神峪遺跡		

を東に望む丘陵上に築かれる。崖崩れにより東半の６割を欠くが一隅の墳裾の列石が突出しており、西辺の基底部長が14ｍを測る四隅突出型弥生墳丘墓である。埋葬施設は、土壙墓14基と土器棺３又は４基であって、特別な埋葬施設や副葬品がないことから集団墓であると考えられている。

古墳時代の香々美川流域周辺の地域は前方後円墳が多く築かれ、首長墳の動向がうかがえる地域である。まず吉井川と香々美川の合流地点を東に見下ろす標高約160ｍの山頂に、全長43ｍの郷観音山古墳が築かれる。主体部の竪穴式石槨から三角縁四神四獣獣帯鏡・平縁半円方形帯神獣画像鏡・三角縁四獣鏡の舶載鏡が３面、短剣１点、柳葉式および定角式の鉄鏃９点などが出土している。吉井川・香々美川合流地域においては最古の前方後円墳に位置付けられる。次に築造されたと考えられるのが、香々美川西岸の丘陵上に築かれた全長45ｍの赤峪古墳である。後円部と前方部にそれぞれ主体部があり、後円部のものは木棺礫床で舶載の龍虎鏡１面や短冊形鉄斧１点、手斧１点、刀子１点、勾玉１点、若干のガラス製小玉、土師器２点が副葬されていた。前方部のものは竪穴式石室の簡略化されたものである。これらの古墳は４世紀前半ないしそれ以前に築造されたものであると考えられている。鏡野町内において郷観音山古墳と赤峪古墳が、規模としては最大級のものになる。これに続くのが、竹田妙見山古墳、土居妙見山古墳、古川３号墳である。全長36ｍの竹田妙見山古墳は香々美川西岸の標高約150ｍの独立丘陵上に位置し、内部主体は木棺礫床であると推定され、現存の遺物は２カ所に円孔のある内行花文鏡の破片が１点とガラス小玉28点、碧玉製管玉１点である。全長25ｍの土居妙見山古墳は香々美川の支流である山人川の西岸、標高約170ｍの丘陵上にある。埋葬施設は後円部に２基の粘土槨があり、西槨には２面の仿製内行花文鏡と鉄剣２点が副葬されていた。全長30ｍの古川３号墳は、香々美川西岸の伊勢領山の尾根上、標高約170ｍに位置している。その後、吉井川の東岸、丘陵裾に位置する全長24ｍの真可部９号墳が５世紀後半に築かれたと考えられている。６世紀後半になると、内部主体に片袖式の横穴式石室を持つ全長27ｍの土居天王山古墳が築かれる。土居妙見山古墳の西側の丘陵上に位置しており、吉井川・香々美川合流地域において最初に埋葬主体に横穴式石室が採用された古墳であり、これを最後にこの地域では前方後円墳は築かれなくなる。これらの前方後円墳の他にも、香々美川、山人川流域には200基を、鏡野町内においては420基を越える古墳が知られている。調査が行われたものとしては、前期の古墳では、有本古墳群や東花穴古墳群、竹田古墳群がある。有本古墳群は方墳７基からなり、竪穴式石槨が１基ある以外は内部主体は木棺である。副葬品には鉄剣や鉄鏃のほか、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などが出土している。東花穴古墳群は方墳６基などからなり、最大の４号墳は一辺が15ｍを測り、副葬品には鉄剣、鉄鏃、鉋がある。竹田古墳群は１基の方墳と２基の円墳からなる。この方墳の内部主体は４棺の箱形組合式石棺であり、中央北棺には２体が埋葬され鼓形器台を打ち欠いて枕に転用している。中期の古墳では竹田古墳群中の９号墳が５世紀後半の直径13ｍの円墳と考えられており、内部主体の木棺粘土槨からは仿製内行花文鏡が出土している。調査が行われていないものでは、直径約25ｍを測る大山古墳では埴輪片が採集され、これから時期が５世紀後半～末であると想定され、この古墳の周辺に見られる群集墳の盟主墳の一つ

であると考えられている。また、内部主体に横穴式石室を持つ後期群集墳は、６世紀末から７世紀にかけて築造・追葬が行われた加市古墳群などがあり、石室内に陶棺が作られることが多いようである。また、７世紀初頭に築造されたと考えられる井上大塚古墳は石室の現存長が11ｍを測り、美作の横穴式石室の中でも大形に属し、前方後円墳が築かれなくなった土井天王山古墳以降の首長墳であると考えられるものである。

古墳時代の集落の多くは鏡野町側では香々美川・郷川水系の現在の水田地帯に存在すると想定されており、今回の調査で大開遺跡では４世紀前半の、九番丁場遺跡では５、６世紀代の竪穴住居が確認された。有元遺跡では５世紀末と考えられる竪穴住居５軒と段状遺構14軒、男戸嶋遺跡で６世紀代の竪穴住居１軒と段状遺構１軒を検出している。これらの古墳築造の基盤となる集落の様相は、古墳の数に比べるとその様相は明らかではない。

古代の遺跡としては、大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡で棟の方向を揃えた掘立柱建物や鍛冶炉跡などが検出されており、官衙的機能を持つ建物とその付属施設であると考えられている。男戸嶋遺跡では奈良時代の火葬墓が２基検出されている。大唐谷遺跡では製錬滓が採集され、土器から８世紀以降と考えられる製鉄遺跡の存在が推定されている。

中世の遺跡としては、岡山県遺跡地図には鏡野町内に12の城跡が記載されており、その他寺院跡なども多い。真加部地区には周囲に幅８ｍ、高さ２ｍの土塁を巡らし、外側に空堀を持つ鴫津の構が存在している。沖そね遺跡では白磁、瓦器、勝間田焼などが工事中に出土しており、九番丁場遺跡の包含層からも中世の土器片が出土することから、香々美川の河岸段丘上には中世の遺跡が広がることも想定される。

近世の遺構は、男戸嶋遺跡や荒神峪遺跡、有本遺跡で近世墓を検出している。今回の調査地点を含む香々美川東岸の河岸段丘上は1648（慶安元）年に津山藩主森長継の命によって開墾され、この時の農地化に際して一番丁場から九番丁場まで作業単位が付けられたものが、現在まで地名として残っている。

（時實）

参考文献

立石盛詞　『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第４集　葡萄田頭遺跡　槙之木峪古墳　津山総合流通センター造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』　鏡野町教育委員会　1999年
立石盛詞　『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第５集　薬師前遺跡　畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う埋蔵文化財発掘調査』　鏡野町教育委員会　1999年
小郷利幸　『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集　有本古墳群　津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告１』　津山市土地開発公社　津山市教育委員会　1997年
小郷利幸　『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集　有本遺跡　男戸嶋古墳　上遠戸嶋遺跡　津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告２』　津山市土地開発公社　津山市教育委員会　1998年
小郷利幸　『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集　荒神峪遺跡　津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告３』　津山市土地開発公社　津山市教育委員会　1999年
小郷利幸　安川豊史　『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集　有元遺跡　男戸嶋遺跡　津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告４』　津山市土地開発公社　津山市教育委員会　1999年
『岡山県史』　考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年
『角川日本地名大辞典33岡山県』　角川書店　1989年
井上　弘　『岡山県埋蔵文化財報告26』　岡山県教育委員会　1996年
氏平昭則　『岡山県埋蔵文化財報告27』　岡山県教育委員会　1997年
今井堯　安川豊史　竹内幸夫　『竹田墳墓群 竹田遺跡発掘調査報告第１集』　鏡野町教育委員会　1984年
『岡山県遺跡地図』　第５分冊　岡山県教育委員会　1978年
『鏡野町史』　考古資料編　鏡野町史編集委員会　鏡野町教育委員会　2000年

第２章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

一般国道179号は、兵庫県姫路市を起点とし、鳥取県東伯郡羽合町に至る延長約154㎞の幹線道路で鳥取県中部地方生活圏、津山地方生活圏と京阪神とを結ぶ県北の重要路線である。今回の発掘調査の対象となった鏡野バイパスは、一般国道179号の津山市周辺部の交通渋滞の解除と交通の安全確保を目的とした、岡山県苫田郡鏡野町馬場から同郡鏡野町円宗寺に至る3.4㎞の２車線（その２）と岡山県津山市神戸から同県苫田郡鏡野町円宗寺に至る延長4.0㎞の４車線（暫定２車線）（その１）道路である。

昭和62年２月23日に津山地方振興局建設部から（その２）の埋蔵文化財発掘の通知（第57条の３）が鏡野町教育委員会、教育庁文化課を経て、文化庁長官に提出される。

文化課から津山地方振興局建設部へ路線内に所在する６遺跡と樹木の伐採後に確認調査の必要性があることを通知する。古代吉備文化財センターが平成元年８月１日から11日まで実施した確認調査により立石遺跡の全面調査が決定する。

平成６年10月12日に津山地方振興局長から（その１）の埋蔵文化財発掘の通知（第57条の３）が教育庁文化課を経て、文化庁長官に提出される。（その２）と同様に確認調査を実施し、九番丁場遺跡・六番丁町場・大開遺跡の全面調査が決定する。　（高畑）

第２節　調査と整理の体制

調査の体制

平成元年度

岡山県教育委員会
　教育長　竹内　康夫
岡山県教育庁
　教育次長　竹本　博明
文化課
　課長　吉尾　啓介（11月30日まで）
　　鬼澤　佳弘（12月１日から）
　課長代理　河野　衛
　参事　浅野間朗雄
　課長補佐　伊藤　晃
　（埋蔵文化財係長）
　主査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター
　所長　長瀬日出明
　次長　河本　清
総務課
　課長　竹原　成信
　課長補佐　藤本　信康
　（総務係長）
　主任　岡田　祥司
　主任　平松　郁男
　主任　片山　淳司
調査第一課
　課長事務取扱　河本　清
第一係
　課長補佐　柳瀬　昭彦（調査担当）
　（第一係長）
　主事　椿　真治（調査担当）

平成２年度

岡山県教育委員会
　教育長　竹内　康夫
岡山県教育庁
　教育次長　杉井　道夫
文化課
　課長　鬼澤　佳弘
　課長代理　光吉　勝彦
　課長補佐　伊藤　晃
　（埋蔵文化財係長）
　主査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター
　所長　長瀬日出明
　次長　河本　清
総務課
　課長　竹原　成信
　課長補佐　藤本　信康
　（総務係長）
　主任　平松　郁男
　主任　坂本　英幸
調査第一課
　課長事務取扱　河本　清
第一係
　課長補佐　柳瀬　昭彦（調査担当）
　（第一係長）
　文化財保護主事　小松原基弘（調査担当）

平成６年

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　岸本　憲二
文化課
　課長　大場　淳
　課長代理　松井　新一
　課長補佐　高畑　知功
　（埋蔵文化財係長）
　主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
　所長　河本　清
　次長　葛原　克人
総務課
　課長　丸尾　洋幸
　課長補佐　杉田　卓美
　（総務係長）
　主査　石井　善晴
　主任　三宅　秀吉
調査第一課
　課長　正岡　睦夫
　課長補佐　松本　和男
　（第一係長）
　文化財保護主事　山本　晋也（調査担当）
　主事　尾上　元規（調査担当）

平成７年

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　黒瀬　定生
文化課
　課長　大場　淳
　課長代理　樋本　俊二
　参事　葛原　克人
　課長補佐　高畑　知功
　（埋蔵文化財係長）
　主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
　所長　河本　清
　次長　高塚　惠明
　次長（文化課本務）　葛原　克人
総務課
　課長　丸尾　洋幸
　課長補佐　井戸　丈二
　（総務係長）
　総務主幹　守安　邦彦
　主査　石井　善晴
　主任　木山　伸一
調査第二課
　課長　伊藤　晃
　課長補佐　井上　弘（調査担当）
　（第一係長）
　文化財保護主査　木原　義明（調査担当）
　文化財保護主任　小畑　良治（調査担当）
　文化財保護主任　延堂　守（調査担当）
　文化財保護主事　氏平　昭則（調査担当）

主　　事　樋口　雅夫（調査担当）
主　　事　金田　善敬（調査担当）

平成９年度
岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　臼井　洋輔
課長代理　西山　猛
参　事　葛原　克人
課長補佐　平井　勝
（埋蔵文化財係長）
主　事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　藪本　克之
次　長　正岡　睦夫
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐　井戸　丈二
（総務係長）
主　査　木山　伸一
調査第三課
課　長　柳瀬　昭彦
課長補佐　井上　弘（調査担当）
（第二係長）
文化財保護主査　木原　義明（調査担当）
主　事　時實　奈歩（調査担当）

平成11年度
岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　宮野　正司
文化課
課　長　松井　英治
課長代理　佐々部和生
参　事　正岡　睦夫
課長補佐　松本　和男
（埋蔵文化財係長）
文化財保護主任　大橋　雅也
主　任　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原　克人
次　長　大村　俊臣
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐　安西　正則
（総務係長）
主　査　山本　恭輔
調査第一課
課　長　高畑　知功
課長補佐　下澤　公明
（第二係長）
文化財保護主幹　井上　弘（調査、整理担当）
文化財保護主査　三船　幹也（調査、整理担当）
主　事　重根　弘和（調査担当）

整理の体制

平成10年度
岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　西山　猛
参　事　正岡　睦夫
課長補佐　松本　和男
（埋蔵文化財係長）
文化財保護主任　大橋　雅也
主　事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原　克人
次　長　大村　俊臣
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐　安西　正則
（総務係長）
主　査　山本　恭輔
調査第三課
課　長　柳瀬　昭彦
課長補佐　岡本　寛久
（第三係長）
文化財保護主幹　平井　勝（整理担当）

平成12年度
岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　宮野　正司
文化課
課　長　松井　英治
課長代理　佐々部和生
課長代理　松本　和男
（埋蔵文化財係長）
文化財保護主査　福本　明
主　任　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　正岡　睦夫
次　長　能登原　巧
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐　安西　正則
（総務係長）
主　査　山本　恭輔
調査第一課
課　長　高畑　知功
課長補佐　島崎　東
（第二係長）
文化財保護主幹　井上　弘（整理担当）

第３節　調査の経過と報告書の作成

立石遺跡は、鏡野町小座に所在する。遺跡の分布調査の結果を受けて、平成元年８月に確認調査を実施した。約3000㎡を対象にしたもので、結果として、約2000㎡の範囲に遺跡が広がることが確認された。そこで、同年11月から全面調査に着手した。2000㎡を調査して同年度の調査を終了した。平成２年10月から残りの調査を実施し、全ての調査を完了した。

大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡が所在する鏡野町布原は、古くから縄文土器、弥生土器などが出土しており、また、昭和46、47年頃の、圃場整備事業においても多くの遺物を出土したことが知られていた。そのこともあって、平成６年11月から確認調査に着手した。その結果、広い面積にわたり遺跡が存在することが判明した。そこで、遺構の確認された地区の中心的な地名を拾い、北から、大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡として、全面調査を実施することになった。平成７年４月から、調査員６名で、大開遺跡の調査から着手した。大開遺跡の調査が終了した後に、六番丁場遺跡に着手した。この遺跡については、一部道路用地が未買収であったので、その部分については後年度の調査にした。同年度の六番丁場遺跡の調査が６割程度終了した段階で、調査員６名の内４名が他の遺跡の調査に回ることとなった。２名の調査員で、残る遺構を調査し完了させた。同年度の調査終了区は、１区、２区、４区である。その後、九番丁場遺跡に着手する予定であったが、布原地区の北、円宗寺地区、竹田地区の確認調査が急に設定された。そこで、北部の竹田地区から調査に着手した。この確認調査を実施中に調査員１名が増員された。円宗寺地区の確認調査終了後に、九番丁場遺跡に着手した。また、同時に寺元地区、古川地区、吉原地区の確認調査も実施することとなった。この段階で、他の遺跡の調査に関わっていた４名の調査員も、その遺跡の調査を終了させて合流することになり、総計７名の調査員で調査を実施することとなった。そこで、３名が九番丁場遺跡へ、４名が確認調査に関わることとした。確認調査終了後、全員で九番丁場遺跡の調査を行い、用地の買収が完了している、１区、２区の調査を終了させた。六番丁場遺跡、九番丁場遺跡の未買収部分の用地買収が完了した平成９年６月から、六番丁場遺跡の調査に着手した。六番丁場遺跡の調査が終了すると、九番丁場遺跡の調査に着手した。３区、４区を調査し、一部未調査区を残し同年度の調査を終了した。九番丁場遺跡では、道路用地に接して西側の水田について、道路工事による路盤の切り下げにより、水田への取水の問題が生じた。その問題を回避するため、取水する用水の高さに合わせて、水田面を切り下げる工事が必要となってきた。その問題に対する調整が完了した後、その部分の調査を実施することとなった。平成11年４月からは、九番丁場遺跡の未調査区と、隣接する水田部分について調査し、平成12年１月に全ての調査を完了した。

報告書に関わる整理作業は、期間の長短はあるが、３か年に分けて実施した。平成10年度に、最初の整理作業を行った。ほぼ一年を掛けて、平成９年度までに終了している遺跡について実施した。立石遺跡、大開遺跡、六番丁場遺跡については、その全てを、九番丁場遺跡については、終了していた１区から４区について整理作業を実施した。九番丁場遺跡の残りについては、調査した年度の平成12年２月から２か月間に、遺物の水洗と、遺構の整理を中心に整理作業を行った。翌年の平成13年１月から３か月間は、遺物の復元、実測、写真撮影等遺物の整理を主に行った。　（井上）

第３章　確認調査の概要

第１節　立石遺跡

調査地点は、苫田郡鏡野町小座に所在する標高184～191ｍ前後の河岸段丘の一部にあたる。第５図でわかるように、段丘の大部分は水田または畑地に開墾されている。調査は地形から予測される遺跡の範囲の道路用地内に、幅２ｍ、総延長約300ｍ（長短21本）のトレンチを設定し、表土および黒ボクを掘り下げる方法をとった。なお、確認調査の範囲が細長く距離があるため、便宜上現農道等によって区画される範囲ごとに地点を定め、基本的に南東から順にＡ～Ｆ地点と呼称した。

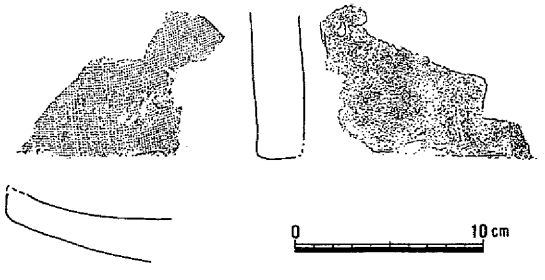
調査所見では、各調査地点のうち谷部を除いて、深さ平均30～40㎝で黄色粘質土の基盤（地山）層が認められ、地山面に検出される柱穴、土壙、溝などの遺構の有無によって、本調査の必要な地点および範囲を決定した。さらに、遺構が多く確認されたＡ地点（470㎡）については、遺構密度や残存度を調べる目的で表土を全面に除去したうえで、約半分の面積について遺構の掘り下げを行った。

その結果、次のことが判明した。

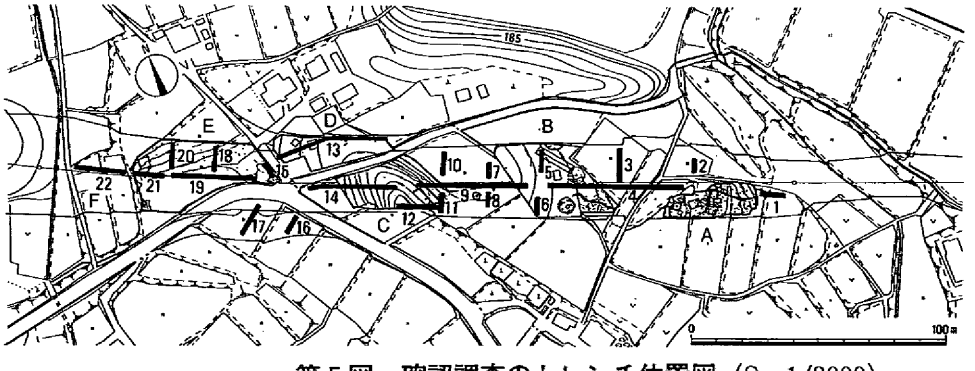
1　本調査の範囲は、第４章の第15図の上段に示すＡからＥ地点の黒塗り部分の約3,000㎡について表土剥ぎが必要で、うち約2,000㎡に遺構の存在が予想される。なお、Ｆ地点は谷部にあたり、谷水田の可能性も予測されたが、断面観察では存在が確認できず、本調査からは除外してもよいと思われる。

2　Ａ地点の調査では、竪穴住居２、袋状土壙２、方形土壙２、溝５、鍛冶炉１、その他柱穴多数を検出した。そのうち約半数を掘り下げ、遺構の残存度が良好であることが確認された。時期は大半の遺構が弥生後期、鍛冶炉等の少数は第４図の布目平瓦片の出土等から、奈良時代～中世初め頃と思われる。

3　遺構密度や残存状況および調査面積から、調査期間は約２か月強（調査員１名、作業員７名）を要すると判断された。　（柳瀬）



第４図　確認調査出土遺物



1～22：確認調査のトレンチ
Ａ～Ｅ：遺構の存在が予想される地点

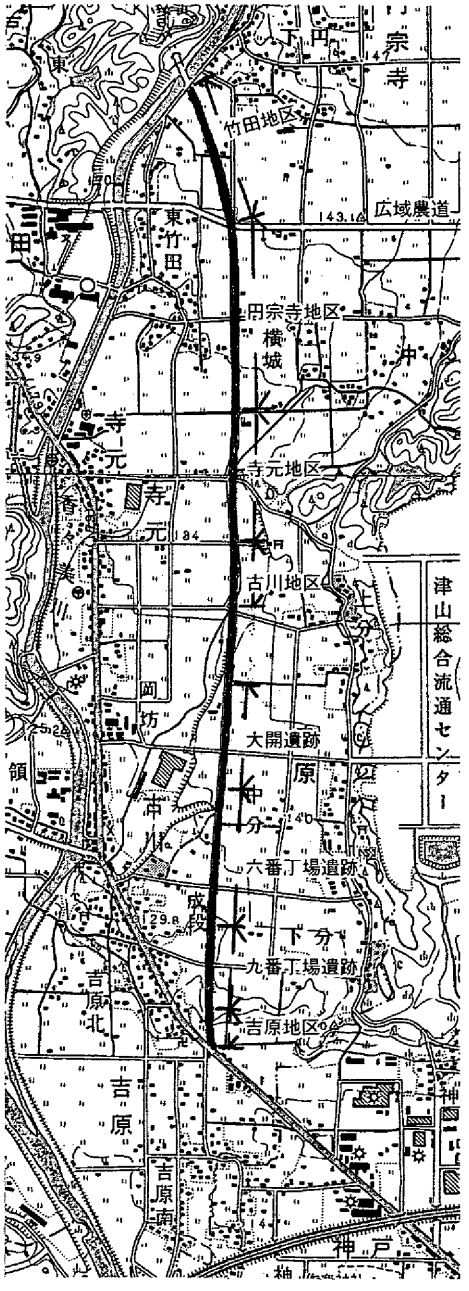
第５図　確認調査のトレンチ位置図（S＝1/3000）

第２節　竹田地区～古川地区、吉原地区

この節では鏡野町南部の道路建設予定地で、周知の遺跡が知られていない部分の確認調査について述べる。段丘上で大開遺跡など周知の遺跡が分布する部分の確認調査については第３節で記載する。

確認調査は平成７年度に実施した。調査地点は、段丘の北側にあたる香々美川東岸の平地部分と、段丘南側でこれまでの国道179号線と接する部分である。この間に設定したトレンチの総本数は100本、総面積は1,000㎡になる。トレンチには番号を振ったが、段丘北側（竹田～古川地区）と段丘南側（吉原地区）は別々に番号をつけている。

トレンチの説明は便宜上小字区分に従って記述した。したがって第６図のように北から竹田地区・円宗寺地区・寺元地区・古川地区、九番丁場遺跡より南側を吉原地区と呼称する。



第６図　確認調査の地区（S＝1/25000）

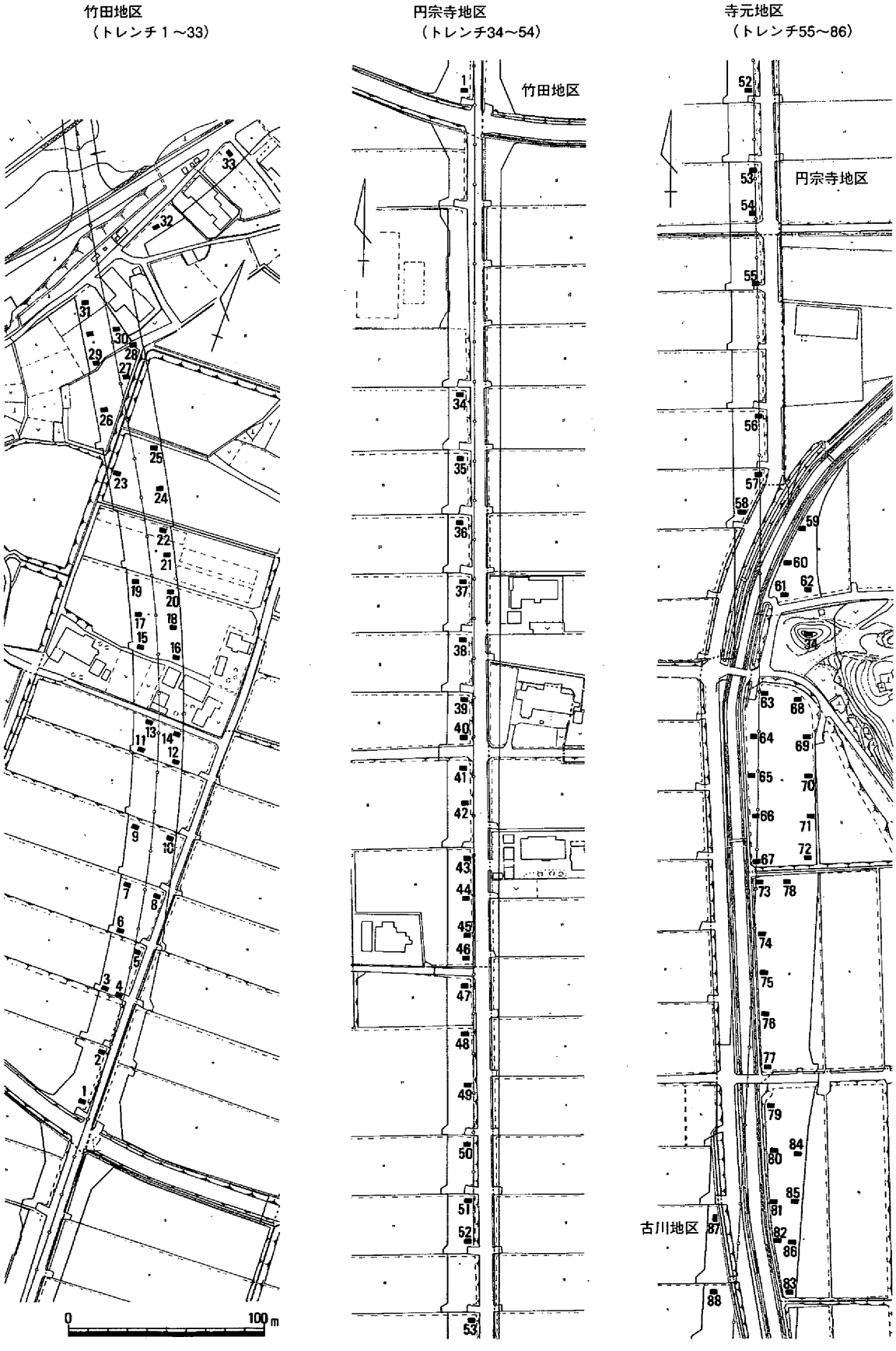
１．竹田～古川地区

竹田地区は香々美川から広域農道までで、合計33本のトレンチを設定した。断面図は香々美川堤防と接するトレンチ31（以下トレンチをＴと略す）と中間のＴ13、広域農道と接するＴ１を示した。調査前の地形は圃場整備が終了しているため、旧地形は認識できなかった。

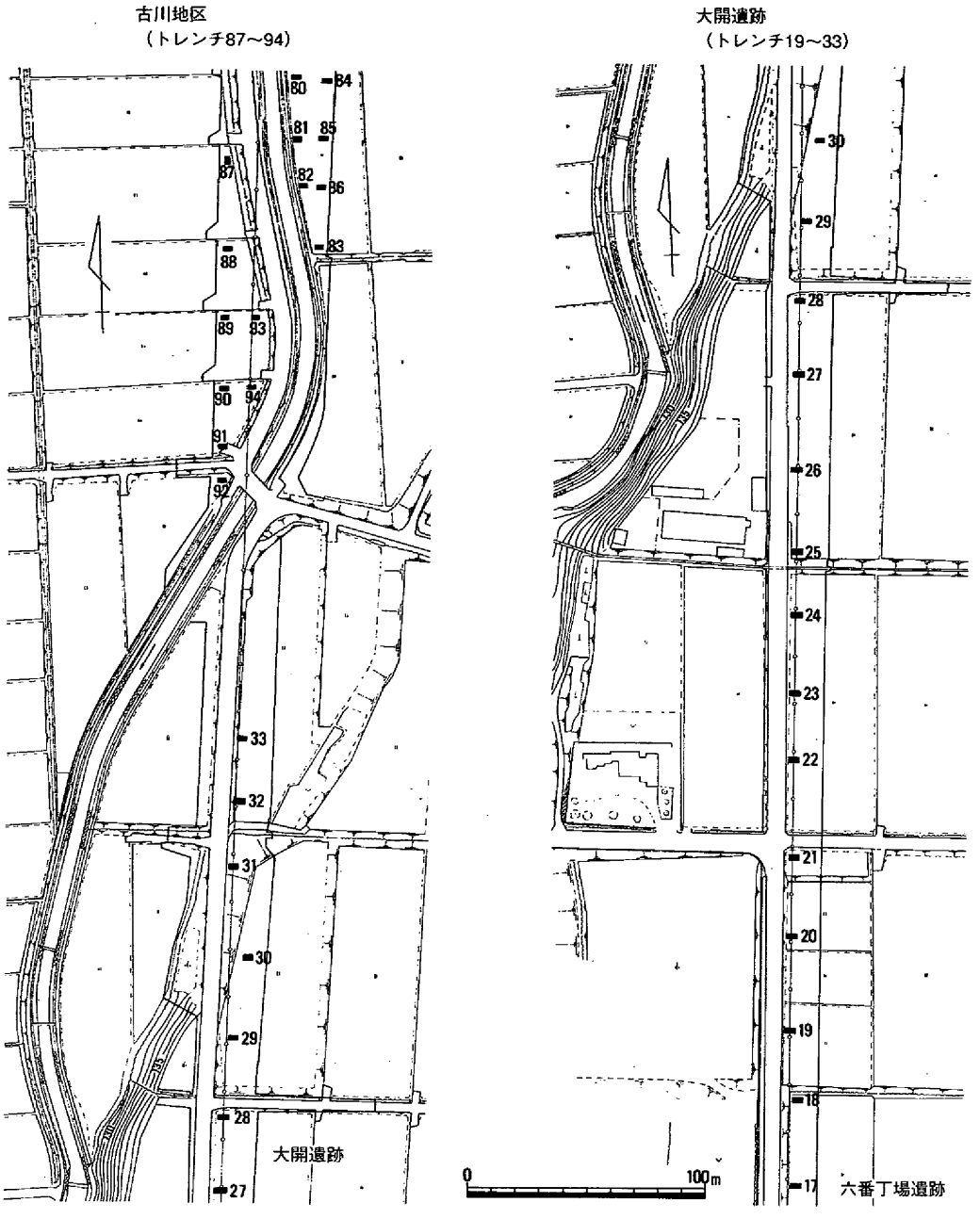
Ｔ31は全体に砂質を呈し、香々美川の旧河道由来と思われる灰色礫混じり砂質土が４層で確認できた。Ｔ13は６層が灰色礫混じり砂質土で、Ｔ１では５層である。Ｔ13・Ｔ１ともにこの層で湧水が見られる。トレンチの断面観察によると、灰色礫混じり砂質土上面はＴ31からＴ１へ２ｍほど、つまり北から南へ緩やかに下がっている。水田耕作に伴う層以外は礫を多く含む砂質土で、いずれのトレンチでも遺構を認められなかった。

遺物はＴ１～Ｔ６・Ｔ８・Ｔ９・Ｔ11・Ｔ13・Ｔ16・Ｔ18・Ｔ20・Ｔ24・Ｔ28で確認できた。Ｔ１～Ｔ３にかけては10片程度の土師器・備前焼片がみられたが、それより北は近世～現代の遺物を中心に小量しか確認できなかった。図示できたのはＴ18出土の須恵器杯１で、灰色礫混じり砂質土の直上面に当たる黄灰色砂質土中から出土した。復元高台径9.8㎝を測り、内外面暗青灰色を呈する。時期は９世紀と思われるが、高台底面が摩滅するなど元位置を保っていない可能性が高い。

以上の結果から、竹田地区は南側Ｔ１～Ｔ20に古代から近世までの河道、それより北は近世以降の河道が流れていたことが想定される。



第７図　確認調査のトレンチ位置図（S＝1/3000）

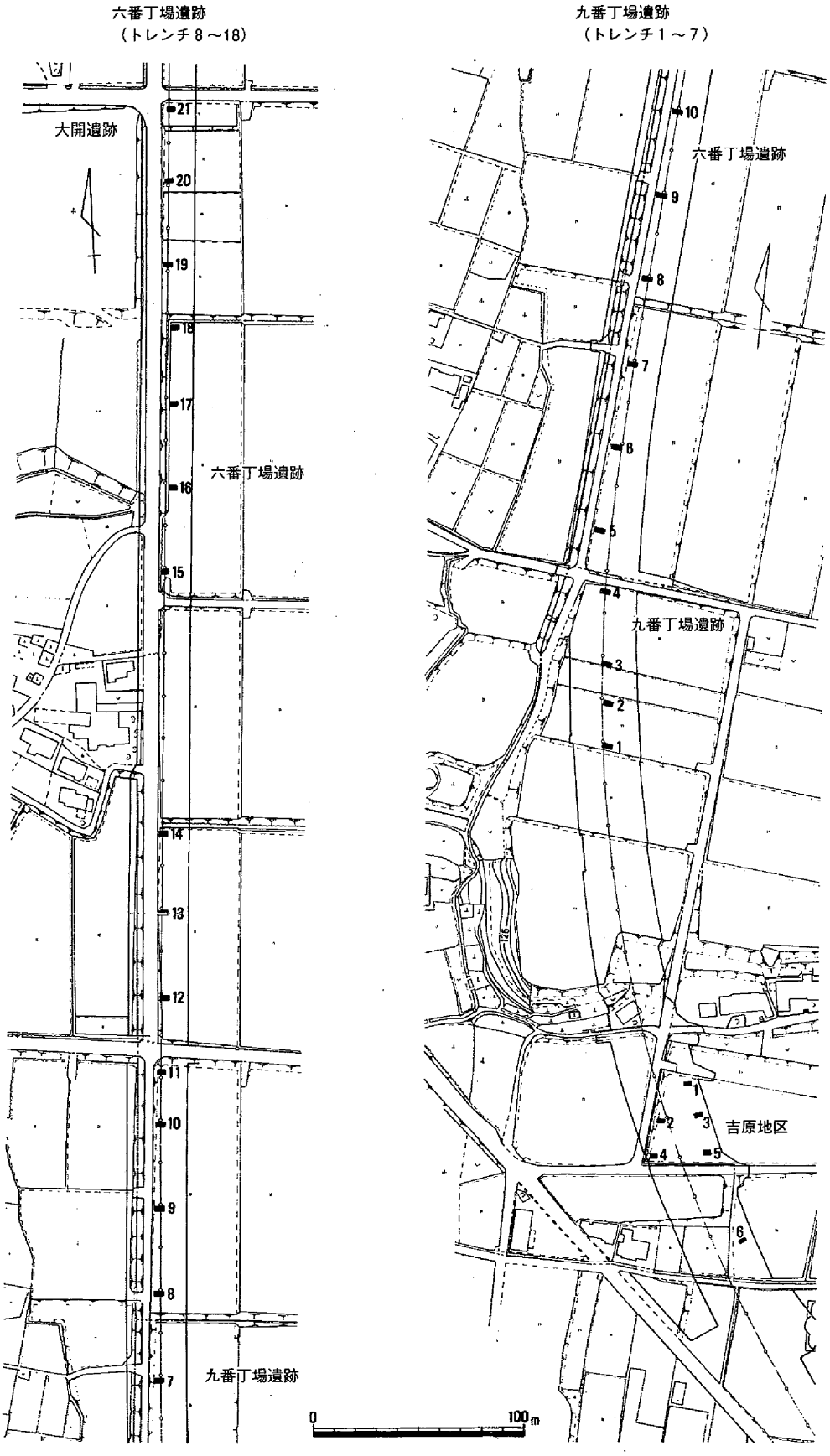


第８図　確認調査のトレンチ位置図（S＝1/3000）

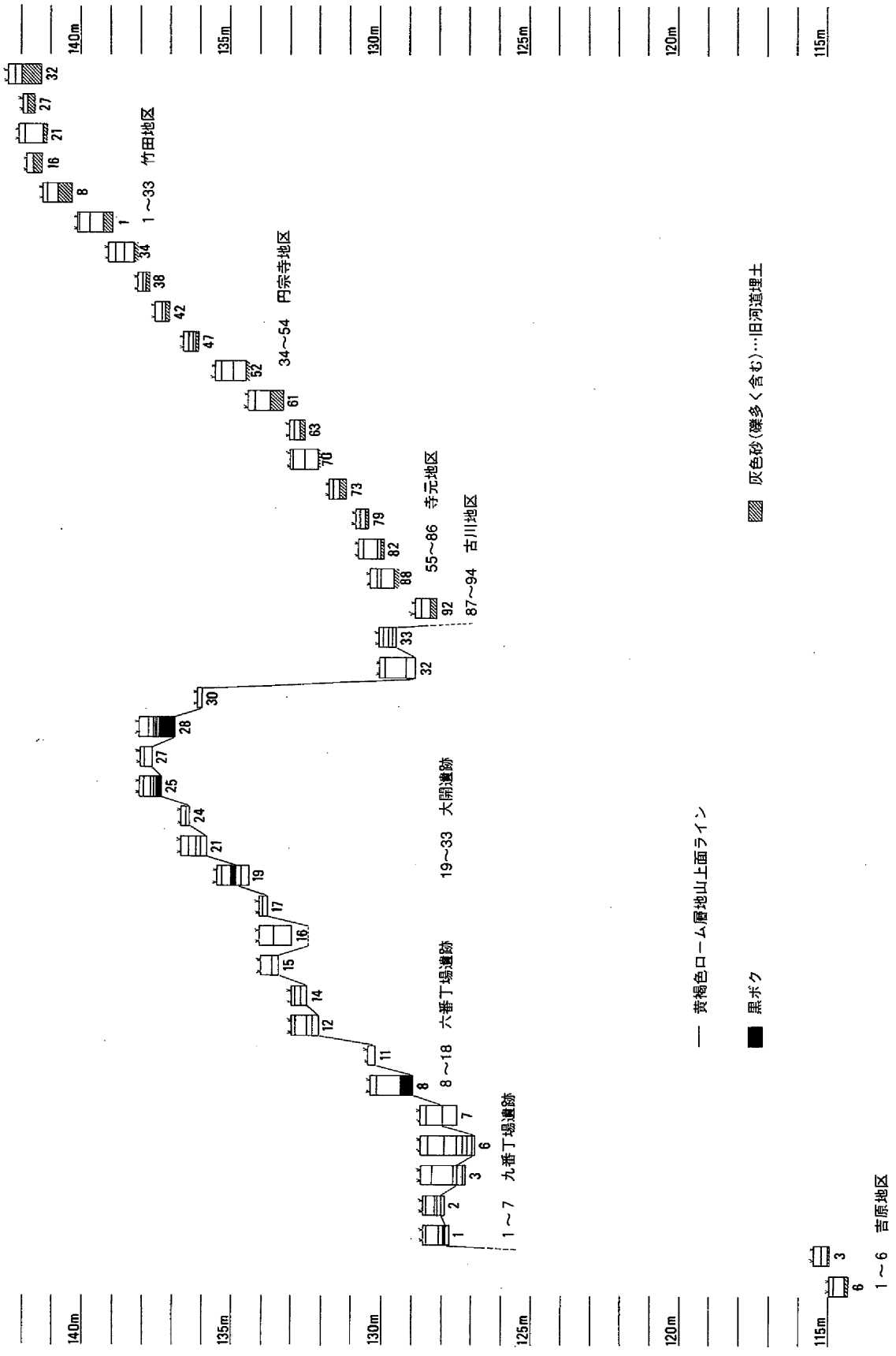
円宗寺地区は広域農道から南、東から延びる丘陵に遮られる手前までである。合計21本のトレンチを設定した。調査前の状態は、この地点でも全体に圃場整備が及んでいて旧地形がわからなかった。

実際に掘り下げてみると、Ｔ34では４層からビニール袋が出土し、この層まで圃場整備の影響が及んでいることがわかった。地形はそこから寺元地区までは南へ向かって低くなる傾向がうかがえる。圃場整備の削平より下ではＴ34からＴ40が灰色砂質土、Ｔ41からＴ49までは灰色～オリーブ灰色粘質土、Ｔ50からＴ54までが暗灰色～黒色粘質土と徐々に粘質が増し、色調が黒に近づいている。また、全てのトレンチで平・断面を精査したが遺構は確認できなかった。

遺物は集中した分布を示すことはなく、土師器・陶磁器が小量見られた。総じて遺物の密度は低い。

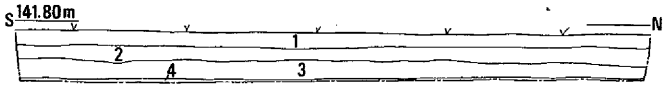


第９図　確認調査のトレンチ位置図（S=1/3000）



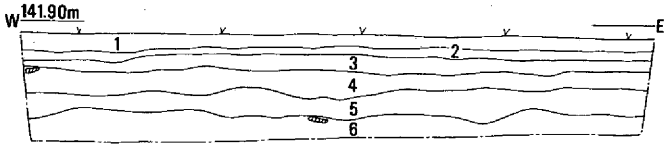
第10図　確認調査の土層柱状図

竹田地区　トレンチ31



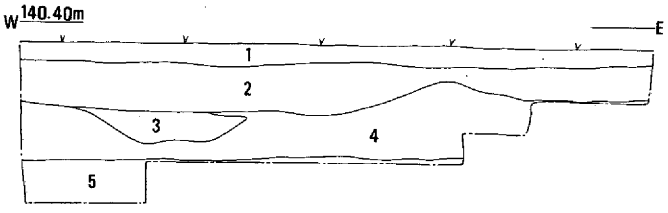
1　耕作土　　2　造成土
3　灰黄色砂質土　　4　灰色礫混じり砂質土

竹田地区　トレンチ13



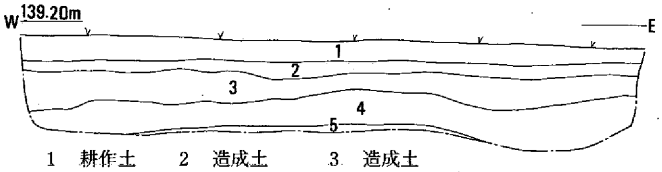
1　耕作土　　2　造成土　　3　造成土　　4　黄灰色礫混じり砂質土
5　暗灰黄色砂質土　　6　灰色礫混じり砂質土

竹田地区　トレンチ１



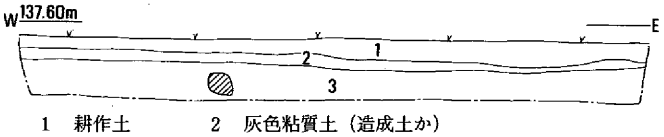
1　耕作土　　2　造成土　　3　灰白色礫混じり砂質土
4　黄灰色砂質土　　5　灰色礫混じり砂質土

円宗寺地区　トレンチ34



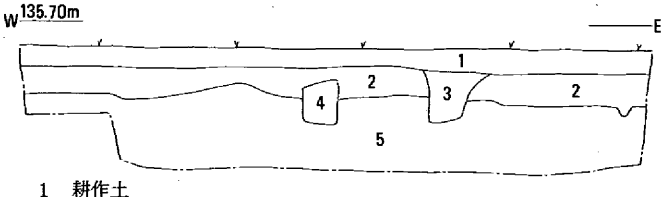
1　耕作土　　2　造成土　　3　造成土
4　造成土　　5　青灰色礫混じり砂質土（地山）

円宗寺地区　トレンチ41



1　耕作土　　2　灰色粘質土（造成土か）
3　オリーブ灰色礫混じり粘質土（地山）

円宗寺地区　トレンチ51



1　耕作土
2　黒色粘質土（黄褐色土粒含む）
3　黒色粘質土（黄褐色土粒含む）
4　黒色粘質土（暗渠か）
5　黒色粘質土

0　2m

第11図　確認調査のトレンチ断面図（S＝1/60）

図示したのはＴ34出土の須恵器短頸壺２、Ｔ41の備前焼擂鉢３、Ｔ56の土鍋４である。２は６世紀末、３は15世紀前半と考えられる。

これらの成果から、円宗寺地区ではＴ34までは竹田地区の古い方の河道（古代から近世）が達しているが、それより南は近世まで香々美川の氾濫原であった可能性が高い。竹田から円宗寺地区のこの河道は、Ｔ34出土の遺物が最も古い時期を示すことから、古墳時代後期から始まっているものと思われる。

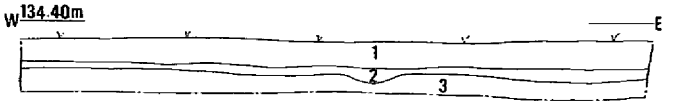
寺元地区では、東から延びる丘陵をはさんで南北にＴ55～Ｔ86の合計32本のトレンチを設定した。

第12図で示したＴ56では、耕作土直下に近世以後の地山と考えられる黒色粘質土が見られる。この黒色粘質土については、Ｔ57で黒色粘質土の約30cm下に粗砂が見られることから、旧河道か氾濫原上部の堆積土と考えられる。Ｔ58からＴ62までは堆積土の下に標高133.4～133.7ｍ程度で旧河道由来の粘土に達する。さらにその下は30～50cmで粗砂層になる。Ｔ58には標高133.4ｍで東西方向に近世から近代と思われる石列が存在した。

丘陵を挟んで南側は、Ｔ64・Ｔ65で東から西へ下がる傾向がうかがえる。Ｔ65では南北方向に近世以降の河道の護岸と考えられる遺構が確認された。40cm程度の礫の両側を杭で止めた構造で、トレンチ東側の護岸内側で漆椀の破片と陶器片が出土した。

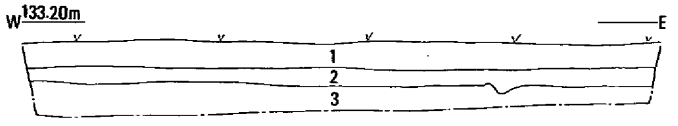
また図示したＴ63とＴ66～Ｔ72では、造成土の下に粘質の強い堆積土、さらに下に粘土あるいは粘質土・粗砂が一

寺元地区　トレンチ56



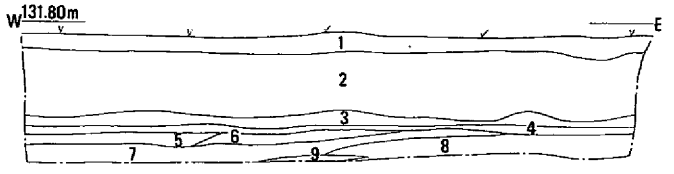
1　耕作土　　2　黒色粘質土（礫含む）
3　オリーブ黒色砂質土（礫含む）

寺元地区　トレンチ63



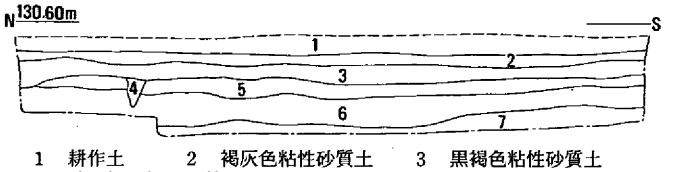
1　耕作土　　2　黒褐色粘土
3　暗青灰色礫混じり粘質土（地山）

寺元地区　トレンチ77



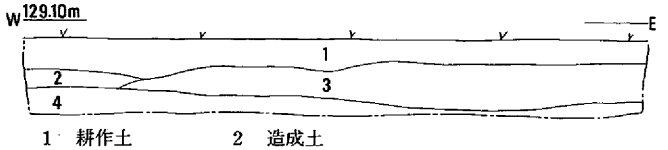
1　耕作土　　2　造成土　　3　旧耕作土
4　旧耕作土　　5　黄灰色砂質土　　6　黄灰色礫混じり粗砂
7　灰色砂質土　　8　オリーブ黒色礫混じり粗砂　　9　暗灰色粘土

古川地区　トレンチ87



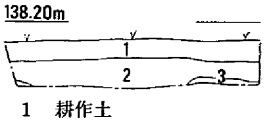
1　耕作土　　2　褐灰色粘性砂質土　　3　黒褐色粘性砂質土
4　暗灰褐色粘性砂質土　　5　灰黄褐色粘性砂質土（地山）
6　灰色砂質土（地山）　　7　青灰色砂質土（地山）

古川地区　トレンチ92



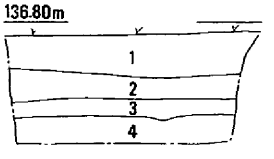
1　耕作土　　2　造成土
3　黒褐色粘土　　4　灰色礫混じり細砂（地山）

大開遺跡　トレンチ27



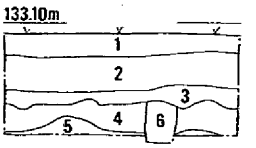
1　耕作土
2　造成土
3　旧耕作土

大開遺跡　トレンチ21



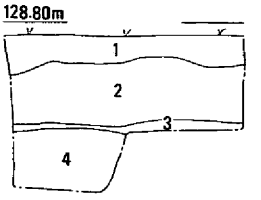
1　耕作土
2　造成土
3　旧耕作土
4　黒色砂質土（黒ボク）
5　灰黄色粘質土（基盤層）

六番丁場遺跡　トレンチ13



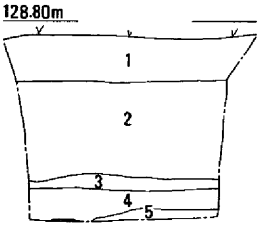
1　耕作土　　2　造成土
3　黒色砂質土　　4　黒褐色砂質土
5　黄褐色砂質土（基盤層）
6　黒色砂質土（柱穴）

九番丁場遺跡　トレンチ７



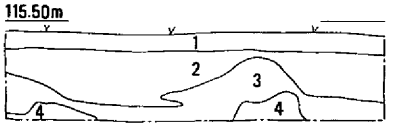
1　耕作土　　2　造成土
3　旧耕作土
4　淡青灰色土（基盤層）

九番丁場遺跡　トレンチ３



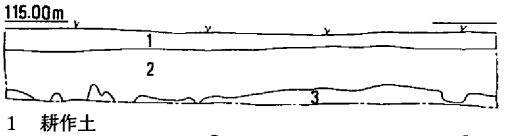
1　耕作土
2　造成土
3　旧耕作土
4　黄褐色粘質土（基盤層）
5　黄褐色礫混じり土（基盤層）

吉原地区　トレンチ１



1　表土　　2　灰色粘質土
3　黒色粘土（基盤層）
4　青灰色粗砂（基盤層）

吉原地区　トレンチ６



1　耕作土
2　黒褐色粘質土
3　褐灰色粘土
（基盤層）

第12図　確認調査のトレンチ断面図（S＝1/60）

部に乱れた部分はあるものの水平に近い状態で堆積していた。この地山と考えられる粘質土・粗砂の上面の高さは標高132.8～132.5ｍである。

Ｔ73からＴ78では、堆積土と考えられる粘質土は確認できず、旧河道由来の礫混じり粗砂が北から南へ標高131.4～131ｍの高さで見られた。またＴ79からＴ86でも堆積土と考えられる粘質土は確認できず、旧河道由来の礫混じり砂質土～粗砂が北から南へ標高130.5～130ｍの高さで見られた。

出土遺物はＴ56・Ｔ58・Ｔ60～Ｔ62・Ｔ65・Ｔ70～Ｔ72・Ｔ76・Ｔ77・Ｔ84・Ｔ85で確認でき、ほとんどは陶器・土師器の小片である。図示したのはＴ70出土の須恵質椀５で、時期は中世と思われる。また、図示できなかったがＴ61からは青磁片が１点、Ｔ84からは白磁片が１点出土した。青磁片は碗で、産地は龍泉窯系、時期は14世紀と想定される。白磁片は碗で、時期は12～13世紀と思われる。

調査の結果、寺元地区は近世には耕作地となっていたことがわかる。Ｔ58の石列、Ｔ65の護岸がこの時期の遺構である。北側のＴ55～Ｔ57と南側のＴ73～Ｔ86では圃場整備の削平からかこのような遺構が見られない。また、この時期の河道はＴ64・Ｔ65で東側へ入り込んでいたと想定される。

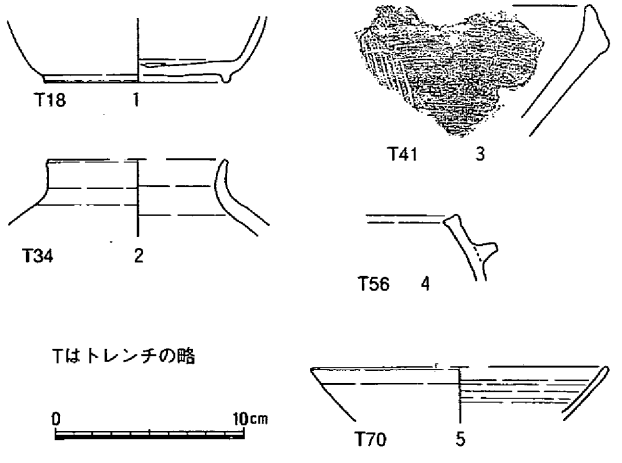
さらに中世では、調査した範囲は全て河道中であったと思われる。ただしＴ61の青磁碗、Ｔ70の須恵質椀、Ｔ84の白磁碗など断片的ではあるが遺物が見られることから集落は近い位置に存在したと言える。周辺の周知遺跡として挙げられるのは、Ｔ78東側の丘陵に位置し弥生時代の住居が存在した宮谷遺跡だけであるが、その近くに中世の集落跡が存在する可能性が高い。

古川地区ではＴ87～Ｔ94までの計８本のトレンチを調査した。

中世以前の旧河道層（砂質土）上面は、Ｔ87では130ｍ、Ｔ92で128.5ｍと南側が低い傾向を示すが、Ｔ87とＴ89の間で急激に下がっている様子が確認された。第12図に表したＴ92では、第３層が黒褐色粘土でおそらく近世の堆積土、第４層が中世以前の河道埋土である。堆積状況は寺元地区とあまり差が認められない。全てのトレンチで遺構は確認できなかった。

遺物はＴ87・Ｔ90・Ｔ91・Ｔ94の耕作土付近や黒褐色粘土から出土した。土師器・須恵器・陶器などいずれも小片であるが、Ｔ94では中世の須恵質椀片が確認できた。

古川地区も寺元地区と同様、近世の堆積土とそれ以前の河道が見られるが、地形は北から南へ向かい下がる傾向が見られる。



第13図　確認調査出土遺物

２．吉原地区

最後に九番丁場遺跡南の吉原地区であるが、合計６本のトレンチを設定した。調査地は水田で、田面に水が浮いているような湿田であった。表土下に中世以降の包含層が存在し、標高115ｍで粘土の基盤層に達する。トレンチ内は全て粘質が強い土質で、遺構は見られなかった。遺物は弥生土器・須恵器・陶器の小片が見られる。以上から、吉原地区は近世まで湿地であったと思われる。　（氏平）

第３節　大開遺跡・六番丁場遺跡・九番丁場遺跡

この地区には、大開遺跡・六番丁場遺跡・九番丁場遺跡という３つの遺跡が周知されており、これらの遺跡の広がりを確認する目的で、平成６年度に確認調査を行った。トレンチは、大きく地形の下がっている部分や未買収地を除いて、ほぼ30～40ｍ間隔で計33箇所に設定した（トレンチ１～トレンチ33）。各トレンチは２ｍ×３ｍの大きさで設定し、基盤層と考えられる黄褐色ローム層まで掘り下げた。

この地区は、南から北に向かって徐々に高くなっている状況が現地形からも読み取れるが、確認調査の結果、この間にもいくらかの地形の起伏があることが判明した。南から見ていけば、トレンチ１～２あたりが高くなっており、トレンチ３～６にかけて谷が入っている。次にトレンチ８～14にかけては徐々に地形が高くなっていき、トレンチ15～16にかけてまた狭い谷が入っている。そしてトレンチ17～28にかけてまた徐々に高くなっていき、トレンチ25～28付近がピークになっている。そしてトレンチ29より北は、急激に下がって深い谷となる。このような、いくらかの谷に挟まれた地形の高い部分が、トレンチ１～２、トレンチ７～14、トレンチ17～28の３か所に認められ、その部分には遺構も確認されたことから、それぞれが、大開遺跡、六番丁場遺跡、九番丁場遺跡の広がりの一部に相当するものと判断された。なお、トレンチ14と15の間は未買収地であったため確認調査を行っていないが、現地形も周辺より高くなっており遺跡の広がりが想定された。

調査地における基本的な層序としては、地山の礫層ないし岩盤の上に黄褐色のローム層がのり、その上に黒ボク層がのっている。さらにその上層は圃場整備による造成土および耕作土で構成されるが、トレンチ25と28においてのみ、黒ボク層の上に暗褐色砂質土がうすく見られ、ある時期の遺構面になる可能性も考えられたが、明確にできなかった。遺構は、基本的には黒ボク層を除去した段階で、黄褐色ローム層あるいは地山層上面において検出できた。本来、黒ボク層の上や黒ボク層中から掘り込まれた遺構も存在する可能性があるが、遺構埋土が黒ボクと非常に似通っているため、黒ボク層中での遺構検出は不可能であった。

遺構の確認されたトレンチは、トレンチ１（九番丁場遺跡）、トレンチ８・13・14（六番丁場遺跡）、トレンチ19・23・25・28（大開遺跡）の８か所である。確認された遺構には、柱穴や土壙、溝などがあり、弥生土器を伴うものもあったが、多くは時期を明確にできなかった。トレンチからの出土遺物はあまり多くないが、黒ボク層を中心として出土した。弥生土器が最も多く、そのほかに古墳時代から古代の須恵器や縄文時代の押型文土器なども見られた。

また、平成６年度に以上の遺跡の確認調査と並行して、寺元地区にも１か所のトレンチを設定した（寺元地区のトレンチ34）。これは、東から伸びてくる尾根の西端部にある高まりの頂部で、この東側に茶臼山古墳と呼ばれる古墳が存在することからも、古墳の可能性を考えた確認調査であった。調査の結果、近世以降の遺物を含む攪乱土を深さ40～50㎝程除去すると岩盤が露出したが、古墳に関連するような遺構・遺物は何ら認められず、古墳ではないと判断した。（尾上）

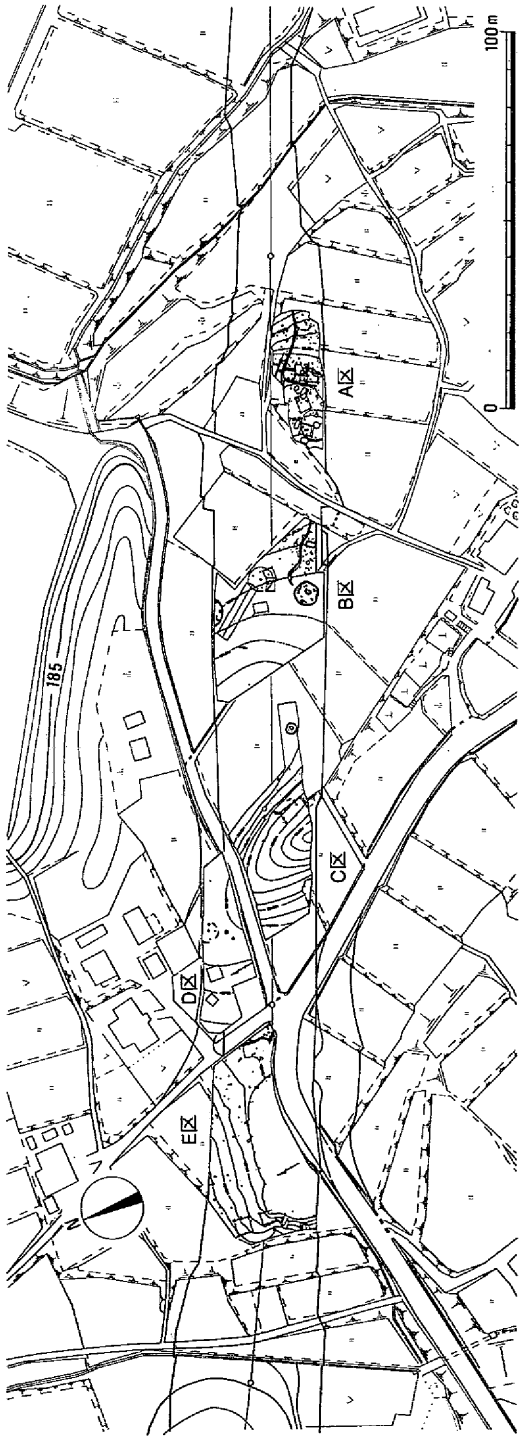
第４章　立石遺跡

第１節　調査区の概要

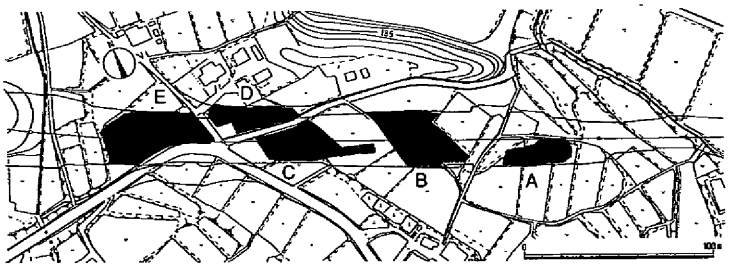
調査は、遺跡内を横断する道路等によって、東から順次Ａ～Ｅ区の５か所に便宜的に区切って実施した。なお、調査区間に存在する未調査部分は、１次調査時のトレンチにより遺構の削平された区域と確認された場所である。

もっとも東に位置するＡ区は台地先端部の緩斜面にあたり、弥生時代後期の竪穴住居３軒、掘立柱建物跡２棟、袋状土壙６基などが検出されており、最も遺構密度が高い。Ｂ区はＡ区との間に谷部を挟み、台地上の平坦部にあたる。Ａ区と同様に弥生時代の集落や、縄文時代の建物跡などが確認されており、早期の押形文土器も出土している。この調査区の東端では水田開削時の削平を免れた部分であり、本来の基本層序が良く保たれていた。水田耕作土の下は周辺地域では他にほとんど見られない黒ボク土が形成されており、その下端部は黒色の漸移層となり、さらにソフトローム、姶良火山灰、ハードローム層となっているように観察される。Ｃ区はＢ・Ｄ区の台地尾根に挟まれた谷部に位置し、弥生時代の竪穴住居１軒、古代の掘立柱建物１棟が検出されている。Ｄ区は平坦地となっており、竪穴住居１軒、落とし穴３基などが検出され、遺構密度は低いが古代の瓦片も採取されており、調査区北側の平坦地に古代の遺構が存在する可能性がある。Ｅ区は遺跡の最西端部分で、緩い谷地形となっており、古代の掘立柱建物２棟が検出されている。

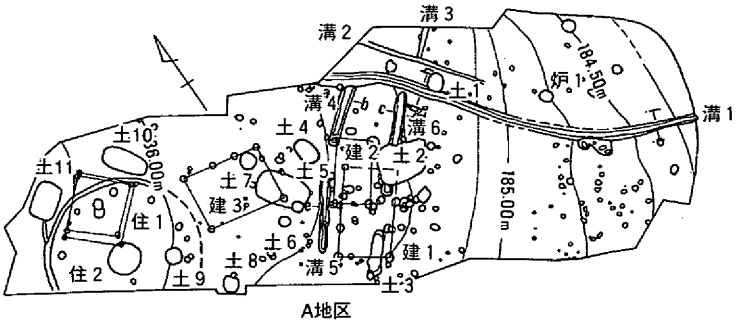
以上のとおり各調査区は台地状尾根の頂部を中心に配置しており、地形を重視すればＡ区、Ｂ区とＣ区の東端部、Ｄ区、Ｅ区はそれぞれ異なる地形上にあると見ることもできる。



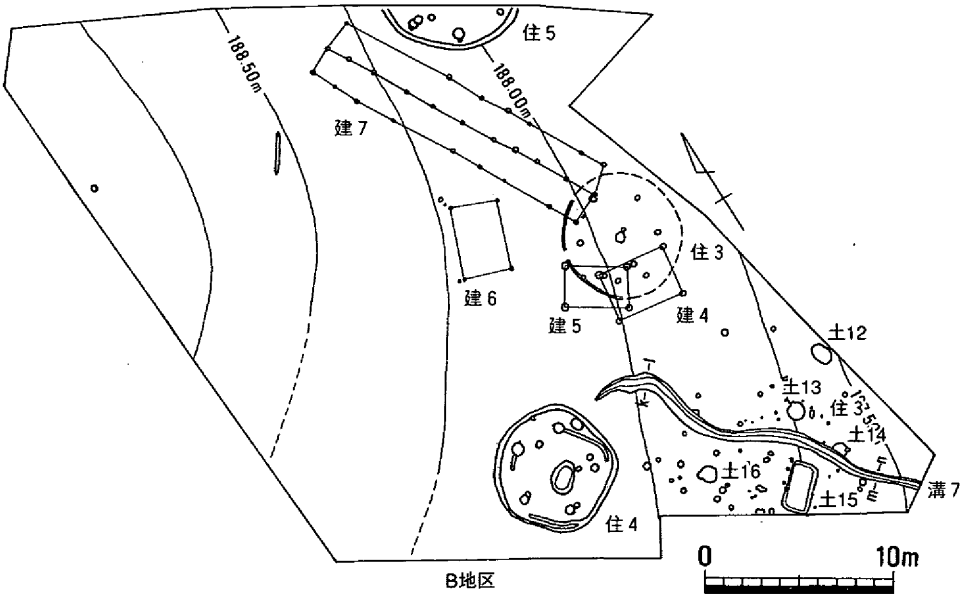
第14図　立石遺跡全体図（S＝1/2000）



A～Eは調査地区

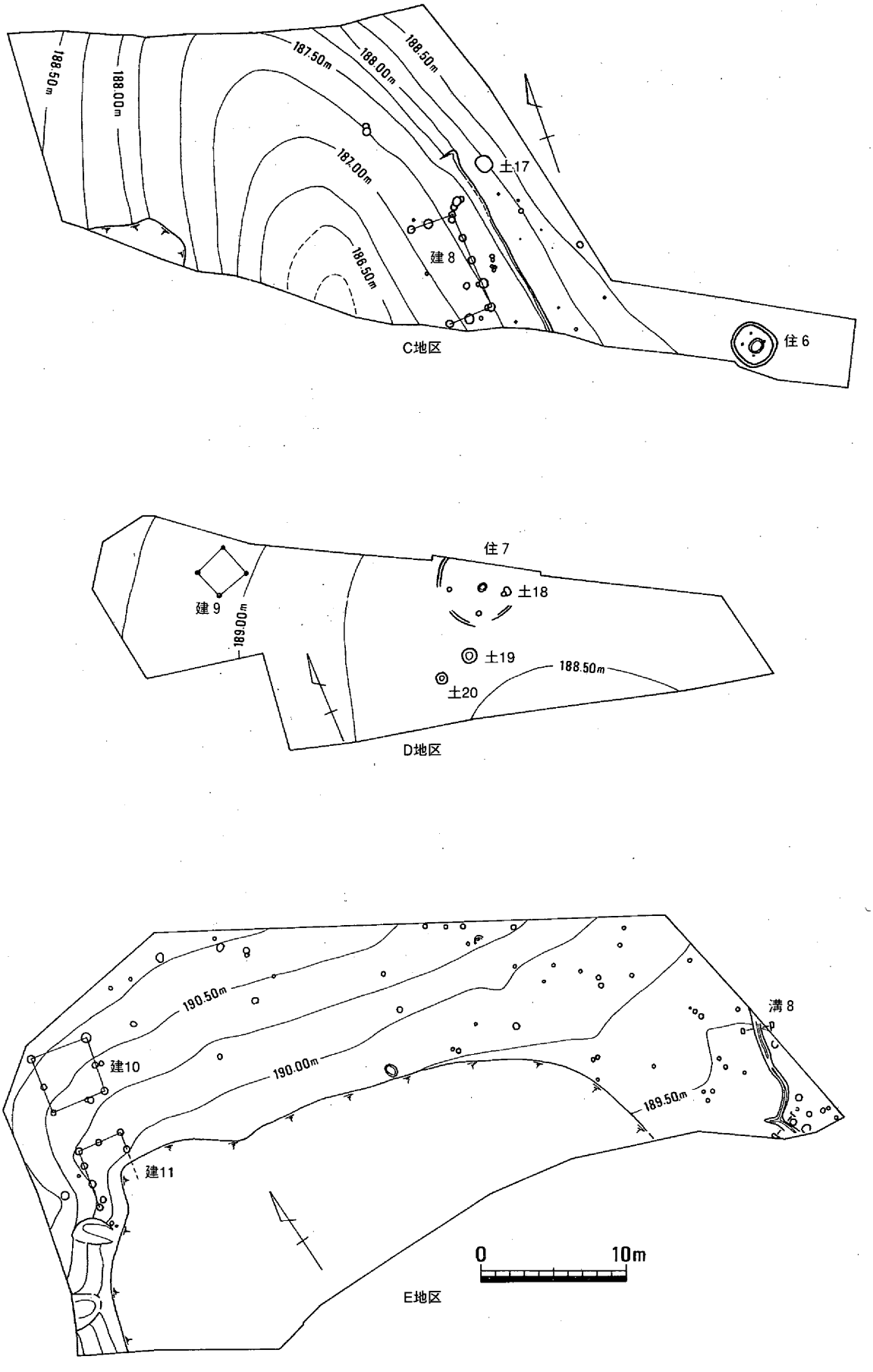


A地区



B地区

第15図　A区・B区の遺構配置図（S＝1/400）



第16図　C区・D区・E区の遺構配置図（S＝1/400）

第２節　遺構と遺物

１．竪穴住居

竪穴住居は黒ボク層から掘り込まれているため、検出面では部分的に確認されたものが多い。

竪穴住居１（第17図、図版２－３）

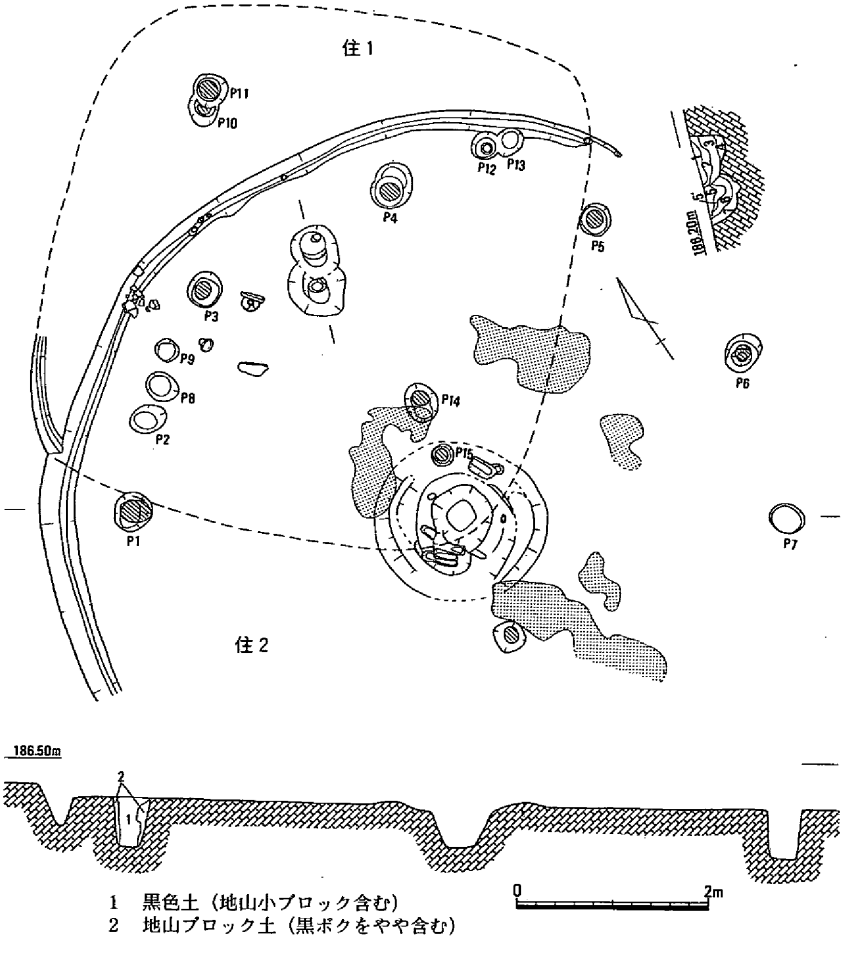
Ａ区西端部に位置し、後述する竪穴住居２の調査中に、これに先行する時期のものとして検出したものである。壁は西側コーナー部のみ残存しており、平面形状はやや不明確であるが、柱穴との関係からおそらく隅丸方形に近いものと推定される。規模は推定復元で一辺約5.4ｍとなる。柱穴は４本柱で、１回の建て替えがみられる。中央穴も１回の作り替えが確認され、その切り合い関係から、建て替え後は北側にやや移動していることがわかる。

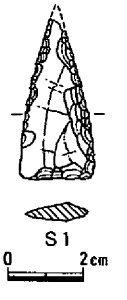
この住居に確実に伴う遺物はないが、切り合いや周辺の状況から弥生時代中期末～後期初頭として間違いないであろう。

竪穴住居２（第17・18図、図版２－３、図版７）

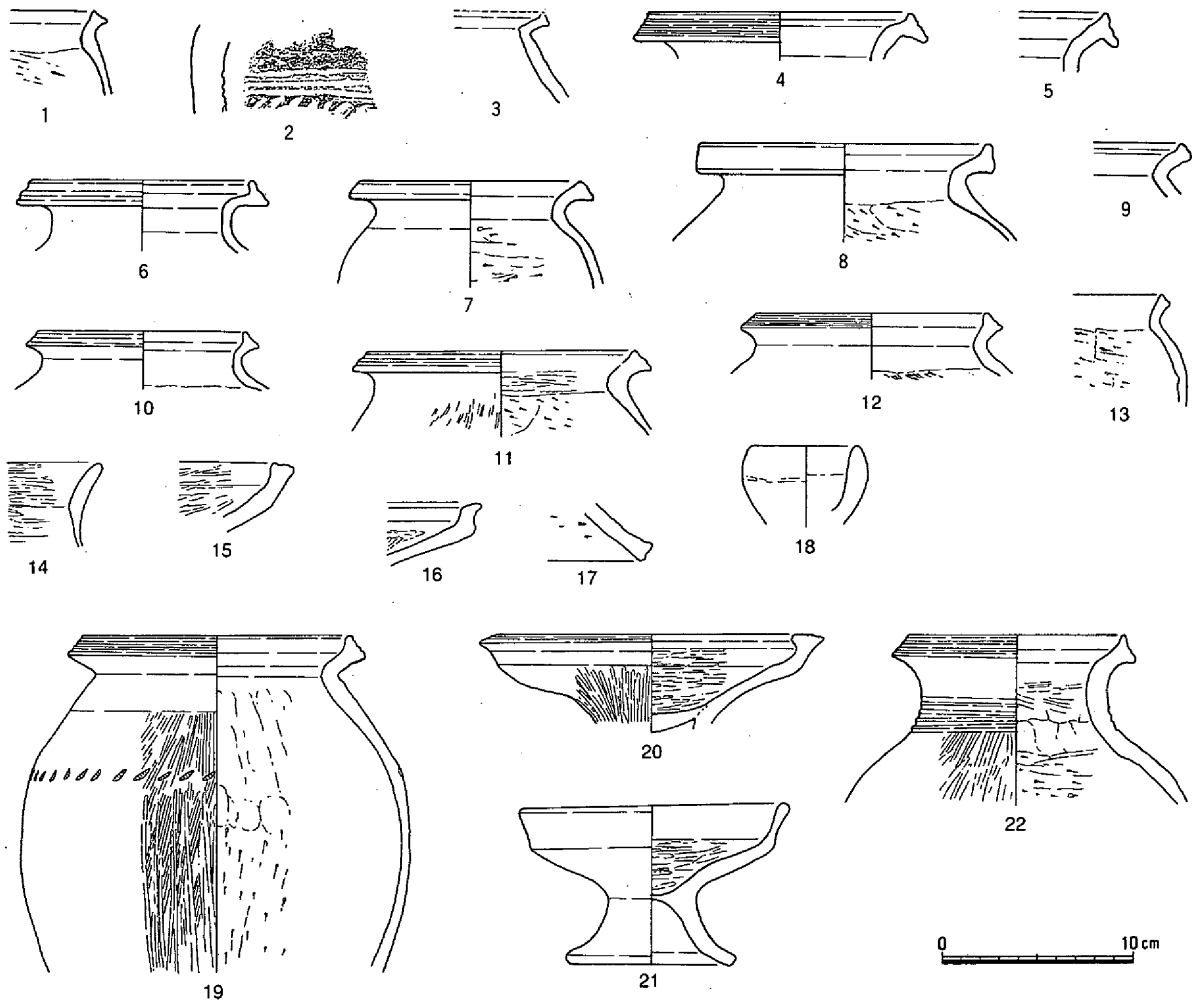
竪穴住居１に重複かつ後続するもので、全体の１/３は調査区外にある。平面形は円形で、規模は今回の調査では最大の復原径8.6ｍを測る。柱穴は６穴を検出しており、調査区外のものを含めると推定で10本分となる。中央穴は径65㎝、深さ40㎝を測り、周囲に径約1.8ｍの土堤を巡らせている。また、中央穴の周辺にはピットが存在しており、このうち南北軸上に直線的に配置するようにも見受けられる。

床面中央付近には、やや浮いた状態で薄い焼土層が





第17図　竪穴住居１・２と竪穴住居２の出土遺物



第18図　竪穴住居２の出土遺物

認められ、焼失住居と考えられる。その場合、焼土層の広がりから、上屋頂部付近に粘土を使用していた可能性が高い。床面北側から高杯**20・21**や甕**19**、砥石と考えられる石材が出土している。中央穴からは甕片**12**、鉢片**14**が出土している。このほか、柱穴内から壺片**22**、小型鉢**18**が出土している。

出土遺物はいずれも弥生土器で、前述した以外の１～**11・13・15～17**は堆積土中から出土したものである。壺や甕・鉢は、口縁端部が肥厚あるいは拡張して内傾する面を作り出す特徴を持ち、高杯も口縁端部あるいは脚端部に同様の特徴を持っている。４・５は口縁端部が下垂する壺と考えられ、２・**22**のように頸部に平行沈線（とその下端に連続刺突文）を施すタイプと考えられる。６・８は甕と見分けが付きにくいが、短めの頸部を持つ壺と考えられる。甕は、口縁端部に広い意味での凹線文を巡らせ、内面を口縁屈曲部のやや下方から横方向（反時計回り）のヘラケズリによって調整しているが、床面出土の**19**は体部下半の縦方向のヘラケズリにとどまっている点や、体部外面に連続刺突文を残すなど、中期的な様相を残していると言える。鉢（１・**13**）は口縁部径が体部最大径を越えないもので、内面は反時計回り方向のヘラケズリ調整である。高杯は、口縁部は杯底部から屈曲してやや外傾気味に短く立ち上がるもので、杯部は内外面ともヘラミガキ、口縁部はヨコナデとヘラミガキ調整が認められる。床面出土の**21**は低脚を持つタイプで、口縁部は端部を丸く収め、杯底部は円盤充填

によらない技法で作られているように見受けられる。

時期は、床面及び柱穴内の出土遺物から、弥生時代後期初頭と考えられるが、先行する住居１が建て替えを１回行っており、本住居はその後に建てられていることに留意しておく必要があろう。

竪穴住居３（第19図、図版３－２）

Ｂ区のほぼ中央部に位置し、柱穴と壁溝の一部がかろうじて検出されたが、本来は黒ボク層から掘り込まれているため、特に削平を受けた遺構というわけではない。平面形はほぼ円形と考えられ、床面の推定規模は径約６ｍを測る。柱穴は６本で、径30～40㎝、深さ40～60㎝を測り、柱穴Ｐ１は後述する掘立柱建物７の柱穴を切り込んで掘られている。中央穴は径50～58㎝、深さ22㎝を測り、他の住居に比して浅いタイプである。

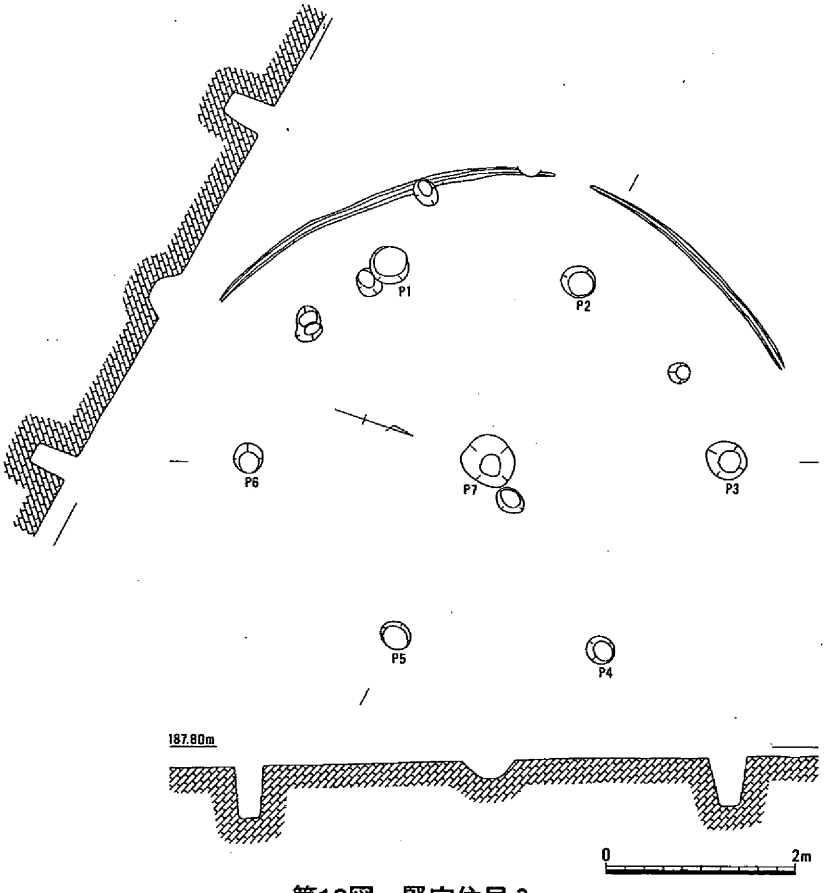
遺物は、中央穴内部から大形壺の体部片が出土しているのみである。

遺構の時期は前述した土器片の特徴より弥生時代中期の可能性が高く、中央穴の特徴とも矛盾しないように思われる。

竪穴住居４（第20図、図版３－３）

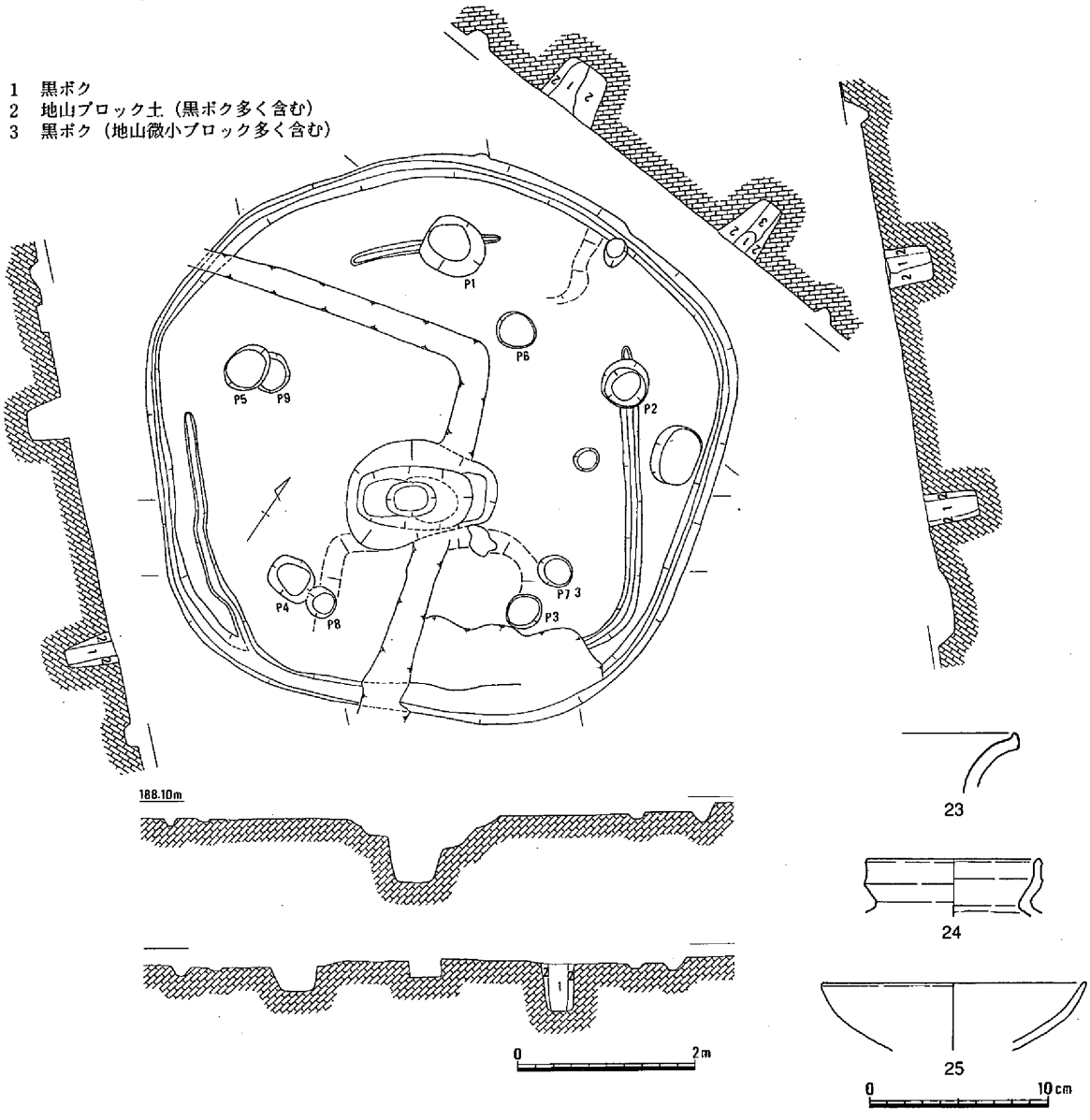
Ｂ区南側に位置するもので、住居３と同様、黒ボク除去後のソフトローム面で検出したため、柱穴と壁溝を検出できたのみである。また、現代の水路によってＬ字状に削平されているほか、南東側は耕作時の攪乱を受けている。

住居は２軒が重複しており、当初検出された平面隅丸５角形のものを（新）、これに先行する平面隅丸方形のものを（古）とする。（新）は床面規模が長径6.2ｍを測り、柱穴は５本で掘り方の径は40～70㎝、深さ55～65㎝を測る。（古）は床面規模が4.9×5.0ｍを測り、柱穴は４本で掘り方の径は35～40㎝を測る。柱は痕跡から、いずれも径18～23㎝前後を測るものと推定される。中央穴については、新・古とも中央やや南側に偏った位置にあり、重複しているために判然としないが、新古とも長軸を東西方向にとる長方形で、二段構造を呈しているものと考えられる。また、（新）床面東側の壁溝近くには、方形気味の土壙が作られており、規模は長径75㎝、短径55㎝、深さ40㎝を測る。このほか、床面の一部に高まりが認めら

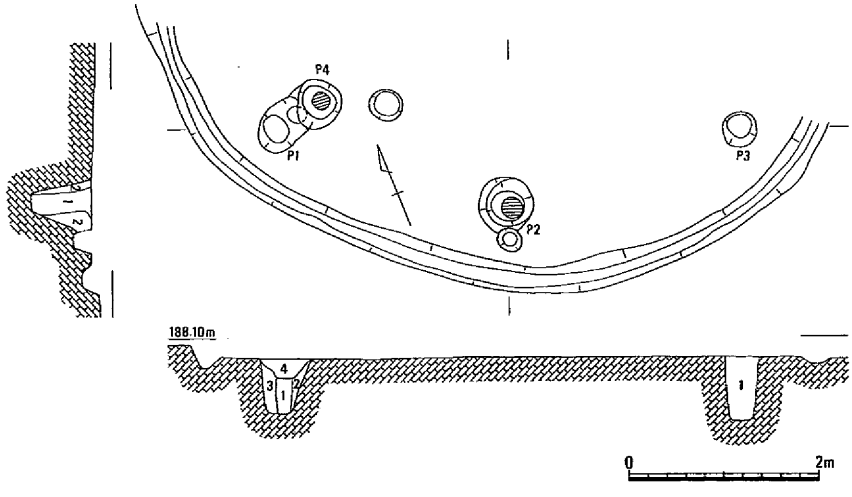


第19図　竪穴住居３

1　黒ボク
2　地山ブロック土（黒ボク多く含む）
3　黒ボク（地山微小ブロック多く含む）



第20図　竪穴住居４と出土遺物



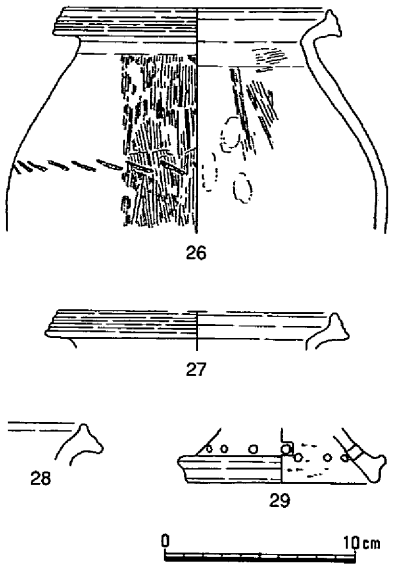
1　黒ボクと地山ブロックの混土
2　地山ブロック土（黒ボク少し含む）
3　地山ブロック土（黒ボク多く含む）

第21図　竪穴住居５

れ、ベッド状遺構が存在した可能性が強い。

出土遺物は極わずかであり、図示できたのは土器３点である。**23**は甕の口縁部片で、垂直に立ち上がる二重口縁を持ち、復原口径9.6cmを測る。**24**は壺の口縁部と考えられる小片で、風化のため調整は不明である。**25**は復原口径14.8cmを測り、高杯あるいは低脚杯と推定される。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉から後半と考えられる。



第22図　竪穴住居５の出土遺物

竪穴住居５（第21図、図版４－１）

Ｂ区北端に位置し、全体の３分の２は調査区外にあり、詳細は不明である。平面形は円形で、規模は径約８ｍと推定される。柱穴は９本前後と考えられ、掘り方は径35～55cm、深さ60～70cmを測る。柱は痕跡から18～23cm前後を測るものと考えられる。壁溝からは建て替えの痕跡は見られないため、床面の他の柱穴は別の掘立柱建物のものと考えられる。

遺物は壁溝内から出土した甕**26**の他は堆積土中の出土である。**26**は口縁部に３条の凹線、肩部に連続刺突文を施し、体部は外面がタテハケ後下半をタテミガキ調整、内面はタテハケと凹圧痕を残している。**29**は高杯脚端部片で、小孔透かしを推定13方向に施している。

遺構の時期は、出土土器の特徴から弥生時代後期初頭と考えられ、**26**の甕は中期末的様相を留めているものとしたい。

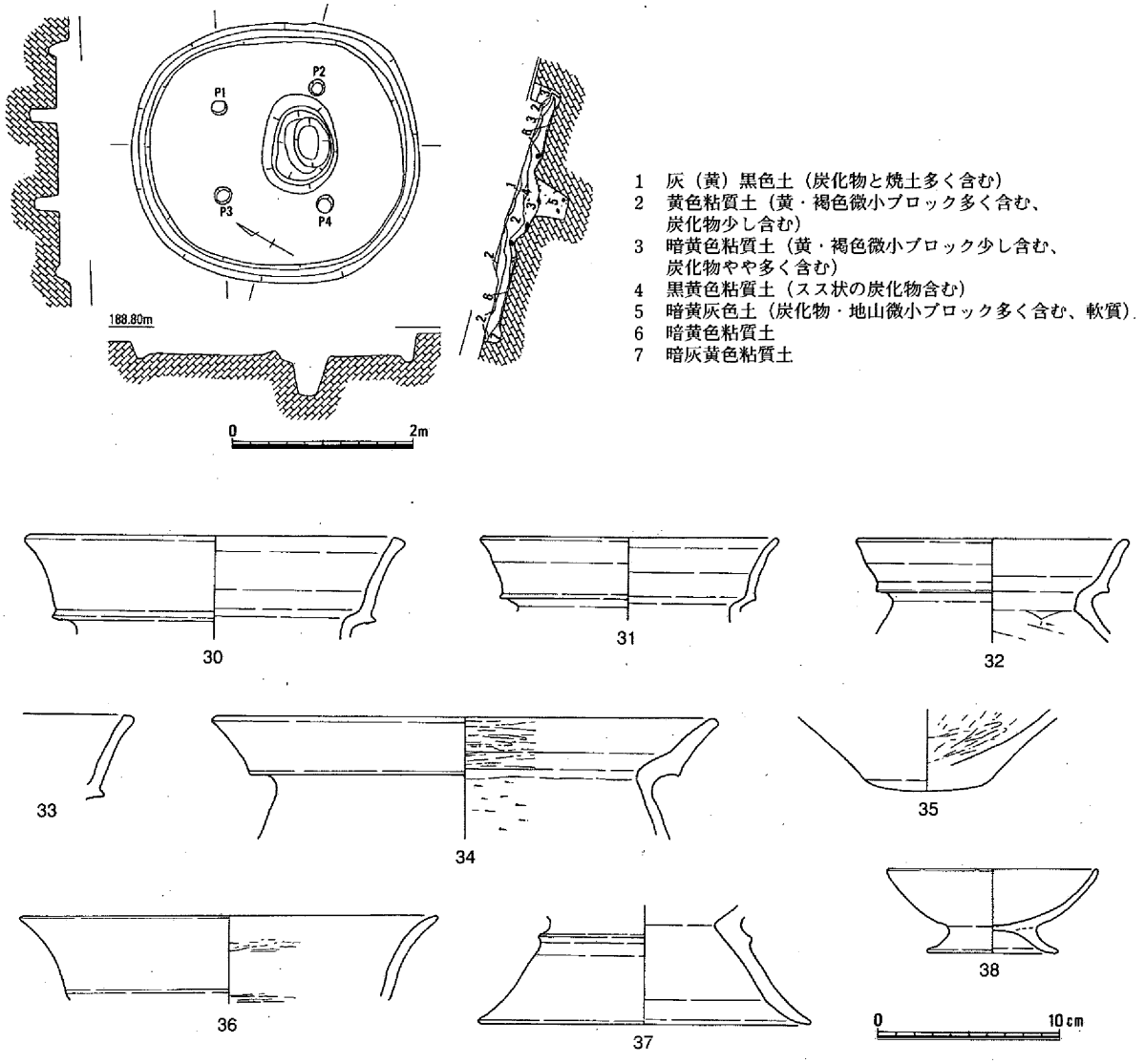
竪穴住居６（第25図、図版４－２、図版８－１）

Ｃ区の東南端に位置し、平面は円形に近い隅丸四角形で、規模は短径2.37ｍ、長径3.2ｍを測る。柱穴は４本柱で、掘り方は径16～19cm、深さ26～42cmを測り、中央穴は長楕円形で、上面で49×60cm、深さ42cmを測る。中央穴の周囲には、平面長楕円形で、規模が径82×108cmを測る環状の土手が巡っている。

堆積土３層には、径２～４cmの炭化材が多量に含まれており、焼失住居と判断している。また、最上層の１層には、炭化物と焼土が多く含まれており、土器の大半もここからまとまって出土している点が注目された。層位関係から、この土器群は住居の屋根の上に置かれていた可能性も残るが、自然に考えるならば、住居が焼失した後に、何らかの火気使用を伴う行為がなされ、それに伴ったものである可能性が高い。

出土遺物は、口縁部が発達した二重口縁の甕**30～34**や、横方向のミガキ痕跡のある高杯**36**、遺跡内で唯一確認された鼓形器台**37**、低脚付杯**38**などがあり、いわゆる山陰系土器群がほとんどであるのが特徴といえる。甕の口縁部は端部を面取りする処理を施すものと、丸く収めるもの双方が見られ、また、薄手のタイプが存在するが特徴といえる。

住居の廃絶時期は、これら出土遺物や、住居平面形から弥生時代後期後半でも中葉に近い時期（岡山南部の才ノ町１～才ノ町２平行頃）と推定している。いずれにせよ、今回の調査では、弥生時代としては最も新相の土器群を出土した遺構であり、集落の廃絶時期を示している可能性も高く、その意味では重要な資料となろう。



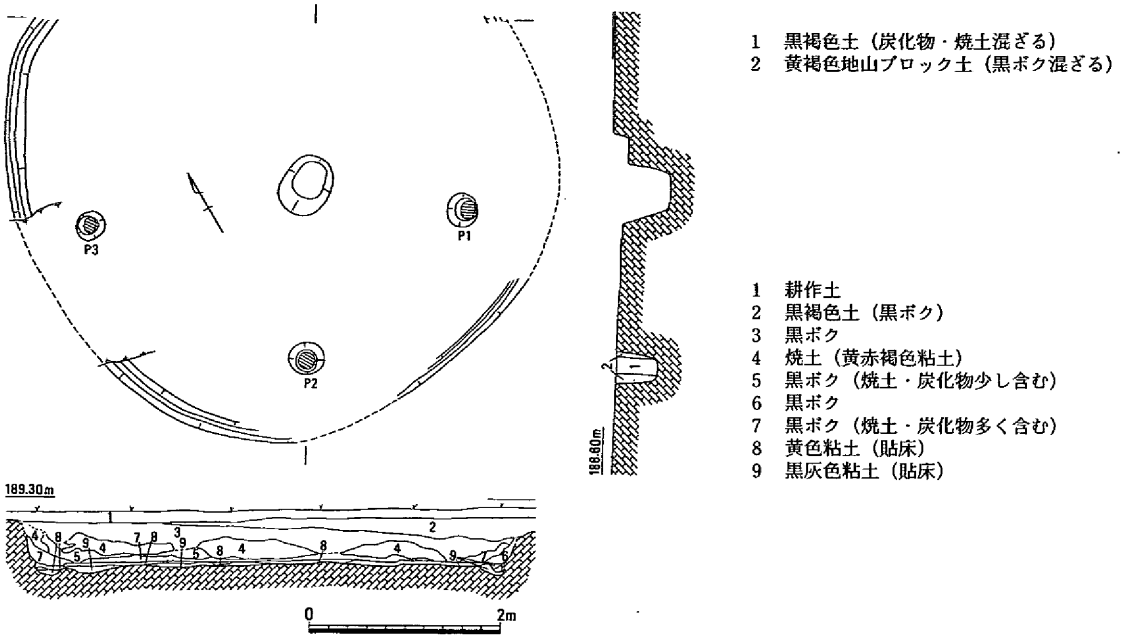
第23図　竪穴住居６と出土遺物

竪穴住居７（第24図、図版４－３）

Ｄ区北端に位置し、確認調査時に検出されたものである。北東側の約４分の１が調査区外にあるため明確ではないが、平面は円形に近い隅丸五角形、規模は径5.7ｍと推定される。柱穴は３穴確認され、調査区外のものを考慮して、５本柱と判断している。柱穴掘り方は径35cm前後、深さ45cm前後を測り、柱材の痕跡は径約18cmである。中央穴は平面が隅丸長方形を呈し、上面で65×45cm、深さ50cmを測る。

堆積土の状況から焼失住居であることが判明しており、被熱した粘土（４層）が３カ所レンズ状に堆積している点が特徴的である。また、貼床の粘土が壁溝の上部にまで延びている点は、内壁の存在を考える上で注意したい点といえる。

時期のわかる遺物が出土していないが、住居形態から弥生時代後期中葉～後半頃と推定される。



第24図　竪穴住居７

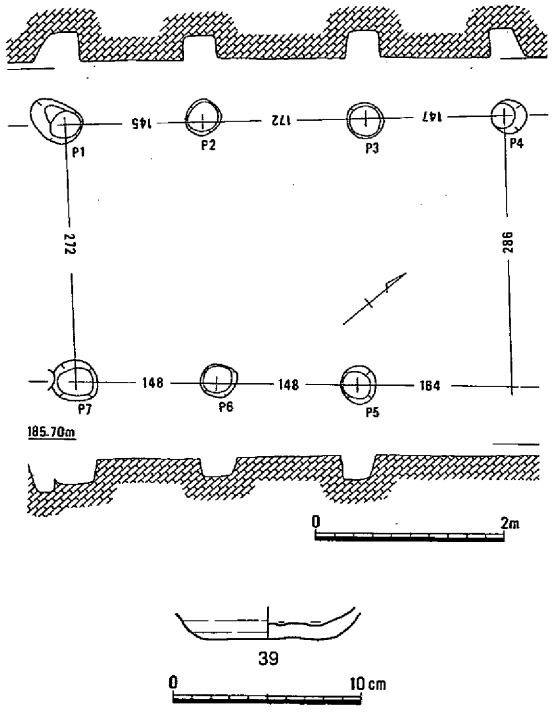
２．掘立柱建物

今回の調査で検出した竪穴住居以外の建物跡のうち、柱穴配置が明確な（長）方形を呈するものを以下に掘立柱建物として記述する。なお、弥生時代後期の１×１間のタイプは通常高床倉庫と認識されるものであるが、機能的な性格については個別に論じることにした。

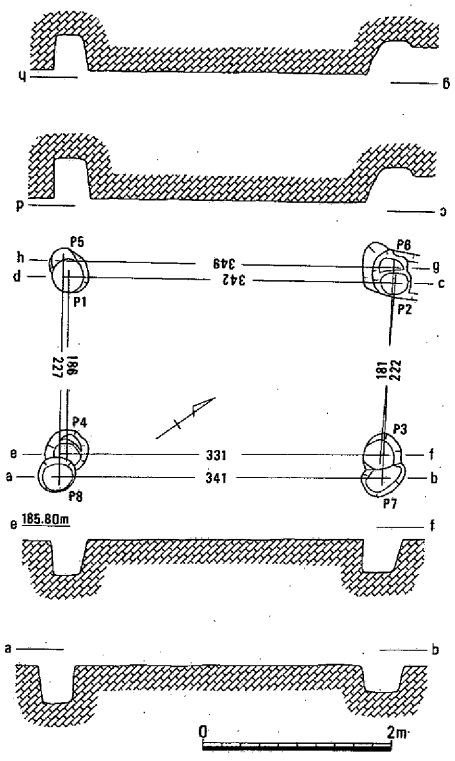
掘立柱建物１（第25図、図版５－１）

Ａ区中央部に位置する建物跡で、耕作による掘削を受けている。柱穴配置は１×３間で、長軸は等高線に平行となっている。規模は約2.8×4.7ｍを測り、柱穴掘り方は径35～45cmで、深さ20～30cmを測り、短辺側のものが一段深い傾向が伺える。建物は後述する掘立柱建物２と、東隅の柱穴は土壙２と重複しており、切り合い関係は確かめることができなかった。遺物はＰ４から土師器の皿底部片が出土している。

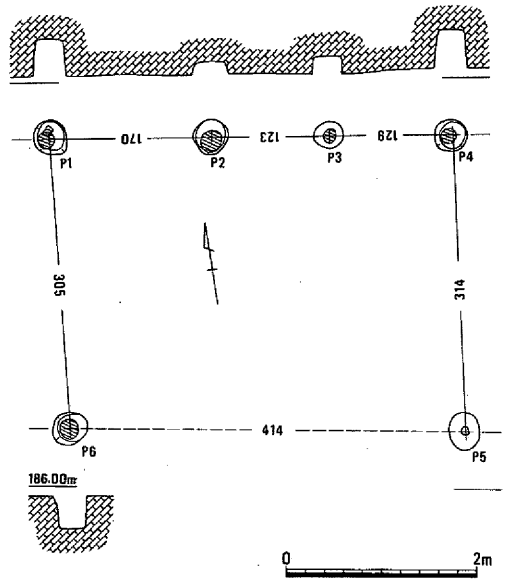
本建物はコーナー部の柱穴が一段深く掘り込まれており、上屋に対して主柱穴的な機能を持っていると推定できる。時期については出土土器から奈良～平安時代と考えておきたい。



第25図　掘立柱建物１と出土遺物



第26図　掘立柱建物２



第27図　掘立柱建物３

掘立柱建物２（第26図、図版５－１）

掘立柱建物１と重複して検出されたもので、これと同方向の主軸を持つ。柱穴配置は南北に主軸を持ち、１回の建て替えが認められる。規模はいずれも南北約3.5ｍ、東西約2.1ｍ前後を測り、柱穴掘り方は径35～40㎝を測り、検出面からの深さは35～40㎝を測る。

建物の性格については他例から倉庫として考えるべきものである。時期については遺物が無く明確でないが、掘立柱建物１と同様に弥生時代後期の中に収まるものと考えられる。

掘立柱建物３（第27図）

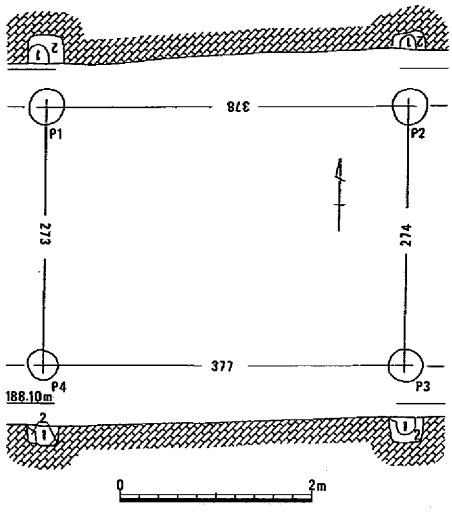
Ａ区中央やや西よりに位置するもので、主軸方向は掘立柱建物１・２と異なり、等高線に直行する。柱穴配置は１×３間で、規模は東西4.2ｍ、南北3.1ｍを測る。柱穴掘り方は径30～40㎝を測り、深さは建物１と同様に４隅のものが一段深く、間のものは浅い。このために南辺の中間柱穴は削平により消失しているものと判断した。なお、柱穴Ｐ５は土壙５が埋没した後に掘り込まれていることが判明している。

建物の性格については、柱穴の深さの関係から、掘立柱建物１と同様のものと考えたい。時期については、土壙５が後期初頭と考えられることから、これに後出する時期で、且つ弥生時代後期の中に収まる可能性が高い。

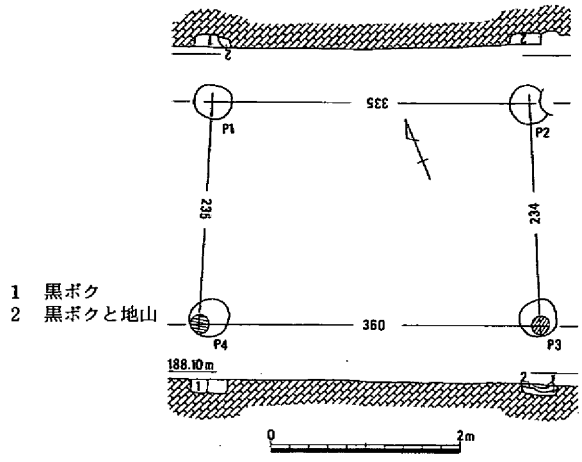
掘立柱建物４（第28図）

Ｂ区中央やや東寄りに位置し、竪穴住居３及び後述する掘立柱建物５と重複して検出されたものである。柱穴配置は１×１間で、規模は東西約3.8ｍ、南北約2.7ｍを測る。柱穴は掘り方が径35㎝前後を測り、断面で確認された柱痕跡は径18㎝前後である。柱穴Ｐ１は竪穴住居３の柱穴を切っている。

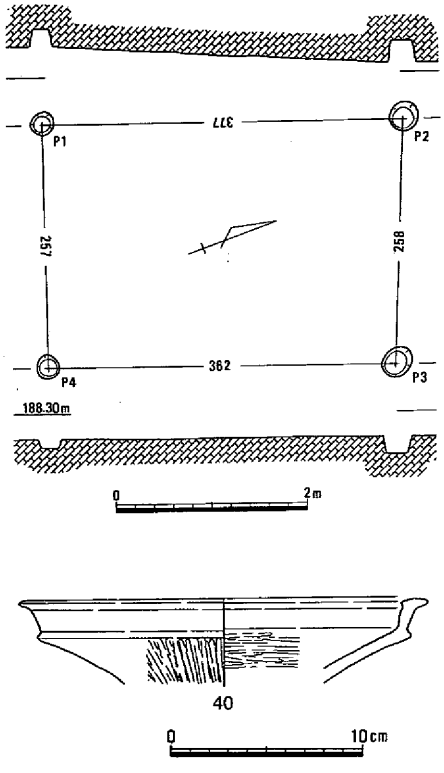
建物の性格はその形態から高床倉庫と考えるべきものである。時期については切り合い関係から弥生時代中期以降で、弥生時代後期の中に収まると考えている。



第28図　掘立柱建物４



第29図　掘立柱建物５



第30図　掘立柱建物６と出土遺物

掘立柱建物５（第29図）

掘立柱建物４に重複するもので、柱穴配置は１×１間、規模は約2.4×3.6ｍを測る。柱穴掘り方は径40cm前後、検出された柱痕跡は径約18cmを測る。

建物の性格・時期とも前述の建物４と同様と考えられる。

掘立柱建物６（第30図）

Ｂ区のほぼ中央に位置し、主軸は南北にとるものである。柱穴配置は１×１間で、規模は約2.5×3.5ｍを測る。柱穴は掘り方が径30cm前後を測り、柱痕跡は確認できなかった。

建物の性格は形態から高床倉庫としたい。時期は柱穴内より出土した高杯片40から、弥生時代後期初頭と考えられる。

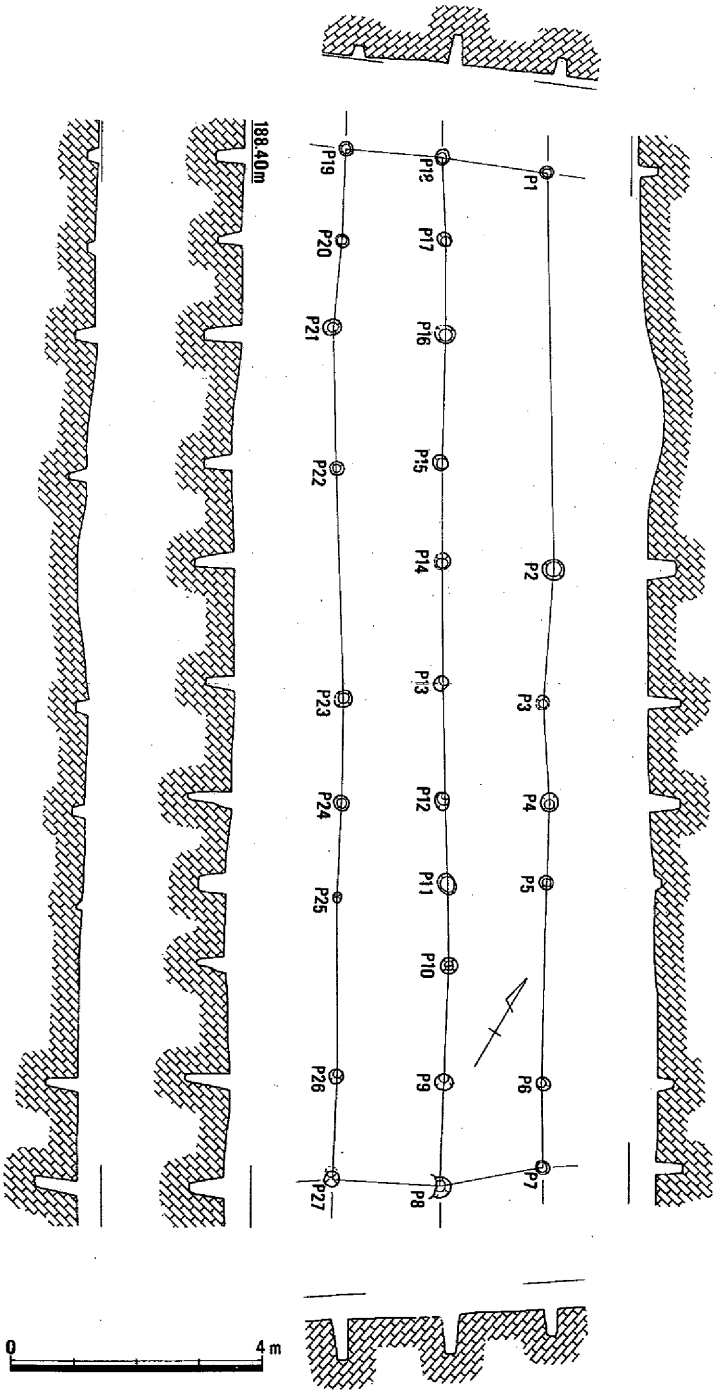
掘立柱建物７（第31図、図版５－２）

Ｂ区中央北よりのほぼ平坦な斜面に位置する建物跡で、主軸方向は等高線に斜行し、ほぼ南北にとる。柱穴配置は２×10間の総柱状を呈し、規模は東西約3.4ｍ、南北16.6ｍを測る長大なものである。柱穴は掘り方が径20cm前後で、深さは主軸となる中央列のものが約40～70cmと深く、外側の列は20cm前後の浅いものが多く、検出できなかった部分もある。柱穴の底部の断面は丸みを帯びた形態で、杭を打ち込んだ跡ではなく、明らかに掘り込んだものと判断している。また、柱穴Ｐ８は弥生時代中期の竪穴住居４の柱穴によって切られていることが確認されている。本遺構は弥生時代以降の遺構調査が終了した後、灰黒色の漸移層を含む縄文早期の小ピット群を探す際に発見したもので、黒ボクを含む為に検出が容易な弥生時代以降の遺構と異なり、検出が困難なものである。建物跡の柱穴内の土層は、やや赤みを帯びた暗灰色を呈し、地山の灰黄色土のブロックを少量含んでいた。ただし、外側列の柱穴の一部には、赤みを帯びないものも少数認められた。この土は黒ボクとは全く異なり、縄文早期の押形文土器が含まれる土層とも異なる色調

を呈している。また、仮に黒ボク層上面から掘り込まれていたとすれば、柱穴の深さが１ｍ近くになり、柱穴径の規模を考えると極めて不自然なものとなる。

遺物は中央列の柱穴Ｐ12より２㎝大の土器細片と炭化物がわずかに出土したのみである。土器片は表面剥離した状態であり調整等は不明であるが、肉眼観察の限り押形文土器のそれとは異なる胎土であった。

建物の性格については遺構以外での検討材料が無く、立地や柱穴の配置・構造から推定するしかない。まず、中央列の柱穴がすべて存在し、最も深く掘り込まれているのに対し、両側の柱穴は浅いものが多く、当初より存在しない可能性の強い部分がある点が指摘できる。これはすべての柱穴が垂直に掘り込まれている点とあわせて、上屋構造を考える上で重要な点であり、また、柱穴底面レベルは遺構面のレベルと同様、東へ向かって徐々に下がっており、建物を建てる際に特に床面を水平とするような作業（たとえば竪穴）を伴っていないものと推定できる。



第31図　掘立柱建物７

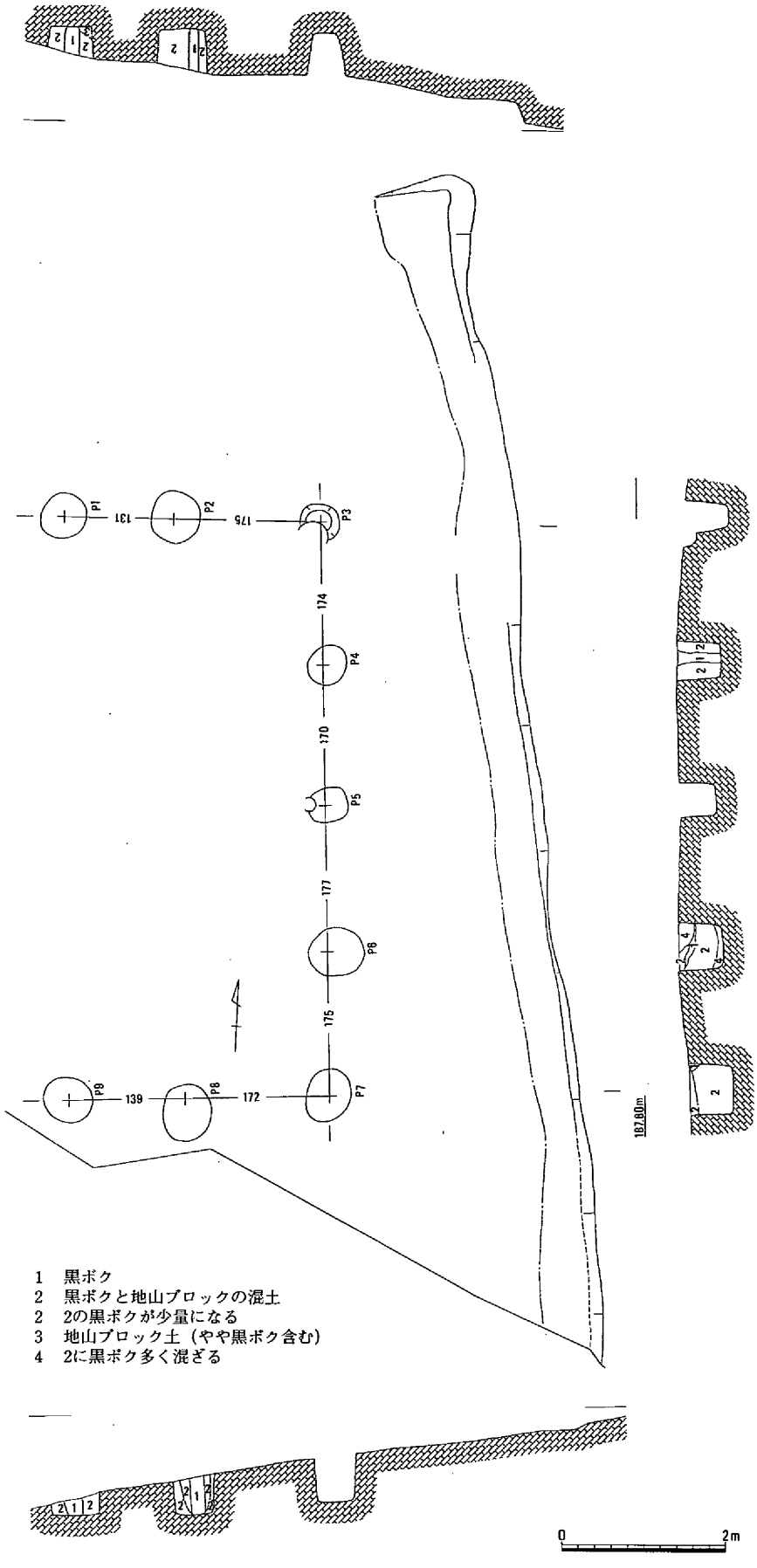
時期については、細片ながら土器を伴っている点、切り合い関係から弥生時代中期の竪穴住居に先行する点、柱穴内に黒ボクや縄文早期の土器片を包含する土を含まない点から、下限は縄文時代早期、上限は草創期と考えざるを得ない。

掘立柱建物８（第32図、図版５－３）

Ｃ区南端部に位置し、谷部斜面に立地する建物跡で、東側に平坦面造成時の段状部が遺存する。建物跡は、主軸は等高線に平行するほぼ南北方向にとり、４間×３間以上の柱穴配置と7.1ｍ×4.5ｍ以上の規模を持つ。柱穴は掘り方が径50～80㎝前後、深さ30～60㎝を測り、径18㎝前後の柱痕跡を残すものが認められた。段状部は建物規模に対してかなり広く、南北14.3ｍ以上を測る。調査区南壁面の土層観察から、この建物跡に伴う段状遺構、即ち造成土の広がり

が確認でき、柱穴の当初の深さは80cm前後になるものと推定される。また、建物の位置と段状部の空間配置から屋根構造や屋外スペースの関係を検討できるかもしれない。

遺物は極少量の須恵器片などが出土したのみで、決め手を欠くが、おおむね古代、おそらく奈良時代のものと考えている。



第32図　掘立柱建物８

掘立柱建物９（第33図）

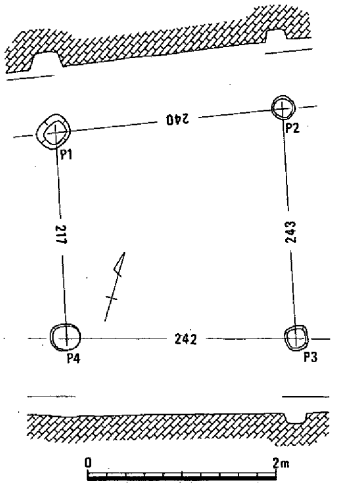
Ｄ区西側に位置し、ほぼ平坦部に立地する建物跡である。柱穴配置は１間×１間で、規模は約2.4×2.3ｍを測る。柱穴は掘り方の径が20～35㎝前後、検出面からの深さは３～15㎝と浅く、黒ボク層上面からの当初の深さは40㎝前後と推定される。

建物の時期は出土遺物が全く無いため確定できないが、柱穴内の埋土から、古代以降のものと推定している。

掘立柱建物10（第34図）

Ｅ区西端部の丘陵裾部に位置する建物跡で、後述する建物跡と主軸を同方向にとるものである。柱穴配置は南北に主軸をとる２間×１間のもので、規模は約4.1ｍ×3.9ｍを測り、梁行きがかなり長い構造を持っている。柱穴は検出面の関係から、掘り方が30～70㎝、深さ５～30㎝を測る不規則なものに見えるが、本来はコーナー部のものが大型で深く、桁行き中間部のものは小型で一段浅いものと考えられる。柱材は掘り方の形状から径20㎝前後を測るものと推定される。

共伴する遺物は無いが、柱穴内の埋土やＥ区包含層の出土遺物などから古代のものと推定される。

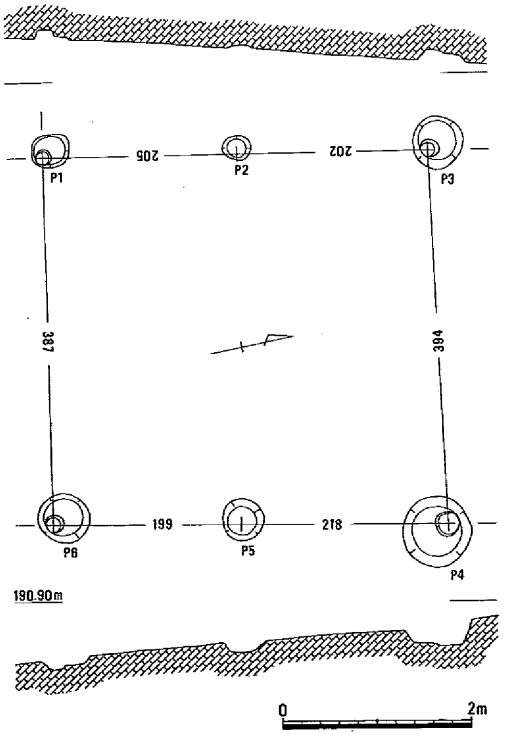


第33図　掘立柱建物９

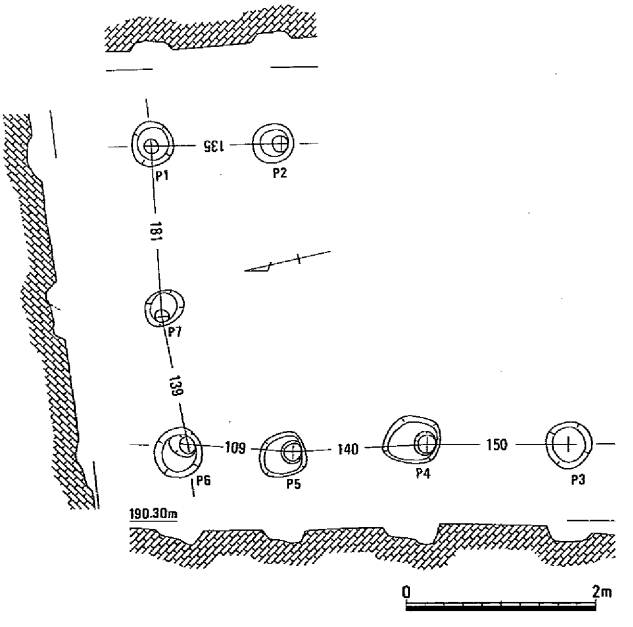
掘立柱建物11（第35図）

前述した建物跡の南側に隣接するもので、主軸も同方向のほぼ南北にとる。柱穴配置は３間以上×２間で、規模は４ｍ以上×3.2ｍを測る。柱穴は掘り方の径が40～50㎝前後、柱は径20㎝前後を測るものと推定される。

出土遺物が無いが、時期は掘立柱建物10と同時期と考えられる。



第34図　掘立柱建物10

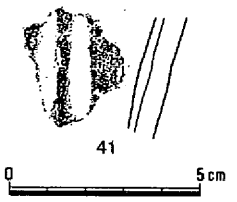


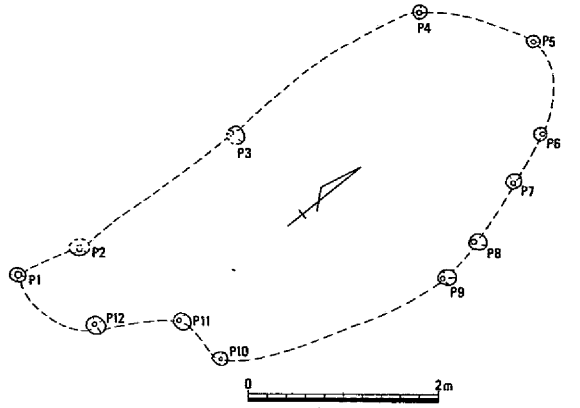
第35図　掘立柱建物11

３．その他の建物

建物１（第36図、図版３－１）

Ｂ区南東部の平坦地に位置し、後述する土壙15を調査中にその一部を検出できたものである。ピットは検出面で径18cm前後を測る小型のもので、深さは検出面から40cm前後を測り、断面形状は先端が尖る形態を持つことから、杭もしくは杭状の柱材を打ち込んだ痕跡と推定している。ピットの分布形態から、不整長楕円形の建物あるいは杭列と考えられるが、いずれのピットもほぼ垂直になっていることから、柱材が斜方向に収束するタイプの建物とはならないであろう。





第36図　建物１と出土遺物

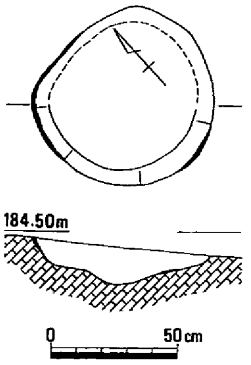
遺物は、土壙15の調査中に検出したＰ２内から、縄文時代早期の土器口縁部の小片１点が出土している。

本遺構は建物跡と呼称しているが、上記した理由から明確な建物とするには躊躇せざるを得ない。但し、杭列として扱うにしても性格が不明確であり、さらに検討する必要があろう。時期は出土土器と、ピット内埋土が完全な黒ボクでなく、他の押形文土器が包含されている黒色漸移層に近いものであることから、縄文時代早期としてよいであろう。

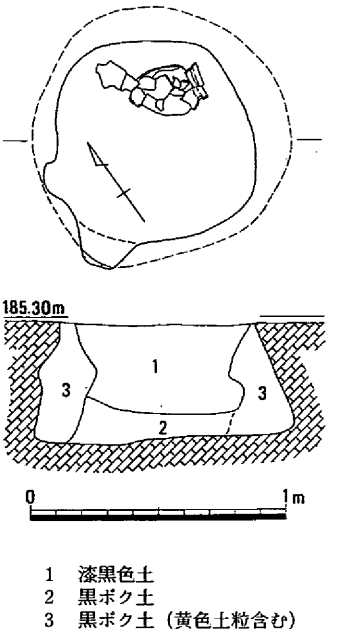
４．鍛冶炉

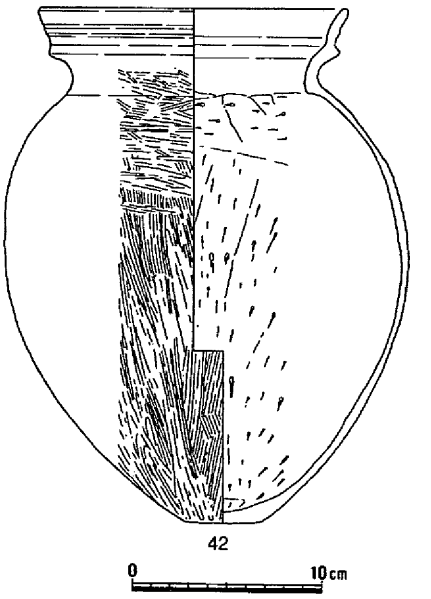
鍛冶炉１（第37図）

Ａ区東側の丘陵頂部先端付近で検出された被熱土壙で、径65～70cm、深さ15cmが残存

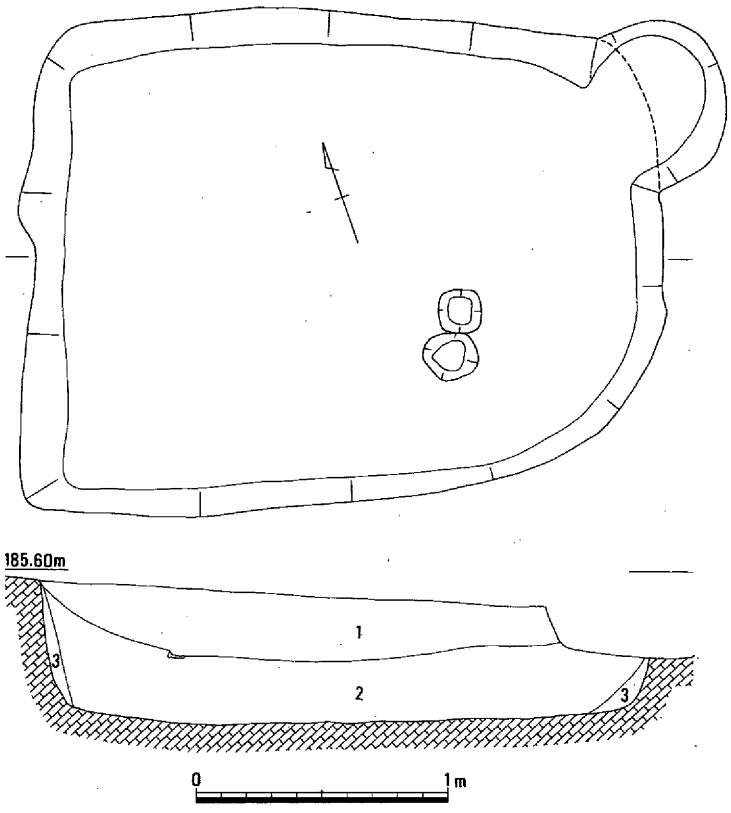


第37図　鍛冶炉１

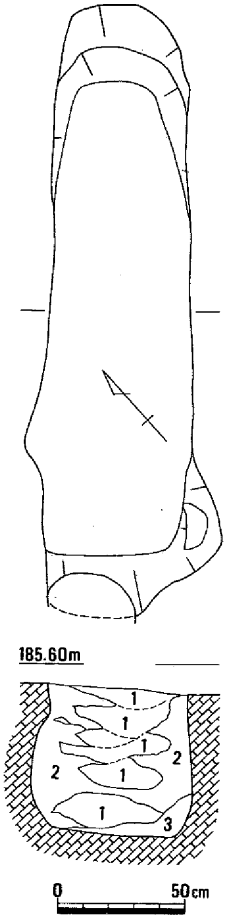




第38図　土壙１と出土遺物

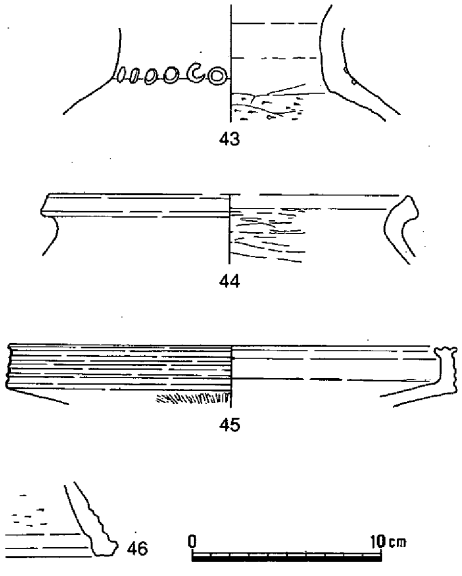


1　黒褐色土（黄色土粒含む）
2　黒色土（黒ボク土）
3　黒ボク土（黄色土粒含む）



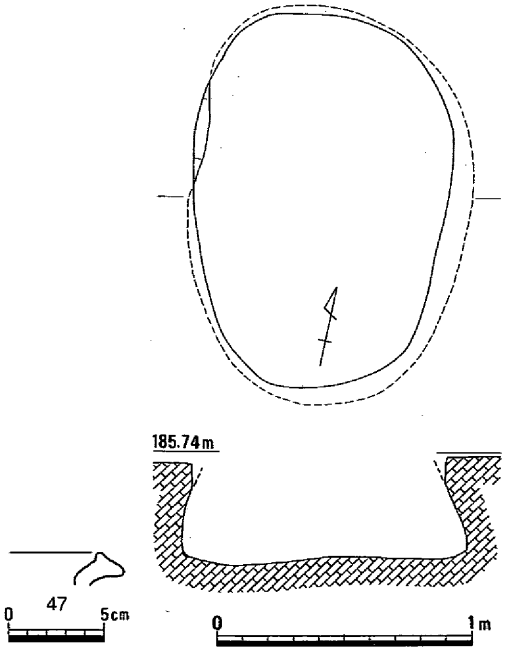
1　黒色土
2　黒黄色土
3　黒色土

第40図　土壙３

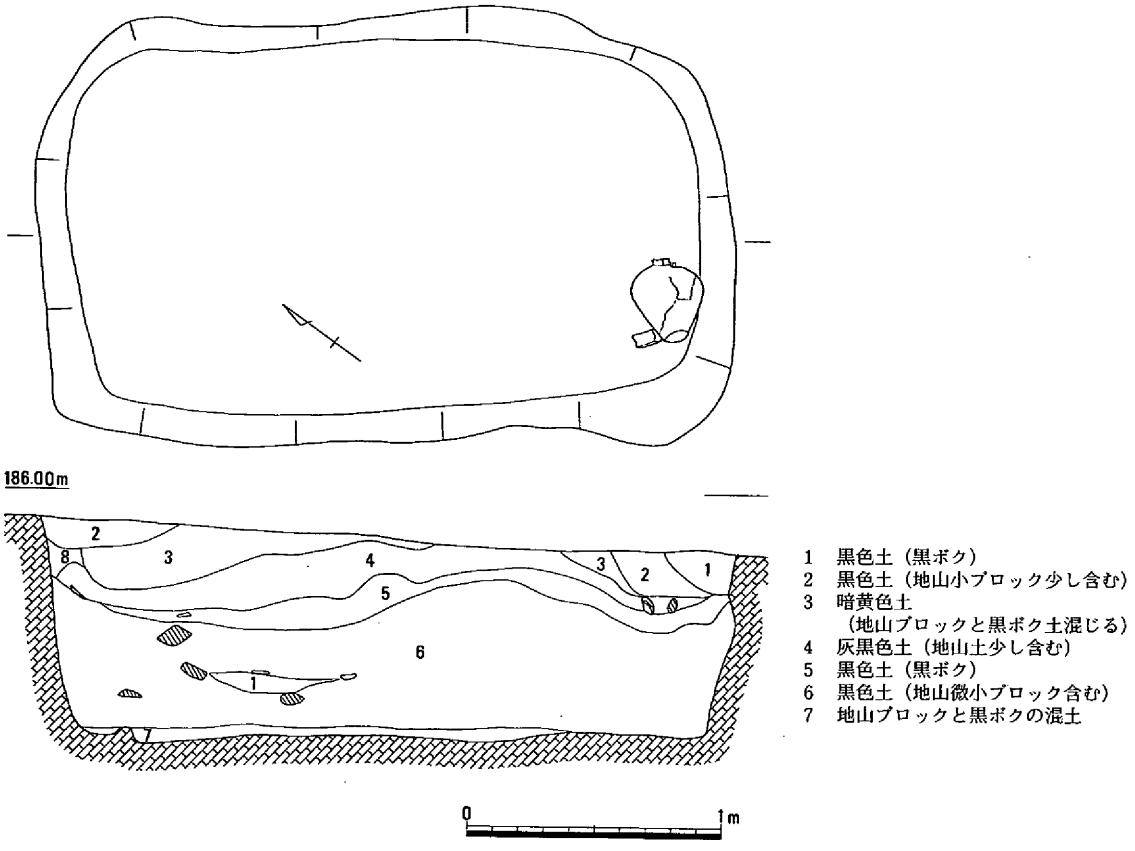


第39図　土壙２と出土遺物

していた。堆積土中には、焼土、炭化物、鉄滓が含まれており、鍛冶炉の下部構造の可能性が高いものと判断した。明確な時期は不明確だが、中世以降と推定している。



第41図　土壙４と出土遺物



第42図　土壙５

５．土壙

検出された土壙は大半が弥生時代後期のもので、貯蔵穴と考えられる袋状土壙や大型方形土壙のほか、舟形土壙と認識して調査した溝状土壙などがある。

土壙１（第38図）

Ａ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径80～87㎝、底面径99～105㎝、検出面からの深さ48㎝を測る。底面からほぼ完形に復元できた甕１点が出土している。

出土した甕は、底部は完全な平底で、胴部最大径は中央部よりやや上位にある。複合口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めている。

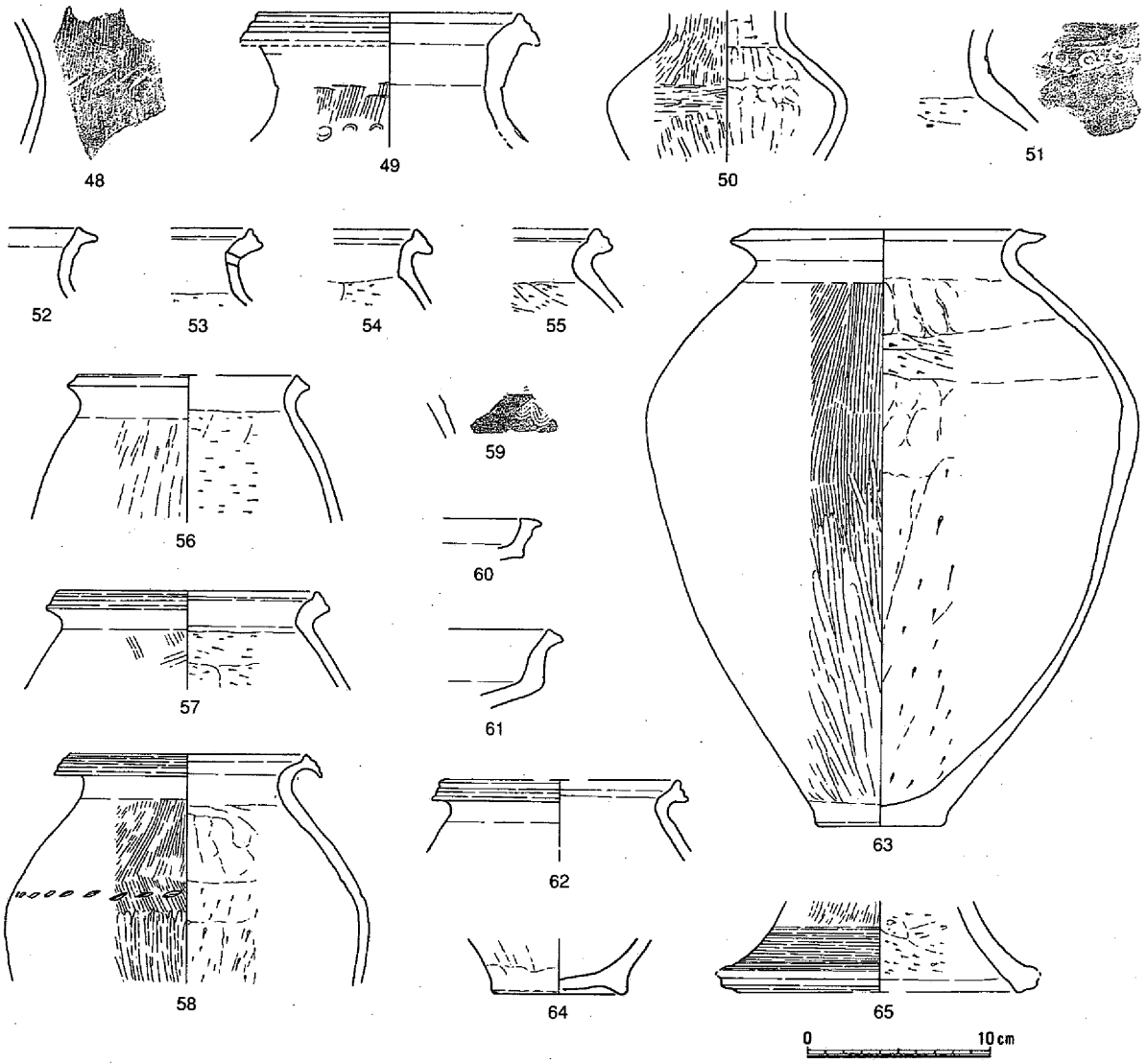
土壙の時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

土壙２（第39図）

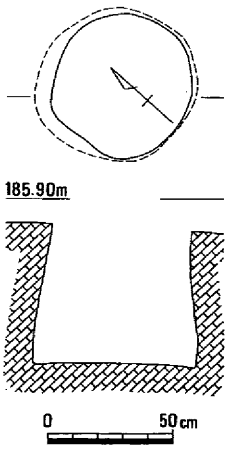
Ａ区で検出された大型の方形土壙で、検出面で99×126㎝、底面で86×113㎝、検出面からの深さ27㎝を測る。堆積土は下層は黒ボクで、上層は地山ブロックを含むことから、ある程度自然堆積した後に人為的に埋められた可能性がある。

出土土器は頸部下端に竹管文列を持つ長頸壺**43**、内面に磨きが残る甕**44**、外面に５条の凹線文を回らす高杯の口縁部**45**、脚部46が出土している。**45**と**46**は同一個体の短脚の高杯となる可能性が高い。

土壙の性格は貯蔵施設の下部構造、時期は出土土器から弥生時代後期初頭と考えられる。



第43図　土壙５の出土遺物



第44図　土壙６

土壙３（第40図）

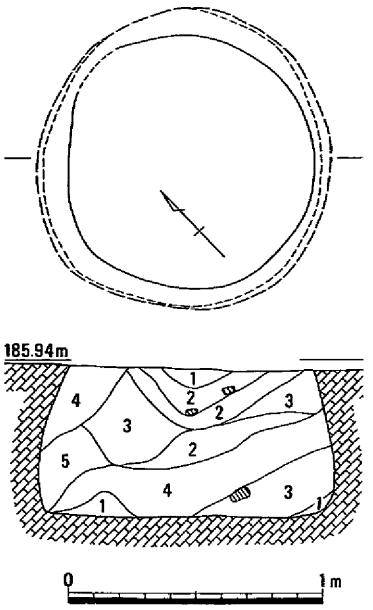
Ａ区で検出された平面長方形の土壙で、検出面で59×246㎝、底面59×190㎝、検出面からの深さ62㎝を測る。堆積土には地山黄色土が含まれ、レンズ状の黒ボク土の重複堆積が見られるのが特徴である。

性格は不明であるが、後述する溝４～６との関係が考慮される。遺物が出土していないが、時期は弥生時代後期と考えられる。

土壙４（第41図）

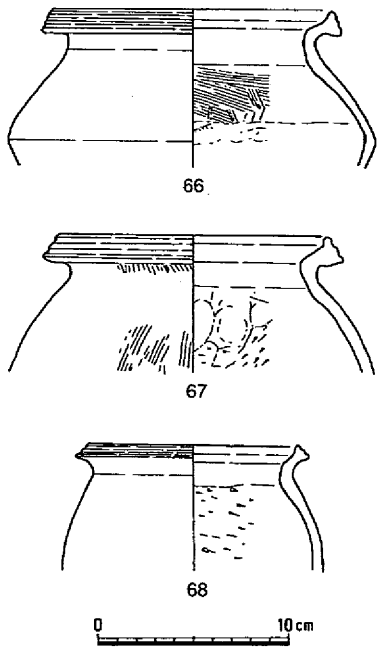
Ａ区で検出された平面長楕円形の袋状土壙で、検出面での径103～148㎝、底面径104～159㎝、検出面からの深さ38㎝を測る。断面形態はフラスコ状を呈しているが、上部の大半が削平されている。出土遺物は少量で、図化できたのは甕口縁部片**47**のみである。

土壙の性格は、形態から貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から弥生時代後期初頭と考えられる。



1　黒色土（黒ボク）（地山黄色ブロック少し含む）
2　地山ブロック土（黒ボク含む）
3　黒色土（地山微小ブロック多く含む）
4　黒色土（地山微小ブロック少し含む）
5　地山ブロックと黒色土の混土

第45図　土壙７と出土遺物



土壙５（第42・43図、図版８－２、図版９－１）

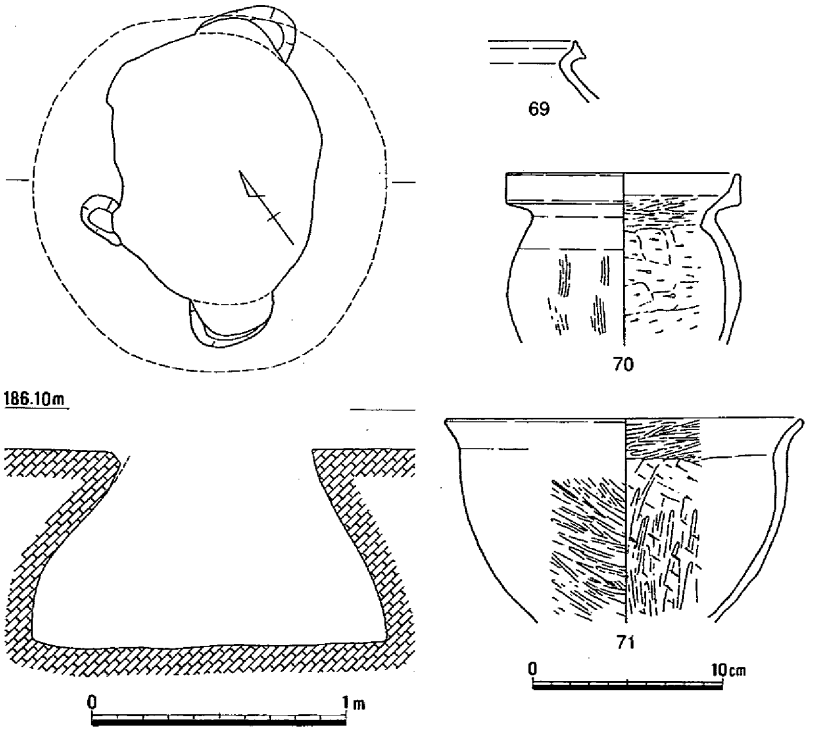
Ａ区で検出した平面長方形の大形土壙で、検出面で172×278cm、底面148×251cm、検出面からの深さ90cmを測る。堆積状況は地山微小ブロックを含むもので、人為的に埋められた可能性がある。出土遺物は比較的多く、上層で出土したほぼ完形の甕**63**が注意される。

性格は貯蔵穴の下部構造、時期は出土土器から弥生時代後期初頭と考えられる。

土壙６（第44図）

Ａ区で検出された平面円形の小形袋状土壙で、検出面での径54～57cm、底面径60～66cm、検出面からの深さ53cmを測る。

時期は遺物が出土していないため確定できないが、弥生時代後期のものと考えてよいだろう。



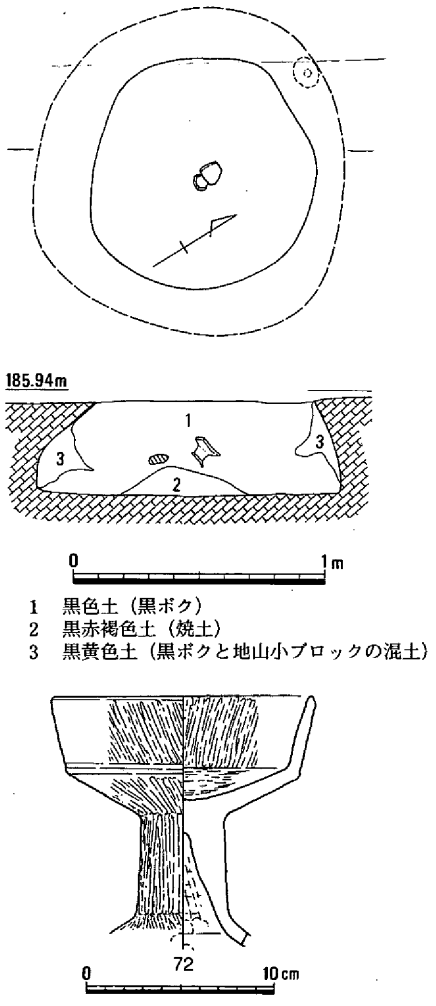
第46図　土壙８と出土遺物

土壙７（第45図）

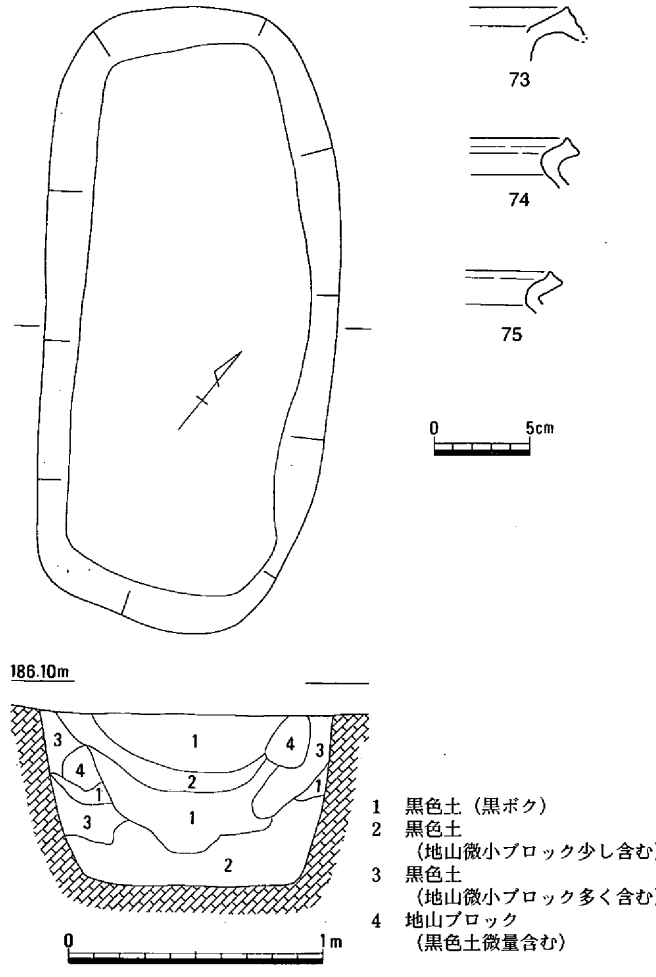
Ａ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径97～101cm、底面径109～115cm、検出面からの深さ59cmを測る。堆積土には地山ブロックを含み。人為的に埋められた可能性もある。

出土土器は甕で、いずれも口縁端部を上下に外傾拡張し、凹線文を巡らすものである。またこれらは、内面のケズリが頸部上端まで達せず、中期的様相を残しているのが特徴である。

性格は形態から貯蔵穴、時期は弥生時代後期初頭であろう。



第47図　土壙９と出土遺物



第48図　土壙10と出土遺物

土壙８（第46図）

Ａ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径75～106cm、底面径139～143cm、検出面からの深さ78cmを測り、比較的残りの良いものである。

性格は貯蔵穴、時期は出土土器がないため確定できないが、弥生時代後期のものと考えられる。

土壙９（第47図、図版６－１）

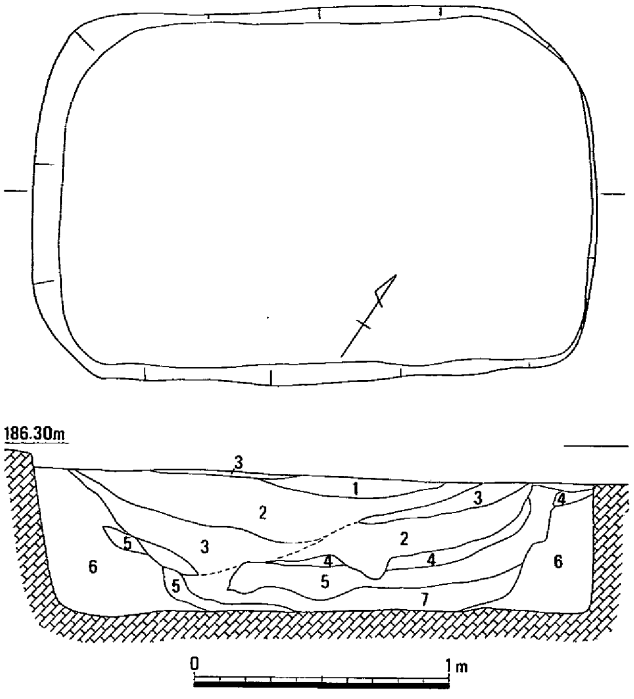
Ａ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径87～94cm、底面径122～131cm、検出面からの深さ38cmを測る。底面直上の中央部に焼土の２次堆積が認められるのが特徴である。

性格は貯蔵穴、時期は出土した高杯**72**の破片から、弥生時代後期前半と考えている。

土壙10（第48図）

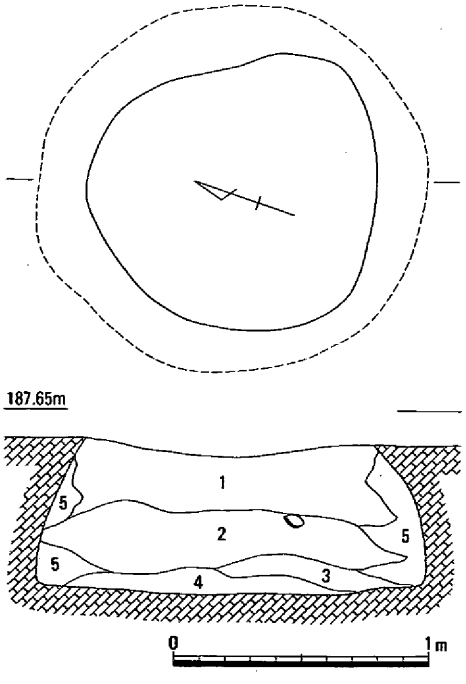
Ａ区で検出された平面長方形の土壙で、検出面で115×253cm、底面で90×222cm、検出面からの深さ69cmを測る。土層の堆積状況は地山ブロック土を含む層のあり方から、木棺墓となる可能性も検討したが、積極的に肯定はできなかった。出土遺物は土器小片のみで、口縁端部に凹線文をもつ壺**73**や甕**74・75**が見られる。

性格は、貯蔵穴の下部構造と考えたいが、保留。時期は土器から弥生時代後期初頭と考えられる。



1　黒色土（黒ボク）
2　黒色土（微小地山ブロック微量含む）
3　黒色土（微小地山ブロック少し含む）
4　地山ブロック土（黒色土多く含む）
5　地山ブロック土（黒色土少し含む）
6　黒黄色土（黒土と地山小ブロック混土）
7　黒黄色土（地山ブロック含む）

第49図　土壙11



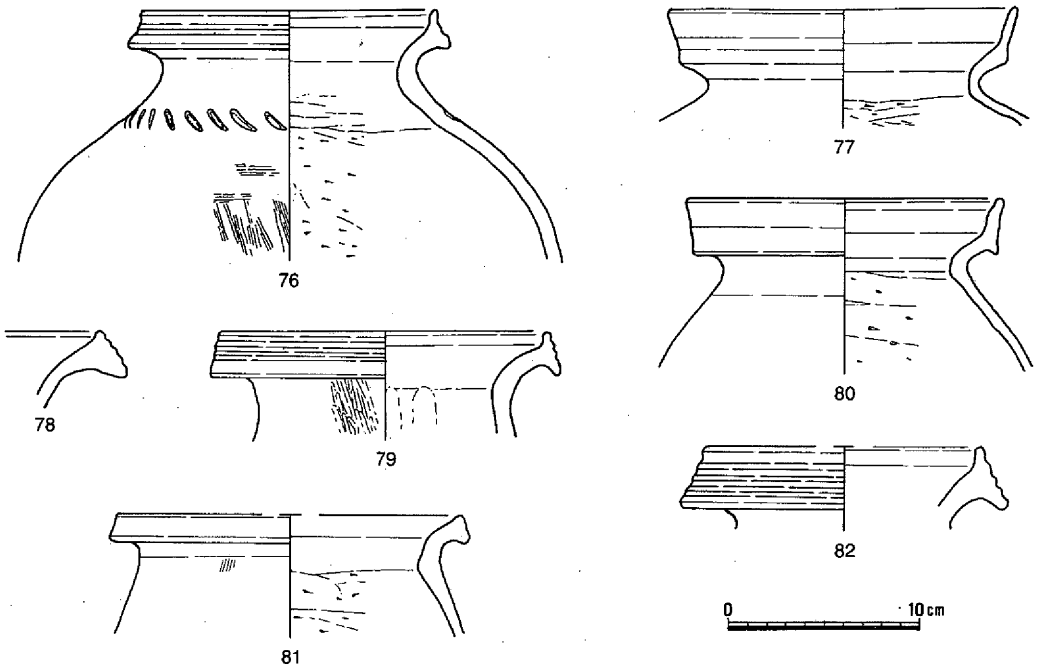
1　黒ボク（地山微小ブロック少し含む）
2　黒ボク（地山微小ブロック多く含む）
3　1と同じ
4　2と同じ（やや砂質）
5　地山ブロックと黒ボクの混土

第50図　土壙12

土壙11（第49図）

A区で検出された平面長方形の大型の土壙で、検出面で151×223㎝、底面で148×210㎝、検出面からの深さ58㎝を測る。堆積土層は最上層のみ純黒ボク層で、他は地山ブロック土の混入が見られる点が特徴である。特に黒ボクと地山土の混土である６層の直上に、黒ボクをほとんど含まない４・５層が堆積している状況は、自然堆積とは考えにくく、注目しておく必要があろう。解釈としては、①土壙廃棄に伴って人為的に埋め戻した、②土壙の上部及び周辺施設に地山土を使用した上部構造をもっていたものが崩壊、あるいは破壊された、③木棺墓などが考えられる。①とした場合、地表面の土ではなく純粋な地山土５層は何処から運んできたのかが問題となる。また、③とした場合、棺痕跡が不明瞭であり、墓壙の幅が広すぎることが問題となる。②の場合は、証明が困難な点が問題であるが、掘削土の処理方法を含めて考える場合に今後検討すべきことであり、他の袋状土壙等についても言えることである。

土壙の性格は、上述したようにまだまだ検討を要するが、半地下の貯蔵穴も視野に入れておきたい。時期は出土遺物がないため、断定できないが、周辺遺構や



第51図　土壙12の出土遺物

堆積土の堅さなどから弥生時代後期と考えている。

土壙12（第50・51図）

Ｂ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径106～115cm、底面径149～156cm、検出面からの深さ60cmを測る。堆積土の状況は、最下層に砂混じりの黒ボク土が存在し、その後は土壙内壁土の崩落と堆積を繰り返して徐々に埋まっていったように見受けられる。地山ブロック土の混入も認められ、前述した土壙11の考察と同様の視点で検討する必要がある。

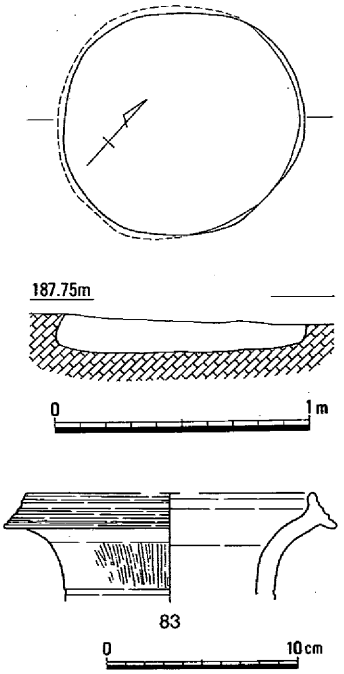
出土遺物は口縁部が上・下方に内傾拡張し、凹線文を回らす壺・甕のほか、口縁部が上方に外傾拡張し、凹線文を持たない**77・80**がある。

性格は貯蔵穴、時期は出土した土器群より、弥生時代後期中頃と考えておきたい。

土壙13（第52図）

Ｂ区で検出された平面円形の袋状土壙で、水田造成時の掘削により上部の大半が失われている。検出面での径92～95cm、底面径95～97cm、検出面からの深さ12cmを測る。出土遺物は、ほぼ底面に近い位置で出土した長頸壷の口縁部片で、頸部外面に凹線文、上下に内傾拡張する口縁端部に凹線文が巡る。

性格は貯蔵穴、時期は土器から弥生時代後期前半と考えられる。

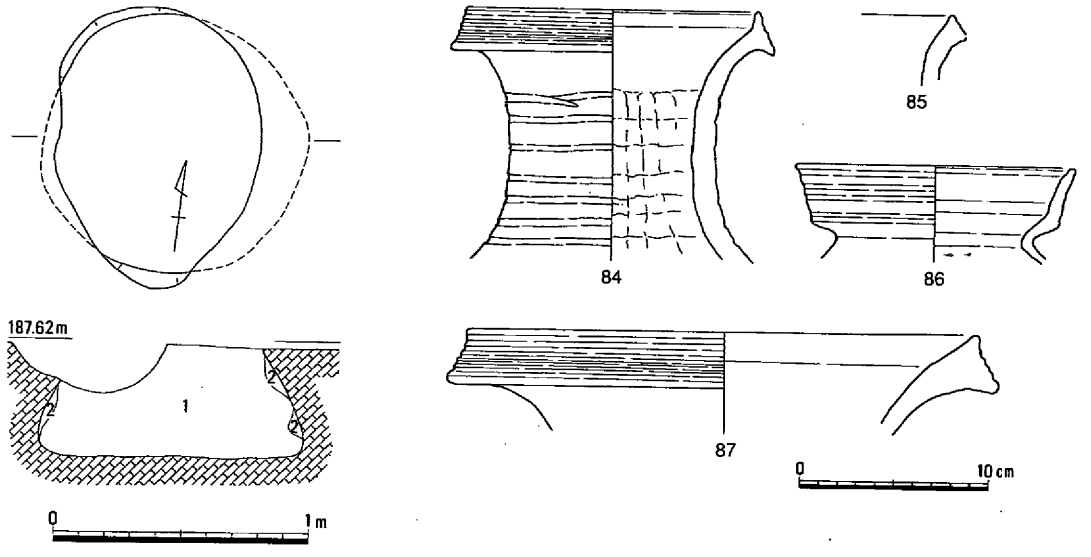


第52図　土壙13と出土遺物

土壙14（第53図）

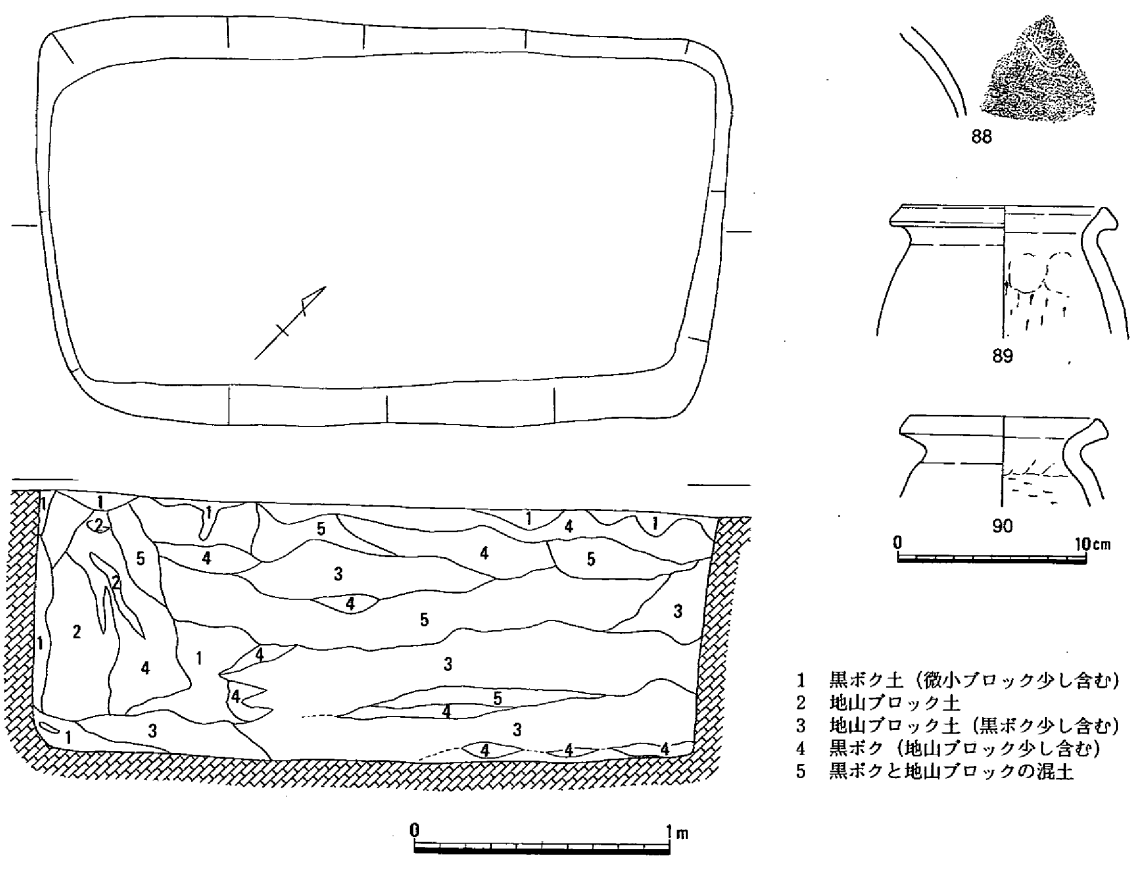
Ｂ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径81～114cm、底面径101～103cm、検出面からの深さ45cmを測る。堆積

土は地山微小ブロックを極わずかしか含まないもので、他とはやや異なる状況である。遺物は長頸壷**84・85**、大形壷**87**、甕等の土器片が出土している。**84**は頸部外面にヘラ状工具による沈線文を巡らし、内面は縦方向の凹圧痕を残し、口縁端部は上下に拡張内傾して４、５条の凹線文が巡る。



1　黒ボク（地山微小ブロック少し含む）
2　黒ボクと地山ブロックの混土

第53図　土壙14と出土遺物



1　黒ボク土（微小ブロック少し含む）
2　地山ブロック土
3　地山ブロック土（黒ボク少し含む）
4　黒ボク（地山ブロック少し含む）
5　黒ボクと地山ブロックの混土

第54図　土壙15と出土遺物

土壙の性格は、形態から貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器を層位的にとらえていないため断定しがたいが、弥生時代後期中頃には、完全に埋没したものと考えておきたい。

土壙15（第54図）

Ｂ区で検出された平面長方形の大形土壙で、検出面で160×275㎝、底面で134×263㎝、検出面からの深さ102㎝を測る。堆積土層は土壙11のそれと同様、地山ブロック土が大半を占め、特に南壁に平行して純地山土の垂直に近い堆積状況が注意される。

遺物は少量の土器片のみで、図化できたのは３点である。**88**は壷の肩部片と考えられ、外面に波状文の一部が残る。**89・90**は甕小片で、口縁端部は上下にやや拡張内傾し、外面は浅い凹線状に面となっている。いずれも体部内面のヘラケズリが頸部上端まで達しておらず、**89**は縦方向のケズリのみである。

土壙の性格は土壙11と同様の半地下の貯蔵穴の可能性も考えておきたい。時期は出土土器から弥生時代後期初頭としてよいであろう。

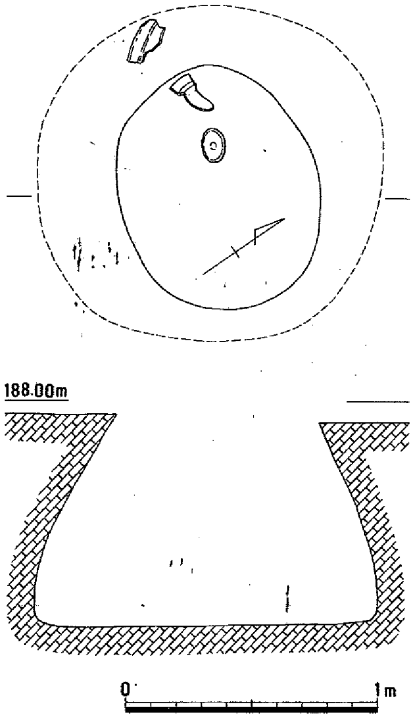
土壙16（第55図、図版９－２）

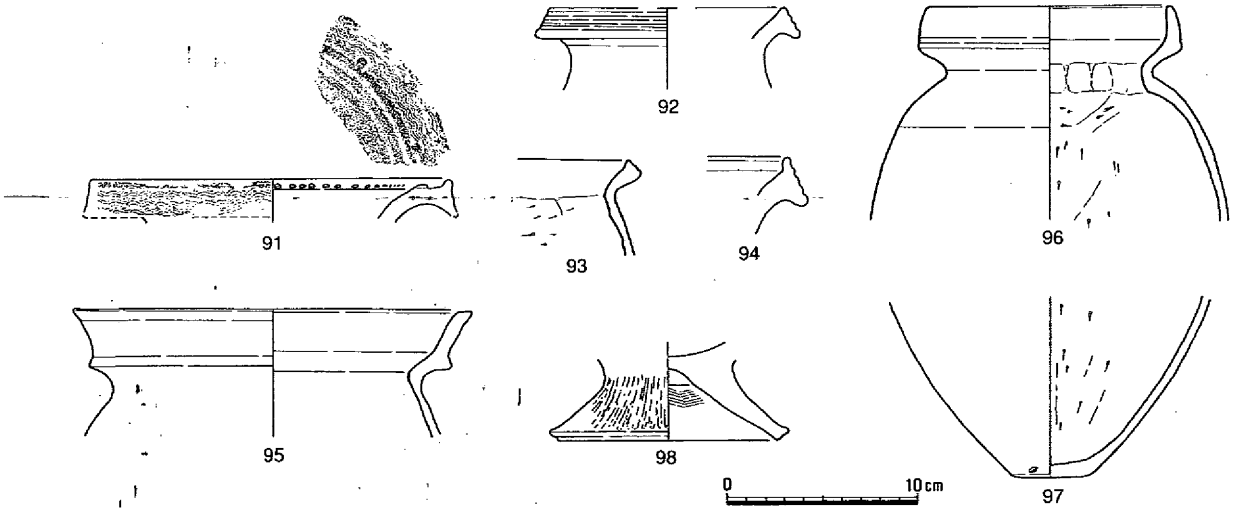
Ｂ区で検出された平面円形の袋状土壙で、検出面での径79～99㎝、底面径138～144㎝、検出面からの深さ82㎝を測る。堆積土は黒ボク土のみで、自然堆積と考えられる。遺物はまとまった量の土器で、**95～97**は新相をもっているが、他は全て後期初頭で、**91**の装飾壺は中期末の可能性も残る。

土壙の性格は、形態から貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から、後期中頃に完全に埋没したものと考えておきたい。

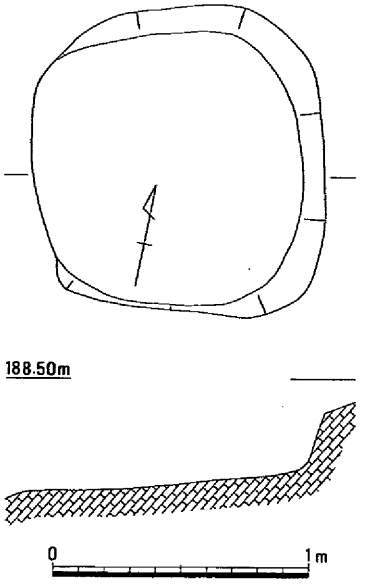
土壙17（第56図）

Ｃ区で検出された平面隅丸方形の土壙で、検出面で114×125㎝、底面106×110㎝、検出面からの深さ24㎝を測る。黒

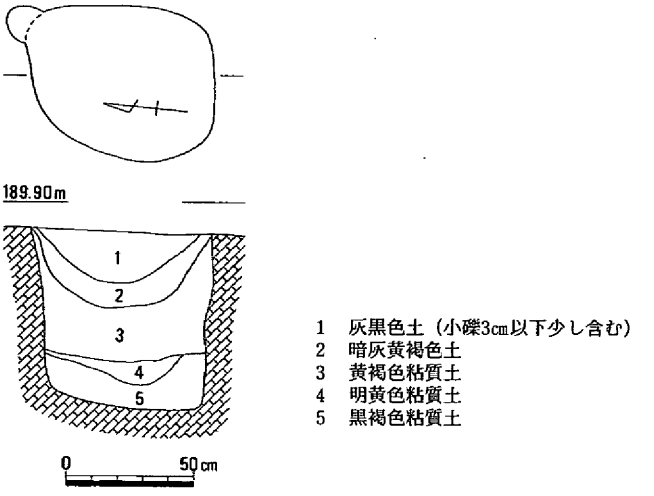




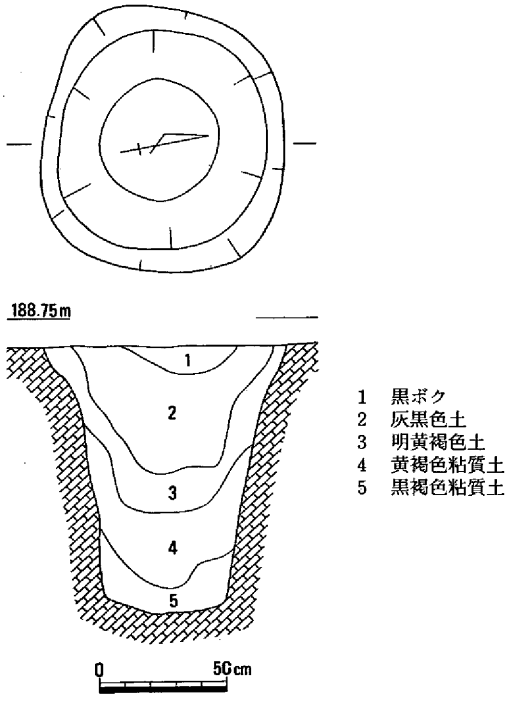
第55図　土壙16と出土遺物



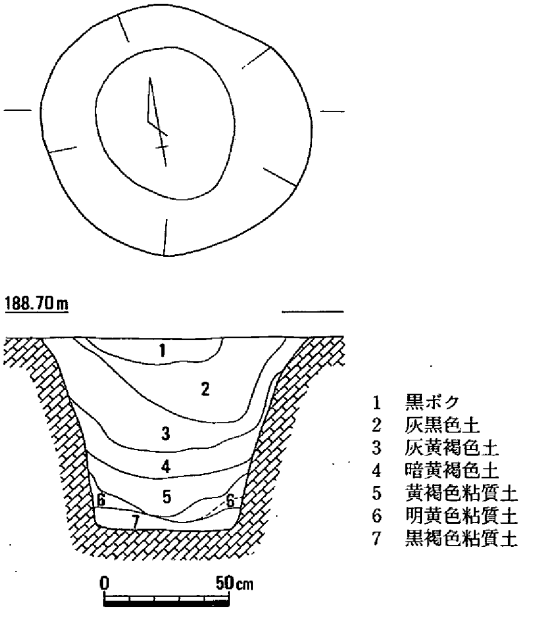
第56図　土壙17



第57図　土壙18



第58図　土壙19



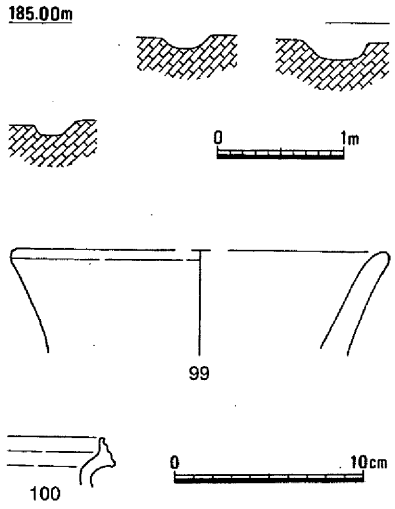
第59図　土壙20

ボク堆積土中には炭化物、焼土塊が多く含まれている。

出土遺物がないため時期は不明であるが、他例から古墳時代以降のものと考えられ、性格は小型製炭窯と推定している。

土壙18（第57図）

D区で検出された平面不整円形の土壙で、検出面で63×73cm、底面で60cm、検出面からの深さ70cmを測る。上部を弥生時代後期の竪穴住居によって削平されているため上部構造は不明であるが、残



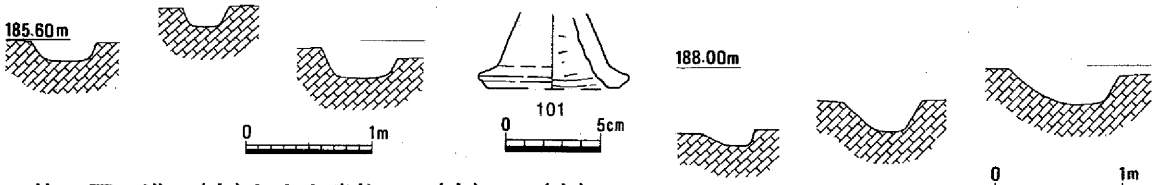
第60図　溝１と出土遺物

存した部分の壁面はほぼ垂直となっている。底面は平坦で、杭等の痕跡は検出できなかった。堆積土の状況は、最下層に黒褐色土層、その上に黄褐色土層が約40cm、さらに灰黒色土の順で堆積しており、土壙19・20と共通している。

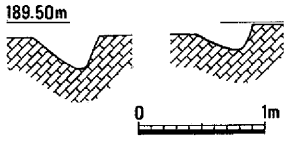
性格は、土壙19・20と同様の落とし穴と考えられる。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、黒ボク層の堆積が見られないため、縄文時代早期以前と考えられる。

土壙19（第58図）

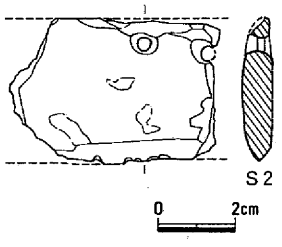
D区で検出された平面楕円形の土壙で、検出面で95×107cm、底面で45×47cm、検出面からの深さ106cmを測る。断面形態は上部付近が開き、以下壁面はほぼ垂直に近い。底面はほぼ平坦で、杭等の痕跡は検出できなかった。堆積土の状況は、土壙20



第61図　溝４（左）と出土遺物・５（中）・６（右）



第62図　溝８



第63図　溝７と出土遺物

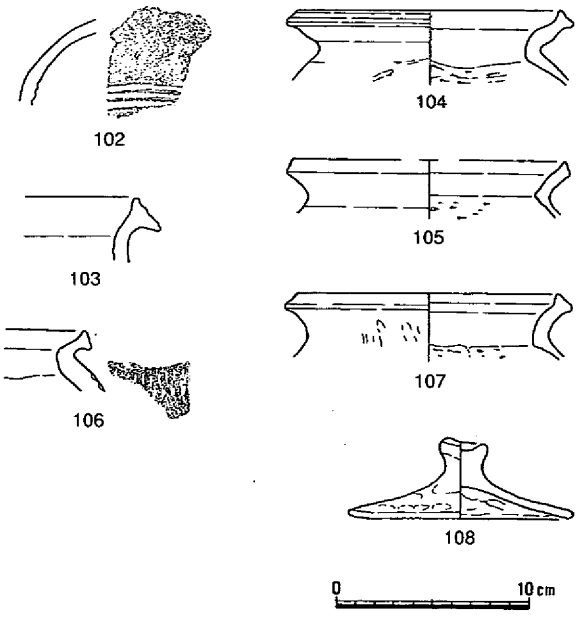
と共通し、最下層に黒褐色土層、その上に黄褐色土層が約45cm、さらに灰黒色土、黒ボクの順で堆積している。

性格は、形態から落とし穴と考えられる。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、黒ボク層の堆積がほぼ完全に埋没した後の最終段階にしか見られないため、縄文時代早期以前と考えられる。

土壙20（第59図、図版６－２）

D区で検出された平面不整円形の土壙で、検出面で101×107cm、底面で54×62cm、検出面からの深さ76cmを測る。断面形態は土壙19と同様で、上部付近が開き、以下壁面はほぼ垂直に近いが、土壙19に比して浅い。底面は平坦で、杭等の痕跡は検出できなかった。堆積土の状況は、最下層に黒褐色土層、その上に黄褐色土層が約40cm、さらに灰黒色土、黒ボクの順で堆積している。

性格は、形態から落とし穴と考えられる。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、黒ボク層の堆積がほぼ完全に埋没した後の最終段階にしか見られないため、縄文時代早期以前と考えられる。また、土壙掘削当初は黒ボク形成以前と判断できることから、狩猟環境は黒ボク形成時とは



第64図　A地区出土遺物

異なっていたものと考えている。このことは調査区内に点在する風倒木の存在や、黒ボクが森林地帯に形成されないと考えられていることとも矛盾しない。

6．溝

溝１（第15・60図）

A区で検出された南東～北西方向に蛇行かつ上昇しながら走る溝で、検出面での幅約30～50㎝、検出総延長約20ｍを測る。断面は底面をもつ緩いU字形を呈している。堆積土は黒ボクで、比較的軟らかい。

性格は道路と考えており、溝７に続く可能性が高い。出土遺物は須恵器甕口縁部片**99**、弥生土器甕口縁部片**100**など、ごくわずかであり、時期判定は困難であるが、溝４を切っていることや、堆積土の状況から古代以降のものと考えている。

溝２・３（第15図）

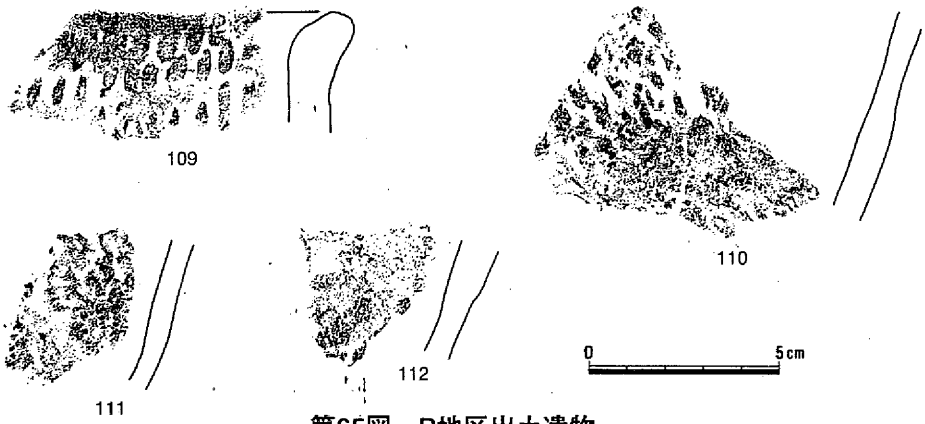
A区で検出された直行する溝で、方向・規模・形態、黒ボク堆積土の状況から、旧水田、あるいは畑地耕作に伴うものと考えられる。時期は聞き取りから戦後の開発時以降のものと思われる。

溝４・５・６（第15・61図）

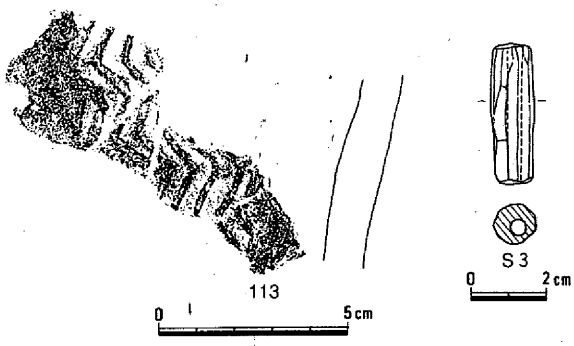
A区中央部で検出された南西～北東方向に長軸をもつ遺構群で、土壙と認識すべきかもしれないが、ここでは溝として扱った。なお、土壙３として前述した遺構もこれらと関係する可能性がある。溝４は溝１により切られており、検出面で残存長330㎝、幅45～54㎝、底面で残存長310㎝、幅36㎝を測り、底面の標高は185.4ｍである。溝５は検出面で長さ435㎝、幅29～55㎝、底面で長さ413㎝、幅12～38㎝を測り、底面の標高は185.6ｍである。溝６は切り合い関係は不明であるが、土壙２と重複しており、検出面で残存長293㎝、幅49～59㎝、底面で長さ290㎝、幅34～44㎝を測り、底面の標高は185.3ｍである。また、土壙２の南側に重複する土壙状の落ち込みがこの溝の一部となる可能性もあり、そうだとすれば長さは検出面で520㎝を測ることになる。これらの溝の特徴は調査時に「舟形土壙」と呼称していたように、短辺側の床面が緩やかに上昇する傾向が認められる点である。

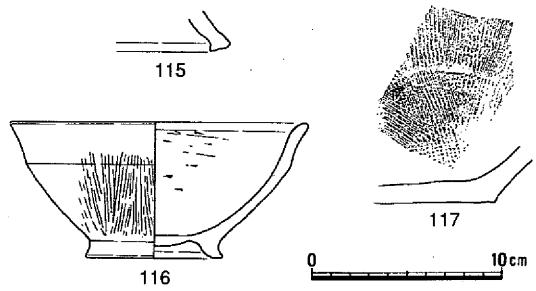
遺物は溝５から高杯脚部片**101**が出土したのみである。脚部端が凹面となり脚柱内面は横方向のヘラケズリがみられる。

これらの溝（土壙）の性格を判断することは困難であるが、配置関係からは溝４と溝６がセットになる可能性があること、重複する遺構に長軸がほぼ同方向の建物１、建物２があることなどが読みとれ、建物に付随する遺構、あるいは布掘建物の可能性も検討すべきと考えている。時期は明確とは言えないが弥生時代後期でも初頭の可能性が高いものと考えられる。

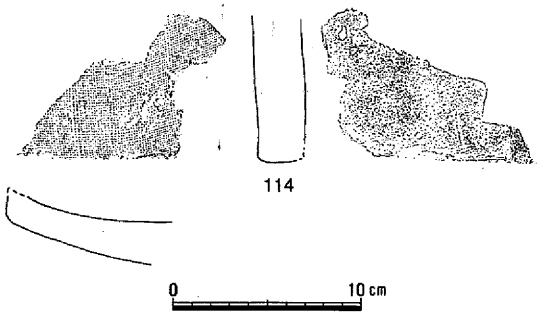


第65図　B地区出土遺物





第67図　D地区出土遺物



第66図　C地区出土遺物

溝７（第15・63図、図版９－３）

Ｂ区東側で検出された南東～北西方向に蛇行かつ上昇しながら走る溝で、検出面での幅30～60㎝、検出総延長約19ｍを測る。断面はＵ字形を呈し、堆積土は黒ボクである。

遺物は石包丁の破片が出土したのみである。石包丁は幅38.5㎝残存長54㎝を測り、両刃の刃部と反対側に小孔が２ヶ所あり、断面形態から両面から穿孔していることが分かる。

前述したように、溝１に続く可能性が高い古代以降の道跡と考えている。

溝８（第16・62図）

Ｂ区東側で検出された南東～北西方向に蛇行かつ上昇しながら走る溝で、検出面での幅35～60㎝、検出総延長約９ｍを測る。断面はＵ字形を呈し、堆積土は黒ボクである。

形態から自然流路と考えられる。時期は不明である。

７．包含層・その他の遺物

以下では、建物として抽出できなかった柱穴出土遺物と、遺構検出までに見つかった黒ボク土やその下層の黒色漸移層の出土遺物について記述する。

Ａ区出土遺物（第64図）

Ａ区は、後世の削平部分が少なく、比較的多くの遺物が出土している。出土遺物の大半は弥生土器である。**102**は、頸部外面に３条の凹線文を巡らしており、弥生時代中期末頃と考えられるが、他は全て、調査区内で検出された遺構の時期である後期のものである。

Ｂ区出土遺物（第65図）

Ｂ区は、後世の削平が著しいため、遺構に伴わない遺物の大半は、調査区南半の黒ボク漸移層の落ち込み内にくい込んだ状態で出土した縄文土器がほとんどである。これらは、小片ばかりであるが早期の押型文土器の特徴を持つものばかりであり、Ｂ区検出の建物１のピット内から出土したものとの関係が注意されよう。

Ｃ区出土遺物（第66図）

Ｃ区は、遺構が希薄であり、出土遺物もわずかである。**113**はＣ区西側斜面から出土した縄文土器で、連続山形文をもち、早期のものと考えられる。Ｓ３は掘立柱建物跡８に伴う加工段の東側から出土した管玉で、建物跡に関連する可能性もある。時期は形態から古代以降のものと考えられる。**114**は確認調査時に、Ｃ区の中央東寄り付近で出土した古代の瓦片である。Ｂ区との間の削平部分は、本来台地頂部となっていたと推定されることから、瓦片の出土は気になる点である。

Ｄ区出土遺物（第67図）

Ｄ区は、古代と推定される建物跡が検出されているが、遺物も古代以降の遺物がほとんどである。

第3節　まとめ

1．弥生時代の集落について

調査で検出された弥生集落は、概ね弥生時代後期初頭から後期後半のものである。しかし、出土土器には、中期末の特徴をもつものも散見し、これを確実に中期末としてよいものか、後期初頭に残存するものなのかは、今後の課題である。また、後期を5区分（県南の上東編年でいう鬼川市1式～才ノ町2式）した場合の、第2期と第5期の土器がほとんどないように見受けられ、集落の移動状況を反映している可能性もあり、検討課題である。

近年、県北でも後期の集落と墳墓群の調査例が増加しており、これらの構造と変遷を分析したうえで、本遺跡の動態も位置づけが可能となるはずである。注意しておきたいのは、竪穴住居や掘立柱建物、多種の土壙の構成比率や配置関係の分析など、いわゆる集落構造として検討すべき視点と、個別遺構の形態分類やその分布状況の把握など、いわば遺構製作技術とその伝播にかかわる部分として検討すべき視点が必要であろう。集落研究の大きな目的のひとつである集団関係の解明は、この二つの視点から浮かび上がる像を明らかにすることであり、遺物についても同様の視点が必要であろう。

今回調査した立石遺跡は、中国山地を超えた山陰からの影響も受けているはずであり、後期後半の山陰系土器群の出土は、そのことをよく物語っている。では、遺構である建物や土壙などはどれだけの影響を受けてるのだろうか。例えば、竪穴住居については、今回の調査では見つかっていないが、中央穴から外部へ配される溝（中央灰穴炉への外気送風管と考えられる暗渠状のトンネル）が付設するタイプが山陰沿岸部～中国山地内陸部で散見される、その出現と伝播については、未だ解明されていない。また、袋状土壙や方形大型土壙も、調査範囲の制約があるにしても、立石遺跡のように比較的集中する例は、一般的とは言えないように思われる。今回は、分析のための作業を行っていないため、ひじょうに感覚的な問題としてしかあげられないが、今後の大きな課題としたい。

2．縄文時代の大型建物跡について

B区で検出した全長16.6m、幅3.4mの掘立柱建物7は、本文中で詳細に記述したように、縄文時代早期～草創期まで遡る大形掘立柱建物跡として扱ったが、同様な遺構例は、管見であるが、全国的にも見られないようである。しかし、規模の面においては、東日本でかなり普遍的に発見されつつある、長大な特殊竪穴住居に匹敵するものであり、何らかの関連性があるかもしれない。しかし、この特殊住居にしても草創期までは遡る類例はないようであり、竪穴構造をもたないことと併せて、注意したい点である。

本建物遺構の抱える問題は、極めて重要と考えるが、問題が問題だけにより慎重に扱わざるを得ない。国内のみならず、国外の類例とも比較検討すべきであろう。以下、本文中の内容と重なるが、もう一度事実関係を整理、確認しておきたい。

Ａ立　　地	台地上丘陵の頂部（ほぼ平坦地）
Ｂ主　　軸	南北方向（等高線に斜交）
Ｃ柱穴配置	梁行２間×桁行10間の総柱状、側柱は一部無し、あるいは削平消失。
Ｄ規　　模	3.4ｍ×16.6ｍ
Ｅ柱　　穴	掘り方径20㎝前後、棟柱柱穴の深さ40～70㎝、側柱柱穴の深さ20㎝前後、断面形態は、垂直で底面は丸みを帯びる。底面レベルは南に向かって徐々に下がる。
Ｆ柱穴内堆積土	やや赤みを帯びた暗灰色を呈し、地山の灰黄色土ブロックを少量含む。（外側列の柱穴の一部は、赤みを帯びない）
Ｇ出土遺物	柱穴Ｐ12より表面剥離した土器細片１点及び少量の炭化物のみ。 ※肉眼観察では、押型文土器のそれとは異なる胎土と色調。
Ｈ前後関係	柱穴が弥生時代中期末の竪穴住居の柱穴に切られている。
Ｉ建物１	縄文時代早期の押型文土器を出土した建物１の柱穴内堆積土は、本建物とは異なる黒ボク層下位の黒色漸移層に近いものである。
Ｊ落とし穴	土壙18～20は、基本的に堆積土の状況が同一で、同時期に機能していた落とし穴と考えられる。黒ボク土は最上層のみ堆積していることから、黒ボク形成時以前に掘削、機能していると考えられる。
Ｋ風倒木	図示していないが、調査区内で数カ所の風倒木の痕跡が検出されている。樹木転倒時の表土は黒ボクではなく、黒色漸移層に近いものである。

以上のことを踏まえ、次のことを再確認しておきたい。

本大形建物は、黒ボク形成期以前、つまり、この一帯が草原となる前（森林地帯であった時期）に存在していたと考えられ、時期的には縄文草創期～早期と考えざるを得ない。

建物の構造は、棟柱を構成する柱穴が全体に深く、側柱は存在しない部分（入口となる可能性）があった可能性がある。

柱穴は、その直径に対して現地表面からの深さが深過ぎるため、後に黒ボクと化した表土（火山灰の可能性が高い）が堆積する以前に掘込まれた可能性もある。

以上簡単ではあるが、調査時に気付いた点をまとめてみた。しかし、土壌の成因については、特に火山灰分析等を行っていないので、あくまでも調査時の所見であり、できれば将来的に科学分析等によって明らかにすることが望まれる。

最後に、この短期間の調査で、津山市教育委員会の方々より多大なご指導をいただいたことを記しておきたい。特に大形建物については、実際の遺構を見ていただいた数少ない「証人」でもあり、当時既にその重要性を指摘していただいたにもかかわらず、十余年後にこのようなまとめ方しかできなかったことをお詫びしておきたい。

（椿）

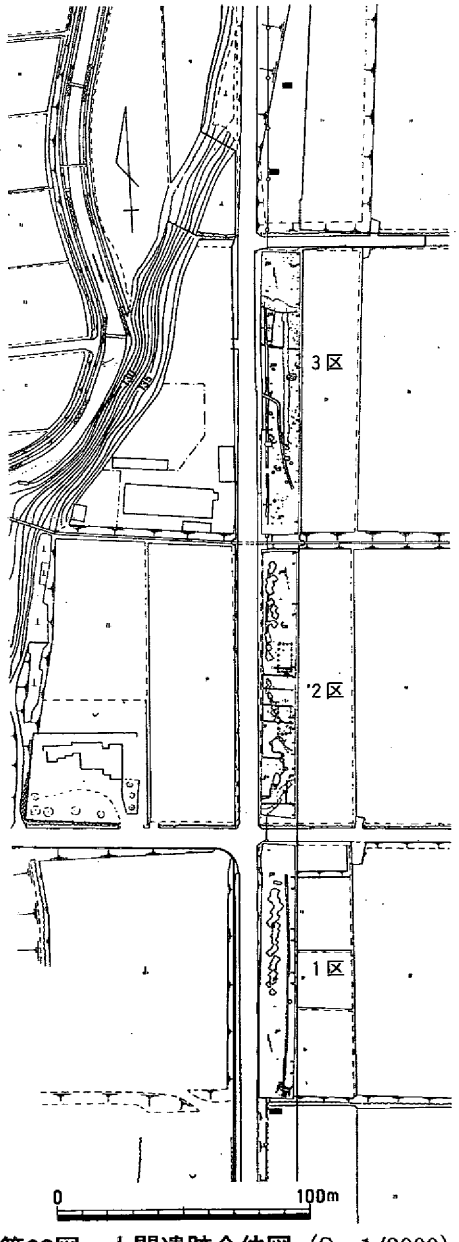
第５章　大開遺跡

第１節　調査区の概要

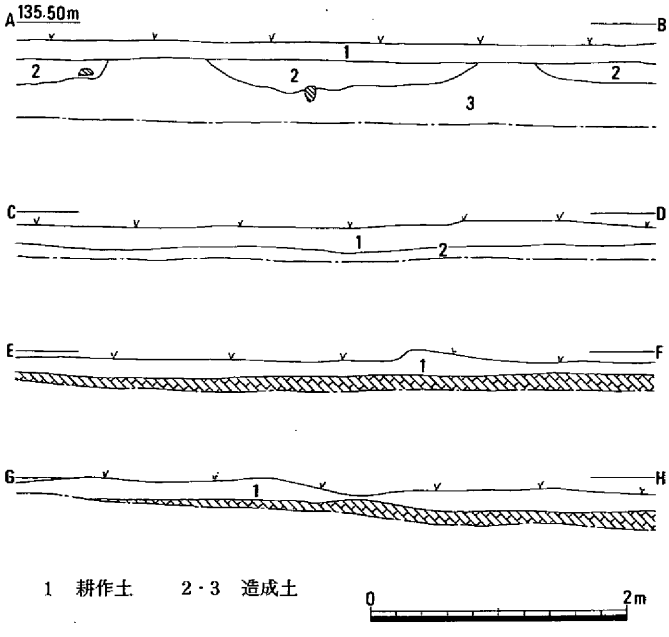
大開遺跡は鏡野町布原に位置する。調査区周辺は香々美川東岸の河岸段丘上に位置する。この河岸段丘は東西約0.7㎞、南北約1.3㎞におよぶもので、ここで報告する大開遺跡はその一番北側の頂部に位置する。この付近では、かつて工場敷地造成工事中に、柱穴が検出され、弥生土器が出土している。（註１）。また、近年では鏡野町教育委員会により大開遺跡１区の西隣の敷地で発掘調査が行われた。その結果、大開遺跡は弥生・古墳時代を中心とし、奈良時代にかけて営まれた集落跡であることが判明している。このように、当該地付近では弥生・古墳時代を中心とする集落の存在がしられていた（註２）。

このような状況下において、国道179号線バイパスの建設計画がもち上がり、その建設予定地がこの大開遺跡の遺跡範囲内に含まれると判断されたため、確認調査を行うことになった（第３章参照）。その結果、ピット、溝等の遺構および弥生土器等の遺物が検出されたため、平成７年度から全面発掘調査を実施することになった。

今回調査を行った大開遺跡の調査区域内は1970年代前半に県営圃場整備事業が実施されていたことに加え、調査前

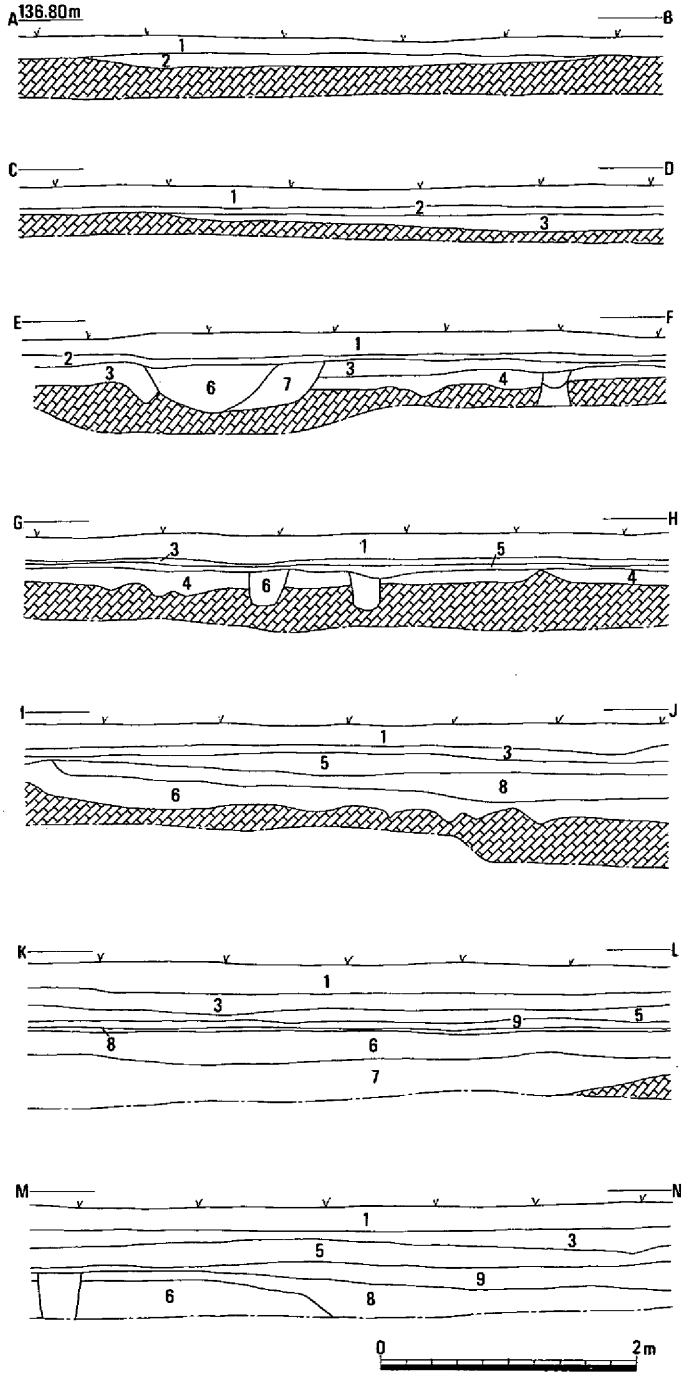


第68図　大開遺跡全体図（S＝1/3000）



第69図　１区東壁の土層断面（S＝1/60）

に、東側の調査区境に畦を設置する際、業者が畦に必要な土を調査区内より採取したため、遺構の一部が破壊されてしまった。このため、調査区内の遺構の残存状況は全体的に良くなかった。全面発掘調査は平成７年４月より調査を開始し、同年７月までの約４ヶ月間にかけて行われた。調査区は便宜上三分し、南から１区、２区、３区と呼称する。調査中には降雨による調査区の冠水等もあったが、ほぼ予定通りに終了した。調査の経過および概要は以下のとおりである。



1　耕作土　　2　灰褐色砂質土（小礫含む）
3　褐色粘性砂質土　　4　暗黄褐色粘性砂質土
5　暗灰色砂質土　　6　黒褐色粘質土
7　暗赤褐色粘質土　　8　暗赤褐色粘質土
9　にぶい赤褐色粘性砂質土（鉄分やや多く含む）

第70図　２区東壁の土層断面（S＝1/60）

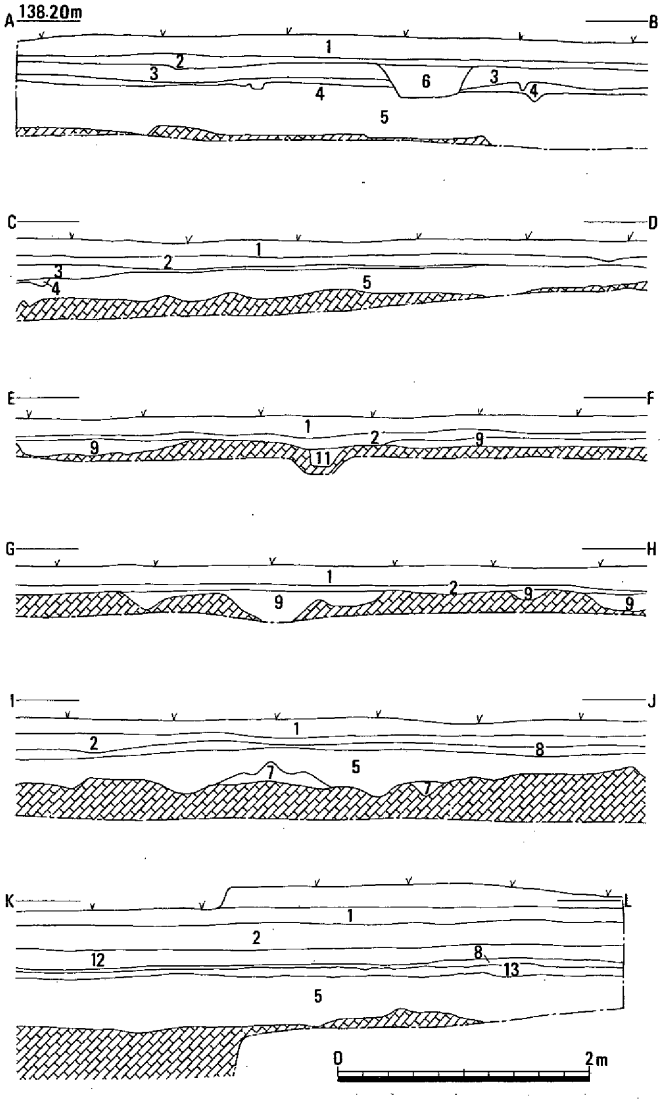
調査の経過

４月17日（月）３区北半部調査開始
５月19日（金）２区南半部調査開始
６月１日（金）３区北半部調査終了
６月５日（月）１区北半部調査開始
６月７日（水）１区北半部調査終了
６月12日（月）掘立柱建物１写真撮影
６月15日（木）１区南半部調査開始
　　３区南半部調査開始
６月20日（火）２区南半部調査終了
６月26日（月）３区南半部調査終了
６月27日（火）２区北半部調査開始
７月11日（火）竪穴住居１写真撮影
７月13日（木）対策委員会
７月14日（金）掘立柱建物２写真撮影
７月18日（火）２区北半部調査終了
７月19日（水）１区南半部調査終了

調査の概要

今回のバイパス建設に伴う大開遺跡の発掘調査面積は4,809㎡である。以下、各調査区の概要を述べる。

１区は圃場整備による削平を著しく受けており、特に北半部では遺構は全く検出されなかった。１区の地山は浅黄橙色粘質土であるが、これは南に向かって緩やかに下がっており、旧地形をわずかに反映しているものと思われる。１区の南端では竪穴住居を１軒検出した。残存状況は良くなかったが、この付近の地形が北半部に比べて低かったため、かろうじ



1　耕作土
2　造成土
3　暗褐灰色粘質土
　（赤色、橙色土粒若干含む）
4　暗茶色粘質土
　（地山ブロック、橙色土粒少し含む）
5　黒色粘質土（礫を少量含む）
6　暗茶褐色粘性砂質土
　（地山ブロック、礫、炭を含む）
7　暗茶褐色礫混じり土（礫を多量に含む）
8　黒褐色粘質土
9　暗黄褐色粘質土
11　暗灰色粘質土
12　黒褐色粘質土
13　暗茶色粘質土

第71図　３区東壁の土層断面（S=1/60）

て削平を免れたものと思われる。この調査区の西隣では鏡野町教育委員会により発掘調査が行われており、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が明らかになっている。このことから、大開遺跡ではこの付近にひとつの集落のまとまりがあったことが推定できる。

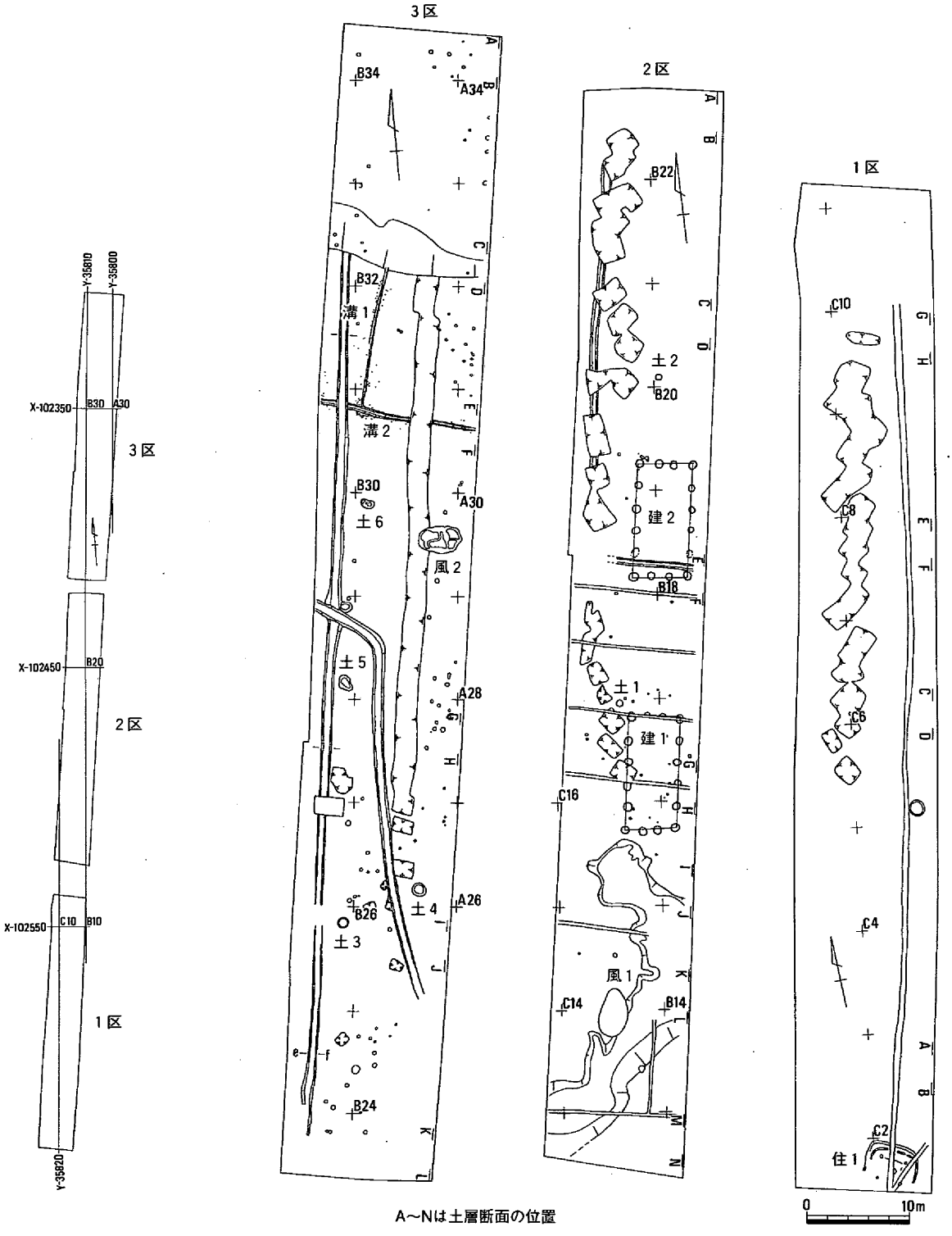
２区も１区と同様、圃場整備による削平を受けており、遺構の残存状況は良いとはいえない。２区の地形はもともと南に向かって下がる緩斜面であったものが圃場整備時にこの斜面の一部を削り取ったものと考えられる。そのため、遺構の残存状況は北半部で特に良くなかった。しかし、南半部では掘削が深いところまで及んでおらず、遺構の破壊が最小限に抑えられていた。２区では掘立柱建物２棟等が検出された。この掘立柱建物は２棟ともほぼ同一規格であり、また、主軸がほぼ南北に向いていることから、同時期のものである可能性が高く、古代を中心とする建物であると推定できる。

３区は大開遺跡の頂部に位置する。３区の北端では地山が北に向かって傾斜しはじめる。地山上には黒ボク層（黒褐色土）が厚く堆積している。黒ボク層中で弥生土器を検出したが、遺構の確認はできなかった。地山上でピットや柱穴らしきものが多数みられたが、住居や建物は検出できなかった。また、３区では圃場整備以前の田地の区画溝も検出された。

このように、大開遺跡では調査区全般にわたり圃場整備による削平が及んでおり、特に１区・２区の北半部については遺構の存在が確認できないほどの削平を被っていた。反面、削平を免れた南半部を中心に竪穴住居跡や掘立柱建物が確認され、古代以前の集落の一端が明らかになった。

註　1　岡山県教育委員会　『岡山県遺跡地図（第５分冊）』1978年

　　2　立石盛詞「大開遺跡」『鏡野町史』考古資料編　2000年



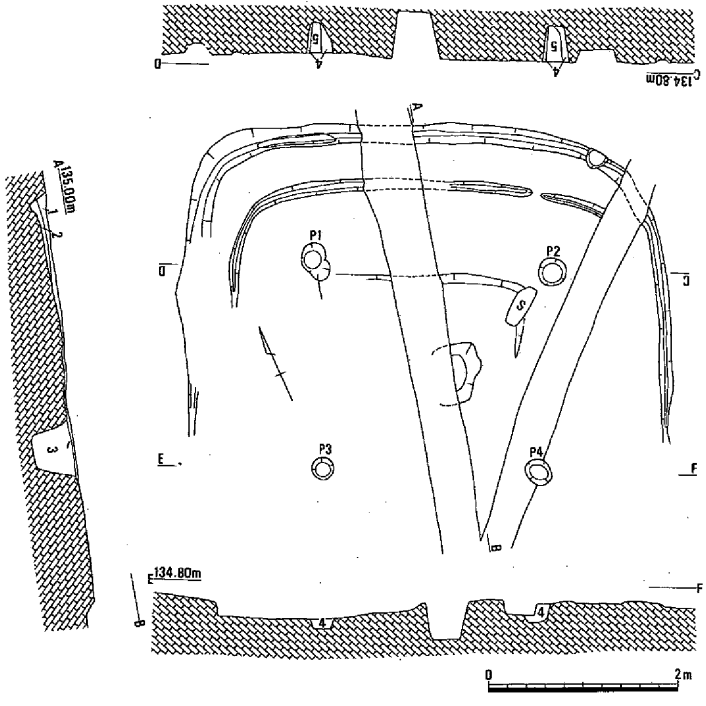
第72図　大開遺跡の遺構全体図（S=1/600）

第２節　遺構と遺物

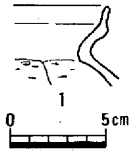
１．竪穴住居

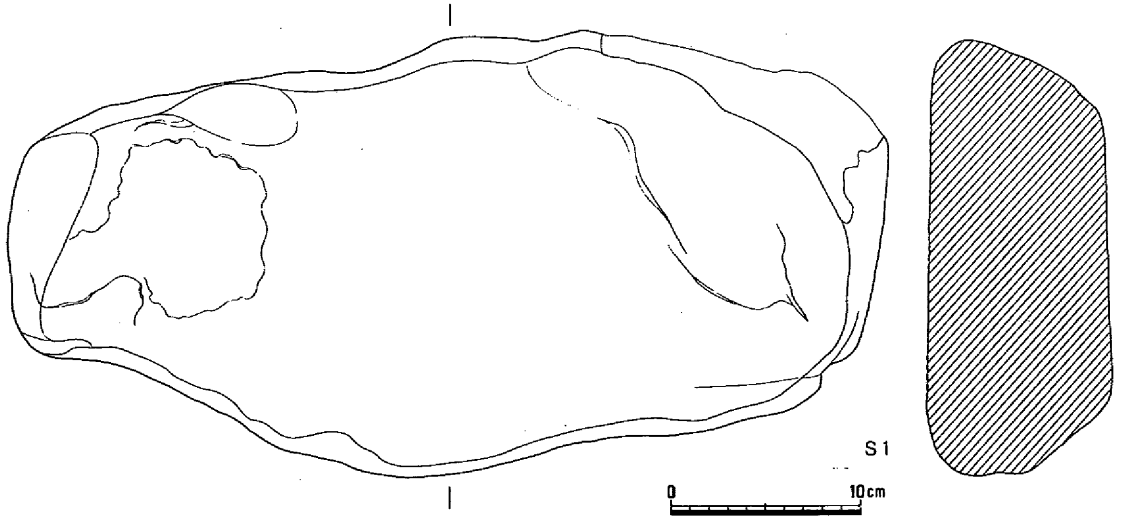
竪穴住居１（第73図、図版10－３）

大開遺跡１区の南端に位置する。竪穴住居上面には重機のキャタピラーの痕跡が明瞭にみられ、この住居跡が圃場整備による削平を著しく受けていることがわかる。そのため、竪穴住居の残存状況は悪く、わずかに10cmほどの埋土を残すのみであった。南半部は削平されており、住居跡の約１/３は消滅していた。竪穴住居の平面形は隅丸方形である。内側と外側に２条の壁体溝が巡らされており、外側の壁体溝で一辺約4.5ｍ、内側のもので一辺約４ｍを測る。このように二



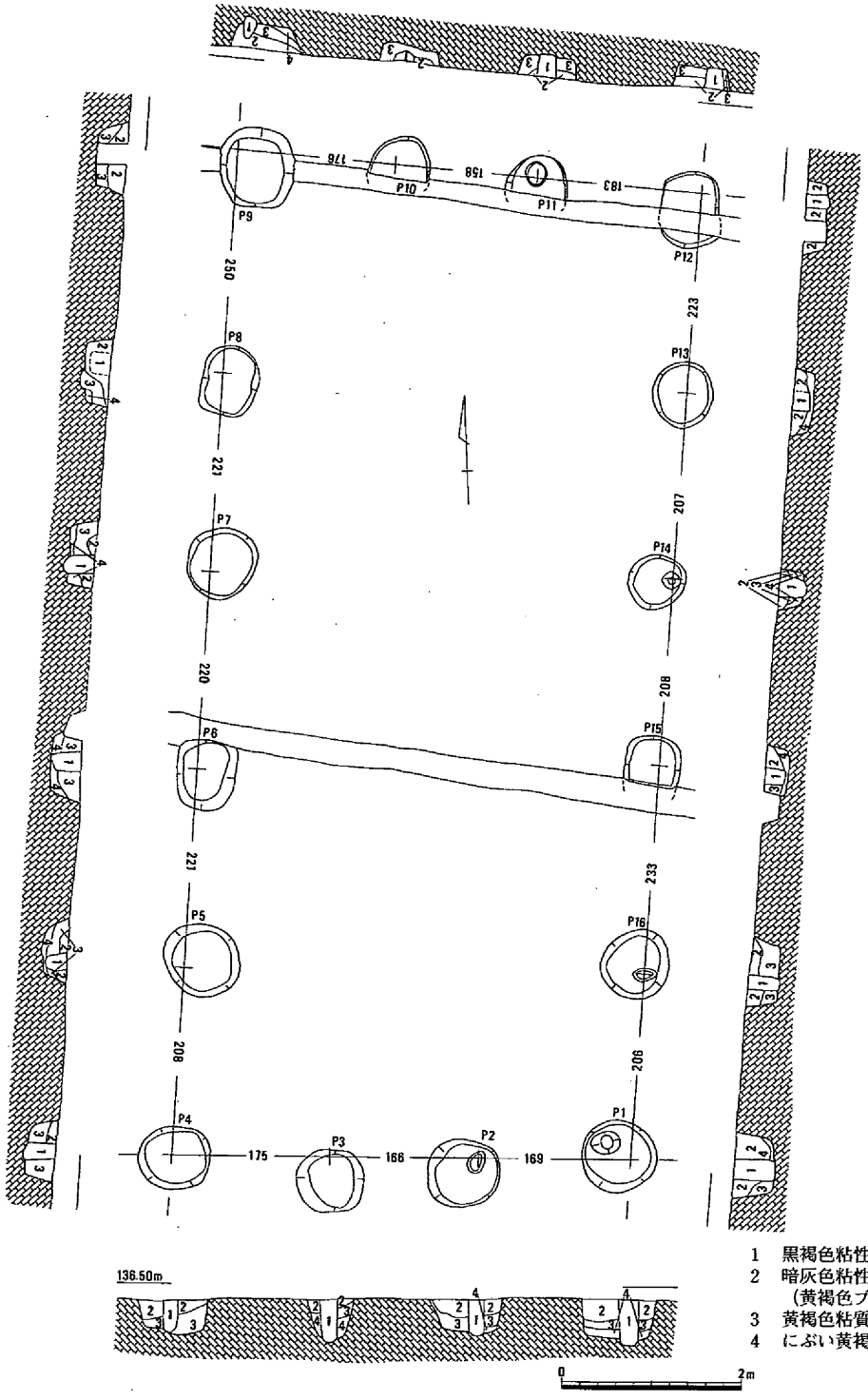
1　暗赤褐色砂質土（炭・土器を若干含む）
2　褐色砂質土（炭・土器を比較的多く含む）
3　暗褐色砂質土（土器を少量含む）
4　明黄褐色砂質土
5　黄褐色砂質土（砂粒・細礫含む）





第73図　竪穴住居１と出土遺物

重の壁体溝がみられたことから、建て替えが行われた可能性がある。この２本の壁体溝の新旧関係は住居の土層断面では判断できなかったが、壁体溝の検出状況および土器片や炭の分布状況から内側の壁体溝が古く、外側が新しいものと推測できる。主柱穴は４本で、中央穴が１基検出されている。主柱穴間は北辺で2.55ｍ、南辺で2.3ｍ、西辺で2.2ｍ、東辺で2.1ｍである。建て替えの可能性も視野にいれて柱穴の検出をおこなったが、他に柱穴らしき遺構は検出できなかった。柱穴は径22～35㎝、床面からの深さはＰ１、Ｐ２で35～37㎝、Ｐ３、Ｐ４で約20㎝を測る。Ｐ１、Ｐ２では柱の痕跡がみら



第74図　掘立柱建物１

れ、柱の径は約15cmであったと推定される。中央穴は長径62cmを測る。西半部を暗渠で失っているが、楕円形を呈している。埋土は暗褐色土で、土器片が含まれていた。また、竪穴住居北半部の柱穴より外側の範囲は内側より約10cmほど高くなっており、いわゆるベット状遺構を有することが判明した。住居跡内では北半部を中心に炭片等の散布がみられた。住居内から土器片および石製品が出土した（第73図）。１は甕の口縁部である。Ｓ１は作業台と思われる石で、柱穴Ｐ２付近で出土した。石の表面に擦痕がみられる。その他、土器の細片が住居内に散乱していた。住居跡上面からの出土であるが、第81図14の壷もこの住居に伴うものと考えられる。これらの遺物から、竪穴住居１の時期は弥生時代後期末から古墳時代前期前半期であると考えられる。

２．掘立柱建物

掘立柱建物１（第74図、図版11－１）

２区の中央付近に位置する掘立柱建物である。一部を暗渠で破壊されているものの、比較的良好な状態で検出された。３×５間の南北棟の側柱建物で、主軸方位はＮ－３°－Ｅで南北に主軸をとる。桁行は1077～1120cm、梁間510～517cmである。桁は206～250cm、梁は158～183cmで桁に比べて梁の間隔のほうが狭くなっている。柱穴は隅丸方形気味のものもみられるが、大部分は円形である。柱穴の径は65～90cmであり、検出面からの深さは16～43cmを測る。柱穴内には柱の痕跡がみられるものが存在する。柱痕はいずれも黒褐色土に置き換わっているが、本来の柱の径は20cm前後であったと考えられる。柱穴内からは弥生土器片が出土しているが、柱穴内への混入の可能性が否定できない。したがって、建物の詳細な時期決定はできないが、その形状から７～８世紀にかけての掘立柱建物と思われる。

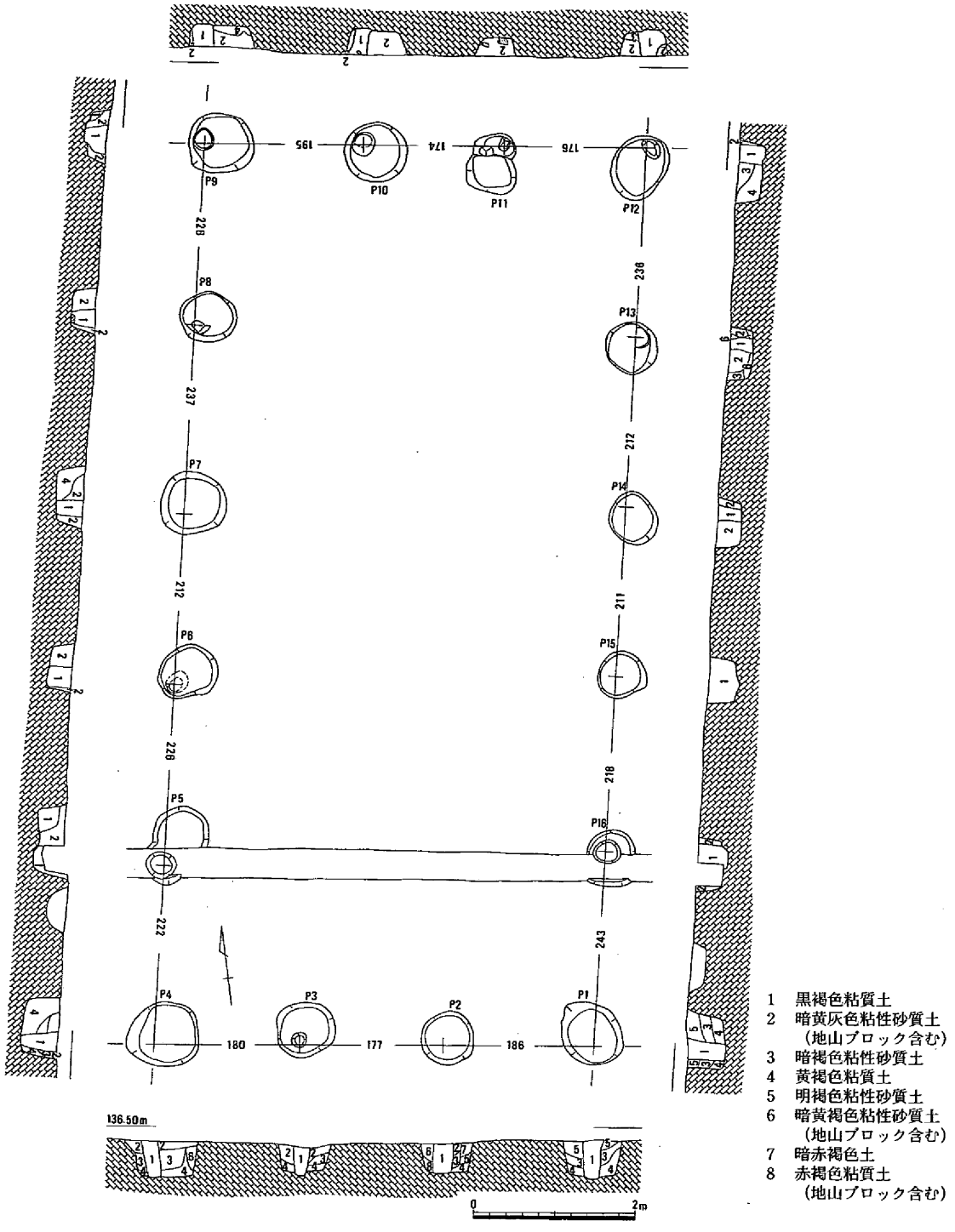
掘立柱建物２（第75図、図版11－２）

掘立柱建物１の北側に位置する。掘立柱建物２は掘立柱建物１とほぼ同一規模の側柱建物である。棟の方向はＮ－３°－Ｅで、主軸を南北にとる。桁行は５間で1120～1123cm、梁間は３間で543～545cmである。また、柱間の計測値は桁方向で211～243cm、梁方向で174～195cmであり、掘立柱建物１と同じく、梁の長さが桁の長さに比べて短い。柱穴の大部分は円形を呈しており、径60～90cm、検出面からの深さは22～45cmを測る。柱穴の大きさは掘立柱建物１が平均で直径が約77cmであるのに対し、掘立柱建物２が平均で約73cmである。建物の規模はほぼ同じであるが、掘立柱建物２の柱穴は掘立柱建物１に比べ、やや小振りな様相を呈する。柱穴のうち、底部に石を置いているものが２基存在した。柱穴内には柱の痕跡が見られるものもある。これより柱の直径を推測すると約20cmになるであろう。なお、柱穴内からの出土遺物はない。時期は掘立柱建物１と同様に７～８世紀にかけての建物と思われる。

３．土壙・溝

土壙１（第76図）

土壙１は掘立柱建物１の柱穴Ｐ９の北西に位置する。径65cm、深さ30cmの円形の土壙である。出土遺物はない。土壙１の形状は掘立柱建物１でみられた柱穴とよく似ていることから、掘立柱建物を建設する際に付随してつくられた土壙と考えられる。したがって土壙の時期は掘立柱建物群と同様に７～８世紀頃と推測できる。なお、柱痕の痕跡はみられない。また、土壙１が掘立柱建物１に付随する

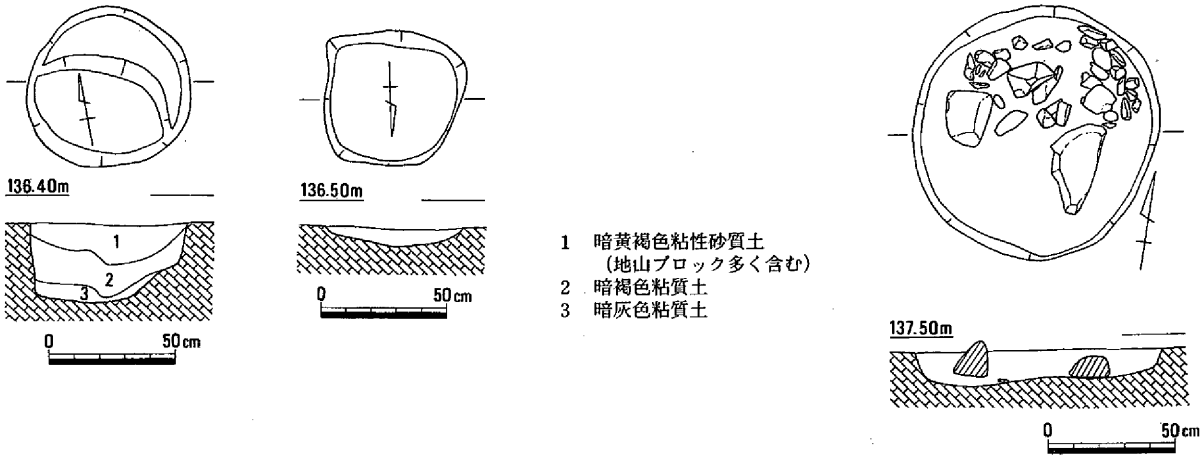


第75図　掘立柱建物２

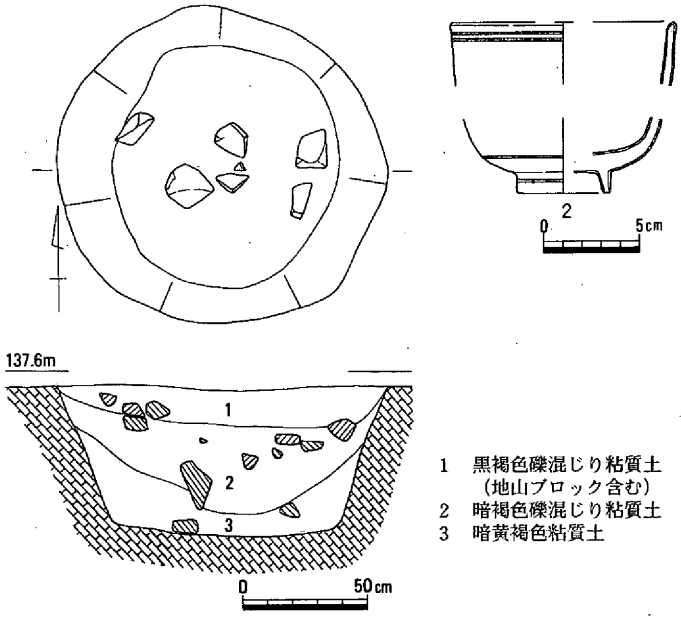
施設の一部である可能性も考慮したが、同様の土壙は掘立柱建物１の周辺には存在しなかった。そのため、土壙１の性格は不明である。

土壙２（第76図）

土壙２は２区の北半部に位置する。南北55cm、東西55cmを測り、深さは約７cmの浅い土壙である。平面形は隅丸方形気味のプランを呈する。出土遺物がなく、土壙の性格および時期は不明である。土壙２は掘立柱建物１・２につづく建物の一部である可能性も考えられたため、周辺の精査を行ったが、



第76図　土壙１（左）・２（中）・３（右）



第77図　土壙４と出土遺物

同様の遺構を検出することはできなかった。そのため、掘立柱建物１・２につづく建物はこの付近には存在しなかったと推測できる。

土壙３（第76図、図版11－３）

３区の南半に位置する。径１ｍの浅い円形の土壙である。深さ約10cmを残す。土壙内は20～30cmほどの石が２点ほど底に据え置かれたような状態で出土し、その北半部に径５cm前後の礫が散乱していた。埋土中より釘と板状の鉄板が出土している。土壙墓である可能性もあるが、詳細は不明である。時期は近世以降と推測される。

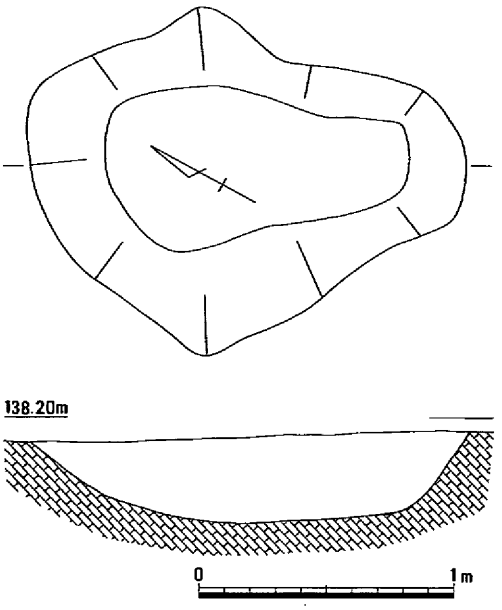
土壙４（第77図）

３区の南半部に位置する。径約1.3ｍ、深さ約55cmを測る。埋土は粘質土で10～20cmほどの礫が混ざる。土壙内から磁器碗（第77図２）が出土している。この土壙の用途は不明であるが、底から湧水がみられることから井戸であった可能性も考えられる。しかし、井戸に用いられるような材木や井筒といったような設備は認められず、いわゆる素掘りの井戸である可能性が考えられる。このことから、土壙４は田畑に水をやるための簡易な水溜めのようなものであった可能性を考えているが、詳細な性格は不明である。出土遺物より近世以降と考えられる。

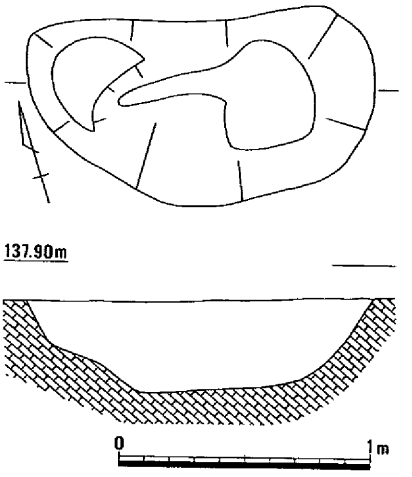
土壙５（第78図）

３区の中ほどに位置する。不整円形を呈し、長径約1.7ｍ、短径約1.4ｍを測る。出土遺物はなく、用途および時期は不明である。

土壙６（第79図）



第78図　土壙５



第79図　土壙６

３区の中ほどに位置する。楕円形を呈し、長径約1.4ｍ、短径約70cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土である。土器片が少量出土しているが、用途および時期については不明である。

溝１・２

３区の北半部に位置する。溝２は東西にはしる溝であり、溝１は溝２から北につづく溝である。溝の周辺には杭の痕跡がみられ、杭を利用した簡易な土手があったものと考えられる。この溝は圃場整備以前の田地境に相当することが判明している。

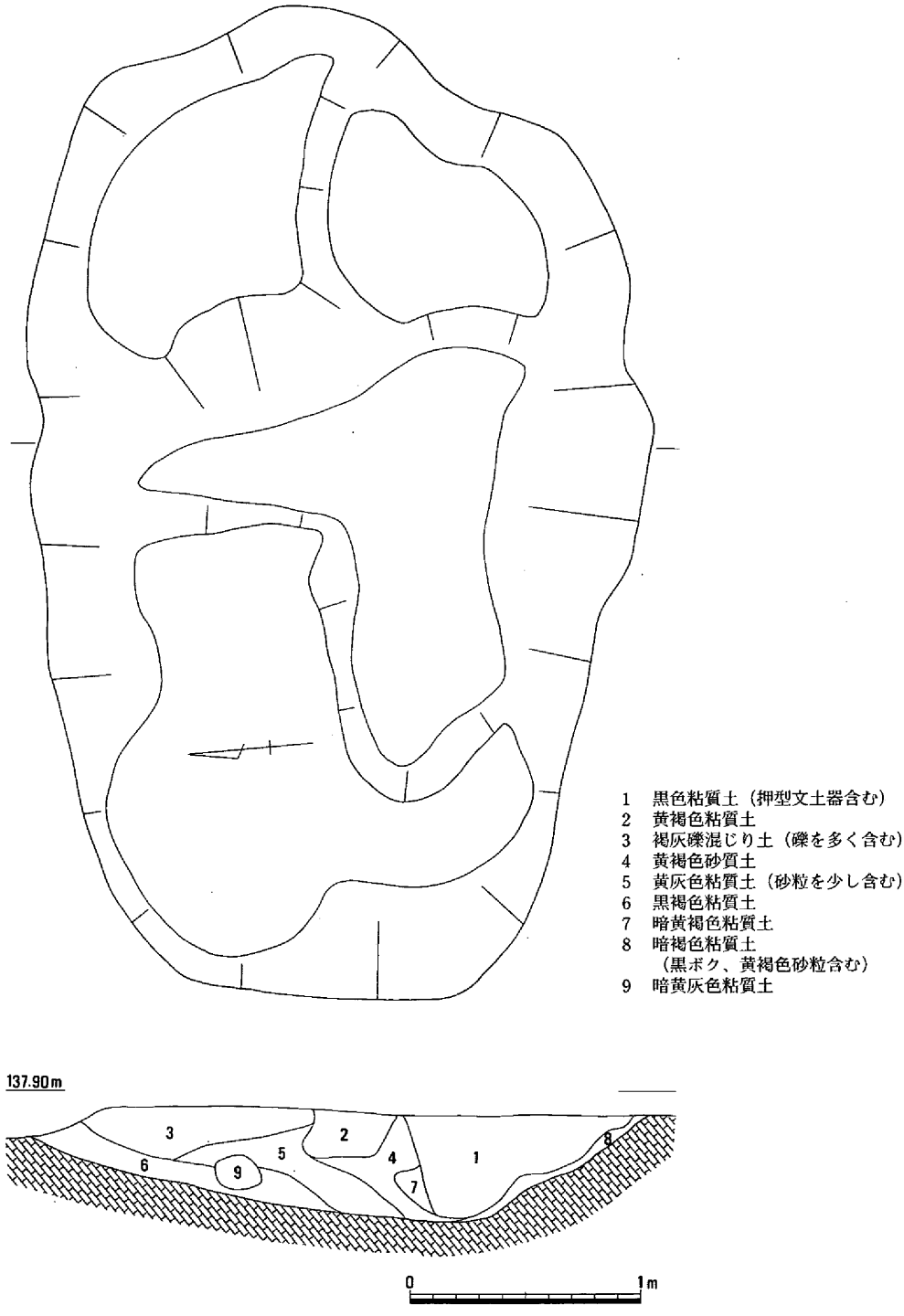
４．風倒木痕

風倒木痕１

２区の南半部に位置し、掘立柱建物１の南に位置する。掘り下げていく過程で円形のプランを呈しつつあったので、竪穴住居跡の可能性をふまえ、土層断面観察用の土手を残しながら掘り下げを行った。しかし、平面形および土層断面の観察等から、この遺構は竪穴住居ではなく、風倒木痕であると判断した。風倒木痕は不整楕円形を呈しており、長径4.6ｍ、短径2.8ｍを測る。風倒木痕内から弥生土器片が出土した。このことから、この風倒木痕は弥生時代に形成されたものである可能性が考えられる。

風倒木痕２（第80図）

３区の中央部に位置する。不整楕円形を呈する風倒木痕で長径約4.3ｍ、短径約2.6ｍを測る。深さは約45cmで断面形態は浅い皿状を呈する。検出時には地山の土質に近い黄褐色土の周辺にいわゆる「黒ボク」である黒色土が環状に巡っていた。黒褐色土は中心方向に潜り込んでいたが、埋土の土層は全体的に不自然な状況を呈していた。これらの諸特徴から、この遺構は人為的なものとは考えられず、木が倒れた後に周囲から黒ボク等の土が流れ込んで形成された、いわゆる風倒木痕であると判断した。なお、埋土（第１層）から押型文土器が２点（第81図３・４）出土した。このように風倒木痕から縄文土器が出土した例として北房町備中平遺跡（註１）があげられる。



第80図　風倒木痕２

なお、大開遺跡ではこの他にも多数の風倒木痕と考えられる遺構が検出されている。しかし、土器片等の遺物が出土したのはここにあげた風倒木痕１・２のみであり、その他の風倒木痕からの遺物の出土はなかった。

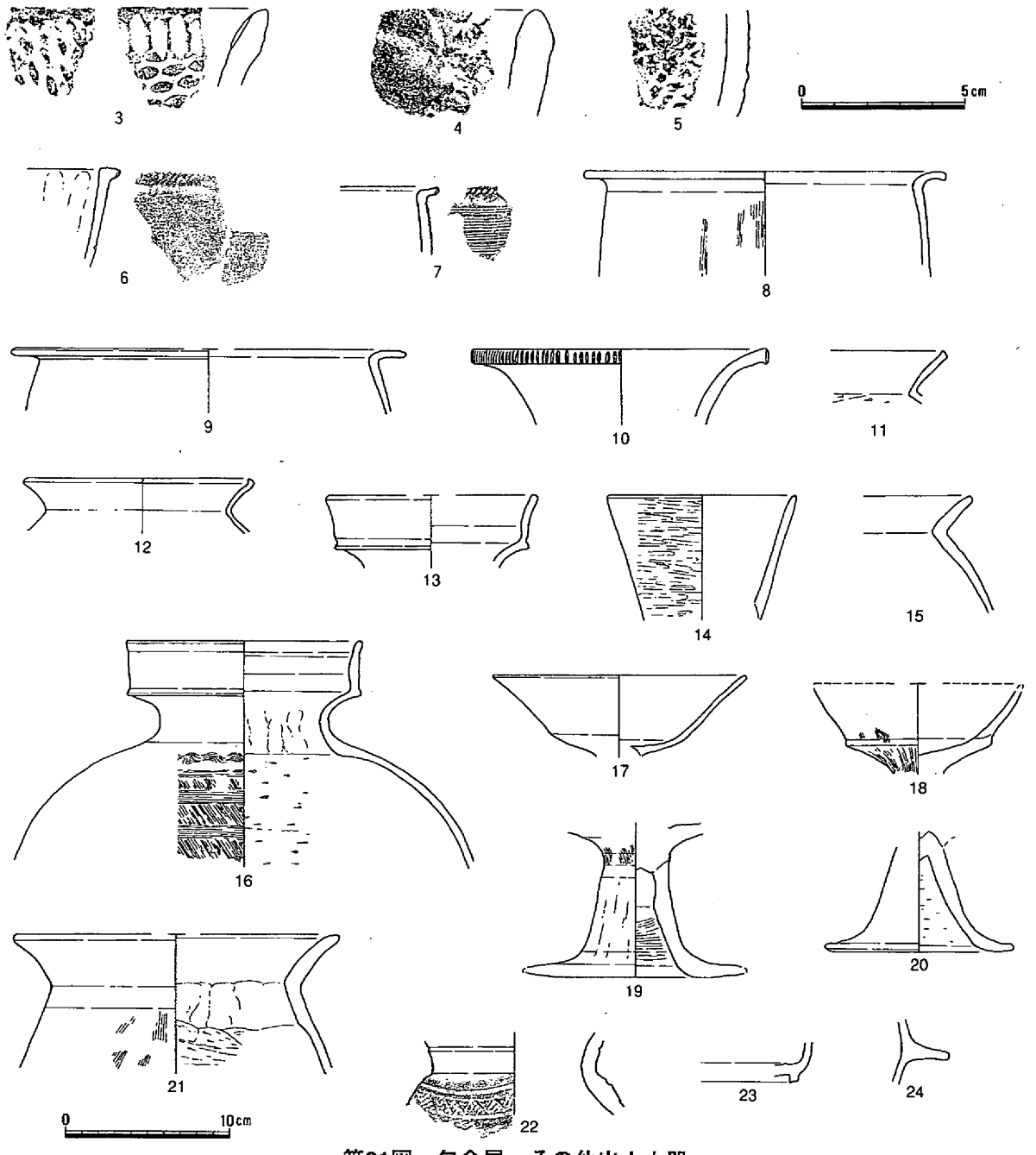
註

1　井上弘他「備中平遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査７』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12　岡山県教育委員会　1976

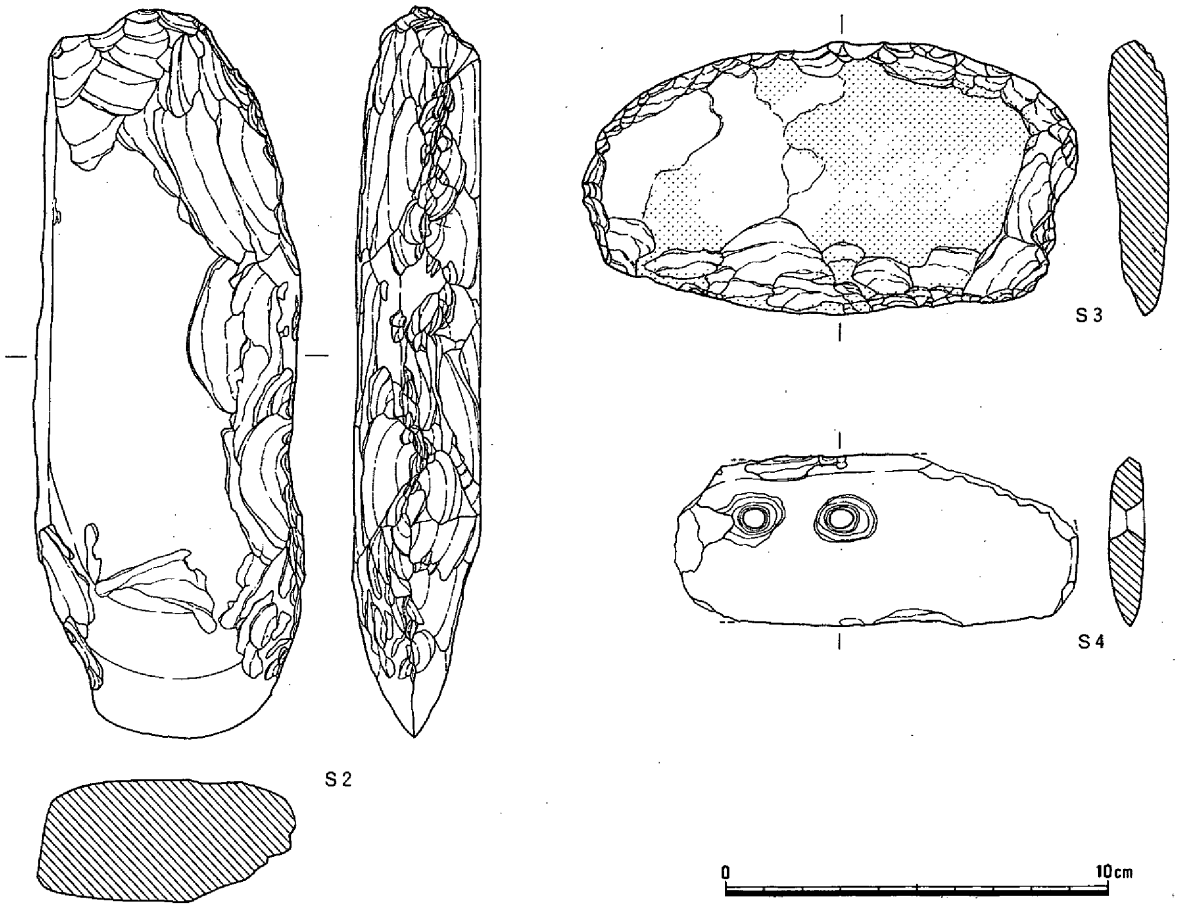
５．包含層その他遺物

３～５は押型文土器である。３は風倒木痕２から出土した。３の内外面には楕円押型文が施されている。楕円の長径は６～８㎜、短径は２～３㎜である。器壁は６～７㎜を測る。４も風倒木痕２から出土した。器壁が1.1㎝とやや厚い。５は１区竪穴住居上の撹乱層から出土した。内面には楕円押型文が施されている。

６～９は弥生土器の甕である。いずれも３区北半部の包含層中から出土した。６の口縁部は逆「L」字状をなし、口縁端部には刻目が、口縁部直下には多条の櫛描文が施されている。そして、その下端部には刺突文を配している。７は口縁端部に刻目が、胴部上半に櫛描文が施されている。８・



第81図　包含層・その他出土土器



第82図　包含層・その他出土石器

9は口縁部を「く」の字状に折り曲げている。**10**は壷の口縁部で端部に刻目を有する。３区北半部包含層中から出土した。これらの弥生土器はいずれも弥生時代中期を中心とする時期の土器である。

11・12は土師器甕である。口縁端部を上方につまみあげている。３区北半部包含層から出土した。**13**は壷の口縁部である。２区南半部包含層から出土した。**14**は直口壷である。外面を横方向にヘラミガキを施している。竪穴住居１上面の撹乱から出土したが、竪穴住居に伴うものと考えられる。**15**は甕である。２区南半部包含層から出土した。**16**は壷である。肩部に櫛描波状文がみられる。１区で出土した。**17・18**は高杯の杯部である。**19・20**は高杯の脚部である。いずれも内面を削っている。**19**は**18**とは別個体であるが、胎土は非常によく似ている。**17・20**は３区北半部包含層から、**18・19**は２区南半部包含層から出土した。**21**は甕である。２区南半部で出土した。**22**は須恵器壷である。胴部に櫛描列点文が施されている。３区で出土した。**23**は須恵器杯の底部である。２区で出土した。**24**は羽釜の鍔である。１区で出土した。

Ｓ２は局部磨製石斧である。３区中程の地山直上付近で出土した。長さ19.4㎝、幅7.9㎝、厚さ3.2㎝、重さ686.9ｇを測る。左側縁部に石材の自然面を残し、その他の部分は敲打により調整を行っている。石材はガラス質流紋岩である。Ｓ３・Ｓ４は石包丁である。いずれも３区北半部包含層中から出土した。Ｓ３は緑色流紋岩で一部欠損している。表裏面とも摩耗しており、使用痕跡がみられる。重さは206.4ｇである。Ｓ４は溶結流紋岩製の石包丁である。穿孔がみられる。重さは61.1ｇである。

第３節　まとめ

今回の調査で大開遺跡では弥生時代から古代を中心に集落が営まれていたことがわかった。しかし、遺物の中にはこれらの時期よりも古いものもみられ、人々が古くからこの地域を利用していたことがわかる。以下に今回の調査の概要を述べる。

旧石器・縄文時代の遺物として、押型文土器および局部磨製石斧があげられる。その中で押型文土器は風倒木痕の埋土から数点出土している程度であるが、その土器文様は小形楕円文で、黄島式とみられる。この黄島式土器は大開遺跡から北へ約２㎞に位置する著名な縄文時代早期の集落である竹田遺跡（註１）ではむしろ少数であるが、六番丁場遺跡（第６章）など周辺地区において出土例が報告されており（註２）、今後の資料の増加が期待される。

弥生・古墳時代の遺構として竪穴住居が検出された。竪穴住居１は著しい削平を受けていたが、一辺約4.5ｍを測り、平面形は隅丸方形をなし、いわゆるベット状遺構を有する竪穴住居であることが判明した。出土した遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけてのものと考えられる。この住居以外に弥生・古墳時代の遺構は出土していないが、包含層中から弥生土器が出土している。特に、３区北半の黒ボク層中より弥生時代前期末から中期にかけての土器が出土している。このことから、かつてこの付近にも弥生時代中期を中心とする集落が存在していた可能性がある。一方、古墳時代中期以降については土器片がわずかに出土している程度である。特に古墳時代後期の土器はごく少量で、この時期の集落は大開遺跡の南に位置する九番丁場遺跡を中心に営まれたものと考えられる。

古代の遺構としては掘立柱建物１・２が上げられる。いずれも南北に主軸をとる３×５間の建物である。大開遺跡ではこの掘立柱建物に伴う遺物は出土していないが、古代を中心とする時期の建物と考えられる。同様の時期の掘立柱建物が、六番丁場遺跡でも見つかっており、香々美川の東岸の河岸段丘上には、このような掘立柱建物群が営まれた可能性が高い。この大開遺跡の存在する布原付近は美作国苫田郡布原郷に比定されており、この大開遺跡を含むこの河岸段丘上には、古代の地方行政組織の一部をなす何らかの公的な施設があった可能性が高い。

中・近世の遺構は少なく、特に中世と時期が断定できる遺構はない。したがって、先述した古代の掘立柱建物群が廃絶した後にはあまり土地利用がなされていなかった可能性がたかい。現に慶長９年（1604年）に検地が行われた時も、この大開遺跡周辺の布原地区の大部分は荒野であったとされる。その後、この付近の土地利用が開始されたのは近世前半期以降で、すなわち、慶安元年（1648年）から津山藩によって開墾が行われて以降のことと推測できる。　（金田）

註

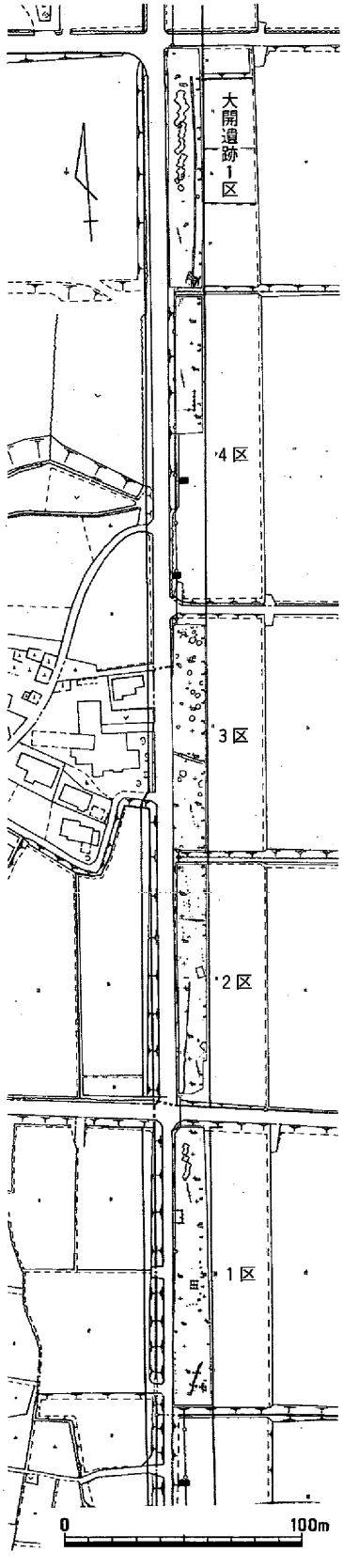
1　土居　徹「竹田遺跡」『岡山県史　考古資料』1986年

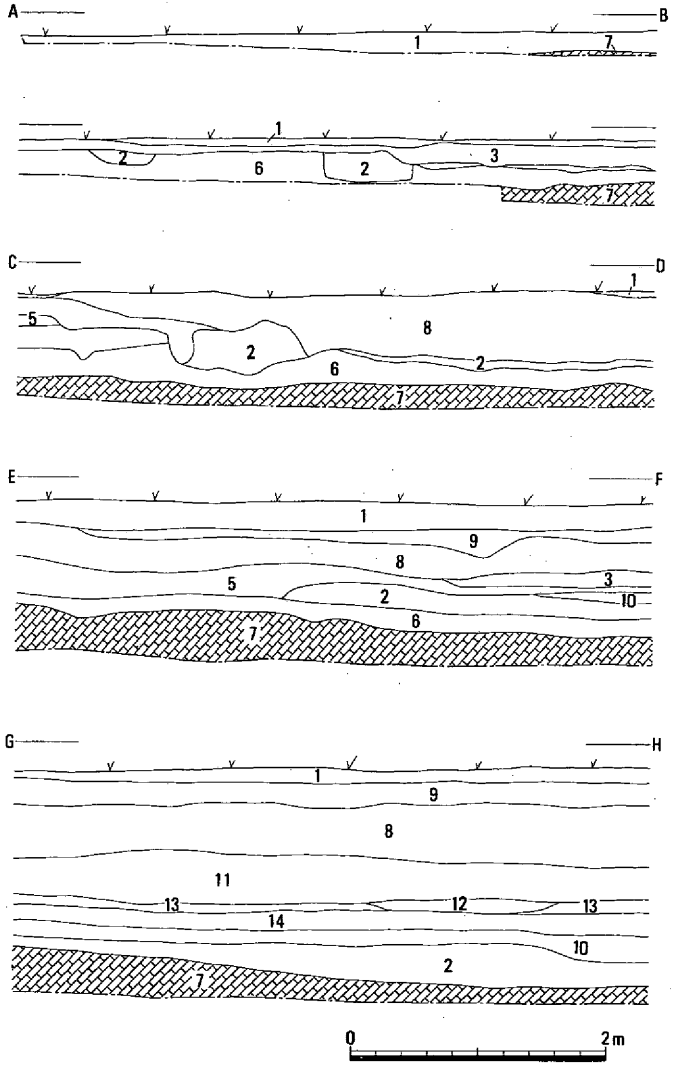
2　立石盛詞「遺跡の立地と環境」『葡萄田頭遺跡・槙の木峪古墳』鏡野町教育委員会　1999年

第６章　六番丁場遺跡

第１節　調査区の概要

六番丁場遺跡は、前掲する大開遺跡と同じく鏡野町布原に所在し、大開遺跡の南側に位置している。この遺跡は、小字名六番丁





1　耕作土
2　黒褐色粘質土
3　暗赤褐色粘性砂質土
5　褐色粘性砂質土（橙色土粒含む）
6　褐灰色粘質土
7　にぶい橙色粘質土（地山）
8　造成土
9　造成土
10　にぶい赤褐色粘性砂質土
11　灰黄褐色礫混じり砂質土
12　黒色粘性砂質土
13　にぶい赤褐色粘質土
14　暗赤褐色粘質土

第83図　六番丁場遺跡全体図（S＝1/3000）　　**第84図　１区東壁土層断面**

場を中心にその前後に広がるものと推定されることから命名された。遺跡の立地する台地は、大開遺跡を最高所に、南に向けて緩やかに下ってゆくが、所々に谷状の窪地が存在するものと考えられる。しかし、大規模な圃場整備が施工された現状からは、その様な地形を観察することは難しい。

調査区名は、一枚の水田毎に南から１区、２区、３区、４区とした。調査は、排土の関係から調査区内を二分し南半分から実施した。

調査の経過については、日誌抄を掲載して説明したい。

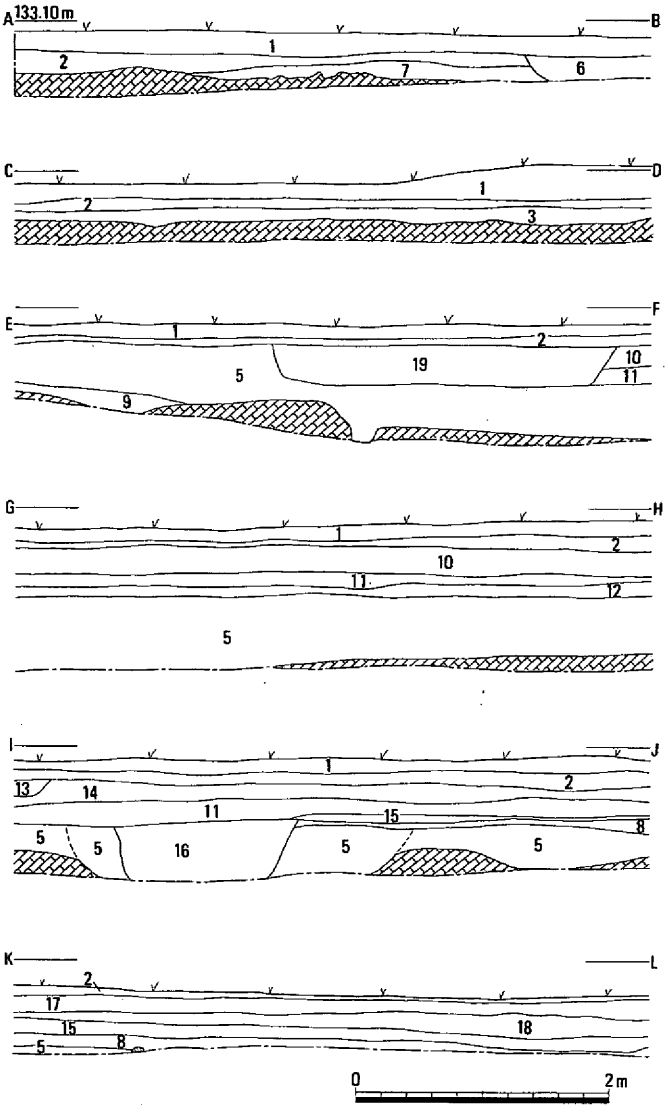
平成７年

７月10日　１、２区南半調査着手
８月４日　２区南半調査終了
８月10日　１区柱穴、溝等検出
８月11日　１区南半調査終了
　　２区北半調査着手
８月22日　２区建物、溝等検出
８月24日　１区北半調査着手
８月28日　２区北半調査終了
９月１日　１区建物、柱穴等検出
９月13日　１区建物の実測
９月14日　１区北半調査終了
９月27日　４区調査着手
10月９日　４区柱穴の検出
10月17日　調査区を南に拡張する
10月24日　４区調査終了

平成９年

６月２日　３区南半調査着手
６月17日　３区押型文土器出土
７月３日　３区南半調査終了
７月７日　３区北半調査着手
７月22日　数基の土壙を検出
７月25日　土壙から縄文土器出土
　　土壙内に炭化米を検出
８月25日　３区北半調査終了

以上のように１、２、４区については、平成７年度に調査を実施した。この年度は、他に大開遺跡、九番丁場遺跡などの調査も計画されており、大開遺跡の調査終了後にこの六番丁場遺跡の調査に着手した。しかし、３区については用地の買

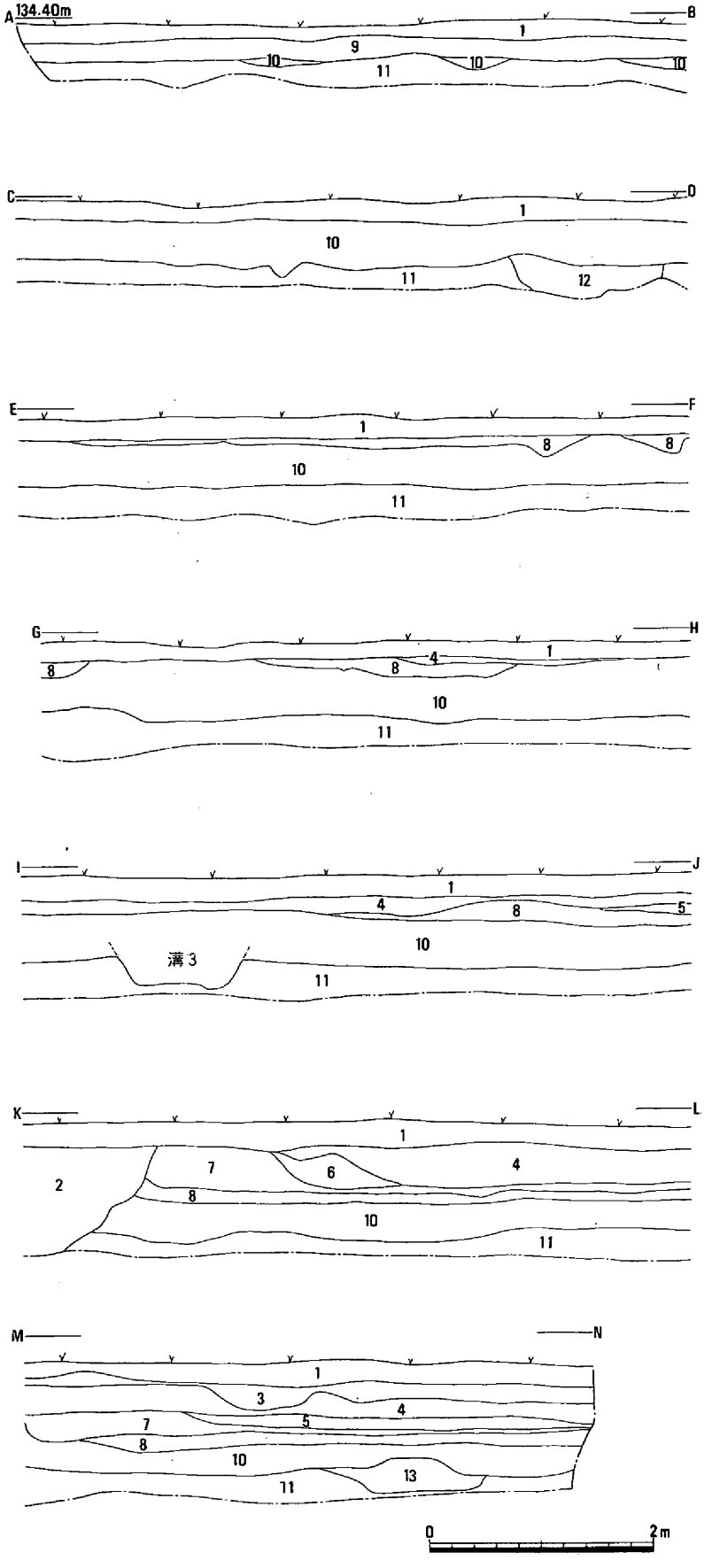


1　耕作土
2　暗褐色砂質土
3　暗黄褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　撹乱土
7　褐黄色粘性砂質土
　（地山土と黒ボク混じる）
8　暗赤褐色粘性砂質土
9　褐色砂質土
　（地山土と黒ボク混じる）
10　暗灰色粘性砂質土
11　灰褐色砂質土
12　赤褐色砂質土
13　にぶい赤褐色粘性砂質土
14　暗灰色砂質土
　（地山ブロック多く含む）
15　暗褐灰色砂質土
16　にぶい褐色礫混じり砂質土
　（風倒木痕）
17　暗灰色砂質土
18　暗灰黄色砂質土
19　暗赤褐色粘性砂質土（溝）

第85図　２区東壁土層断面

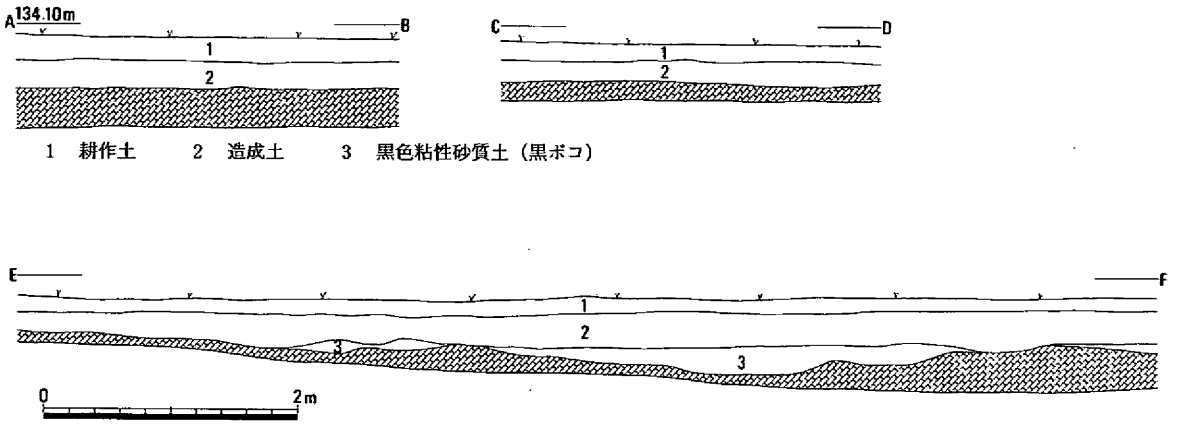
収が完了していなかった為、後年度の調査に予定されていた。その後、買収に関わる手続き等が完了したため、平成９年度に３区の調査を実施した。

各調査区の状況については層序を元に説明したい。１区であるが、北から南に下がる地形を呈している。北端は、Ａ－Ｂ土層図に示すように圃場整備により地山層も一部削平されており、削り出された地山面の直上に現代の水田耕作土が観られる。この調査区では黒ボク層は検出されなかったが、他の調査区で黒ボク層の下層に検出した褐灰色粘質土は、広い範囲に観られた。第６層がそれに相当するものである。同層も南端部Ｉ－Ｊ土層図においてはいては検出されず、黄褐色の地山面直上の層は須恵器などを出土する第２層の黒褐色粘質土が



1　耕作土
2　攪乱土
3　造成土
4　造成土
5　造成土
6　造成土
7　圃場整備前の耕作土
8　灰黄褐色粘性砂質土（黒色粘性砂質土含む）
9　黒色砂質土
10　黒色粘性砂質土（黒ボコ）
11　黒褐色粘性砂質土
12　にぶい黄橙色粘性砂質土
13　にぶい黄橙色粘性砂質土（褐灰色土含む）

第86図　３区東壁土層断面図



第87図　４区東壁土層断面図

見られた。このことは、古代においても必要に応じて地形の改変がなされ、目的に沿った用地の造成が成されていることを示すものである。Ｅ－Ｆ土層図付近から南は圃場整備による盛土が厚く堆積する。第10～14層は中世～近世と考えられる土層である。

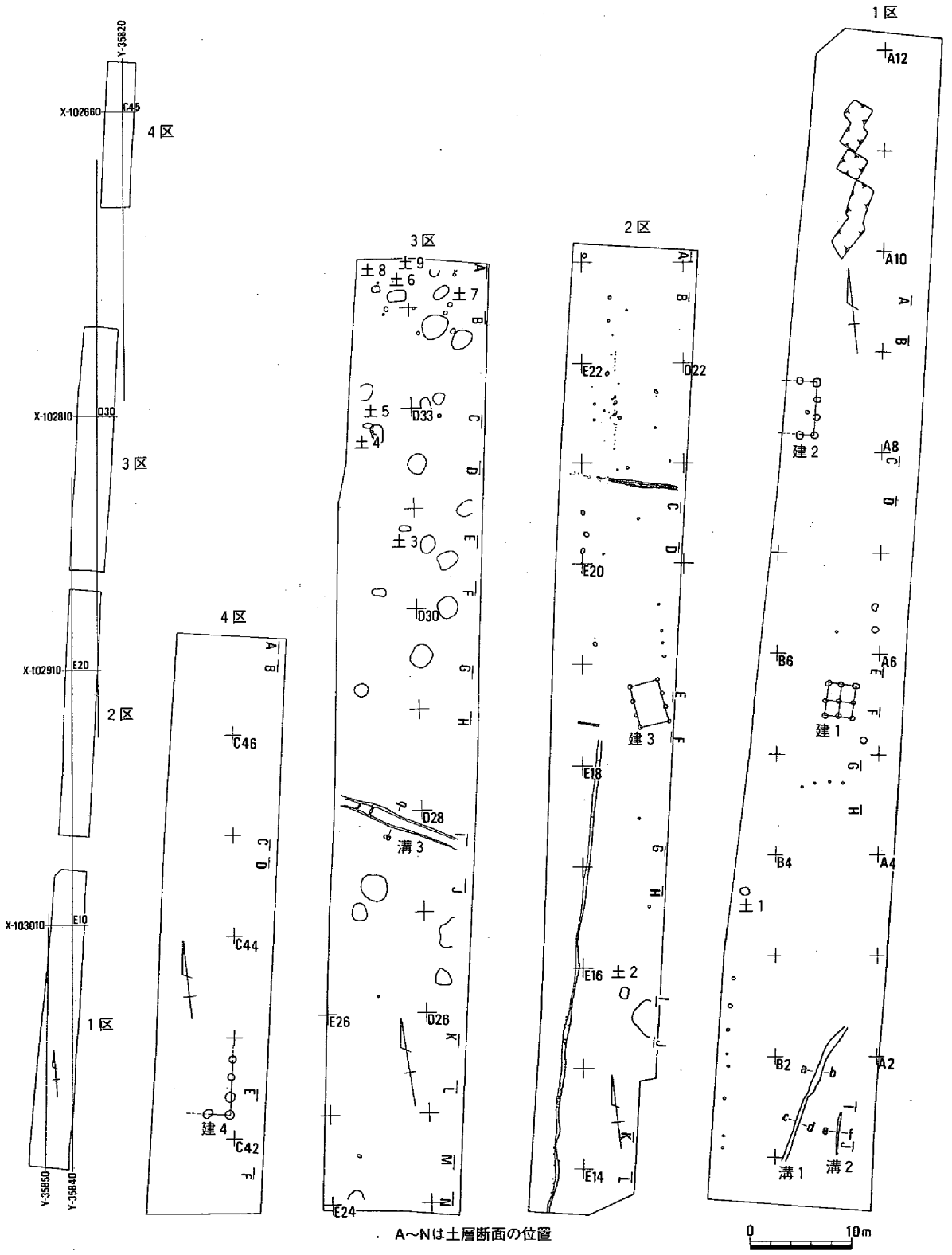
２区においても北端部は、圃場整備による削平が見られた。しかし、その及ぶ範囲は狭く、この地区は旧地形も比較的平坦に近い地形を呈していたものと考えられる。Ａ－Ｂ，Ｃ－Ｄ土層図は、圃場整備で地山層を削平した後に盛土をした状況を示すものである。Ｉ－Ｊ，Ｋ－Ｌ土層図の第13、14、17、18層は圃場整備による盛土で、第10～12層は中世から近世にかけて形成された土層である。この調査区においては、黒ボク層は検出されなっかたが、Ｅ－Ｆ土層図の第９層には黒ボクを含んでおり、古くは黒ボクが一帯を覆っていたものと考えられる。

３区においても旧地形は北から南に向けて下がる様子が見られる。この調査区においては、第10層は黒ボク層（黒色粘性砂質土）で、調査区のほぼ全体に検出した。第11層は黄褐色粘質土で、黄色粘質土の地山層上面に形成される土層である。第３～６層は圃場整備の盛土である。第８、９層は古代から中世にかけて形成された土層である。第12、13層は時期的には古い様相を呈するものであるが、風倒木痕の一部である可能性が高いものである。

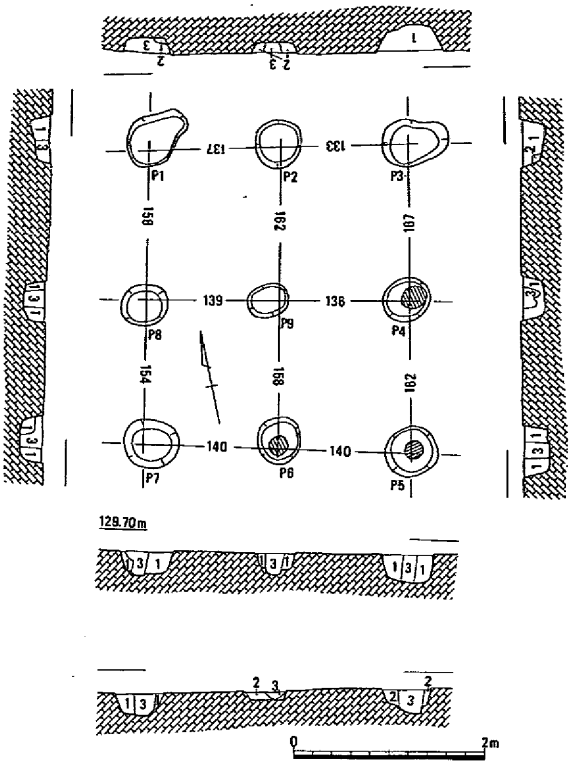
３区で検出した遺構は、黒ボク層を除去した後に発見したものである。これらの遺構は黒ボクで埋まるものであるため、第10層の黒ボク層の上面での検出は難しかった。そこで、その下層において調査したものである。しかし、Ｉ－Ｊ土層図に見られるように黒ボクを含む遺構は、明らかに黒ボク層を掘り込む状況が見られた。また、この調査区からは縄文時代早期と後期の土器が出土しているが、第11層からは縄文早期の土器の出土は確認されているが、後期の土器の出土は確認されていない。

４区は、北側に接して存在する大開遺跡の南端部は緩やかに傾斜して六番丁場遺跡に向けて下っているにも関わらず現状での比高差が約１ｍ有ることは、この調査区の北端部は大きく削られていることを示している。その関係で調査区の殆どが大きく削平されており、南端部において一部古い地形を示す状況が見られた。Ａ－Ｂ、Ｃ－Ｄ土層図では、掘削された地山面に圃場整備の盛土が成されている状況が見られる。しかし、Ｅ－Ｆ土層図では北側に地山の削平も見られるが、南側には旧地形をとどめている状況が観察される。また、この部分より南は、少し急に下がる様相を呈していることと、この調査区の西側に見られる地形とを考慮すれば、３区と４区の間に谷状の窪みが存在することを示すものと考えられる。

遺跡の所在するこの台地は、北から南に向けて緩やかに傾斜しており、圃場整備後の地形も概ねその様相を呈している。しかし、旧地形まで下げて見ると、一枚の水田も、北端は大きく削平されている。その削平した土を南側に盛ることにより旧地形は残存している。殆どの調査区でその部分に遺構を検出した。このことは、この台地上にはまだ残された遺構が数多く存在するものと推測される。

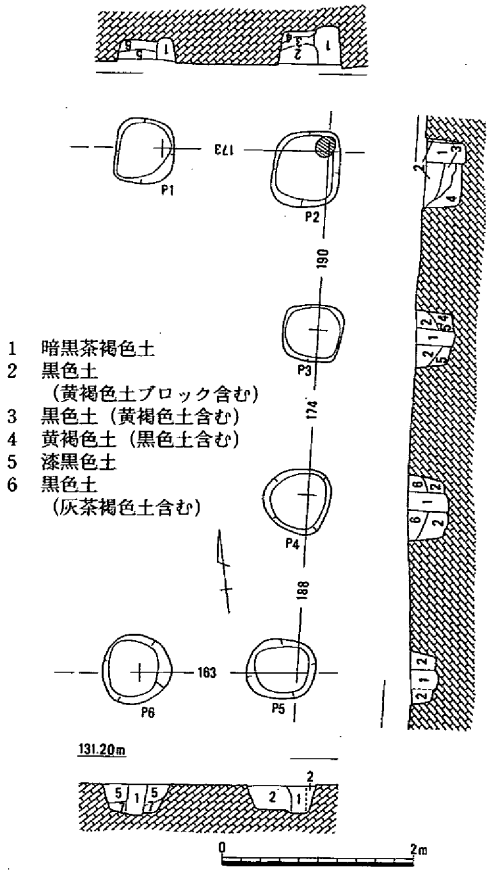


第88図　六番丁場遺跡の遺構全体図（S＝1/600）



1　黒褐色粘質土　　2　にぶい黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土（黄褐色粘土ブロック含む）

第89図　掘立柱建物１



1　暗黒茶褐色土
2　黒色土
　（黄褐色土ブロック含む）
3　黒色土（黄褐色土含む）
4　黄褐色土（黒色土含む）
5　漆黒色土
6　黒色土
　（灰茶褐色土含む）

第90図　掘立柱建物２

第２節　遺構と遺物

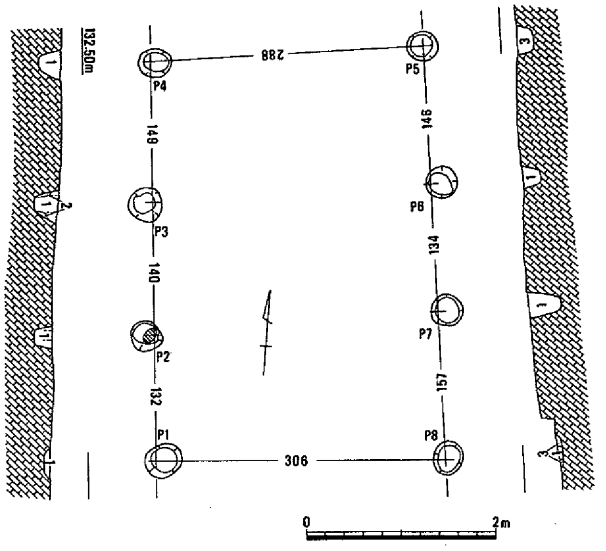
１．掘立柱建物

掘立柱建物１（第89図、図版13－２）

１区のほぼ中央部において検出したものである。梁間、桁行きともに２間の総柱建物である。建物の平面形は、僅かに南北方向が長い長方形を呈している。建物の各辺の距離を示すと、Ｐ１－Ｐ７が312cm、Ｐ３－Ｐ５が329cm、Ｐ１－Ｐ３が270cm、Ｐ５－Ｐ７が280cmを測る。柱穴間の距離は、東西が140～133cm、南北が167～154cmを測る。各辺の長さを細かく見ると、東辺と西辺の差が17cm、北辺と南辺の差が10cmと僅かに差が見られ、大きくは変形していないがやや台形を呈している。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径は42～50cmを測る。検出面からの深さは12～30cmを測るもので、後世の削平が見られる。建物の主軸の方向は、Ｎ－11°30′－Ｅと真北に近い方向を示している。柱穴からの出土遺物が無いため明確な時期は不明であるが、古代に属するものと考えられる。

掘立柱建物２（第90図）

掘立柱建物１の北約25ｍの位置に検出した。調査区の西よりに検出したため全体の規模は不明である。検出した柱穴は南北に３間、東西に１間である。柱穴の平面形は、基本的には隅丸方形を呈するもので、長辺の長さは60～80cmを測る。検出面からの深さは20～40cmを測る。柱穴には何れも柱痕跡が見られ、直径約20cmを測る。柱間の距離は、東西が163～173cm、南北が174～190cmを測る。建物の主軸方向は不明であるが、東西方向で角度を測るとＮ－97°－Ｅとなりほぼ真北に直角な方向を示している。柱穴からの出土遺物がないため明確な時期については不明であるが、他の遺構や、柱穴を埋める土などから奈良時代に属するものと考えられる。

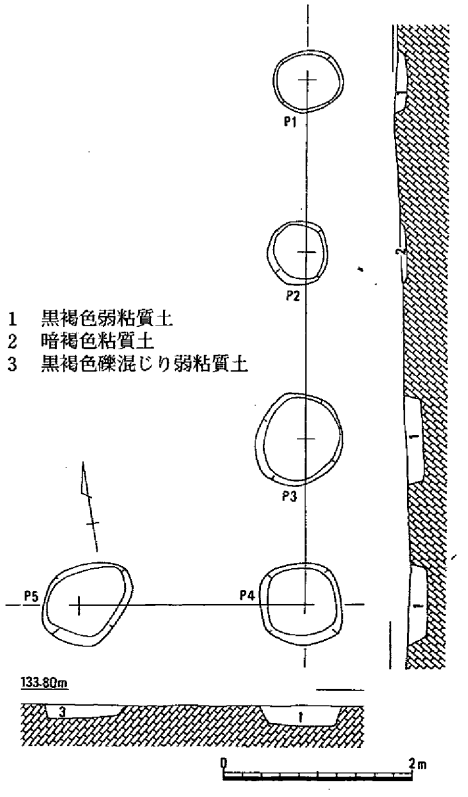


1　黒褐色粘質土　　2　にぶい黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土（黄褐色土粘土ブロック含む）

第91図　掘立柱建物３

掘立柱建物３（第91図、図版13－３）

２区のほぼ中央部において検出したものである。梁間１間、桁行３間の側柱建物である。柱穴間の距離は、Ｐ４－Ｐ５が288cm、Ｐ１－Ｐ８が306cmを測る。桁行きの全長は、Ｐ１－Ｐ４が421cm、Ｐ５－Ｐ８が437cmを測る。桁行きの柱穴間の距離は132～157cmを測る。このように、建物の平面形は僅かながら台形を呈している。柱穴の平面形は円形を呈するもので、長径で約30cmを測る。検出面からの深さは10～32cmを測る。主軸の方向はＮ－５°－Ｗ示している。建物の時期は柱穴からの出土遺物がないため明確ではないが、柱穴を埋める土や周辺からの出土遺物から推定すれば、弥生時代後期に属するものと考えられる。



1　黒褐色弱粘質土
2　暗褐色粘質土
3　黒褐色礫混じり弱粘質土

第92図　掘立柱建物４

掘立柱建物４（第92図）

４区の南端において検出した。圃場整備による旧地形の削平が著しいため、建物の全体は検出できなっかた。検出した建物の北側は特にそうである。検出した柱穴は東側柱穴列の４本と、南側柱穴列の１本である。柱穴の平面形は円形を呈するもので、長径60～100cmを測る。柱穴間の距離は南北方向が北から182cm、198cm、176cm、東西方向が242cmを測る。建物の長軸方向は不明であるが、東側柱穴列での方向はＮ－９°－Ｅを示している。柱穴からの出土遺物がないため明確な時期は不明であるが奈良時代に属するものと考えられる。

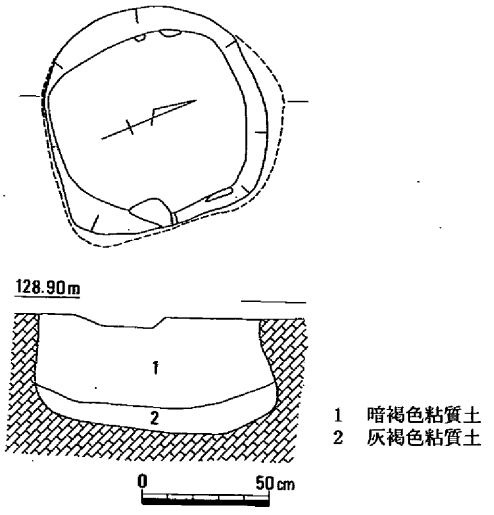
２．土壙

土壙１（第93図、図版14－１）

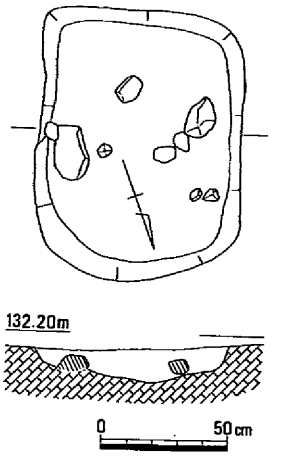
１区建物１の南約20ｍの位置に検出したものである。平面形は、東側と南側は直線的であり、他の部分は曲線的である。検出面での規模は長径84cm、短径80cmを測る。断面形は袋状を呈しており、特に北側に膨らみを持つ。膨らむ部分の最大径は96cmを測る。底面は平坦でなく浅く窪んでいる。検出面からの深さは48cmを測る。土壙からの出土遺物がないために明確な時期は不明であるが、弥生時代と推定される。

土壙２（第94図）

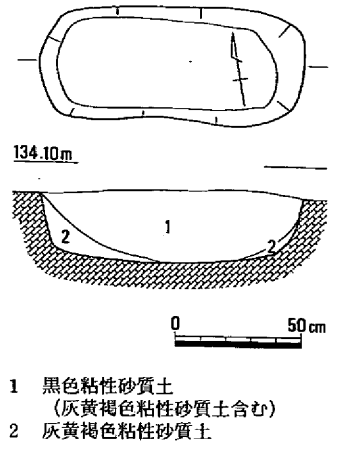
２区建物３の南約26ｍの位置に検出したものである。平面形は南北に長い長方形を呈しているが、



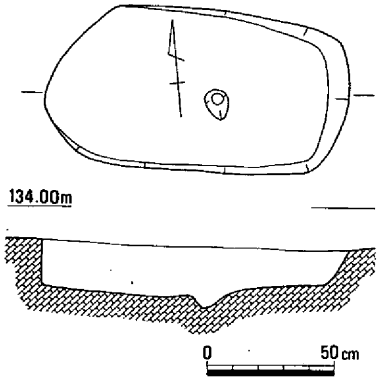
第93図　土壙１



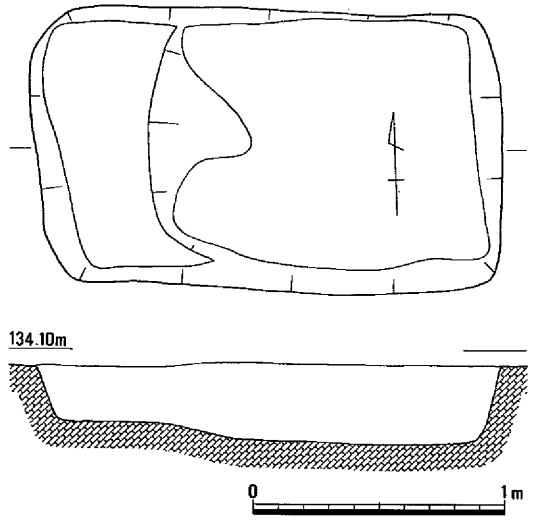
第94図　土壙２

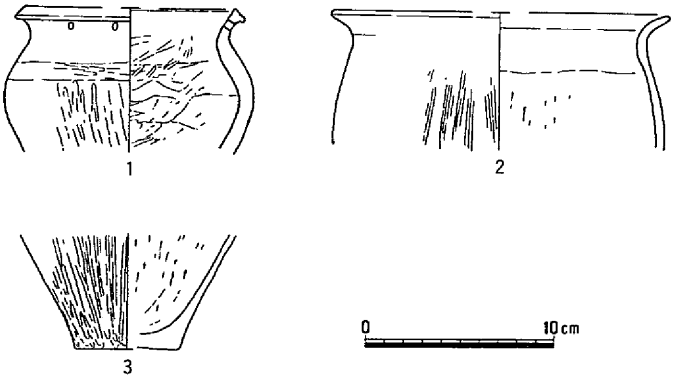


第95図　土壙３



第96図　土壙４





第97図　土壙６と出土遺物

北辺は他の辺が直線的であるのに対して少し弧を描くものである。検出面での規模は長径109cm、短径82cmを測る。断面形は浅く窪むもので、検出面からの深さは14cmを測る。土壙からの出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、建物３と同じく弥生時代後期に属するものと考えられる。

土壙３（第95図、図版14－２）

３区北半の中央部において、黒ボク層を除去した後に検出したものである。平面形は、長方形に近い形状を呈するもので、長辺側は直線的であるが、短辺側は緩やかな曲線を描くものである。検出面での規模は、長辺107cm、短辺46cmを測る。検出面からの深さは29cmを測る。出土遺物が無いため明確な時期は不明であるが弥生時代と推測される。

土壙４（第96図）

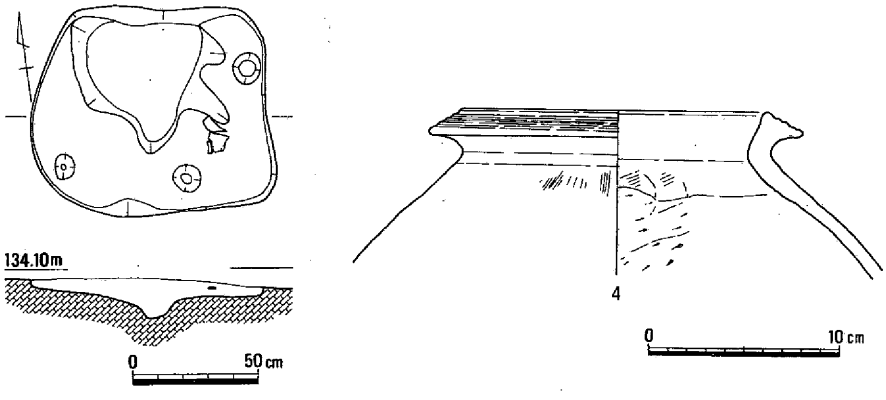
３区土壙３の北約10ｍの位置に検出した。平面形は東側が少し角張るものの小判形を呈するものである。検出面での規模は、長径120㎝、短径64㎝を測る。断面形は逆台形を呈するもので、検出面からの深さは20㎝を測る。土壙は黒ボク土で埋まるものである。出土遺物がないために明確な時期は不明であるが、土壙３と同じく弥生時代と推測される。

土壙６（第97図、図版14－３）

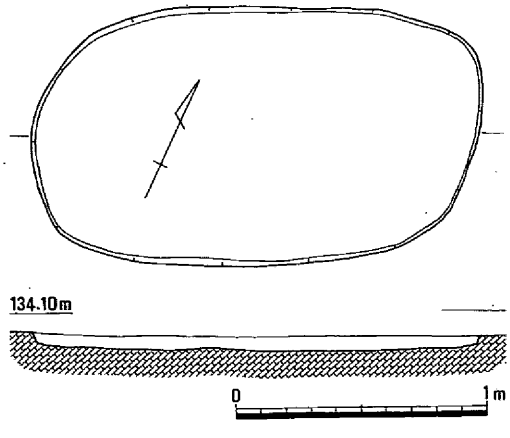
土壙４の北約13ｍの位置に検出したものである。平面形は長方形を呈しており、長辺186㎝、短辺113㎝を測る。断面形は逆台形を呈している。底面は二段に形成されており、各段ともに平坦である。検出面からの深さは32㎝を測る。土壙は黒ボク土で埋まるものである。遺物としては、少量の弥生土器が出土している。**１**は、台付の鉢と考えられるものである。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は少し肥厚する。口縁部直下には２個の円孔が施される。胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが見られる。**２**は甕で、内面はヘラケズリ、外面には煤が付着する。**３**は甕の底部で、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリが施される。時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

土壙７（第99図、図版14－３、図版15－１・２）

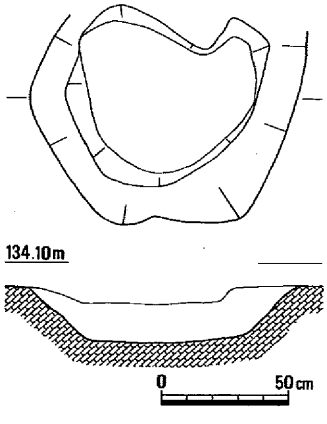
土壙６の東約３ｍの位置に検出したものである。平面形は小判形を呈するもので、長径180㎝、短径103㎝を測る。検出したのは現代の耕作土直下であるため、断面形は浅い皿状を呈しており、底面は平坦である。検出面からの深さは６㎝を測る。土壙は、黒ボク土により埋まるもので、その底面か



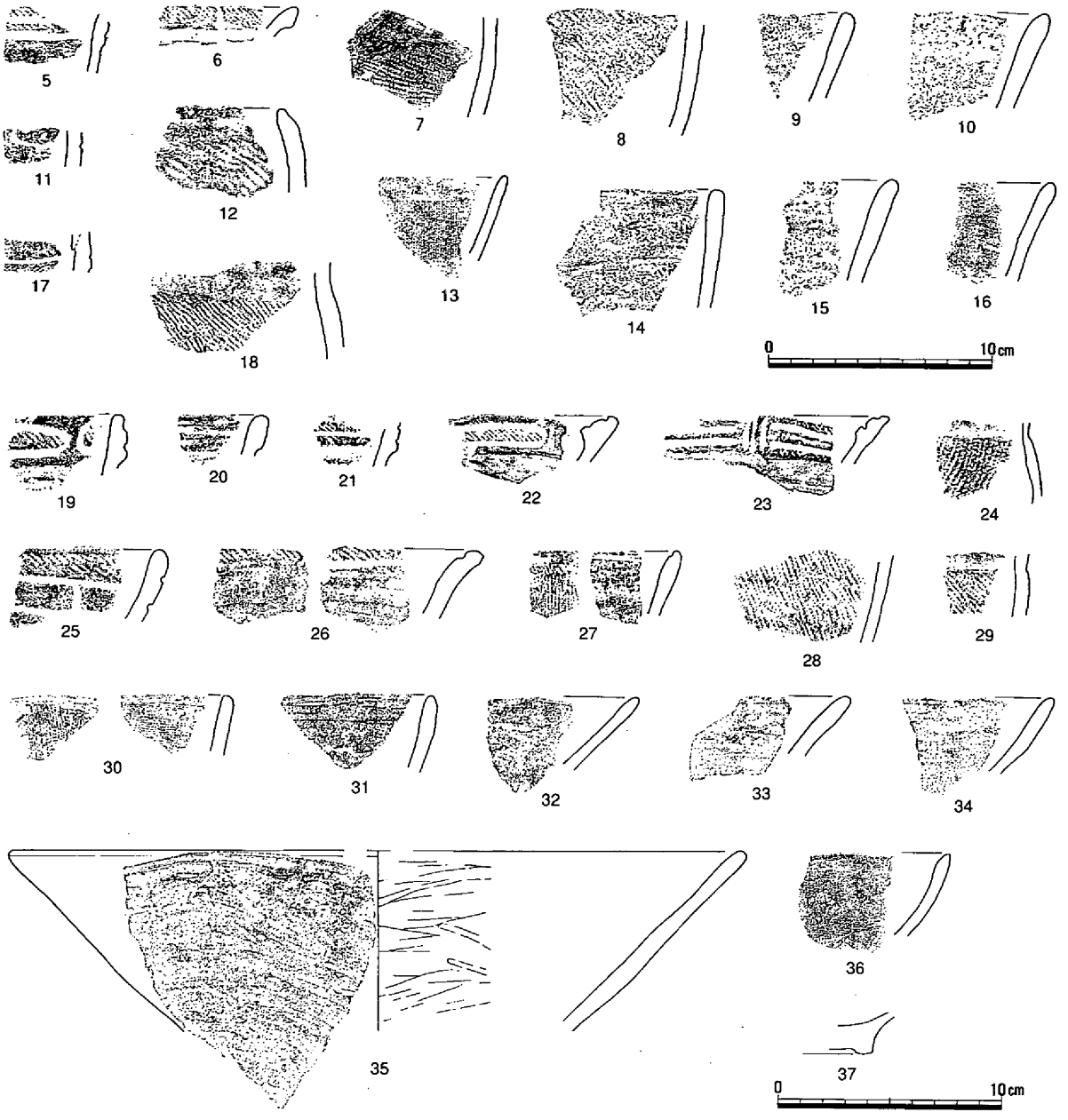
第98図　土壙８



第99図　土壙７



第100図　土壙９

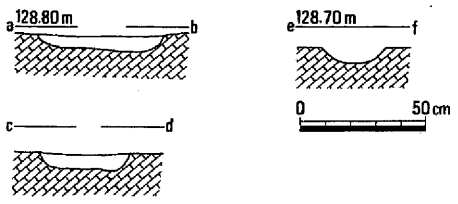


第101図　土壙９の出土遺物

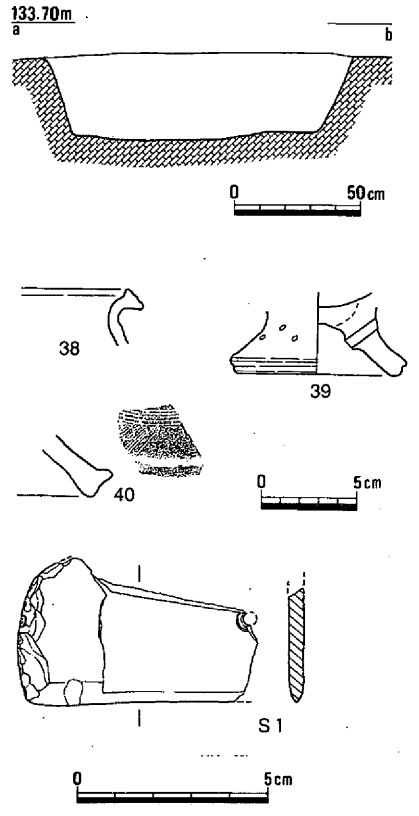
ら約2.3ℓの炭化米が出土した。土壙から出土した土器片は小破片であるため、形状は不明である。しかし、胎土は、後述する土壙９出土の縄文土器の胎土に、非常に良く似ていると言える。しかし、それにより土壙の時期を確定するものではない。調査中の観察や、周辺の遺構との関係から、弥生時代後期を含め、それ以前と推定される。

土壙８（第98図、図版14－３）

土壙７の東約５ｍの位置に検出したものである。平面形は方形に近い形状を呈しており、長辺94㎝、短辺88㎝を測る。断面形は逆台形を呈するものであるが、底面は凹凸がある。検出面からの深さは、深い部分で15㎝、浅い部分で約10㎝を測る。土壙からは数点の土器が出土している。４は、弥生土器で、外面はヘラミガキ、内面は頸部直下までヘラケズリが施されるものである。土壙の時期は、弥生時代後期前半と考えられる。



第102図　溝１（左）・溝２（右）



第103図　溝３と出土遺物

土壙９（第100・101図、図版14－３、図版16）

土壙７の北約1.5ｍの位置に検出したものである。調査区の端部であるため、調査区境の側溝などにより、北側の一部は不明であるが、平面形は五角形に近い形状を呈していたものと推定される。土壙の規模は、東西方向の最大径は106cmを測る。南北方向は一部不明であるが、100cm程度と推定される。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。土壙は黒ボク土により埋まるものである。土壙は、耕作土直下から検出したものである。検出面からの深さは20cmを測るが、圃場整備や、耕作による削平が、考えられることから本来は更に深かったものと推定される。

この土壙からは、まとまった量の縄文土器が出土した。**5**は、沈線と沈線の間に縄文が施されるものである。外面の下半と、内面はミガキが施される。**6**は、口縁部である。端部が少し肥厚し、その外面に縄文を施すものである。その他の部分は、磨きが見られる。**7**は、外面の一部に縄文が施され、残りの部分と内面は、ミガキが施される。**8**は、外面の全体に縄文が施されるものである。**9**・**10**は、口縁部である。端部は、丸く収められている。内面は、ミガキ、外面は荒いナデが見られる。**11**は、外面に沈線と縄文の施されるものである。**12**は、口縁部が見られるもので、端部付近はナデ、その下に縄文が施される。**13**は、口縁端部が丸く収められ、内面、外面共にミガキが施される。**14**・**15**も、口縁部の見られるもので、外面は荒いナデ、内面はミガキが施される。**16**は、口縁部が丸く収められ、胴部の内面外面共にミガキが施される。**17**は、２条の沈線の間に縄文が施されるもので、その上端は平滑に磨かれている。**18**は、外面上半は丁寧なナデ、下半は縄文が施される。**19**・**21**は、口縁部外面に、沈線で区画された中に縄文が施されるものである。**22**は、口縁部内面に沈線で区画した中に縄文を施すものである。**23**も、口縁部内面に沈線と縄文が見られるものである。**25**は、口縁部の外面端部に縄文が施されるものである。**30**～**36**は、内外面共にミガキの施されるものである。**37**は、上げ底の底部である。これらの土器には、彦崎ＫⅠ、彦崎ＫⅡ式に対応するものが見られることから、土壙の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

３．溝

溝１（第102図）

１区の南端部分に検出したものである。溝は北北東から南南西方向に向くものである。調査した全長は約15ｍである。検出した溝の幅は南半分に比べて北半分が広い。北半の幅は平均50cmを測り、南

半の幅は平均35cmを測る。断面形は浅い皿状を呈しており、検出面からの深さは６～７cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。溝は、暗褐色粘質土で埋まるものである。溝からの出土遺物がないため明確な時期については不明であるが、検出時の出土遺物から奈良時代に属するものと考えられる。

溝２（第102図）

溝１の東約４ｍの位置に検出したものである。溝は真北に近い方向を向くもので、全長4.3ｍを調査した。溝の幅は平均25cmを測るものである。溝の断面形はＵ字状に窪むもので、検出面からの深さは６～７cmを測る。溝は、暗褐色粘質土で埋まるものである。溝からの出土遺物がないため明確な時期については不明であるが、検出時の出土遺物から奈良時代に属するものと考えられる。

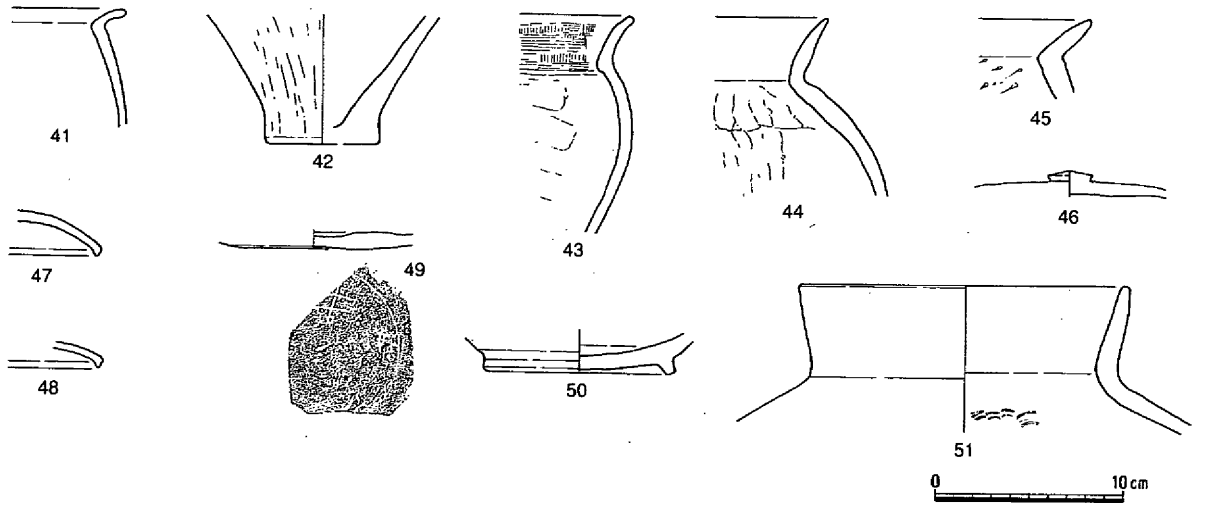
溝３（第103図、図版15－３・４、図版17－１）

３区中央部やや南よりの位置に検出したものである。溝は東南東から西北西を向くものである。細長い調査区を縦断するように全長約13ｍを調査した。溝の幅は、検出面で平均1.2ｍを測る。溝は黒ボク土で埋まるものであり、断面形は、逆台形を呈し、底面は平坦である。底面の幅は約１ｍを測る。検出面からの深さは平均34cmを測る。溝は黒ボク土除去後に検出したが、３区土層断面Ｉ－Ｊに見られる溝がこの溝３であり、同図に示すように溝の壁は黒ボク層の中程までは明らかに辿ることができる。しかし、黒ボク層の上面から掘り込まれたものかについては明らかに出来なっかた。

溝からは若干の遺物が出土している。**38**は、甕の口縁部である。外反した口縁部の端部が上方に拡張気味に肥厚する。内外面にナデが見られる。**40**は器台か、高杯の脚端部である。ヘラ描き沈線が施される。**39**は、台付鉢の脚部である。鉢部の内面はヘラミガキ、脚部の内外面はヨコナデが見られる。また、円孔が、外面から、内面に向けて貫通している。Ｓ１は、磨製石包丁の破片で、石材は流紋岩である。溝の時期は弥生時代後期前半と考えられる。

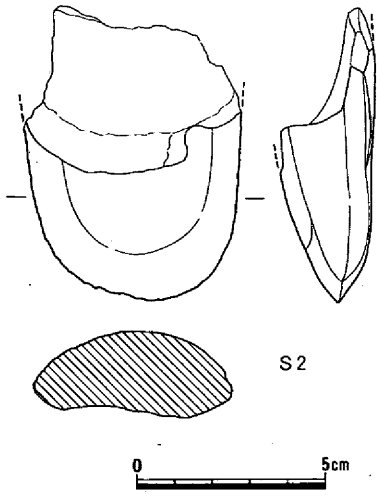
４．包含層・その他出土遺物

掘り下げ中や、遺構検出中にも遺物が出土している。ここでは、それら遺構には伴わない遺物について見て行きたい。**41**は、弥生土器で口縁部が、く字状に外反する甕である。内面調整はナデが施される。**42**は、甕の底部である。外面ヘラミガキ、内面ヨコナデが施される。**43**は、土師器の甕であ

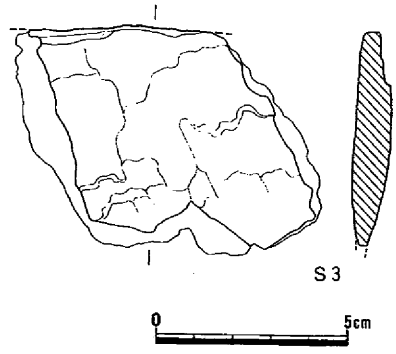


第104図　１区出土土器

第105図　２区出土土器



第106図　１区出土石器

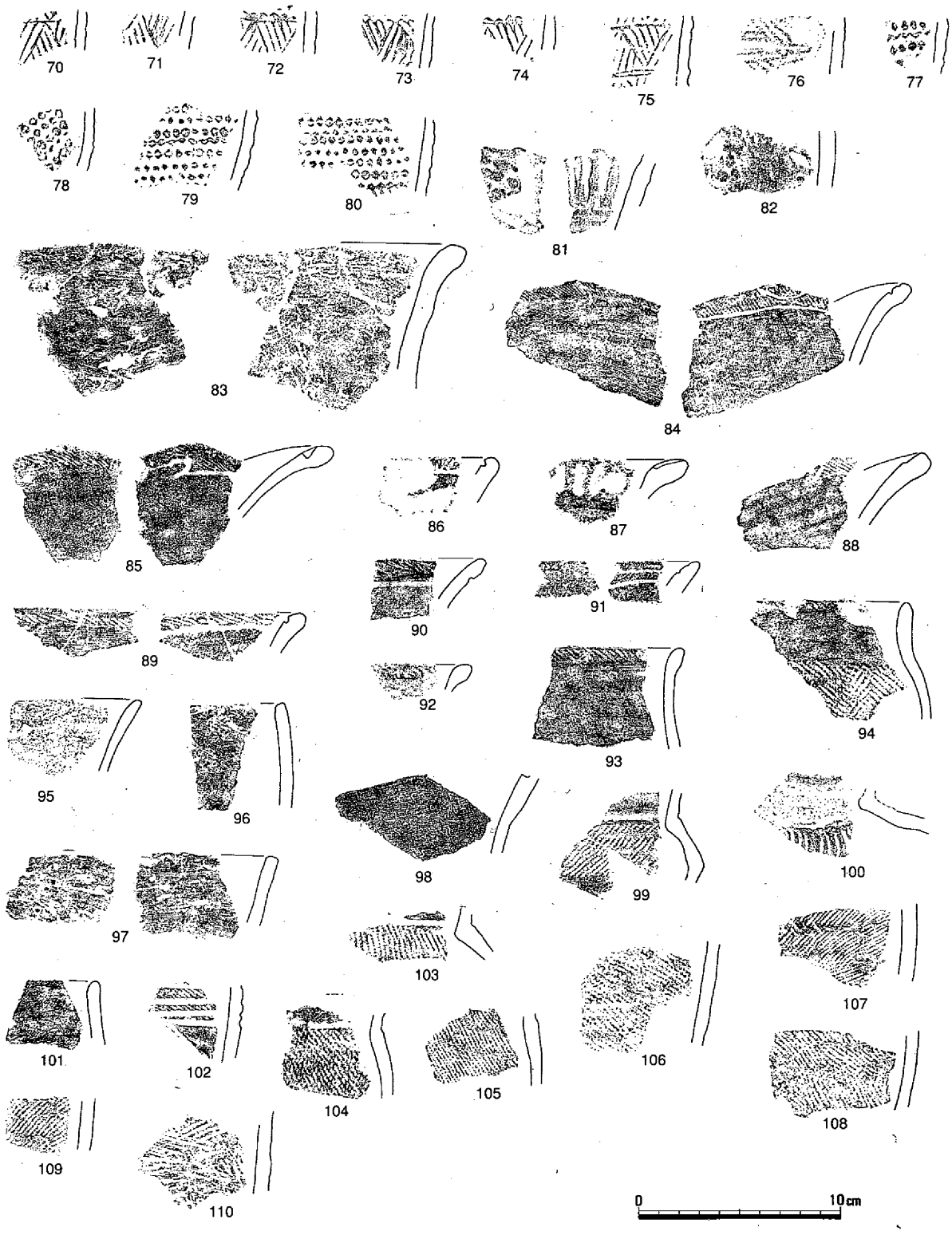


第107図　２区出土石器

る。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。44は、土師器の甕で、胴部外面は、工具によるナデ、内面は上部はナデ、下部は、ヘラケズリが施される。46は、須恵器の杯蓋で、扁平な摘みが付く。47・48は、須恵器の杯蓋である。端部が、下方に僅かに引き出される。何れも、重ね焼きの痕跡が見られる。49は、土師器の杯で、底部外面にヘラ描きの記号が見られる。50は、須恵器の高台の付く杯である。高台は、断面が台形で、僅かに外に開く。51は、須恵器の壺で、胴部内面に同心円状の工具の文様が見られる。肩部などに、自然釉が付着する。52は、弥生土器の壺で、胴部外面にヘラ描きの斜格子が施される。53は、弥生土器の甕で、胴部内面は、ヘラケズリが施される。54は、弥生土器の壺で、胴部外面の上半は縦方向にハケメを施した後に円形浮文が施される。胴部内面中央から下は、ヘラケズリが施される。55は、弥生土器の高杯の杯部である。内外面にヘラミガキが施される。57は、弥生土器の甕で、外面はハケメ、内面はナデによる調整が施される。58は、弥生土器の壺で、胴部内面はヘラケズリが施される。59は、弥生土器の長頸壺である。頸部外面は、ヘラによる沈線、内面はヘラミガキ、胴部内面は、ヘラケズリが施される。60は、弥生土器の壺で、胴部内面はヘラケズリが施される。61は、弥生土器の高杯の杯部である。62は、弥生土器の蓋で、外面はナデ、内面は工具によるナデが施される。63は、弥生土器の台付鉢の脚部である。外面下端部に凹線、内面上半はヘラケズリ、下半はヨコナデが施される。64は、弥生土器の器台の脚部である。外面には、凹線とクシ描き波状文が施される。65は、土師器の高杯の脚部である。67は、須恵器の甕で、内面に青海波状のタタキが見られる。68は、土師器の高杯の杯部である。内面は丁寧なナデ、外面下半はヘラケズリが、また、脚部との接合部にはハケメガ施される。69は、土師器の杯である。内面と体部外面はヨコナデ、体部下端にヘラケズリが施される。

70から82は、縄文時代早期の押型文土器である。70から76は、鋸歯文状の文様が施されるものである。この文様は、70・75に観られるように１本の線を挟んで２段に、もしくは、それ以上に施文されるものである。72・75の上端に観られるようにこの文様は、楕円押型文の間に施文されるものである。77から80は、楕円押型文土器である。楕円の長径は、５～６㎜を測るものである。器壁の厚さは、４～５㎜を測るもので、焼成は良好で堅く、胎土は緻密である。81は、深鉢の口辰部である。内面に平行の押型文が、外面には、楕円押型文が施される。楕円の長径は10㎜前後あり、80等に比べると大きい。83は、深鉢の口縁部である。外面には、条痕調整後ナデによる調整が見られる。胎土に繊維を多く含む。84から110は、縄文時代後期の土器である。84・85・89は、深鉢の口縁部で、端部の内外面に縄文が施され、内面は、１本の沈線で画される。87・88は、内面の口辰部に縄文が施される。90は、口辰部外面に縄文が施され、１本の沈線により画される。92・93・94は、口辰部に帯状に縄文を施し、その下段は平滑なミガキによる調整が施される。胴部は更に縄文が施される。95・96・97・98・101は、内外面ミガキの見られるものである。99・103・104は、胴部の破片で、屈曲部に１本の沈線と縄文の施されるものである。105～109は、胴部外面に縄文の施されるものである。110は、外面に条痕の見られるものである。

111から134は、弥生土器である。111は、壺の口縁部である。端面にクシ描き波状文が、外面には、三角凸帯を貼り付け、刻みを施す。112も壺の口縁部で、端面に円形浮文を貼り付ける。113は、壺の口縁部で、口辰部、三角凸帯に刻みを施す。114は、甕の口縁部である。115は、高杯の杯部である。口縁端部上面に３、４条の凹線が施される。116・117も高杯の杯部である。口縁端部上面が、外方に拡張し、上面に数本の凹線が施される。118は、台付鉢の脚部である。内面はヘラケズリ、外

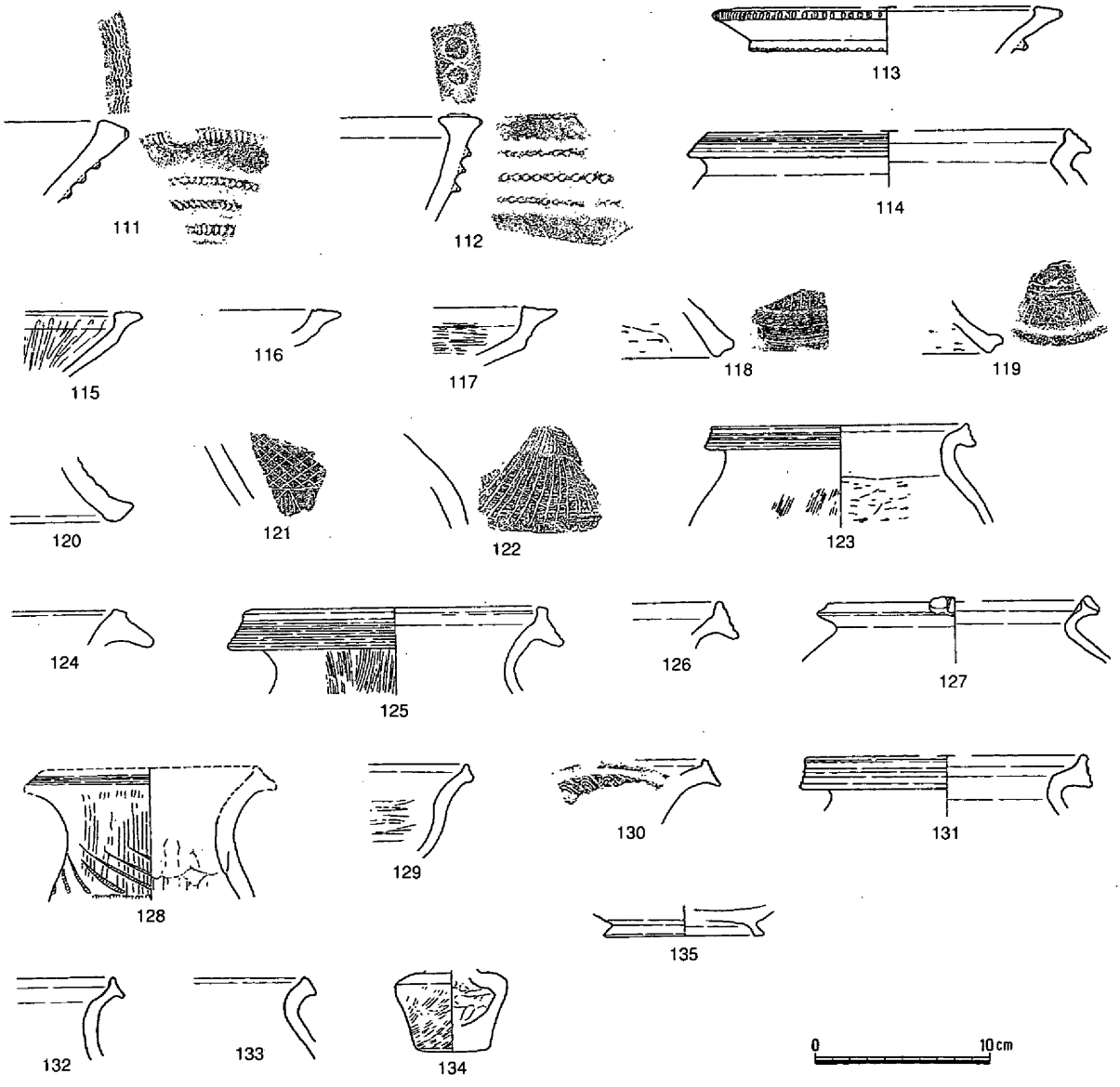


第108図　３区出土縄文土器

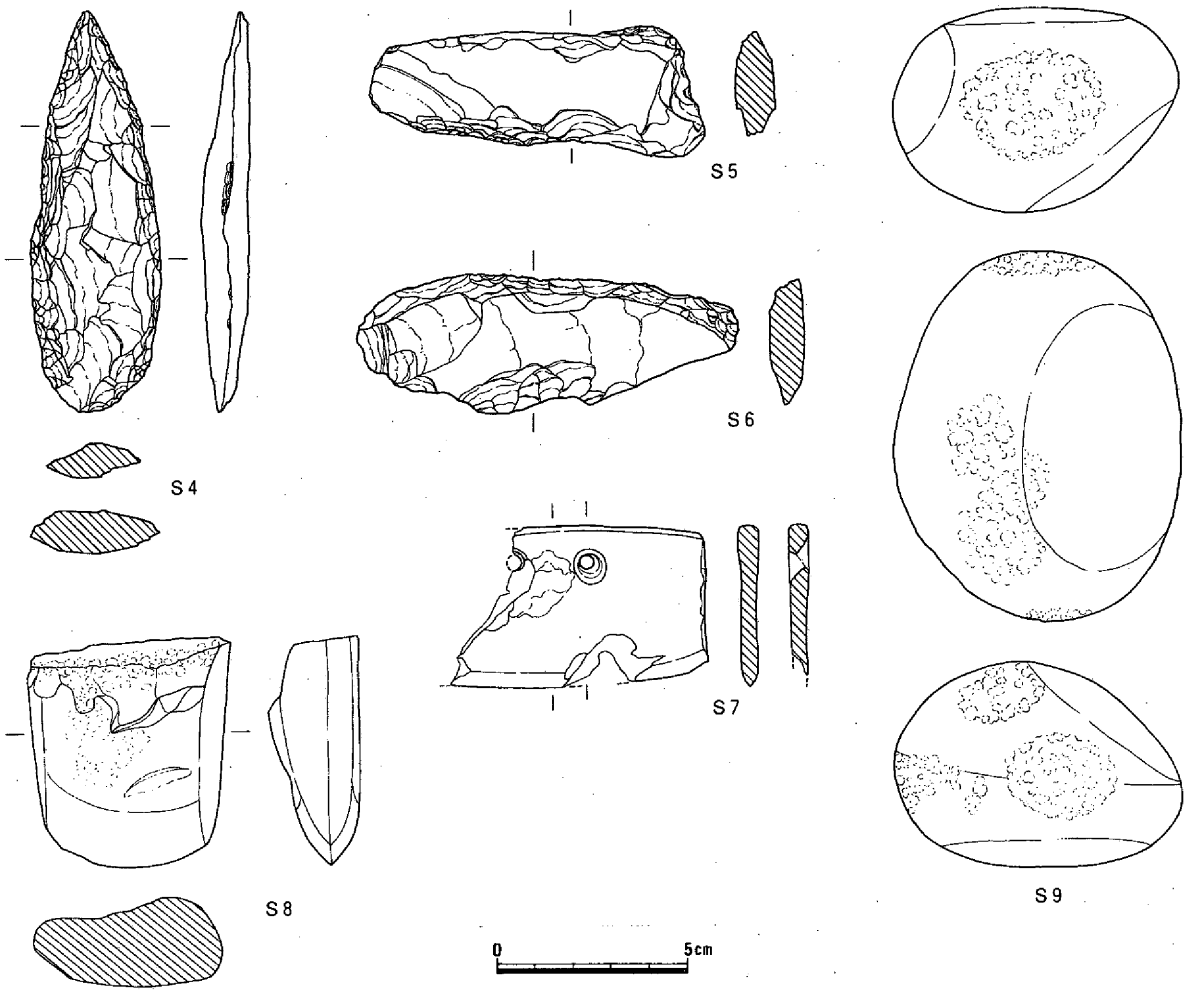
面にはヘラによる縦方向の線刻が見られる。**119**は、高杯の脚部である。内面ヘラケズリ、外面には縦方向の線刻が見られる。**120**は、器台の脚端部に近い部分である。外面に凹線が見られる。**121**は、壺の胴部である。外面にヘラによる斜格子、鋸歯文が施される。**122**は、壺の胴部と考えられるものである。外面にヘラによる刻線が見られる。**123**は、甕である。胴部外面はハケメ、内面は口縁部近

くまでヘラケズリが施される。127は、甕の口縁部に一か所であるが、粘土が浮文のように貼り付けられ、上面がつまみ上げられている。128は、壺である。頸部に縦ハケ後に板状工具による刺突文が斜めに施される。129は、鉢である。体部から口縁部に掛けて緩やかな曲線を描き、内面は横方向のヘラミガキが施される。130は、壺の口縁部である。口縁部の内面にクシ描きの波状文が施される。134は、手捏ねの土器で、内面は指押さえ、外面はハケメが施される。135は、須恵器の高台付杯の底部である。断面が台形を呈する高台が貼り付けられるものである。136は、須恵器の高杯である。137は、高台付き壺の底部である。端部が外に開く高台は、胴部形成後に貼り付けられたものである。138は、口縁端部は丸く収められ、内外面は、丁寧なヨコナデが施されるものである。土器は、大きな破片でないため口径の取り方に難しいものがあるが、底径はそのままで、図示したものより口径が少し小さくなる可能性がある。器面の色調は、内面外面共に茶褐色を呈しており、器壁の内部は灰色を呈している。焼成は、良好である。

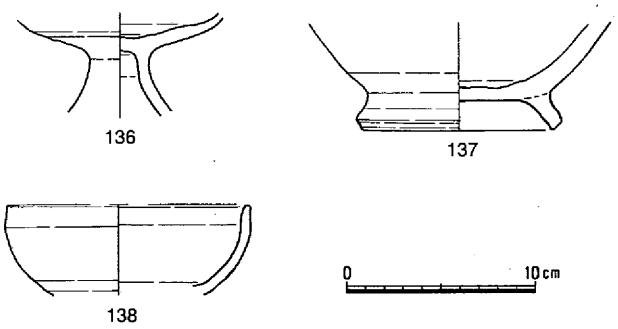
Ｓ２は、磨製石斧である。上半は欠損しており、刃部が残るものである。材質は、結晶片岩である。



第109図　３区出土土器



第110図　３区出土石器



第111図　４区出土土器

Ｓ３は、磨製石包丁である。完成品ではなく、未製品の欠損したものである。Ｓ４は、尖頭器である。完形品で、全長106㎜、最大幅34.5㎜、厚さ13㎜、重さ43ｇを測る。材質　は、サヌカイトである。出土した層位は、小形の楕円押型文土器の出土した層と同じである。Ｓ５は、スクレイパーで、材質は、流紋岩である。これも完形品で、全長88.5㎜、幅34.5㎜、厚さ11㎜、重さ39.5ｇを測る。Ｓ６は、石器の未製品で、材質は角閃石片岩である。Ｓ７は、磨製石包丁である。円孔より左は欠損している。右端部は、欠損後も修復して使用したものらしく、摩滅した痕跡が見られる。Ｓ８は、磨製石斧である。上半は、欠損しており刃部が残るもので、材質は溶結凝灰岩である。Ｓ９は、敲き石である。丸い石の数カ所にその痕跡が見られる。材質は玢岩である。

第３節　まとめ

調査により検出した遺構は、掘立柱建物４棟、土壙９基、溝３条である。検出した遺構は、多くはないが、時期的には、縄文時代、弥生時代、古代に属するものである。縄文時代の遺構は、今回明らかに出来たのは土壙１基である。縄文時代後期の土器が出土している。他にも可能性の有るものが存在するが、遺構の埋土が黒ボクであるため、弥生時代の遺構との峻別が難しい。そのため、土壙９のように明らかな遺物を伴出しない限りその決定は難しい。縄文時代の遺物としては、包含層からの出土であるが、楕円押型文土器が出土している。楕円の粒径が小粒であり、黄島式に相当するものと考えられる。押型文土器は、黒ボク層の下層の褐色粘質土（黒褐色粘質土）からの出土である。そのため、この地域においての黒ボク層の形成時期が、縄文時代早期には遡らないことが解る。しかし、縄文時代後期には形成されていたことは、土壙９から明らかである。押型文土器と同じ層から、Ｓ４の尖頭器が出土しており注目される遺物である。

弥生時代の遺構は、土壙と溝がある。中期後半から後期に掛けての遺構である。包含層の遺物を見ると、中期中葉の遺物も見られる。調査した場所は、遺構密度も高くない地区であったが、隣接地には、中期中葉の遺構も存在するものと考えられる。

土壙７からは、約2.3ℓの炭化米が出土している。ほとんど削平されており、深さ数cmを残すのみであった。そのため、時期を確定するような遺物が出土していない。土壙を埋める土は、黒ボクであるため、この遺跡においては、縄文時代後期以降の時期が候補になるが、決定すべき遺物がないため、その所属が確定しない。弥生時代の遺物としては、石包丁があり、稲作農耕を行っていたことは確かであるために、弥生時代である可能性もある。今後周辺を調査することが有れば、その点も考慮に入れることも必要であろう。

古墳時代が明らかな遺構は、検出されなかった。包含層からの出土遺物も他の時代に比べると少なく、土師器が若干出土している。古墳時代の須恵器の出土は、更に少ない。このことは、この地区においては、古墳時代は、主要な生活区域でなっかたものと推測される。

古代の遺構としては、掘立柱建物がある。規模は一様でないが、大開遺跡の掘立柱建物１、２（註１）に匹敵するものも存在する。距離的に約500ｍ離れるため、どのような性格を持つ物か、その関連性については、現状では解らない。ただ、この布原地区の台地上に点々と規模の大きい建物が存在することは（註２）、今後、同様の資料が増え解釈が出来るまで 注目する必要がある。建物の時期であるが、建物からの出土遺物が無いために、明確にする事は出来ないが、包含層からの出土遺物に奈良時代の須恵器があることから、大形の建物は、奈良時代と考えられる。

中世、近世については、ほとんど不明である。明らかにその時代とする事の出来る遺構は、検出していない。遺物については、近世陶磁器と考えられるものが僅かに出土している程度である。（井上）

註

1　第５章

2　『鏡野町史』考古資料編　鏡野町　平成12年３月

第７章　九番丁場遺跡

第１節　調査区の概要

九番丁場遺跡は、苫田郡鏡野町布原に所在する。布原は、東に低い山稜を持ち、三方は平地を望む段丘上に立地する。西方には、吉井川が南流する。遺跡は、段丘の南西端部に位置する。遺跡の調査は、平成７年、平成９年、平成11年の３年次に分けて調査した。

平成７年度

12月５日　１区より調査着手
12月11日　住居跡、柱穴を検出
　　遺構の検出作業

平成８年

１月10日　遺構の掘り下げ
１月20日　住居跡の掘り下げ
２月５日　２区調査着手
２月22日　住居跡の掘り下げ
３月21日　調査終了

平成９年

９月１日　４区から調査着手
９月18日　遺構の掘り下げ
10月８日　４区完了、調査中断
11月18日　調査再開、３区着手
12月25日　今年度の調査終了

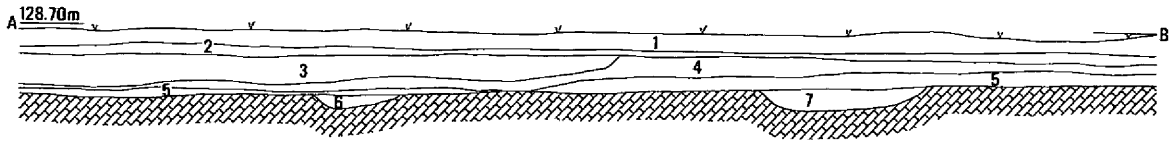
平成11年

４月５日　７区から調査着手
４月20日　５区、６区調査着手
８月27日　６区終了、９区着手
11月９日　10区トレンチ調査
　　８区調査着手

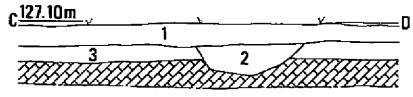
平成12年

１月28日　調査終了

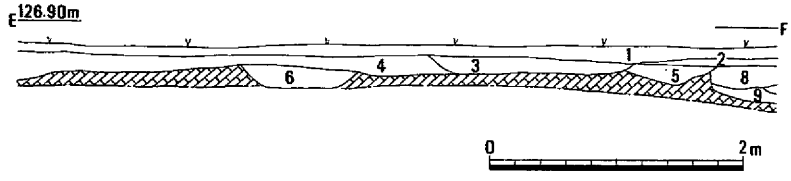
第112図　九番丁場遺跡全体図（S＝1/2000）



1　表土　　2　耕作土　　3　造成土　　4　造成土
5　褐灰色粘質土　　6　暗褐色粘性砂質土（溝2埋土）
7　暗褐色粘性砂質土（溝3埋土）

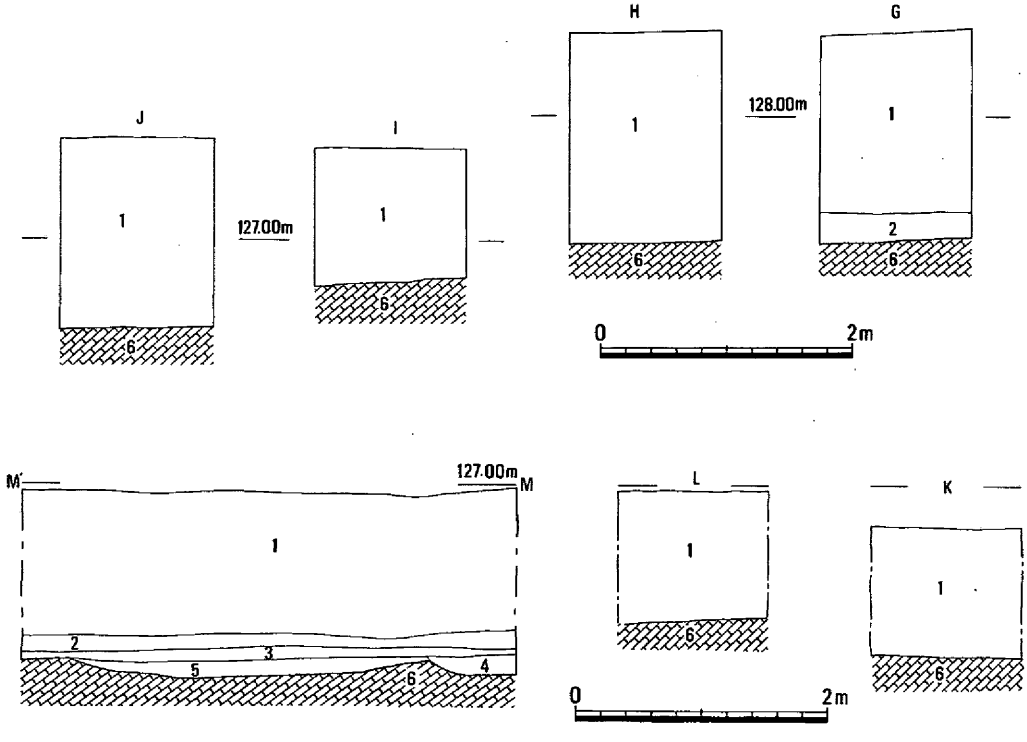


1　耕作土　　2　暗渠　　3　暗褐色粘性砂質土



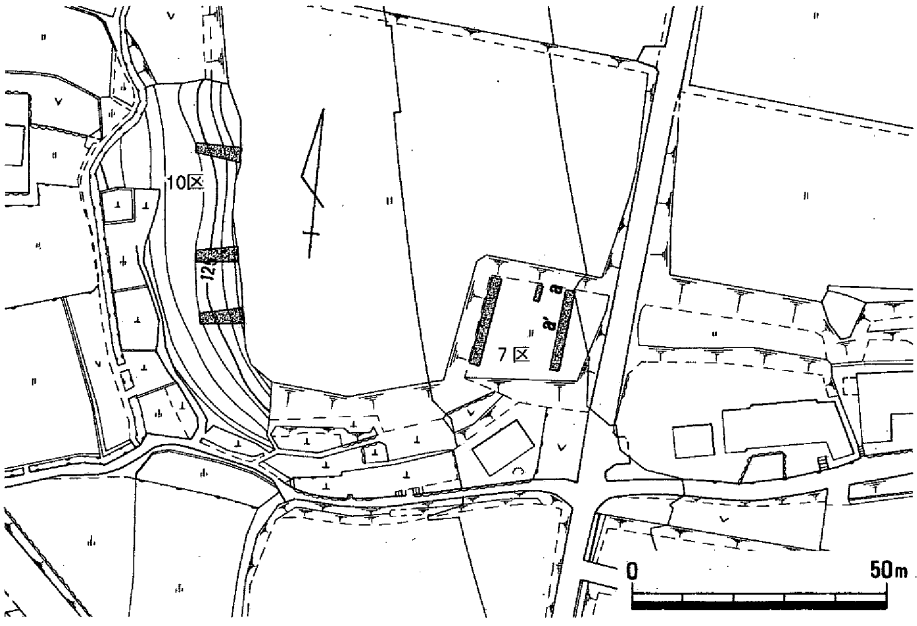
1　耕作土
2　灰色粘性砂質土
　（地山ブロック少し含む）
3　撹乱土
4　2と同じ
5　暗褐色粘性砂質土（溝　埋土）
　（地山ブロック少し含む）
6　暗褐色粘性砂質土
8　暗褐色粘性砂質土（土壙　埋土）
9　灰黄褐色粘性砂質土
　（地山ブロック含む）

第113図　４区・１区・３区　東壁土層断面（S=1/60）

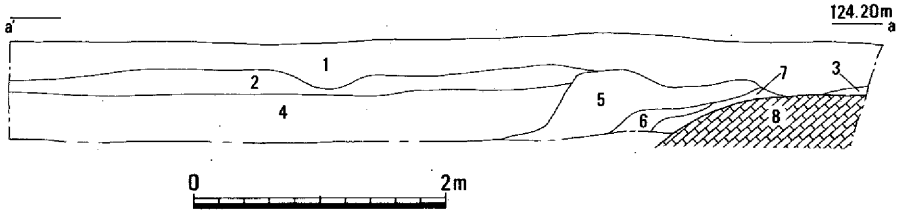


1　現代造成土　　昭和40年代圃場整備による
2　赤灰色（2.5Y4/1）砂質土　　褐灰色（5YR5/1）粘質土非常多含。現代造成土
3　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　　近、現代水田層
4　褐灰色（5YR4/1）粘質土　　近、現代撹乱
5　黒褐色（10YR3/1）粘質土　　礫少量含
6　黄橙色（10YR8/6）砂質土　　灰白色（10YR8/2）粘質土多含、地山

第114図　６区・９区　西壁土層断面図（S=1/60）



第115図　７区・10区トレンチ位置図（S＝1/1500）

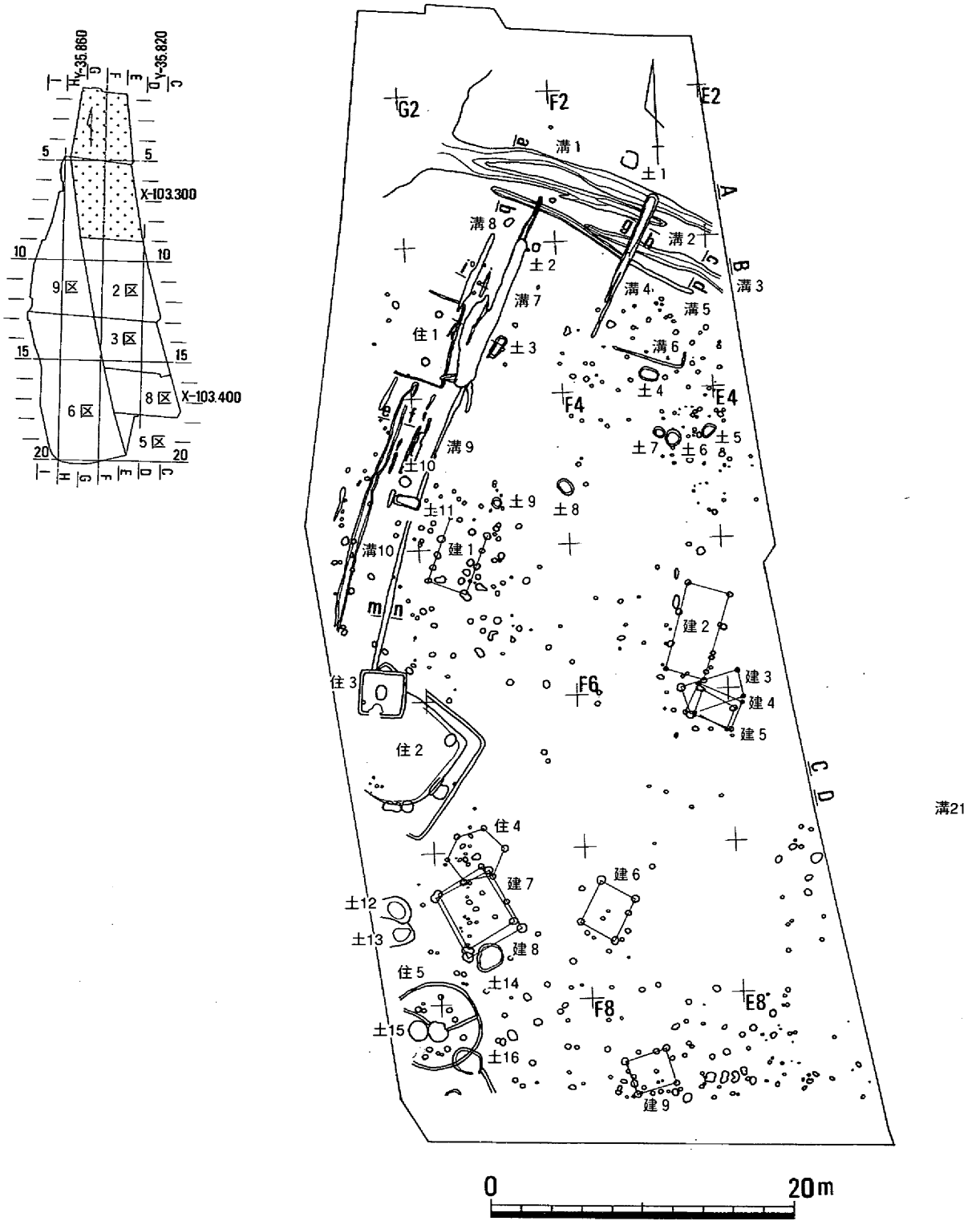


1　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
2　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土
　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊多含
3　黒色（N1.5/）粘質土
4　浅黄橙色（7.5Y8/6）粘質土　拳大礫多含
5　黒色（10Y2/1）粘質土　　黒ボク
6　灰色（7.5Y4/1）粘質土　　小石少含
7　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
8　灰黄色（2.5Y7/2）粘質土

第116図　７区トレンチ土層断面図（S＝1/60）

九番丁場遺跡の立地する布原地区は、昭和40年代の中頃に圃場整備事業を施工している。その影響は、この遺跡においても顕著に見る事ができる。ほとんどの遺構は、その工事に伴い削平を受けている。包含層が遺存していたのは、２区の南半分と、８区の一部のみである。特に大きく削平された部分は、３区の大部分と６区の北半分である。この部分においては、西側と東側の斜面に一部遺構を残すのみで、丘陵の鞍部となる部分においては、遺跡の全体図においても空白部として示されるように、全く遺構は検出されなかった。遺構の削平は、圃場整備事業だけでは無く、この段丘が、耕地として開墾された時から始まっている。しかし、その削平は、大きなものではなく一部に及ぶのみである。第113図上段の土層図で見ると、第５層は、古い耕作土である。その下層には、遺構が存在している状況が観察される。中段・下段の土層図には、地山層まで圃場整備の削平が及んでいる状況を示すものである。第114図においては、地山層まで削平がおよび、その後、圃場整備による盛土が相当に厚いことを示すものである。

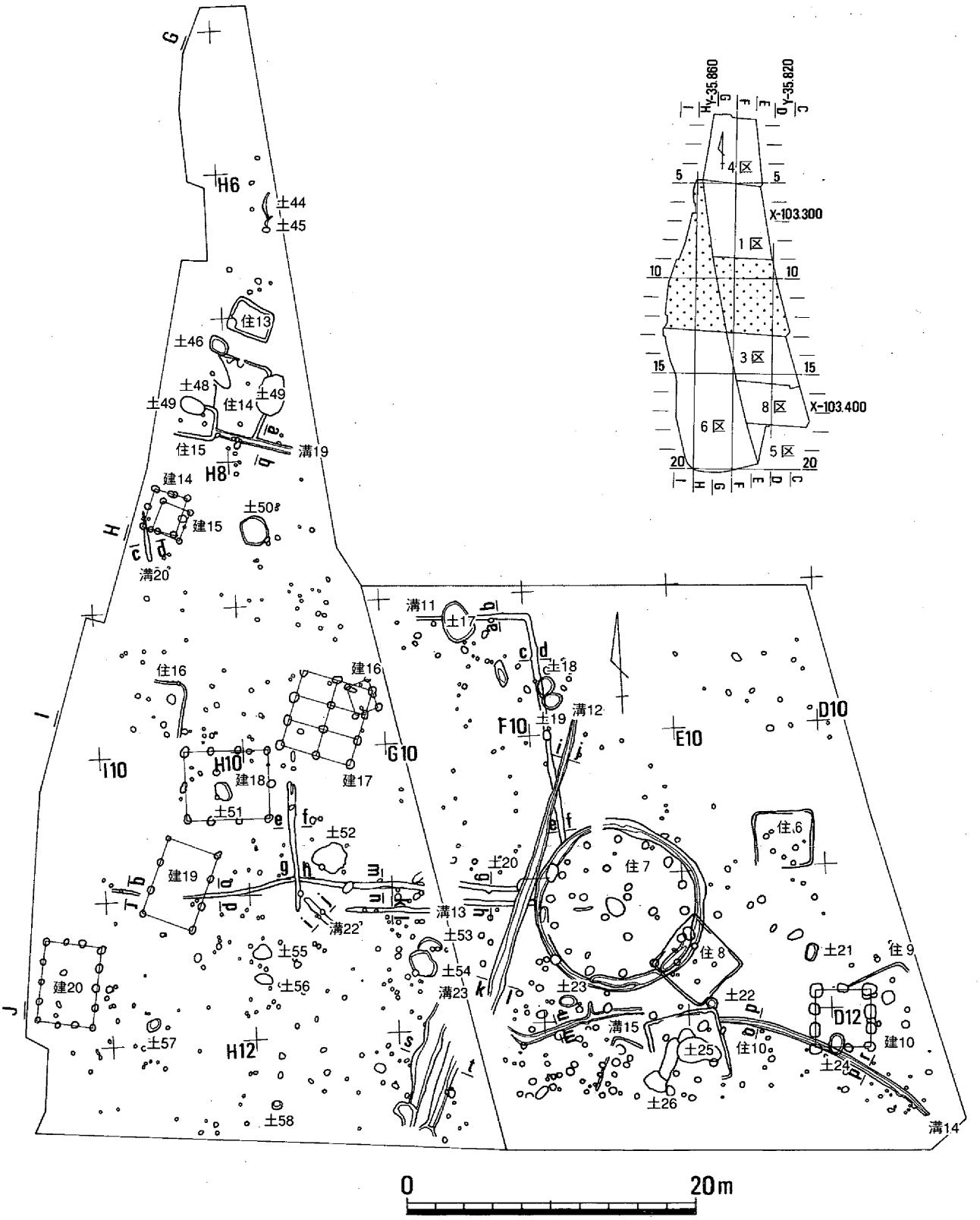
７区は、トレンチ調査を実施した。北側の８区との比高差が約２ｍ有るため、図示する位置にトレンチを設定した。西側、中央の２本のトレンチには、耕作土直下から全体に灰黄色の地山土を検出した。東トレンチからは、北端に一部灰黄色の地山土を検出し、南には、造成土が厚く堆積する状況を検出した。このことは、丘陵の端部が大きく切り下げられたことを示すものである。この状況に於い



第117図　４区・１区　遺構配置図（S=1/400）

ては、遺構の存在する可能性は無いものと判断した。

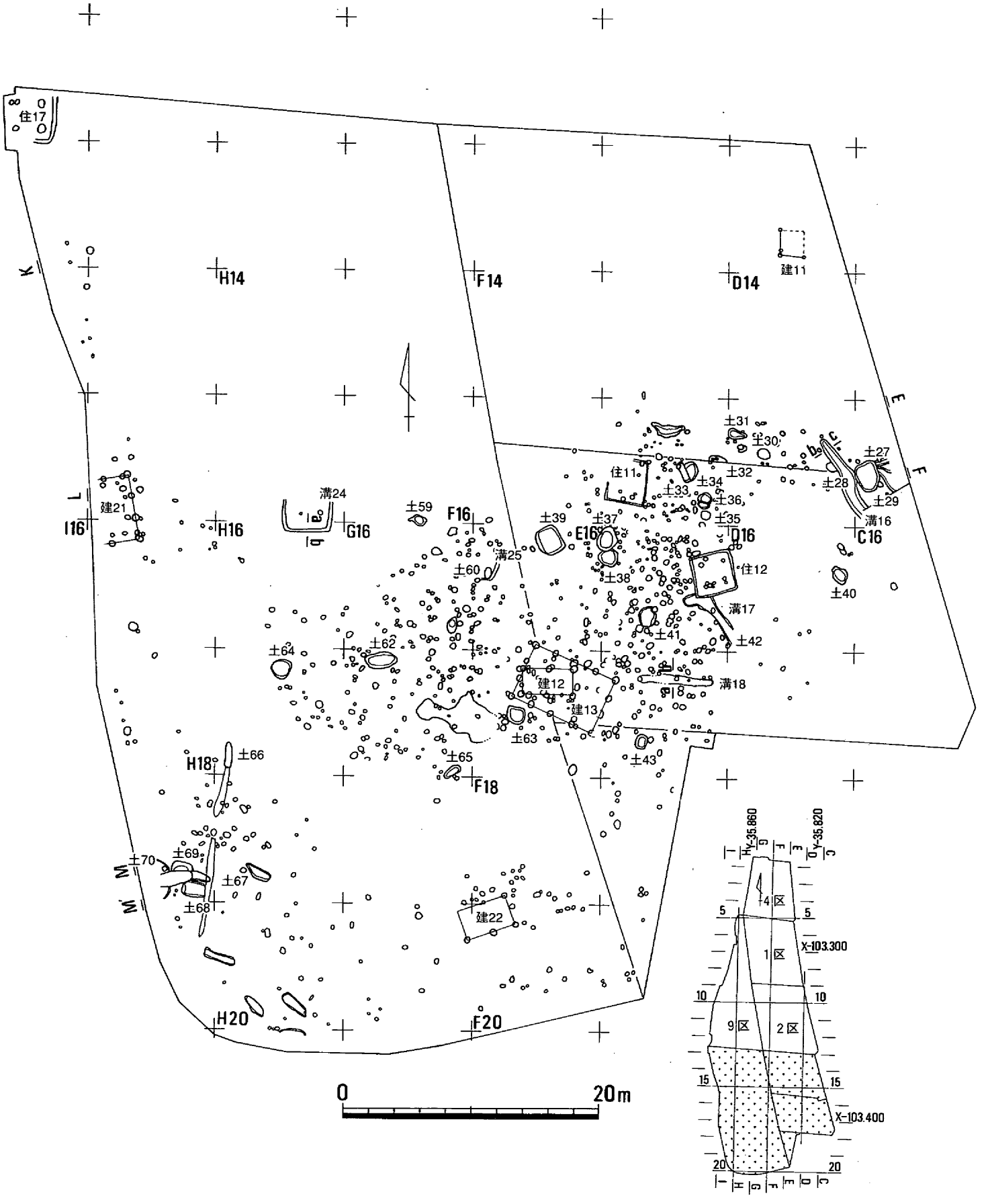
10区は、緩斜面が見られるため、遺構の存在が考えられた。しかし、６区の調査において圃場整備による盛土が厚いことから、本来の状態を示すものか疑問がわいてきた。そこで、図示する位置にトレンチを設定して調査した。その結果は、包含層も遺構も確認されなかった。また、トレンチの東端



第118図　２区・９区　遺構配置図（S＝1/400）

付近からやや急斜面になる事も判明した。その状態においては、遺構は存在しないものと判断した。以上の結果から、７区、10区は、トレンチ調査で調査を終了した。以下各区の概要を述べる。

（井上）



第119図　３区・５区・６区・８区遺構配置図（S=1/400）

４区の調査概要

４区は弥生時代中期～近世にいたる遺構が確認された。圃場整備によって大幅に盛土が行われていたが、旧地形は調査区の南東から北西に向かって２ｍの比高差で下がって北に開く緩斜面を呈し、北西側に谷地形が入るものと考えられる。このため遺構密度は薄いものであった。弥生時代中期の遺構は土壙５基と溝１条、その他柱穴が散在する。古墳時代については、後期の竪穴住居１軒、土壙２基、溝３条等が確認される。古代になると、溝２条などを検出したが、遺構は希薄である。中世では、土壙４基、溝５条のほか、調査区の南西端で耕作を行っていたと考えられ、耕作溝を検出している。また、南東の高いところに建物にまとまらないが柱穴が集中する。近世は、溝を１条検出した。（時實）

１区の調査概要

最初に調査に着手した調査区である。地形的には北西方向に下るものである。調査区の中央部が本来高かったと推定される。そのため、その部分に削平が強くおよんでいる。竪穴住居４棟、掘立柱建物８棟、土壙５基その他柱穴多数を検出した。住居跡は、弥生時代のものと、古墳時代後期に属する物がある。掘立柱建物は、古代の後半を中心とするものである。

２区の調査概要

この遺跡に於いては、北東端部に深く削平のおよぶ部分があるが、全体的には最も遺構の残りの良い地区である。竪穴住居５棟、掘立柱建物１棟、その他に、溝、土壙、柱穴などを検出した。住居跡は、弥生時代のもの２棟、古墳時代のもの３棟を検出した。掘立柱建物は奈良時代と考えられる。この調査区では、巨大な竪穴住居を検出した。（井上）

３区の調査概要

３区は圃場整備によって調査区の３/４以上が地山自体を大きく削平されていた。このため、南東部分のみにおいて遺構を検出することが出来たものの、遺構の残りは良くない。ここでは弥生時代中期～中世にかけての遺構を確認している。弥生時代中期の遺構は土壙１基と溝１条、古墳時代後期は土壙２基と溝１条、古代の土壙２基、中世の土壙２基等を確認した。（時實）

６区の調査概要

遺跡の南西部に位置する。段丘の端部に位置するため、東と西に傾斜する。また、６区は北側の半分近くが大きく削平されており、西斜面にかかる遺構以外は全く検出されなかった。検出した遺構は、竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、製鉄遺構１基、その他に土壙、柱穴などを検出した。竪穴住居は古墳時代後期に属する。また、製鉄遺構は、８世紀末頃と考えられる。

５区、８区の調査概要

道路用地部分では、最も南に位置する調査区である。地形的には、南東方向に傾斜する。東側の半分近くに遺構が検出されないのは、圃場整備以前の開墾や耕作による削平によるものである。検出した遺構は、竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、その他には溝、土壙、柱穴などを検出した。掘立柱建物は、８世紀末頃と推定される。溝からは、弥生時代中期の土器を多く検出した。

９区の調査概要

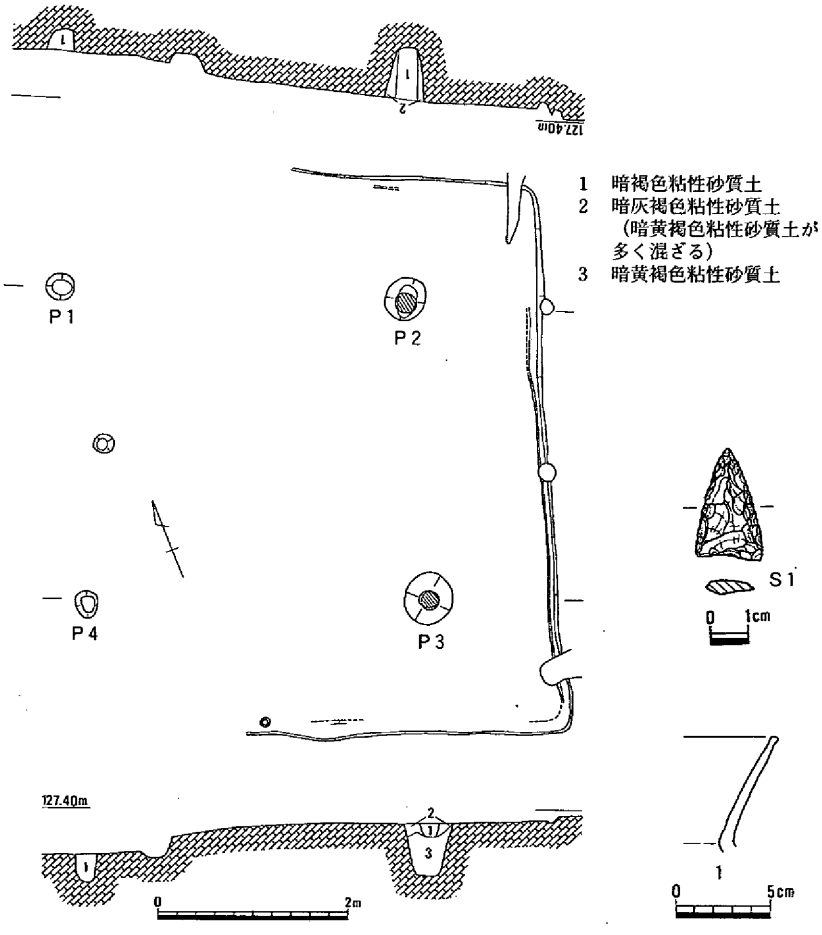
段丘の西端部に位置するため、地形的には、西に傾斜する。全体的に削平はされてはいるが、比較的残存状態はよい。検出した遺構は、竪穴住居４棟、掘立柱建物７棟、その他に、土壙、溝、柱穴などを検出した。竪穴住居は、弥生時代のものと古墳時代後期のものがある。掘立柱建物は、総柱建物と側柱建物があり、古代に属すると考えられる。（井上）

第２節　遺構と遺物

１．竪穴住居

竪穴住居１（第120図、図版19－２）

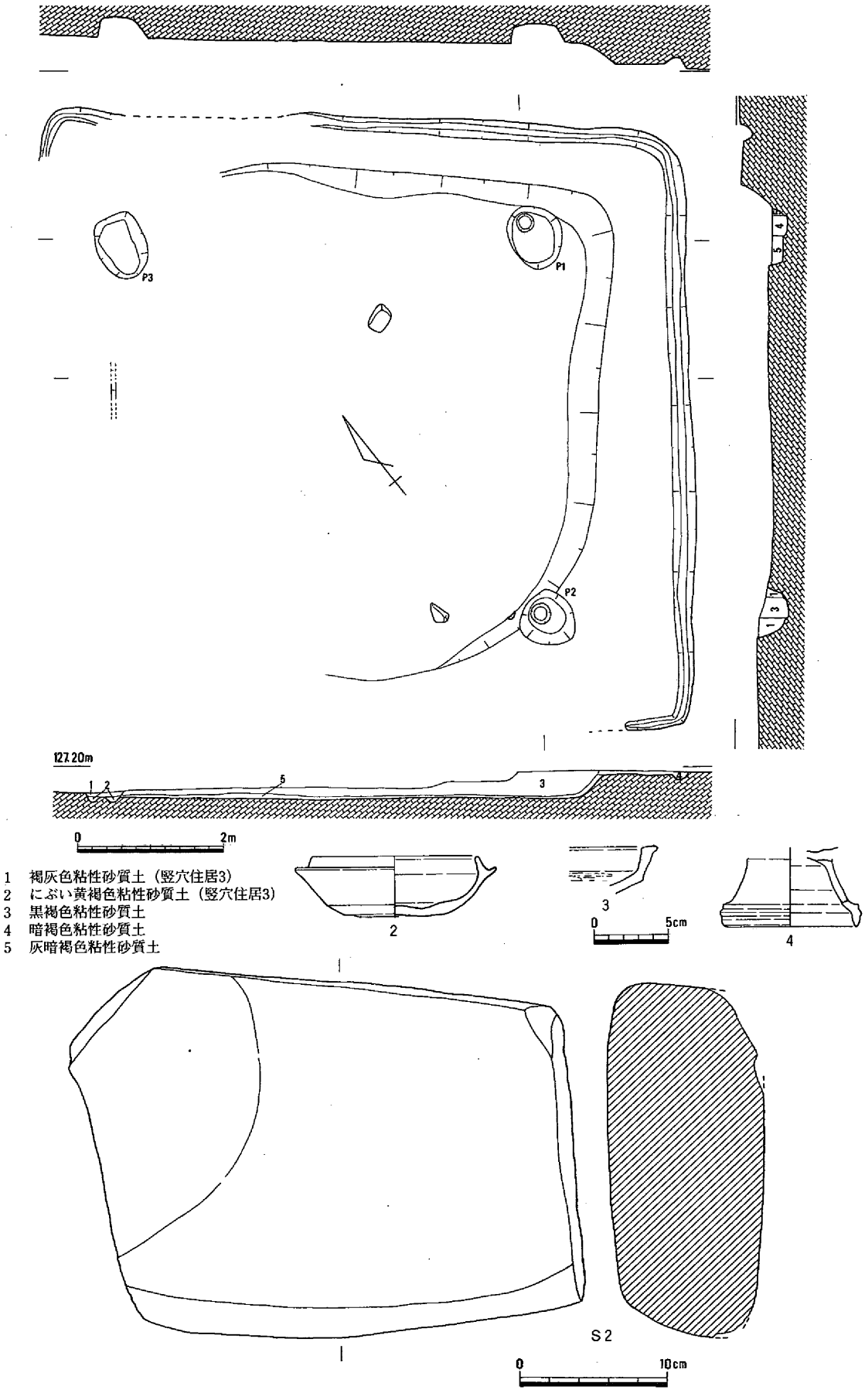
４区の南東において検出した、平面形が方形を呈すると推定される竪穴住居で、斜面に対して平行に位置している。全体に残りは悪く、最も残りの良いところでも検出面から床面までの深さは約７cmと浅いものであった。また、北西側の約半分については耕作による削平などで流出している。完全に検出することのできた東辺は577cmを測る。柱穴は４本検出しており、４本柱の構造であることが判る。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２で360cm、Ｐ３－Ｐ４で360cm、Ｐ１－Ｐ４で325cm、Ｐ２－Ｐ３で315cmを測る。検出した柱穴は床面から検出したＰ２が長径44cm、深さ56cmを測り、直径約22cmを測る柱痕跡が残っているのを確認した。また、Ｐ３は長径56cm、深さ54cmを測る。Ｐ１、Ｐ４については、上面が削平を受けているが、検出面からの深さは約30cmを測る。壁面に沿って床面からの深さ10cm、幅10cmを測る壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦であり、断面において厚さ約２cmを測る貼床を全面に施していることを確認した。出土遺物であるが、覆土よりサヌカイト製の石鏃（Ｓ１）が１点と貼床の直上において甕の口縁部分（１）と考えられる須恵器片と土師器の細片が少量出土している。竪穴住居の時期については、出土している土器からおよそ６世紀後半であると考えられる。　（時實）



第120図　竪穴住居１と出土遺物

竪穴住居２（第121図、図版19－３）

１区の北東部において検出した。平面形が方形を呈する竪穴住居である。西向きの斜面に位置するこの住居跡は、斜面側が後世の削平を受けたものと考えられ、西側の角部分を検出することは出来なかった。また北側の角は、辛うじて検出することが出来た。住居跡は、壁体溝を検出したもので、壁



第121図　竪穴住居２と出土遺物

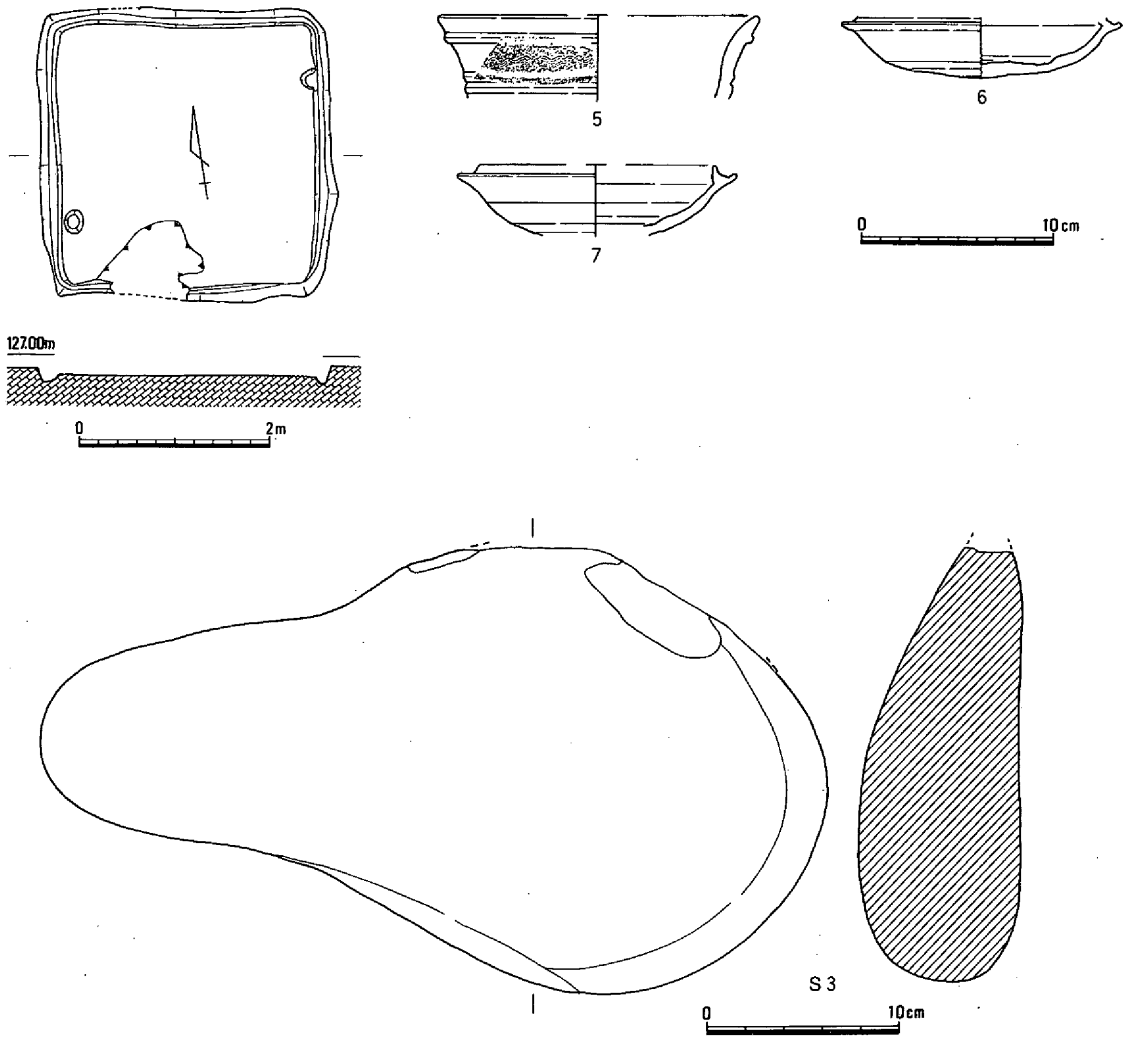
体部分は、削平されており検出されなかった。残存する部分での住居跡の規模は、北東辺が882㎝、南東辺が、824㎝を測る。この住居跡からは、ベッド状遺構を検出した。北東辺、南東辺には、全体的に取り付くものと考えられる。北西辺には、その一部と考えられる痕跡を検出した。南西辺については、一部検出したものの、全体の状況は、不明である。ベッドの幅は、北東側が狭く、50～60㎝を測る。南東側は、少し広くなり65～110㎝を測る。床面からの高さは、最も残りの良好な部分で、42㎝を測る。柱穴は、西側の１本を除く３本を検出した。柱穴の平面形は、概ね円形を呈するものである。Ｐ１は、長径90㎝、短径70㎝を測る。検出面からの深さは、22㎝を測る。Ｐ２は、長径78㎝、短径72㎝、検出面からの深さ、22㎝を測る。Ｐ１、Ｐ２からは、柱痕跡を検出した。柱の芯芯間の距離は、540㎝を測る。Ｐ３は、長径88㎝、短径68㎝、検出面からの深さは、16㎝を測る。柱穴Ｐ１、Ｐ３の中心間の距離は、560㎝を測る。住居跡床面の中央部やや北東よりに長方形の石を検出した。**Ｓ２**がその石であるが、作業台と考えられるものである。出土遺物であるが、**２**は、須恵器の杯身である。受け部は、少し上方を向き、口縁部は、少し内傾して立ち上がる。床面近くからの出土である。**３**は、弥生土器の高杯の一部であり、埋土からの出土である。**４**は、須恵器高杯の脚部である。同じく埋土からの出土である。**２**の須恵器がこの住居跡に伴うものと考えられることから、住居跡の時期は、６世紀の後半と考えられる。（井上）

竪穴住居３（第122図、図版20－２、図版35－１）

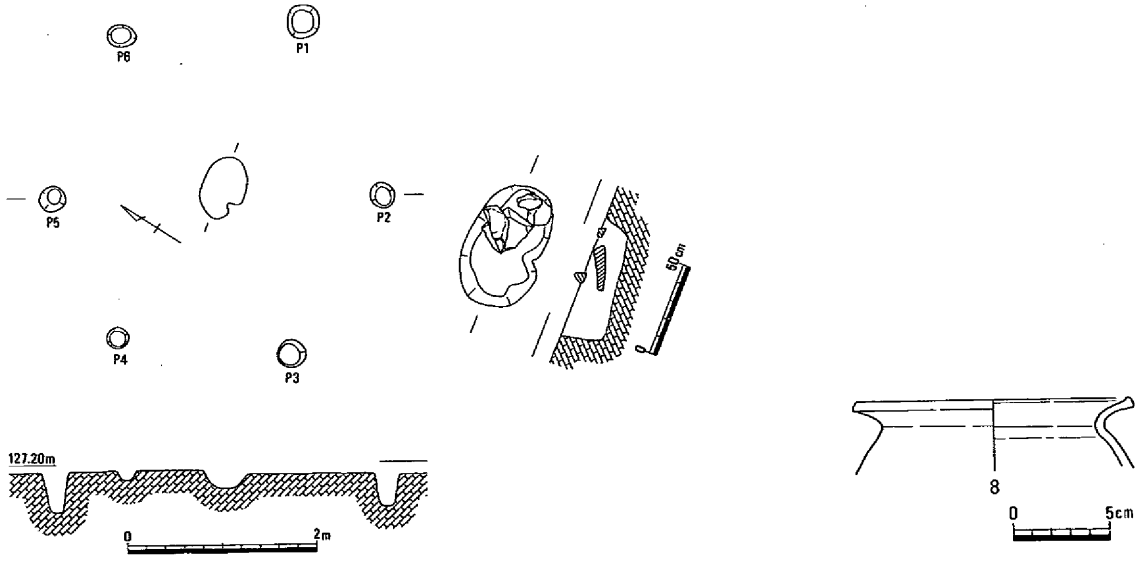
竪穴住居２の北端部に重複して検出した。平面形が正方形を呈する竪穴住居であり、一辺は310㎝を測る。検出した壁体の高さは、12～16㎝を測る。壁に沿っては、全体に溝が検出された。溝の幅、深さ共に10㎝程度を測る。床面からは、小さな穴を検出したが、柱穴と考えられるものは検出されなっかた。竪穴住居２と重複する部分で、それに伴うベッド、壁体溝は検出されず、竪穴住居２の埋没後に掘り込まれた状況を呈していた。床面は平坦で、そのほぼ中央部で扁平な石を検出した。**Ｓ３**がその石の実測図である。平らな面を下にして床面に据え置かれる状態であった。この石を取り除いた下に竪穴住居２のＰ３を検出した。出土遺物であるが、**５**は、須恵器壺の口縁部である。外面に櫛描き波状文が施される。**６・７**は、須恵器杯身である。受け部は、少し上を向き、口縁部は少し内傾して、短く立ち上がる。時期は、須恵器杯身 がこの住居跡に伴うものと考えられ、６世紀後半も終末に近い時期と考えられる。（井上）

竪穴住居４（第123図、図版20－３）

竪穴住居２の南東約２ｍの位置に検出した。検出したのは、６本の柱穴と、それらの中心に中央穴と考えられる土壙である。壁体や壁体溝は削平されたものと考えられ、検出されなっかた。柱穴は、正六角形に近い状態で検出した。Ｐ３～Ｐ４が、180㎝、Ｐ４～Ｐ５が、170㎝を測る。他の柱穴間の距離は、概ね200㎝を測る。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径24～35㎝を測る。検出面からの深さは、約40㎝を測る。床面も、壁体溝の深さ以上に削平されているため貼床等の状況については、不明である。これら柱穴群の中心に１個の土壙を検出した。平面形は、楕円形を呈するもので、長径68㎝、短径40㎝を測る。長軸の方向は、東西方向を向く。断面形は逆台形を呈するもので、検出面からの深さは、22㎝を測る。土壙の東側には、掌大の石が数個検出された。位置的に中央穴と考えるものである。出土遺物として**８**の弥生土器がある。甕の一部で、胴部内面にはヘラミガキが施される。口縁部は、大きく外反し、端部は少し肥厚する。住居跡の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。（井上）



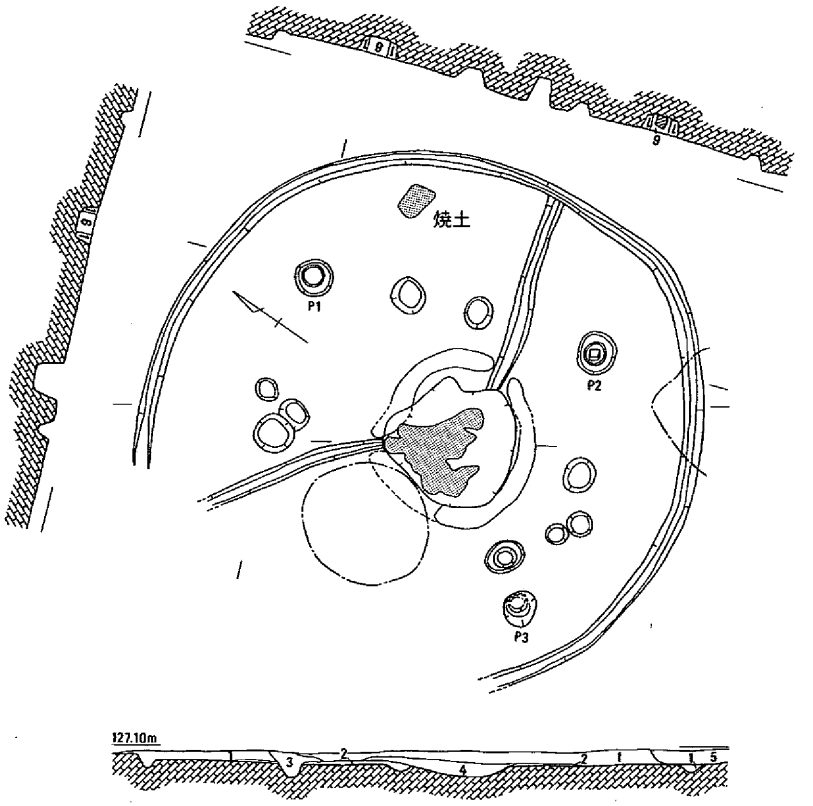
第122図　竪穴住居３と出土遺物



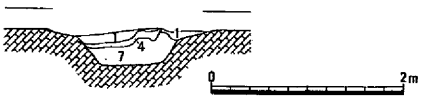
第123図　竪穴住居４と出土遺物

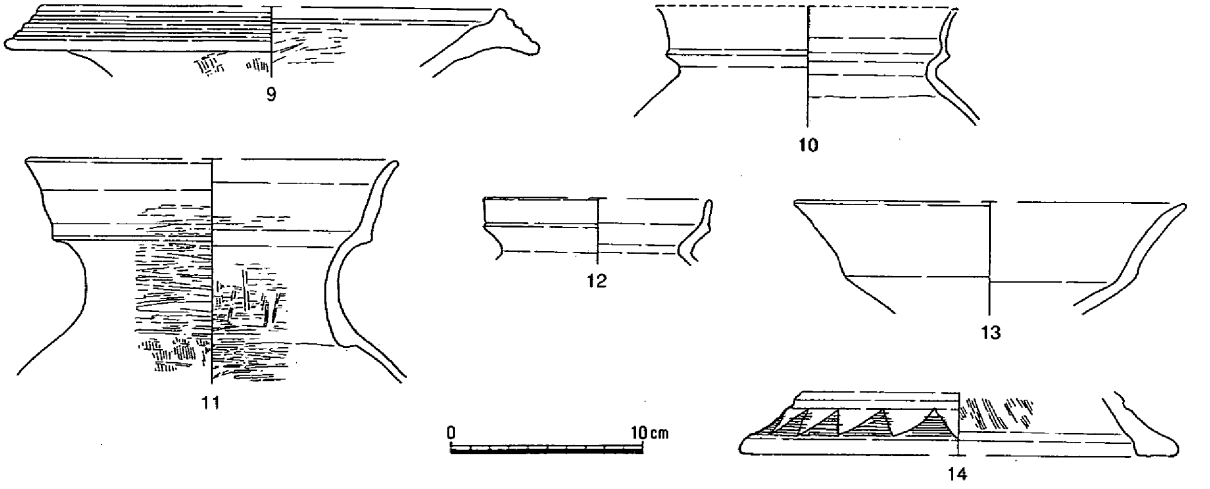
竪穴住居５（第124図、図版21－１、図版35－２）

竪穴住居２の南約10ｍの位置に検出した。住居跡は、平面形が円形を呈するものであるが、西側の一部が調査区の端にかかるため、全体は検出できなかった。検出面での規模は、長径590㎝、短径580㎝を測る。壁体は、遺存状態の良好な部分で約10㎝を測る。壁体溝は、壁に沿って全体に巡るものと考えられる。壁体溝の幅は、10～15㎝、深さ約10㎝を測る。４本柱の住居跡と考えられるが、西側の１本は、調査区の関係で検出できていない。柱穴は、何れも平面形は円形を呈しており、長径38～40㎝を測る。検出面からの深さは、約20㎝を測る。柱穴には、何れも柱痕跡を確認した。土層断面から、直径20㎝程度の柱が予測される。柱の芯芯間の距離は、Ｐ１－Ｐ２は、310㎝、Ｐ２－Ｐ３



1　暗褐色粘性砂質土
2　黄褐色粘質土
　（地山ブロック混じり）
3　暗褐色粘性砂質土
　（地山ブロック混じり）
4　暗赤褐色粘性砂質土
　（焼土）
5　黒褐色粘性砂質土
　（地山ブロック混じり）
6　黒褐色粘性砂質土
7　黒褐色粘質土
　（地山ブロック少し含む）





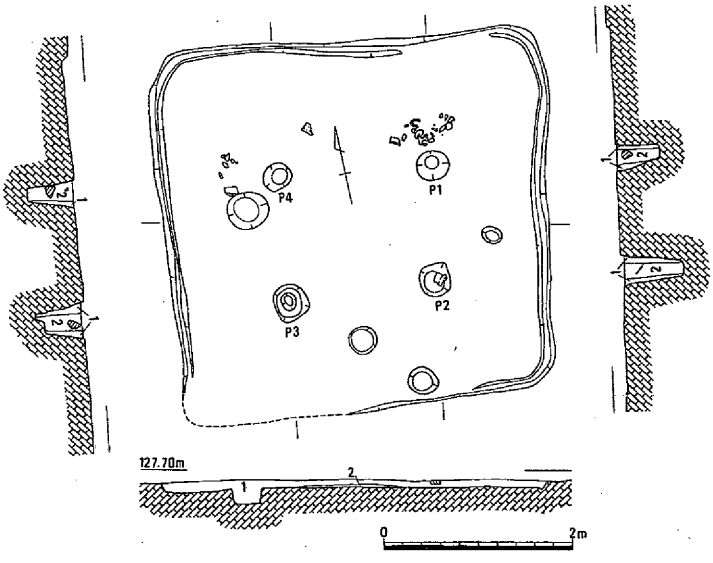
第124図　竪穴住居５と出土遺物

は、290cmを測る。住居跡のほぼ中央に中央穴を検出した。また、中央穴と壁体溝とを結ぶ溝を２本検出した。床面に検出した溝は、中央穴から東に延びるものと、北西に延びるものである。これらの溝の規模は、壁体溝とほぼ同規模である。中央穴は、長径約100cmを測るもので、ほぼ円形を呈している。断面形は、逆台形を呈するもので、底面は平坦である。検出面からの深さは、38cmを測る。中央穴の縁にはそれを取り囲むように土手状に盛り上がるものを検出した。その高さは、２～３cmを測るものである。この土手状の遺構も先の溝の部分では途切れていた。床面には、非常に薄い部分もあるが、貼り床を検出した。北東部の壁体溝に近い床面部に被熱による赤変部分を検出した。赤変部は、長方形に広がるもので、長辺38cm、短辺24cmを測る。また、中央穴からも焼土を検出した。

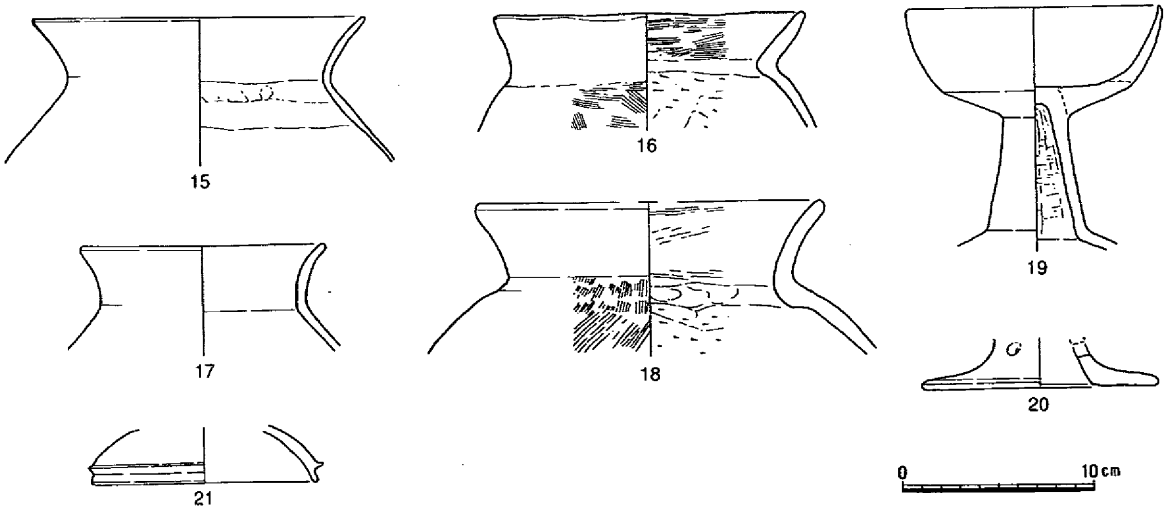
出土遺物としては、**9**の壺の口縁部がある。外面にハケメ、内面にヘラミガキが施される。**10**は、壺の口縁部である。胴部内面はヘラケズリ、外面に煤が付着する。**11**も壺である。胴部内面はヘラケズリ後ヘラミガキが施される。外面にもヘラミガキが観察される。**12**は、甕の口縁部で、煤が付着する。**13**は、高杯で、内外面にヘラミガキが施される。**14**は、器台で、鋸歯文が施される。住居跡の時期は、伴出した遺物から弥生時代後期末と考えられる。（井上）

竪穴住居６（第125図、図版21－３、図版35－３）

２区中央部の東寄りに検出した。南西部の角は削平されており検出されなかったが、平面形が隅丸方形を呈するものである。壁体は、完全に削平されているため検出され無かった。壁体溝は、一部途切れながらもその大部分を検出した。検出できた壁体溝の幅は、10cm程度で、深さも２～３cmを測るものである。住居跡の規模は、最大長は東西幅で420cm、南北幅の最大長は、400cmを測る。住居跡の床面には、柱穴状の小穴を



1　黒褐色粘性砂質土　　2　暗黄褐色粘性砂質土



第125図　竪穴住居６と出土遺物

８個検出したが、この住居の柱穴は、番号を振った４本がそれに相当するものと考えられる。柱穴は、平面形が、何れも円形を呈するものである。Ｐ１は、長径38㎝、深さ44㎝を測る。Ｐ２は、長径36㎝、深さ62㎝を測る。Ｐ３は、長径40㎝、深さ、45㎝を測る。Ｐ４は、長径30㎝、深さ50㎝を測る。これらの柱穴には、何れも柱痕跡が見られた。これら柱間の芯芯距離は、Ｐ１－Ｐ２間が220㎝、Ｐ２－Ｐ３間が260㎝、Ｐ３－Ｐ４間が240㎝、Ｐ４－Ｐ１間が260㎝を測る。Ｐ１の北側に床面に貼り付いた状態で、土器群を検出した。住居跡の中央部分に一部貼り床を検出した。断面図土層の２がそれに相当する。

出土遺物を見ると、土師器の甕がある。**15**は、表面の剥離が著しいため調整は不明であるが、胴部内面にヘラケズリの痕跡を見ることが出来る。**16・18**は、胴部外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリが施される。**19・20**は、高杯である。脚柱部内面はヘラケズリが見られる。**21**は、陶質土器の蓋である。丸い天井部を持つこの蓋は、その出自を直接朝鮮半島に求めることが出来るものか、もしくは、その影響を強く受けたものであると考えられる。時期は、５世紀の前半と想定される。　　（井上）

竪穴住居７（第126図～第130図、巻頭図版、図版36、図版37－１）

２区ほぼ中央で検出した、平面形がおおよそ円形を呈する住居である。北から続いてきた丘陵の頂部に立地する。周辺の旧地形は南と東へ緩やかに下がっているが、ほぼ平坦である。

この住居の直径は断面図のＡ－Ｂラインで示した部分で12ｍ、Ｃ－Ｄラインでは11.6ｍを測る。また深さは検出面から18～30㎝である。

土層観察と平面の状況から、住居の改築が１回は存在したものと思われる。土層では住居の最大範囲より内側に壁体溝からの立ち上がりが見られ、平面では壁体溝が２重になる部分が確認できた。以下、新しい住居を住居７（新）、古いものを住居７（古）と呼称する。

第126図の断面図上側に示したＡ－Ｂライン東側では、第１層から第４層は竪穴住居７より新しい竪穴住居８のものである。第５層、第７層は住居７（新）の埋土、第８層は住居７（新）の壁体溝埋土、第６層は住居７（新）貼り床と認識した。また第９層は住居７（古）住居埋土、第10層は住居７（古）貼り床、第11層は住居７（古）壁体溝埋土と考えている。

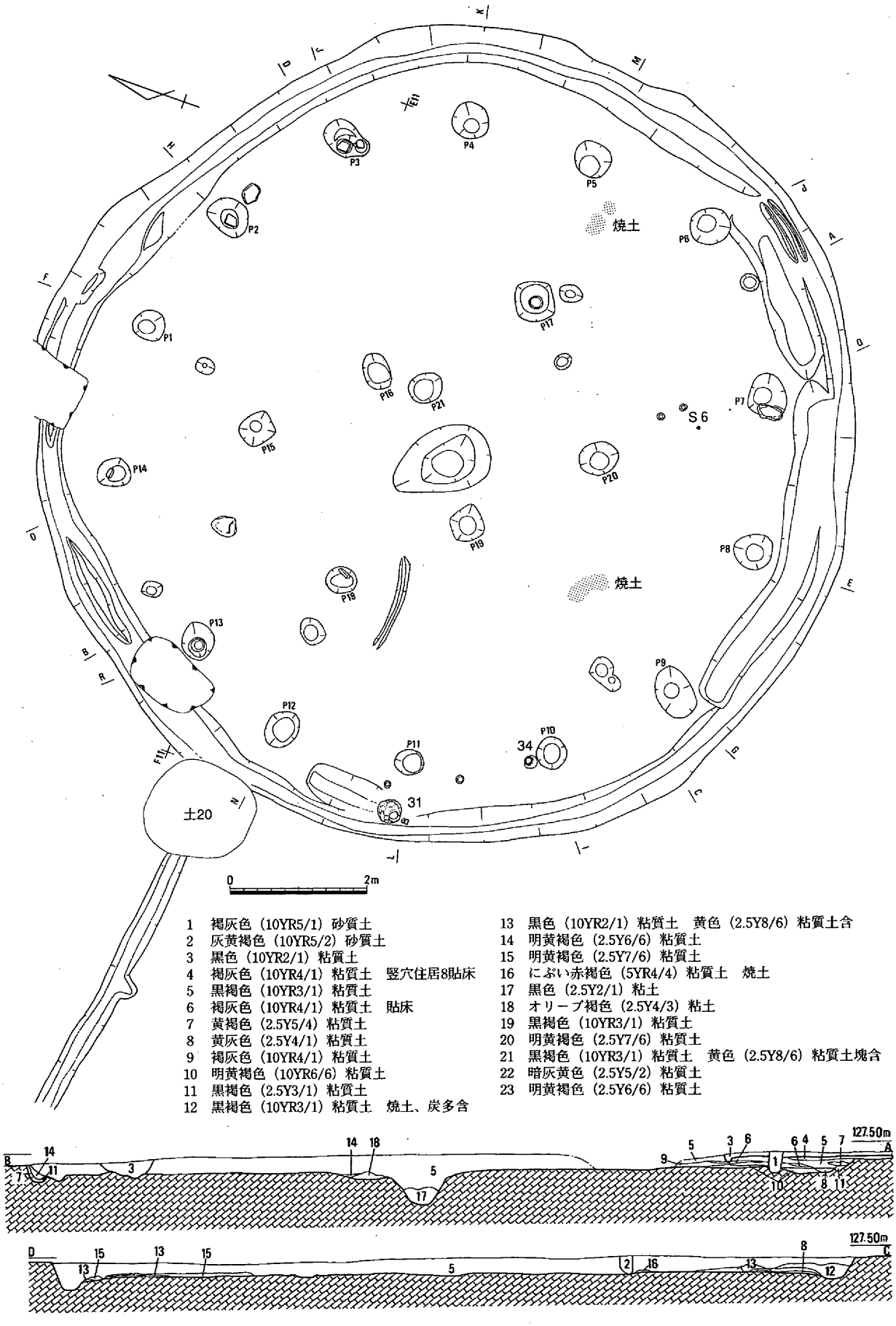
Ａ－Ｂラインの西側では、第３層は溝11（第236図参照）の埋土と思われ、第７層と第14層は住居７（新）の貼り床、第11層が住居７（古）壁体溝の埋土である。

第126図の下側に示したＣ－Ｄライン西側では、第12層が住居７（新）の壁体溝埋土、第13層が住居７（新）貼り床と考えたが第８層が住居（新）か（古）かは判断できなかった。Ｃ－Ｄライン東側では第15層が住居７（新）貼り床で第13層は住居７（古）の埋土であろう。

壁体溝は全周を巡り、一部は２重に確認できた。平面では新旧が判断できなかったため、両方を同時に記載している。住居を全周する外側と、部分的にしか存在しない内側に分かれるものと思われる。また、壁体溝内に杭や板の痕跡は認められない。

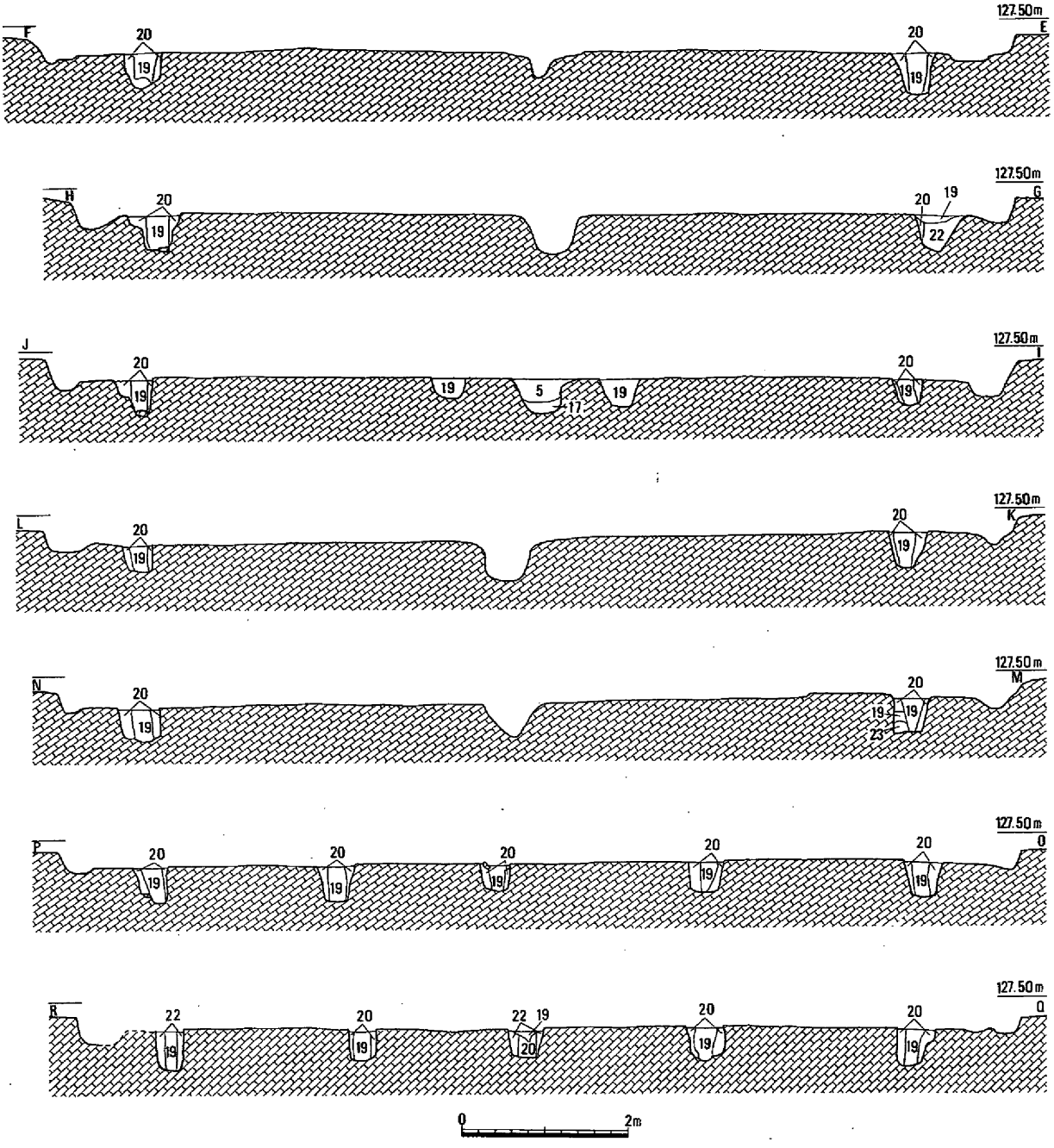
柱穴は住居に所属するものをＰ１～Ｐ21で表した。直径は40㎝～62㎝、深さは床面から25㎝～50㎝を測る。Ｐ１～Ｐ18、Ｐ20では柱の抜き取り跡が残り、その中には黒褐色の住居埋土が落ち込んでいる。堀り方内の置き土はいずれも地山に近い土質・色調である。Ｐ19は柱の抜き取り跡が地山に類似する土で、Ｐ21は置き土が見られず埋土が黒褐色である。

柱穴内に礫が残っているものがＰ２で底面に１つ、Ｐ３では底面に２つ、Ｐ14・Ｐ18では途中に１つずつ確認できた。Ｐ２・Ｐ３の礫は上面を水平にして置かれていた。また、住居内でＰ１～Ｐ21以



1　褐灰色（10YR5/1）砂質土
2　灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
3　黒色（10YR2/1）粘質土
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　竪穴住居8貼床
5　黒褐色（10YR3/1）粘質土
6　褐灰色（10YR4/1）粘質土　貼床
7　黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
8　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
9　褐灰色（10YR4/1）粘質土
10　明黄褐色（10YR6/6）粘質土
11　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
12　黒褐色（10YR3/1）粘質土　焼土、炭多含
13　黒色（10YR2/1）粘質土　黄色（2.5Y8/6）粘質土含
14　明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土
15　明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土
16　にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土　焼土
17　黒色（2.5Y2/1）粘土
18　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土
19　黒褐色（10YR3/1）粘質土
20　明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土
21　黒褐色（10YR3/1）粘質土　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊含
22　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
23　明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土

第126図　竪穴住居７の平面図・土層断面図

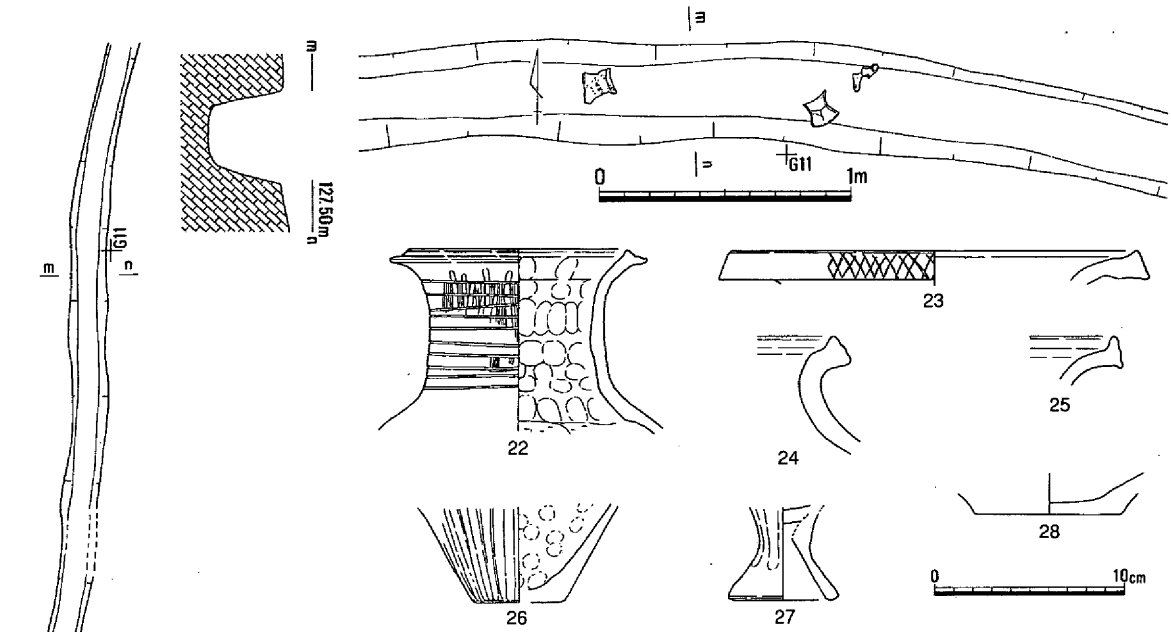


第127図　竪穴住居７の断面図

外の柱穴は、住居に伴うかどうか判断できなかった。

中央穴は検出面で楕円形を呈し、最大長1.5ｍ、深さ50cmを測る。土層は主に２層に分かれ、下層（第127図の第17層）に炭を含んでいる。その他に住居内には床面上に焼土面（点々の部分）や礫、床面下に浅い溝が検出されている。礫はそれぞれ30～40cm大で平らな形状をしていて、そのうち１つがＰ７上に架かった状態で検出された。溝はＰ18とＰ19の間に存在した。

住居外で住居に伴う可能性のある遺構として、第128図の排水溝がある。平成７年度の調査でも確認した溝であるが、住居と溝の間に土壙20（第180図）が存在したので直接の関係はわからなかった。平成９年度の調査ではさらに西側へ延びていることが判明した。



第128図　竪穴住居７の排水溝と出土遺物

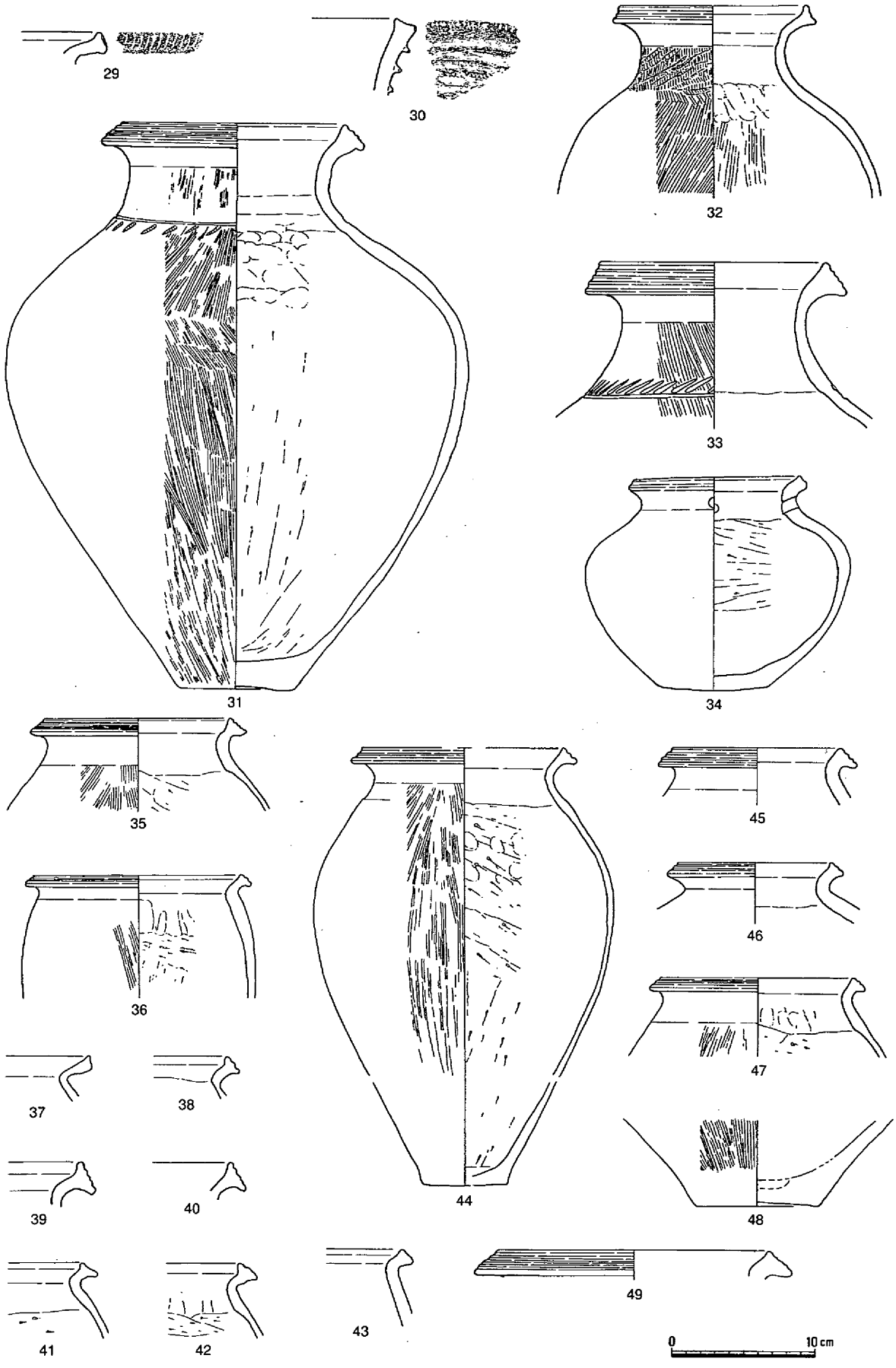
長さが30ｍを超え、深さは最大30cmを測り、断面形は逆台形を示す。出土遺物は出土状況に示した**22**などがある。

住居内の遺物は第129・130図に示した。出土位置は、完形品の**31**や**34**が平面図に示した位置で、**32・41・53**がＰ４上から、**35・47**はＰ14北の壁体溝から、**55**は**31**の側で、**33・48・54**はＰ７～Ｐ８南の壁体溝内、**44**はＰ３とＰ４間のＥ11杭付近で、**29・39・46・49**は壁体溝内、**57**がＰ20、**62**は床面上、**30**は住居に伴わない柱穴、その他は埋土中からである。**29・30・50**は混入と思われる。

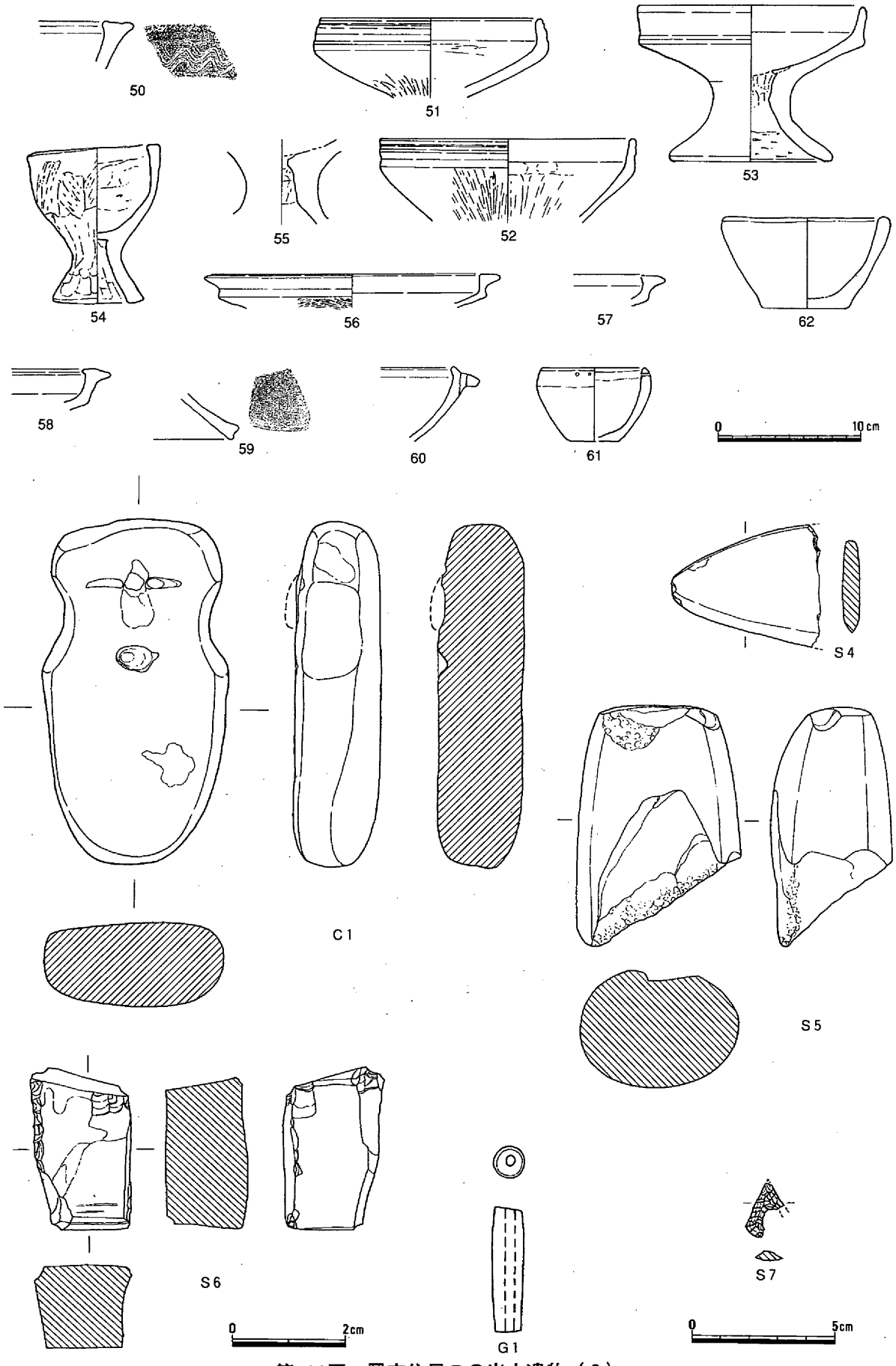
出土土器の傾向としては、壺・甕の口縁は上下に拡張するか上部へつまみ上げるように拡張していて、壺では頸部に沈線が入るものは少ないが、刺突は巡っている。甕では胴部から底部へが直線的で、胴部最大径は器高の中央よりやや上部になる。高杯の口縁端部は拡張するものと拡張しないものが見られる。これらの特徴から、土器は弥生時代後期前葉の時期を示すものと思われる。

土器以外に土製品、石器・石器未製品が出土した。Ｃ１は埋土中から出土した、上部に人面を模した板状の土製品である。人面部分には鼻のような突起が接合していた痕跡が見られる。

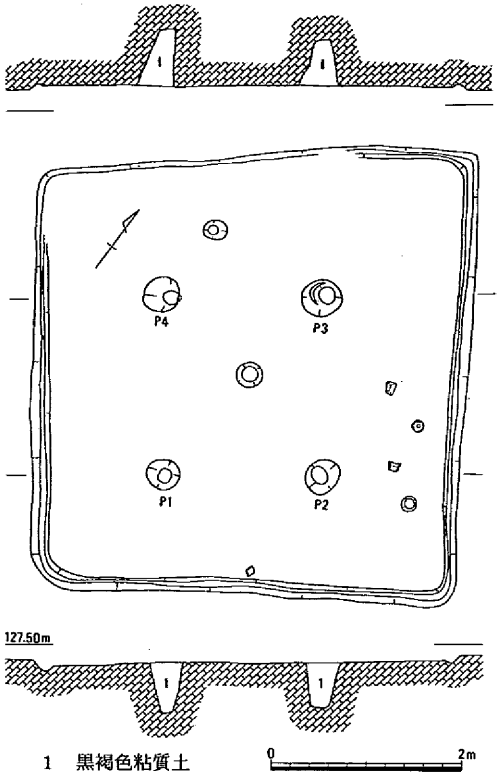
Ｓ４の磨製石包丁はＰ13付近の床面中から、Ｓ５の石斧片はＰ９南西の壁体溝上埋土中から出土した。Ｓ６の碧玉製柱状未製品は床面直上から出土した。側面４面を研磨し、下面には並行する形で擦り切り痕が残る。Ｓ７・Ｇ１は埋土中から出土した。Ｇ１はガラス製の管玉で、色調は緑色、気泡を多く含んでいる。Ｓ７はおそらく縄文時代の石鏃で、混入と考えられる。　（氏平）

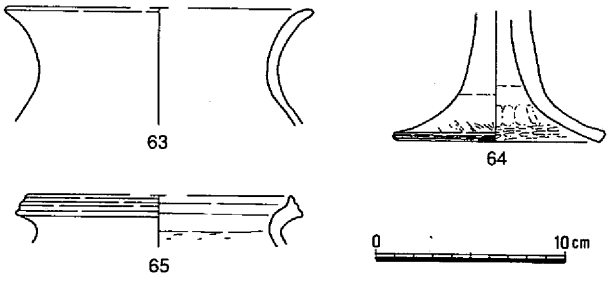


第129図　竪穴住居７の出土遺物（１）

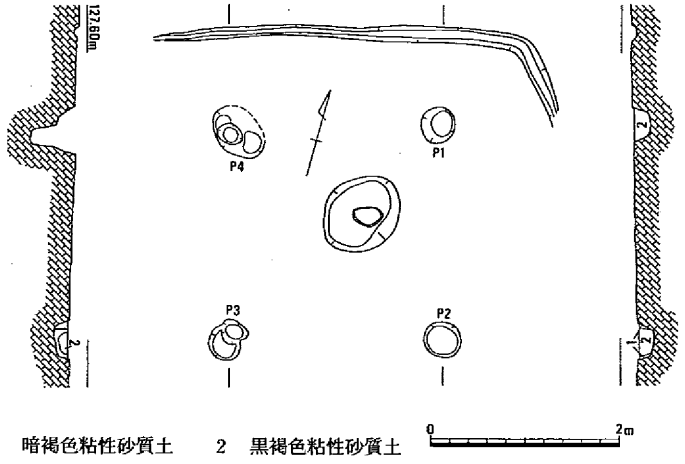


第130図　竪穴住居７の出土遺物（２）





第131図　竪穴住居８と出土遺物



第132図　竪穴住居９

竪穴住居８（第131図、図版22－１）

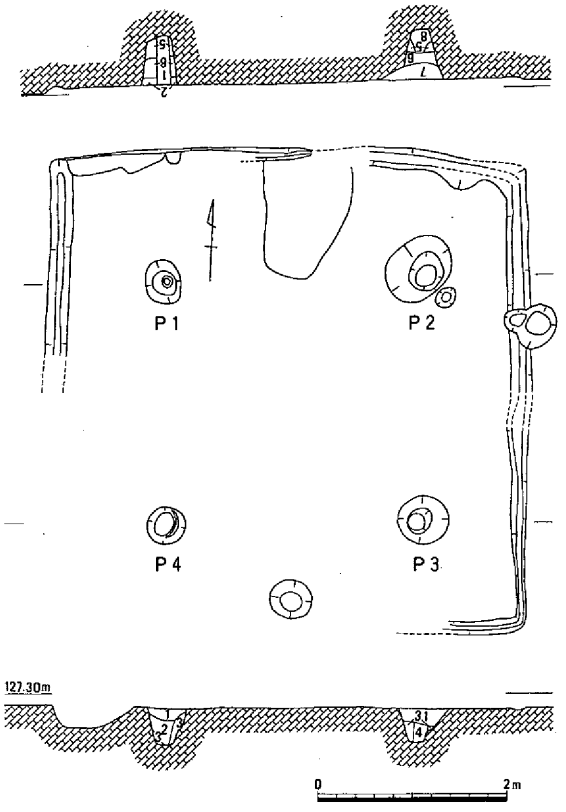
２区中央で検出した方形の住居である。壁体溝、４本の柱穴と中央穴が確認できた。竪穴住居７と重複し、切り合い関係では住居７より新しい。土層断面は竪穴住居７のＡ－Ｂライン東側に示した（第126図参照）。また、Ｐ４北側の柱穴はこの住居より新しいものと判断した。住居の規模は南西辺で480cm、北東辺は450cm、柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間で170cm、Ｐ３－Ｐ４間は160cmを測る。

住居の埋土は最大10cm残っていた。また、床面ほぼ全体に５cm程度の厚さの貼り床が存在した。柱穴の埋土は４本とも単一層で、住居埋土よりやや淡く、貼り床よりもやや濃い色調を呈する。柱穴の置き土は認識できなかった。

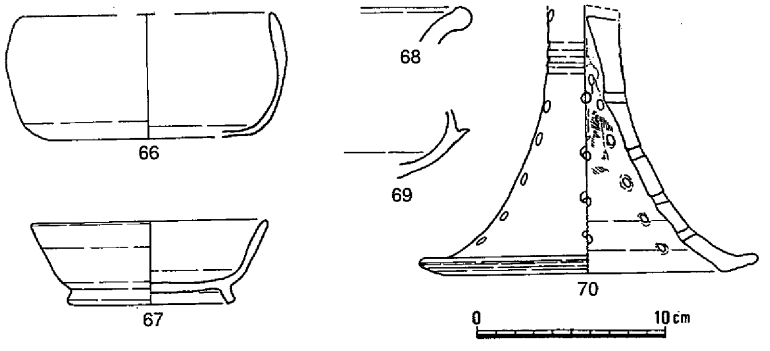
出土した遺物は弥生時代後期の混入が多かった。**63**の壺と**64**の高杯はいずれも土師器で、床面から出土した。**63**は内外面が摩滅して調整不明である。**64**は内外面に煤が付着している。**65**はＰ４埋土中出土であるが、竪穴住居７からの混入であろう。住居の時期は、床面出土遺物から竪穴住居６と同時期の５世紀前半と思われる。（氏平）

竪穴住居９（第132図）

竪穴住居８の東約７ｍの位置に検出した。住居跡は、圃場整備などの削平を受けており、全体の規模は不明であるが、隅丸方形を呈するものと推測される。残存する壁体溝などから推定すれば、一辺約５ｍを測るものと推測される。柱穴は、４本を検出した。平面形は、円形もしくは楕円形を呈するもので、長径60～40cmを測るものである。柱穴間の距離は、220～230cmを測る。４本の柱穴の中央に土壙を検出した。中央穴と考えられるもので、平面形は楕円形を呈しており、長径90cm、短径76cmを測る。出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、弥生時代と推測される。（井上）



1　暗褐色粘性砂質土　　2　黒褐色粘性砂質土
3　暗褐色粘性砂質土（黄褐色粘性砂質土混ざり）
4　暗黄褐色粘性砂質土　　5　淡黄色粘質土
6　明褐色粘性砂質土（黒褐色粘性砂質土混ざり）
7　暗赤褐色粘性砂質土　　8　黒褐色粘質土



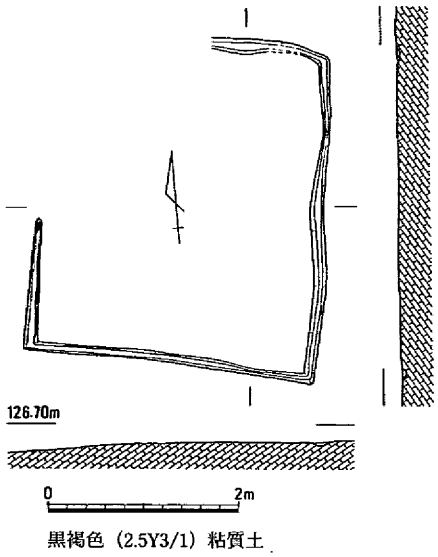
第133図　竪穴住居10と出土遺物

竪穴住居10（第133図、図版22－２）

九番丁場遺跡２区の南端に位置する方形の竪穴住居である。一辺は東西で約５ｍ、南北で約５ｍを測る。竪穴住居の残存状況は極めて悪く、上面はおろか床面も削平されて失われており壁体溝の一部および柱穴のみが残存しているような状況であった。住居跡の南東隅はかろうじて壁体溝の痕跡が認められたものの、南西部については確認することができなかった。竪穴住居の主軸はＮ－15°－Ｗである。主柱穴は４本で北辺で2.75ｍ、東辺で2.60ｍ、南辺で2.65ｍ、西辺で2.50ｍを測る。柱穴の掘り方の径はＰ１、Ｐ４で40㎝前後、Ｐ２で60～80㎝、Ｐ３で50㎝前後を測る。深さは残存高でＰ１で46㎝、Ｐ２で52㎝、Ｐ３で35㎝、Ｐ４で40㎝を測る。これらの柱穴の中で、Ｐ１、Ｐ３、Ｐ４については柱痕の痕跡が認められる。その痕跡から柱の径を約10～15㎝に復元できる。また、住居跡の北辺中央付近で焼土が南北約130㎝、東西約90㎝の範囲で認められた。竪穴住居にカマドが付設されていた可能性が考えられるが、先述したように、床面が残存していないため、具体的な構造等は不明である。なお、住居跡内から若干の遺物が出土している（第133図）。**66**は土師器杯である。後述する土壙25に近接して出土しており、この住居に伴うものかどうかは不明である。**67**は須恵器杯であり、高台をもつ。**68**は須恵器で壺等の口縁部と考えられる。**69**は須恵器杯身である。**70**は弥生土器高杯の脚部であり、住居内に混入したものと思われる。これらの遺物より竪穴住居は７世紀を中心に営まれたものと考えられる。　（金田）

竪穴住居11（第134図、図版23－１）

九番丁場遺跡８区北端、４区にほぼ接する地点において検出した。圃場整備事業による削平が非常に著しいため残存状態は良好とは言い難く、壁体溝と推察する溝が深いところで約５㎝残るのみである。平面形は、残存する溝より判断すると方形を呈するようである。一辺の長さは南北で約3.6ｍ、東西で約３ｍを測り、竪穴住居の規模としては小型である。柱穴を検出することはできなかった。こ



第134図　竪穴住居11

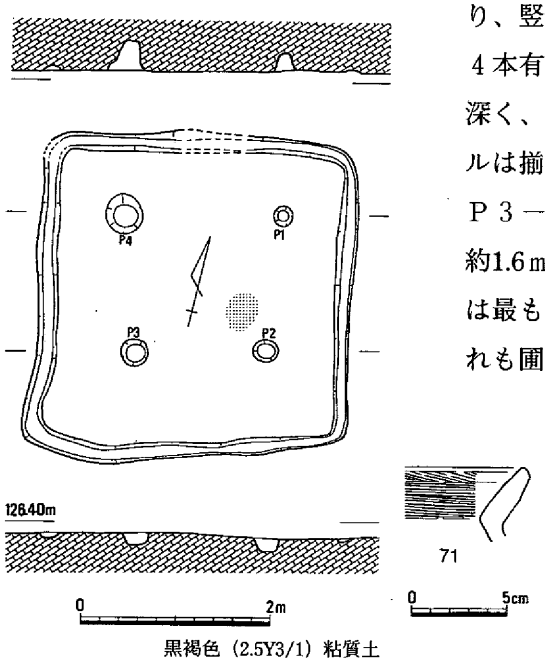
れは削平を受けたため現存しないだけであると判断することも可能であろうが、検出した溝を壁体溝と考える限り、主柱穴はそれより深いことが通常であるため、削平により消滅したとするよりも元来存在しなかったものとするほうが妥当であろう。これらのことから考えると、この遺構は竪穴住居としての機能を有していたものか疑問が残る。

出土した遺物は皆無であり、また先にも述べたように削平が著しく遺構の性格も不明瞭であることから、この遺構の時期を特定することはできない。　（重根）

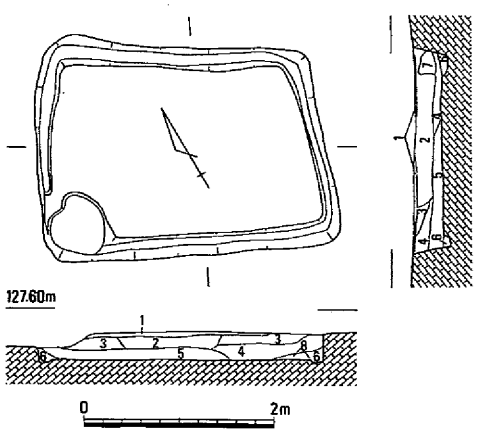
竪穴住居12（第135図、図版23－２）

九番丁場遺跡８区中央やや西よりの地点において検出した。平面形は、ややいびつではあるが隅丸方形を呈するといえる。一辺の長さは南北で約3.4ｍ、東西で約3.2ｍを測り、竪穴住居の規模としては小型の部類に入る。主柱穴は４本有する。柱穴の残存する深さはＰ４が32cmともっとも深く、他の３つは約20cm程度である。これらの底面のレベルは揃っていない。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３、Ｐ３－Ｐ４間が約1.4ｍ、Ｐ４－Ｐ１間が他よりやや広く約1.6ｍである。壁体溝が四辺周囲をめぐるが、この深さは最も深いところでも８cm程度である。柱穴、壁体溝いずれも圃場整備のおりに削平を受けているようであり、本来は現状よりもう少し深いものであったと推測する。Ｐ４やや北西付近において、何らかのかたちで火を使用していたと推察できる痕跡を確認した。ここを掘り下げて赤褐色の焼土面を検出する際、その埋土である灰褐色粘質土は炭を多く含んでいた。

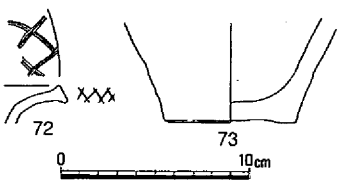
出土遺物には土師器甕（71）がある。これはＰ４埋土中より出土した。色調は外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色である。外面は縦方向、内面口縁部付近は横方向のハケ調整で仕上げ、内面頸部屈曲部より下はナデによって仕上げている。他に出土遺物が無いため、この遺構の時期は特定できない。　（重根）



第135図　竪穴住居12と出土遺物



第136図　竪穴住居13と出土遺物

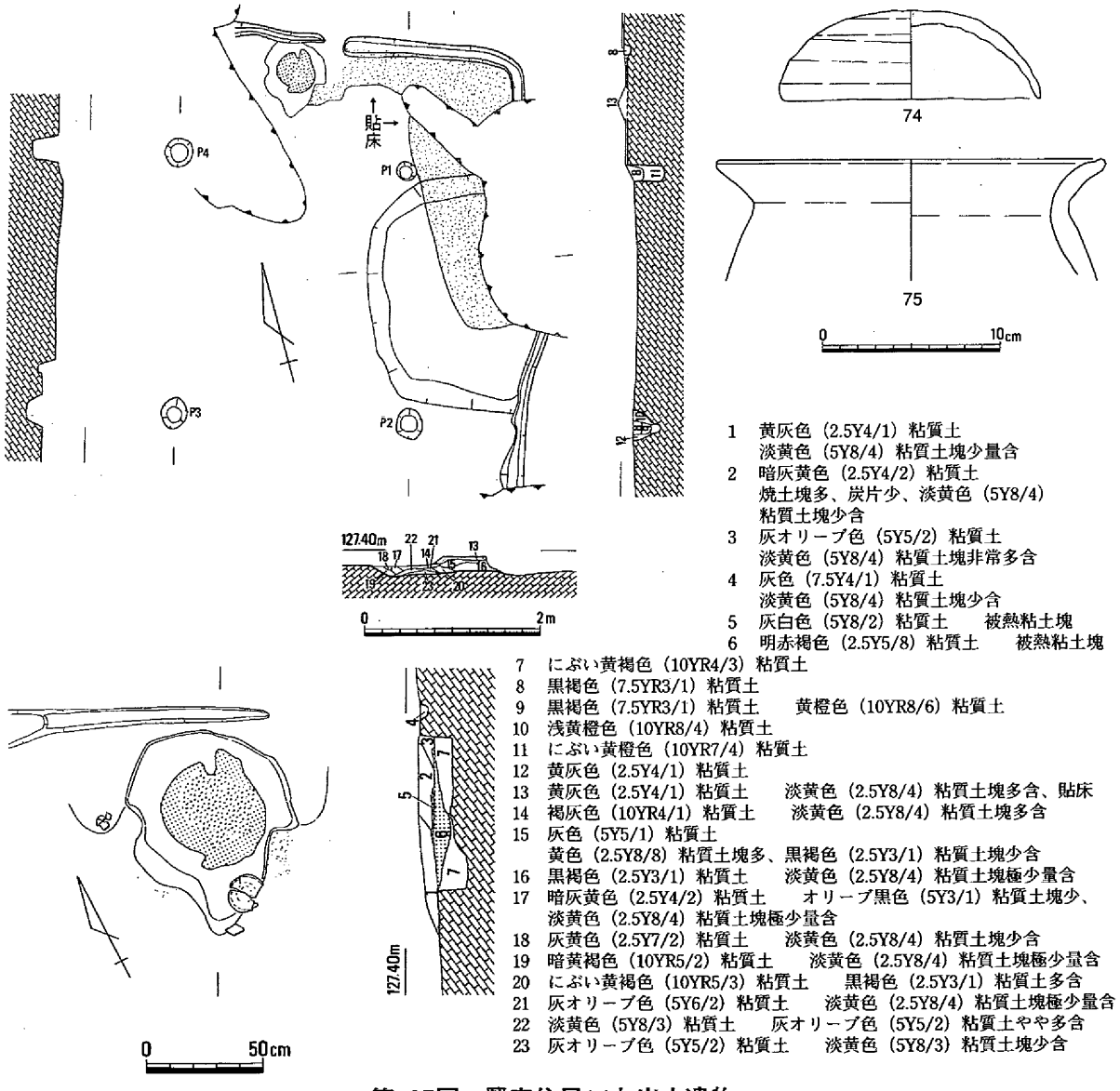


1　灰褐色（5YR4/2）粘質土
2　暗緑灰色（7.5GY3/1）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊多含
3　褐灰色（5YR4/1）粘質土
4　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊多含
5　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊、
　　黒色（5Y2/1）粘質土塊少量含
6　黒色（7.5YR7/1）粘質土
7　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊多含
8　褐灰色（10YR4/1）粘質土

竪穴住居13（第136図、図版23－３）

九番丁場遺跡９区北端付近において検出した。平面形はいびつながら隅丸長方形を呈すると言える。一辺の長さは南北で約２ｍ、東西で約3.2ｍである。竪穴住居であるならば非常に小型な部類に入る。床面周囲には壁体溝がめぐるが、南東隅で途切れ、一段下がったくぼみが存在する。柱穴を検出することはできなかった。埋土第４層、第５層は黄色粘質土塊を含むこと、および第７層が黄色粘土塊を多く含み不整合といえる堆積を示すことから、この遺構はある程度の深さまで人為的に埋め戻されたと推察する。以上に記したように、非常に小型であること、また柱穴を検出できなかったことから考えると、この遺構は住居としての機能を有していたとするよりも小屋のような簡易的なものであったとしたほうが妥当であろう。

出土遺物には弥生土器壺（**72**）、甕（**73**）がある。いずれも埋土中より出土したものであり、細片である。**72**は壺口縁端部細片である。そのため、傾きには検討の余地が残る。口縁端部外面、および内面にはヘラ状の工具により斜格子状の文様が刻まれ、この文様はいずれも向かって右上から左下



1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊少量含
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
　焼土塊多、炭片少、淡黄色（5Y8/4）粘質土塊少含
3　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊非常多含
4　灰色（7.5Y4/1）粘質土
　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊少含
5　灰白色（5Y8/2）粘質土　　被熱粘土塊
6　明赤褐色（2.5Y5/8）粘質土　　被熱粘土塊
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
8　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
9　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土　　黄橙色（10YR8/6）粘質土
10　浅黄橙色（10YR8/4）粘質土
11　にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土
12　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
13　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊多含、貼床
14　褐灰色（10YR4/1）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊多含
15　灰色（5Y5/1）粘質土
　黄色（2.5Y8/8）粘質土塊多、黒褐色（2.5Y3/1）粘質土塊少含
16　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊極少量含
17　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土　　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質土塊少、淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊極少量含
18　灰黄色（2.5Y7/2）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊少含
19　暗黄褐色（10YR5/2）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊極少量含
20　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土　　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土多含
21　灰オリーブ色（5Y6/2）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊極少量含
22　淡黄色（5Y8/3）粘質土　　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土やや多含
23　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土　　淡黄色（5Y8/3）粘質土塊少含

第137図　竪穴住居14と出土遺物

方向の線をまず一定間隔で刻み、その後、左上から右下への線を入れて形成したものである。**73**は甕底部であるが、底径の約１/４が残存する程度である。風化が著しいため不明瞭ではあるが、内面にはナデ、外面にはハケ調整の痕跡が若干残るのが観察できる。これらの出土遺物の時期は、弥生時代中期中頃に属すると考える。（重根）

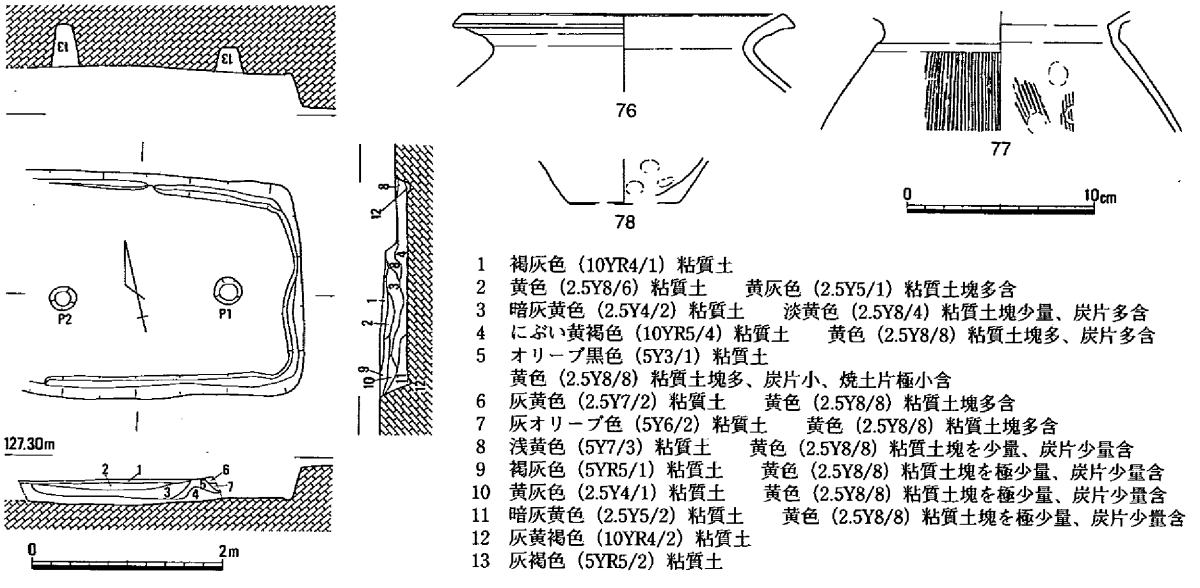
竪穴住居14（第137図、図版24－１）

九番丁場遺跡９区北端近く、竪穴住居13の南約1.5ｍのところに位置する。圃場整備事業による削平が著しいため平面形、規模は不明であるが、残存する柱穴、壁体溝より推察すると隅丸方形を呈していたものと考えられる。主柱穴は４本有する。床面は貼り床が為されていたようだが、これが床面全面に施されていたものかは、削平が著しいため不明である。Ｐ１－Ｐ２間付近から壁体溝にかけて、貼り床下より深さ15cm程度の不定形な掘り込みを確認した。これと類似したものに、岡山県津寺遺跡、福岡県干潟城山遺跡等で竪穴住居の下部構造、下層掘り込みと報告されている事例をあげることができる。立地等に大きな違いがあるため、それぞれの遺跡で推測されている機能をこの事例にそのままあてはめることはあまりにも安易で問題が多いかもしれないが、その構造の類似性、また、埋土が人為的に充填されたものであることから考えて、これは防湿を目的とした掘り込みであると推測する。竪穴住居北側東西辺中央付近においてカマドが付されていた痕跡を確認した。被熱した灰白色粘土塊（第５層）、明赤褐色（第６層）粘土塊を検出する際その埋土中には多くの焼土塊、炭を含んでいた。明赤褐色被熱粘土塊を掘り下げ除去すると、その下において浅い掘り込みを確認した。

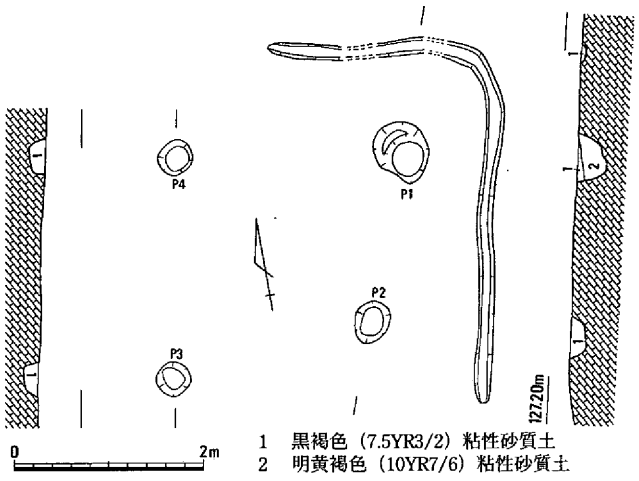
出土遺物には須恵器杯蓋（**74**）、土師器甕（**75**）がある。**74**は口縁部の約１/５が欠損する。焼成は良好で外面には自然釉が看取できるが、焼き歪みが著しい。その型式は陶邑ＭＴ85、中村浩編年Ⅱ形式４段階と類似する。カマド焚き口付近と推測する地点において、二つに破損した状態で出土した。**75**は土師器甕であるが、出土したのはその口縁部付近、口径の約１/５程度のみである。風化が著しいため表面は剥離し、調整は不明瞭である。これらの出土遺物の時期は６世紀末に属すると考える。（重根）

竪穴住居15（第138図、図版24－２）

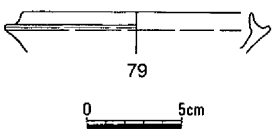
九番丁場遺跡９区北端近くにおいて検出した。竪穴住居14と重複し、土壙49に切られ、さらには西



第138図　竪穴住居15と出土遺物



第139図　竪穴住居16と出土遺物



側が調査区外となるが、検出した壁体溝および柱穴より判断するとその平面形は隅丸長方形を呈していたようだ。一辺の長さは南北で約2.2ｍ、東西で３ｍをやや超える程度であったと推測でき、竪穴住居の中では小規模の部類に入る。主柱穴は２本有する。

出土遺物は弥生土器甕（**75・77**）がある。**76**は４層より出土した甕口縁部である。口径の１/５程度が残存するのみで、風化のため表面が剥離し調整も不明である。**77**は甕肩部である。径の約１/６が残存する。内外面ともにハケ調整の痕跡が残る。外面に煤が付着する。**78**は甕底部である。内面調整は押圧ナデであるが、外面調整は表面の剥離が著しいため不明である。これらの時期は弥生時代中期中頃に属すると考える。（重根）

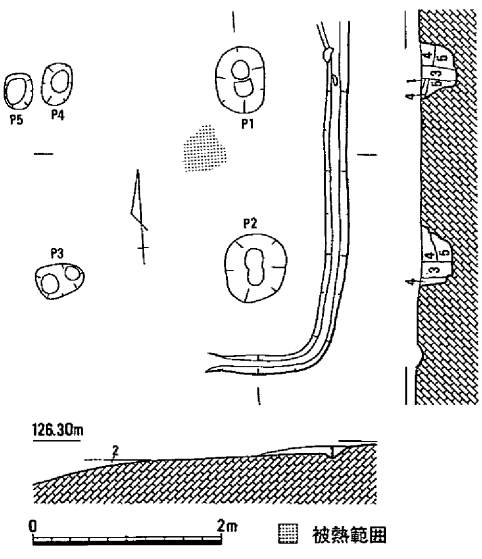
竪穴住居16（第139図、図版24－３）

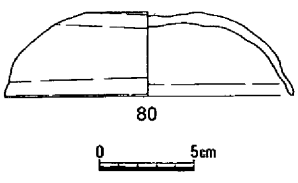
九番丁場遺跡９区中央やや南西よりにおいて検出した。削平を大きく受けているが、残存する壁体溝、柱穴から平面形は隅丸方形であったと推測する。主柱穴は４本有する。

出土遺物は須恵器杯身（**79**）がある。これは口径の約１/10が残るのみで、傾き、口径に検討の余地が残る。時期は６世紀末に属すると考える。（重根）

竪穴住居17（第140図、図版25－１）

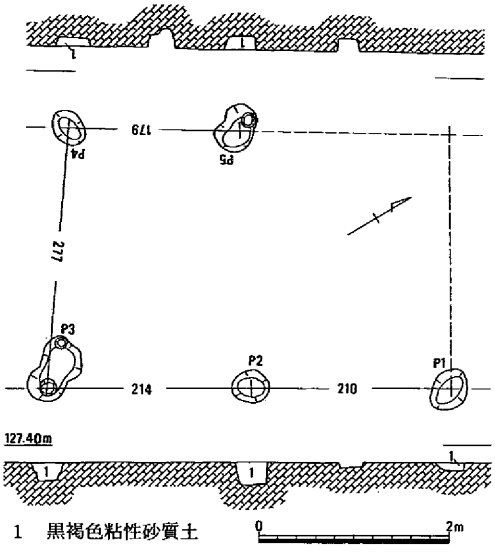
６区の北西隅において検出した。住居跡は、圃場整備などの削平を受けており、全体の規模については不明であるが、平面形は、隅丸方形を呈するものと考えられる。残存する壁体溝などから推測すれば、一辺が420cm程度を測るものと推測される。柱穴は５本を検出した。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３の柱穴の底面には、何れも２本の柱痕跡が見られ、一回の建て替えが想定されることから、全ての柱穴はこの住居跡に伴うものと考える。柱穴は、本来の大きさを示すものはＰ１、Ｐ２のみで、他の３本は斜面に検出したためもとの形状は呈していない。Ｐ１、Ｐ２の柱穴からは、柱の位置が南に建て替えられている。柱穴間の距離は、210～240cmを測る。Ｐ１の南西床面には被熱により赤変した部分を検出した。出土遺物としては、**80**の須恵器杯蓋がある。時期は、６世紀後半に属するもので、住居跡の時期も同じと考えられる。（井上）





1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
2　浅黄色（2.5Y4/1）粘質土
3　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
4　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土

第140図　竪穴住居17と出土遺物

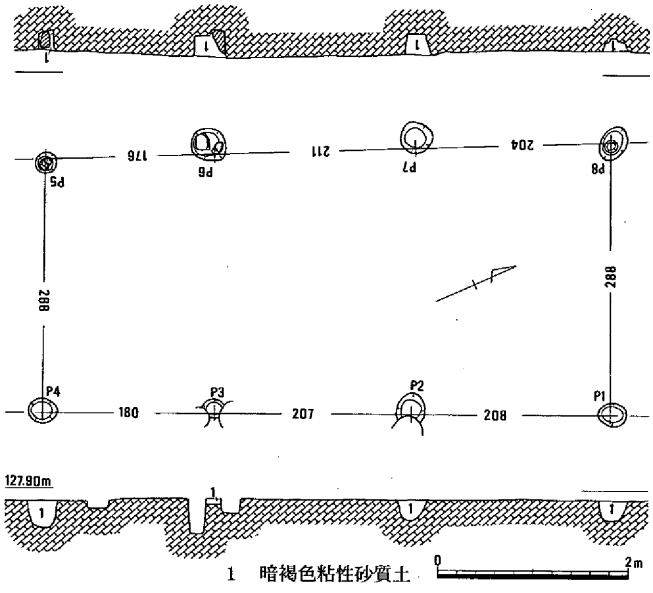


第141図　掘立柱建物１

２．掘立柱建物

掘立柱建物１（第141図）

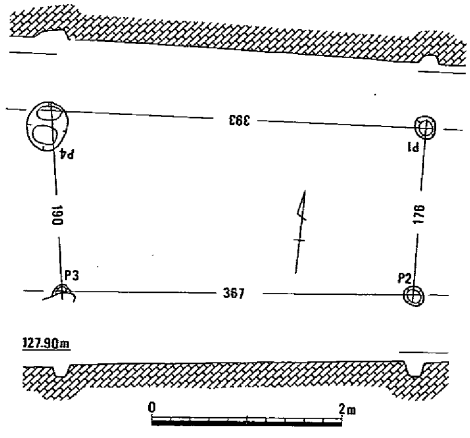
１区の北端部に検出した梁間１間、桁間２軒の側柱建物である。調査区の端に検出したため、北端の柱穴は検出できなかった。柱穴の平面形は概ね円形を呈するものである。Ｐ３、Ｐ５は、２個の柱穴が重なっているものと考えられる。柱穴の長径は40～50cmを測るものである。建物は、圃場整備等により削平を受けており、検出面からの深さは、10～30cmを測る。柱間の距離は、梁間277cm、桁間179～214cmを測る。建物の長軸の方向は、Ｎ－32°－Ｅである。伴出遺物がないため明確な時期は不明であるが、検出状況などから古代末から中世の前半に収まるものと考えられる。（井上）



第142図　掘立柱建物２

掘立柱建物２（第142図、図版25－２）

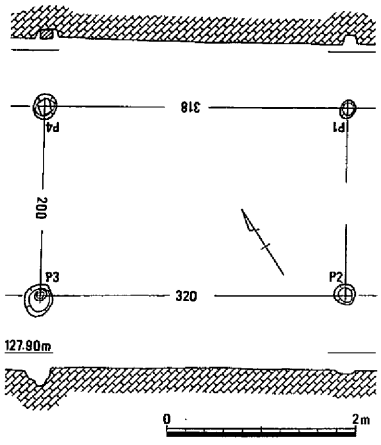
掘立柱建物１の東約14ｍの位置に検出した。桁間３間、梁間１間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径14～20cmを測る。建物は、圃場整備や、耕作などにより削平を受けているため、柱穴は本来の深さを保っていないと考えられる。検出面からの深さは、８～30cmを測る。柱間の距離は、梁間は、北側が288cm、南側が268cmを測る。桁間は、176cm～211cmを測る。柱間の間隔は、東列、西列共に良く対応している。建物の長軸の方向は、Ｎ－25°－Ｅを示している。伴出遺物がないため明確な時期は不明であるが、検出状況などから、古代末から中世の前半に収まるものと考えられる。（井上）



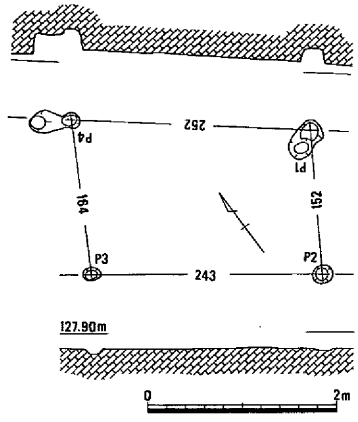
第143図　掘立柱建物３

掘立柱建物３（第143図）

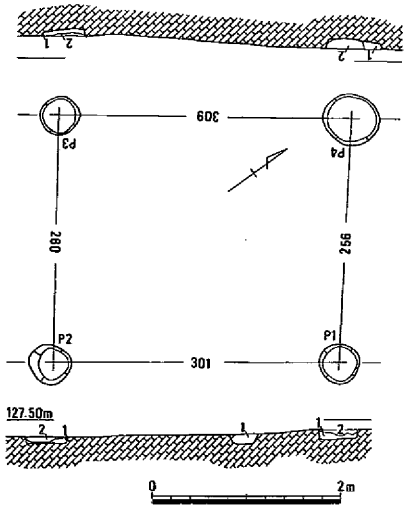
掘立柱建物２の南に接するような位置に検出した。桁間、梁間共に１間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径20～50cmを測る。建物は、圃場整備や耕作により削平を受けており、本来の深さは保っていないと考えられる。検出面からの深さは、概ね10cmを測る。柱間の距離は、桁間367cm、393



第144図　掘立柱建物４



第145図　掘立柱建物５



1　暗褐色粘性砂質土
2　黒褐色粘性砂質土

第146図　掘立柱建物６

cm、梁間176cm、190cmを測り、建物の平面形は、やや台形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－85°－Ｅを示している。伴出遺物がないため、明確な時期は不明であるが、古代末から中世にかかるものと考えられる。　（井上）

掘立柱建物４（第144図）

掘立柱建物３と一部重なる状態に検出した。桁間、梁間共に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径20～38cmを測る。この建物も圃場整備などにより削平を受けており、本来の深さは保っていない。検出面からの深さは４～20cmを測る。柱間の距離は、桁間318～320cm、梁間200cmを測る。建物の平面形は、長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－57°－Ｗを示している。掘立柱建物３より新しい。伴出遺物がないため、明確な時期は不明であるが、古代末から中世にかけてと考えられる。　（井上）

掘立柱建物５（第145図）

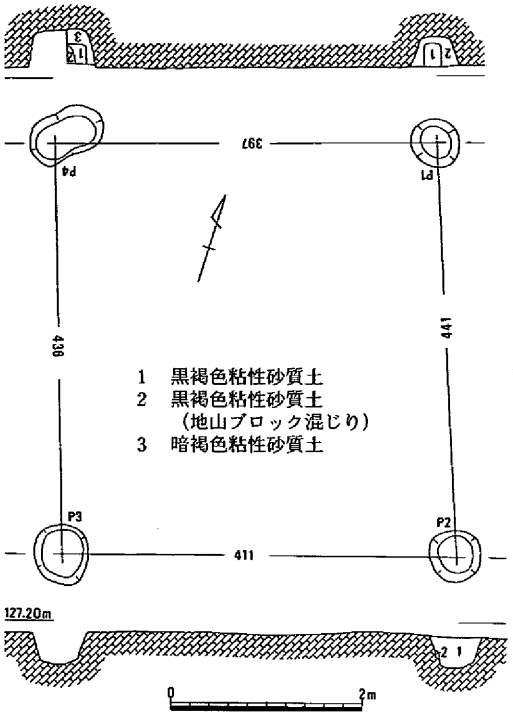
掘立柱建物４と全く重複する状態に検出した。桁間、梁間共に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は円形を呈するものである。Ｐ１、Ｐ４は、二本の柱穴が重なるものと考えられる。柱穴の長径は、約20cmを測る。この建物も圃場整備などにより削平を受けており、本来の深さは保っていないが、検出面からの深さは、４～20cmを測る。柱間の距離は、桁間243cm、252cm、梁間152cm、164cmを測る。建物の平面形は少し歪でいる。建物の長軸の方向は、Ｎ－52°－Ｗを示している。伴出遺物がないため、明確な時期は不明であるが、掘立柱建物４とほぼ同じ時期と考える。　（井上）

掘立柱建物６（第146図、図版25－３）

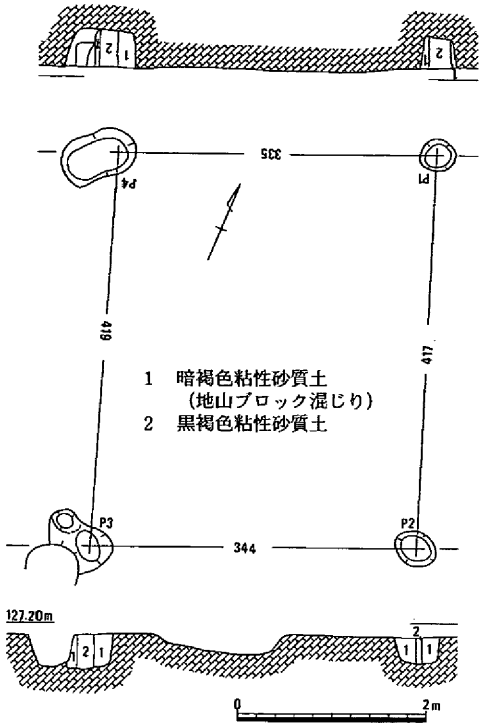
掘立柱建物５の南南西約13ｍの位置に検出した。桁間、梁間共に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径40～60cmを測る。この建物も圃場整備などの削平を受けており、柱穴は、本来の深さを保っていない。検出した深さは、６～10cmを測る。柱間の距離は、桁間301cm、309cm、梁間260cm、256cmを測る。建物の平面形は長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－36°－Ｅを示している。出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、埋土の状況、周辺の遺構の状況などから掘立柱建物１～５よりは古いと推測される。　（井上）

掘立柱建物７（第147図）

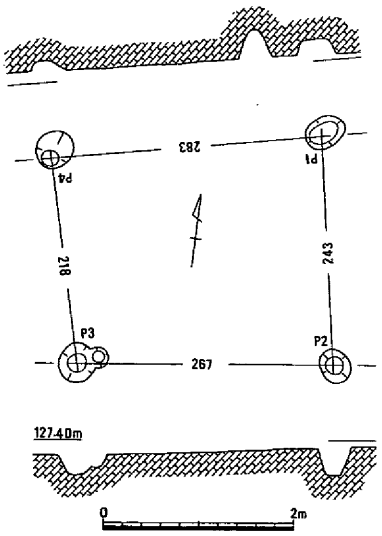
掘立柱建物６の西約４ｍの位置に検出した。桁間、梁間共



第147図　掘立柱建物７



第148図　掘立柱建物８

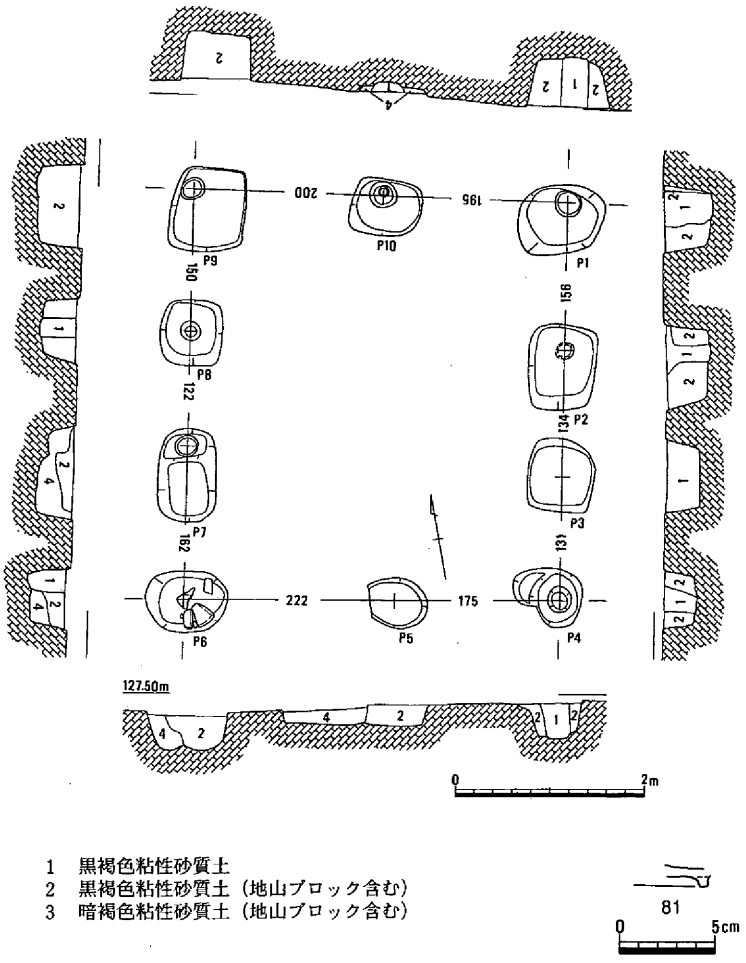


第149図　掘立柱建物９

に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は円形を呈するものである。Ｐ４が楕円形を呈するのは、掘立柱建物８の柱穴と重複するためである。柱穴の長径は、50～60cmを測る。この建物も圃場整備などの削平を受けているため、柱穴は本来の深さを保っていない。検出した深さは、30～40cmを測る。柱間の距離は、桁間436cm、441cm、梁間397cm、411cmを測る。建物の平面形は、長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－19°－Ｗを示している。出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、埋土の色、埋土の状況などから竪穴住居５に近い時期が推測される。（井上）

掘立柱建物８（第148図）

掘立柱建物７と全く重なる状態で検出した。桁間、梁間共に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は円形を呈するものである。Ｐ４が楕円形を呈するのは、掘立柱建物７の柱穴と重なるためである。また、Ｐ３でも重なる状況が見られたが、掘立柱建物７の柱穴が切っており、掘立柱建物８が古いことが判明した。柱穴の長径は、40～50cmを測る。検出した柱穴の深さは、30～40cmを測る。柱間の距離は、桁間417cm、419cm、梁間335cm、344cmを測る。建物の平面形は、少し歪でいるものの長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－19°－Ｗを示している。出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、掘立柱建物７よりは古いが、それに近い時期と推測される。（井上）



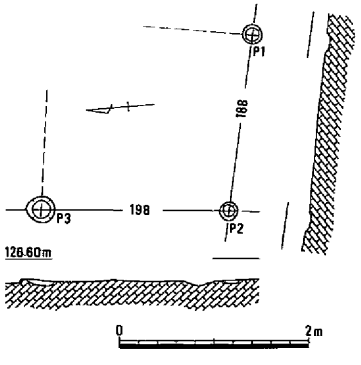
第150図　掘立柱建物10と出土遺物

掘立柱建物９（第149図）

掘立柱建物６の南約８ｍ、１区の南端部に検出した。桁間、梁間共に一間の側柱建物である。柱穴の平面形は円形を呈するものである。柱穴の長径は、40～45cmを測る。この建物も圃場整備などによる削平を受けており、柱穴は本来の深さは保っていない。検出した深さは12～30cmを測る。柱間の距離は、桁間267cm、283cm、梁間218cm、243cmを測る。建物の平面形は、台形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－83°－Ｅを示している。出土遺物がないため、明確な時期は、不明であるが、古代以前と推測される。　（井上）

掘立柱建物10（第150図、図版26－１）

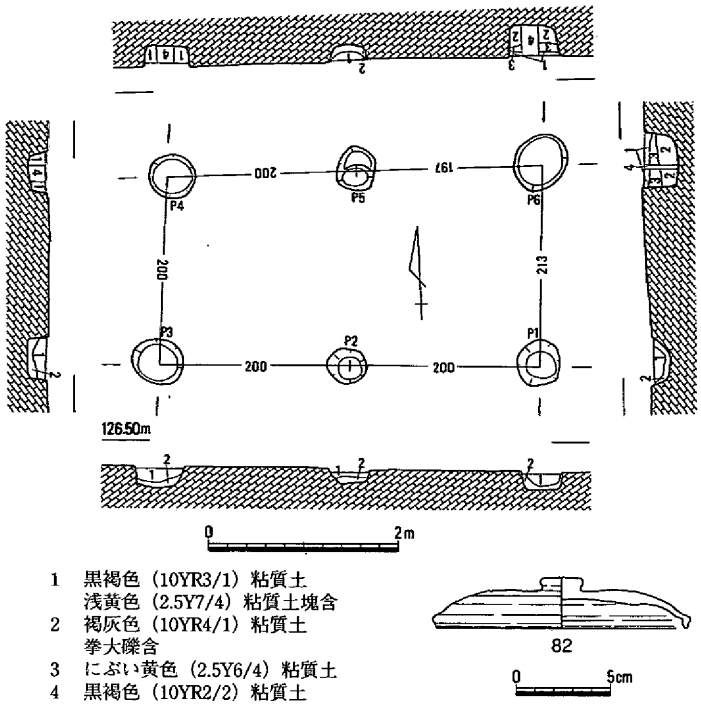
掘立柱建物９の南南東約35ｍ、２区の南東端部に検出した。桁間３間、梁間２間の側柱建物である。柱穴の平面形は、方形を基本とするものである。方形の柱穴で、小さいものとしてＰ８は長辺70cm、短辺65cmを測る。大きなものとしてＰ９では、長辺90cm、短辺80cmを測る。検出した深さは、Ｐ10が最も浅く約10cmを測る。ほとんどは、40～50cmを測る。７個の柱穴から柱痕跡を検出した。また、土層断面にもその痕跡が観察できた。その状況から、使用された柱は、直径30cm程度とすることが出来る。桁間の全長は、421cm～434cmを測る。梁間の全長は、395cm～397cmを測る。建物の長軸の方向は、Ｎ－11°－Ｅを示している。遺物として、81の須恵器高台付き杯が出土しており、建物の時期としては、８世紀後半と考えられる。　（井上）



第151図　掘立柱建物11

掘立柱建物11（第151図）

３区の北東隅で検出した、１×１間と推定される掘立柱建物である。北東隅の柱穴については検出出来なかった。３区の北半分については、圃場整備によって大幅な削平を受けており、この部分において検出した遺構はこれのみであった。このため柱穴は深さが約４cm～６cmと浅い。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２が188cm、Ｐ２－Ｐ３が198cmで、北側にむかって若干開いている。時期は遺物が出土していないため、不明である。　（時實）

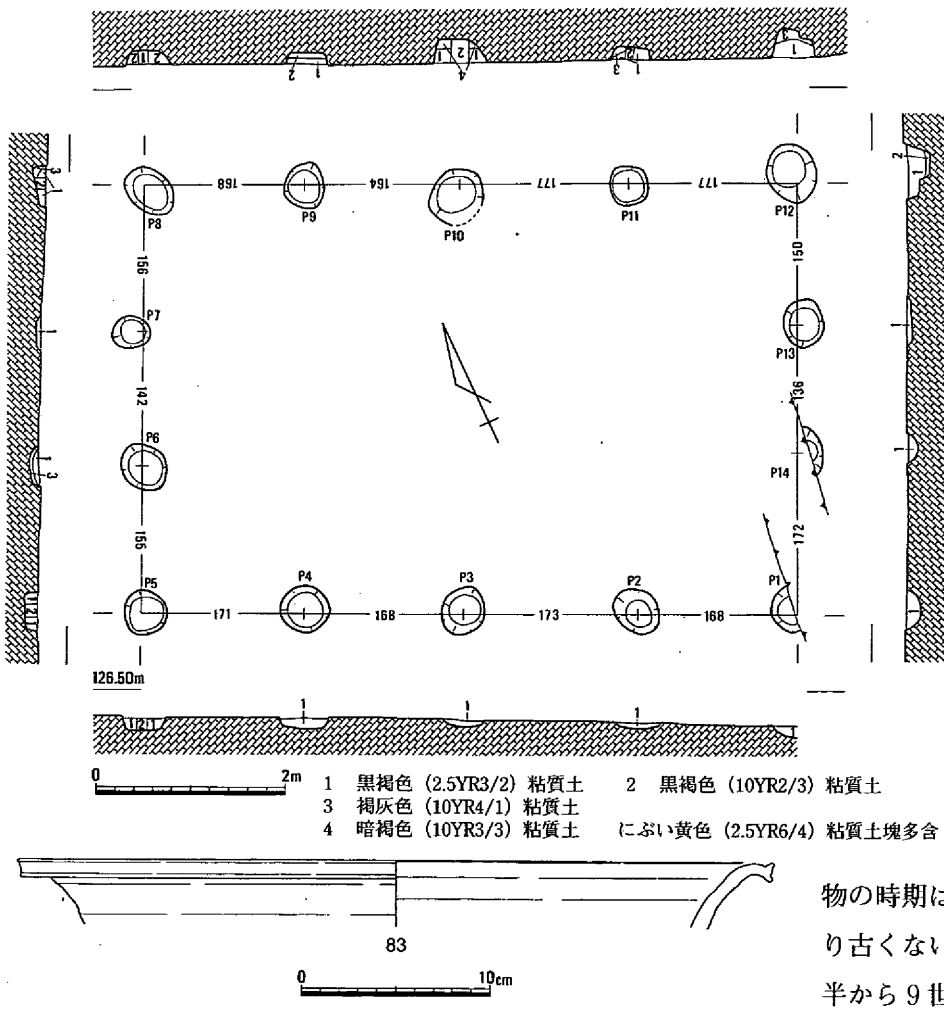


第152図　掘立柱建物12と出土遺物

掘立柱建物12（第152図、図版26－2）

６区中央部東、８区南西端部の位置に、６区と８区に跨って検出した。桁間２間、梁間１間の掘立柱建物である。柱穴の平面形は、何れも円形を呈するものである。柱穴の長径は、小さいものとしてＰ２で42cm、大きなものとしてＰ６で64cmを測る。この建物も圃場整備などの削平を受けており本来の深さは保っていない。検出面からの深さは、Ｐ５が最も浅く16cmを測る。最も深いＰ６で40cmを測る。Ｐ４、Ｐ６では、柱痕跡を検出した。土層断面の観察から、柱の直径は、20cm程度を測ると考えられる。柱間の距離は、桁間北列は、197cm、200cm、南列は、何れも200cmを測り、ほぼ同じ長さを示している。梁間は、東側が、213cm、西側が、200cmを測り、東側が少し広い。建物の平面形は、長方形を呈している。建物の長軸の方向は、N－83°－Wを示している。遺物として**82**の須恵器蓋がＰ５から出土している。蓋は、低平で、つまみも頂部は平らである。建物の時期は、この遺物の時期より古くないことから、８世紀後半から９世紀初頭と考えられる。

（井上）



第153図　掘立柱建物13と出土遺物

掘立柱建物13（第153図、図版26－２）

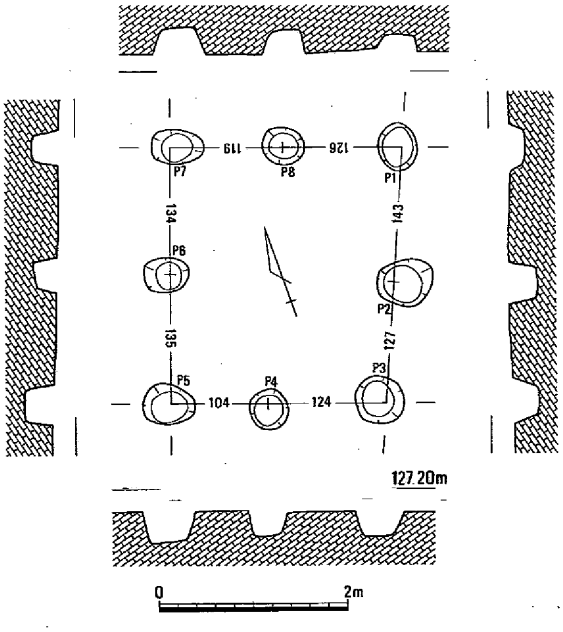
５区、６区、８区に跨る位置に、掘立柱建物12と重複して検出した。桁間４間、梁間３間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するものである。柱穴の長径は、小さいもので、Ｐ11の40cm、大きなものでＰ12は64cmを測る。この建物も、圃場整備などで削平を受けており、本来の深さは保っていない。検出面からの深さは、Ｐ２がもっとも浅く５cmを測る。最も深いＰ12で22cmを測る。Ｐ５、Ｐ８、Ｐ10では、柱痕跡を検出した。その土層断面の観察から、柱の直径は20cm程度と考えられる。桁間の距離は、北列が686cm、南列が680cmを測る。梁間の距離は、東列が458cm、西列が455cmを測る。建物の平面形は、長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－59°－Ｗを示している。掘立柱建物12のＰ６と、掘立柱建物13のＰ10は、一部が重複して検出された。調査の結果は、掘立柱建物12が新しいことが判明した。建物の時期であるが、掘立柱建物12よりは古いが、大きく時期を隔てていないと考えられることから、８世紀中葉から後半の頃と推測される。（井上）

掘立柱建物14（第154図、図版26－３）

９区中央部からやや北西に寄った位置に検出した。桁間、梁間共に２間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径は40～50cmを測る。検出面からの深さは、20～30cmを測る。柱間の距離は、桁間東側が、143cm、127cm、西側が、134cm、136cmを測る。梁間は、北側が126cm、119cm、南側が124cm、104cmを測る。建物の平面形は、北側が少し広い長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－25°－Ｅを示している。建物の時期であるが、出土遺物が無いために明確な時期は不明であるが、埋土の状況などからして、８世紀後半から９世紀初頭と推測される。（井上）

掘立柱建物15（第155図、図版26－３）

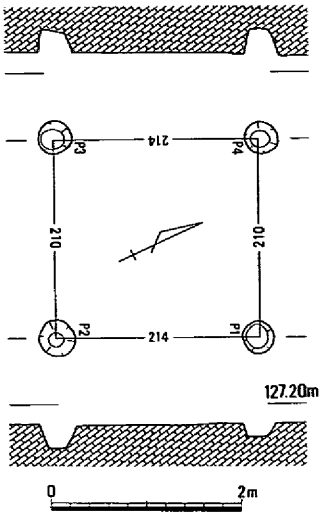
掘立柱建物14と重複して検出した。桁間、梁間共に１間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径は、36～40cmを測る。検出面からの深さは、16～30cmを測る。柱間の距離は、桁間が東西共に214cm、梁間が、南北共に210cmを測る。建物の平面形は、正方形に近いが、南北にやや長い長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－30°－Ｅを示している。建物の時期であるが、出土遺物が無いため明確な時期については不明であるが、調査時の検出状況、埋土の状態など、掘立柱建物14に似るものが有るため、８世紀後半から９世紀初頭と推定される。（井上）



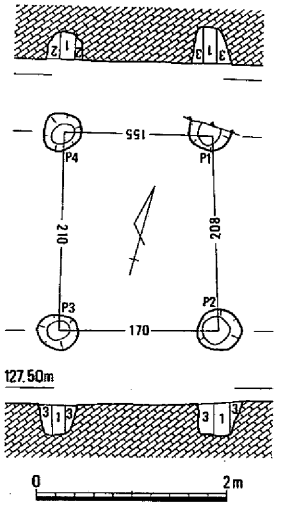
第154図　掘立柱建物14

掘立柱建物16（第156図、図版27－１）

掘立柱建物15の南東約16ｍの位置に検出した。桁間、梁間共に１間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するものである。柱穴の長径は、40～50cmを測る。検出面からの深さは、30～38cmを測る。柱穴からは、柱痕跡を検出した。その観察から、柱の直径は、20cm程度と考えられる。柱間の距離は、155～210cmを測る。建物の長軸の方向は、Ｎ－12°－Ｗを示している。建物の時期は、出土遺物がないため明確な時期は、不明であるが、８世紀後半と推測される。（井上）



第155図　掘立柱建物15



1　褐灰色（7.5YR4/1）粘質土
　　淡黄色（5Y8/3）粘質土塊多含
2　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土
　　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土塊多含
3　にぶい黄色（2.5Y6/3）粘質土
　　淡黄色（7.5Y8/3）粘質土塊極少含

第156図　掘立柱建物16

掘立柱建物17（第157図、図版27－２）

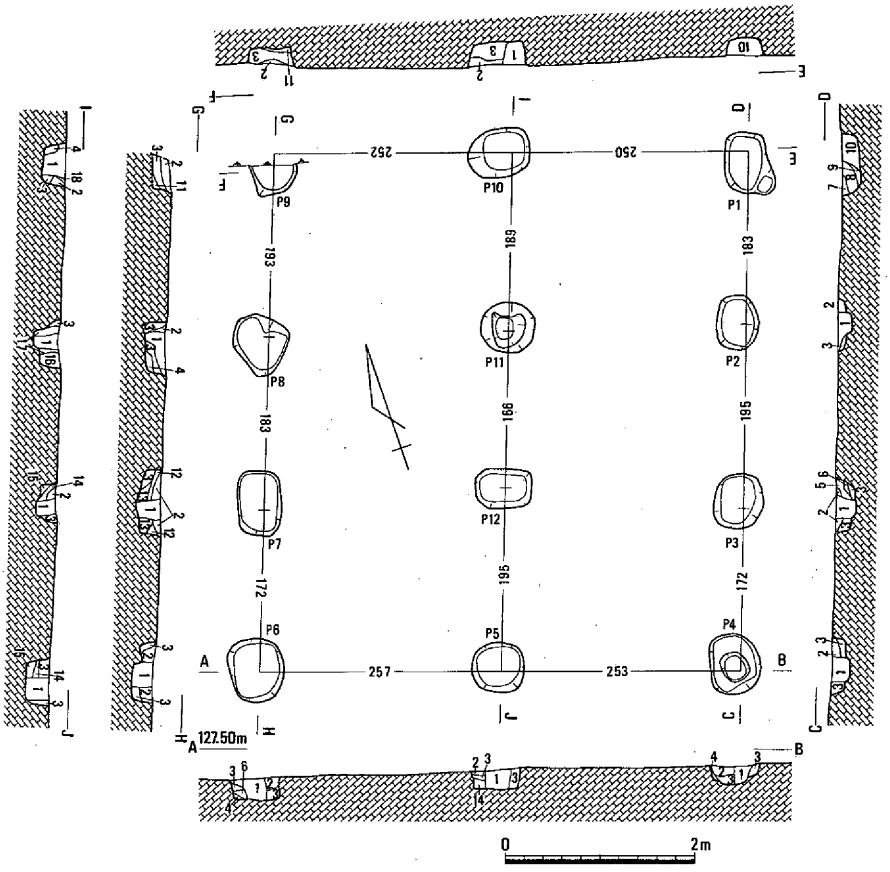
掘立柱建物15の南東約13ｍの位置に検出した。桁間３間、梁間２間の総柱建物である。柱穴の平面形は、方形を呈するものが多い。検出面で円形を呈するものも、柱穴の底部においては、直線的な部分を見ることができ、方形の掘り方が基本的と考えられる。柱穴は小さいものでＰ５が、長辺58cm、短辺56cmを測る。大きいものでＰ６が、長辺64cm、短辺60cmを測る。この建物も圃場整備などにより削平を受けており、柱穴は本来の深さを保っていないが、検出面からの深さは、18～25cmを測る。柱間の距離は、桁間東列が183cm、195cm、172cm、中央列が189cm、166cm、195cm、西列が183cm、183cm、172cmを測る。梁間は、北列が250cm、252cm、南列が253cm、257cmを測る。平面形は、長方形を呈している。内側の柱穴の並びは、桁方向に直線的である。ほとんどの柱穴からは、柱痕跡を検出した。その観察から、柱の直径は22～25cm程度と考えられる。建物の長軸の方向は、Ｎ－27°－Ｅを示している。建物の時期であるが、出土遺物がないため、明確な時期を確定することはできないが、埋土の状況や、掘り方の形状や、他の遺構との関係などから８世紀中葉から後半と推定される。　（井上）

掘立柱建物18（第158図、図版27－３）

掘立柱建物17の南西約１ｍの位置に検出した。桁間３間、梁間２間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するものである。柱穴の長径は、50～60cmを測る。この建物も、圃場整備などの削平を受けており、本来の深さは保っていない。検出面からの深さは、16～24cmを測る。一部の柱穴に柱痕跡を検出した。その観察から、柱の直径は20cm程度と考えられる。建物の規模は、桁間北列が572cm、南列が582cm、梁間東列が497cm、西列が498cmを測る。建物の平面形は、東西に長い長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－84°－Ｗを示している。Ｐ３からは、84の須恵器蓋が出土している。天井部は平坦で、口縁端部は、僅かに下方に拡張する。建物の時期は、掘立柱建物17よりは新しいと考えられ、須恵器の時期を考慮して、８世紀後半に属すると考えられる。　（井上）

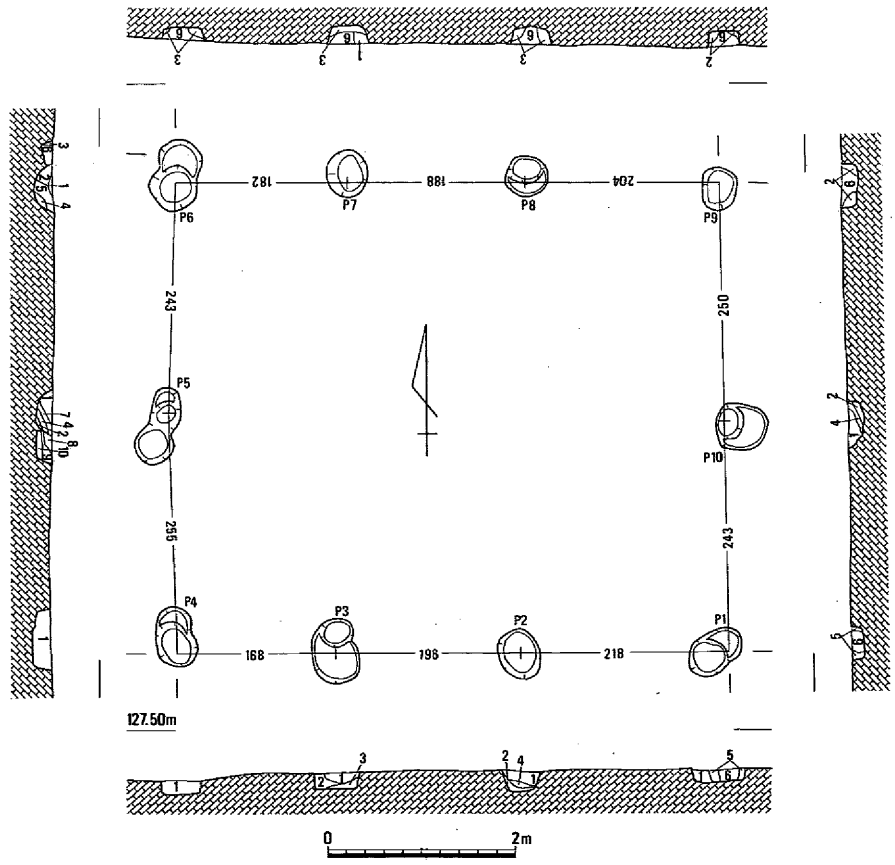
掘立柱建物19（第159図）

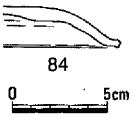
掘立柱建物18の南約２ｍの位置に検出した。桁間３間、梁間１間の側柱建物である。柱穴の平面形は、方形を呈するものが多い。柱穴の長辺は50cm、短辺は40cmを測る。この建物も後世の耕作や、圃場整備により削平を受けており本来の深さを保つものはない。特に西列は削平が激しく、検出した深さは、３～５cmを測るものである。東列の深いもので、20cm程度を測る。Ｐ１、Ｐ３、Ｐ８で柱痕跡を検出した。それらの観察から、柱の直径は、20cm程度と推定される。建物の規模は、桁間が、東西共に552cmを測る。梁間は、北側366cm、南側372cmを測る。建物の平面形は、長方形を呈している。建物の長軸の方向は、Ｎ－28°－Ｅを示している。長軸方向の柱の配置を見ると、東列、西列共に中



1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
2　オリーブ灰色（2.5Y4/3）粘質土
3　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土
4　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土
5　オリーブ黄色（5Y6/3）粘質土
6　褐灰色（5YR4/1）粘質土
7　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土
8　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
9　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
10　黒褐色（10YR3/2）粘質土
11　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質土
12　淡黄色（5Y8/3）粘質土
13　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
14　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
15　灰オリーブ色（5Y5/2）粘質土
16　黒褐色（10YR5/2）粘質土
17　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
18　黄色（2.5Y8/6）粘質土

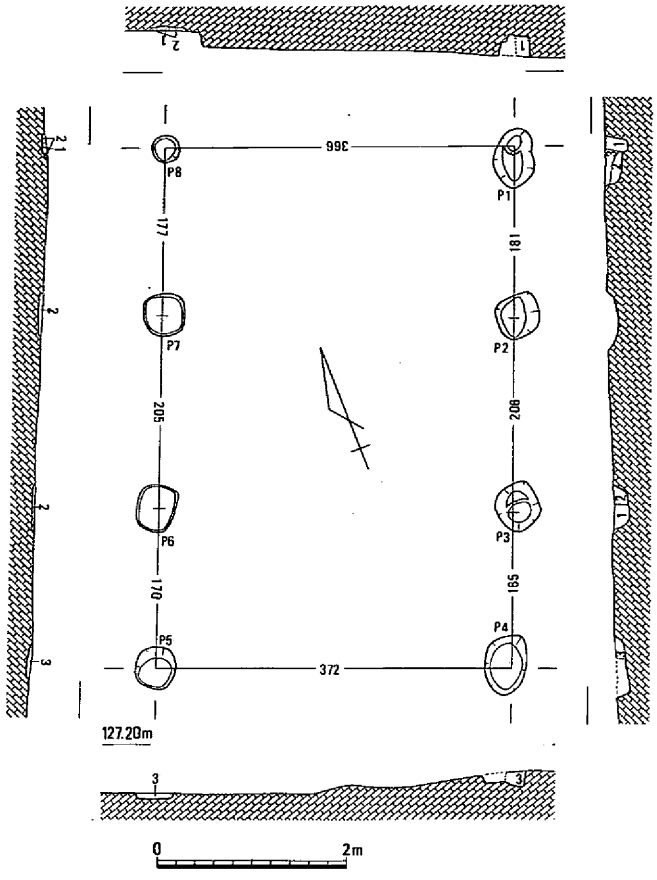
第157図　掘立柱建物17





1　褐灰色（10YR4/1）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊多含
2　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土
黄灰色（2.5Y4/1）
粘質土塊多含
3　淡黄色（5Y8/4）粘質土
黄灰色（2.5Y4/1）塊少量含
4　灰色（5Y4/1）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊極少含
5　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊多含
6　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊少含
7　にぶい黄橙色（10YR6/4）
粘質土
黄灰色（2.5Y4/1）
粘質土塊少含
8　黒褐色（10YR3/2）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊極少含
9　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊多含
10　極暗褐色（7.5YR2/3）粘質土
明黄褐色（2.5Y7/6）
粘質土塊極少含

第158図　掘立柱建物18と出土遺物



1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　　浅黄橙（10YR8/3）粘質土塊少含　柱痕
2　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土　　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土塊多含
3　暗褐色（10YR3/3）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/3）粘質土塊多含

第159図　掘立柱建物19

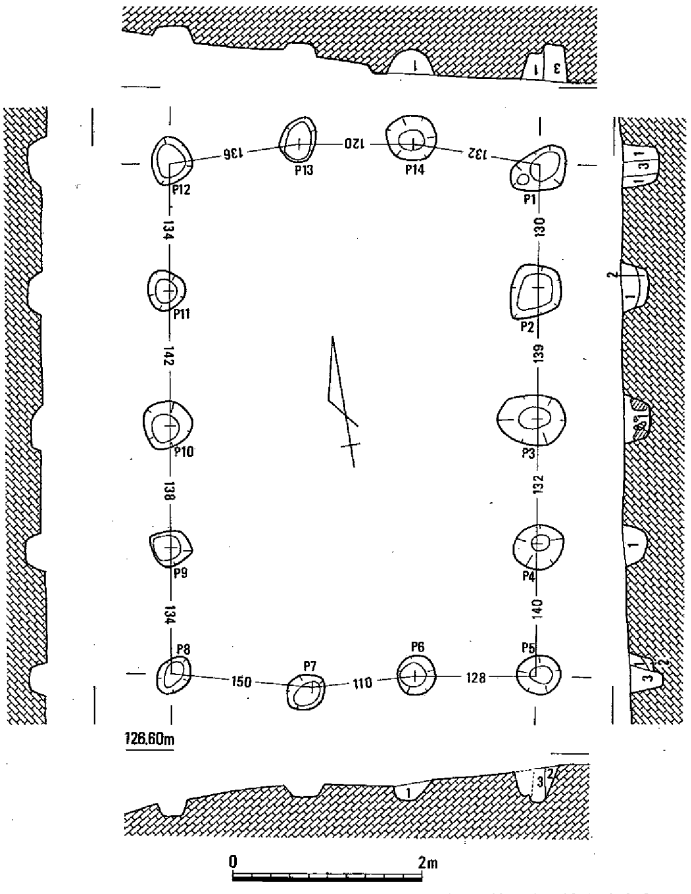
央の柱間が30cm程度広く配置されている。建物の時期であるが、出土遺物が無いため明確な時期を確定することはできないが、埋土の状況、掘り方の形状、他の遺構、特に掘立柱建物17に似る点の有ることを考慮すれば、同時期の８世紀中葉から後半に属すると推定される。　（井上）

掘立柱建物20（第160図）

掘立柱建物19の南西約３ｍの位置に検出した。桁間４間、梁間３間の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するものである。柱穴は、大きいものでＰ３は長径70cm、短径52cmを測る。小さなものではＰ６で直径40cmを測る。建物は、斜面にかかる位置に検出したため、西側が大きく削平を受けており、柱穴も本来の深さを保つものはない。検出面からの深さは、浅いもので10cm、深いもので40cmを測る。一部の柱穴において柱痕跡を検出した。その観察によると、柱の直径は、20cm程度と推測される。柱穴間の距離は、桁間が130～142cm、梁間が110～150cmを測り、柱間の距離が狭い。建物の規模は、桁行の東側541cm、西側548cm、梁間の北側388cm、南側388cmを測る。建物の平面形を見ると、基本的には長方形であるが、柱穴の並びは、桁方向は直線的であるのにに対して、梁方向は何れも外側に少し張り出している。建物の長軸の方向は、Ｎ－16°－Ｅを示している。建物の時期であるが、出土遺物が無いために、明確な時期は不明であるが、埋土の状況、掘り方の形状などから、８世紀後半から９世紀初頭の時期に属するものと推測される。　（井上）

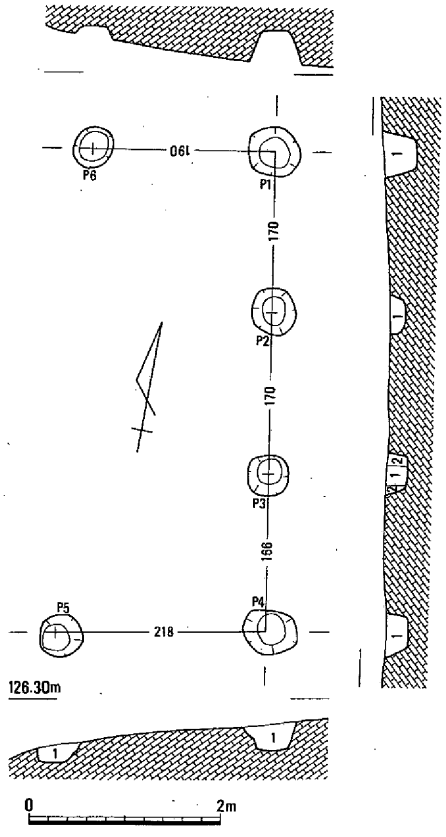
掘立柱建物21（第161図）

６区中央部西端に検出した。西に下がる斜面が、大きく傾斜を変換する部分に近い位置に立地する。建物は、更に西に延びるものと考えられるため、一部拡張して調査したが、柱穴の想定される付近は、急激に傾斜が下がるため、関連する遺構は削平されているものと考えられた。また、地形的制約から、建物の長軸方向は、南北方向と考えられる。建物は、桁間３間、梁間１間以上の側柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径は42～50cmを測る。検出面からの深さは18～36cmを測る。Ｐ３からは、柱痕跡を検出した。その観察から、柱の直径は20cm程度と考えられる。柱穴間の距離は、桁間が166cm、170cm、梁間が190cm、218cmを測る。建物の長軸方向は、Ｎ－３°－Ｗを示している。建物の時期であるが、出土遺物が無いため確定できないが、古墳時代後期～古代の中に収まるものと考えられる。　（井上）



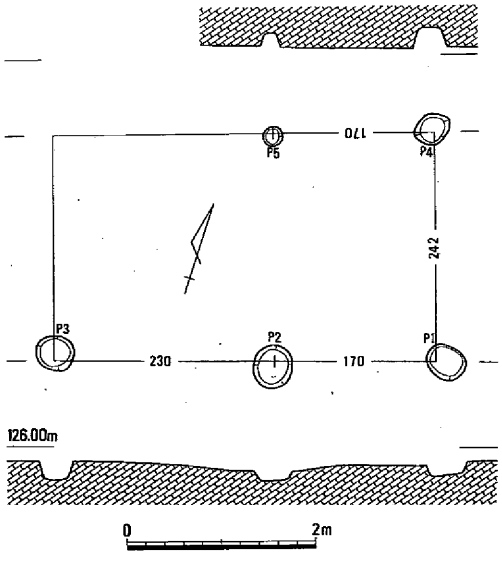
1　黒褐色（10YR2/2）粘質土　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土塊、焼土塊少含
2　オリーブ黄色（5Y6/3）砂質土　　礫、淡黄色（5Y8/3）粘質土塊やや多含
3　黒色（10YR2/1）粘質土　　礫多含、焼土塊極少量含

第160図　掘立柱建物20



1　暗褐色（7.5YR3/3）粘質土
2　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
　　黄橙色土（10YR8/8）塊多含

第161図　掘立柱建物21



第162図　掘立柱建物22

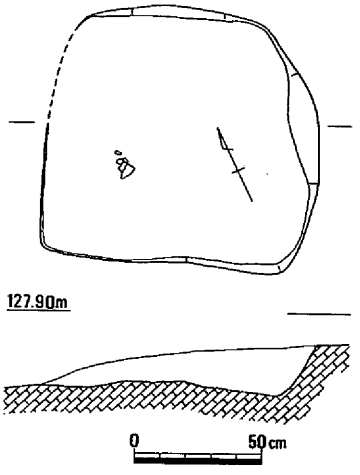
掘立柱建物22（第162図）

掘立柱建物21の南東約38ｍの位置に検出した。桁間２間、梁間１間の側柱建物である。北西端の柱穴は、現代の暗渠により削平されており検出できなかった。柱穴の平面形は、円形を呈するものである。柱穴の長径は、20～42cmを測る。この建物も圃場整備などの削平を受けており、本来の深さを保つ柱穴は無いが、検出面からの深さは、10～22cmを測る。柱穴間の距離は、桁間が170cm、230cm、梁間が242cmを測る。建物の平面形は、長方形を呈するもので、長軸の方向は、N－78°－Eを示している。建物の時期であるが、出土遺物が無いため、明確な時期を確定することはできないが、柱穴を埋める土の色調、状況などから、古墳時代以前と推定される。　（井上）

３．土壙

土壙１（第163図）

４区の北東、溝１の北側で検出した一部隅丸方形の土壙である。長辺115㎝、短辺102㎝を測り、深さは残りの良いところでは19㎝を測る。斜面地に立地するため、遺構の東側半分は流出してしまっている。底面は東側で一番深く、西側にむかって高くなり、埋土は１層で黒褐色粘性砂質土である。出土遺物は少量の弥生時代中期の甕の体部片が少量あり、出土遺物と埋土から同期の土壙であると考えられる。（時實）



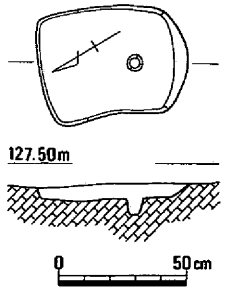
第163図　土壙１

土壙２（第164図）

４区の中央部分に位置する、方形の土壙である。長辺65㎝、短辺43㎝を測り、深さは約５㎝を測る。壁面は北西側で緩く立ち上がり、他の３辺は直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、中央より北西側に直径６㎝、深さ13㎝を測る柱穴状の落ち込みが一カ所あった。出土遺物は無かったが埋土が黒褐色粘性砂質土であり、このことから弥生中期の土壙であると考えられる。（時實）

土壙３（第165図）

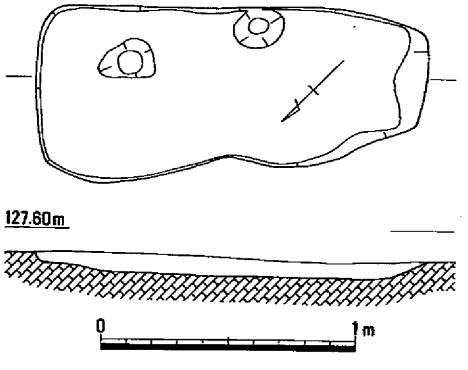
４区の中央部分、土壙２の南側に位置する、不整な長方形を呈する土壙である。長辺153㎝、短辺60㎝を測り深さは約６㎝と浅いものであった。出土遺物は細片で少量出土しているのみである。埋土が暗褐色粘性砂質土であり、これから判断して時期は古墳時代であると考えられる。（時實）



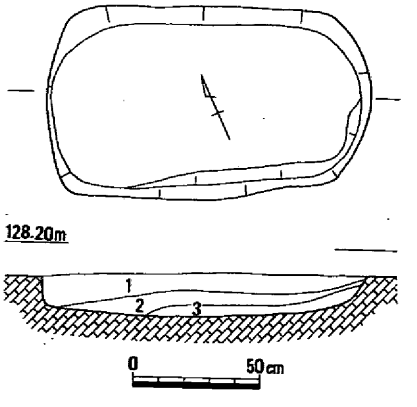
第164図　土壙２

土壙４（第166図）

４区の中央部東側、溝６の南で検出された、隅丸長方形を呈する土壙である。規模は長辺128㎝、短辺77㎝、検出面からの深さ17㎝を測る。底面はほぼ平坦を呈しており、北辺から東辺にかけての肩口が２段になる。埋土は上層２層に地山土を多く含んでいることから、人為的に埋め戻されたと推測される。出土遺物は土師器や瓦質土器の細片が出土していることから、この土壙の時期は中世であると考えられる。（時實）



第165図　土壙３

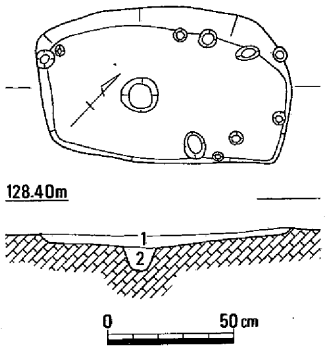


第166図　土壙４

1　暗灰褐色粘性砂質土
　（地山土塊を少量含む）
2　暗褐色粘性砂質土
　（地山土塊多く含む）
3　暗褐色粘性砂質土

土壙５（第167図）

４区の南東部に位置する、長方形を呈する土壙である。規模は長辺100cm、短辺63cm、検出面からの深さは４cmを測る。断面は浅い皿状で、中心部が若干凹んでいる形状を呈する。ほぼ中央部分で、直径約15cmの柱穴を１つ切っている。出土遺物はないものの、埋土の状況から中世の遺構であると考えられる。（時實）

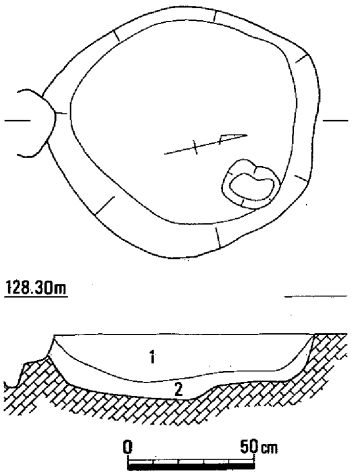


1　暗灰褐色粘性砂質土
2　暗褐色粘性砂質土

第167図　土壙５

土壙６（第168図）

４区の南東部、土壙５の西３ｍにおいて検出した、不整円形の土壙である。長径104cm、深さ26cmを測り、周辺の遺構の中では深く掘り込まれている。断面の形状は南側が深く、北側に向かって浅くなる。土師器細片のほか瓦質の羽釜の口縁部小片が出土しており、この土壙の時期は中世であると考えられる。（時實）



1　暗褐色粘性砂質土
（地山を少量含む）
2　暗褐色粘性砂質土
（地山ブロック多量に含む）

第168図　土壙６

土壙７（第169図）

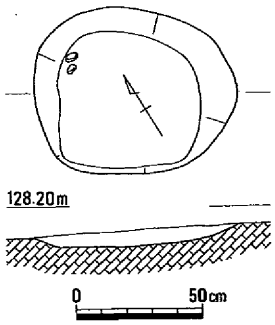
４区の南東部、土壙６のすぐ西側に位置している、楕円形を呈する土壙である。長径81cm、短径65cm、検出面からの深さ６cmを測る。断面の形状は、浅い皿状を呈しており、床面はほぼ平坦である。埋土は暗灰褐色粘性砂質土の単一層で、出土遺物はないが、埋土の状況などから中世の遺構であると考えられる。（時實）

土壙８（第170図）

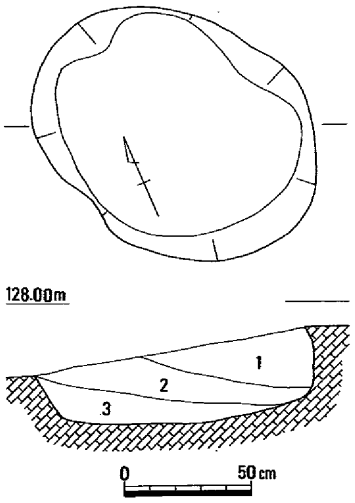
４区の北側で検出した、楕円形の土壙である。規模は長径117cm、短径86cm、検出面からの深さ31cmを測る。埋土は最下層は地山土を多く含み埋め戻されたと考えられる。遺物は須恵器、土師器の小片が出土したのみであるが、これら出土遺物から、時期は古墳時代後期であると考えられる。（時實）

土壙９（第171図）

４区の北側、土壙８の西５ｍに位置する楕円形の土壙である。規模は長径64cm、短径50cm、検出面からの深さ24cmを測る。埋土

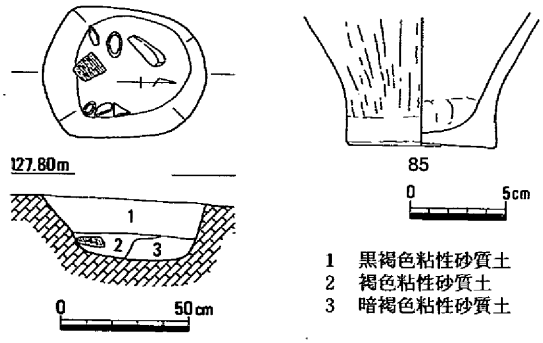


第169図　土壙７

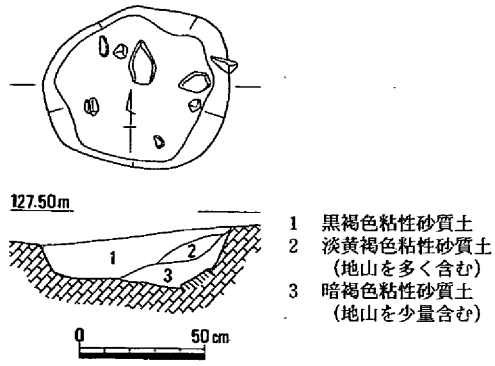


1　暗褐色粘性砂質土
2　暗褐色粘性砂質土
（暗黄褐色粘性砂質土混じる）
3　暗黄褐色粘性砂質土
（地山ブロック多く含む）

第170図　土壙８

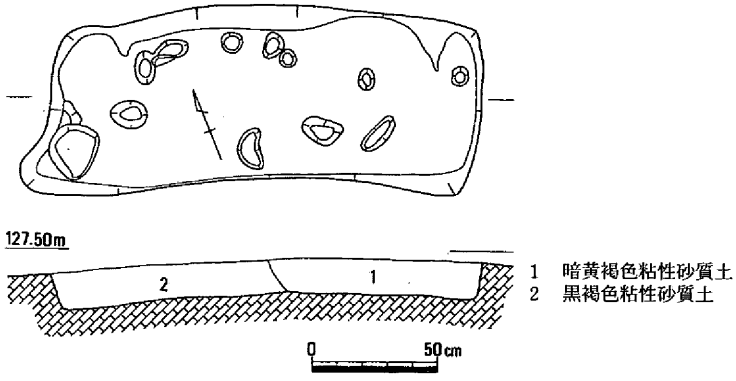


第171図　土壙９と出土遺物



第172図　土壙10

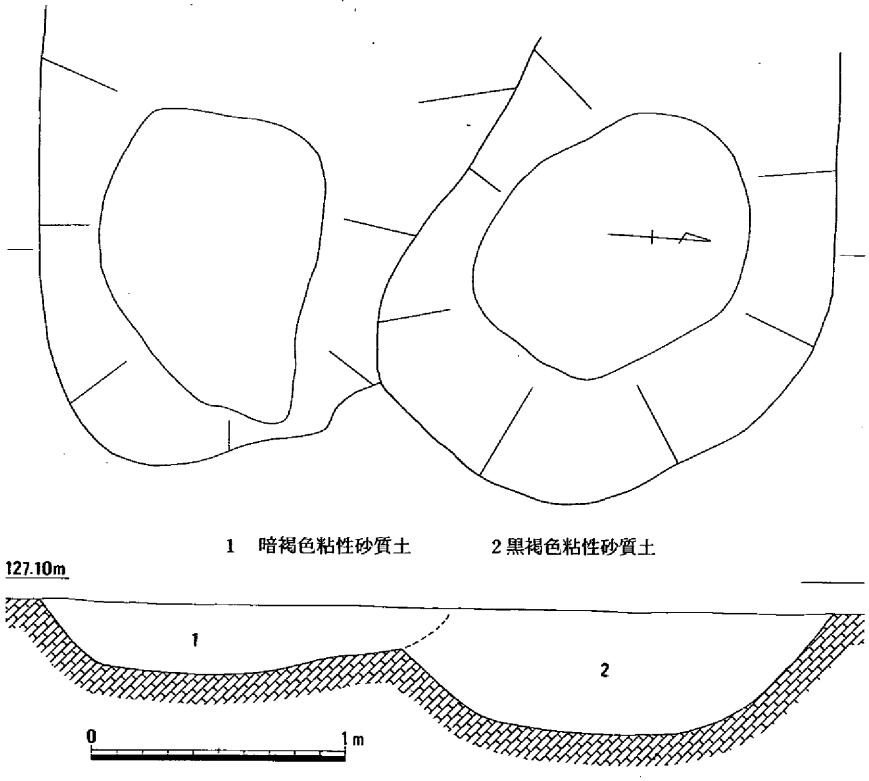
は３層で、第２層に炭を多く含んでおり、底面は南にむかって緩く立ち上がっている。85は弥生土器の甕の底部である。底径は7.9cmを測る。外面にヘラ磨きを行っており、内面はナデ、内底面に指頭圧痕が残る。胎土には角閃石を多く含む。この出土遺物から、弥生時代中期であると考えられる。　（時實）



第173図　土壙11

土壙10（第172図）

４区の南西端、土壙11の北側１ｍに位置する円形の土壙である。規模は長径75cm、短径64cmを測り、検出面から一番深いところで、深さ22cmを測るものである。底面は中央部より東側が一段下がっており、肩口は鋭角に立ち上がる。出土遺物は土器の細片が出土しているのみであるが、埋土の状況と周辺の遺構の状況から、弥生時代中期の遺構であると考えられる。　（時實）



第174図　土壙12（右）・13（左）

土壙11（第173図、図版28－１）

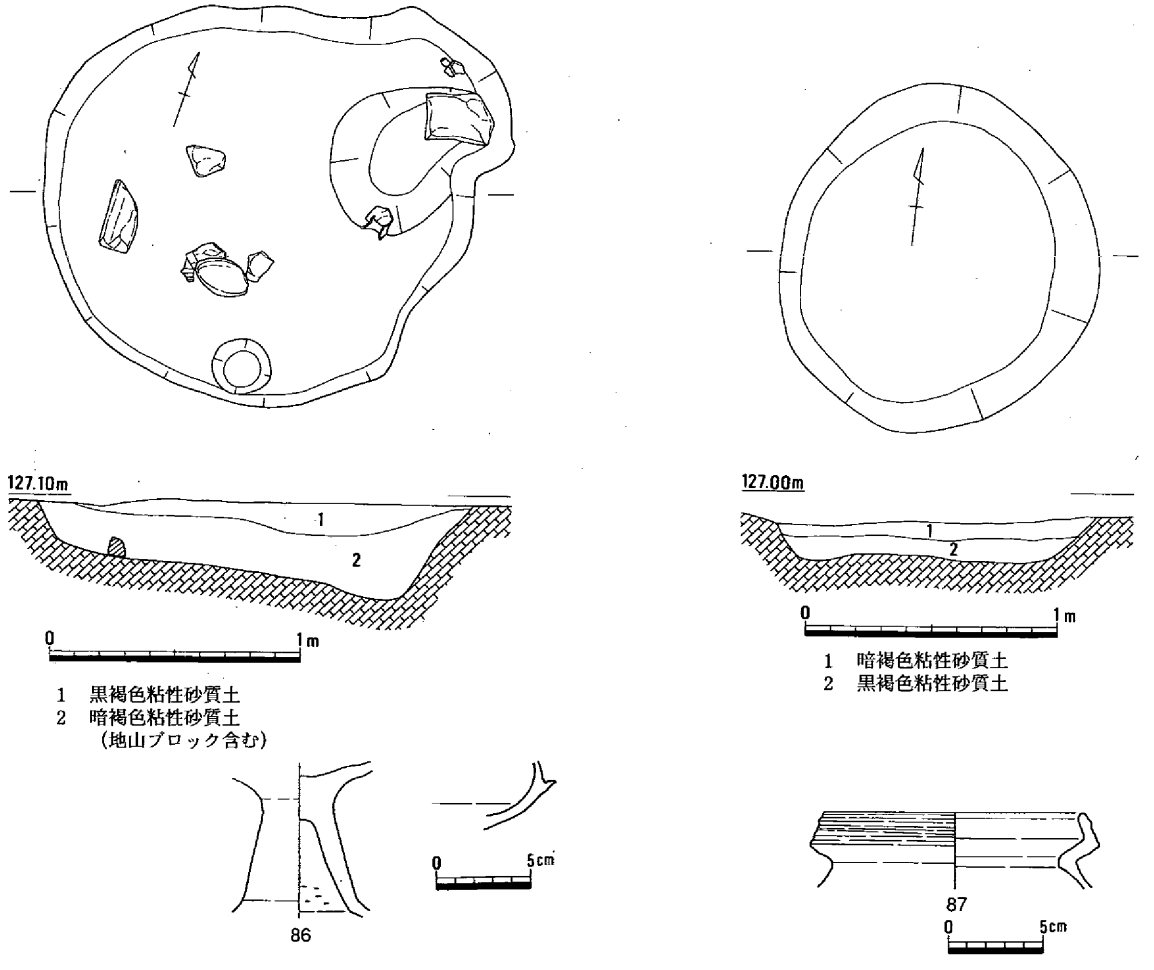
４区の南西端で検出した長方形の土壙である。規模は長辺169cm、短辺69cmを測る。検出面からの深さは15cmと浅い。底面は中心部分がやや高くなっている。底面にある柱穴状のものは、植物の根等によるものであり、遺構には関係ないと考えられる。出土遺物は弥生土器の細片が出土している。埋土の状況と弥生中期前葉と考えられる溝９によってこの土壙が切られていることと、周辺の遺構の状況から溝９とあまり時期差はないものと考えられる。（時實）

土壙12（第174図、図版28－２）

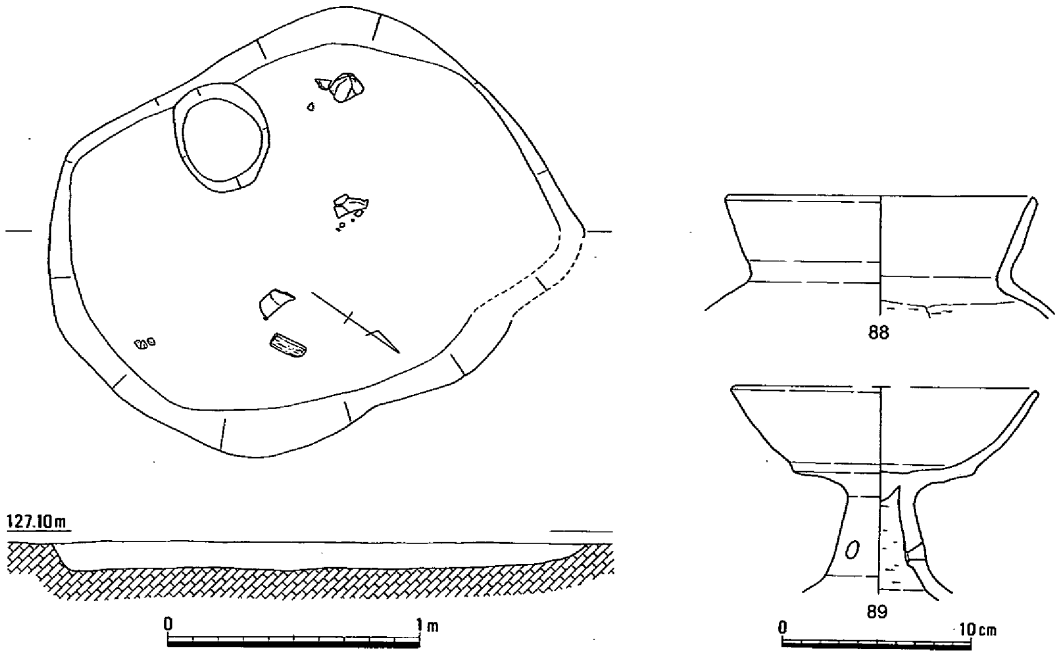
１区竪穴住居２の南約３ｍの位置に検出した。調査区の端部に検出したことから、一部調査できなかった部分が存在する。そのため、全体の形状は不明であるが、円形に近い形状を呈していたものと推測される。検出面からの深さは、最も深い部分で約50cmを測る。底面は、僅かに窪むが、ほぼ平坦面に近い。底面平坦部の規模は、長径112cm、短径94cmを測る。壁は大きく開きながら立ち上がるもので、断面形は逆台形を呈している。全体の規模は不明であるが。南北方向の直径は、180cm程度と推測される。土壙の時期であるが、出土遺物が無いため、明確な時期は不明であるが、埋土の状態、周辺の遺構との関係から、古代よりは古いものと考えられる。（井上）

土壙13（第174図、図版28－２）

土壙12の南側に一部重複して検出した。この土壙も同じく調査区の端部に検出したため一部調査で



第175図　土壙14・15と出土遺物



第176図　土壙16と出土遺物

きなかった部分が存在する。そのため、全体の形状は不明であるが、楕円に近い形状を呈していたものと推測される。検出面からの深さは、最も深い部分で28cmを測る。底面は、南が深く北に少し浅くなるが、際だった凹凸はない。底面平坦部の規模は、長径120cm、短径90cmを測る。検出面での全体の規模は不明であるが、南北方向の長径は、160cm程度と推測される。検出した時には、土壙12と土壙13の前後関係は判然とはしなかったが、土層断面の観察によると、土層図の様に土壙13が新しいと判断されるものが観察されたことから、土壙13が新しいものと考えられる。土壙の時期であるが、土壙12よりは新しいが、大きく時期を隔てるものではないと考えられる。　（井上）

土壙14（第175図）

土壙13の東約５ｍの位置に検出した。平面形は、東側が少し崩れるがほぼ円形を呈するものである。検出面からの深さは、最も深い部分で38cm、浅い部分で18cmを測る。底面は、東側に一部深い部分があり、全体的には、その部分に向けて少し傾斜しているが、大きな凹凸はなくむしろ平坦である。底面には、長径15～30cmを測る石を乱雑な状態で数個検出した。土壙の規模は、検出面で長径180cm、短径160cmを測る。底面の平坦部は、長径150cm、短径140cmを測る。遺物は、少し出土している。**86**は、弥生土器の高杯である。脚柱部内面には横方向のヘラケズリが観られる。表面は剥離しているため調整は不明であるが、胎土は精良である。土壙の時期は、高杯が出土していることを考慮すれば、弥生時代後期後半と考えられる。　（井上）

土壙15（第175図）

土壙14の南西約５ｍ、竪穴住居５の中央穴に接して西側の位置に検出した。平面形は、円形を呈するものである。検出面における土壙の規模は、長径140cm、短径126cmを測り、少し南北方向に長い。検出面からの深さは、深い部分で18cm、浅い部分で14cmを測る。底面は僅かに高低はあるが、ほぼ平坦である。底面の規模は、長径112cm、短径100cmを測る。壁面は、西側は、やや急に立ち上がるが、それに比べて東側は、少し緩やかである。土壙の断面形は、逆台形を呈している。出土した遺物は非

常に少ない。**87**は、弥生土器の甕である。口縁端部は、少し内傾して立ち上がるもので、外面に沈線が施される。胴部内面は、ヘラケズリが認められる。また、外面には、煤の付着が見られる。土壙の時期でるが、竪穴住居５と重複して検出したが、住居跡を検出した時には見られず、床面に検出した。また、住居跡の中央穴の周囲に見られる土手状の高まりを、この部分では明瞭に検出できなかったことは、土壙による床面の沈下によるものと考えられることを考慮すれば、竪穴住居５よりは古いが、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。（井上）

土壙16（第176図）

土壙15の南東約３ｍの位置に検出した。竪穴住居５と一部重複するする。しかし、竪穴住居５の土層断面図（第124図）に観られるように、第５層は、竪穴住居５を切っており、この層が、土壙16であることは、明らかに土壙16が新しい。平面形は、隅丸長方形を呈するものである。検出面における土壙の規模は、長辺194㎝、短辺155㎝を測る。検出面からの深さは、深い部分で12㎝、浅い部分で10㎝を測る。底面は、やや南に低くなるが、凹凸はなくほぼ平坦である。底面の規模は、長辺180㎝、短辺126㎝を測る。壁は、少し急に立ち上がり、断面形は、逆台形を呈している。

出土遺物としては、**88・89**などがある。**88**は、甕である。口縁部は少し開きながら直線的に立ち上がり、胴部内面には、横方向のヘラケズリが観られる。**89**は、高杯である。脚柱部内面はヘラケズリが観られ、円孔は、３個が穿たれるものである。土壙の時期であるが、これらの出土遺物から、５世紀後半に属するものと考えられる。（井上）

土壙17（第177図）

２区北西に位置する楕円形の土壙である。検出面で長径が260㎝、短径は200㎝、深さ最大20㎝を測る。溝11と切り合い関係にあるが、検出状況と土層観察により溝11を切っていると判断されることから、溝11より新しいと考えられる。底面は水平ではなく凹凸が認められ、不整形な印象を受ける。断面図で土層の第１層はこの土壙より新しい柱穴、残りの層が土壙の埋土と認識した。遺物は床面に土師器**90**が、埋土中に須恵器**91**が見られ、実測できなかったが竈の破片も存在した。遺物からは時期を判断できないが、溝11より新しいので古代以後と考えられる。（氏平）

土壙18（第178図）

土壙17と同じく、２区北西に位置する楕円形の土壙である。検出面で長径が130㎝以上、短径は120㎝、深さ最大６㎝を測る。すぐ南側に位置する土壙19および溝11と切り合い関係が存在し、土壙19より古く溝11より新しいことがわかった。底面はほぼ平坦である。平面図では土壙内にある柱穴も記しているが、それらはおそらく土壙より新しいものと考えられる。遺物は見られなかった。時期は不明であるが、溝11より新しいため古代以後と考えられる。（氏平）

土壙19（第179図）

土壙18と切り合い関係のある楕円形の土壙である。検出面で長径が152㎝、短径は114㎝、深さ最大18㎝を測る。すぐ北側に位置する土壙18・溝11よりも新しいことが切り合い関係により判明している。底面はほぼ平坦である。土層は、主な埋土である第１層の中にブロック状に第２・３層が入る。第１層は溝11の埋土よりやや淡い色調を呈する。この土壙内にも柱穴が存在するが、いずれの柱穴もおそらく土壙より新しいと考えられる。遺物は埋土中から出土した。弥生時代後期の土器片と縄文時代早期の押型文土器が見られたが、いずれも小片で混入と判断した。押型文は１点で、図化できなかったが黄島式に相当する山形文である。この遺構の時期は切り合い関係により溝11より新しいため、古代

以後と考えられる。　　（氏平）

土壙20（第180図）

竪穴住居７、溝12と切り合い関係のある楕円形の土壙である。検出面で長径が164cm、短径は146cm、深さ最大28cmを測る。溝12に切られ、住居７とその排水溝を切る形で位置する。このため、溝12よりも古く、竪穴住居７よりも新しいことがわかる。底面はほぼ平坦である。

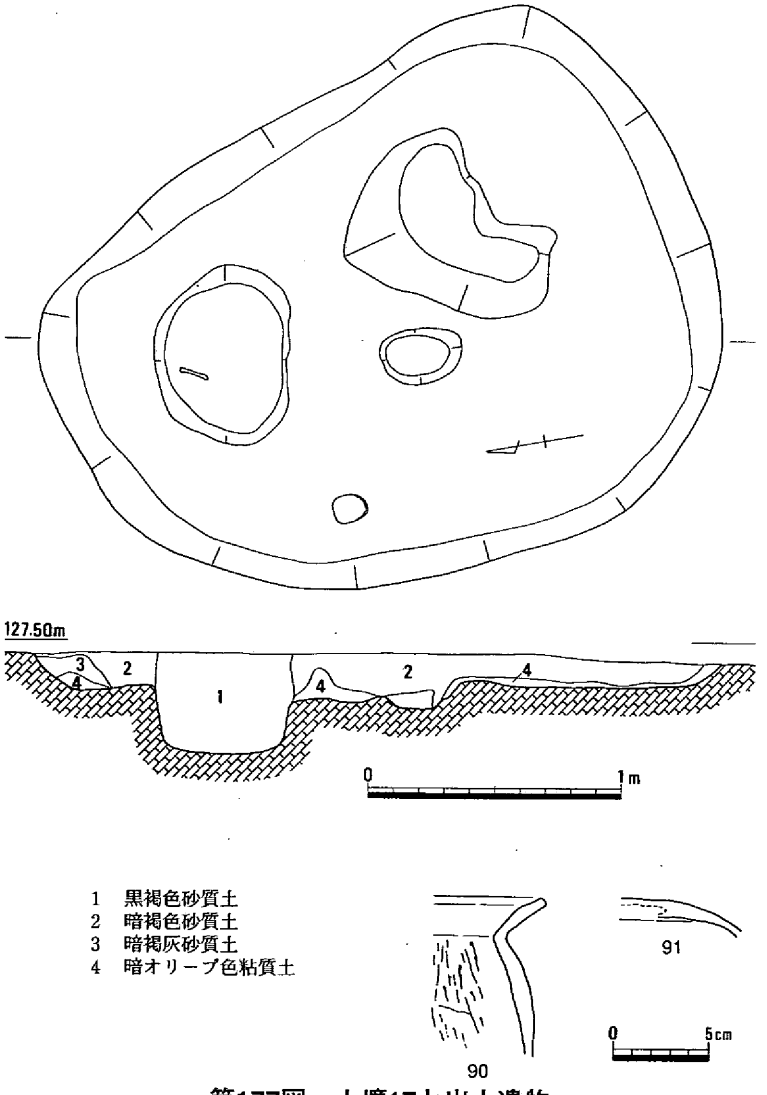
遺物は埋土中から出土し、図示できたものとしては弥生時代中期中葉の甕片92が存在する。遺構の切り合い関係からみると、遺構の本来の時期をあらわすとは言いがたく、混入と考えられる。

この遺構の時期は、遺物では判断できず、弥生時代以降で古代までの範囲としか言えない。（氏平）

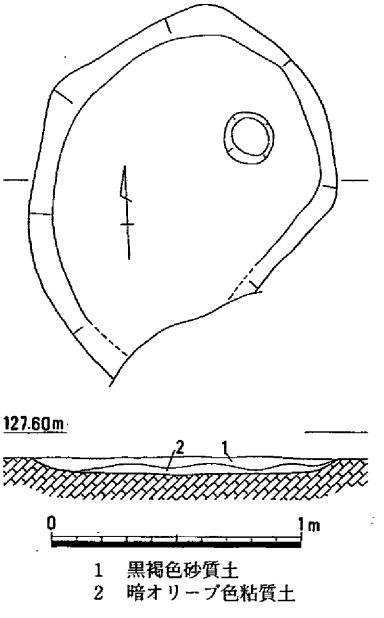
土壙21（第181図）

土壙20の東南東約19ｍの位置に検出した。平面形は、隅丸長方形を呈するものである。検出面における土壙の規模は、長辺111cm、短辺84cmを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で20cm、浅い部分で13cmを測る。底面は、南側が深いために、南に向けて少し傾斜が見られるが、概ね平坦である。底面の規模は、長辺94cm、短辺58cmを測る。壁面は急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。土壙は、底面に僅かに土色の異なる土が認められるのみで、ほとんど同一の土で埋まるものである。

土壙の時期は、出土遺物が僅少であるため、明確には確定することはできないが、小破片ではあるが、須恵器が出土していること、周辺遺構との関係、埋土の状況等を考慮すれば、古代以前、古墳時代後期以降に属するものと推測される。　（井上）



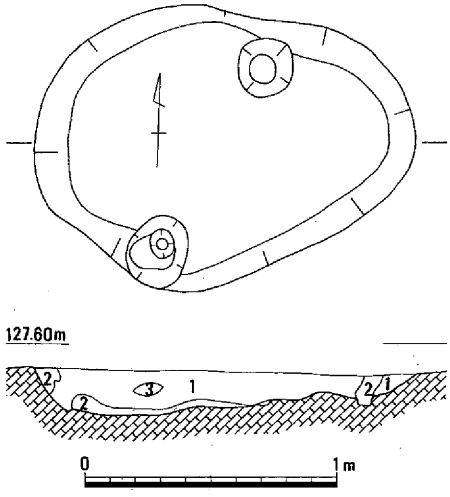
第177図　土壙17と出土遺物



第178図　土壙18

土壙22（第182図）

土壙21の西南西約７ｍ、竪穴住居８と竪穴住居10に挟まれる位置に検出した。平面形は、円形を呈するものである。検出面における土壙の規模は、長径83㎝、短径80㎝を測る。検出面からの深さは、16㎝を測る。底面は、浅く窪むもので、壁体も緩やかに弧を描きながら立ち上がる。そのため、断面形は、碗形を呈している。土壙の時期であるが、出土遺物が僅少であるため、遺物からは、明確にすることはできないが、小破片ではあるが、須恵器が出土していること、竪穴住居８、竪穴住居10を切っていることから、古墳時代後期以後で、古代以前の間に属するものと考えられる。　（井上）



1　黒褐色砂質土　　2　暗オリーブ色粘質土
3　暗褐色砂質土

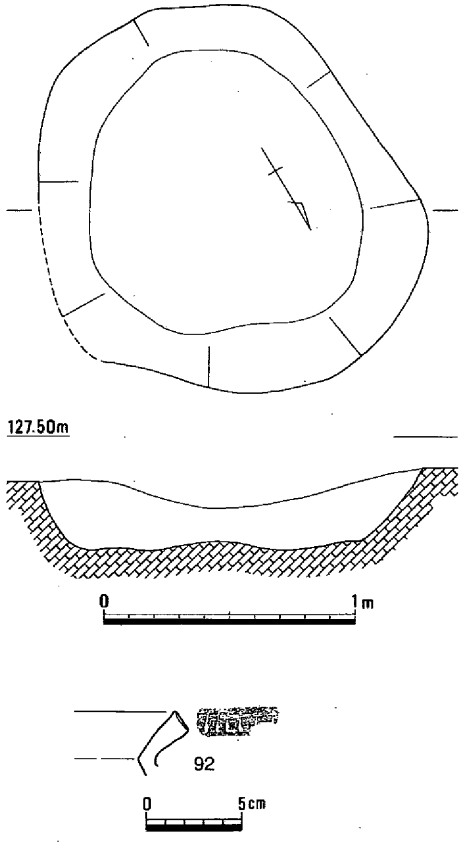
第179図　土壙19

土壙23（第183図）

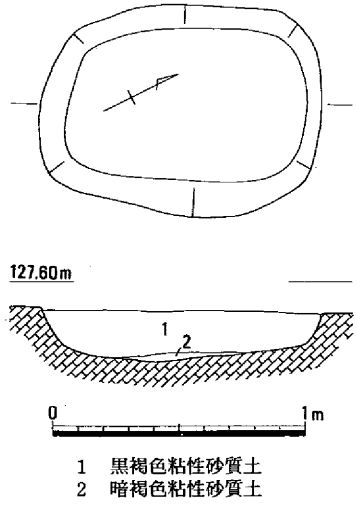
土壙22の西約９ｍの位置に検出した。平面形は、東西方向に長い楕円形を呈するものである。検出面における土壙の規模は、長径115㎝、短径70㎝を測る。検出面からの深さは、深いところで27㎝、浅いところで22㎝を測る。底面は、僅かに東に向けて下るが、ほぼ平坦である。底面の長径は80㎝、短径36㎝を測る。壁体は、西側は急に立ち上がるが、東側は少し開きながら立ち上がる。断面形は、少し深い皿状を呈している。遺物は、図示できるものは無いが、少量出土している。量が少ないために、時期については確定的ではないが、弥生時代後期の土器が認められることから、弥生時代後期、もしくはそれを少し下る時期に属するものと考えられる。　（井上）

土壙24（第184図）

土壙22の東南東約９ｍの位置に検出した。平面形は、南北方向に長い隅丸長方形を呈するものである。検出面



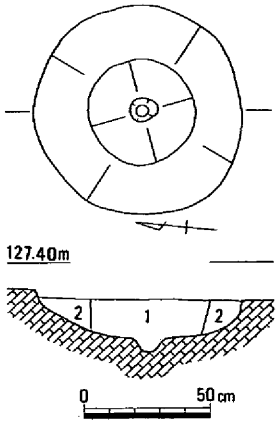
第180図　土壙20と出土遺物



1　黒褐色粘性砂質土
2　暗褐色粘性砂質土

第181図　土壙21

における土壙の規模は、長径138cm、短径92cmを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で22cm、浅い部分で18cmを測る。土壙の底は、南側が深いため、その方向に傾斜している。底面は、ほとんど凹凸はなく、ほぼ平坦である。底面における規模は、長径122cm、短径83cmを測る。壁体は、急に立ち上がるものである。断面形は、逆台形を呈するものである。土壙からの出土遺物はないため、明確な時期については不明であるが、掘立柱建物10の柱穴Ｐ５を切ることから、この建物よりは新しいことは明確である。しかし、埋土の色調や状況からすれば古代には属するものと考えられる。（井上）

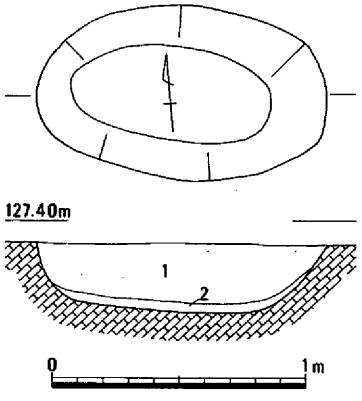


1　黒褐色粘性砂質土
2　暗褐色粘性砂質土
（地山ブロック含む）

第182図　土壙22

土壙25（第185図、図版37－２）

土壙25は九番丁場遺跡２区の南端に位置する。土壙25はちょうど竪穴住居10の敷地内に位置するが、竪穴住居が床面を含め削平されて失われているため、竪穴住居10と土壙25との新旧関係、いわゆる切り合い関係は不明である。土壙25はちょうど円形の土壙が２基つながったような、いわゆる瓢形をなしており、大きさは大きい部分の土壙で径約110cm、深さ約50cm、小さい部分の土壙で径約50cm、深さ約40cmを測る。土壙内の下半部は粘性のつよい黒褐色土を中心とする粘質土が堆積しており、これらの粘質土内には径10cm前後の礫が散乱していた。一方、土壙の上半部には暗赤褐色を呈する粘性砂質土が堆積していた。土壙からは第185図に示したように多くの遺物が出土した。**93**は土師器甕である。**95**は土師器甑の底部である。**94**は土師器甕である。**96**は須恵器杯身である。**97**は須恵器杯蓋である。**98**は須恵器高杯である。これらの遺物は主に土壙上半部の暗褐色粘性砂質土から出土した。**Ｓ８**は鉄床石と考えられる。被熱により赤色化しており、部分的に敲打面が剥離している。これらの遺物から土壙25は７世紀後半から８世紀頃に営まれたものと考えられるが、その用途および性格は不明である。（金田）

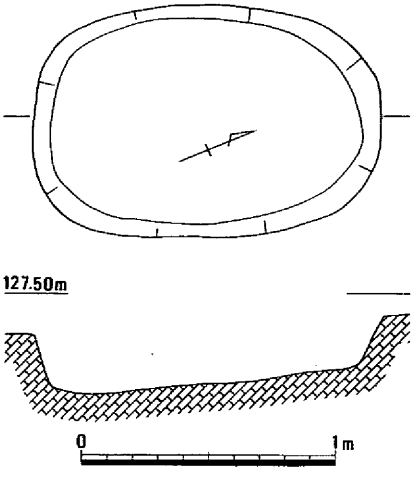


1　黒褐色砂質土
2　黒褐色砂質土
（黄色粘質土混ざる）

第183図　土壙23

土壙26（第186図）

土壙25の南西約２ｍの位置に検出した。平面形は、南辺が長く、北辺が短い台形状を呈するものである。検出面での規模は、長辺140cm、短辺110cm、南北方向の高さ125cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で38cm、浅い部分で18cmを測る。底部は、東側に一段と深い部分が見られる。この土壙は、竪穴住居10と一部重複することが考えられる。しかし、その前後関係は、不明である。土壙の時期は、少量出土した遺物に須恵器が見られることから、古墳時代後期以降から古代の間に属するものと考えられる。（井上）



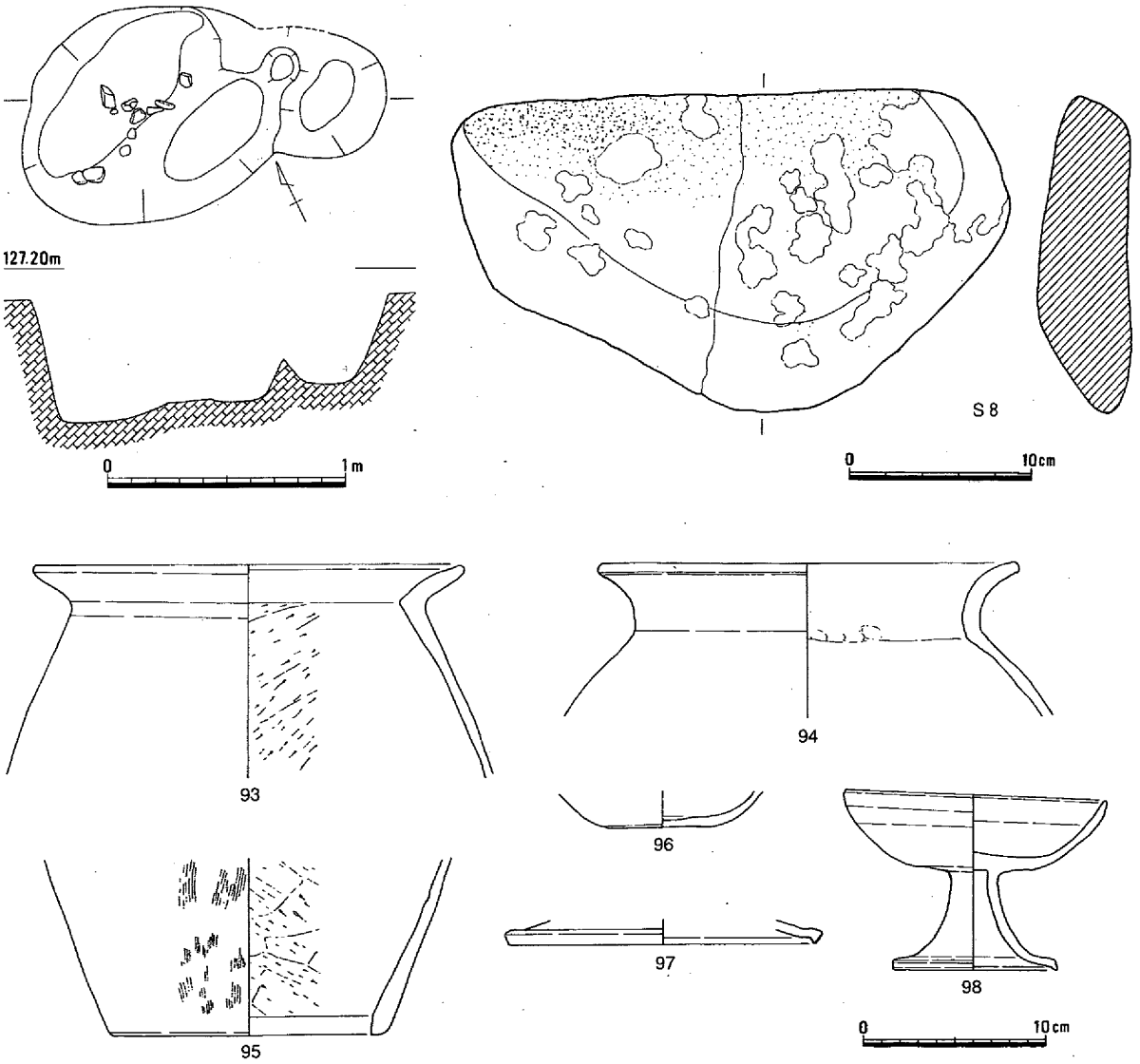
第184図　土壙24

土壙27（第187図）

３区の北西端、拡張部分で検出した不整形の土壙である。長径246cm、短径 184cmを測る。検出面からの深さは、北側の浅い部分で14cm、南東の深いところで46cmを測る。底面の形状はほぼ平坦であり、壁面は緩く立ち上がっている。土層断面から北側に他の遺構を切っていた可能性があったが、平面では確認できなかった。また、下層にもう一つの土壙を検出している。上層の土壙の埋土を除去すると南東隅に拳大～人頭大の礫が集中しており、この礫を除去したところ、長径90cm、短径76cm、深さ24cmを測り、底面が椀状を呈する土壙を確認した。この下層の土壙の埋土は茶褐色の粘性砂質土であり、礫を含まない。下層の土壙上面で検出した礫が、どちらに伴うものかは判断できなかった。出土遺物であるが、弥生時代後期の甕片とともに須恵器片が多く出土している。また、少量の鉄滓も出土している。この鉄滓は６区の製鉄遺構に関連すると考えられることから時期は８世紀末以降のものであると考えられる。（時實）

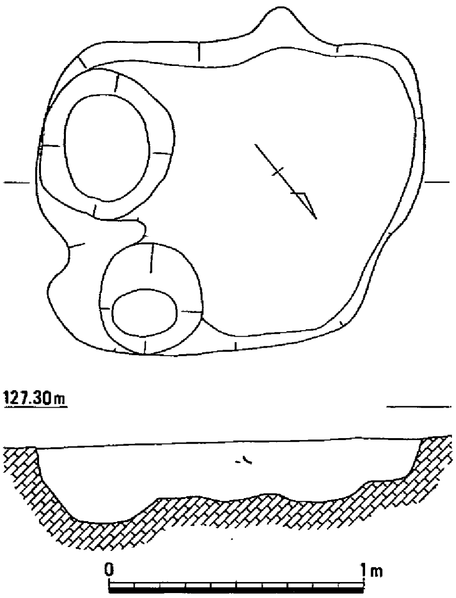
土壙28（第188図）

３区の北西部、溝16に東側を切られている状況で検出した土壙である。楕円形を呈すると推定され



第185図　土壙25と出土遺物

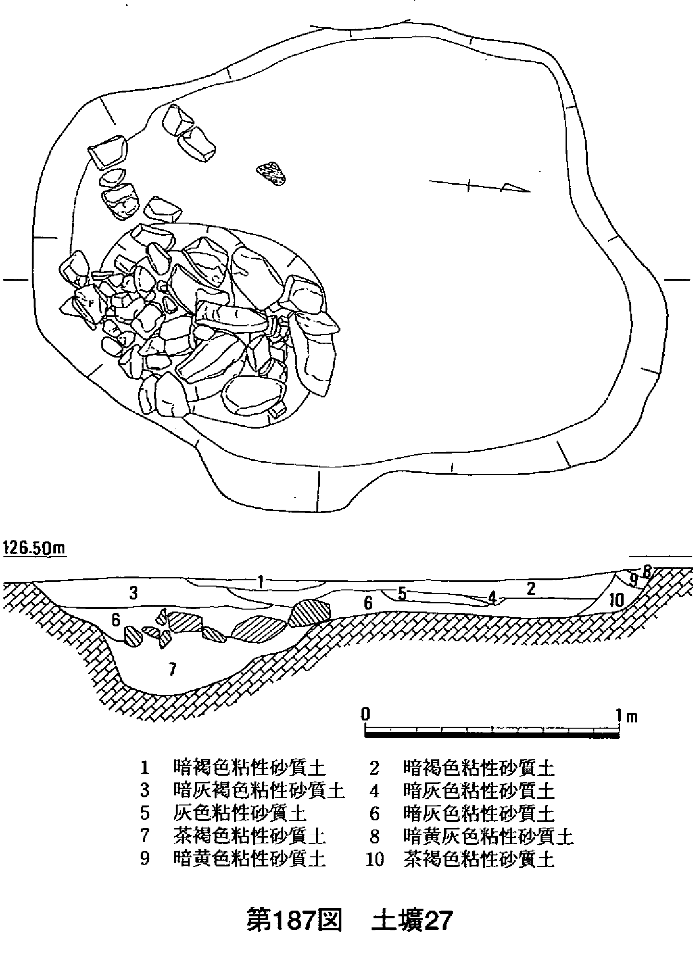
るものである。規模は残存部分であるが、長径98cm、短径64cmである。断面は浅い皿状を呈しており、床面はほぼ平坦で、埋土は黒褐色粘性砂質土の一層であった。遺物は、弥生土器の細片が出土しており、遺物と埋土の状況から弥生時代中期の遺構と考えられる。（時實）



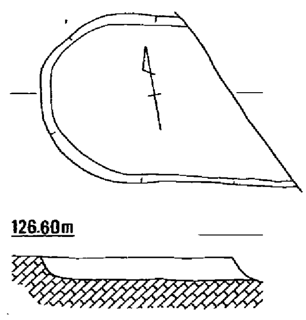
第186図　土壙26

土壙29（第189図、図版28－３）

３区の北西端、拡張部分で検出した、土壙29の南東に隣接する土壙である。不整形の土壙で、長径49cm、短径40cm、深さ８cmを測る。断面の形状は椀状を呈している。検出状況では焼土等の被熱を受けた痕跡はほとんど見られなかったものの、一番上層の暗黄褐色粘性砂質土を掘り下げると、一部に熱影響によって灰白色に変色して締まっている焼土帯および赤褐色の焼土帯が、底面の形状に沿って、椀状に広がっているのを確認した。このことから、鍛冶炉である可能性を考え、土壙内及び、周辺の土を採取して、鍛造剥片や粒状滓といった遺物があるかどうか確認したが、土壙内において１点の鉄滓が出したのみであり、その他のものは出土しなかった。しかし、鉄滓は周辺を精査中に多く出土しており、また、平成11年度の調査においてすぐ南に位置する６区において製鉄遺構を検出しているためこの遺構が鍛冶炉であった可能性は捨てきれない。時期は土器が出土しなかったことから、詳細は不明であるが、鉄滓が出土していることから、時期は８世紀末以降のものと考えられる。（時實）



第187図　土壙27



第188図　土壙28

土壙30（第190図）

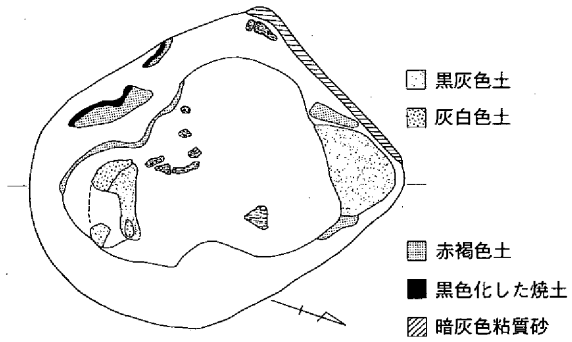
３区の北側中央部分で検出した、楕円形の土壙である。長径107cm、短径75cmを測り、検出面からの深さは４cmと浅いものである。断面はⅢ状を呈しており、底面はほぼ平坦である。出土遺物は土師器の細片を少量出土しているのみであるが、埋土の状況と周辺の遺構の状況から中世の遺構であると考えられる。（時實）

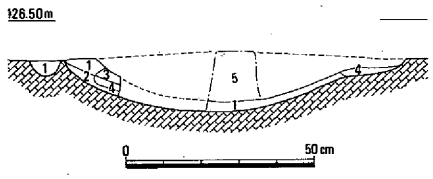
土壙31（第191図）

３区の北側中央部分、土壙32の北西２ｍで検出した、東側がすぼまる形状を呈した不整形の土壙である。規模は長径140cm、短径20cm、深さは検出面から一番浅いところで９cm、深いところで20cmを測り、底面は西に緩く下がっている。出土遺物は土師器片、須恵器片の細片が少量ではあるが出土している。これらの出土遺物と埋土の状況、周辺の遺構の状況から考えて、この土壙の時期は古墳時代後期であると考えられる。（時實）

土壙32（第192図）

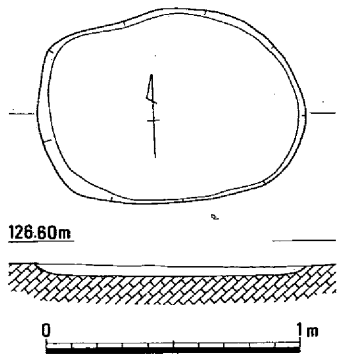
３区の北側中央部分、土壙33の南西２ｍで検出した土壙である。調査区によって南側半分が切られているため、全体の形状は不明である。検出し得た部分での長径は152cmを測る。検出面からの深さは３cmと浅いため、単なるたわみである可能性も考えられる。遺物は須恵器、土師器の細片が出土しており、この土壙の時期は古墳時代後期であると考えられる。（時實）



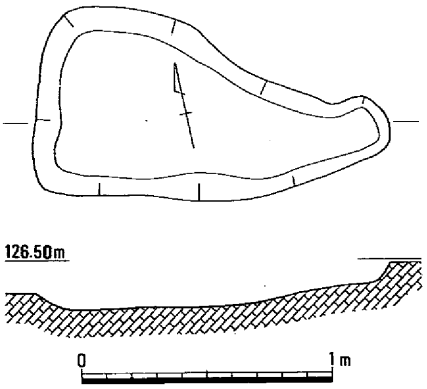


1　暗灰色粘性砂質土
2　暗赤褐色土（焼土）
3　灰白色
4　黒灰色土
5　暗黄褐色粘性砂質土（地山多量に含む）

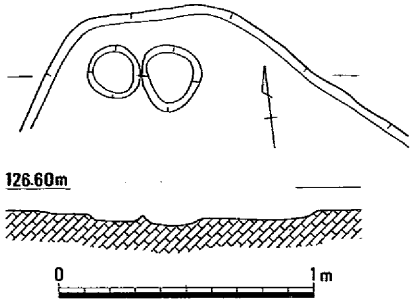
第189図　土壙29



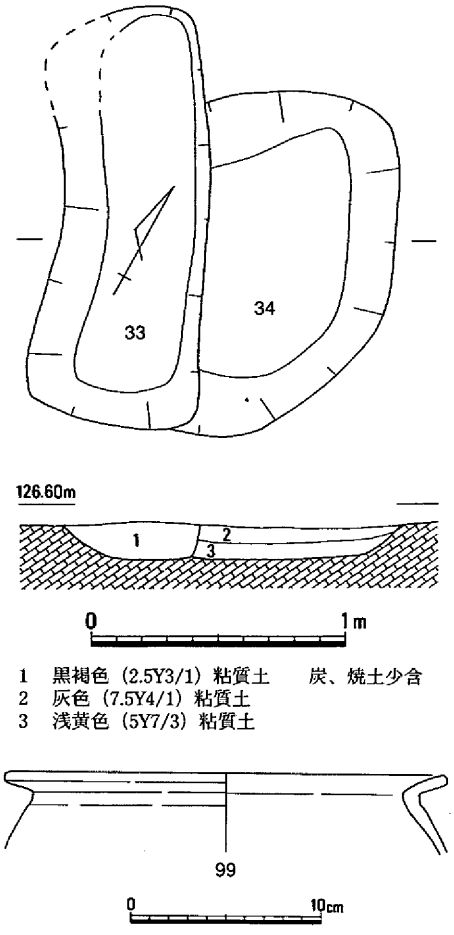
第190図　土壙30



第191図　土壙31



第192図　土壙32



第193図　土壙33・34と出土遺物

土壙33（第193図）

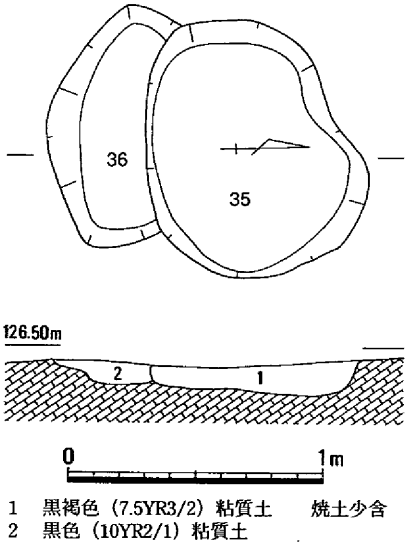
土壙32の西約２ｍの位置に検出した。平面形は、南北方向に長い長方形を呈している。検出面での規模は、長辺68㎝、短辺58～66㎝を測る。検出面からの深さは、約15㎝を測る。底面はほぼ平坦である。底面での規模は、長辺148㎝、短辺38㎝を測る。土壙は、一層で埋まるもので、炭、焼土を含むものである。少量ではあるが遺物が出土している。99は、甕である。大きく外反する口縁部は、端部に向けて少し厚くなる。調整については、器壁の剥離などで不明であるが、弥生時代中期の土器であり、土壙の時期も同じ時期と考えられる。　（井上）

土壙34（第193図）

土壙33と一部重複して検出した。検出時の平面観察と、断面の観察から、土壙33が土壙34を切っていることが明らかである。土壙の平面形は、一部不明な部分もあるが、円形に近い形状を呈していたものと考えられる。検出面での規模は、長径135㎝を測る。検出面からの深さは10～14㎝を測る。底面は、僅かに窪むものの平坦である。壁体は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈している。出土遺物がないため、明確な時期については不明であるが、土壙33に切られていることから、それよりは古い事だけは明らかである。　（井上）

土壙35（第194図）

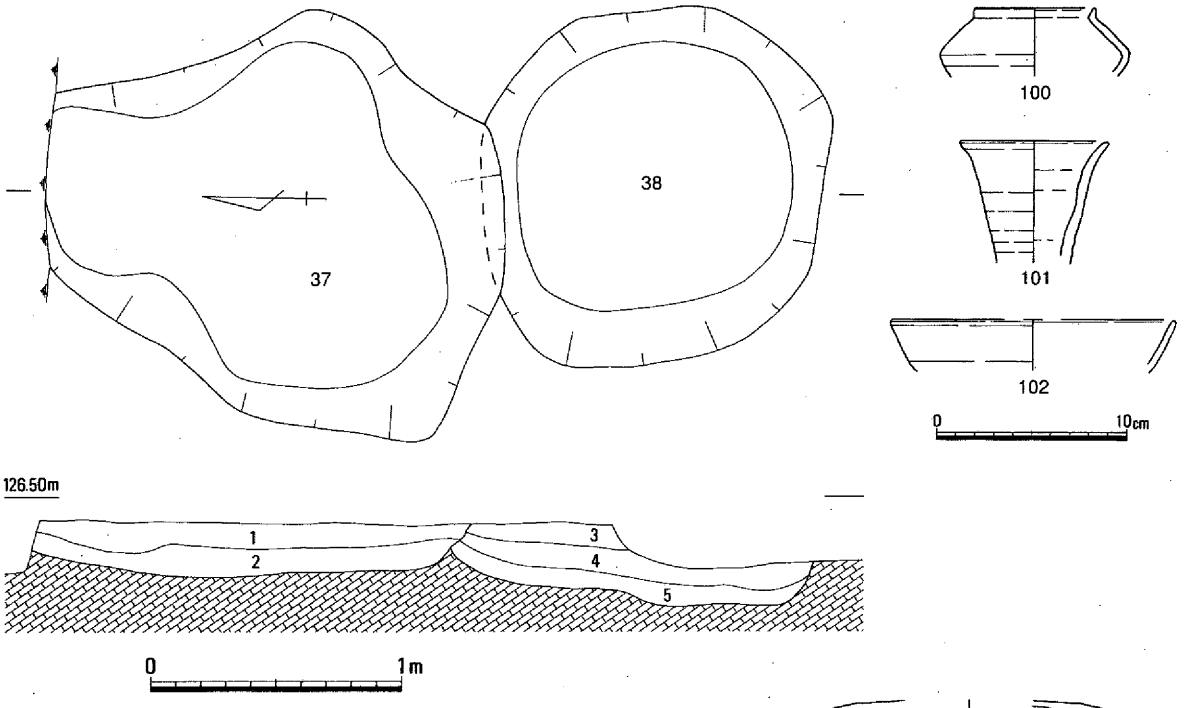
土壙34の南約２ｍの位置に検出した。平面形は、北西部が一部変形しているが、円形に近い形状を呈するものである。検出面での規模は、長径104㎝、短径88㎝を測る。検出面からの深さは、深い部分で13㎝、浅い部分で９㎝を測る。底面は、ほとんど平坦である。壁体は、急に立ち上がり、断面形は、逆台形を呈している。遺物は、図示できるものはないが、弥生土器が、少量出土している。それらの土器は、弥生時代中期に属するものであることから、土壙の時期もその時期と推測される。　（井上）



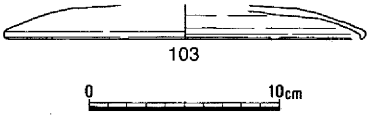
第194図　土壙35・36

土壙36（第194図）

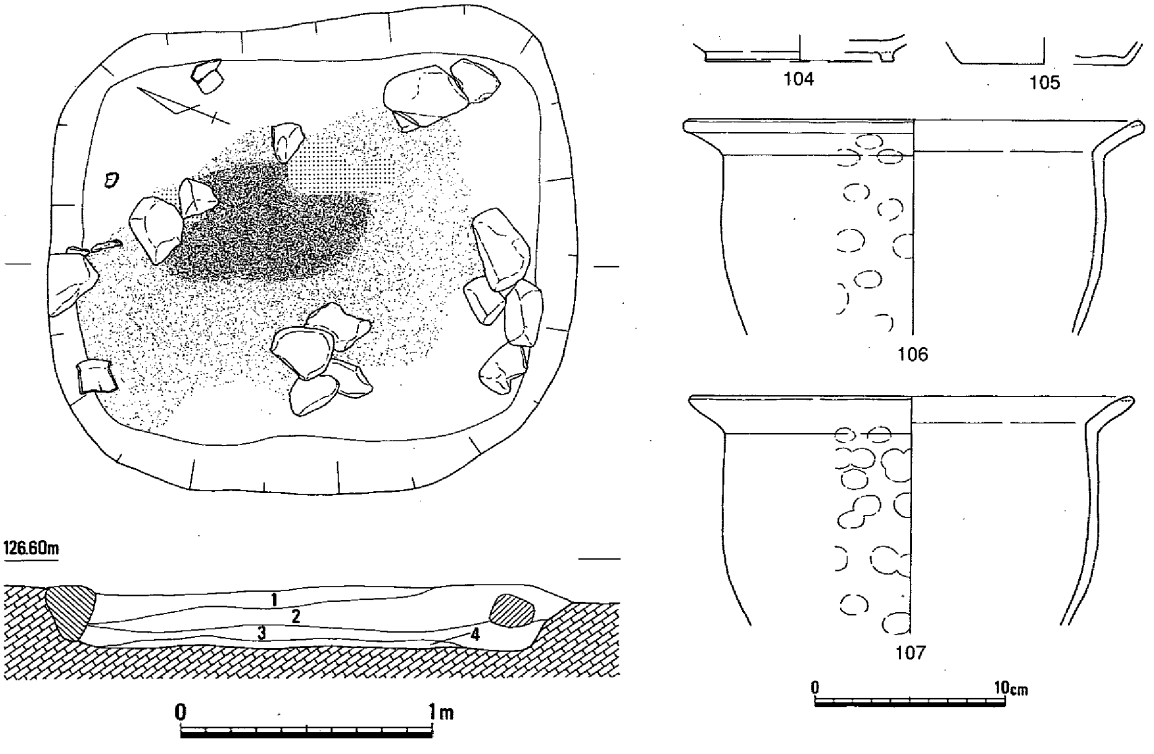
土壙35と一部重複して検出した。検出時の観察と、土層断面の観察から、土壙35が、土壙36を切っていることが判明した。土壙の平面形は、一部不明な部分もあるが、楕円形に近い形状を呈していたものと考えられる。検出面での規模は、長径98㎝を測り、短径は60㎝程度と推測される。検出面からの深さは、９㎝を測る。底面は、ほとんど平坦である。遺物



1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土塊少量、炭、焼土やや多含
2　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質土　　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土塊多含
3　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　　焼土少含
4　黒色（2.5Y2/1）粘質土　　焼土極少量含
5　灰色（7.5Y4/1）粘質土　　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土塊やや多含



第195図　土壙37・38と出土遺物



1　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土　　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊やや多含
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊多含
3　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土　　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊少含
4　オリーブ黒色（5Y3/2）粘質土　　淡黄色（5Y8/4）粘質土塊多、炭、焼土多含

被熱範囲　　炭・焼土の広がる範囲
炭・焼土が多い範囲

第196図　土壙39と出土遺物

は、図示できるものはないが、少量出土している。時期は明確ではないが、何れも弥生土器である。この土壙の時期は、弥生時代ではあるが、土壙35よりはやや古いものと思量される。　（井上）

土壙37（第195図、図版29－１）

土壙36の西南西約７ｍの位置に検出した。土壙の平面形は、歪でいるが多角形を呈するものとすることができる。検出面での規模は、長径200cm、短径146cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で20cm、浅い部分で15cmを測る。底面は、中央に向けて浅く窪むものである。土壙は、二種類の土により埋まるものであり、上層の土には焼土塊を含んでいた。出土遺物としては、**100～102**に示すものがある。何れも須恵器であり、奈良時代のもので有ることから、土壙も同じ時期に属するものと考えられる。　（井上）

126.10m

0　50cm

黒褐色（7.5YR3/2）粘質土

108

109

0　10cm

第197図　土壙40と出土遺物

土壙38（第195図、図版29－１）

土壙37と一部重複して検出した。検出時の平面観察では、その前後関係はほとんど判別できなっかた。しかし、土層断面の観察から、土壙37が土壙38を切っていることが判明した。土壙の平面形は、概ね円形を呈するものでる。検出面での規模は、長径130cm、短径126cmを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で28cmを測る。底面は、緩やかな凹凸が見られる。遺物としては、**103**の須恵器の杯蓋が出土している。土壙の時期は、土壙37よりは古いが、出土遺物からすれば、奈良時代に属するものと考えられる。　（井上）

土壙39（第196図、図版29－２）

土壙37の西約３ｍの位置に検出した。土壙の平面形は、隅丸方形を呈するものである。検出面での規模は、長辺210cm、短辺188cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で27cm、浅い部分で18cmを測る。底面は平坦で、壁体はやや急に立ち上がり、断面形は、逆台形を呈している。土壙の内部からは、長径15～30cmを測る石を検出した。人為的なものは観察されず、埋まる過程で混入したものと考えられる。土壙の底面には、中央部の少し東寄りに焼土面と、それに続くように広い範囲に炭、灰の堆積を検出した。炭、灰の堆積は、土壙の中央部に濃く、周辺に薄い状態で、底面の広い範囲に散布する状態が見られた。遺物としては、**104**は高台付の杯、**105**は杯で、何れも須恵器である。**106・107**は、土師器の甕である。口縁部は大きく外反し、胴

126.40m

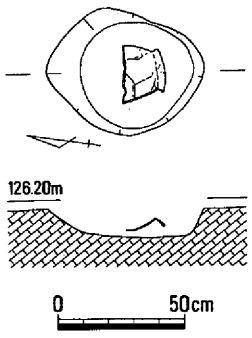
0　1m

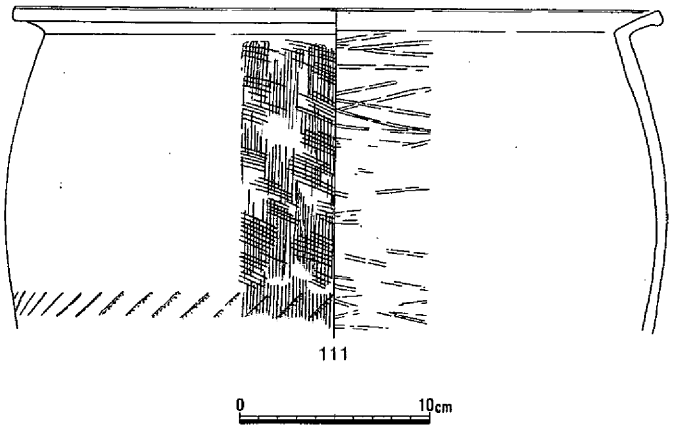
黒褐色（7.5YR3/1）粘質土

110

0　5cm

第198図　土壙41と出土遺物



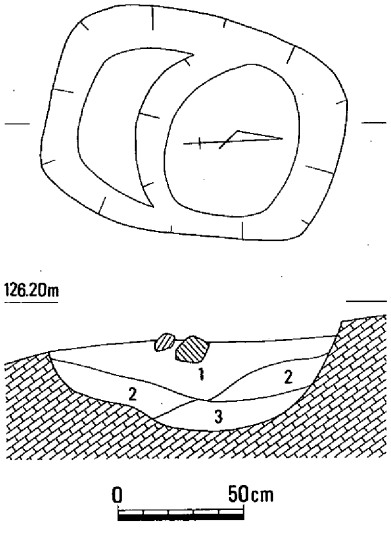


第199図　土壙42と出土遺物

部はほとんど膨らみを持たない。土壙の時期は、これらの遺物から、平安時代に属するものと考えられる。　（井上）

土壙40（第197図）

土壙39の東約21ｍの位置に検出した。平面形は、方形を呈するものである。検出面での規模は、長辺113cm、短辺107cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で10cm、浅い部分で８cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。壁体は、大きく開きながら立ち上がり、断面形は、浅い皿状を呈している。遺物は、少量出土している。**108**は、須恵器製の杯蓋である。口縁部はほぼ垂直で、端部は内面に傾斜する。**109**も須恵器製の壺の口縁部である。外面にクシによる波状文が施される。土壙は、５世紀末から６世紀前半に属するものと考えられる。　（井上）

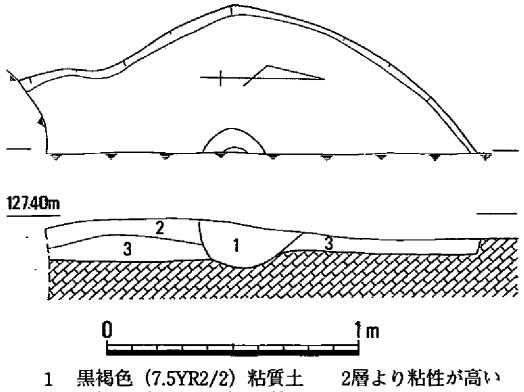


1　黒色（5Y2/1）粘質土
2　灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土
3　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土

第200図　土壙43

土壙41（第198図）

土壙40の西南西約14ｍの位置に検出した。平面形は、楕円形を呈するものである。検出面での規模は、長径166cm、短径130cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で８cm、浅い部分で５cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁体は、大きく開きながら立ち上がる。断面形は、浅い皿状を呈している。遺物は、少量出土している。**110**は、弥生土器の底部である。底部外面が、少し上げ底に作られるものである。土壙の時期は、弥生時代ではあるが、弥生時代中期後半以降と推測される。　（井上）

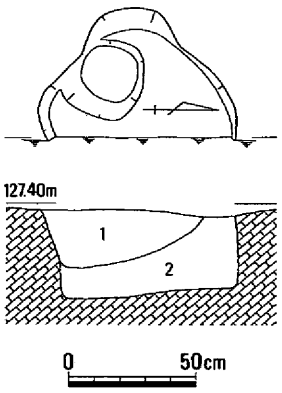


1　黒褐色（7.5YR2/2）粘質土　　2層より粘性が高い
2　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
3　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
　　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土小塊多含

第201図　土壙44

土壙42（第199図）

土壙41の東南東約５ｍの位置に検出した。平面形は、少し南北に長い円形を呈している。検出面での規模は、長径54cm、短径48cmを測る。検出面からの深さは、15cm程度を測る。底面は、平坦であり、弥生土器の甕を検出した。**111**がそれである。外面は



1　黒褐色（10YR3/1）粘質土
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土
　　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土塊多含

第202図　土壙45

ハケメ、内面には、ヘラミガキが施される。この土器は、弥生時代中期中葉と考えられ、土壙も同時期と推測される。　（井上）

土壙43（第200図、図版29－３）

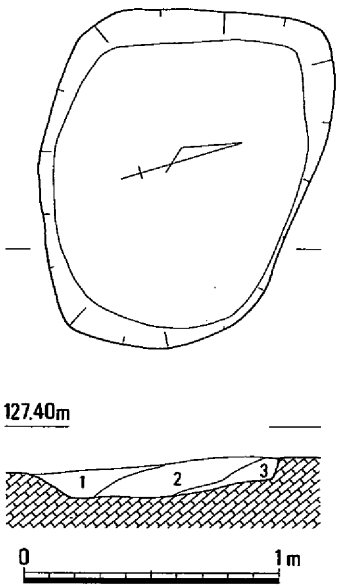
土壙42の南西約10ｍの位置に検出した。平面形は、南北方向に長い隅丸長方形を呈するものである。検出面での規模は、長辺117cm、短辺90cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で36cm、浅い部分で22cmを測る。底面は、北側が深く、南側に一段浅い状態で、二段に掘られている。遺物は、図示できるものは無いが少量出土している。何れも弥生土器であるが、小破片のため詳細は不明である。そのため、土壙の時期も、周囲の遺構の状況などから、弥生時代に属する事は推測できるが、それ以上の事は不明である。　（井上）

土壙44（第201図）

９区の北端部に検出した。この位置は、竪穴住居２の西角付近であるため、その点を考慮しながら調査を実施した。標高からすれば、住居跡のベッド部分の高さに相当するが、壁体溝が検出されなかったことから、住居跡の可能性はないものと理解している。土壙は全体を検出していないため、平面形は不明であるが、長径は200cm以上を測るものと推測される。検出面からの深さは、18cmを測る。出土遺物がないため明確な時期については不明であるが、古代よりは古いと思量される。　（井上）

土壙45（第202図）

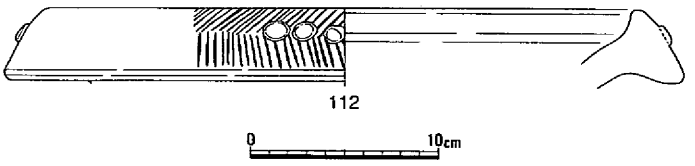
土壙44と一部重複してその南側に検出した。検出時の観察から、土壙45が新しい。全体を検出していないため、不明な点もあるが、平面形は、概ね円形を呈するものと推測される。検出面での規模は、長径78cmを測る。検出面からの深さは、32cmを測る。底面は、僅かに南に下がるが平坦である。壁体は、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は、極少量出土している。そのため、遺物から時期を決めることはできないが、古代よりは古いものと推測される。　（井上）



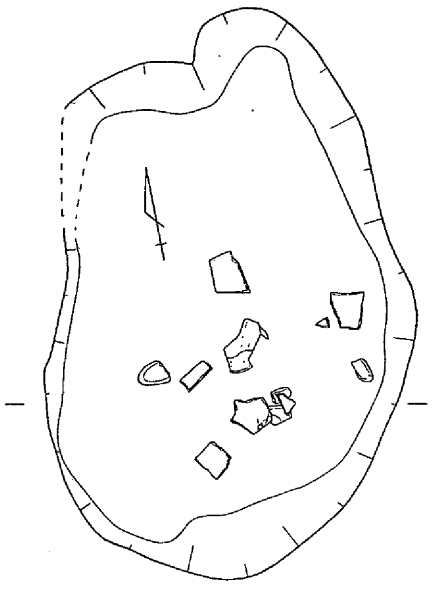
1　黒色（10YR2/1）粘質土
2　黒褐色土（10YR3/2）粘質土
　　浅黄橙色（10YR8/4）粘質土小塊多含
3　黒褐色土（10YR2/2）粘質土

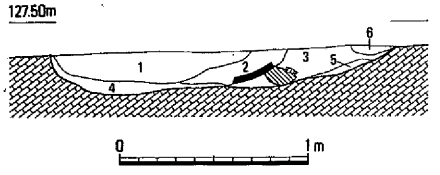
土壙46（第203図）

土壙45の南南西約８ｍの位置に、竪穴住居14に接して検出した。平面形は、東西方向に長い隅丸長方形を呈している。検出面での規模は、長辺136cm、短辺110cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で12cm、浅い部分で８cmを測る。底面は、南に向けて緩やかに下るが、概ね平坦である。底面の規模は、長辺114cm、短辺100cmを測る。壁体は、開きながら立ち上がり、断面形は、逆台形を呈している。遺物は、少量出土している。**112**は、壺の口縁部である。口縁端部外面には、円形浮文と、ヘラ描きの綾杉状の文様が施される。土壙の時期は、弥生時代後期と考えられる。　（井上）

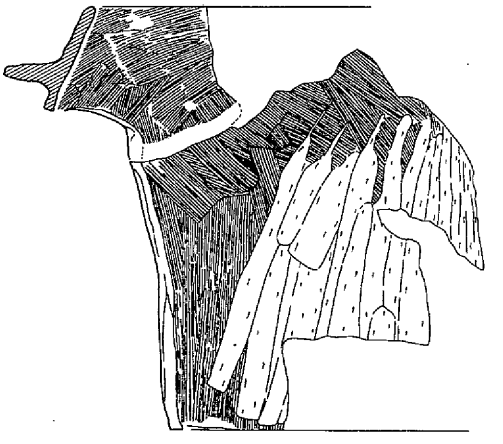


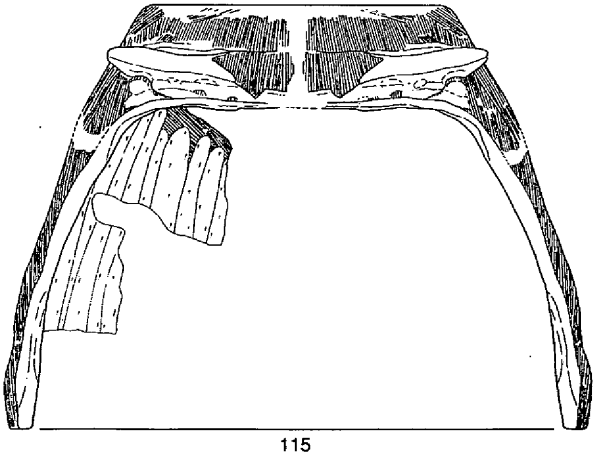
第203図　土壙46と出土遺物





1　黒褐色（10YR2/2）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊非常多含
2　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質土
3　オリーブ黄色（5Y6/3）砂質土
　　灰色（7.5Y4/1）粘質土塊少量含
4　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊多、
　　灰色（7.5Y4/1）粘質土塊多含
5　黒色（5Y2/1）粘質土
6　灰色（7.5Y4/1）粘質土





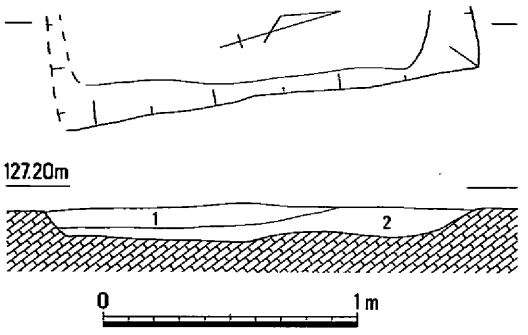
第204図　土壙47と出土遺物

土壙47（第204図、図版30－１）

九番丁場遺跡９区北端付近で検出した。竪穴住居14を切り、それより新しいと考える。平面形はほぼ長楕円を呈すると言える。出土遺物には須恵器杯蓋（**113**）、弥生土器壺（**114**）、土師質の移動式カマド（**115**）がある。いずれも第３、４層から出土した。**114**は混入品であると考える。**113**は細片である。**115**は投げ込まれた様子で、埋土中下層より出土した。粘土輪積みにより形成し、外面はハケ、内面はケズリにより仕上げた痕跡が残る。６世紀末頃に属すると考える。（重根）

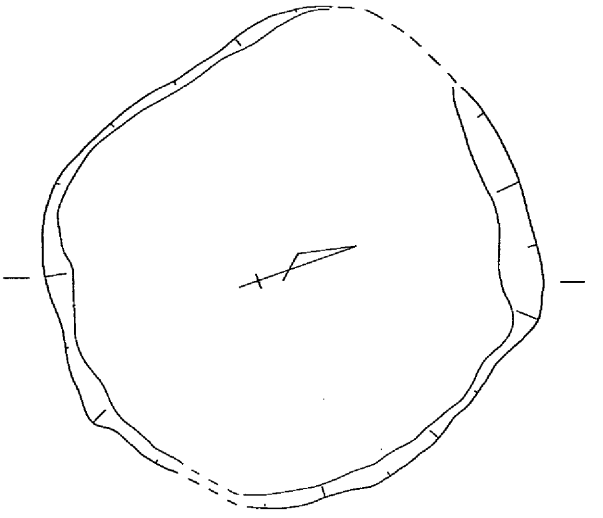
土壙48（第205図）

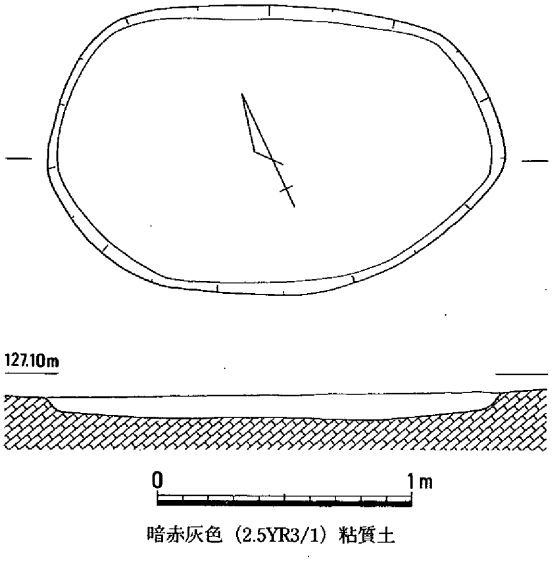
土壙47の西約３ｍの位置に検出した。耕作などの後世の削平が及んでいるために、検出できたのは一部分である。残存する部分から平面形を見ると、方形を呈するものと考えられる。検出面での規模



1　暗褐色（7.5YR3/3）粘質土
　　黄橙色（10YR8/6）粘質土小塊多含
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土

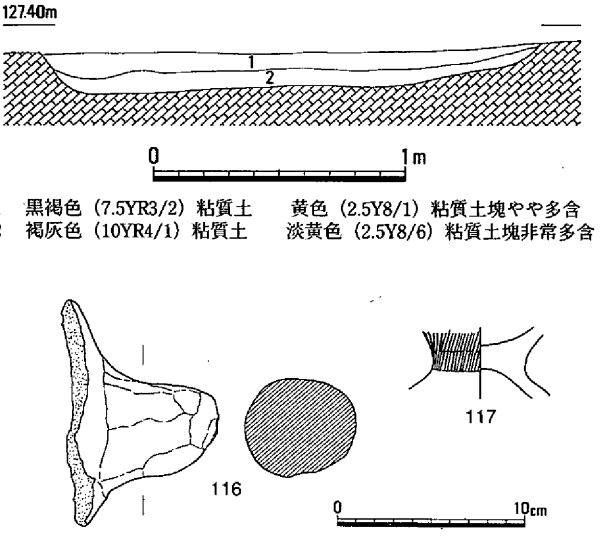
第205図　土壙48





暗赤灰色（2.5YR3/1）粘質土

第206図　土壙49



1　黒褐色（7.5YR3/2）粘質土　　黄色（2.5Y8/1）粘質土塊やや多含
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/6）粘質土塊非常多含

第207図　土壙50と出土遺物

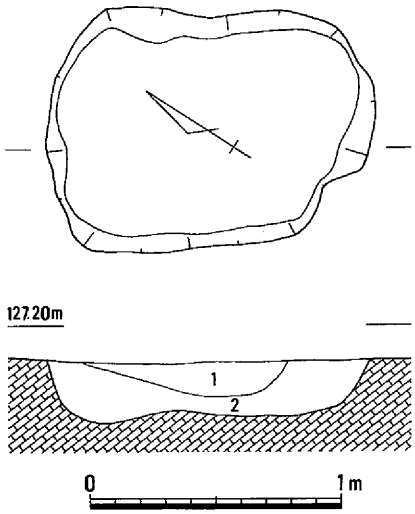
は、170cm程度と推測される。検出面からの深さは、18～12cmを測る。土壙の時期は、出土遺物が無いため、明確な時期は示せないが、古代よりは古いが、竪穴住居14よりは新しい。　（井上）

土壙49（第206図）

土壙48に接するように南側に検出した。平面形は、東西方向に長い楕円形を呈している。検出面での規模は、長径180cm、短径116cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で12cm、浅い部分で６cmを測る。底面は、中央部が浅く窪むもので、凹凸はない。底面の規模は、長径172cm、短径104cmを測る。壁体は開きながら立ち上がるもので、断面形は、浅い皿形を呈している。出土遺物は、僅少であるため、明確な時期は示せないが、古代以前ではあるが、竪穴住居14よりは新しい。　（井上）

土壙50（第207図、図版30－２）

土壙49の南南東約８ｍの位置に検出した。平面形は、円形を呈するものである。検出面での規模は、長径193cm、短径180cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で16cm、浅い部分で８cmを測る。土壙の南側が深いため、底面は、南に向けて緩やかに傾斜するが、底面には、凹凸は見られず平坦である。壁体は、緩やかに開きながら立ち上がるもので、断面形は、浅い皿状を呈するものである。遺物は、



1　褐灰色（5YR4/1）粘質土
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊やや多含
2　黄色（2.5Y8/6）粘質土
　　灰黄色（2.5Y6/2）粘質土多含

第208図　土壙51

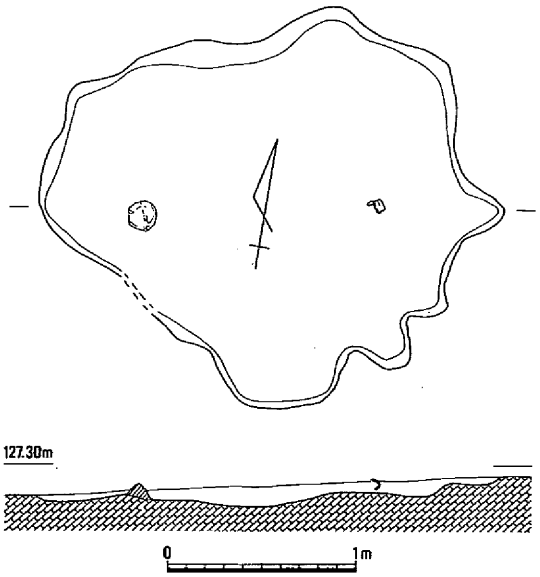
少量出土している。**116**は、甑の把手部分である。出土遺物が、少量であるため遺物からの時期決定には確実性において十分ではない。しかし、甑の破片が出土していることは、６世紀後半以降であり、土層などからすれば、古代よりは古いと推測される。（井上）

土壙51（第208図）

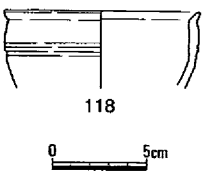
土壙50の南約17ｍ、掘立柱建物18のほぼ中央部の位置に検出した。平面形は、隅丸長方形を呈するものである。検出面における規模は、長辺130cm、短辺96cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で23cm、浅い部分で17cmを測る。底面には、緩やかな起伏が見られる。底面での規模は、長辺120cm、短辺78cmを測る。壁体は、やや急激に立ち上がるもので、断面形は逆台形を呈している。遺物は、図示できるほどの大きいものはないが少量出土している。その中に、底面に糸切り痕跡の見られる須恵器質の碗が見られる。土壙の時期は、遺物や、土質を考慮すれば、古代後半にに属するものと考えられる。（井上）

土壙52（第209図）

土壙51の南東約７ｍの位置に検出した。平面形は、分類できるような定型的な形状は呈していない。検出面における規模は、最大長186cm、最小長128cmを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で８cm、最も浅い部分で３cmを測る。底面は、平坦ではなく、緩やかではあるが起伏が見られる。土壙は、大きく削平されているものと推測され、壁体は２～３cm残存するのみである。遺物は、少量出土している。**118**は、須恵器製の碗である。口縁端部は、鋭角状作られる。土壙の時期は、古墳時代～古代に属するものと考えられる。（井上）



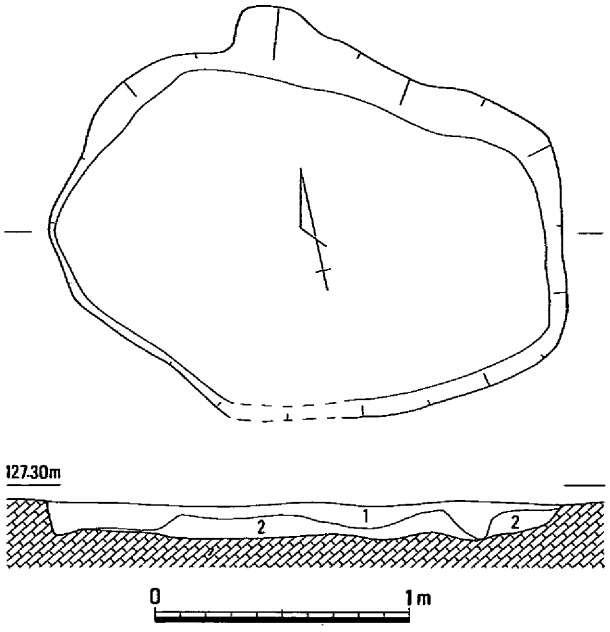
黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
灰黄色（2.5Y6/2）粘質土塊多、淡黄色（5Y8/3）粘質土塊多含



第209図　土壙52と出土遺物

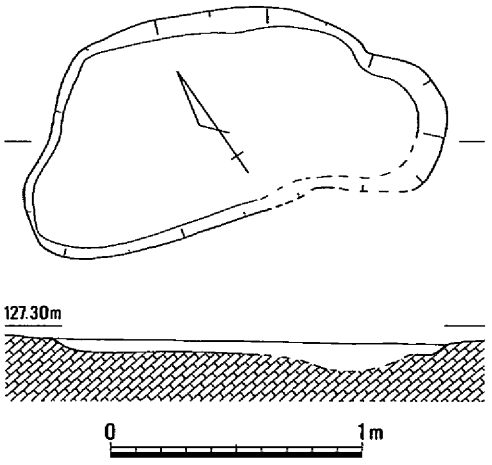
土壙53（第210図）

土壙52の南東約８ｍの位置に検出した。平面形は、概ね楕円形を呈するものである。検出面における規模は、長径202cm、短径150cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で13cm、浅い部分で10cmを測る。底面は、平坦に近いが、緩やかな起伏が見られる。底面の規模は、長径190cm、短径135cmを測る。壁体は、西側は垂直に近い立ち上がりを見せるが、他の部分は、緩やかに開きながら立ち上がる。遺物は、少量出土している。図示できる遺物は無いが、弥生土器であることを考慮すれば、明確には不明であるが、弥生時代に属すると考えられる。（井上）



1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊やや多含
2　黄色（2.5Y8/8）粘質土
　灰黄褐色（2.5Y8/4）粘質土塊多、黒褐色（2.5Y3/1）粘質土塊やや多含

第210図　土壙53

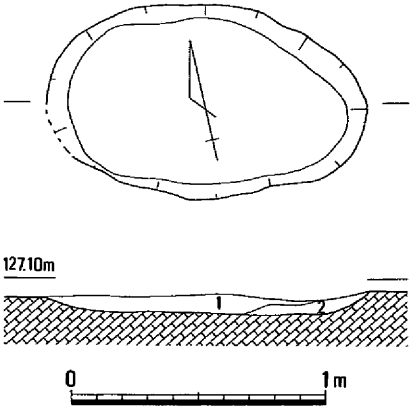


黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
浅黄橙色（2.5Y8/4）粘質土塊少含

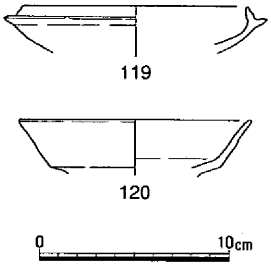
第211図　土壙54

土壙54（第211図）

土壙53に接して北側に検出した。平面形は、台形を呈するものである。検出面における規模は、長辺162cm、短辺90cm、南北方向の幅86cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で12cm、浅い部分で６cmを測る。底面は、東側に一部深い部分がある他は平坦である。底面の規模は、長辺158cm、幅70cmを測る。壁体は、緩やかに立ち上がり、断面形は、浅い皿状を呈する。遺物は、極少量出土している。図示できる遺物は無いが、何れも弥生土器である。その点を考慮すれば、土壙の時期は、弥生時代に属するものと考えられる。（井上）



灰褐色（10YR5/1）粘質土
黒褐色（7.5YR3/1）粘質土塊極少量
淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊やや多含



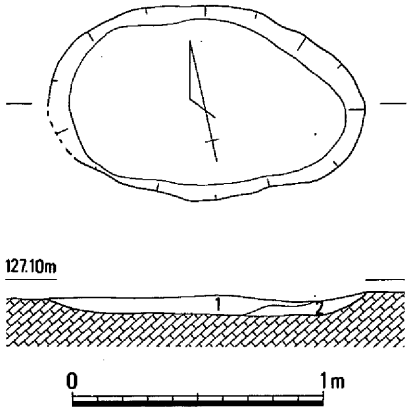
第212図　土壙55と出土遺物

土壙55（第212図）

土壙54の西約10ｍの位置に検出した。平面形は、楕円形を呈するものである。検出面における規模は、長径120cm、短径110cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で12cm、浅い部分で４cmを測る。底面は、やや大きな起伏が見られる。底面の規模は、長径113cm、短径96cmを測る。遺物は、少量であるが出土している。図示した物は、何れも須恵器である。**119**は、杯身である。受け部は水平で、口縁部は内傾して立ち上がる。**120**は、高杯の杯部と考えられる。土壙の時期は、これらの遺物から、６世紀後半に属すると考えられる。（井上）

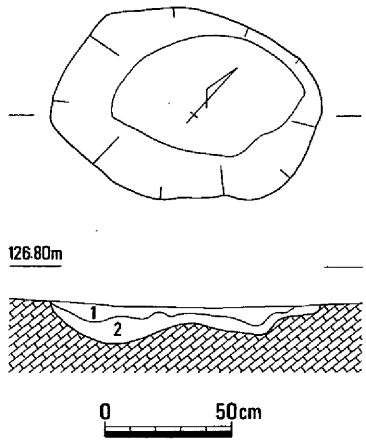
土壙56（第213図）

土壙55の南約１ｍの位置に検出した。平面形は、東西方向に長い楕円形を呈している。検出面における規模は、長径118cm、短径78cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で10cm、浅い部分



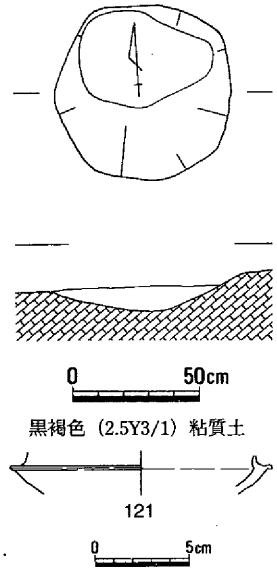
1　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊少含
2　黄色（2.5Y8/6）粘質土
　　黄灰色（2.5Y6/1）粘質土塊やや多含

第213図　土壙56



1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
2　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土
　　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土塊含

第214図　土壙57



第215図　土壙58と出土遺物

で６cmを測る。底面は、起伏もなく平坦である。底面での規模は、長径110cm、短径66cmを測る。壁体は、大きく開きながら立ち上がるもので、断面形は、浅い皿状を呈している。遺物は、弥生土器の小破片が数点少出土している。しかし、土質は、土壙55に良く似ている。土壙の時期は、明確ではないが、土壙55に近いと推測される。（井上）

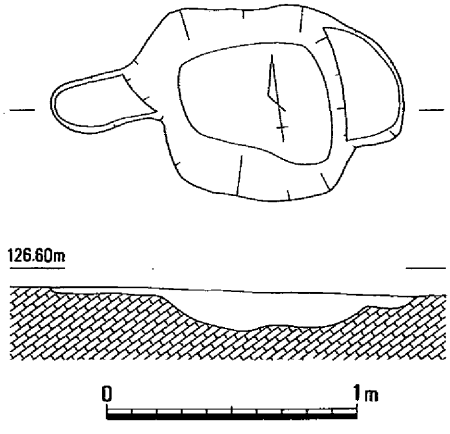
土壙57（第214図）

土壙56の南西約７ｍの位置に検出した。平面形は、楕円形を呈している。検出面における規模は、長径108cm、短径76cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で16cm、浅い部分で５cmを測る。底面は、南西部に深い部分が見られることから、大きな起伏がみられる。底面での規模は、長径76cm、短径46cmを測る。遺物は、弥生土器の小破片が数点出土している。土質は、土壙53に良く似ていることなどから、土壙の時期は、土壙53に近い時期と推測される。（井上）

土壙58（第215図、図版30－３）

土壙57の南東約10ｍの位置に検出した。平面形は、円形を呈するものである。検出面における規模は、長径71cm、短径69cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で13cm、浅い部分で10cmを測る。底面は、北寄りに有り、ほぼ平坦である。底面での規模は、長径53cm、短径38cmを測る。

遺物は、須恵器、土師器の破片が少量出土している。**121**は、須恵器の杯身である。受け部は、短くほぼ水平に延びる。口縁部は、少し内傾しながら立ち上がるものである。土壙の時期は、明確ではないが６世紀後半に属するものと考えられる。（井上）

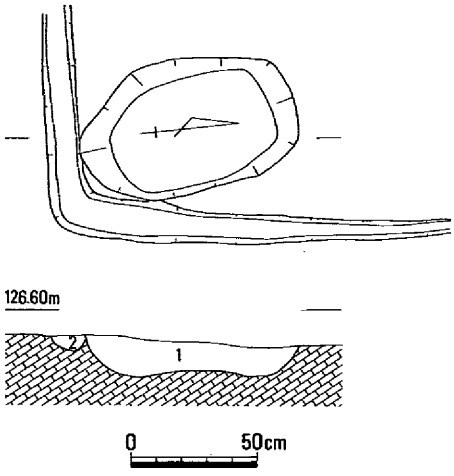


褐灰色（5YR4/1）粘質土
黒褐色（7.5YR3/1）粘質土塊極少量含

第216図　土壙59

土壙59（第216図）

土壙58の南南東約35ｍで、６区中央部東寄りの位置に検出した。平面形は、方形の土壙の東西に張り出しを持つ。検出面での規模は、南北78cm、東西80cm、張り出しを含む全長140cmを測る。底面は、浅い起伏が見られる。壁体は、



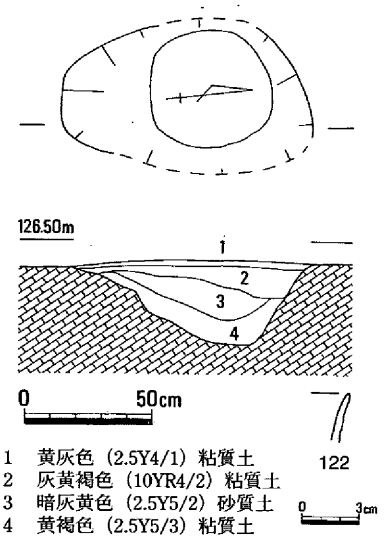
1　暗赤灰色（2.5YR3/1）粘質土
　　淡黄色（2.5Y8/3）粘質土塊少含
2　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土　　炭極少量含

第217図　土壙60・溝25

大きく開きながら立ち上がる。張り出し部は、一段浅く、底面は平坦である。検出面からの深さは、12～16cm、東張り出しは６cm、西は４cmを測る。出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、周辺の遺構との関係から、新しくても古代までと推測される。　（井上）

土壙60（第217図）

土壙59の南東約７ｍの位置に検出した。平面形は、南北に長い楕円形を呈している。検出面における規模は、長径88cm、短径54cmを測る。検出面からの深さは、深い部分で18cm、浅い部分で12cmを測る。底面は、中央部が少し高く、両側に少し深くなるような起伏が見られる。壁体は、やや開きながら立ち上がる。底面での規模は、長径64cm、短径42cmを測る。遺物は、図示できる遺物は無いが、少量出土している。古墳時代の須恵器片などが出土しているが、土壙の時期は、明確ではない。　（井上）



1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
3　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
4　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土

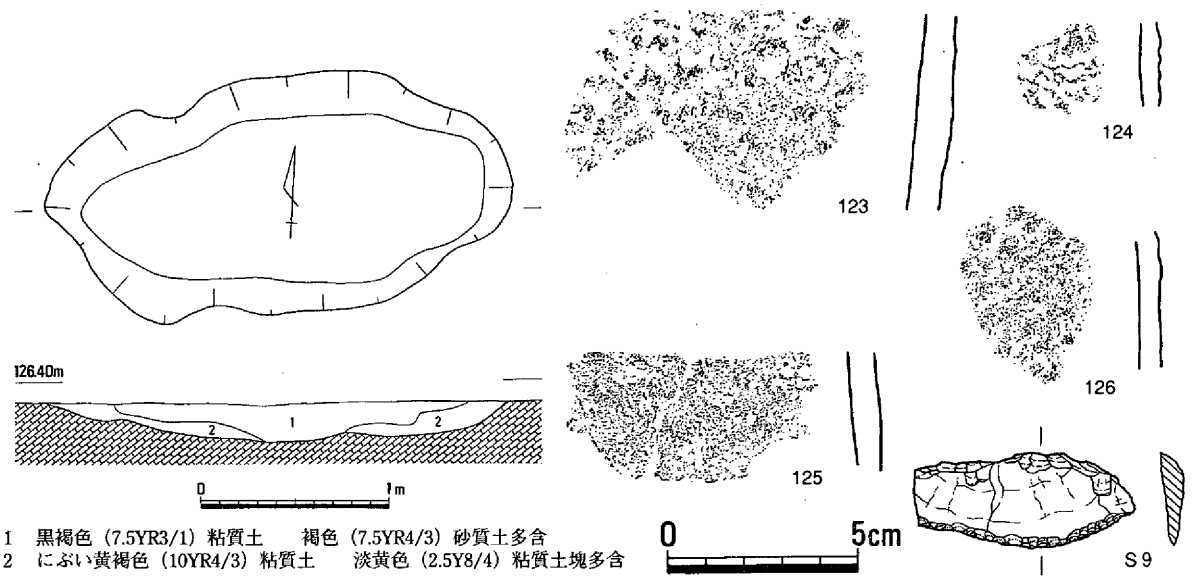
第218図　土壙61と出土遺物

土壙61（第218図）

土壙60の南南西約５ｍの位置に検出した。平面形は、南北に長い楕円形を呈している。検出面における規模は、長径98cm、短径60cm程度を測るものである。検出面からの深さは、最も深い部分で34cmを測る。土壙は、北側からは、やや急に、南からは少し緩やかに、擂り鉢状に掘り窪められるものであり、底面の平坦部は広くない。そのため、土壙の断面形は、三角形状を呈している。遺物は、少量出土している。**122**は、須恵器製の杯の口縁部である。低い高台の付く物と考えられる遺物である。土壙の時期は、８世紀後半ないし９世紀頃に属すると考えられる。　（井上）

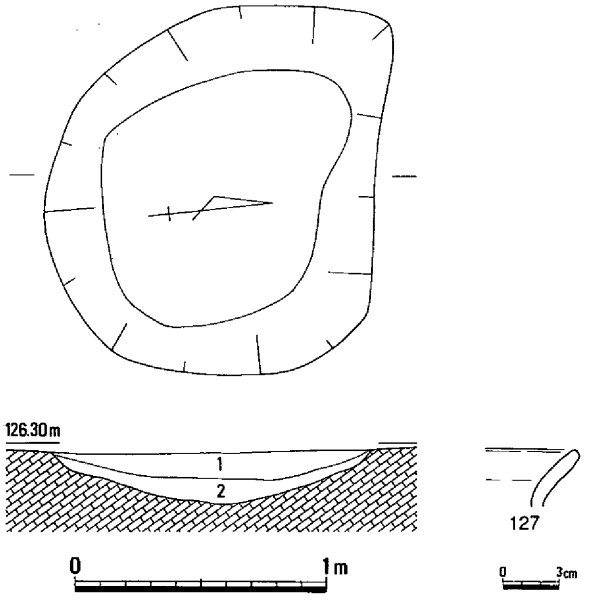
土壙62（第219図、図版31－１）

九番丁場遺跡６区中央付近において検出した。検出面での平面形は不整形であるが、おおよそ長楕円形を呈するといえる。残存規模は東西長軸で248cm、南北短軸で122cm、深さは最深部で18cmを測る。出土遺物には縄文土器（**123・126**）、スクレイパー（**Ｓ９**）、サヌカイトのチップ等がある。いずれも埋土中からの出土である。**123**は外面に楕円押型文が観察できるが、風化により表面剥離が著しく、依存状態は極めて不良である。わずかに残る楕円文の径は長径で７㎜、短径で４㎜程度である。残存する器壁の厚さは８～10㎜である。胎土は５㎜程度の砂礫を多く含み、荒い印象を受ける。**124**も表面剥離が著しいが楕円押型文が外面に残る。楕円の長径は８㎜、短径は５㎜程度である。器壁の厚さは約５㎜である。砂礫はやや多く含むが**123**程多くはない。**125**も押型文の痕跡を看取することができるが、風化による表面剥離が非常に著しく、その文様単位の詳細は不明である。器壁の厚さは約６㎜である。焼成は**123**と類似する。**125**はややくずれた山形の押型文が観察できる。その山形の谷部から頂部までの長さは３㎜程度、一単位の幅は５㎜程度である。現存する器壁は約４㎜である。胎土に含む砂礫は他の３点より少ない。この他にも数点押型文が



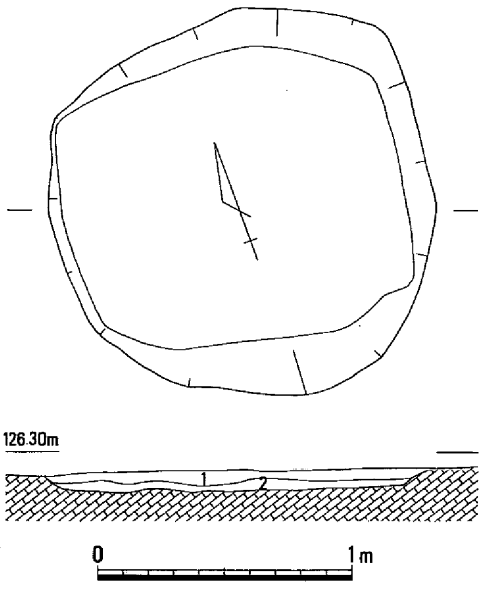
1　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土　　褐色（7.5YR4/3）砂質土多含
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊多含

第219図　土壙62と出土遺物



1　灰褐色（10YR4/2）粘質土　　礫多、焼土、炭少含
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土　　炭、焼土をやや多含

第220図　土壙63と出土遺物



1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　　炭多含

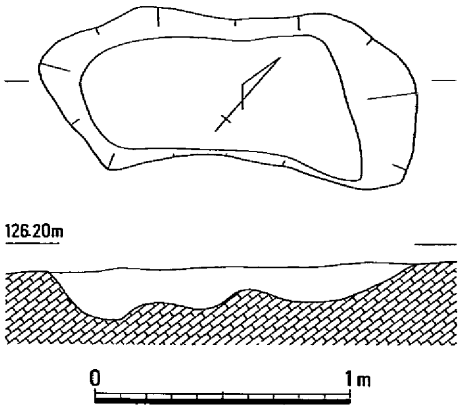
第221図　土壙64

残る土器片が出土した。これらは縄文時代早期後半に属すると考える。Ｓ９はサヌカイト製のスクレイパーである。刃部にやや使用により摩滅した痕跡がうかがえる。　（重根）

土壙63（第220図）

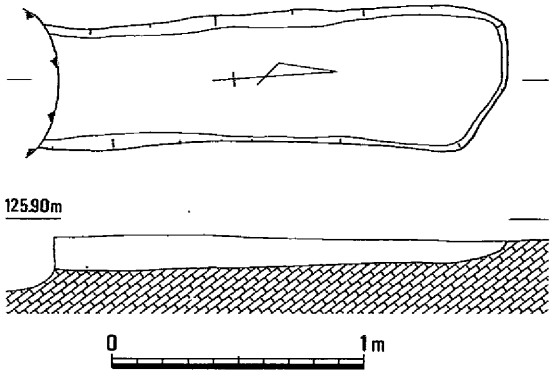
九番丁場遺跡６区東端、ほぼ８区と接する位置において検出した。平面形は不整形である。残存する規模は南北軸で128cm、東西軸で146cm、深さは最深部で20cmを測る。第１層は拳大の石を多く含み、炭、焼土とともに土師器、須恵器の小片を出土した。第２層は第１層より炭、焼土を多く含む。

出土した遺物の中において実測が可能で、掲載したものに土師器甕（**127**）がある。**127**は甕口縁部小片が出土したのみで口径は不明で、傾きにも検討の余地が残る。第１層より出土した。小片のため時期は特定できない。　（重根）



にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
淡黄色（2.5Y8/4）砂質土やや多含

第222図　土壙65



黒褐色（5YR3/1）粘質土　浅黄橙色（10YR8/3）粘質土塊極少量含

第223図　土壙66

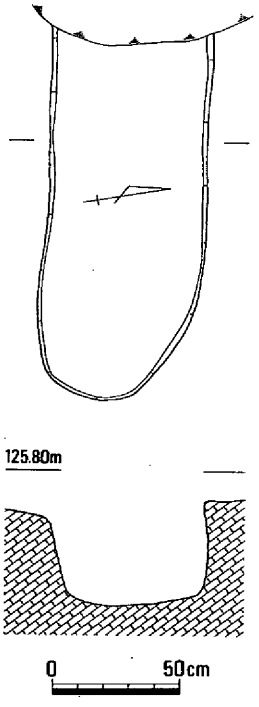
土壙64（第221図、図版31－２）

九番丁場遺跡６区中央付近において検出した。検出面での平面形は不整形であるが、底面形はほぼ方形を呈するといえる。残存する規模は南北軸で155cm、東西軸で152cmを測る。上面は大きく削平を受けたようで、深さは最深部で10cm程度と残りは悪い。底面直上の第２層は炭を多く含む。出土遺物は土師器、須恵器の小片がある。いずれも底面直上で出土したが、図化し、掲載することはできなかった。時期は特定できない。（重根）

土壙65（第222図）

九番丁場遺跡６区中央から南東よりの位置において検出した。検出面での平面形は不整形である。底面は凹凸が顕著で、平坦に形成されたものではない。残存する規模は長軸で148cm、短軸で56cm程度である。残存する深さは、底面は凹凸が著しく平坦ではないが、その最深部を測ると30cmである。

出土遺物は須恵器小片、鉄滓がある。いずれも埋土中より出土した。鉄滓が出土したことから、距離的にも近接する製鉄遺構と関連する、時期的にも併設する遺構であるとも想定できるが、その量が少量であることから混入である可能性も高い。（重根）



暗褐色（10YR3/3）粘質土

第224図　土壙67

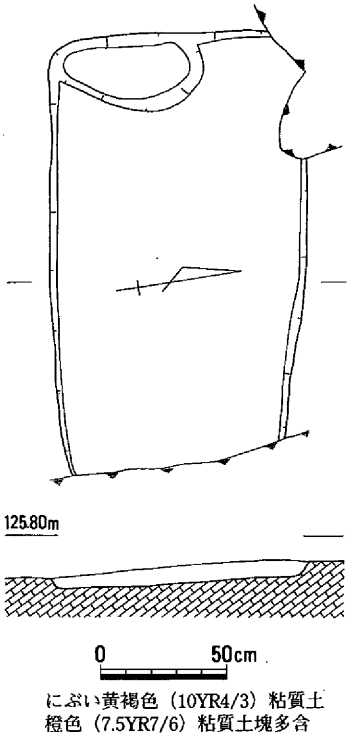
土壙66（第223図、図版31－３）

九番丁場遺跡６区中央から南西よりの位置において検出した。南端は近現代の溝により削平を受けており、平面形は不明ある。規模は短軸東西50cm、長軸南北180cm以上である。深さは最深部で12cm程度と浅く、圃場整備事業により大きく削平を受けたものと推測する。出土遺物には弥生土器があるが、細片のため図化することはできなかった。

時期を特定することはできない。（重根）

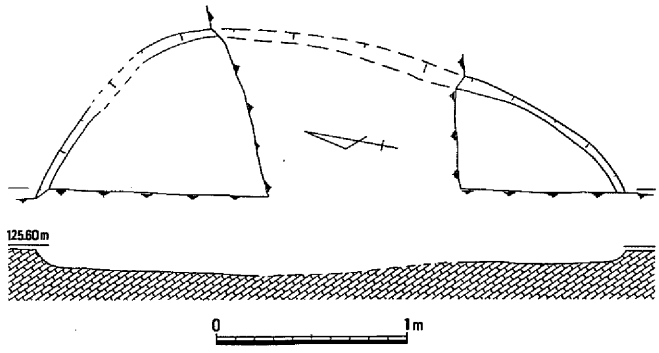
土壙67（第224図）

九番丁場遺跡６区南西隅において検出した。現代の撹乱により西側を大きく失う。そのため、平面形も不明であるが、残存する部分から想定すると、東西に長い長楕円形を呈していたと考えられる。断面は隅がやや丸い



にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
橙色（7.5YR7/6）粘質土塊多含

第225図　土壙68



黒褐色（10YR3/1）粘質土　2～3cm大の礫少含

第227図　土壙70

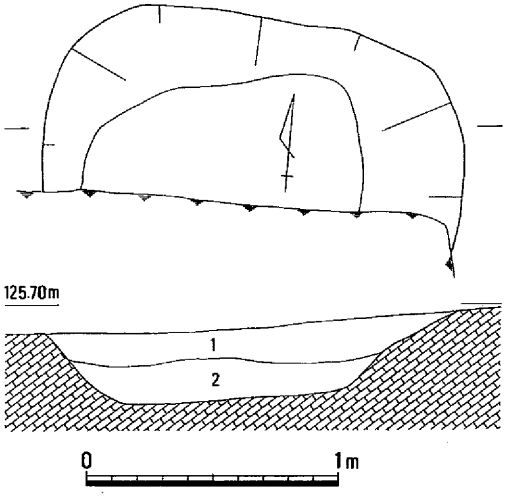
が方形を呈する。規模は短軸南北で60cmを測り、長軸東西で140cmは超えていたと推測する。残存する深さは最深部で42cmを測る。埋土は底部、壁部付近には明黄褐色粘質土ブロックを多く含む。

出土遺物は弥生土器細片があるのみで、図化できていない。これは埋土中より出土した。時期を特定することはできない。（重根）

土壙68（第225図）

九番丁場遺跡６区南西隅において、土壙67のすぐ北に平行する形で検出した。東端を近現代の溝により削平を受け、そのため平面形は不明であるが、残存する部分から想定すると、東西に長い長方形を呈していたと考えられる。規模は短軸南北で50cmを測り、長軸東西で170cmは超えていたようである。深さは８cm程度と浅く、削平を受けたものと推察する。南西隅にやや低くなった不整形の窪みがある。

出土遺物は皆無で、時期は特定できない。（重根）



1　褐灰色（10YR4/1）粘質土
　　3～5cm大の礫多含
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊多含

第226図　土壙69

土壙69（第226図）

九番丁場遺跡６区南西隅において検出した。現代の撹乱により南側を大きく失う。そのため、平面形は不明である。規模は残存する最長部で東西168cmを測る。深さは最深部で30cmを測る。

出土遺物は須恵器がある。これは小片のため図化することはできなかった。この時期はおそらく古代に属するものと想定する。（重根）

土壙70（第227図）

九番丁場遺跡６区南西隅において検出した。現代の撹乱により中央部は大きく削平を受け、さらに西側は調査区外となる。そのため、平面形は不明である。規模は残存する部分で最も長い調査区外との境部を測ると、320cm程である。深さは最深部で12cm程度と浅く、削平を受けたものと考える。

出土遺物は皆無である。そのため時期を特定することはできない。（重根）

４．溝

溝１・２（第228図、図版32－１・２）

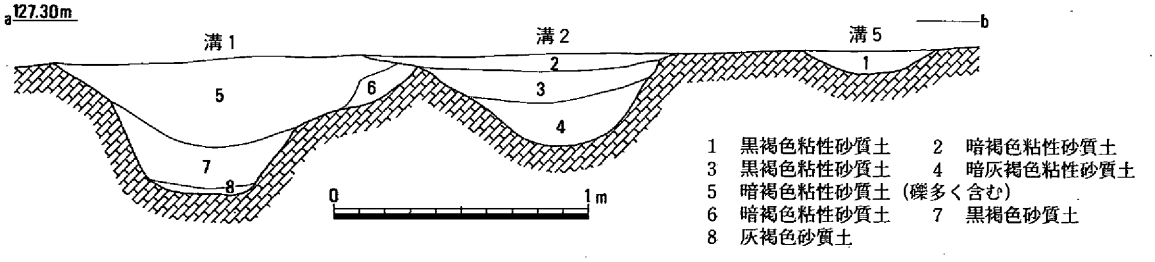
４区の北側で検出した、等高線に直交する２条の溝である。平面での切り合いは判らなかったが、土層断面から溝２の方が新しいことを確認した。この２条は西端で重複している。溝１は、規模が検出長20.5ｍ、広いところで上幅143㎝、深さ55㎝を測る。断面は中端にいったん段を持ち、底面は平坦であった。埋土は、最下層には直径３～５㎝程度の小礫があり、その上層には砂質土が堆積する。最下層の小礫は溝１の約４分の３について敷き詰めるようにあるのが底面で見られ、人為的に敷かれている可能性がある。出土遺物としては須恵器の甕の体部や土師器片等があり、埋土の状況から古墳時代後期のものであると考えられる。溝２は検出長18ｍ、広いところで上幅120㎝、深さ35㎝である。断面はＵ字形であり、断面は３層の水平堆積を呈する。下層の２層は溝１と同様に砂質土である。出土遺物としては、須恵器の長頸壺高台部分、かえりを持つ杯蓋口縁部分などが出土しており、このことから７～８世紀代のものであると考えられる。これらの溝の性格としては、底面に砂質土が堆積していることから、水が流れていたことが想定されるため、調査区の北西側にある谷に向かって水を流す排水溝のようなものが考えられる。（時實）

溝３（第229・232図、図版32－１）

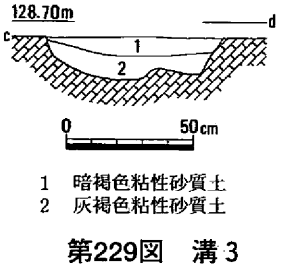
４区の東側、溝１・２の南で検出した溝である。規模は検出した全長10.3ｍ、深さ17㎝、上幅70㎝である。等高線に直交するように位置しており、底面は西側に低くなるため溝１・２と同様、西側に排水する機能を持った溝であると考えられる。出土遺物は須恵器、土師器の細片が出土しているが、溝の底面から江戸時代初頭の備前焼壺の肩部の破片（**128**）が出土しているため、この溝の時期は、江戸時代初頭のものであると考えられる。（時實）

溝４（第230図）

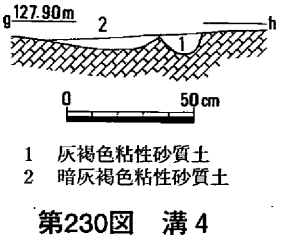
４区の中央部東側部分で検出した、等高線に平行する南北方向の溝である。全長10.5ｍ、上幅60㎝、



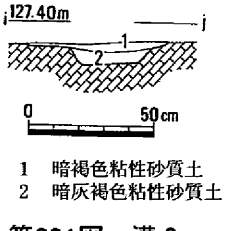
第228図　溝１・２・５



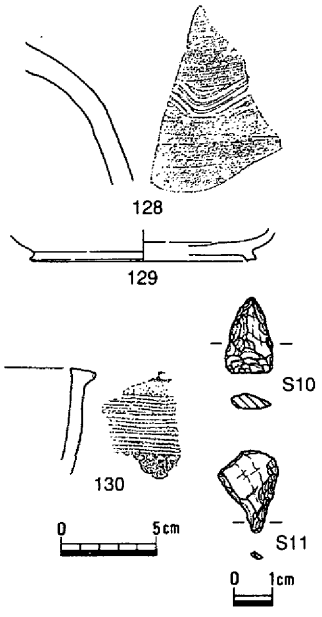
第229図　溝３



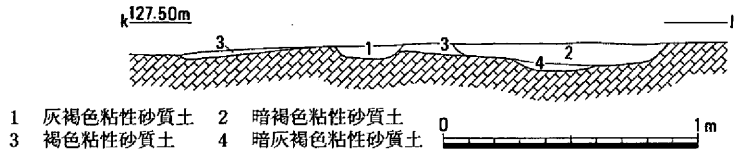
第230図　溝４



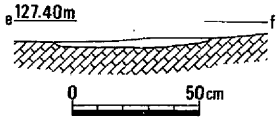
第231図　溝８



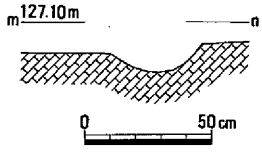
第232図　溝３・５・９の出土遺物



第233図　溝７



第234図　溝９



第235図　溝10

深さ６～８㎝を測る。断面から、本来は２条の溝が重複していたと考えられる。時期は、出土遺物に須恵器、土師器の細片があり、埋土の状況や溝１・２・５を切っていることから中世の溝であると考えられる。性格は、耕作溝であると考えられる。　（時實）

溝５（第228・232図、図版32－１）

４区の中央部北側、溝２の南３ｍに位置している溝である。規模は検出長15.2ｍ、上幅53㎝、深さ８㎝である。等高線に直交するように位置し、西から東に低くなっている。埋土は褐色粘性砂質土で底面に砂質土が多く、水が流れた状況を呈している。**129**は須恵器の杯身の底部である。高台径11.0㎝を測り、外底面はヘラ切りの痕跡が残る。この出土遺物と溝４に切られている状況、および周辺の遺構から推測するに、７～８世紀代の遺構であると考えられる。　（時實）

溝６

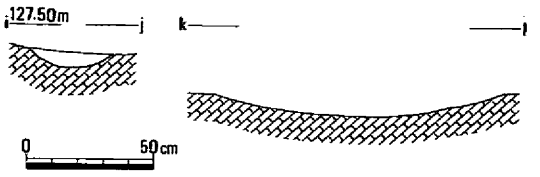
４区の中央部東側、溝４の南東で検出した溝である。検出した全長５ｍ、上幅20㎝、深さ３㎝を測る。北側は現代の暗渠によって削平されていた。等高線に直交するように位置している。遺物は勝間田焼の椀と思われる底部小片が出土しており、この出土遺物と周辺の遺構の状況からこの溝は中世のものであると考えられる。　（時實）

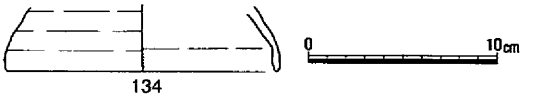
溝７（第233図）

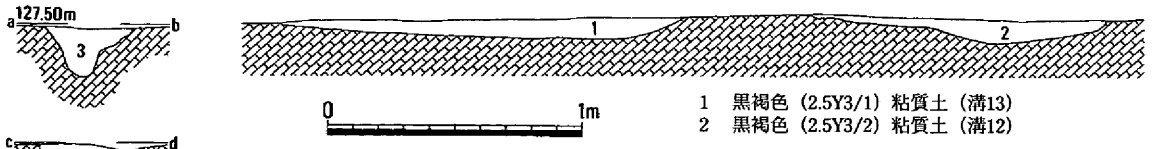
４区の中央部西側で検出した、等高線に平行する南北の溝である。断面の観察から３条の溝が重複していると考えられる。規模は、埋土１のものが検出長6.1ｍ、上幅20㎝、深さ３㎝、埋土２・３が検出長9.9ｍ、上幅100㎝、深さ18㎝、埋土４が検出長13.1ｍ、上幅28㎝、深さ３㎝である。切り合い関係から埋土１の溝が一番新しく、埋土４のものが一番古いと考えられる。出土遺物は古墳時代後期と考えられる須恵器片、土師器片や、13世紀代のものと考えられる瓦質の羽釜の口縁部小片などがある。掘り下げの段階では、１条の溝であると誤認していたため、遺物を混在して取り上げてしまっている。この溝の年代は出土遺物から２時期があると考えられ、埋土の状況から埋土１の溝が13世紀代のものであり、その他の２条が古墳時代後期のものであると考えられる。　（時實）

溝８

４区の中央部西側で検出した、等高線に平行するように位置している南北の溝である。検出した全長は6.2ｍ、一番幅の広いところの上幅は57㎝、狭いところで上幅14㎝を測る。深さは８㎝である。

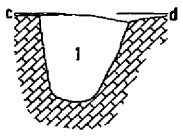


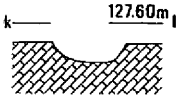


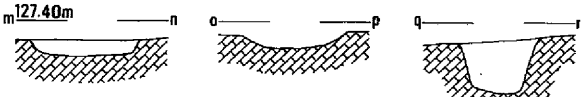


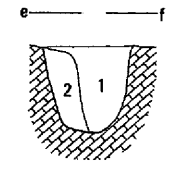
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土（溝13）
2　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土（溝12）

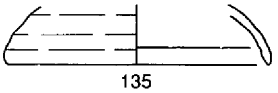
第237図　溝12・溝23と出土遺物





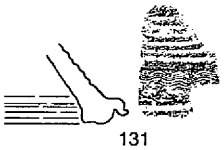


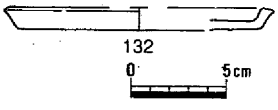


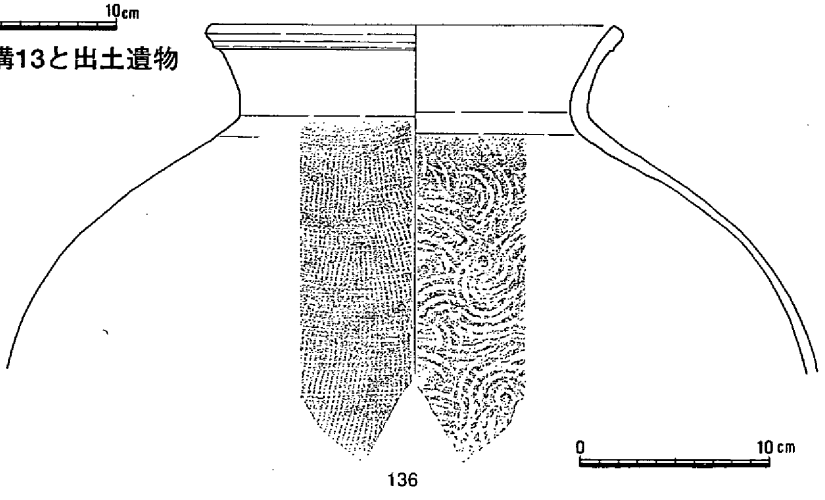


第238図　溝13と出土遺物

1　黒褐色砂質土
2　暗褐色砂質土
3　黒褐色砂質土







第236図　溝11と出土遺物

第239図　溝14と出土遺物

深さは北の方が深くなっている。出土遺物は無いものの、南端において竪穴住居１を切っていることと、埋土の状況から中世の遺構のであると考えられる。後述する溝10などと埋土の状況が似ており、耕作溝というような性格を考えている。（時實）

溝９（第234・232図）

４区の南西部分で検出した溝であり、北側を溝７によって切られている。検出した全長は６ｍ、上幅22cm、深さ７cmである。北方向に向かって深くなっている。埋土は１層で黒褐色粘性砂質土であった。出土遺物であるが、**130**は甕の口縁部分である。口縁部は水平に外反し、外面に13条の櫛描き沈線を施し、その下部に刺突文を施している。弥生時代中期前葉のものである。**S11**はサヌカイト製の石錐であると考えられるが、先端の部分については欠損している。これらの出土遺物からこの溝の時期は弥生時代中期前葉のものであると考えられる。（時實）

溝10（第235図）

４区の南西部と１区の北西部において確認した溝で、等高線に平行するように位置している。検出長12.2ｍ、上幅は一番広いところで55cm、狭いところで20cm、深さは５cmを測る。埋土は１層で暗灰色粘性砂質土であり、断面はＵ字形を呈している。床面は北に向かうほど低くなっている。出土遺物は須恵器片が１点のみで、くわしい時期は不明であるものの、溝８や溝７の埋土１のものと同様の埋土の状況であり、このことから中世段階の耕作溝といったことが考えられる。また、断面図は載せていないものの、４区の南西部分から中央部分にむかって同じように浅い、暗灰色粘性砂質土の埋土を持つ溝が等高線に平行に走っており、これらも同様に耕作に伴う溝であったと考えている。（時實）

溝11（第236図、図版32－３）

２区の北西からほぼ直線に東進し、途中で南に向きを変え直進する溝である。竪穴住居７より新しいと考えられるが、この溝の埋土と住居７埋土との区別が困難で、住居７との重複部分を調査できなかった。また、住居７より南では溝11は検出できなかった。断面形は、北側の部分ではａ－ｂ断面のようにＶ字形を示すが、南側部分はｃ－ｄおよびｅ－ｆ断面のようにＵ字形である。検出面での幅は34cm、深さは最大34cmを測る。出土遺物は多くないが、須恵器・土師器と混入の弥生土器がある。須恵器は甕胴部片である。土師器には**132**の皿がある。時期は古代前半と考えられる。（氏平）

溝12（第237図、図版32－３）

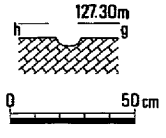
２区東から６区南東に位置し、北東から南西方向に流れる溝である。断面は緩やかなＵ字形で、長さは約30ｍ、幅は最大120cmで深さは最大９cmを測る。埋土は黒褐色土の１層が確認できた。溝23と同じく、検出面よりかなり上層から掘りこまれていたはずであるが、黄褐色土まで掘り下げて確認したものである。遺物は小量で、図示したものはいずれも溝23からの出土遺物であり、溝12出土遺物は図化できなかった。時期は不明である。（氏平）

溝13（第238図）

２区から６区へ向けて西方向に流れる溝である。竪穴住居７の排水溝とされる溝とほぼ並行する形で、その南側に位置する。断面形はやや逆台形に近いＵ字形で、検出面で長さ約13.5ｍ、幅30cm、深さは７cmの規模である。埋土は図示していないが、住居７の排水溝埋土よりも淡い黒褐色を呈している。位置と規模から住居７排水溝とも取れるが、底面の高さが住居床面に対して約10cm程度高いことから住居７とは関係ないものと考えられる。遺物は須恵器・土師器が見られた。図示したのは**135**の杯蓋で、７世紀前半～中葉の時期を示す。このことから、溝廃絶も同時期と考えられる。（氏平）

溝14（第239図、図版32－４）

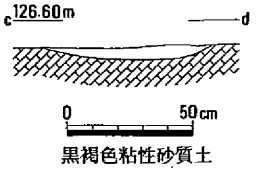
２区の南端部に検出した。調査区の東端から、西端までの約30ｍを検出した。溝は、緩く弧を描く。西から東に流れるものである。溝の幅は、西端で約42cm、東端で30cmを測る。遺物は、**136**の須恵器が出土しており、古墳時代後期に属するものと考えられる。（井上）



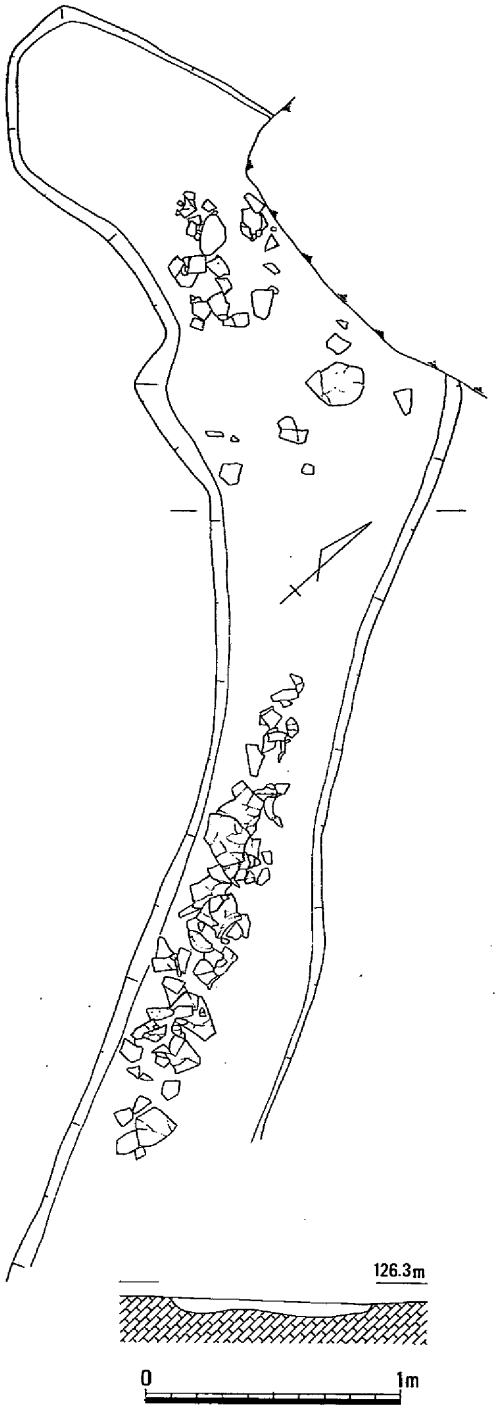
第240図　溝15

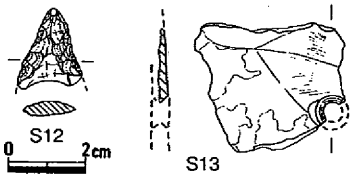
溝15（第240図）

２区の南端部、竪穴住居10の西側に検出した。鉤形に検出したもので、住居跡の可能性も考慮ししたが、その兆候は見られなかった。溝の幅10cm程度、深さ５cm程度を測る。出土遺物には、須恵器片を含むことから、古墳時代後期と考えられる。（井上）



第241図　溝16





第242図　溝17と出土遺物

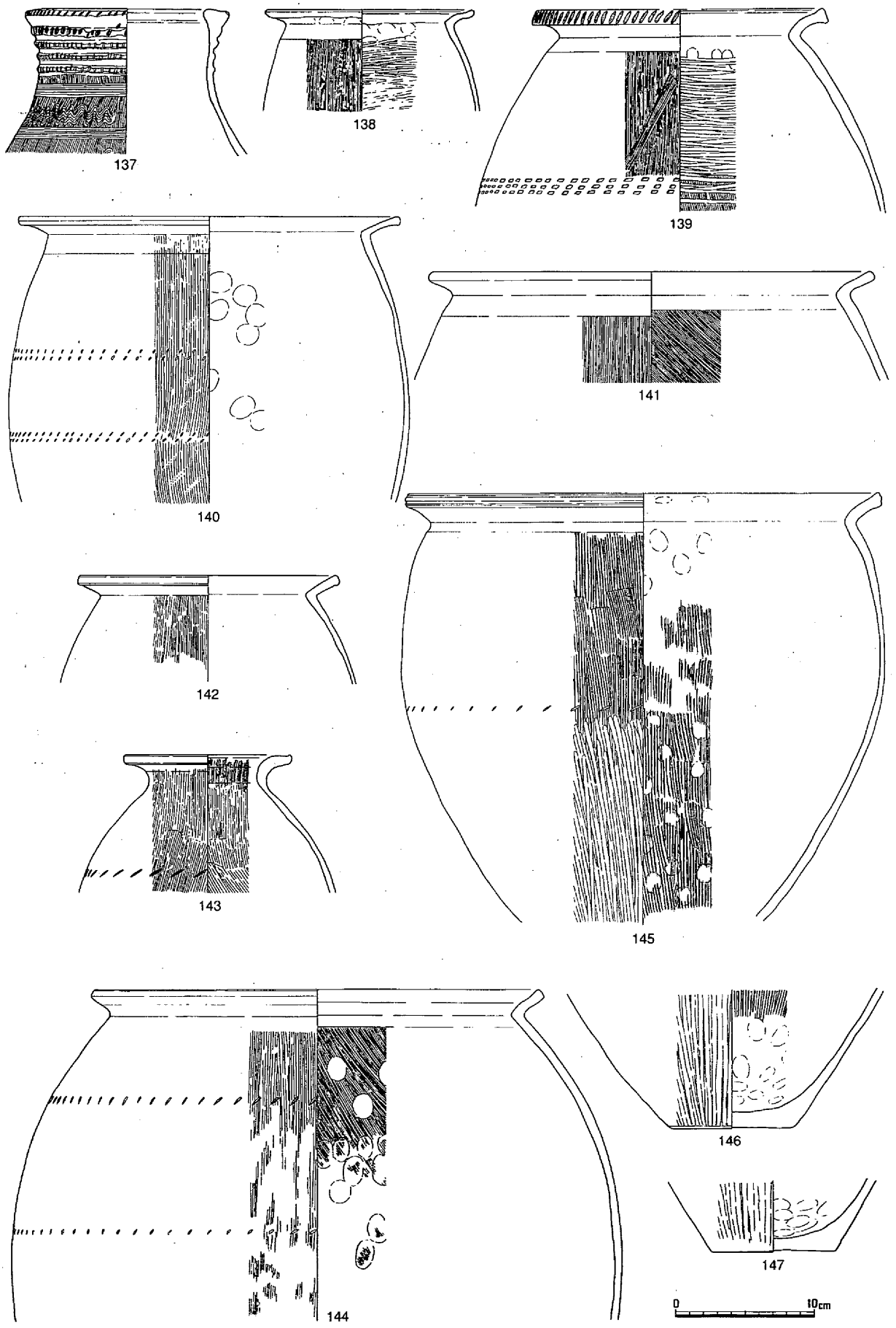
溝16（第241図）

３区の南東で検出した溝で、検出長680㎝、上幅48㎝、深さ５㎝を測る。南端は、斜面に消えてゆく。断面は、皿状で、立ち上がりが不明瞭である。埋土は１層で、黒褐色粘性砂質土である。遺物には、弥生時代中期の甕などが出土しており、これらからこの溝は同時期のものと考えられる。（時實）

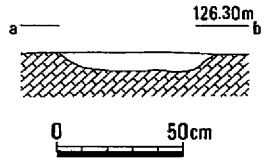
溝17（第242、243図、図版33－１）

８区ほぼ中央付近において検出した。南東方向から北西方向の溝であるが、北端付近で東方向に屈曲する。竪穴住居12により北側を切られる。残存する深さは最深部で約５㎝を測る程度である。この溝からは多量の弥生土器が出土した。いずれも底面付近および、その上に堆積した状態で出土した。出土した弥生土器は破損品のみであり、接合を試みたが完形となるものはない。また、破片の接合作業をおこなう際、溝の中でやや離れた位置で出土しながらも接合できる資料を数点確認した。これらのことから、出土した弥生土器は、未だ使用可能な製品を投棄し破損させたのではなく、不要となった破損品をこの溝にまとめて投棄したものであったと想定する。

出土遺物には弥生土器壺（**137・143・146・147**）、甕（**138～142・144・145**）、石鏃（**S12**）、石包丁（**S13**）がある。**137・143**は壺の頸部から口縁部にかけての部分である。**137**は頸部口縁部付近に４条の貼付突体を設け、それぞれにヘラ条工具で刻み目を施す。また肥厚した口縁部外面にも同様に刻み目を施す。その下、縦方向のハケ調整をおこなった後、７条１単位の直線文、波状文を交互に施文した痕跡が残る。**143**は口縁部形成の際やや強めのナデをおこない、そのため口縁端部が上面にやや肥厚した格好となる。外面肩部付近にはヘラ状工具による刺突文が施される。**138～142・144・145**は甕の肩部から口縁部にかけての部分である。**138**は口縁部形成の際やや強めのナデをおこない、そのため上面に浅いくぼみが生じている。胴部外面は縦方向のハケ、内面はハケ調整を施した後横方向のミガキによって仕上げる。**139**は口縁部が上下にやや肥厚し、そこにヘラ状工具により刻み目を施す。肩部には三段一単位の刺突文が巡る。胴部外面は縦方向のハケ、内面は縦方向のハケ調整の後、

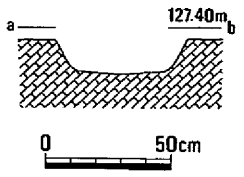


第243図　溝17の出土遺物

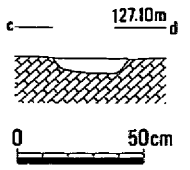


黒褐色（5YR2/1）粘質土

第244図　溝18

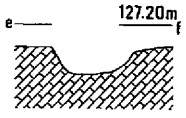


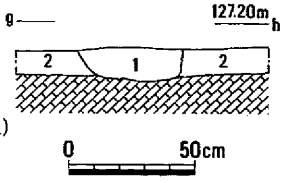
第245図　溝19



暗赤灰色（2.5YR3/2）粘質土

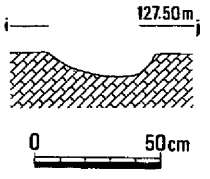
第246図　溝20



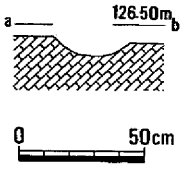


1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土（溝21）
　　黄色（2.5Y8/6）粘質土塊多含
2　黒褐色（5YR2/1）粘質土
　　淡黄色（2.5Y8/4）粘質土塊極少含

第247図　溝21



第248図　溝22



第249図　溝24

横方向のミガキにより仕上げる。肩部より下はハケ調整の痕跡が強く残る。**140**は肩部付近に二段一単位の刺突文を二列にして施文する。口縁部付近はヨコナデにより形成するが、その結果上面にややくぼみが生じた格好となる。**141**は胴部内外面ともにハケ調整により仕上げるが、屈曲部から口縁部にかけてはヨコナデで仕上げる。そのため、頸部付近のハケはヨコナデに消される。胴部内面はハケを一部不定方向のナデにより消している部分も観察できる。**142**は口縁端部をヨコナデで仕上げ、下方にやや肥厚した格好となる。**144**は外面は肩部、および胴部最大径と想定される付近に刺突文を施す。口縁部はヨコナデにより上面にやや肥厚する。**145**は胴部最大径付近には刺突文が巡るようだ。内面はハケ、押圧ナデの痕跡が残るが、風化による表面剥離が著しく不明瞭である。特に肩部より上の剥離は著しい。口縁端部はヨコナデのためか、二条の凹線状のくぼみが巡る。**146・147**は壺底部である。**146**は外面をミガキにより仕上げる。内面は一部ハケの痕跡が残り、底部付近には押圧ナデ、不定方向のナデが観察できるが風化のため表面剥離が著しく不明瞭である。これらの土器の時期は中期中頃と考える。**S12**はサヌカイト製打製石鏃である。一部欠損する。**S13**は流紋岩製磨製石包丁の破損品である。ともに埋土中より出土したものである。（重根）

溝18（第244図）

８区南端付近やや西よりの地点において検出した。東西方向の溝である。削平が著しく残存する最深部で７㎝と浅く、非常に残りは悪い。

この溝からは弥生土器と想定され得る土器細片が出土したのみで、時期は特定できない。（重根）

溝19（第245図）

９区の北寄りに、竪穴住居14の南端に一部重複して検出した。検出した全長は、560㎝を測る。溝の幅は、検出面で50㎝、底面の幅38㎝、深さ14㎝を測る。底面は、平坦であり、断面形は、逆台形を呈するものである。検出時には、竪穴住居との前後関係は不明であったが、竪穴住居15の土層断面に溝が観察されない事は、竪穴住居15が新しい。遺物は、少量出土している。何れも弥生土器であるため、竪穴住居15よりは古いが、弥生時代に属すると考えられる。（井上）

溝20（第246図）

溝19の南西約８ｍの位置に検出した。南北方向を向くもので、全長350㎝を検出した。検出面での

溝の幅は、30cm、底面の幅22cm、深さ６cmを測る。底面は、平坦で、断面形は、逆台形を呈する。若干の遺物が出土しており、須恵器を含むことなどから、古代に属すると推測される。　（井上）

溝21（第247図）

溝20の南南東約18ｍの位置に検出した。南北方向を向くもので、全長900cmを検出した。検出面での溝の幅は、広い部分で40cm、狭い部分で30cm、底面の幅15～20cm、深さ12cm前後を測る。底面は、ほぼ平坦で、断面形は、逆台形を呈する。遺物は、弥生土器片などが少量出土している。溝の時期は、弥生時代後期よりは新しいが、それ以上は不明である。　（井上）

溝22（第248図）

溝21の南端にほとんど接するような位置に検出した。検出した全長は、300cmを測る。検出面での溝の幅は、40cm、深さ８cmを測る。溝の断面形は、浅いＵ字形を呈する。遺物は若干出土しているが、時期決定の拠り所にはならない。溝20と同時期と推測される。　（井上）

溝23（第237図）

溝22の南東約９ｍの位置に検出した。溝12に平行するもので、北北東から南南西方向に流れる。しかし、２区においては、この溝に続くものは検出されなかった。検出した全長は、900cmを測る。検出面での溝の幅は、最も広い部分で160cm、狭い部分で95cm、深さ８cmを測る。溝の断面形は、浅い皿状を呈する。遺物は、少量出土している。133は、羽釜である。口縁部は、内傾して立ち上がり、鍔は広くない。土壙の時期は、中世の前半に属するものと考えられる。　（井上）

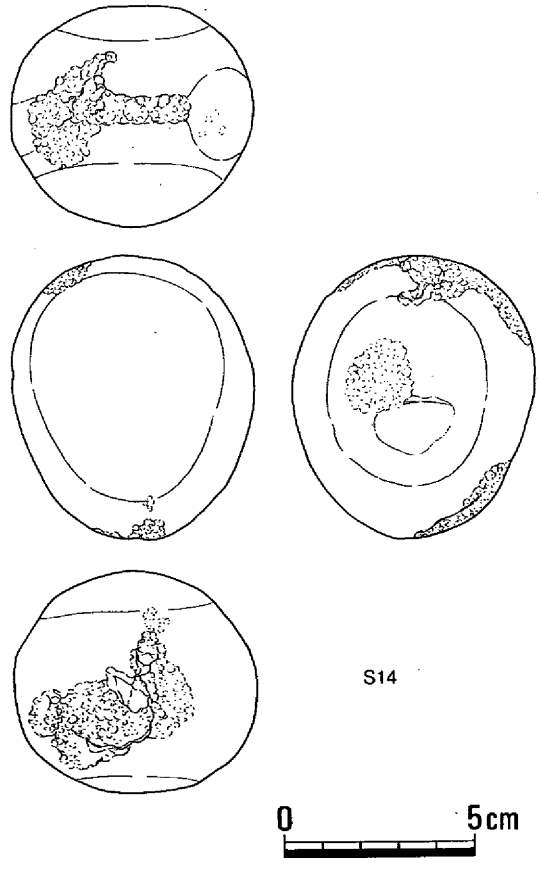
溝24（第249図）

６区の中央部、溝23の南南西約32ｍの位置に検出した。北に開く「コ」字状に曲がるものである。検出時は、住居跡の可能性も考慮して調査したが、壁体溝にしては溝の幅が広すぎる事、柱穴が検出されない事などから、その可能性はないものと判断した。検出した全長は、約740cm、溝の幅30cm、深さ８cmを測る。

断面形は、浅いＵ字形を呈する。遺物は、極少量出土するのみで、時期については、明らかに出来ない。　（井上）

溝25（第217・250図）

溝24の東南東約12ｍの位置に検出した。鉤形に曲がる。住居跡の可能性を考慮して調査したが、検出面が平坦であるのに、これ以上溝検出されない事、対応する柱穴が検出されないことなどから、その可能性はないものと判断した。検出した全長は約230cm、溝の幅８～12cm、深さ６cmを測る。断面形は、Ｕ字形を呈する。遺物は、少量出土している。**Ｓ14**は敲き痕跡の見られる石である。時期は不明である。　（井上）



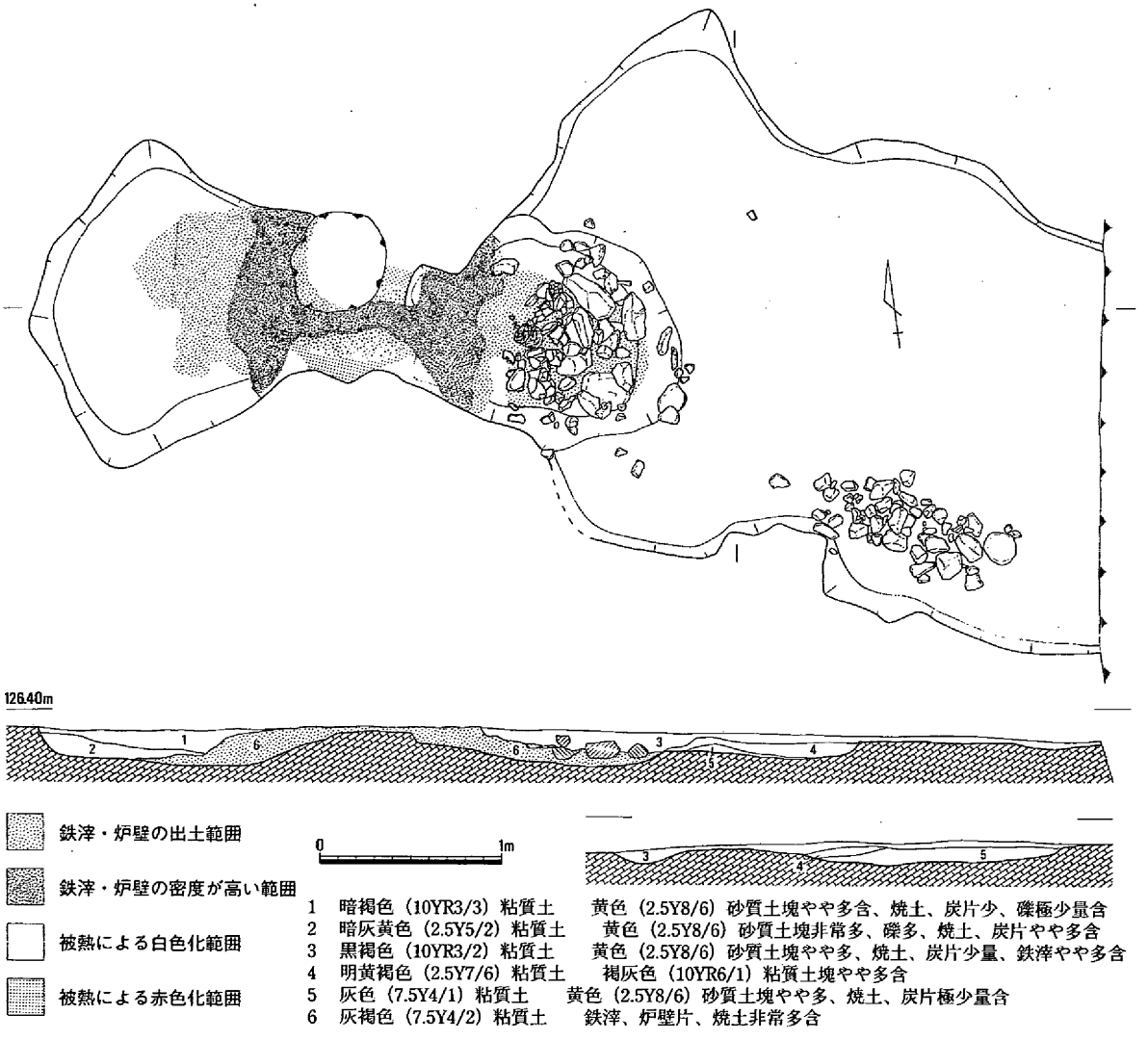
第250図　溝25の出土遺物

５．製鉄遺構、その他の遺構

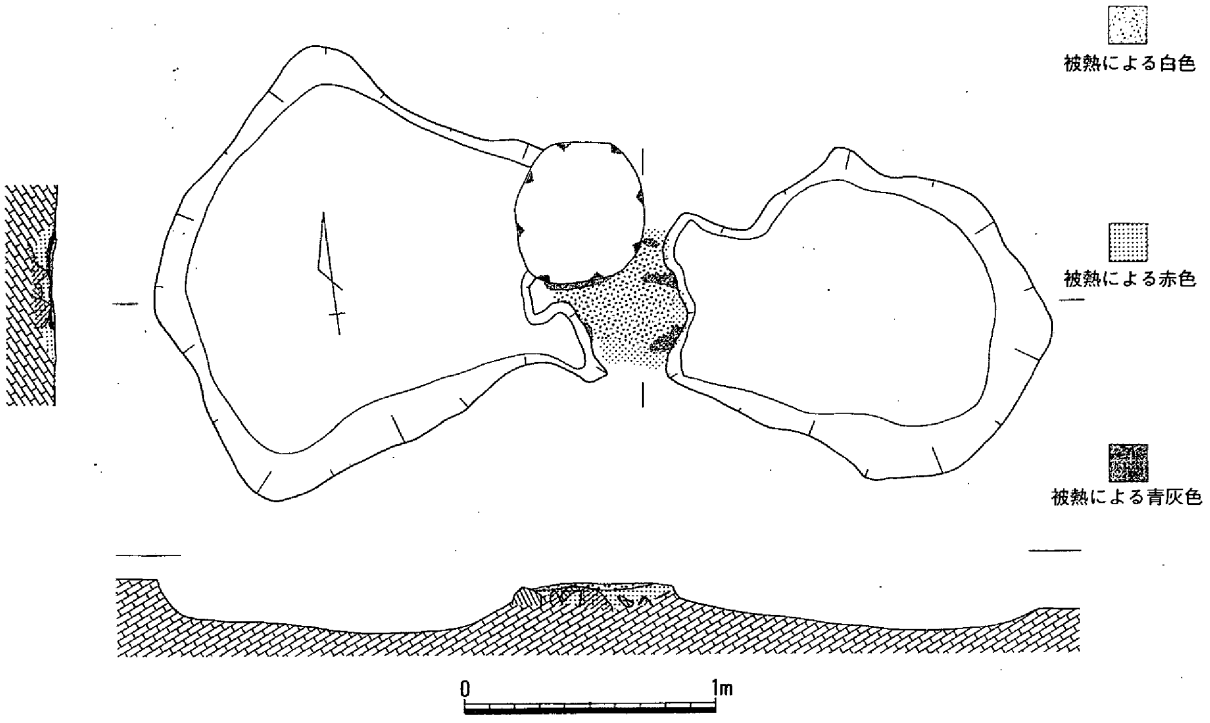
製鉄遺構（第251・252・253・254図、図版33－２・３）

９区中央から南東よりの地点において検出した。北から南へ舌状にのびる丘陵上の平坦部に位置する。圃場整備事業による削平のため依存状態は悪く、上部構造は不明である。炉床下にあたると考える被熱影響をもっとも強く受けた基盤層の範囲は、東西軸64㎝、南北軸56㎝を測る。この部分はほ場整備事業による削平以外にも、後世の撹乱を受けている。炉床下にあたると推測する部分の平面形は検出状態から正確に述べるのであれば不定形となるが、おおよそ長楕円を呈するといえるだろう。被熱範囲の形状から炉の形態を推測することも遺跡によっては可能なのかもしれない。しかし、ここでは先にも述べたようにほ場整備事業による削平が著しいため、必ずしも当時の上部構造の形態が今回検出した基盤層に熱影響として反映しているとは言い難く、このことから炉の形態をここで言及することは困難と言わざるを得ない。また、炉床下に掘り込み等は確認できず、下部構造を特別に構築した痕跡も確認できなかった。

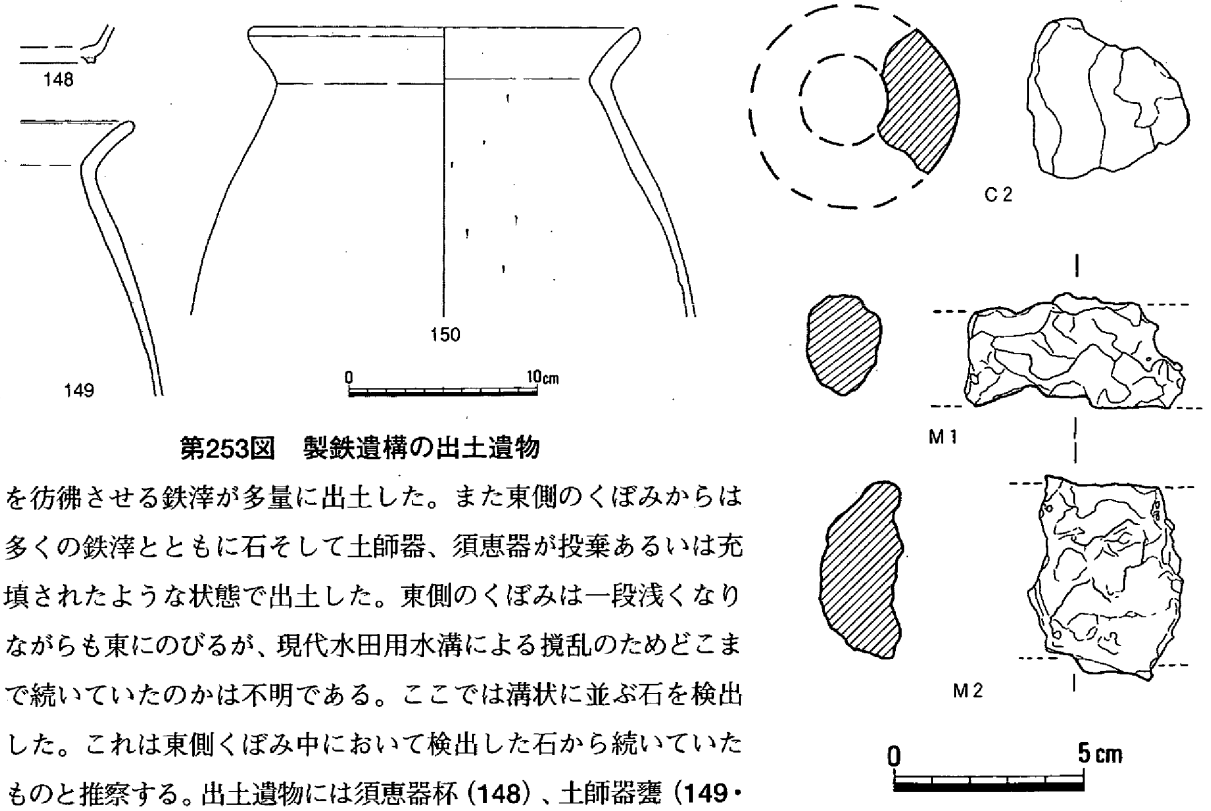
炉と推測する部分の東西両脇においてそれぞれくぼみを検出し、そこには炉部分から流出したこと



第251図　製鉄遺構全体図（S＝1/40）



第252図　製鉄遺構部分図（S＝1/30）

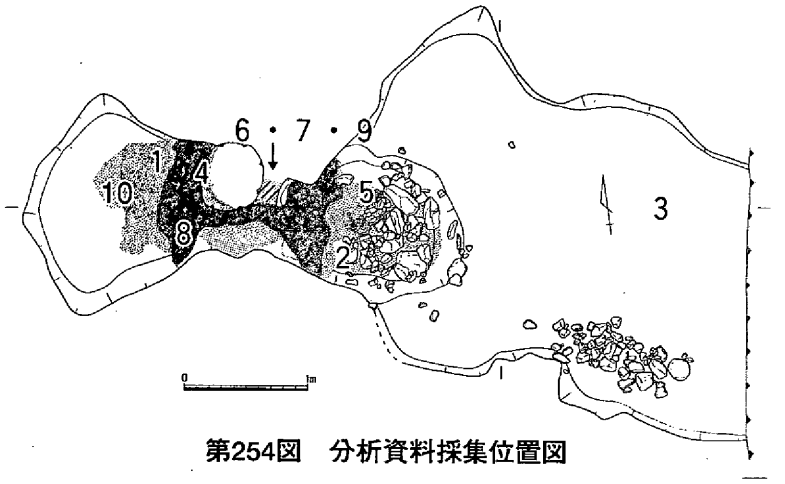


第253図　製鉄遺構の出土遺物

を彷彿させる鉄滓が多量に出土した。また東側のくぼみからは多くの鉄滓とともに石そして土師器、須恵器が投棄あるいは充填されたような状態で出土した。東側のくぼみは一段浅くなりながらも東にのびるが、現代水田用水溝による撹乱のためどこまで続いていたのかは不明である。ここでは溝状に並ぶ石を検出した。これは東側くぼみ中において検出した石から続いていたものと推察する。出土遺物には須恵器杯（**148**）、土師器甕（**149・150**）、羽口（Ｃ２）、鉄滓がある。**148**は杯の小片である。高台を付すものであるが、この高台を付す位置は杯底部最端部付近である。小片のため底径等は不明である。**149**は甕の口縁部から肩部にかけての部分であるが、残存する口縁部が口径の約１/８以下である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面はハケ目がかろうじて看取できるが、風化が著しい。また内面も風化のため、調整痕は不明である。胎土中には砂礫を非常に多く含む。**150**は

甕の口縁部から胴部にかけての部分である。内外面ともに風化が著しく、調整痕は不明瞭であるが、内面には若干ケズリの痕跡が観察できる。149と同様、胎土中に砂礫を非常に多く含む。Ｃ２は土製の羽口小片である。礫を多く含み、鉄滓が表面に付着する。復元外径は5.5cm、内径は2.3cmを測る。西側くぼみ北端付近において掘り下げ中に出土したが、この遺構が製鉄遺構であることから考えると、これは遺構に伴うものではなく混入したものである可能性が高い。出土した土器の時期は８世紀末頃と考える。

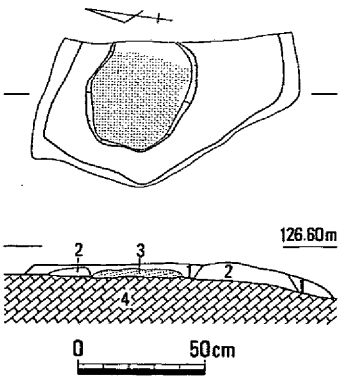
炉床が存在したと推測する部分から両脇のくぼみに流れ出たような状態で、焼土、炉壁片とともに鉄滓が多量に出土した。その中から10点を抽出し、株式会社九州テクノリサーチ大澤正己氏に分析、鑑定を依頼した。その10点の出土位置は第254図に示す。図中の番号は分析結果報告書の符号に対応する。両脇のくぼみより出土した１～３の分析結果より、この遺構は砂鉄を利用した製鉄遺構であったことが推測できる。出土した遺物の説明からやや逸れるが、砂鉄に関連して少し触れておく。ここで掘り上げた埋土を水洗すると砂鉄を比較的多く採取することができた。これも砂鉄を利用していたことの裏付けとなるのかもしれないが、これについては検討の余地が残る。西側くぼみの炉床下とほぼ接する位置において炉壁（４）が出土した。また、この近辺で出土した６は炉外流出滓、７は精錬滓、９は流出孔滓であった。この他、西側のくぼみより出土した８は炉底塊、10は炉外流出滓である。



第254図　分析資料採集位置図

これらの詳細については、付載に分析・鑑定結果の記載がある。この製鉄遺構は８世紀末を前後した時期に操業されていたと想定する。

（重根）



1　黒褐色（10YR3/1）粘質土
　　炭、焼土多含
2　淡黄色（5Y8/3）粘質土
　　黒色（N2/0）粘質土塊多含
3　橙色（5YR7/6）粘質土　　焼土面
4　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
　　弥生時代～古墳時代の遺物包含層

第255図　被熱遺構

被熱遺構（第255図）

８区中央北端、４区と近接する位置において検出した。弥生時代から古墳時代の遺物包含層の上面で確認した。被熱により淡黄色となった粘土が不整形に巡る中央部付近に、橙色粘質土、焼土面が存在する。これらの上層にあたる第１層は炭、焼土を多く含む。この遺構については、何らかの火を利用していた痕跡であることは推測できるが、その目的、用途に関しては全く持って不明と言わざるを得ない。これにともなって出土した遺物も皆無のため、時期も古墳時代より新しいということ以外、ここでは言及できない。（重根）

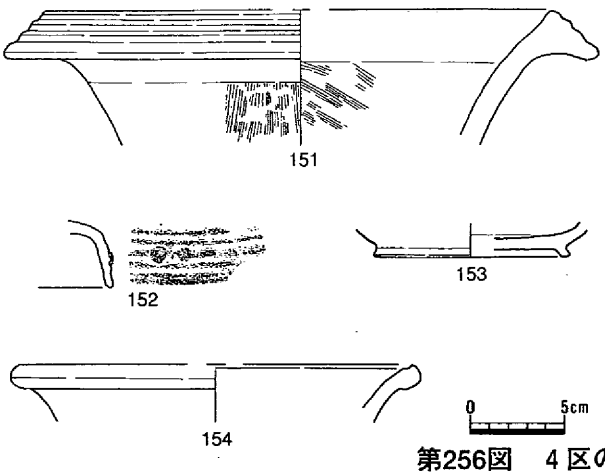
６．包含層・その他の出土遺物

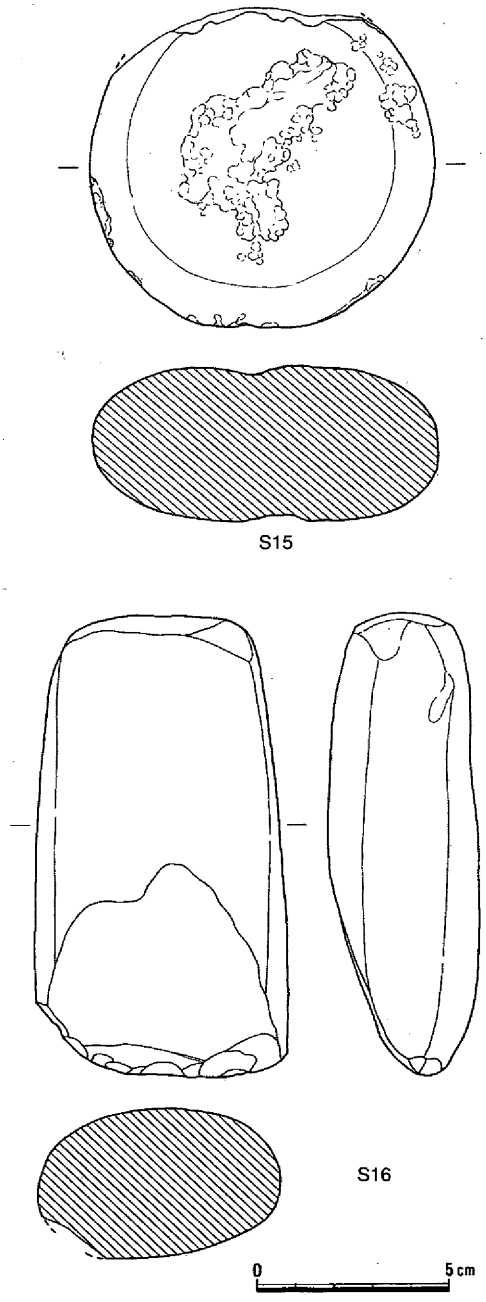
４区の出土遺物（第256図）

151は弥生時代後期前半の壷の口縁である。口縁部は口径27.2cmを測り、内外面にハケ目が見られる。**152**は弥生時代中期後半と考えられる器台の垂下した口縁部分である。外面に４条の平行沈線とその上に円形浮文を施している。**153**は須恵器の高台付杯の底部である。高台径は9.6cmを測る。**154**は須恵器甕の口縁部である。口径は21cmで、口縁端部は丸く拡張しており、口縁端部内側に凹みが廻る。**S15**はの敲石であり、直径 9.0cm、厚さ 4.0cmを測り、重さは481.9ｇである。被熱を受けている。**S16**は太型蛤刃石斧であり、長さ12.4cm、厚さ 4.0cm、重さ548ｇを測るものである。　（時實）

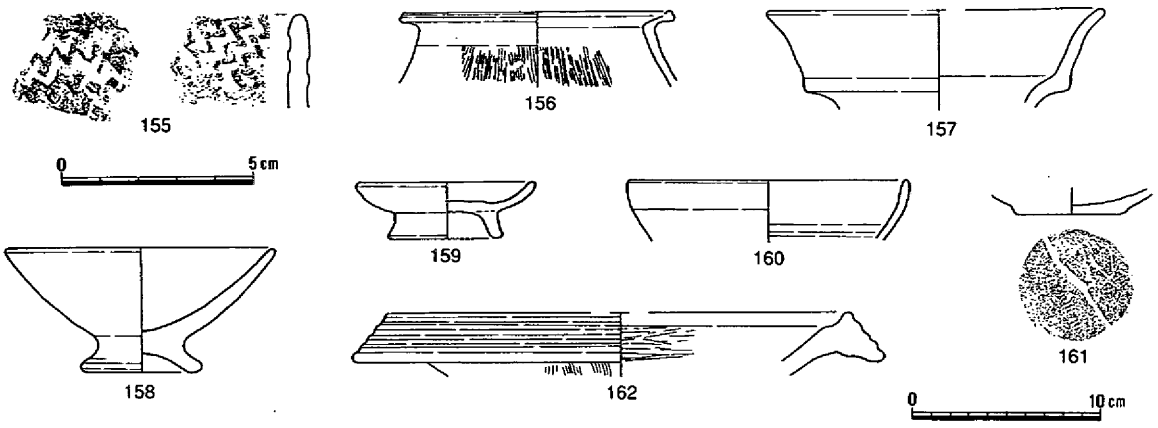
１区、２区の出土遺物（第257・258・259図）

155は、山形押型文土器である。押型文は、内面は縦方向に、外面は横方向に施文される。**156**は、弥生土器の甕である。口縁部は、大きく外反刺、胴部のない外面はハケメ調整が施される。**157**は、土師器の壺である。内外面ヘラミガキが施される。**158**は、土師器の台付鉢である。全体に赤色顔料が塗布されている。**160**は、土師質土器である。内外面ヨコナデが見られる。**161**は、**160**と同一の可能性のある土器で、底部に糸切りの痕跡が見られる。**162**は、弥生土器の壺である。内面はヘラミガキ、外面はハケメが見られる。**163・165**は、弥生土器の甕である。何れも内面ヘラケズリが施される。**165**は、外面に煤が付着する。**166**は、須恵器の杯蓋である。**167**も、須恵器の杯蓋である。天井部が平坦で、高さは、低い。**168**は、須恵器杯身である。短く水平に延びる受け部と、内傾しながら短く立ち上がる口縁部を持つ。**169**は、弥生土器の壺である。頸部に１条の取った位を貼り付けて、刻み目を施す。口縁部の端面には、斜格子文が見られる。**170**は、弥生土器の甕

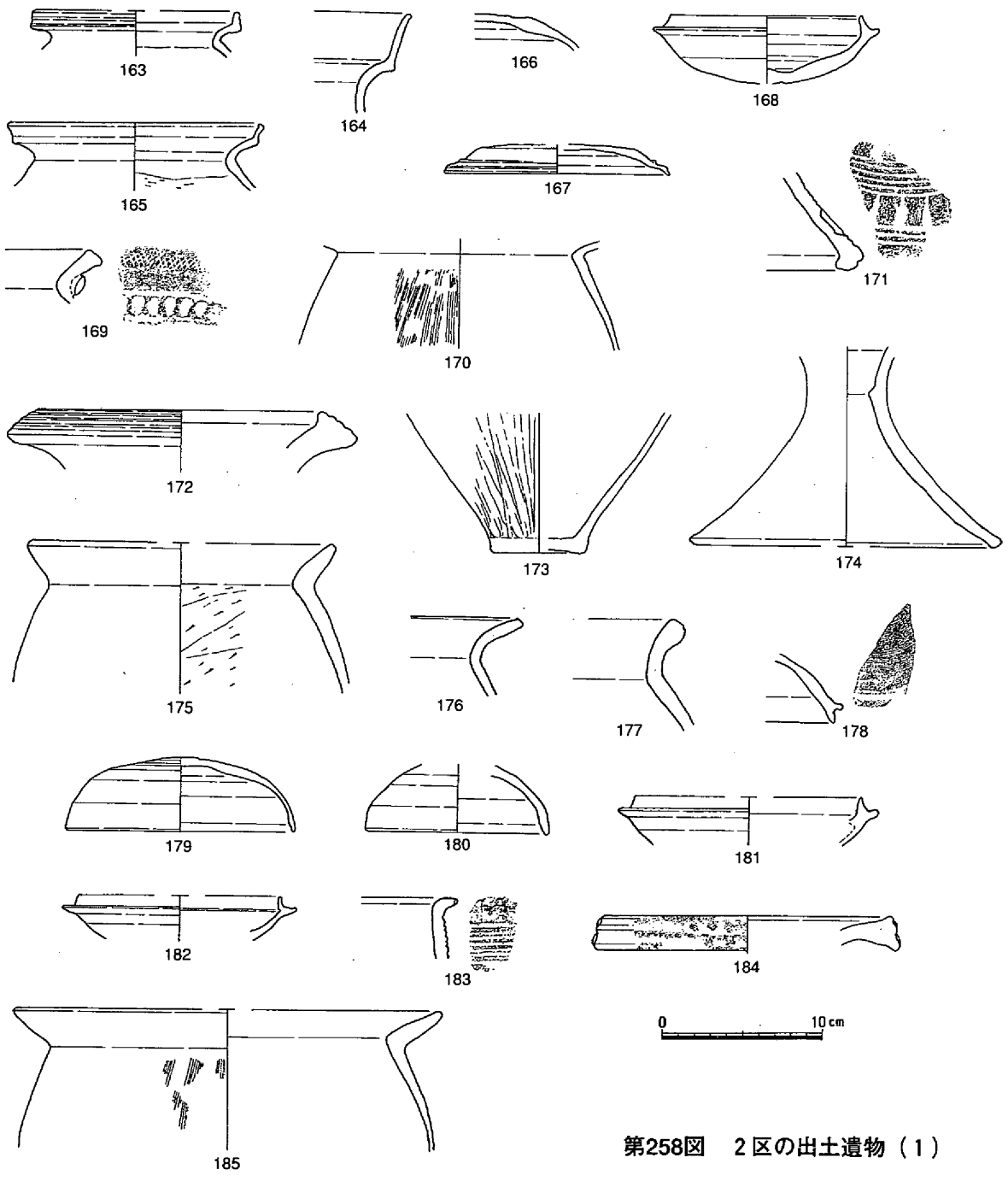




第256図　４区の出土遺物

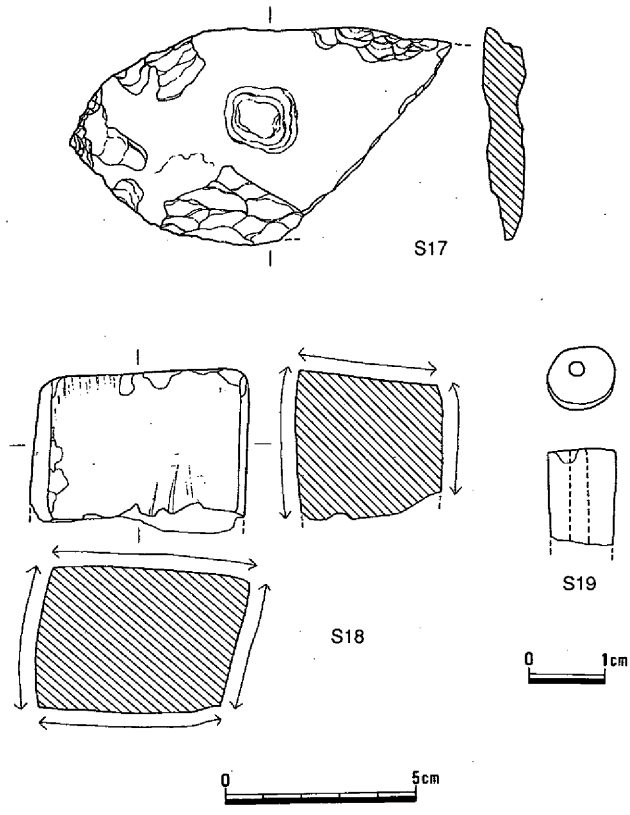


第257図　１区の出土遺物

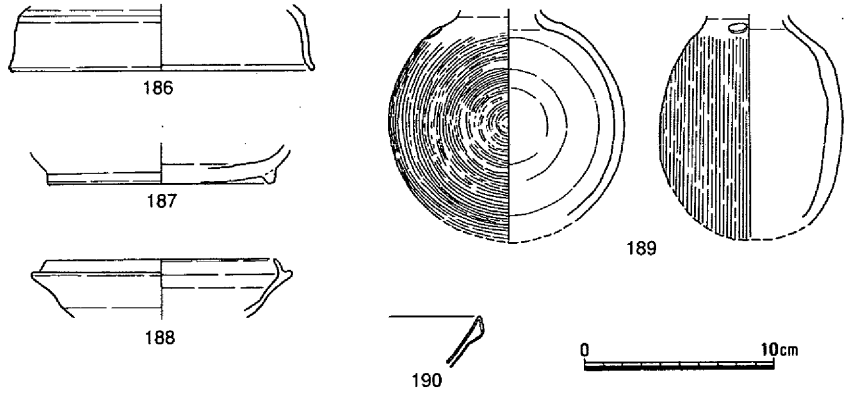


第258図　２区の出土遺物（１）

である。内面はヘラミガキ、外面はハケメが施される。**171**は、弥生土器の器台の脚部である。凹線と三角透かしが見られる。三角透かしは、内側まで貫通しない。**172**は、弥生土器の壺の口縁部である。**173**は、弥生土器の甕である。外面はヘラミガキ内面はナデにより仕上げられている。外面に煤が付着している。**174**は、弥生土器の高杯の脚部である。**175**は、土師器の甕である。壁体は分厚く、胴部内面はヘラケズリ施される。**176**は、土師器の甕である。**177**は、備前焼の壺である。肩部にカキメが施され、自然釉がかかる。**178**は、陶質土器の蓋である。天井部は丸く高い、カキメが見られる。**179**は、須恵器の杯蓋である。肩部は丸く、天井部にはヘラケズリが見られる。口縁端部内面には、小さな段が見られる。**180**は、須恵器の杯蓋である。天井部は、丸く高まる。口縁端部は丸く収められる。**181**は、須恵器の杯身である。受け部は短く、口縁部も短く立ち上がる。**182**は、須恵器の杯身である。短い受け部と短い口縁部を持ち、口縁部の下端と体部との境に明瞭な屈曲が見られる。**183**は、弥生土器の甕である。胴部にクシ描沈線が施される。**184**は、弥生土器の壺である。口縁部に円形浮文が見られる。**185**は、土師器の甕である。外面にハケメ調整が見られる。**S17**は、磨製石包丁の未製品である。一部に磨きが見られるも、殆どは形を整えたのみである。**S18**は、砥石である。一部を欠損しているが、欠けた面以外は、使用痕が見られる。**S19**は、管玉である。（井上）



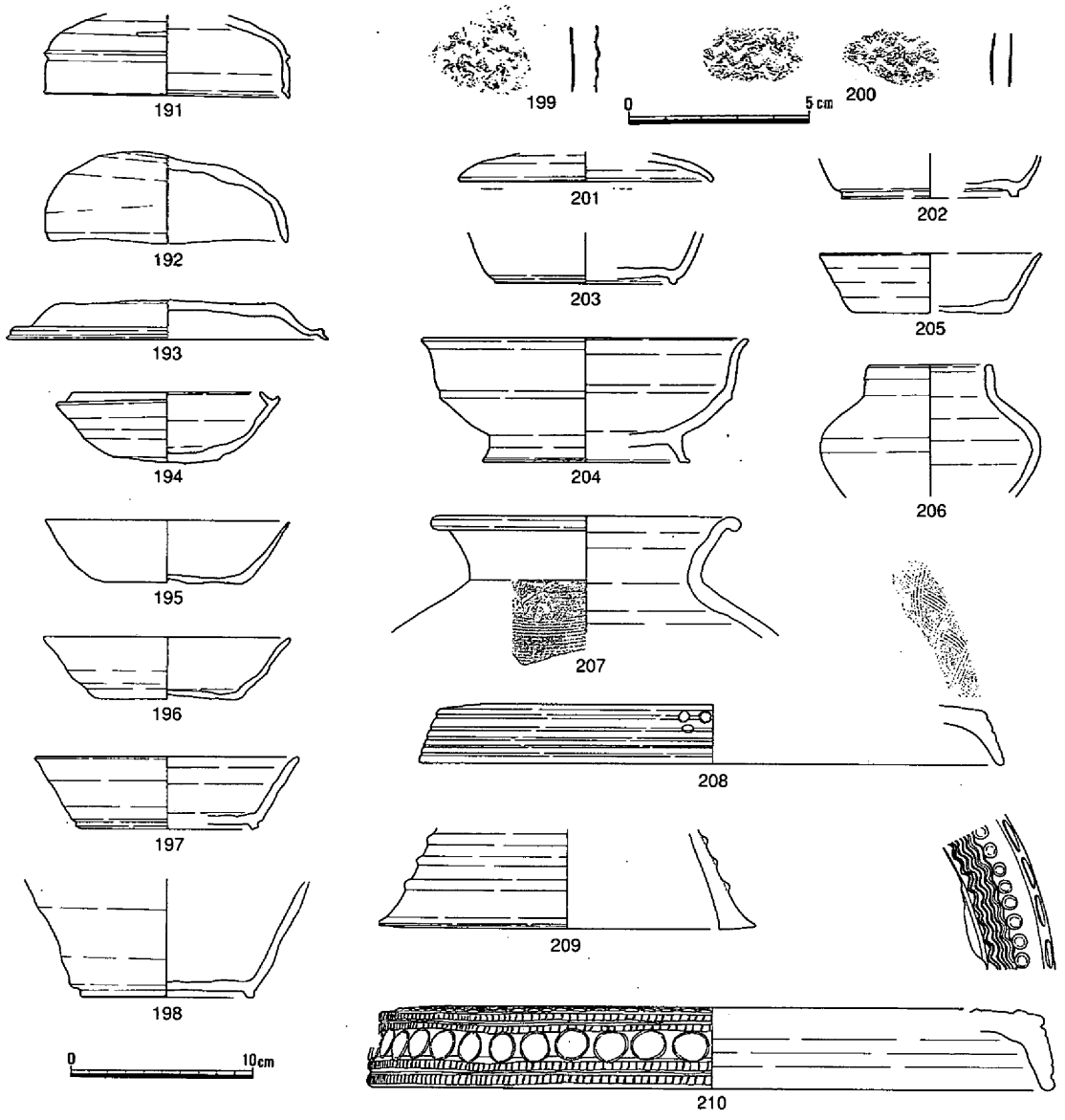
第259図　２区の出土遺物（２）



第260図　３区の出土遺物

３区の出土遺物（第260図）

186は須恵器の杯蓋である。口径は16cmである。稜は甘く、６世紀後半のものと考えられる。**187**は須恵器の高台付の杯の底部である。高台径12cmを測り、焼成は甘い。底面にはヘラ切りの痕跡を残している。**188**は須恵器の杯身である。口径は12.2cmである。６世紀後半～７世紀のものと考えられる。**189**は須恵器の提瓶である。重機でもって表土掘削を行っている最中に、調査区の南東隅より出

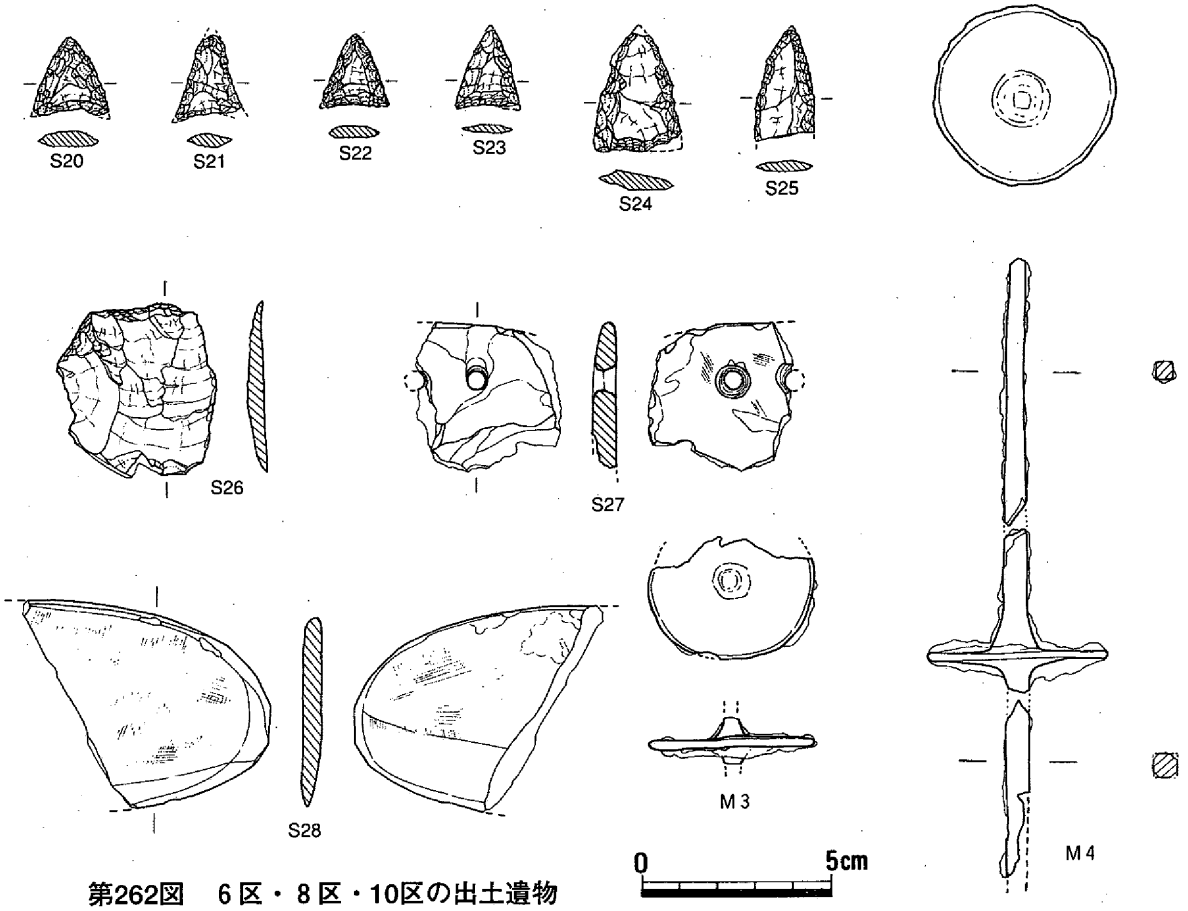


第261図　６区・８区・９区の出土遺物

土した。残存の体部が約２分の１であり、口縁部分は欠損している。推定の直径は12.3cmであり、幅は9.6cmを測る。つまみは形骸化しており、径１cmのボタン状の貼り付けを施しているのみである。時期は６世紀後半と考えられる。**190**は白磁椀の口縁部で、口縁部を玉縁にしているものである。森田勉氏の分類でいうⅣ類にあたる。その他、調査区の南東部分で鉄滓を多く出土している。（時實）

６区、８区、９区、10区の遺物（第261・262図）

191は、須恵器の杯蓋である。肩部に明瞭な稜線を持ち、口縁部は、垂下する。口縁端部の内面には明瞭な段を持つ。天井部は全体にヘラケズリが見られる。**192**は、須恵器の杯蓋である。肩部は丸く、頂部にヘラケズリが見られる。口縁端部は、丸く収められる。**193**は、須恵器の杯蓋である。天井部は低平で、頂部にヘラケズリが見られる。**194**は、須恵器の杯身である。受け部は少し上向きに、口縁部は大きく内傾しながら短く立ち上がる。体部はやや深い。**195**は、土師器の杯である。**196**は、須恵器の杯である。底部外面には、ヘラ切りの痕跡が見られる。**197**は、須恵器の高台付杯である。体部は、直線的に立ち上がる。高台は、貼り付けられるもので、高さは低い。**198**は、須恵器の高台



第262図　６区・８区・10区の出土遺物

付杯である。体部は、直線的に立ち上がるもので、器高は高い。高台は、貼り付けられるもので、高さは低い。**199**は、縄文土器で山形押型文が見られる。**200**は、縄文土器で山形押型文が内面、外面に見られるものである。**201**は、須恵器の杯蓋である。緩やかに弧を描く天井部に、口縁端部は、僅かに下方に引き出されるものである。**202**は、須恵器の高台付杯である。体部は、僅かに丸みを持つ。底部外面には、ヘラ切りの痕跡が見られる。高台は、貼り付けられるもので、その高さは低い。**203**は、須恵器の高台付杯である。体部は、僅かに丸みを持つ。高台は、貼り付けられるもので、その高さは低い。**204**は、須恵器の高台付杯である。緩やかに弧を描きながら立ち上がる体部の中程に、明瞭な１本の稜線を持つ。口縁端部は、少し外方に開く。高台は、断面が逆台形を呈するもので、少し開くように貼り付けられるもので、その高さは高い。**205**は、須恵器の杯である。直線的に立ち上がる体部を持つ。底部外面には、ヘラ切り痕跡が見られる。**206**は、須恵器の壺である。口縁部は、短く垂直に立ち上がる。**207**は、須恵器の甕である。胴部外面にカキメとタタキメが見られる。**208**は、弥生土器の口縁部で、口縁端部が大きく下方に拡張する。**209**は、弥生土器の器台の脚部である。貼り付け凸帯が見られる。**210**は、弥生土器の器台の口縁部である。下方に大きく拡張した口縁端部の外面には円形浮文が、上面には竹管文とクシ描き波状文が見られる。**Ｓ20～Ｓ25**はサヌカイト製の石鏃である。**Ｍ３・Ｍ４**は、鉄製の紡錘車である。（井上）

第３節　まとめ

１　遺跡の概要

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居17棟、掘立柱建物22棟、土壙70基、溝25条、製鉄遺構１個などで、他に多数の柱穴を検出した。調査した竪穴住居17棟の内、弥生時代と考えられるのは、６棟であり、古墳時代と考えられるのは、11棟である。調査した面積からすれば、決して遺構密度の高い遺跡ではない。しかし、遺構としては、注目すべき竪穴住居がある。弥生時代後期に属するその竪穴住居は、直径で11ｍを越える大きさを呈している。１棟だけが特別に巨大な大きさを示している。しかし、今回の調査で検出した弥生時代の竪穴住居で、同じ時期の竪穴住居はない。一部遺跡が削平された部分があるとしても、その痕跡も見られない事は、気掛かりな事である。何れにしても、もっと広い範囲を対象にその存在の意義を考える必要があるものと考える。その詳細は、次項に譲るとして詳しくは立ち入らないが、その存在は、注目に値する。

古墳時代の竪穴住居にも、大形竪穴住居が存在する。方形の竪穴住居である。一辺の大きさが、８ｍを越すものである。この竪穴住居の場合、ほぼ同時期と考えられる竪穴住居は、数棟はある。これら竪穴住居の規模は、一辺が４～５ｍ、最大でも６ｍを測るものである。この規模は、同時期の竪穴住居の普通の規模である。それに比べると、この中にあっては、突出した規模になる。この遺跡においては、大形竪穴住居を頂点に、数棟の竪穴住居が存在する形態が見られる。

掘立柱建物は、22棟を調査したが、その多くは奈良時代後半を中心とする時期と考えられる。この時期の掘立柱建物の主軸の方向は、北、もしくはそれに直行する１群と、主軸を少し東に振る１群がある。同一群内に有っても時期的に異なるものも存在すると考えられるが、掘立柱建物17と、掘立柱建物19は、同じ企画の元に建築されたものと考えられる。

丘陵の先端に近い位置に製鉄遺構を検出した。流動滓、流出滓、炉壁が見られる事から、精錬遺構と考えながら調査した。しかし、炉の本体は検出されず、その下部構造と考えられるものを検出した。古代の美作國は、産鉄国であることを考えれば、古代の製鉄遺構の発見は、その存在する意義は大きいと考える。しかし、この１基のみでは、国内での位置、流通構造、生産形態などについても明らかにする事は出来ないため、今後の資料の増加を待ちたい。

出土遺物を見ると、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。時代的には、縄文時代早期から、古代までのものが見られる。縄文土器は、押型文土器が出土している。同時期の遺構として、土壙が１基存在する。押型文土器については、量的には多くないが、布原地区で調査した大開遺跡、六番丁場遺跡からも出土している。弥生土器は、前期に属するものは数点出土している。弥生土器の出土量に増加が見られるのは、中期中葉からである。古墳時代は、前期前半のものが見られない。５世紀頃のものが少し見られた後は、６世紀後半が多くなる。遺構もその様な傾向を示している。遺物的には数点であるが、朝鮮半島に由来すると考えられる遺物が出土している。物が少ないために、何も解らないが、注目しておきたい遺物である。　（井上）

２　九番丁場遺跡２区で確認された大形住居（竪穴住居７）について

九番丁場２区に存在した竪穴住居７は直径が最大12ｍを測り、弥生時代後期において岡山県内でも最大級の規模を持つ竪穴住居である。ここではこの住居の構造と、弥生時代後期における美作地域の大形住居とを比較して考察していきたい。

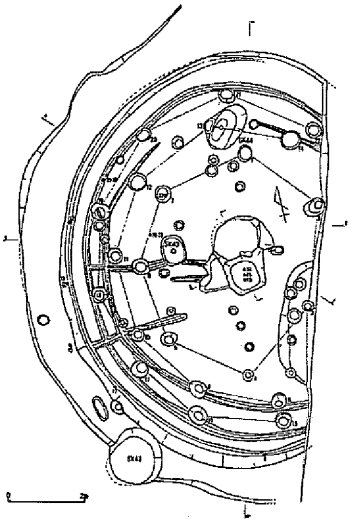
まず、竪穴住居７の構造について述べる。この住居の柱穴は壁体溝に沿って14本と中央穴を挟んで６本存在した。柱穴の並びについては『鏡野町史』考古資料編で指摘されている（註１）。第126図で、中央穴を挟んで位置するＰ15～Ｐ17とＰ18～Ｐ20は３本ずつ対になり、あたかも２×１間の建物のように並ぶ。さらにＯ－ＰラインでＰ14～Ｐ17とＰ６が、Ｒ－ＱラインでＰ13とＰ18～Ｐ20とＰ７が直線上に並ぶ。このことは、壁体溝に沿った柱穴と中央穴を挟んで存在する柱穴が関連するような規格に基づいてもうけられたことを意味する。

またＯ－Ｐライン、Ｒ－Ｑラインで柱穴の断面を見ると、中央穴を挟むＰ15～Ｐ17とＰ18～Ｐ20は、壁体溝に沿う柱穴に比べて深さが若干浅いかほぼ変わらない。さらに柱の抜き取り痕の規模もそれほど変わらないと思われる。このことは、中央穴を挟んで位置する柱穴には壁体溝に沿う柱穴とあまり変化がない規模の柱が立っていた可能性が高いことを示唆している。

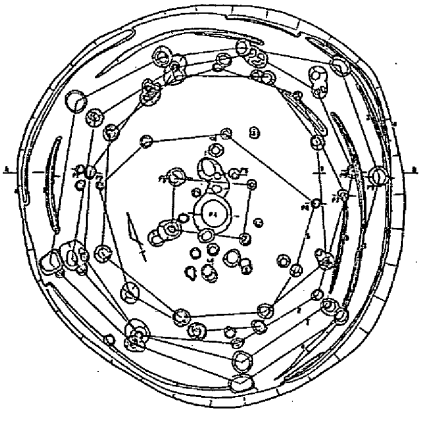
以上の事実観察だけでは、この住居の上部構造を復元するのは不可能と思われる。柱穴配置を見ると、たとえば楼閣のような特殊な上部構造を想像するのはたやすい。しかし、中央穴を挟んだ柱穴の規模が著しく大きいわけではなく、他に根拠を挙げることが難しい。他遺跡の例を勘案すると、竪穴住居の規模が拡大することに対応して中央および壁体溝に沿う柱穴の本数が増えた結果である、と見た方が合理的であろう。

また、この住居出土の遺物は人形土製品、ガラス製管玉、

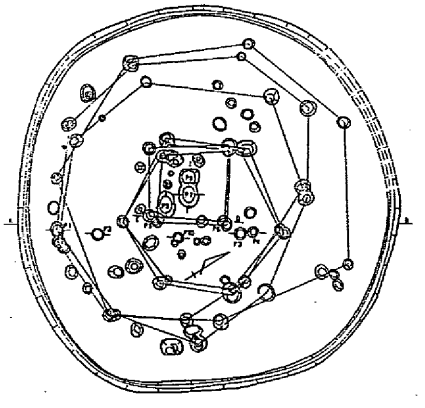
美作の大形竪穴住居（いずれも1/200）



津山市荒神峪遺跡住居跡６



久世町旦山遺跡竪穴住居19



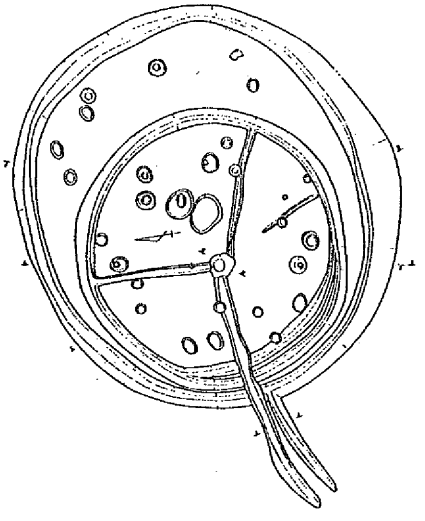
久世町旦山遺跡竪穴住居26

碧玉製柱状未製品といった特徴のあるものが見られ、その他にも床面から完形の壺２点などが出土した。土器・石器については一部に混入もあるが、土器は上東式土器の影響を受けた弥生時代後期前葉（津寺遺跡の編年（註２）で弥・後・Ⅱ並行）の器種構成がわかる一括性の高い資料と言えよう。

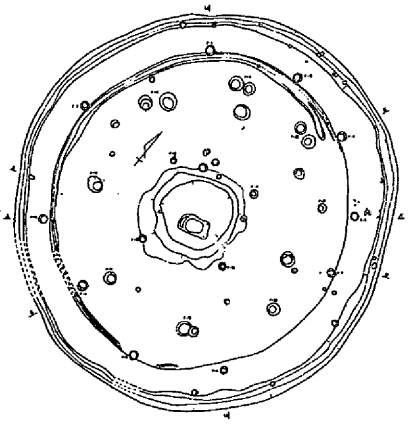
九番丁場遺跡全体に目を向けると、竪穴住居７と同時期と考えられる住居は今回の調査では確認できなかった。また、同時期の土壙などや包含層遺物もほとんど見られない。削平された可能性は否定できないものの、もともとこの時期の遺構密度は低いことが想定できる。

さらに視野を広げて香々美川東岸の丘陵部では、九番丁場遺跡の東に津山総合流通センター建設に伴って発掘が実施された鏡野町葡萄田頭遺跡、津山市有本遺跡・上遠戸嶋遺跡・有元遺跡・男戸嶋遺跡・荒神峪遺跡が存在する。中でも荒神峪遺跡（註３）の住居跡６は直径11ｍを測り、ガラス製玉類が多く出土した。時期は弥生時代後期初頭（弥・後・Ⅰ並行）とされる。荒神峪遺跡では同時代の竪穴住居は４軒、段状遺構３基が存在し、比較的大規模な集落と考えてよいだろう。

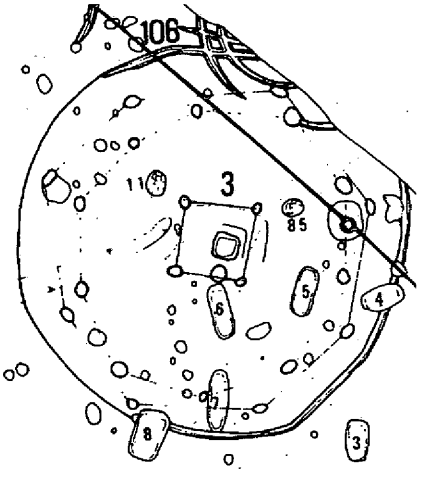
美作全体でみると、直径が10ｍを越える竪穴住居が存在する遺跡が少なからずみられるが、その遺跡は大規模な集落であることが多い。



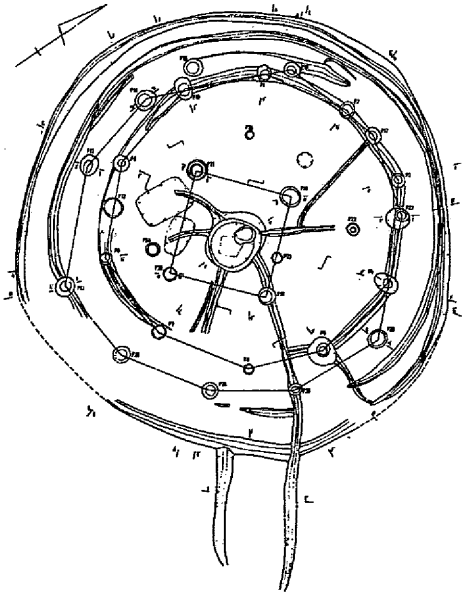
久世町先旦山遺跡竪穴住居１



久世町上野遺跡竪穴住居２



勝央町小中遺跡１区竪穴住居３

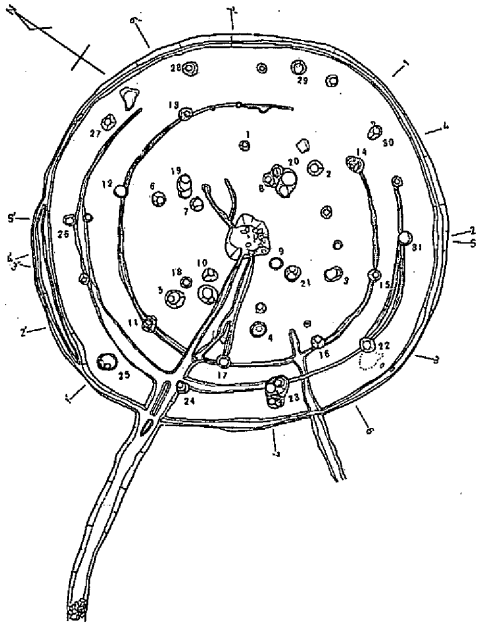


勝央町小中遺跡竪穴住居22

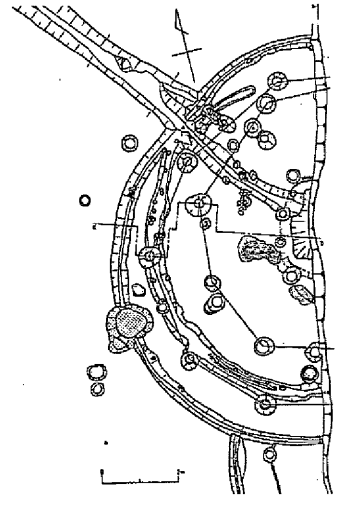
久世町旦山遺跡（註４）は、久世盆地を西に望む丘陵上に立地する弥生時代後期の集落遺跡である。ここでは２棟の竪穴住居が直径10ｍを越えている。竪穴住居19は直径10.44ｍで、柱穴配置は最大の住居で周囲８本、中央４本と思われる。時期は弥生時代後期中葉～後葉（弥・後・Ⅱ～Ⅲ並行）である。直径10.40ｍを測る竪穴住居26は、最大の住居で周囲７～９本、中央４本の柱穴をもつ可能性が高い。時期は弥生時代後期後葉（弥・後・Ⅲ並行）である。

また旦山遺跡の約３㎞北、目木川を西に望む丘陵上にある上野遺跡（註５）では、長径10.63ｍ×短径9.8ｍを測る竪穴住居２があり、弥生時代後期末葉（弥・後・Ⅳ平行）の時期と考えられる。同時期の遺構は竪穴住居が４棟、袋状土壙が62基以上存在し、袋状土壙の多さが目を引く。

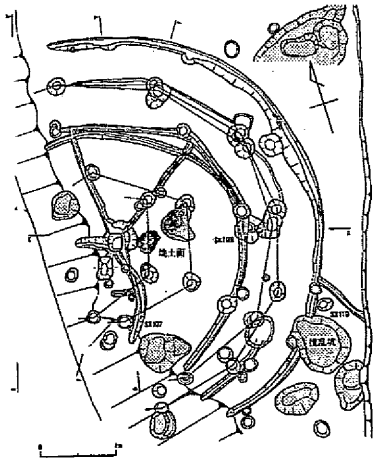
勝央町小中遺跡は南に勝間田の平地を望む丘陵上の集落である。南向きの丘陵上に竪穴住居が多数検出された。中国自動車道建設に伴う発掘調査（註６）では円形で最大径10.5ｍを測る竪穴住居３が調査された。岡山ファーマーズマーケット建設に伴う発掘調査（註７）では、先の竪穴住居３の北側に当たる１区で検出された竪穴住居22がある。この住居は建て替えが見られ、最大の住居は東西12ｍ、



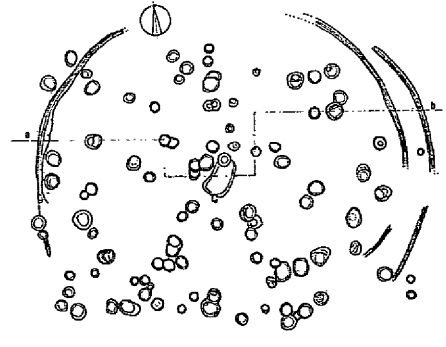
津山市天神原遺跡23号住居



津山市上部遺跡SH103



津山市上部遺跡SH101



津山市小原B遺跡１号住居跡

南北11.8ｍのほぼ円形を示す。報告書では中央穴周囲の柱穴４本は単独の住居の柱穴とされているが、おそらく最大の住居に伴う可能性が高い。時期は弥生時代後期後葉（弥・後・Ⅲ並行）である。

これら美作地域の大形住居は、中央穴の周囲に４本と壁体溝の周りに柱穴を配するものが多い。またその周囲には同時期の竪穴住居などが複数みられ、大規模な集落になる例が多い。さらに他の住居に対し特殊遺物の多さは特筆すべきで、大形住居廃棄の際は何らかの決まりがあったことが想定できる。以上の様相に対し、今回調査の九番丁場遺跡竪穴住居７は、単独に近い形で立地する点、中央穴を挟んで６本もの柱穴が設けられるという構造が異なる。また、規模を大幅に変更する建て替えがないことも特徴と言えるだろう。　（氏平）

註

1　井上　弘「九番丁場遺跡」『鏡野町史』考古資料編　2000年
2　正岡睦夫「第５節　時期区分について」『津寺遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　1998年
3　小郷利幸『荒神峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集　1999年
4　福田正継・浅倉秀昭「旦山遺跡」『旦山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先旦山遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136　1999年
5　山磨康平ほか「上野遺跡」『元定古墳群　上野遺跡　大内原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91　1994年
6　栗野克己・高畑知功ほか「小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　1975年
7　浅倉秀昭ほか「小中遺跡」『小中遺跡・白迨古墳群・小中古墳群・湯ヶ迨古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117　1997年

表で使用した文献　※文中に挙げたものは除く

安川豊史『上部遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集　1990年
中山俊紀『小原Ｂ・稲荷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集　1990年

表１　弥生時代後期における美作の大形住居一覧（最大径10ｍ以上）

遺跡名	住居名	形状（残存）	直径・最大径	柱穴（周囲）	柱穴（中央）	特徴	主な出土遺物	時期
鏡野町九番丁場遺跡（本報告）	２区竪穴住居７	円形	12ｍ	14本	６本		土器、人形土製品１、ガラス管玉１、碧玉柱状未成品１	弥生時代後期Ⅱ（前葉）
勝央町小中遺跡（県報告７、1975）	１区竪穴住居３	円形	10.5ｍ	９～10本	４本	方形の中央穴		弥生時代後期
勝央町小中遺跡（県報告117、1997）	竪穴住居22（最大）	円形	12ｍ	10本	４本	建て替え３回？	土器、刀子１、鉄鏃１、ミニチュア土器１	弥生時代後期Ⅲ（後葉）
津山市天神原遺跡（県報告７、1975）	23号住居（最大）	円形	11ｍ	10本	４本	拡張３回	土器	弥生時代後期Ⅲ（後葉）
津山市上部遺跡（津山市報告30、1990）	SH101	円形（１/２残）	11ｍ	10~12本		拡張１回	土器細片	弥生時代後期
津山市上部遺跡（津山市報告30、1990）	SH103	円形（１/２残）	10.8ｍ	８～10本	２本以上	拡張１回	土器、砥石、鑓	弥生時代後期Ⅳ（末葉）
津山市小原B遺跡（津山市報告35、1990）	１号住居跡	円形（一部残）	約10ｍ				土器	弥生時代後期前葉
津山市荒神峪遺跡（津山市報告64、1999）	住居跡６（最終）	楕円形（２/３調査）	11ｍ	８本（12本か）		山側にテラス	ガラス勾玉１、ガラス管玉１、ガラス小玉23、鑓２、鉄鏃１	弥生時代後期Ⅰ（初頭）
久世町旦山遺跡（県報告136、1999）	竪穴住居19	円形	10.44ｍ	９本？	４本		碧玉製管玉１、鉄鏃３、鉄鎌１、鑓１、鉄斧１	弥生時代後期Ⅲ（後葉）
久世町旦山遺跡（県報告136、1999）	竪穴住居26	円形	10.40ｍ	７本？	４本		鉄鏃２、土玉１、ミニチュア土器１	弥生時代後期Ⅲ（後葉）
久世町先旦山遺跡（県報告136、1999）	竪穴住居１	楕円形	10.60ｍ	６本？		最も古い住居	土器、砥石２、敲石１（６軒の住居合計で）	弥生時代後期Ⅰ～Ⅱ（初頭～前葉）
久世町上野遺跡（県報告91、1994）	竪穴住居２	楕円形	10.63ｍ	10本	４本	中央穴周囲に高まり	土器、鑓、鉄鏃	弥生時代後期Ⅳ（末葉）
落合町元定遺跡（県報告91、1994）	竪穴住居14	円形	10.5ｍ	９本（11本か）	４本？	建て替え３回以上？	土器、砥石１	弥生時代後期Ⅰ～Ⅱ（初頭～前葉）

※遺跡名の県報告＝岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、津山市報告＝津山市埋蔵文化財発掘調査報告のそれぞれ略

表２　土器観察表

立石遺跡

図番号	遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	特徴
18- 1	竪穴住居１	弥生土器	鉢				鈍い黄橙色	0.5～３㎜砂粒	外面煤付着
- 2	竪穴住居１	弥生土器	長頸壺				橙色	３～10㎜砂礫	内面風化
- 3	竪穴住居１	弥生土器	甕				鈍い黄橙色	１㎜以下細砂	外面風化
- 4	竪穴住居１	弥生土器	長頸壺	(13.5)			鈍い橙色	0.5～３㎜砂礫	口縁１/７残
- 5	竪穴住居１	弥生土器	壺				内橙色、外鈍い橙色	２㎜以下砂粒	
- 6	竪穴住居１	弥生土器	壺	(11.5)			橙色	0.5～３㎜砂粒	口縁１/６残
- 7	竪穴住居１	弥生土器	甕	(11.6)			内鈍い黄橙色、外鈍い橙色	0.5～4.5㎜砂粒	口縁１/７残、外面剥離
- 8	竪穴住居１	弥生土器	甕	(15.0)			鈍い黄橙色	0.5～３㎜砂粒	口縁１/４残、体部外面縦ミガキ
- 9	竪穴住居１	弥生土器	甕				橙色	２㎜以下砂粒	内外面風化
-10	竪穴住居１	弥生土器	甕	(10.8)			浅黄橙色	0.5～２㎜砂粒	口縁１/６残
-11	竪穴住居１	弥生土器	甕	(14.0)			鈍い橙色	0.5～２㎜砂粒	口縁１/５残
-12	竪穴住居１	弥生土器	甕	(12.0)			鈍い橙色	0.5～1.5㎜砂粒	口縁１/５残
-13	竪穴住居１	弥生土器	甕				鈍い橙色	２㎜以下砂粒多	外面煤付着
-14	竪穴住居１	弥生土器	長頸壺				橙色	0.5～２㎜砂粒	外面ミガキ３条沈線
-15	竪穴住居１	弥生土器	高杯				内橙色、外くすんだ橙色	２㎜以下砂粒	坏外面風化ケズリ痕跡
-16	竪穴住居１	弥生土器	高杯				鈍い黄橙色	２㎜以下砂粒少	坏部外面ミガキ
-17	竪穴住居１	弥生土器	高杯				橙色	0.5～２㎜砂粒	外面多条ヘラ描き沈線、被熱
-18	竪穴住居１	弥生土器	小型鉢	(5.4)			橙色	水漉し粘土	
-19	竪穴住居１	弥生土器	甕	(14.0)			橙色	0.5～２㎜砂粒	口縁１/４残、外面煤付着
-20	竪穴住居１	弥生土器	高杯	18.1			橙色	２㎜以下砂粒	坏部内底面一定方向ミガキ
-21	竪穴住居１	弥生土器	高杯	13.6	8.3	8.5	鈍い橙色	0.5～２㎜砂粒	完形、全体に被熱剥離
-22	竪穴住居１	弥生土器	長頸壺	11.4			鈍い橙色	0.5～２㎜砂粒	口縁部完存
20-23	竪穴住居４	弥生土器	壺				橙色	１㎜以下の砂粒多	表面剥離、内面下端指押さえ
-24	竪穴住居４	弥生土器	甕	(9.6)			鈍い黄橙色	１㎜以下砂粒	口縁１/４残、体部内面ケズリ
-25	竪穴住居４	弥生土器	高杯	(14.9)			鈍い黄橙色	４㎜以下砂粒	口縁部１/５残、内面ミガキか
22-26	竪穴住居５	弥生土器	甕	(13.9)			橙色	１㎜ 以下砂粒	口縁１/６残、外面煤付着
-27	竪穴住居５	弥生土器	甕	(14.5)			内鈍い橙色、外灰色	0.5～２㎜砂粒	
-28	竪穴住居５	弥生土器	甕				橙色	１㎜以下の砂粒	口縁部外面凹線３条
-29	竪穴住居５	弥生土器	高杯		(1.0)		橙色	1.5㎜以下砂粒	脚１/４残、円孔透推定13方向
23-30	竪穴住居６	弥生土器	甕	(20.0)			鈍い黄橙色	１～２㎜砂粒	口縁１/８残
-31	竪穴住居６	弥生土器	甕	(16.2)			鈍い黄橙色	１㎜以下砂粒少	口縁１/６以下残、外面煤付着
-32	竪穴住居６	弥生土器	甕	(14.8)			橙色	１㎜以下砂粒	口縁１/５残
-33	竪穴住居６	弥生土器	甕				鈍い黄橙色	１㎜以下砂粒	
-34	竪穴住居６	弥生土器	鉢	(27.4)			橙色	0.5～６㎜砂粒	口縁１/４残、外面煤付着
-35	竪穴住居６	弥生土器	甕		(7.0)		内橙色、外鈍い橙色	３㎜以下砂粒	低１/３残 、外面剥離
-36	竪穴住居６	弥生土器	高杯	(22.8)			内橙色、外黒色	１㎜以下砂粒	口縁１/４残、内面やや剥離
-37	竪穴住居６	弥生土器	鼓形器台		(18.2)		橙色	２㎜前後砂粒多	脚２/５弱残、外面剥離
-38	竪穴住居６	弥生土器	低脚杯	(11.5)	6.8	4.65	内橙色、外明赤褐色	水漉し粘土	口縁１/４、脚２/３残
25-39	掘立柱建物１	土師器	皿		(7.0)		橙色	密、細砂少	低１/２弱残、ヘラオコシ後ナデ
30-40	掘立柱建物６	弥生土器	高杯	(19.8)			明赤褐色	1.5㎜以下砂粒	口縁１/８残、口縁端沈線５条
36-41	建物１	縄文土器	鉢				褐灰色	1.5㎜以下砂粒、角	内面ナデ、外面剥離
38-42	土壙１	弥生土器	甕	16.0	4.2	27.0	橙色	１～４㎜砂粒多	体部一部欠、下半煤付着
39-43	土壙２	弥生土器	長頸壺				内鈍い黄橙色、外橙色	２㎜以下砂粒	体部一部欠、下半煤付着
-44	土壙２	弥生土器	甕	(19.0)			浅黄橙色	２㎜以下砂粒	口縁１/８残
-45	土壙２	弥生土器	高杯	(22.8)			鈍い橙色	２㎜以下砂粒	口縁１/７残、口縁端２条凹線
-46	土壙２	弥生土器	高杯				鈍い橙色	２㎜以下砂粒少	45と同一か、外面下に５条凹線
41-47	土壙４	弥生土器	甕				橙色	0.5～２㎜砂粒	外面煤付着
43-48	土壙５	弥生土器	甕				内灰色、外鈍い橙色	２㎜以下砂粒	外縦ハケ後ミガキ・連続刺突文・煤付着、内凹圧痕・ケズリ
-49	土壙５	弥生土器	壺	(14.4)			内鈍い橙色、外橙色	５㎜以下砂粒多	外面頸部下端に連続凹圧文
-50	土壙５	弥生土器	壺				内黄灰色、外鈍い黄橙色	0.5～４㎜砂粒	胴部１/３残、頸部内面ケズリ
-51	土壙５	弥生土器	壺				鈍い橙色	２㎜以下砂粒	外面頸部下端に連続竹管文
-52	土壙５	弥生土器	壺				橙色	1.5㎜以下砂粒	外面煤付着
-53	土壙５	弥生土器	壺				鈍い橙色	２㎜以下砂粒	外面下端縦ハケ
-54	土壙５	弥生土器	甕				橙色	２㎜以下砂粒	外面煤付着
43-55	土壙５	弥生土器	甕				鈍い橙色	１㎜以下砂粒	口縁外面２条の凹線
-56	土壙５	弥生土器	甕	(12.0)			鈍い橙色	２㎜以下砂粒	口縁１/７残、外面煤付着
-57	土壙５	弥生土器	甕	(14.2)			内鈍い橙色、外橙色	１㎜以下砂粒	口縁１/４残、外面煤付着
-58	土壙５	弥生土器	甕	(13.1)			橙色	0.5～４㎜砂粒	口縁１/４弱残、外面煤付・剥離
-59	土壙５	弥生土器	壺				内橙色、外鈍い橙色	２㎜以下砂粒	肩部、櫛描２条平行沈線文残、櫛描４条波状沈線文
-60	土壙５	弥生土器	高杯				橙色	２㎜以下砂粒	口縁端部４条凹線、底外ミガキ
-61	土壙５	弥生土器	高杯				橙色	２㎜以下砂粒	底外ケズリ痕
-62	土壙５	弥生土器	甕	(13.0)			鈍い橙色	1.5㎜以下砂粒	口縁１/４残、外面煤付着
-63	土壙５	弥生土器	甕	14.5	7.2	33.0	橙色	５㎜以下砂粒	３/４残、口縁端剥離調整不明
-64	土壙５	弥生土器	甕		(7.0)		橙色	１～２㎜砂粒	底１/２弱残、内外面やや風化
-65	土壙５	弥生土器	脚付鉢？		(15.3)		橙色	0.5～３㎜砂粒	脚１/７残、外面10条凹線
45-66	土壙７	弥生土器	鉢	(14.6)			橙色	0.5～３㎜砂粒	口縁１/４残、表面剥離調整不明
-67	土壙７	弥生土器	甕	(14.0)			橙色	５㎜以下砂粒	口縁１/４残
-68	土壙７	弥生土器	甕	(14.0)			鈍い橙色	３㎜以下砂粒	外面煤付着・丁寧ナデかミガキ
46-69	土壙８	弥生土器	甕				橙色	２㎜以下砂粒	外面煤付着
-70	土壙８	弥生土器	甕	(12.0)			内橙色、外鈍い橙色	0.5～４㎜砂粒	口縁１/４残、外面煤付着
-71	土壙８	弥生土器	鉢	(19.0)			内橙色、外鈍い橙色	0.5～４㎜砂粒	口縁１/３残、外面煤付着
47-72	土壙９	弥生土器	高杯	(13.6)			鈍い黄橙色	0.5～４㎜砂粒	坏底部４/５残、内外面丹塗り
48-73	土壙10	弥生土器	壺				橙色	２㎜以下砂粒	
-74	土壙10	弥生土器	甕				鈍い橙色	２㎜以下砂粒	体部外面斜方向ハケメ
-75	土壙10	弥生土器	甕				鈍い橙色	２㎜以下砂粒	外面煤付着
51-76	土壙12	弥生土器	壺	(15.4)			浅黄橙色	６㎜以下砂粒多	口縁１/６残、肩部外面ナデ
-77	土壙12	弥生土器	甕	(18.0)			浅黄橙色	0.5～５㎜砂粒多	口縁１/４弱残、全体剥離
-78	土壙12	弥生土器	壺				内明赤褐色、外橙色	水漉し粘土	内面剥離、口縁外面５条凹線
-79	土壙12	弥生土器	壺	(17.2)			鈍い橙色	２㎜以下砂粒	口縁１/５残、口縁端部図上復元
-80	土壙12	弥生土器	甕	(16.5)			鈍い橙色	５㎜以下砂粒	口縁１/２残、外面煤付着
-81	土壙12	弥生土器	甕	(18.0)			鈍い黄色	１～４㎜砂粒多	口縁１/８残、外面煤付着
-82	土壙12	弥生土器	壺	(14.3)			橙色	0.5～２㎜砂粒	口縁１/６残、内面剥離

52-83	土壙13	弥生土器	壷	(14.8)			浅黄橙色	2㎜以下砂粒	口縁1/7残、頸部外面に沈線文
53-84	土壙14	弥生土器	壺	(15.1)			浅黄橙色	0.5～2㎜砂粒	口縁1/4残、頸部外ヘラ描沈線
-85	土壙14	弥生土器	壺				内橙色、外鈍い褐色	1.5㎜以下砂粒	外面煤付着
-86	土壙14	弥生土器	甕	(14.8)			内鈍い黄橙色、外橙色	1.5㎜以下砂粒	口縁1/2残、外面煤付着
-87	土壙14	弥生土器	壺	(26.5)			橙色	3㎜以下砂粒	口縁1/5残、剥離調整不明
54-88	土壙15	弥生土器	壺				内鈍い橙色、外鈍い黄橙色	1㎜以下砂粒	肩部片、ヘラ描波状文2段
-89	土壙15	弥生土器	甕	(10.6)			橙色	0.5～4㎜砂粒	口縁1/4残、外面煤付着
-90	土壙15	弥生土器	甕	(10.0)			内灰黄褐色、外橙色	1㎜以下砂粒	口縁1/4残
55-91	土壙16	弥生土器	壺	(19.0)			内橙色、外鈍い橙色	1㎜以下砂粒	口縁1/6残、口縁内円形浮文8
-92	土壙16	弥生土器	甕	(12.2)			橙色	1㎜以下砂粒	口縁1/6残、外面煤付着
-93	土壙16	弥生土器	甕				鈍い橙色	3㎜以下砂粒多	口縁端部凹線2条
-94	土壙16	弥生土器	壺？				浅黄橙色	1～4㎜砂粒	口縁端部凹線5条
-95	土壙16	弥生土器	甕	(20.8)			鈍い橙色	2.5㎜以下砂粒	剥離調整不明、外面一部縦ハケ
-96	土壙16	弥生土器	甕	(12.6)			内鈍い黄橙色、外灰黄褐色	2㎜以下砂粒	口縁1/3残、外面煤付着
-97	土壙16	弥生土器	甕		3.95		内黒褐色、外灰黄褐色	2㎜以下砂粒	外面煤付着・工具ナデ・刻痕
-98	土壙16	弥生土器	台付鉢		11.5		鈍い橙色	2㎜以下砂粒	脚外面縦細ミガキ
60-99	溝1	須恵器	甕	(19.4)			灰色	密、1㎜以下砂粒	口縁1/8残、内外自然釉付着
-100	溝1	弥生土器	甕				鈍い橙色	2㎜以下砂粒	口縁端凹線3条
-101	溝6	弥生土器	高杯		(7.0)		橙色	3㎜以下砂粒	脚1/4残
64-10	A区	弥生土器	壺				鈍い黄橙色	1㎜以下砂粒	頸部凹線3条残
-103	A区	弥生土器	壺				橙色	1㎜以下細砂粒	口縁端凹線4条
-104	A区	弥生土器	甕	(13.6)			鈍い黄橙色	2㎜以下砂粒少	口縁1/6残、外面煤付着
-105	A区	弥生土器	甕	(14.2)			鈍い橙色	2㎜以下砂粒少	口縁小片、外面煤付着
-106	A区	弥生土器	甕				内灰色、外鈍い橙色	2㎜以下砂粒	肩部外面櫛状工具連続刺突痕
-107	A区	弥生土器	甕	(13.5)			鈍い黄橙色	2㎜以下砂粒少	口縁1/6残、外面煤付着
-108	A区	弥生土器	蓋	11.7		4.3	内鈍い橙色、外浅黄橙色	0.5～4㎜砂粒	一部欠損
65-109	B区	縄文土器	鉢				内鈍い橙色、外鈍い黄橙色	2.5㎜以下砂粒	外面楕円(8×18㎜)押型文
-110	B区	縄文土器	鉢				鈍い黄橙色	3㎜以下砂粒	外面上位押型文、内面丁寧ナデ
65-111	B区	縄文土器	鉢				鈍い橙色	2㎜以下砂粒	底部付近破片、内面ナデ
-112	B区	縄文土器	鉢				内鈍い橙色、外鈍い黄橙色	1.5㎜以下砂粒	内面ナデ、外面一部押型文？
66-113	C区	縄文土器	鉢				内黄灰色、外鈍い黄橙色	1㎜以下砂粒	縦方向山形文(4㎝に4条)
-114	C区	瓦	平瓦				灰色	6㎜以下砂粒	最大厚2.8㎝、下面工具ナデ
67-115	D区	須恵器	台付鉢				内灰色、外暗灰黄色	1㎜前後砂粒少	脚端部片、内外面自然釉
-116	D区	弥生土器	台付椀	(15.3)	7.2	7.2	鈍い橙色	0.5～3㎜砂粒	口縁3/4欠損、内面削り後ナデ
-117	D区	備前焼	擂鉢				内鈍い赤褐色、外灰褐色	精密、砂粒少	底部片、卸目12条/2.4㎜

大開遺跡

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(㎝) 口径	低径	器高	色調	胎土	特徴
1	竪穴住居1	土師器	甕				橙色(5YR6/6)	長石、石英	
2	土壙4	磁器	高台碗	11.6	4.7		オリーブ灰色(2.5GY6/1)	精密	施釉
3	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6.5/4)		内外面押型文
4	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、金雲母	内面条痕
5	包含層	縄文土器	深鉢				橙色(5YR7/6)	長石、石英	押型文
6	包含層	弥生土器	甕				橙色(5YR6/6)	長石、石英、赤色土粒	口縁刻目、クシガキ沈線、刺突文
7	包含層	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR6.5/4)	長石、石英、金雲母	口縁部刻目、クシガキ沈線
8	包含層	弥生土器	甕	20.8			にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、金雲母	外面煤付着
9	包含層	弥生土器	甕	23			にぶい橙色(5YR7/4)	長石、石英、金雲母	
10	包含層	弥生土器	壺	17.7			橙色(5YR6/6)	長石、石英	口縁刻目
11	包含層	弥生土器	甕				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英	
12	包含層	弥生土器	甕	14.1			にぶい黄橙色(10YR7.5/4)	長石、石英若干含	
13	包含層	弥生土器	壺	12.4			暗灰色(N3/1)	長石、石英	
14	包含層	弥生土器	直口壺	11.8			橙色(5YR6/6)	胎土精良、長石	
15	包含層	弥生土器	甕				浅黄橙色(10YR8/3)	長石、石英	
16	包含層	土師器	二重口縁壺	14			にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母	肩部波状文
17	包含層	土師器	高杯	15.5			橙色(5YR6/6)	長石、石英	
18	包含層	土師器	高杯				橙色(5YR6/6)	長石、石英、角閃石	
19	包含層	土師器	高杯		13.2		橙色(5YR6/6)	長石、石英	
20	包含層	土師器	高杯		10		浅黄橙色(10YR8/3)	長石、石英、赤色土粒	
21	包含層	土師器	甕	19.6			にぶい橙色(7.5YR5.5/4)	長石、石英	
22	包含層	須恵器	壺				灰色(N6.5/1)	精密	
23	包含層	須恵器	高台付杯				灰色(N5.5/1)	精密	
24	包含層	土師器	羽釜				灰色(N4/1)	精密	

六番丁場遺跡

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(㎝) 口径	低径	器高	色調	胎土	特徴
		縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石	口縁部内面押型文
		縄文土器	甕				にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂粒含	外面ケズリ
1	土壙6	弥生土器	台付鉢				橙色(5YR6/6)	長石、石英	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
2	土壙6	弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/8)	長石、石英、金雲母、角閃石	外面ハケメ、内面ヘラケズリ
3	土壙6	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、雲母、赤色酸化粒	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
4	土壙8	弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/8)	長石、石英多含	外面ハケメ、内面ヘラケズリ
5	土壙9	縄文土器	深鉢				橙色(7.5YR6/6)	石英、雲母	沈線、縄文
6	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英	縄文、ミガキ
7	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英	縄文、ミガキ
8	土壙9	縄文土器	深鉢				浅黄橙色(10YR8/3)	微砂少含	縄文
9	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3.5)	細砂	
10	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	石英、赤色粒	外面荒いナデ、内面ミガキ
11	土壙9	縄文土器	深鉢				暗灰色(N3/1)	細砂	スリ消し縄文
12	土壙9	縄文土器	深鉢				橙色(7.5YR6/6)	長石、石英	外面縄文
13	土壙9	縄文土器	浅鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	微砂、角閃石	
14	土壙9	縄文土器	深鉢				灰褐色(7.5YR6/2)	長石	外面荒いナデ、内面ミガキ
15	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英	擦痕
16	土壙9	縄文土器	深鉢				浅黄橙色(10YR8/3.5)	長石、石英	
17	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6.5/3)	長石	沈線、縄文

18	土壙9	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)	石英、赤褐色粒、雲母	縄文、ミガキ
19	土壙9	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、赤色酸化粒	口縁部に沈線、縄文
20	土壙9	縄文土器	深鉢				褐灰色(10YR4/1)	細砂	
21	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、細砂多含	沈線、縄文
22	土壙9	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)	微砂、角閃石、雲母	口縁部に沈線、縄文
23	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	微砂	口縁部に沈線、縄文
24	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂、菌雲母	外面縄文
25	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6/5)	長石、石英	口縁部に沈線、縄文
26	土壙9	縄文土器	深鉢				橙色(5YR6/6)	長石、石英、角閃石、雲母	口縁部に沈線、縄文
27	土壙9	縄文土器	深鉢				灰褐色(5YR4/2)	長石、雲母	外面縦条痕
28	土壙9	縄文土器	深鉢				褐灰色(10YR4/1)	細砂多含、雲母	外面縄文、内面ミガキ
29	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	角閃石、雲母	外面縄文
30	土壙9	縄文土器	鉢				褐灰色(10YR4/1)	長石、石英	条痕
31	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英	内面ミガキ
32	土壙9	縄文土器	浅鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	砂粒多含、金雲母	内外面条痕
33	土壙9	縄文土器	深鉢				灰黄色(0.5Y7/2)	細砂多含	外面条痕
34	土壙9	縄文土器	浅鉢				灰黄褐色(10YR5/1.5)	細砂、金雲母	外面条痕
35	土壙9	縄文土器	浅鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	砂粒多含、金雲母	内外面条痕
36	土壙9	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂少含、金雲母	
37	土壙9	縄文土器	深鉢				橙色(7.5YR7/6)	長石、石英	底部上げ底
38	溝3	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、金雲母	口縁部煤付着
39	溝3	弥生土器	台付鉢				明赤褐色(2.5YR5/6)	長石、石英、赤褐色粒	円孔
40	溝3	弥生土器	台付鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英	ヘラ描き沈線文
41	包含層	弥生土器	甕				橙色(5YR7/4)	長石、石英	
42	包含層	弥生土器	甕				にぶい黄橙色(10YR6.5/3)	長石、石英、金雲母、角閃石	
43	包含層	土師器	甕				にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英	
44	包含層	土師器	甕					長石、石英、雲母	外面工具ナデ、内面ヘラケズリ
45	包含層	土師器	甕				にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂粒多含	内面ヘラケズリ
46	包含層	須恵器	杯蓋				灰色(5.5/1)	精密	自然釉
47	包含層	須恵器	杯蓋				灰色(N6.5/1)	精密	
48	包含層	須恵器	杯蓋				灰色(N6/1)	精密	
49	包含層	土師器	杯身				灰白色(2.5Y7/1)	密	底面に篦記号
50	包含層	須恵器	高台付杯				灰色(N6.5/1)	精密	篦起こし、貼り付け高台
51	包含層	須恵器	壺				灰色(N5.5/1)	精密	自然釉
52	包含層	弥生土器	壺				黒褐色(10YR3/1)	長石、石英、金雲母、角閃石	ヘラ描き斜格子文
53	包含層	弥生土器	甕				にぶい黄橙色(10YR6.5/3)	長石、石英	内面ヘラケズリ
54	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂少含	円形浮文
55	包含層	弥生土器	高杯				橙色(2.5YR6/6)	長石、石英、金雲母、角閃石	ヘラミガキ
56	包含層	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR7/5)	長石、石英、金雲母、角閃石	
57	包含層	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、金雲母、角閃石	
58	包含層	弥生土器	甕				橙色(5YR7/4)	長石、石英	胴部内面ヘラケズリ
59	包含層	弥生土器	長頸壺				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、雲母、赤色酸化粒	沈線、刺突文、ヘラケズリ
60	包含層	弥生土器	壺				橙色(2.5YR6/8)	長石、石英、金雲母	内面ヘラケズリ
61	包含層	弥生土器	高杯				橙色(2.5YR6/8)	細砂少含	内外面赤色顔料塗布
62	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化粒	
63	包含層	弥生土器					にぶい橙色(7.5YR6.5/4)	長石、石英、赤色酸化粒	
64	包含層	弥生土器	器台				橙色(2.5YR6/8)	長石、石英、金雲母、角閃石	凹線、クシ描き波状文
65	包含層	土師器	高杯				にぶい黄橙色(10YR6.5/4)	長石、石英、赤色酸化粒	
66	包含層	土師器	皿				にぶい橙色(5YR7/4)	精密	
67	包含層	須恵器	甕				灰色(N4/1)	精密	内面あて具痕
68	包含層	土師器	高杯				にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良、長石	
69	包含層	弥生土器	皿				にぶい橙色(7.5YR7.5/3)	精密、細砂少含	
70	包含層	縄文土器					にぶい赤褐色(5YR4/4)	密	押型文
71	包含層	縄文土器	鉢				明赤褐色(5YR5/6)	微砂、角閃石	押型文
72	包含層	縄文土器					橙色(5YR6/6)	密、長石	押型文
73	包含層	縄文土器					橙色(5YR6/6)	密	押型文
74	包含層	縄文土器					橙色(5YR6/6)	密	押型文
75	包含層	縄文土器	鉢				明赤褐色(5YR5/6)	細砂少含	押型文
76	包含層	縄文土器	鉢				くすんだ橙色(7.5YR6/6)	微砂、角閃石	押型文
77	包含層	縄文土器					にぶい赤褐色(5YR5/5)	密、長石若干	押型文
78	包含層	縄文土器					にぶい赤褐色(5YR5/5)	密、長石若干	押型文
79	包含層	縄文土器					にぶい赤褐色(5YR5/5)	密、長石若干	押型文
80	包含層	縄文土器					にぶい赤褐色(5YR5/5)	密、長石若干	押型文
81	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	砂粒少含	押型文
82	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂少含	楕円押型文
83	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	祖砂	繊維多含
84	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂多含	口縁部に縄文
85	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	微砂、雲母、角閃石	口辰部に縄文
86	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)	長石、石英	口辰部に縄文、沈線
87	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/4)	長石、石英	
88	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6.5/4)	微砂、雲母	口縁部内面に縄文
89	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英	口辰部に縄文
90	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英	口縁部外面に縄文
91	包含層	縄文土器	鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂少含	縄文、沈線
92	包含層	縄文土器	鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂少含、雲母	口縁部に縄文
93	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/3)	微砂、雲母、角閃石	口縁部外面に縄文
94	包含層	縄文土器	鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英、雲母、角閃石	縄文、ミガキ
95	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、角閃石	
96	包含層	縄文土器	深鉢				黒色(N2/1)	細砂	条痕
97	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英、褐色粒	条痕
98	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR5.5/2)	長石、石英、雲母、角閃石	ミガキ
99	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR7/4)	長石、石英、雲母	縄文、ミガキ
100	包含層	縄文土器					にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂多含	沈線文
101	包含層	縄文土器	深鉢				黒色(N2/1)	長石	内外面ミガキ
102	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂少含	縄文、沈線
103	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	微砂少含	縄文
104	包含層	縄文土器	深鉢				黒色(2.5Y2/1)	祖砂多含	縄文
105	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂粒多含	縄文

106	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3.5)	長石、石英、角閃石、雲母	縄文
107	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂多含	縄文
108	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂多含	外面縄文
109	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	微砂少含	縄文
110	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英	条痕
111	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒	クシ描き波状文、貼り付け凸帯
112	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化粒	円形浮文、、貼り付け凸帯
113	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英	口辰部刻み目、貼り付け凸帯
114	包含層	弥生土器	甕				橙色(5YR6.5/6)	長石、石英、雲母、赤色酸化粒	
115	包含層	弥生土器	高杯				浅黄橙色(10YR7.5/3)	長石、石英、雲母	内面ヘラミガキ
116	包含層	弥生土器	高杯				橙色(5YR7/6)	長石、石英、赤色酸化粒	
117	包含層	弥生土器	高杯				にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、金雲母	内面ヘラミガキ
118	包含層	弥生土器	台付鉢				にぶい橙色(7.5YR7/6)	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒	
119	包含層	弥生土器	高杯				橙色(5YR7/6)	長石、石英	
120	包含層	弥生土器	器台				橙色(5YR7/6)	長石、石英、赤色酸化粒	凹線
121	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英	斜格子文、鋸歯文
122	包含層	弥生土器	壺				灰褐色(7.5YR6/2)	長石、石英	ヘラ描き鋸歯文
123	包含層	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、金雲母	内面ヘラケズリ
124	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(5YR6/5)	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒	
125	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(5YR7/5)	長石、石英、赤色酸化粒	外面ハケメ
126	包含層	弥生土器	甕				明赤褐色(2.5YR5/7)	長石、石英、金雲母	口縁端部凹線
127	包含層	弥生土器	甕				にぶい黄橙色(10YR5/3)	長石、石英、金雲母	口縁部に粘土貼り付け
128	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、金雲母	板状に依る刺突文
129	包含層	弥生土器	鉢				くすんだ橙色(5YR6/6)	長石、石英、金雲母	内面ヘラミガキ
130	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石	クシ描き波状文
131	包含層	弥生土器	甕				にぶい黄橙色(10YR7/4)	長石、石英、赤色酸化粒	
132	包含層	弥生土器	甕				にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、雲母、角閃石	
133	包含層	弥生土器	甕				橙色(5YR6/6)	長石、石英、金雲母	
134	包含層	弥生土器	手捏ね				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化粒	工具ナデ
135	包含層	須恵器	杯身				灰色(N5/1)	密、長石	回転篦起こし、貼り付け高台
136	包含層	須恵器	高杯				灰色(N6/1)	精密、細砂少含	
137	包含層	須恵器	台付鉢				灰色(N6.5/1)	密、細砂少含	
138	包含層	土師器	鉢				暗灰色(N3.5/1)	細砂少含	

九番丁場遺跡

実測図番号	挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	特徴
125	1	竪穴住居1	須恵器	壺				灰色(N5.5/1)	精密	灰釉
35	2	竪穴住居2	須恵器	杯身	11.3		4.1	暗青灰色(5B4/1)	精密	底部ヘラケズリ
62	3	竪穴住居2	弥生土器	高杯				鈍褐色(7.5YR5/3)	微砂、金雲母	体部外面ヘラケズリ
42	4	竪穴住居2	須恵器	高杯		8.5		灰白色(5Y8/1)	精良、細砂少含	方形透かし
32	5	竪穴住居3	須恵器	壺				灰色(N4.5/1)	精密	
33	6	竪穴住居3	須恵器	杯身				灰色(N4/1)	精密、細砂少含	
34	7	竪穴住居3	須恵器	杯身	12.2			黄灰色(2.5Y6.5/1)	密、細砂多含	受部に灰釉
50	8	竪穴住居4	弥生土器	甕	14.2			橙色(5YR6.5/6)	細砂、金雲母	内面ハケメ
45	9	竪穴住居5	弥生土器	壺	23.6			鈍橙色(7.5YR7/4)	砂粒含	内面ヘラミガキ
48	10	竪穴住居5	弥生土器	壺				橙色(5YR6/6)	細砂、金雲母、赤色酸化粒	外面煤付着、内面ヘラケズリ
47	11	竪穴住居5	弥生土器	壺	18.9			橙色(5Y6/6)	細砂多含	胴部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ
49	12	竪穴住居5	弥生土器	甕				灰黄色(10YR5/2)	砂粒、金雲母、角閃石	煤付着
43	13	竪穴住居5	弥生土器	高杯				明赤褐色(2.5YR5/6)	精密、細砂少含	内外面ヘラミガキ
46	14	竪穴住居5	弥生土器	器台				鈍黄橙色(10YR7/3)	砂粒含	鋸歯文
69	15	竪穴住居6	土師器	甕	17.7			鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含	
68	16	竪穴住居6	土師器	甕	15.9			鈍橙色(5YR6/4)	砂粒含	煤付着
67	17	竪穴住居6	土師器	甕	12.8			鈍黄橙色(10YR7/3.5)	粗砂含	
70	18	竪穴住居6	土師器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	粗砂多含、赤色酸化粒	胴部外面ハケ、内面ケズリ
82	19	竪穴住居6	土師器	高杯	13.2			浅黄橙色(10YR8/3)	砂粒、赤色酸化粒	
81	20	竪穴住居6	土師器	高杯				浅黄橙色(10YR8/4)	密、砂粒少含、赤色酸化粒	円孔
71	21	竪穴住居6	須恵器	蓋				灰白色(2.5Y7/1)	精密	内外面ヨコナデ
*110	22	竪穴住居7	弥生土器	壺	11.6			鈍橙色(7.5YR6/4)	密、細砂少含	沈線螺旋状、胴部内面ヘラケズリ
*36	23	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂含、角閃石	口縁部外面線刻
*60	24	竪穴住居7	弥生土器	甕				浅黄橙色(10YR8/4)	砂粒含、雲母	
*59	25	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR6/4)	砂粒含、金雲母	
*61	26	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍黄色(2.5Y6/3)	細砂含、雲母	外ヘラミガキ、内ユビオサエ
*54	27	竪穴住居7	弥生土器	台付鉢		5.1		黄灰色(2.5Y5/1)	細砂、角閃石	
*37	28	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR7/3)	砂粒多含、雲母、角閃石	
9	29	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍橙色(5YR5.5/4)	細砂含、赤色酸化粒	口縁部外面線刻
1	30	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR6/4)	細砂多含、雲母、角閃石	貼付凸帯、口唇部刻目
134	31	竪穴住居7	弥生土器	壺	15.3	8.2	39.6	鈍橙色(7.5YR7/4)	砂粒多含	胴部黒斑、外面ハケメ後ヘラミガキ
3	32	竪穴住居7	弥生土器	壺	13			橙色(5YR6.5/6)	細砂含、褐色酸化粒	内外面ハケメ
30	33	竪穴住居7	弥生土器	壺	15.7			橙色(2.5YR6/8)	粗砂多含、雲母、角閃石	胴部内面ヘラケズリ
4	34	竪穴住居7	弥生土器	壺	12.1	7.5	14.7	鈍橙色(5YR5.6/4)	砂粒多含	円孔2、胴部内面ヘラケズリ
95	35	竪穴住居7	弥生土器	甕	12.8			鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含	煤付着、胴部内面ヘラケズリ
23	36	竪穴住居7	弥生土器	甕	14.4			鈍褐色(7.5YR6/3)	密、粗砂含、雲母、角閃石	外面煤付着、内ヘラケズリ
26	37	竪穴住居7	弥生土器	甕				橙色(5YR6/6)	密、粗砂多含	煤付着
13	38	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR6/4)	砂粒含	煤付着
17	39	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含、金雲母、角閃石	口縁部外面凹線4条
10	40	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/4)	密、細砂少含	口縁部外面凹線4条
2	41	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/3.5)	砂礫少含	煤付着
22	42	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/4)	密、砂粒少含	黒斑
12	43	竪穴住居7	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/2)	砂粒多含、雲母、角閃石	
5	44	竪穴住居7	弥生土器	甕	14			橙色(5YR6/6)	砂、礫多含	煤付着
21	45	竪穴住居7	弥生土器	甕	11.7			黒褐色(2.5Y3/1)	砂粒含、雲母、角閃石	
19	46	竪穴住居7	弥生土器	甕	10.5			鈍橙色(7.5YR6/4)	密、砂粒少含	
96	47	竪穴住居7	弥生土器	甕	13.5			鈍黄橙色(10YR7/3)	細砂少含	煤付着
20	48	竪穴住居7	弥生土器					鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂多含	黒斑
18	49	竪穴住居7	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR7/4)	密、砂粒少含	口縁部外面凹線4条
11	50	竪穴住居7	弥生土器					鈍黄橙色(10YR6/3)	砂粒含、赤色酸化粒	クシ描波状文

15	51	竪穴住居7	弥生土器	高杯				橙色(5YR6/6)	密、細砂少含、雲母	体部内外面ヘラミガキ
28	52	竪穴住居7	弥生土器	鉢				鈍橙色(7.5YR7/4)	砂粒含	体部内外面ヘラミガキ
7	53	竪穴住居7	弥生土器	高杯	15.8	10.6	11.5	鈍橙色(7.5YR7/4)	砂、礫多含	外面ナデ、脚内面ヘラケズリ
8	54	竪穴住居7	弥生土器	台付鉢	9.4	6.4	11.2	鈍橙色(5YR7/5)	砂礫多含	体部内外面ヘラケズリ
97	55	竪穴住居7	弥生土器	高杯				鈍橙色(7.5YR6/4)	砂粒多含	
27	56	竪穴住居7	弥生土器	高杯	19			橙色(5YR6.5/6)	精良	口縁部外面沈線
6	57	竪穴住居7	弥生土器	高杯				橙色(5YR6/8)	良、砂粒少含	
14	58	竪穴住居7	弥生土器	高杯				灰黄褐色(10YR6/2)	良、細砂含、角閃石、雲母	黒斑
24	59	竪穴住居7	弥生土器	高杯				鈍橙色(7.5YR7/4)	精良	
16	60	竪穴住居7	弥生土器	高杯				鈍橙色(7.5YR7/5)	細砂少含	
29	61	竪穴住居7	弥生土器	鉢	7.1	3.4	5.2	鈍黄橙色(10YR7/3)	精良、水漉し粘土	円孔2個一対、黒斑
25	62	竪穴住居7	弥生土器	鉢	11.3	6.2	6.4	橙色(2.5YR5.5/8)	細砂多含	
78	63	竪穴住居8	弥生土器	壺				橙色(7.5YR7/6)	砂粒含、赤色酸化粒	
77	64	竪穴住居8	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含、雲母	胴部内面ヘラケズリ
66	65	竪穴住居8	土師器	高杯		10.7		灰黄褐色(10YR6/2)	砂粒含、雲母、角閃石	煤付着
94	66	竪穴住居10	土師器	杯	13.4	10.8	6.5	鈍橙色(5YR6.5/4)	微砂含	
79	67	竪穴住居10	須恵器	高台付杯	12.4	8.1	4.5	灰色(N6/1)	精密	回転ヘラ切り
93	68	竪穴住居10	須恵器	壺				黄灰色(2.5Y5/1)	砂粒含	
98	69	竪穴住居10	須恵器	杯身				灰色(N7/1)	精密	受部に自然釉
80	70	竪穴住居10	弥生土器	高杯		14.8		鈍黄橙色(10YR7/3)	密、砂粒含、赤色酸化粒	透かし孔5列
*56	71	竪穴住居12	土師器	甕				鈍黄橙色(10YR7/3)	砂粒含、角閃石	
*42	72	竪穴住居13	弥生土器	壺				灰黄色(2.5Y7/2)	細砂多含	ヘラ描き文
*41	73	竪穴住居13	弥生土器	甕		6.8		灰白色(2.5Y8/2)	砂礫多含	外面ハケメ、内面ナデ
*20	74	竪穴住居14	須恵器	杯蓋	14.4		5.1	灰白色(10Y7/1)	砂粒少含	外面灰釉、焼き歪み
*55	75	竪穴住居14	土師器	甕				鈍黄橙色(10YR7/3)	砂礫多含、角閃石	口縁部ヨコナデ
*107	76	竪穴住居15	弥生土器	甕				浅黄橙色(7.5YR8/4)	砂粒含	
*57	77	竪穴住居15	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/2)	砂粒含、雲母、角閃石	外面煤付着
*58	78	竪穴住居15	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR6/4)	砂粒含、角閃石	内面押圧
*25	79	竪穴住居16	須恵器	杯身	12			灰白色(10Y7/1)	砂粒多含	P1出土
*3	80	竪穴住居17	須恵器	杯蓋	15.2		4.5	灰色(N6/1)	砂粒少含	
86	81	掘立柱建物10	須恵器	高台付杯				灰色(N5.5/1)	精密	底部裏面平滑
*76	82	掘立柱建物12	須恵器	杯蓋	13.2			灰白色(5Y7/1)	細砂少含	天井部ヘラケズリ
*75	83	掘立柱建物13	須恵器	甕				灰色(10Y5/1)	砂粒少含、黒色粒	
*74	84	掘立柱建物18	須恵器	杯蓋				青灰色(10BG6/1)	細砂少含	
130	85	土壙9	弥生土器	甕		7.5		鈍褐色(7.5YR5/3)	細砂多含、角閃石	外面ヘラミガキ
56	86	土壙14	弥生土器	高杯				鈍橙色(5YR7/3)	精良	
61	87	土壙15	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR6/4)	微砂少含、赤色酸化粒	外面煤付着
57	88	土壙16	土師器	甕	16.1			橙色(7.5YR7/6)	砂礫含、赤色酸化粒	胴部内面ヘラケズリ
58	89	土壙16	土師器	高杯				橙色(2.5YR7/6)	砂粒多含、雲母	透かし孔3ヶ所
100	90	土壙17	土師器	甕				鈍橙色(7.5YR6/3)	砂礫多含	外面ハケメ
101	91	土壙17	須恵器	杯蓋				灰色(N5/1)	精密	焼き膨れ痕
99	92	土壙20	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/3)	精良、金雲母多含	工具による刻目
84	93	土壙25	土師器	甕	23.5			鈍橙色(5YR6/4)	砂礫多含、雲母、角閃石	外面工具ナデ
83	94	土壙25	土師器	甕	22.6			鈍橙色(7.5YR6/4)	砂礫含、角閃石	口縁部煤付着
74	95	土壙25	土師器	甑		14		橙色(5YR7/6)	砂粒含、雲母	煤付着
73	96	土壙25	須恵器	杯身				灰白色(2.5Y7/1.5)	精密	底部ヘラ切り
72	97	土壙25	須恵器	杯蓋				灰色(N4.5/1)	細砂少含	
85	98	土壙25	須恵器	高杯	14.3	8.9	9.3	灰色(N5.5/1)	精密	歪み有り
*101	99	土壙33	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含、雲母	
*95	100	土壙37	須恵器	壺				灰色(7.5Y6/1～5/1)	細砂少含	
*96	101	土壙37	須恵器	長頸壺	7.6			灰白色(2.5Y8/1)	細砂少含	自然釉
*94	102	土壙37	須恵器	杯(高台)				灰色(7.5Y5/1)	砂粒少含	
*66	103	土壙38	須恵器	杯蓋				灰白色(2.5Y7/1)	細砂少含	
*91	104	土壙39	須恵器	高台付杯				灰色(7.5Y6/1)	細砂含	
*92	105	土壙39	須恵器	杯身				灰白色(N7/1)	砂粒含	
*52	106	土壙39	土師器	甕				鈍黄橙色(10YR6/3)	砂粒含、角閃石	外面押圧、内面ナデ
*98	107	土壙39	土師器	甕				灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂含、角閃石	外面押圧、内面ナデ
*68	108	土壙40	須恵器	杯蓋				灰色(N5/1)	細砂含	
*67	109	土壙40	須恵器					灰白色(2.5Y7/1)	細砂含	クシ描波状文
*97	110	土壙41	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	粗砂含	
*100	111	土壙42	弥生土器	甕				鈍黄橙色(7.5YR7/4)	砂礫含、雲母	外面ハケメ、内面ヘラミガキ
*104	112	土壙46	弥生土器	壺				浅黄橙色(10YR8/3)	砂粒含、雲母	ヘラ描沈線文、円形浮文
*22	113	土壙47	須恵器	杯蓋	13		4.3	灰白色(2.5Y7/1)	精密、細砂少含	頂部ヘラケズリ
*39	114	土壙47	弥生土器	壺				黄灰色(2.5Y4/1)	粗砂多含	
*111	115	土壙47		カマド				橙色(5YR7/8)	精良、礫少含	粘土輪積み形成
*103	116	土壙50	土師器					橙色(5YR7/6)	砂粒多含	
*102	117	土壙50	弥生土器					橙色(5YR7/6)	砂粒含、角閃石	
*31	118	土壙52	須恵器	碗	10.2			灰白色(10Y7/1)	砂礫多含	自然釉
*23	119	土壙55	須恵器	杯身	11.8			灰白色(7.5Y7/1)	礫少含、細砂含	
*24	120	土壙55	須恵器	高杯?				灰色(10Y6/1)	礫少含、細砂多含	自然釉
*26	121	土壙58	須恵器	杯身				灰色(N5/1)	礫多含、細砂少含	
*9	122	土壙61	須恵器	杯				青灰色(5B5/1)	礫多含、細砂少含	
*85	123	土壙62	縄文土器					鈍黄橙色(10YR7/4)	砂礫多含	楕円押形文
*88	124	土壙62	縄文土器					鈍黄橙色(10YR6/3)	砂礫多含	山形押形文
*86	125	土壙62	縄文土器					鈍黄橙色(10YR7/3)	砂礫多含、雲母	楕円押形文
*87	126	土壙62	縄文土器					橙色(7.5YR6/6)	砂礫多含、雲母	楕円押形文
*80	127	土壙63	土師器	甕				鈍黄橙色(10YR7/4)	砂礫含、雲母	
132	128	溝3	備前焼	壺				灰褐色(5YR4/2)	精密	肩部に波状文、自然釉
133	129	溝5	須恵器	高台付杯				灰色(N5.5/1)	密、細砂含	
131	130	溝9	弥生土器	甕				鈍黄橙色(7.5YR6.5/4)	精良、砂礫含	沈線多条、煤付着
108	131	溝11	弥生土器	器台				鈍褐色(7.5YR6/3)	砂粒含、金雲母	凹線、波状文
107	132	溝11	土師器	皿				明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂多含	
*30	133	溝23	土師器	羽釜				淡赤橙色(2.5YR7/3)	礫多含、細砂少含	焼成不良
*29	134	溝23	須恵器	杯蓋	14.2			灰色(N5/1)	砂礫多含	口縁端部自然釉
*28	135	溝13	須恵器	杯蓋				黄灰色(2.5Y5/1)	砂礫少含	
85	136	溝15	須恵器	甕	21			灰色(N5/1)	精密	外面タタキ後カキメ
*45	137	溝17	弥生土器	壺	11.9			鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含、角閃石	頸部貼付凸帯
*44	138	溝17	弥生土器	甕	14.8			鈍橙色(7.5YR6/4)	砂礫含	外面ハケメ、内面ヘラミガキ

*46	139	溝17	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR6/4)	砂粒含、角閃石、金雲母	内面ヘラミガキ、ハケメ
*47	140	溝17	弥生土器	甕				灰白色(2.5Y8/2)	砂礫含、角閃石	外面ハケメ、内面押圧
*112	141	溝17	弥生土器	甕				鈍黄橙色(10YR7/3)	砂礫含、角閃石	内外面ハケメ
*48	142	溝17	弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/4)	砂礫含、角閃石	内面ナデ
*49	143	溝17	弥生土器	甕	12			鈍黄橙色(10YR7/2)	砂粒含、金雲母	内外面ハケメ
*113	144	溝17	弥生土器	甕	32			浅黄橙色(10YR8/3)	砂礫含	内外面ハケメ
*50	145	溝17	弥生土器	甕				灰白色(2.5Y8/2)	砂礫含、角閃石	外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ
*51	146	溝17	弥生土器	壺		8.6		鈍黄橙色(10YR6/3)	砂礫含、銀雲母	外面ヘラミガ
*43	147	溝17	弥生土器	壺		8.9		鈍橙色(7.5Y7/4)	砂礫含、角閃石	外面ヘラミガキ、内面押圧
*108	148	製鉄遺構	須恵器	高台付杯				背灰色(5B5/1)	精良、細砂含	
*109	149	製鉄遺構	土師器	甕				橙色(5YR6/6)	砂礫多含、金雲母、角閃石	内面ヘラケズリ
*99	150	製鉄遺構	土師器	甕	20.2			橙色(5YR6/6)	砂礫多含	内面ヘラケズリ
127	151	4区の出土遺物	弥生土器	壺				鈍黄橙色(10YR7/4)	砂粒含	内外面ハケメ
126	152	4区の出土遺物	弥生土器	器台				鈍黄橙色(10YR7/3)	砂粒含、金雲母	円形浮文
128	153	4区の出土遺物	須恵器	高台付杯				灰色(N6/1)	精密	ヘラ切り痕
129	154	4区の出土遺物	須恵器	甕				灰色(N5/1)	細砂少含	自然釉
54	155	1区の出土遺物	縄文土器					鈍橙色(7.5YR6.5/4)	密、細砂含	内外面山形押形文
52	156	1区の出土遺物	弥生土器	甕				灰黄褐色(10YR6/2)	細砂含、雲母	口縁端部僅かに窪む
53	157	1区の出土遺物	土師器	壺				橙色(5YR6/6)	砂粒含、金雲母	内外面ヘラミガキ
55	158	1区の出土遺物	土師器	台付鉢	14	6.2	6.6	鈍黄橙色(10YR7/4)	精良	赤色顔料塗布、内面ヘラミガキ
44	159	1区の出土遺物	土師器		9	6	3	鈍橙色(7.5YR7/4)	精良、細砂含、雲母	貼り付け高台
59	160	1区の出土遺物		椀				灰白色(2.5Y7.5/2)	精密	162と同一個体の可能性大
31	161	1区の出土遺物		椀		6		灰白色(2.5Y7.5/2)	精密	糸切り、煤付着
60	162	1区の出土遺物	弥生土器	壺				橙色(5YR7/6)	砂粒含	内面ヘラミガキ
111	163	2区の出土遺物	弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/8)	細砂含	胴部内面ヘラケズリ
113	164	2区の出土遺物	弥生土器	壺				橙色(5YR6/6)	密、細砂含、赤色酸化粒	
112	165	2区の出土遺物	弥生土器	甕				橙色(5YR6/7)	密、細砂含、金雲母	煤付着
110	166	2区の出土遺物	須恵器	杯蓋				灰色(N4/1)	精密	
114	167	2区の出土遺物	須恵器	杯蓋	13.8			暗青灰色(5B4/1)	精密	重ね焼き痕、自然釉
109	168	2区の出土遺物	須恵器	杯身	13.8			灰色(N6.5/1)	精密	底部外面ヘラケズリ
41	169	2区の出土遺物	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR7/4)	砂礫含	頸部貼付凸帯、口縁部斜格子
40	170	2区の出土遺物	弥生土器	甕				橙色(5YR6/6)	砂粒含、雲母、角閃石	内面ヘラミガキ
75	171	2区の出土遺物	弥生土器	器台				鈍橙色(7.5YR7/4)	砂粒多含、金雲母	三角透かし貫通せず
89	172	2区の出土遺物	弥生土器	壺				鈍橙色(5YR7/5)	砂礫含	
88	173	2区の出土遺物	弥生土器	甕		5.6		鈍橙色(7.5YR6/3)	砂粒含	内面ナデ、煤付着
92	174	2区の出土遺物	弥生土器					浅黄橙色(7.5YR8/3.5)	砂礫含、赤色酸化粒	黒斑
90	175	2区の出土遺物	土師器	甕	18.6			鈍橙色(7.5YR7/5)	細砂多含、金雲母	
91	176	2区の出土遺物	土師器	甕				橙色(2.5YR6/8)	砂礫多含	
38	177	2区の出土遺物	備前焼	壺				灰色(N6.5/1)	精密	肩部カキメ、自然釉
76	178	2区の出土遺物	須恵器	杯蓋				灰色(N6/1)	精密	頂部カキメ
39	179	2区の出土遺物	須恵器	杯蓋	13.8		4.6	灰色(N6/1)	精密	頂部ヘラケズリ
87	180	2区の出土遺物	須恵器	杯蓋				灰色(N5.5/1)	精密	
37	181	2区の出土遺物	須恵器	杯身				灰色(N6.5/1)	精密	焼き膨れ痕、自然釉
36	182	2区の出土遺物	須恵器	杯身				灰色(N5.5/1)	密	
64	183	2区の出土遺物	弥生土器	甕				橙色(5YR7/4)	粗砂多含	クシ描沈線
63	184	2区の出土遺物	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂含	円形浮文
65	185	2区の出土遺物	土師器	甕				橙色(5YR6/6)	砂粒多含、雲母	
121	186	3区の出土遺物	須恵器	杯蓋				灰黄褐色(10YR5/2)	精密	自然釉
120	187	3区の出土遺物	須恵器	高台付杯				灰色(N6/1)	密、砂粒少含	底部にヘラ切り痕
123	188	3区の出土遺物	須恵器	杯身				灰色(N5.5/1)	精密	
124	189	3区の出土遺物	須恵器	提瓶				灰色(N6/1)	密、砂粒少含	
122	190	3区の出土遺物	磁器	碗				明オリーブ灰色	緻密	貫入
*84	191	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯蓋				灰色(N7/1)	砂粒含、黒色粒	頂部ヘラケズリ
*21	192	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯蓋	13		4.9	灰色(7.5Y6/1)	砂礫多含	頂部ヘラケズリ、歪み著
*2	193	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯蓋	17.6		2.2	灰色(N6/1)	密、砂礫多含	頂部ヘラケズリ
*82	194	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯身	10.3	5.3	3.9	灰色(7.5Y7/1)	砂粒含	底部ヘラケズリ
*17	195	6区・8区・9区の出土遺物	土師器	杯身	13.4	7.2	3.5	赤橙色(10R6/6)	砂礫多含	
*4	196	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯身	13.8	7.8	3.5	灰白色(10Y8/1)	砂礫多含	底部ヘラ切り痕
*83	197	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	高台付杯				灰色(N6/1)	砂礫多含	
*1	198	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	高台付杯		9.4		灰色(N6/1)	密、砂粒多含	底部ヘラ切り、ヘラ記号
*89	199	6区・8区・9区の出土遺物	縄文土器					鈍黄橙色(10YR7/3)	砂粒含	山形押形文
*90	200	6区・8区・9区の出土遺物	縄文土器					鈍黄橙色(7.5YR6/4)	砂粒含、雲母	内外面山形押形文
*65	201	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯蓋	13.8			黄灰色(2.5Y6/1)	細砂含	
*5	202	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	高台付杯				灰色(N6/1)	細砂多、礫少含	底部ヘラ切り痕
*71	203	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	高台付杯				黄灰色(2.5Y6/1)	砂粒含、角閃石	
*69	204	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	高台付杯	17.8	11.2	6.9	灰色(5Y6/1)	細砂含、黒色粒	
*10	205	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	杯身				青灰色(10BG5/1)	細砂多、礫少含	底部ヘラ切り痕
*72	206	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	壺				灰白色(5Y7/1)	細砂含、黒色粒	肩部に自然釉
*73	207	6区・8区・9区の出土遺物	須恵器	甕				灰色(5Y6/1)	砂礫含	カキメ、タタキ目
*78	208	6区・8区・9区の出土遺物	弥生土器	壺				浅黄色(2.5Y7/3)	砂粒含、金雲母	円形浮文、クシ描文
*77	209	6区・8区・9区の出土遺物	弥生土器	器台				黄橙色(10YR8/3)	砂粒含、金雲母	貼付凸帯
*79	210	6区・8区・9区の出土遺物	弥生土器	器台				鈍黄橙色(10YR7/2)	砂粒含、金雲母、銀雲母	円形浮文、クシ描波状文

表3　石製品・土製品・鉄製品・ガラス製品一覧表

立石遺跡

図番号	出土遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存率	備考
				長さ	幅	厚み			
17-S 1	竪穴住居 2	石鏃	サヌカイト	42	20	4.5	3.4		
63-S 2	溝 7	磨製石包丁		54	38.5	8	28.7		
66-S 3	包含層	管玉		36.5	11.3		4.5	完形	

大開遺跡

図番号	出土遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存率	備考
				長さ	幅	厚み			
73-S 1	竪穴住居 1	台石		464	238	102	17500	完形	
82-S 2	包含層	局部磨製石	ガラス質流紋岩	191.5	71	33.5	686.9	完形	縄文時代
82-S 3	包含層	石包丁	流紋岩(緑色)	129.5	715	15	206.4	完形	磨製の未製品
82-S 4	包含層	磨製石包丁	流紋岩	105.5	45	9.5	61.1		溶結凝灰岩？

六番丁場遺跡

図番号	出土遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存率	備考
				長さ	幅	厚み			
103-S 1	溝 3	磨製石包丁	流紋岩	63	38.5	6	18.2		
106-S 2	包含層	磨製石斧	結晶片岩	77	57.5	24	116.6		
107-S 3	包含層	石包丁		80.5	59.5	10.5	54.5		磨製の未製品
110-S 4	包含層	尖頭器	サヌカイト	106	34.5	13	43	完形	縄文時代
110-S 5	包含層	スクレイパー	流紋岩	88.5	34.5	11	39.5	完形	
110-S 6	包含層		角閃石片岩	100	36.5	9	44.2		
110-S 7	包含層	磨製石包丁		68	43	5.5	44.2		
110-S 8	包含層	磨製石斧	溶結凝灰岩	60.5	53.5	24	105.2		
110-S 9	包含層	敲石	玢岩	97.5	75	54	557.5	完形	

九番丁場遺跡

図番号	出土遺構名	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存率	備考
				長さ	幅	厚み			
120-S 1	竪穴住居 1	石鏃	サヌカイト	30	18	4	1.7	完形	
121-S 2	竪穴住居 2	台石		351.5	254.5	119	18000	完形	
122-S 3	竪穴住居 3	台石		413.5	237	87	10500		
130-S 4	竪穴住居 7	磨製石包丁		52	43	6.2	18.4		
130-S 5	竪穴住居 7	磨製石斧		84.5	57	42.5	267.9		
130-S 6	竪穴住居 7	玉	碧玉	28.5	17	14.3	11.7	完形	未製品
130-S 7	竪穴住居 7	石鏃		19	13	3.3	0.4		
185-S 8	土壙25	台石		307.5	180.5	56	4295	完形品	金床石
219-S 9	土壙62		サヌカイト	57.5	25	5.5	7.7		
232-S10	溝 3	石鏃	サヌカイト	20	12.5	4.2	1.1	完形	
232-S11	溝 9	石錘	サヌカイト	21.5	16	3.7	0.9	完形	
242-S12	溝17	石鏃	サヌカイト	21	17	4	1.1		
242-S13	溝17	磨製石包丁	流紋岩	39	34.5	3.5	4.9		
250-S14	溝25	敲石	角閃石安山岩	74.5	63.5	58	366.5	完形	
256-S15	包含層	敲石		90	85	41	481.9		
256-S16	包含層	磨製石斧		121.5	66	39.5	548		
259-S17	包含層	石包丁		100	57.5	11.5	82.7		未製品
259-S18	包含層	砥石		43.5	57.5	39	149.3		
259-S19	包含層	管玉		12.5	9	8	1.35		
262-S20	包含層	石鏃	サヌカイト	21	20	4.3	0.8		
262-S21	包含層	石鏃	サヌカイト	23	17.5	4.5	1.2		
262-S22	包含層	石鏃	サヌカイト	20.5	17	2.8	1.5		
262-S23	包含層	石鏃	サヌカイト	19.4	17.5	3.2	1		
262-S24	包含層	石鏃	サヌカイト	31.5	23.5	5.4	3.8		
262-S25	包含層	石鏃	サヌカイト	29.5	16	3	1.6		
262-S26	包含層	フレイク	サヌカイト	46	42	5	12.6		
262-S27	包含層	磨製石包丁	流紋岩	39	39.5	63	14.9		
262-S28	包含層	磨製石包丁	流紋岩	65.5	55	5	29.5		
130-C 1	竪穴住居 7	人形土製品	粘土	60.5	32.5	15.5		完形	
253-C 2	製鉄遺構	羽口	粘土						
253-M 1	製鉄遺構	鉄滓		28	58	19			流出孔滓
253-M 2	製鉄遺構	鉄滓		50	40	20			流出孔滓
262-M 3	柱穴	紡錘車	鉄	13	49		12.93		
262-M 4	柱穴	紡錘車	鉄	64	48		31.96		
130-G 1	竪穴住居 7	管玉	ガラス	22	5.7	5.5	1.69	完形	

表 4　新旧遺構名対照表

立石遺跡

報告書遺構名	調査時遺構名	図 番 号
竪穴住居 1	A区No 2	第17図
竪穴住居 2	A区No 1 ・S1-01	第17図
建物 1	B区No13	第36図
竪穴住居 3	B区No 2 ・S1-03	第19図
竪穴住居 4	B区No 1 ・S1-02	第20図
竪穴住居 5	B区No 3 ・S1-04	第21図
竪穴住居 6	C区No 1 ・S1-05	第23図
竪穴住居 7	D区No 1 ・S1-06	第24図
掘立柱建物 1	A区No 3	第25図
掘立柱建物 2	A区No 4	第26図
掘立柱建物 3	A区No 5	第27図
掘立柱建物 4	B区No 5	第28図
掘立柱建物 5	B区No 4	第29図
掘立柱建物 6	B区No 6 ・SB-03	第30図
掘立柱建物 7	B区No14	第31図
掘立柱建物 8	C区No 2 ・SB-01	第32図
掘立柱建物 9	D区No 2	第33図
掘立柱建物10	E区No 2	第34図
掘立柱建物11	E区No 1	第35図
鍛冶炉 1	A区土壙 1	第37図
土壙 1	A区No 6 ・土壙 2	第38図
土壙 2	A区No12・SK-03	第39図
土壙 3	A区No18・SK-04	第40図
土壙 4	A区No 7 ・SK-06	第41図
土壙 5	A区No13・SK-05	第42図
土壙 6	A区No 9 ・土壙 6	第44図
土壙 7	A区No 8 ・SK-07	第45図
土壙 8	A区No10	第46図
土壙 9	A区No11・SK-10	第47図
土壙10	A区No14・SK-08	第48図
土壙11	A区No15	第49図
土壙12	B区No 7 ・SK-16	第50図
土壙13	B区No 8 ・SK-15	第52図
土壙14	B区No 9 ・SK-17	第53図
土壙15	B区No11・SK-18	第54図
土壙16	B区No10・SK-16	第55図
土壙17	C区ＳＫ-20	第56図
土壙18	D区No 6 ・SK-01	第57図
土壙19	D区No 5 ・SK-03	第58図
土壙20	D区No 4 ・SK-02	第59図
溝 1	A区No16・SD-01	第60図
溝 2	A区ＳＤ-02	第図
溝 3	A区SD-02	第図
溝 4	A区No19・SD-03	第61図
溝 5	A区No20・SD-04	第61図
溝 6	A区No17・SD-05	第61図
溝 7	A区No12	第63図
溝 8	A区No 3	第62図

大開遺跡

報告書遺構名	調査時遺構名	図 番 号
竪穴住居 1	1区住居址 1	第73図
掘立柱建物 1	2区建物 1	第74図
掘立柱建物 2	2区建物 2	第75図
土壙 1	2区土壙 2	第76図
土壙 2	2区土壙 5	第76図
土壙 3	3区土壙 3	第76図
土壙 4	3区土壙 4	第77図
土壙 5	3区	第78図
土壙 6	3区土壙 1	第79図
風倒木 1	2区風倒木痕 2	第図
風倒木 2	3区風倒木痕 1	第80図

六番丁場遺跡

報告書遺構名	調査時遺構名	図 番 号
掘立柱建物 1	1区建物 4	第89図
掘立柱建物 2	1区建物 5	第90図
掘立柱建物 3	2区建物 3	第91図
掘立柱建物 4	4区	第92図
土壙 1	1区土壙 2	第93図
土壙 2	2区土壙 1	第94図
土壙 3	3区	第95図
土壙 4	3区	第96図
土壙 5	3区土壙 6	第図
土壙 6	3区土壙 4	第97図
土壙 7	3区土壙 3	第98図
土壙 8	3区土壙 5	第98図
土壙 9	3区土壙 2	第100図
溝 1	1区溝 2	第102図
溝 2	1区溝 3	第102図
溝 3	3区溝 1	第103図

九番丁場遺跡

報告書遺構名	調査時遺構名	図 番 号
竪穴住居 1	4区 3	第120図
竪穴住居 2	1区住居址 2	第121図
竪穴住居 3	1区住居址 1	第122図
竪穴住居 4	1区住居址 4	第23図
竪穴住居 5	1区住居址 3	第124図
竪穴住居 6	2区住居址 9	第125図
竪穴住居 7	2区住居址 8	第126図
竪穴住居 8	2区住居址 6	第131図
竪穴住居 9	2区住居址10	第132図
竪穴住居10	2区住居址 7	第133図
竪穴住居11	8区住居址 7	第134図
竪穴住居12	8区住居址 6	第135図
竪穴住居13	9区住居址 4	第136図
竪穴住居14	9区住居址 3	第137図
竪穴住居15	9区住居址 5	第138図
竪穴住居16	9区住居址 2	第139図
竪穴住居17	6区住居址 1	第140図
掘立柱建物 1	1区建物 5	第141図
掘立柱建物 2	1区建物 1	第142図
掘立柱建物 3	1区建物 2	第143図
掘立柱建物 4	1区建物 3	第144図
掘立柱建物 5	1区建物 4	第145図
掘立柱建物 6	1区建物 6	第146図
掘立柱建物 7	1区建物 7	第147図
掘立柱建物 8	1区建物 8	第148図
掘立柱建物 9	1区建物 9	第149図
掘立柱建物10	2区建物10	第150図
掘立柱建物11	3区建物 9	第151図
掘立柱建物12	8区建物 8	第152図
掘立柱建物13	8区建物 9	第153図
掘立柱建物14	9区建物10	第154図
掘立柱建物15	9区建物11	第155図
掘立柱建物16	9区建物 6	第156図
掘立柱建物17	9区建物 5	第157図
掘立柱建物18	9区建物 4	第158図
掘立柱建物19	9区建物 3	第159図
掘立柱建物20	9区建物 2	第160図
掘立柱建物21	6区建物 7	第161図
掘立柱建物22	6区建物 1	第162図
土壙 1	4区 1	第163図
土壙 2	4区29	第164図
土壙 3	4区21	第165図
土壙 4	4区 6	第166図
土壙 5	4区19	第167図
土壙 6	4区18	第168図
土壙 7	4区16	第169図
土壙 8	4区 5	第107図
土壙 9	4区17	第171図
土壙10	4区 2	第172図
土壙11	4区 1	第173図
土壙12	1区土壙 4	第174図
土壙13	1区土壙 3	第174図
土壙14	1区土壙 1	第175図
土壙15	1区土壙 5	第175図
土壙16	1区土壙 2	第176図
土壙17	2区土壙16	第177図
土壙18	2区土壙18	第178図
土壙19	2区土壙17	第179図
土壙20	2区土壙14	第180図
土壙21	2区土壙12	第181図
土壙22	2区土壙 8	第182図
土壙23	2区土壙15	第183図
土壙24	2区土壙10	第184図
土壙25	2区土壙 9	第185図
土壙26	2区土壙13	第186図
土壙27	3区土壙12	第187図
土壙28	3区 3	第188図
土壙29	3区11	第189図
土壙30	3区 6	第190図
土壙31	3区 8	第191図
土壙32	3区16	第192図
土壙33	8区土壙43	第193図
土壙34	8区土壙44	第193図
土壙35	8区土壙45	第194図
土壙36	8区土壙46	第194図
土壙37	8区土壙41	第195図
土壙38	8区土壙42	第195図
土壙39	8区土壙40	第196図
土壙40	8区土壙47	第197図
土壙41	8区土壙37	第198図
土壙42	8区土壙48	第199図
土壙43	5区土壙39	第200図
土壙44	9区土壙31	第201図
土壙45	9区土壙35	第202図
土壙46	9区土壙34	第203図
土壙47	9区土壙36	第204図
土壙48	9区土壙32	第205図
土壙49	9区土壙49	第206図
土壙50	9区土壙24	第207図
土壙51	9区土壙25	第208図
土壙52	9区土壙21	第209図
土壙53	9区土壙23	第210図
土壙54	9区土壙22	第211図
土壙55	9区土壙20	第212図
土壙56	9区土壙19	第213図
土壙57	9区土壙17	第214図
土壙58	9区土壙18	第215図
土壙59	6区土壙11	第216図
土壙60	6区土壙13	第217図
土壙61	6区土壙14	第218図
土壙62	6区土壙12	第219図
土壙63	6区土壙38	第220図
土壙64	6区土壙16	第221図
土壙65	6区土壙15	第222図
土壙66	6区土壙 6	第223図
土壙67	6区土壙 7	第224図
土壙68	6区土壙 8	第225図
土壙69	6区土壙 9	第226図
土壙70	6区土壙10	第227図
溝 1	4区23	第228図
溝 2	4区22	第228図
溝 3	4区26	第228図
溝 4	4区14	第230図
溝 5	4区25	第228図
溝 6	4区 8	第図
溝 7	4区20	第233図
溝 8	4区 4	第231図
溝 9	4区 9 ・1区溝 1	第234図
溝10	4区28・1区溝 2	第235図
溝11	2区溝 6	第236図
溝12	2区溝 8	第237図
溝13	2区溝 4	第238図
溝14	2区溝 3	第239図
溝15	2区溝 7	第240図
溝16	3区溝 2	第241図
溝17	8区溝 9	第242図
溝18	8区溝 8	第244図
溝19	9区溝 7	第245図
溝20	9区溝11	第246図
溝21	9区溝 5	第247図
溝22	9区溝 6	第248図
溝23	9区溝 1	第237図
溝24	6区溝状 2	第249図
溝25	6区溝状 1	第217図
製鉄遺構	製鉄遺構	第251・252図
被熱遺構	火処	第255図

付載　九番丁場遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

概要

8世紀末に属する九番丁場遺跡出土製鉄関連遺物（砂鉄、炉壁、鉄滓）を調査して次の点が明らかになった。（1）製鉄原料は高チタン（Ti）含有の塩基性砂鉄である。（2）砂鉄製錬滓の化学組成は前述砂鉄の投入操業で矛盾のない成分系であった。すなわち鉄滓の鉱物組成は、ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）とイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）を晶出する砂鉄製錬滓に分類され、化学組成は砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）20%台、バナジウム（V）0.30%台を含有し、酸化マンガン（MnO）1.0%台の高めを特徴とする。（3）炉材粘土は、鉄分（Fe_2O_3）1.16%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）15.7%と両者は低めで、自媒剤となる塩基性成分（CaO＋MgO）は1.11%含有材が充当される。耐火度は、1,275℃を呈する一般性状粘土であった。在地賦存の粘土であろう。

1　いきさつ

遺跡は岡山県苫田郡鏡野町布原に所在する。国道179号バイパス建設に伴う発掘調査で製鉄遺構が検出された。両側に排滓場を設けた箱型炉で8世紀末が比定される。当製鉄炉周辺から出土した製鉄関連遺物を通して当時の鉄生産の実態を把握する目的から金属学的調査を行った。

2　調査方法

2－1　供試材

Table. 1に供試材の履歴と調査項目を示す。

2－2　調査項目

①肉眼観察、②マクロ組織、③顕微鏡組織、④ビッカース断面硬度、⑤化学組成分析。

3　調査結果

KBN－1、2、3　砂鉄

①肉眼観察：3種類の供試材砂鉄は製鉄炉を中心にメッシュを組んで採取してあるので一括して述べる。粒径は、細粒でかつバラツキをもつ砂鉄である。色調は黒色で、やや光沢をもつ。製鉄炉床からの採取品なので炉壁粉や砂粒などの混入物を多く含む。

②マクロ組織：Photo. 6の3枚に示す。3種の砂鉄は、粒径がそれぞれに変動をもつ。上段にあるKBN－1砂鉄は、0.05～0.1㎜の粒径で、平均的には0.1㎜程度の粒子が多い。中段のKBN－2は、0.05～0.6㎜粒径のバラツキをもつが、ここでも平均的粒径は0.1㎜径である。下段KBN－3砂鉄は、0.04～0.3㎜粒径と、前述したKBN－1、2と比較して微細化傾向が強くなり、平均粒径も0.1㎜を割る結果となる。以上、3種の砂鉄は粒径変動が顕著であるが、これが何に由来するのか定かでない。

③顕微鏡組織：Photo. 1 の①～⑧、Photo.2の①～⑤に示す。砂鉄の鉱物組成は、全体に多く分布する白色粒子が磁鉄鉱（Magnetite：$Fe_2O_3 \cdot FeO$）粒子、格子組織がチタン鉄鉱（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）粒子である。KBN－１、２には格子状チタン鉄鉱が点在して目につくが、KBN－３の細粒はそれがほとんどなく大部分が磁鉄鉱粒子で占められる。なお、磁鉄鉱粒内に小さく散在する茶黒点は包裏鉱物（輝石、角尖石、石英等）であり、その量は微量で砂鉄粒子内には不純物をあまり含まない。一方、各粒子は摩耗度が少なく、山砂鉄もしくは川砂鉄の粒形を留めている。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。KBN－１、２、３の３種の砂鉄は、ほぼ近似した値をもつ。全鉄分（Total Fe）は55.12～55.61％に対して金属鉄（Metallic Fe）0.01～0.06％、酸化第１鉄（FeO）25.77～26.34％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）49.45～50.66％の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O+Na_2O）7.83～8.45％で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）1.53～1.64％を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）13.80～14.57％は高く、バナジウム（V）0.16～0.22％も高値であり、更に酸化マンガン（MnO）も0.34～0.43％と多くて銅（Cu）は0.001％であった。

KBN－４　炉壁

①肉眼観察：平面が不整楕円形状の炉壁片である。不定方向のスサが多量に認められる。スサは被熱により炭化している。胎土の色調は淡褐色で径１～７㎜程の砂粒・長石粒・石英粒を含む。内面の一部が熱影響を受けて灰白色に変色するが、被熱の度合はごく弱く、上部の破片と推測される。

②顕微鏡組織：Photo. 2 ⑥～⑧に示す。素地は鱗片状の粘土鉱物で、やや角張った形状の細かい混入鉱物（石英・長石の類）が散在する。加熱変化は受けていない。

③化学組成分析：Table. 2 に示す。強熱減量（Ig loss）12.92％と高く、熱影響をあまり受けておらず結晶構造水が保持された状態での分析である。鉄分（Fe_2O_3）は3.18％とさほど高くなく、軟化性は問題なさそうである。しかし酸化アルミニウム（Al_2O_3）は15.74％と低値で耐火性に不利な成分系である。滓と鉄の分離を促す自媒剤となる塩基性成分（CaO＋MgO）は1.11％を含み製鉄炉材としては特別支障のない成分系であろう。

④耐火度：胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、１分間当り10℃の速度で1000℃まで温度上昇させ、以降は４℃に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が1275℃であった。成分系を反映して、製鉄炉炉壁としてはやや耐火性が低めの性状であった。

KBN－５　炉壁片

①肉眼観察：内面が被熱により溶融・黒色ガラス質化した炉壁の小破片である。内面表層には部分的に、銀灰色で表面顆粒状の付着滓が認められる。この部分は磁性が強く、炉内に投入された砂鉄が焼結・滓化する。胎土は赤褐色で強く熱影響をうけており、径１～３㎜程の砂粒・長石粒を含み、不定方向のスサ痕も顕著である。

②顕微鏡組織：Photo. 3 ①～⑤に示す。①は内面に付着した滓部である。素地の暗黒色ガラス質滓中に未発達の結晶は、淡茶褐色結晶がウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、白色結晶はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と推定される。②③は炉壁内面の溶融ガラス質部分である。白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、淡褐色片状結晶シュードブルーカイト（Pseudobrookite：$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）が晶出する。⑤⑥は被熱胎土部分で、粘土鉱物は熱影響を受けて非晶質化が進んでいる。

鉱物組成から、塩基性砂鉄を原料として操業した製鉄炉の炉壁片であることは明らかである。

KBN－6　炉内流動滓

①肉眼観察：炉内流動滓の先端付近の破片である。上下に2条の流動単位が認められる。色調は黒灰色で、上面は滑らかな流動状を呈し、破面には僅かに気孔がみられるものの緻密で光沢がある。表面はやや風化気味。側面や下面には炉壁片を多数噛み込んでおるのは炉壁への侵食であろう。

②顕微鏡組織：Photo. 3 ⑥～⑧に示す。鉱物組成は素地の暗黒色ガラス質滓中に、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。塩基性砂鉄を原料とする製錬滓の晶癖である。

③ビッカース断面硬度：Photo 3 .⑧に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は634Hvであった。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される（註1）。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）34.76%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第1鉄（FeO）40.56%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）17.52%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）29.33%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）5.24%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）23.18%、バナジウム（V）0.38%と高く、また酸化マンガン（MnO）も1.21%と高値であった。銅（Cu）%は0.003である。鉄分低く、脈石成分（Ti、V、Mn）の高い特徴を示す。塩基性砂鉄を原料とする製錬滓に分類される。

KBN－7　炉内流動滓

①肉眼観察：不定形で凹凸の顕著な滓片である。凹部には淡褐色の炉壁片を多数噛み込んでいる。また細かい木炭根の凹凸も著しい。炉内炉壁近くの木炭間を滴下して形成された滓であろう。

②顕微鏡組織：Photo. 4 ①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

③ビッカース断面硬度：Photo. 4 ①に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は640Hvであった。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）33.52%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07%、酸化第1鉄（FeO）37.17%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）6.52%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）33.13%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）4.85%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）20.88%、バナジウム（V）0.37%と高く、酸化マンガン（MnO）も1.05%と高値であった。銅（Cu）は0.002%である。KBN－6炉外流出滓と類似する成分傾向の砂鉄製錬滓である。

KBN－8　炉底塊

①肉眼観察：平面不整方形を呈する炉底塊片である。上下面は自然面であるが、側面4面は破面である。上下面とも全面に炉壁片や小礫・砂粒の付着が顕著である。少なくとも上面は2次的な付着であろう。滓の色調は暗灰色で破面は強い光沢を持つ。径1～4㎜程の気孔が散在するが緻密な滓であ

る。

②顕微鏡組織：Photo. 4 ④～⑧に示す。鉱物組成は素地の暗黒色ガラス質滓中に、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。また⑤には砂鉄粒子痕跡が残存して明瞭に砂鉄製錬滓を表明する。

③ビッカース断面硬度：Photo. 4 ④に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は642Hvであった。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）34.00%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.26%、酸化第1鉄（FeO）36.52%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）7.65%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）30.43%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.76%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）23.10%、バナジウム（V）0.30%と高く、酸化マンガン（MnO）も1.16%と高値であった。銅（Cu）は0.003%である。KBN－6・7と同様の成分傾向を示す砂鉄製錬滓である。

KBN－9　流出孔滓

①肉眼観察：断面弧状で流出孔の形状を一部留める流出孔滓片である。表面は細かい気孔が散在し、木炭痕を数個所残す。径1～5㎜程の気孔が散在するが緻密な滓である。色調は灰色で表層はやや風化気味である。

②顕微鏡組織：Photo. 5 ①～③に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。またごく微細な金属鉄粒が僅かに散在する。

③ビッカース断面硬度：Photo. 5 ①に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は660Hvであった。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。

④化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）38.99%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.20%、酸化第1鉄（FeO）44.39%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）6.13%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）31.35%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）3.96%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）15.75%、バナジウム（V）0.25%、また酸化マンガン（MnO）0.75%、銅（Cu）は0.016%とやや高めである。

塩基性砂鉄を原料とする製錬滓に分類される。しかし、他の出土鉄滓の化学組成と比較すると、僅かに鉄分高めで、脈石成分の低い傾向が認められる。更に銅が高めの数値を示すことから、他の試料とは異なる操業回の派生物の可能性をもち、やや成分が異なる砂鉄を原料とした事が指摘できる。

KBN－10　炉外流出滓

①肉眼観察：偏平な炉外流出滓片である。側面5面は破面。上面は皺状の流動痕が顕著である。破面は光沢が強く、上層側に気孔が集中するのが認められる。下面は木炭痕による凹凸や炉壁粉の噛み込みが著しい。滓の色調は上面が黒灰色、裏面が灰白色でやや風化気味である。

②顕微鏡組織：Photo.5④～⑧に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤラ

イト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。送風孔近傍の高温化された滓の晶癖である。

③ビッカース断面硬度：Photo. 5④に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は620Hvであった。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。

④化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）30.29%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.15%、酸化第1鉄（FeO）34.86%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）4.35%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）35.44%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）3.23%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）22.20%、バナジウム（V）0.35%と高く、酸化マンガン（MnO）は1.18%と高値であった。銅（Cu）は0.001%である。KBN－6～8と同様の成分傾向を示す砂鉄製錬滓である。

4　まとめ

〈1〉調査した出土砂鉄（KBN－1～3）は、いずれも近似した成分傾向を示す塩基性砂鉄であった。このうちKBN－3は細粒の割合が高いが、成分的な違いはほとんど認められない。

またこれらの砂鉄が出土鉄滓（KBN－6～8・10）の原料と想定しても、成分傾向がよく一致する。ただし前述したようにKBN－9の化学組成は、他の出土鉄滓と僅かに異なる傾向を示すため、やや成分の異なる砂鉄原料も使用したことが推測される。

〈2〉出土鉄滓（KBN－5～10）はすべて高チタン（Ti）含有の塩基性砂鉄を原料とする製錬滓に分類できよう。鉱物組成はウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）に加えイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）を晶出する試料が複数見られ、炉内温度の高温化が窺える（註2）。古代の箱形炉としてはかなり安定した操業が行われたと考えられる。

〈3〉炉壁片（KBN－4）の耐火度は1275℃であった。成分系を反映して、耐火性はやや低めの性状を示した。

〈4〉岡山県下で高チタン（Ti）塩基性砂鉄を製鉄原料とする地域は、鏡野町を含めて吉井川上流で津山盆地周辺である。参考までに過去に調査した大蔵池南遺跡をはじめとした6遺跡の鉄滓分析値をTable.2に記載しておく。いずれも九番丁場遺跡出土製錬滓に近似して高Ti・高Mn・低Cu系である。

註

1　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968　磁鉄鉱は530～600Hv、ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。

2　J.B.Mac chesney and A. Murau：American Mineralogist, 46（1961）, 572
〔イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、シュードブルーカイト（Pseudobrookite：$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）の晶出は$Fe-TiO_2$二元平衡状態図から高温化操業が推定される。〕

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
KBN- 1	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	—	0.9	なし	○	○				○			
KBN- 2	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	—	1.8	なし	○	○				○			
KBN- 3	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	—	3.4	なし	○	○				○			
KBN- 4	九番丁場	製鉄遺構	炉壁	8C末	72×56×22	101.4	なし		○				○	○		
KBN- 5	九番丁場	製鉄遺構	炉壁	8C末	43×29×18	24.0	なし		○							
KBN- 6	九番丁場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	67×33×19	58.6	なし		○	○			○			
KBN- 7	九番丁場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	46×32×25	27.5	なし		○	○			○			
KBN- 8	九番丁場	製鉄遺構	炉底塊	8C末	50×48×64	363.5	なし		○	○			○			
KBN- 9	九番丁場	製鉄遺構	流出孔滓	8C末	44×34×33	72.8	なし		○	○			○			
KBN-10	九番丁場	製鉄遺構	炉外流出滓	8C末	69×55×17	79.7	なし		○	○			○			

第254図　九番丁場遺跡
製鉄遺構　分析資料採集位置図

Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
KBN- 1	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	磁鉄鉱・チタン鉄鉱混在	55.61	50.61	1.53	13.80	0.22	0.43	8.07	0.001	塩基性砂鉄
KBN- 2	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	磁鉄鉱・チタン鉄鉱混在	55.12	49.45	1.6	14.57	0.21	0.43	7.45	0.001	塩基性砂鉄
KBN- 3	九番丁場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	磁鉄鉱、細粒多数混入	55.47	50.66	1.64	14.38	0.16	0.34	7.83	0.001	塩基性砂鉄(地山砂鉄混入か)
KBN- 4	九番丁場	製鉄遺構	炉壁	8C末	粘土鉱物、混入鉱物	3.30	1.16	1.11	0.84	0.013	0.14	79.11	0.002	耐火度：1275℃、耐火性はやや低い
KBN- 5	九番丁場	製鉄遺構	炉壁	8C末	滓部：U+M+I+ps、 胎土：粘土鉱物非晶質化、混入鉱物	—	—	—	—	—	—	—	—	製鉄炉炉壁片
KBN- 6	九番丁場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	U+I+F	34.76	4.56	5.24	23.18	0.38	1.21	29.33	0.003	塩基性砂鉄を原料とする製錬滓
KBN- 7	九番丁場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	U+F	33.52	6.52	4.85	20.88	0.37	1.05	33.13	0.002	塩基性砂鉄を原料とする製錬滓
KBN- 8	九番丁場	製鉄遺構	炉底塊	8C末	U+I+F、砂鉄粒子痕跡	34.00	7.65	2.76	23.10	0.30	1.16	30.43	0.003	塩基性砂鉄を原料とする製錬滓
KBN- 9	九番丁場	製鉄遺構	流出孔滓	8C末	U+F、微小金属鉄散在	38.99	6.13	3.96	15.73	0.25	0.75	31.35	0.016	塩基性砂鉄を原料とする製錬滓
KBN-10	九番丁場	製鉄遺構	炉外流出滓	8C末	U+I	30.29	4.35	3.23	22.20	0.35	1.18	35.44	0.001	塩基性砂鉄を原料とする製錬滓

U：Ulvospinel（$2FeO \cdot TiO_2$）、M：Magnetite（Fe_3O_4）、Ps：Pseudobrookite（$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）、I：Ilmenite（$FeO \cdot TiO_2$）、F：Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、
符号の数字は、第254図の図中の番号と一致する

Table. 2　供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	※ 二酸化珪素 (SiO_2)	※ 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	※ 酸化カルシウム (CaO)	※ 酸化マグネシウム (MgO)	※ 酸化カリウム (K_2O)	※ 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	♯ Ig Loss バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	Σ※ 造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
KBN- 1	九番工場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	55.61	0.02	25.98	50.61	3.53	2.86	0.14	1.39	0.10	0.05	0.43	13.80	0.11	0.01	0.09	0.19	0.22	0.001		8.07	0.145	0.248	
KBN- 2	九番工場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	55.12	0.06	26.34	49.45	3.87	2.80	0.17	1.43	0.11	0.07	0.43	14.57	0.16	0.01	0.09	0.18	0.21	0.001		8.45	0.153	0.264	
KBN- 3	九番工場	製鉄遺構	砂鉄	8C末	55.47	0.01	25.77	50.66	3.91	2.15	0.20	1.44	0.071	0.06	0.34	14.38	0.10	0.01	0.07	0.15	0.16	0.001		7.831	0.141	0.259	
KBN- 4	九番工場	製鉄遺構	炉壁	8C末	3.30	0.02	3.18	1.16	60.11	15.74	0.47	0.64	1.70	0.45	0.14	0.84	0.07	0.05	0.59	♯12.92	0.013	0.002	1275℃	79.11	23.973	0.255	
KBN- 6	九番工場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	34.76	0.04	40.56	4.56	17.52	5.13	4.14	1.10	1.23	0.21	1.21	23.18	0.11	0.02	0.29	0.11	0.38	0.003		29.33	0.844	0.667	
KBN- 7	九番工場	製鉄遺構	炉内流動滓	8C末	33.52	0.07	37.17	6.52	20.54	6.24	3.76	1.09	1.28	0.22	1.05	20.88	0.21	0.02	0.30	0.44	0.37	0.002		33.13	0.988	0.623	
KBN- 8	九番工場	製鉄遺構	炉底塊	8C末	34.00	0.26	36.52	7.65	20.41	5.96	1.94	0.82	1.07	0.23	1.16	23.10	0.23	0.02	0.23	0.11	0.30	0.003		30.43	0.895	0.679	
KBN- 9	九番工場	製鉄遺構	流出孔滓	8C末	38.99	0.20	44.39	6.13	20.27	5.84	2.92	1.04	1.06	0.22	0.75	15.73	0.10	0.10	0.27	0.09	0.25	0.016		31.35	0.804	0.403	
KBN-10	九番工場	製鉄遺構	炉外流出滓	8C末	30.29	0.15	34.86	4.35	22.81	8.26	2.11	1.12	0.85	0.29	1.18	22.20	0.24	0.03	0.27	0.15	0.35	0.001		35.44	1.170	0.733	
2D-901	大蔵池南	鉄滓溜1	砂鉄製錬滓	6C後半～7C初頭	38.26		42.86	6.68	17.6	5.9	1.6	1.2	—	—	1.1	21.80 (28.36)	0.08	<0.01	0.1	—	0.1	0.002		26.3	0.687	0.570	①
2E-901	大蔵池南	鉄滓溜2	砂鉄製錬滓	6C後半～7C初頭	34.07		39.66	4.16	18.1	6.0	2.1	1.1	—	—	1.3	26.8 (19.02)	0.09	0.03	0.2	—	0.21	0.002		27.3	0.801	0.787	①
2F-901	大蔵池南	鉄滓溜3	砂鉄製錬滓	6C後半～7C初頭	36.02		38.30	8.11	10.5	4.9	1.0	1.3	—	—	1.4	35.8 (46.87)	0.11	0.02	0.1	—	0.48	0.002		17.7	0.491	0.994	①
2G-901	大蔵池南	鉄滓溜1、3の周辺	砂鉄製錬滓	6C後半～7C初頭	12.01		2.59	13.81	53.9	14.2	0.2	0.8	—	—	0.4	7.3 (10.84)	0.1	0.03	0.2	—	0.12	0.002		69.1	5.754	0.608	①
2H-901	大蔵池南	廃滓場	砂鉄製錬滓	6C後半～7C初頭	37.21		41.02	7.33	10.8	4.1	0.7	1.2	—	—	1.5	36.3 (46.87)	0.22	<0.01	0.09	—	0.26	0.001		16.8	0.463	0.976	①
2G- 7	稼山古墳群	笹田1号墳羨道部	砂鉄製錬滓	7C後半	32.09		34.36	18.53	14.35	6.41	2.57	0.96	—	—	0.75	19.77	Trace	0.030	1.04	0.15	0.12	Trace		24.29	0.757	0.616	②
Z-824	押入西	SB56	砂鉄製錬滓	6C末～7C	33.3		39.0	4.26	23.94	7.24	0.35	0.75	—	—	3.65	19.27	0.015	0.048	0.22	0.08	0.27	Nil		32.28	0.969	0.579	③
2G-831	天神原	1号墳石室床面	砂鉄製錬滓	6C末～7C前半	38.7		43.0	7.57	24.74	6.26	0.049	0.83	—	—	1.03	15.28	Nil	0.027	0.10	0.06	0.081	0.005		31.88	0.824	0.395	④
A-863	アモウ	SX-116B	砂鉄製錬滓	7C前半	28.4		30.4	6.83	26.6	8.97	5.64	1.58	—	—	1.21	13.93	0.026	0.026	0.25	0.19	0.090	0.003		42.79	1.507	0.4905	⑤
2B- 7	勝央中核工業団地	10号墳羨道	砂鉄製錬滓	6C末～7C前半	34.39		31.87	23.81	16.00	5.22	3.86	0.85	—	—	1.05	14.38	Trace	0.081	2.08	0.19	0.02	Trace		25.93	0.754	0.418	②

註

① 大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬滓・鍛冶滓の検討」『稼山遺跡群Ⅳ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告・4）久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1982
② 大澤正己「岡山県下の古代製鉄研究」『稼山遺跡群Ⅱ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告・2）久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980
③ 大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び小鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集）津山市教育委員会　1984
④ 大澤正己「綾部絲山遺跡出土の鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『絲山遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集）津山市教育委員会　1986
⑤ 大澤正己「樋本遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『樋本遺跡』（岡山県埋蔵文化財調査報告65）岡山県教育委員会　1987

KBN－1
砂鉄
1 ×100　白色粒：磁鉄鉱
(Fe_2O_3・FeO)
2 ×100　中央：格子組織
チタン鉄鉱(FeO・TiO_2)
周囲：白色粒は磁鉄鉱
3 ×100　同上

KBN－2
砂鉄
4 ×100　白色粒：磁鉄鉱
(Fe_2O_3・FeO)
5・6 ×100　同上
7 ×100　中央：格子組織
チタン鉄鉱(FeO・TiO_2)
8 ×100　同上

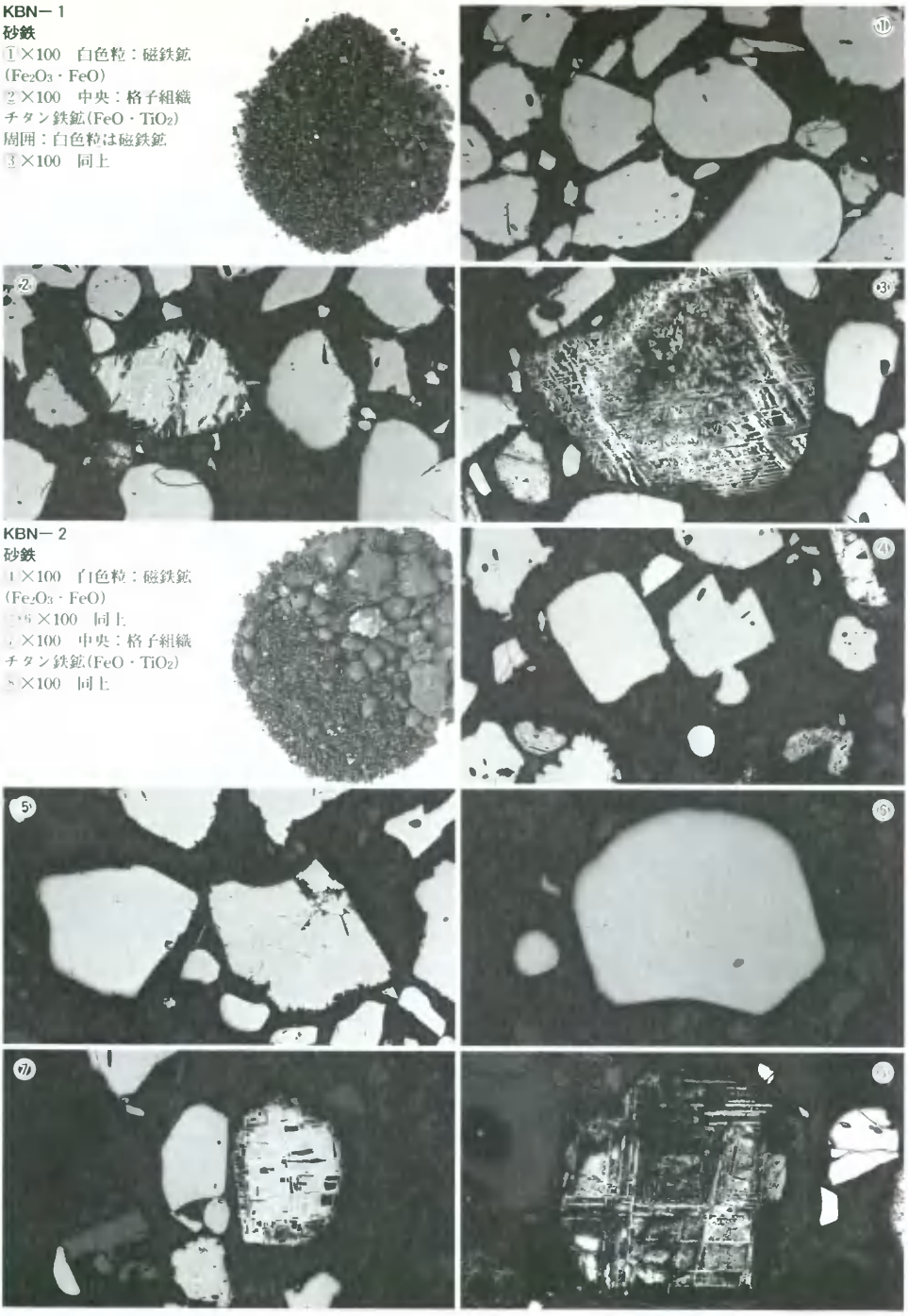
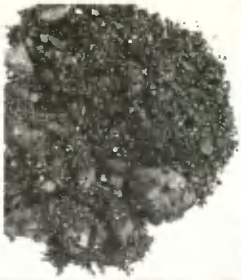
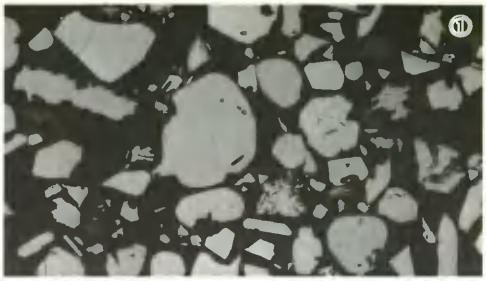
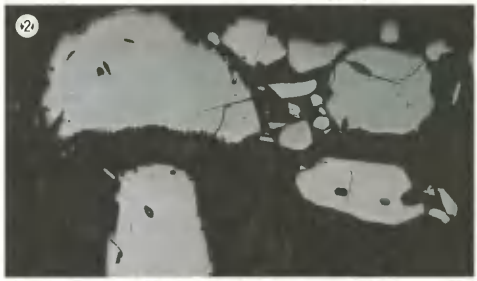


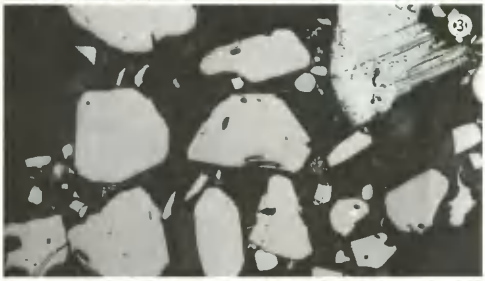
Photo. 1　砂鉄の顕微鏡組織

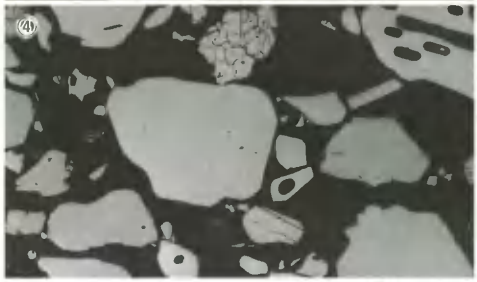
KBN－3
砂鉄
①～⑤×100　白色粒：磁鉄鉱
($Fe_2O_3 \cdot FeO$)



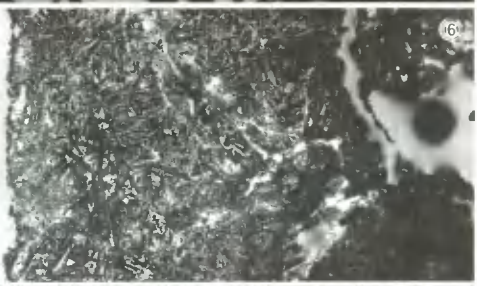


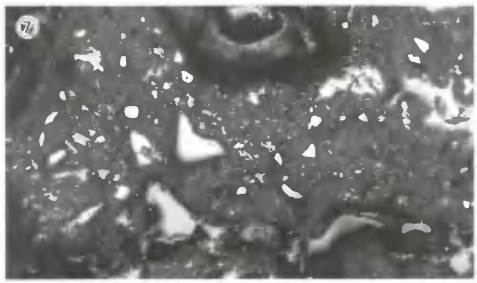






KBN－4
炉壁
⑥×100　炉壁内面：被熱粘土
⑦⑧×50　粘土鉱物(Cerisite)
混入鉱物





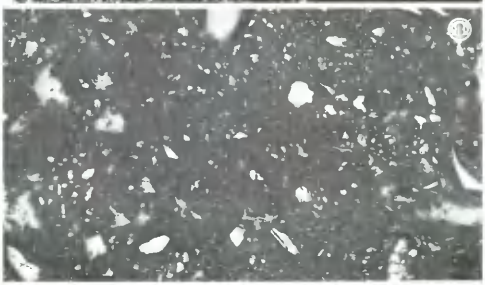
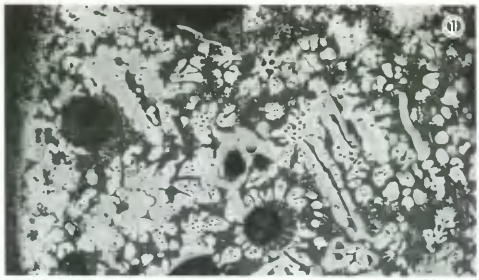
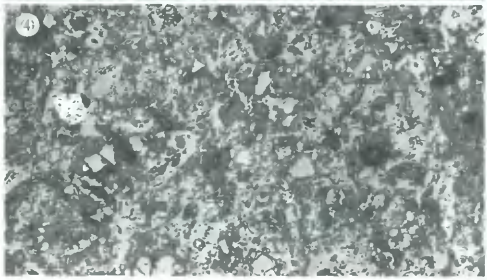


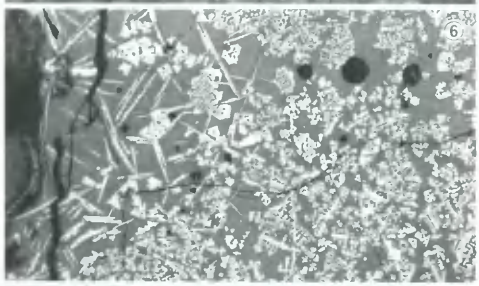
Photo. 2　砂鉄・炉壁の顕微鏡組織

KBN－5
炉壁
①×100　炉壁内面付着滓：ウルボスピネル晶出
②×100　内面溶融ガラス質滓中のウルボスピネル・イルミナイト
③×100　内面溶融ガラス質滓中のシュードブルカイト・イルミナイト
④×50 ⑤×100　被熱胎土：粘土鉱物非晶質化





KBN－6
炉内流動滓
①×100　イルミナイト・ウルボスピネル・ファイヤライト
②×100　ウルボスピネル・ファイヤライト
③×200　硬度圧痕：634Hv



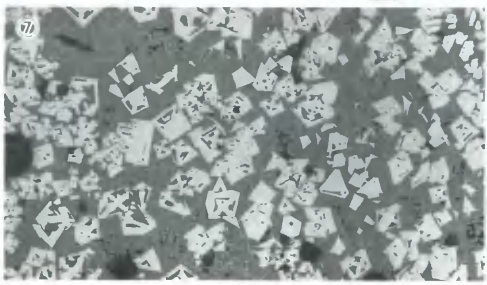
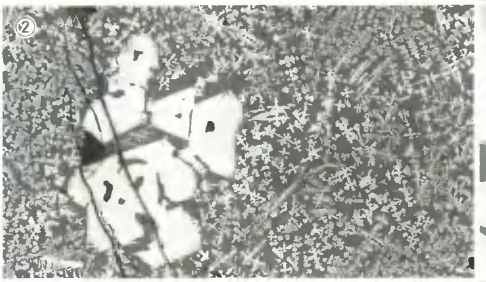
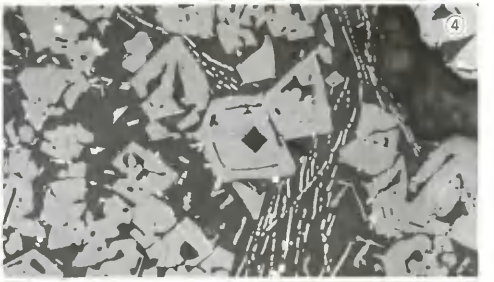


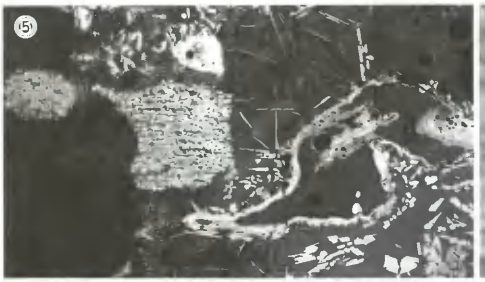
Photo. 3　炉壁・炉外流出滓の顕微鏡組織

KBN－7
炉内流動滓
①×100　硬度圧痕：640Hv
②×100③×400　ウルボスピネル・ファイヤライト



KBN－8
炉底塊
④×200　硬度圧痕：642Hv
⑤×100⑥×100　砂鉄残骸
イルミナイト・ファイヤライト
⑦⑧×100　ウルボスピネル・
イルミナイト・ファイヤライト





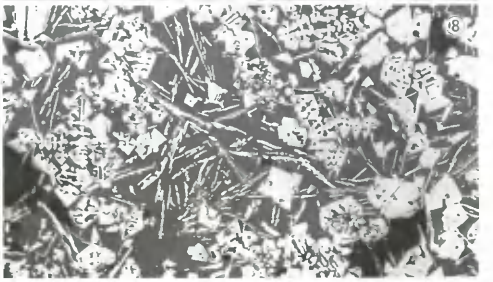
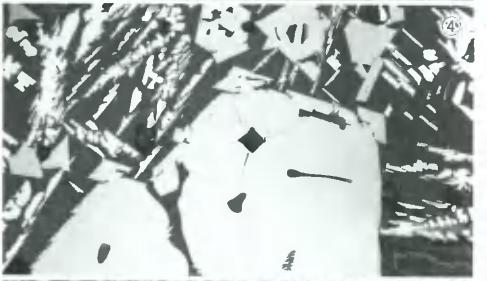
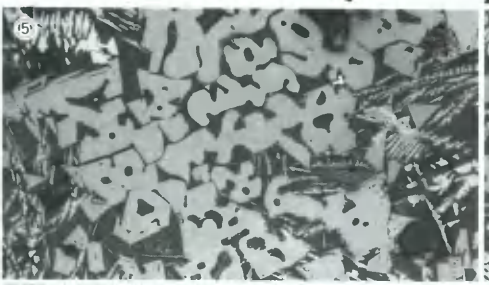


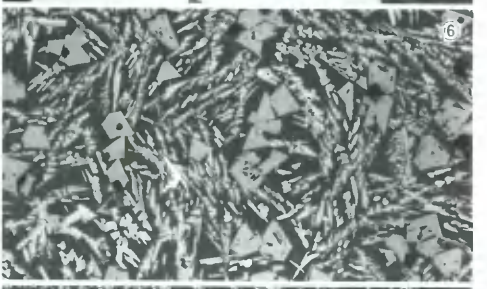
Photo. 4　炉外流出滓・炉底塊の顕微鏡組織

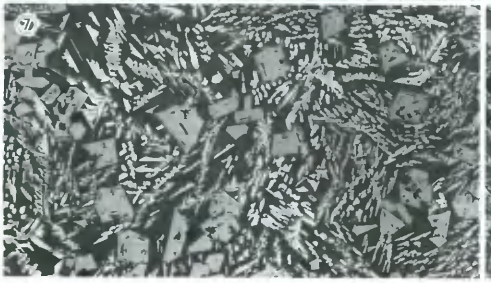
KBN－9
流出孔滓
①×100　硬度圧痕：660Hv
②×100　ウルボスピネル・ファイヤライト
③×100　中央：微小金属鉄粒　ウルボスピネル・ファイヤライト

KBN－10
炉外流出滓
④×200　硬度圧痕：620Hv
⑤～⑧×100　ウルボスピネル・イルミナイト









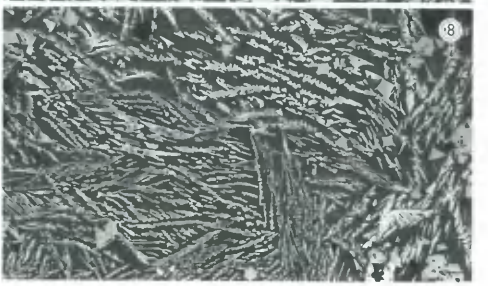


Photo. 5　流出孔滓・炉外流出滓の顕微鏡組織

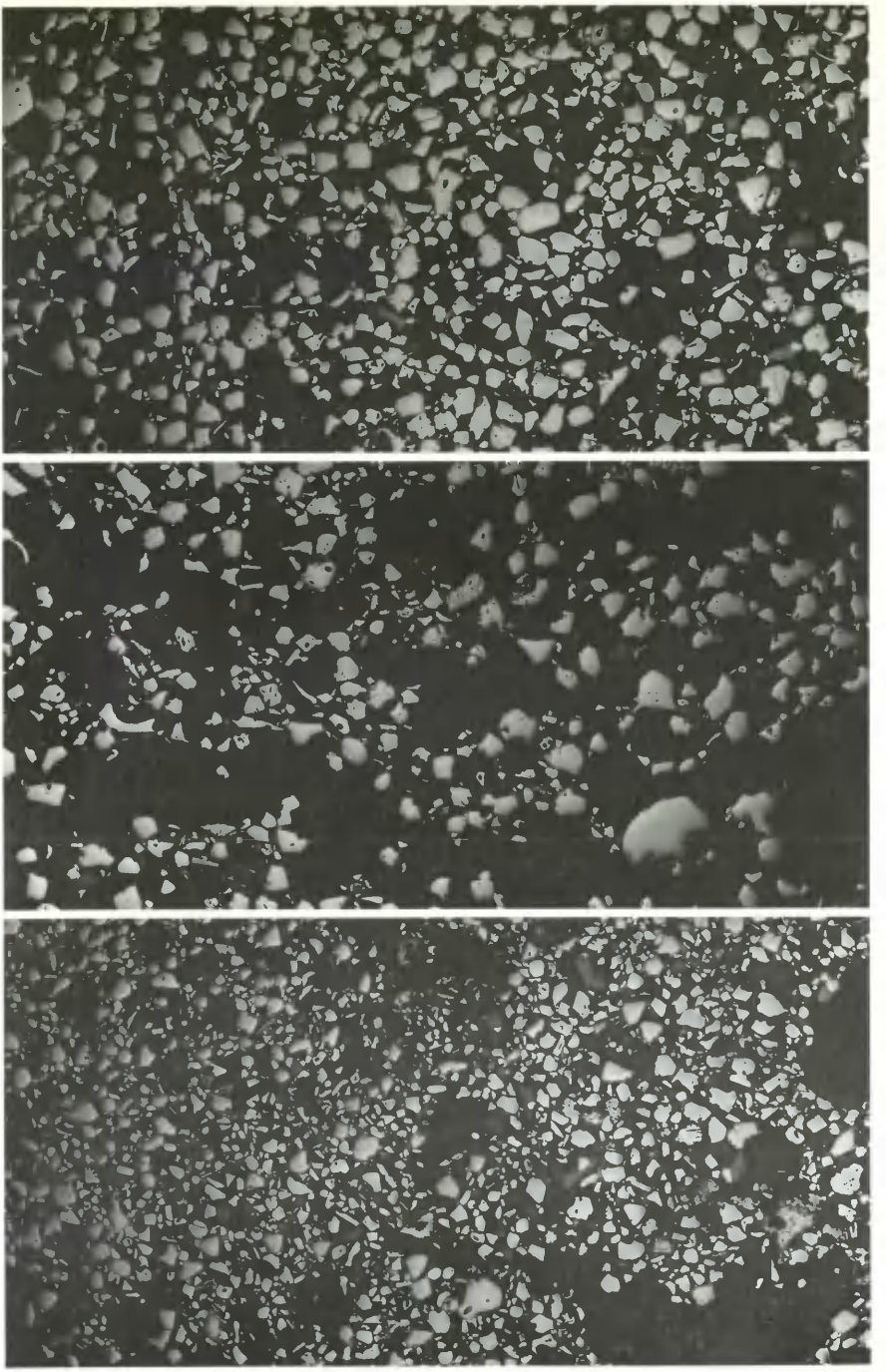


Photo. 6　砂鉄　上段：（KBN－1）中段：（KBN－2）下段：（KBN－3）のマクロ組織（×25）

立石遺跡

1．A地区全景
（北西から）

2．B地区全景
（南東から）

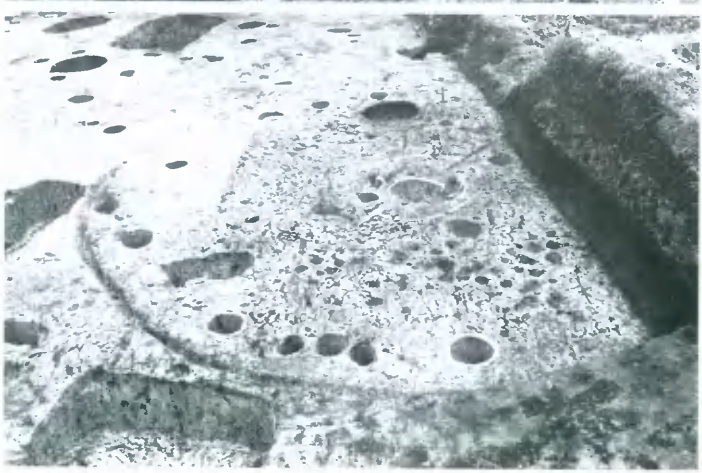
3．A～C地区全景
（北から）

図版 2

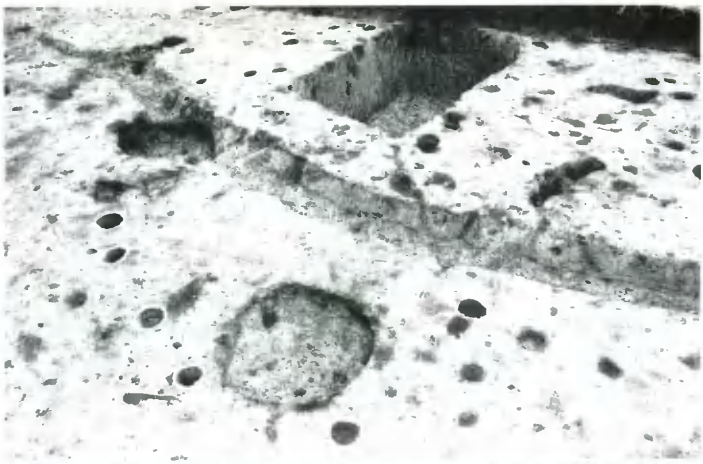
1．D地区全景
（南東から）

2．C～E地区全景
（東から）

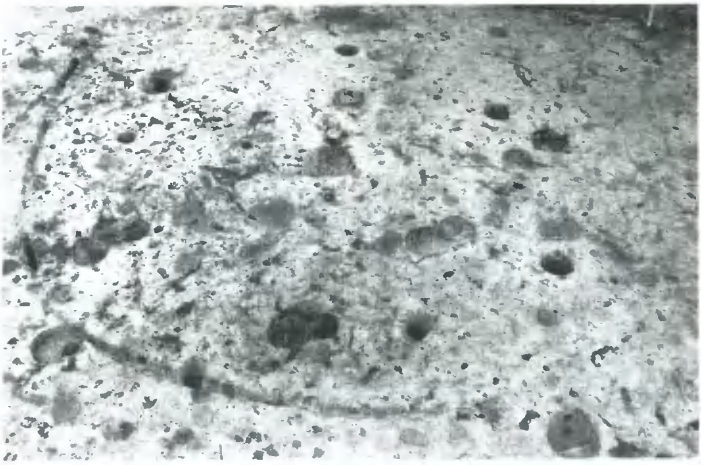
3．竪穴住居１・２
（北西から）



1．建物1
（北西から）



2．竪穴住居 3
（南西から）



3．竪穴住居 4
（北西から）

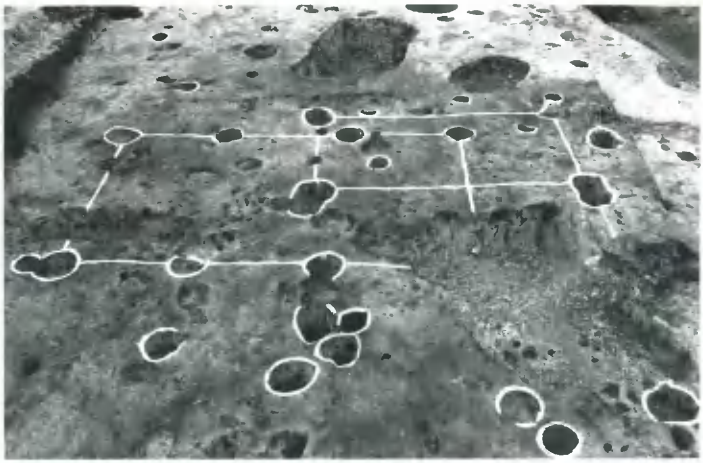
図版 4

1．竪穴住居 5
（北西から）

2．竪穴住居 6
（南西から）

3．竪穴住居 7
（南西から）

１．掘立柱建物１・２
（南東から）



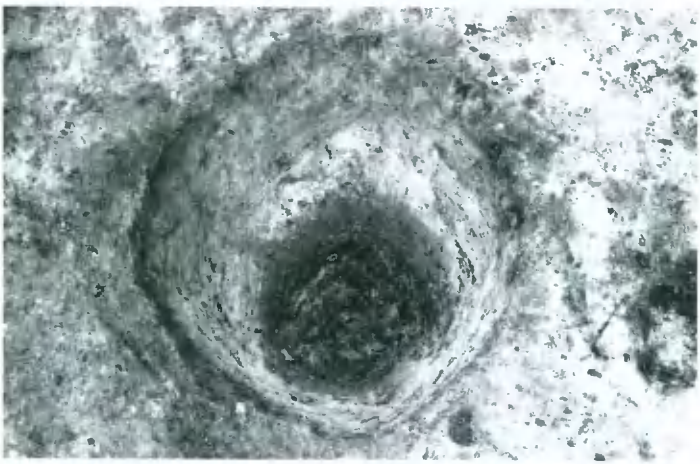
２．掘立柱建物７
（南東から）

３．掘立柱建物８
（北から）

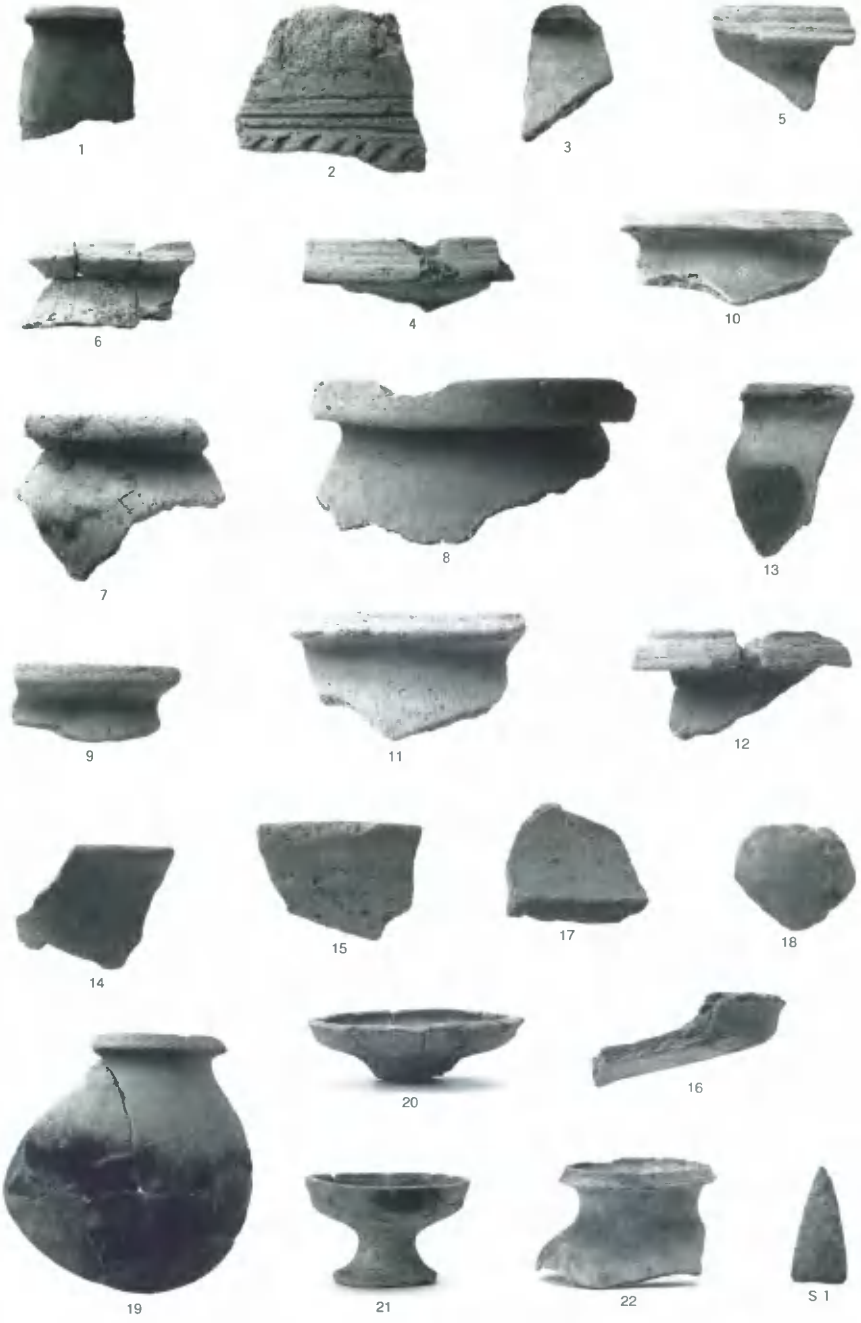
図版 6

1．土壙 9
（南東から）

2．土壙20

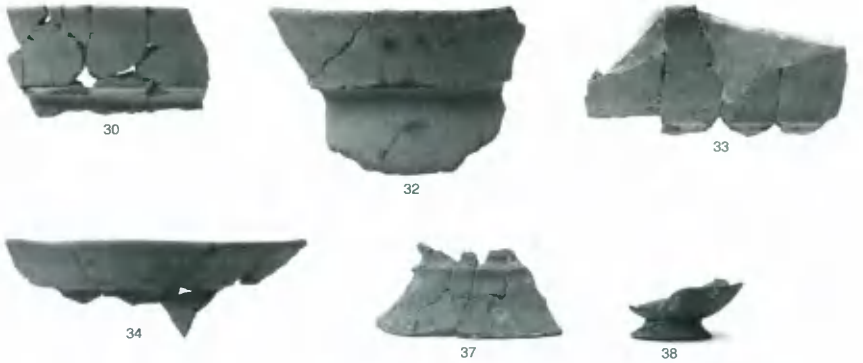


3．ピット内の
押形文土器
（B区）



竪穴住居 2 の出土遺物

図版 8



1．竪穴住居 6 の出土遺物

2．土壙12の出土遺物

3．土壙 5 の出土遺物（1）

1．土壙５の出土遺物（２）

2．土壙16の出土遺物

3．溝７の出土遺物

4．C地区出土遺物

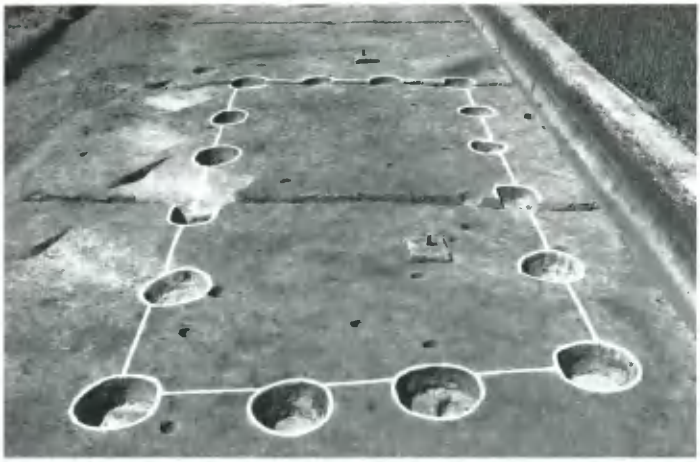
図版10

大開遺跡

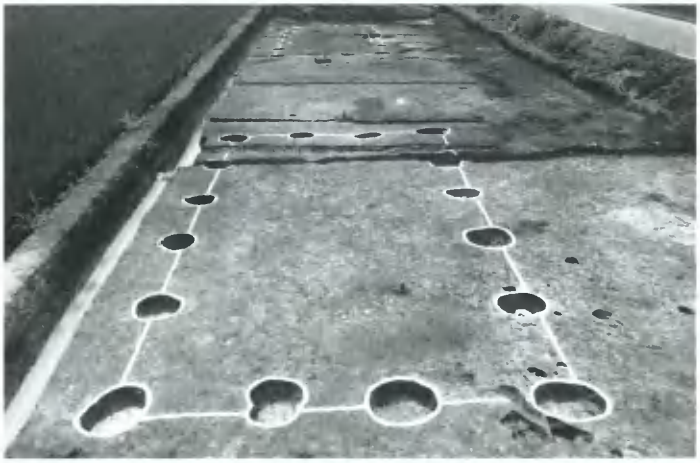
1．２区調査前の全景
（北から）

2．３区調査前の全景
（北から）

3．竪穴住居１
（北から）



1．掘立柱建物1
（南から）



2．掘立柱建物2
（北から）

3．土壙3
（南から）

図版12

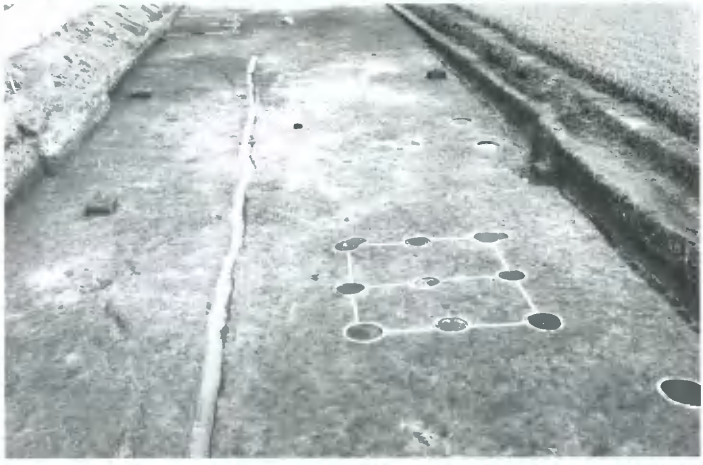
1．包含層出土の土器

2．包含層出土の石器

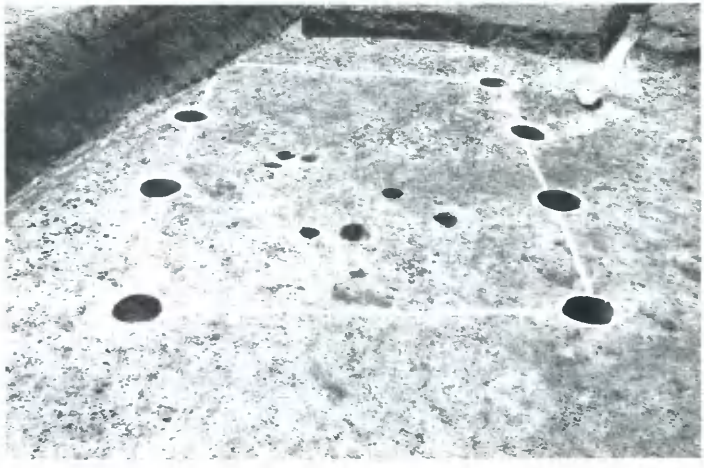
六番丁場遺跡

1．区調査前の全景
（北から）

2．掘立柱建物1
（南から）



3．掘立柱建物3
（北から）



図版14

1．土壙１（東から）

2．土壙３（南から）

3．土壙６・７・８・９（北から）

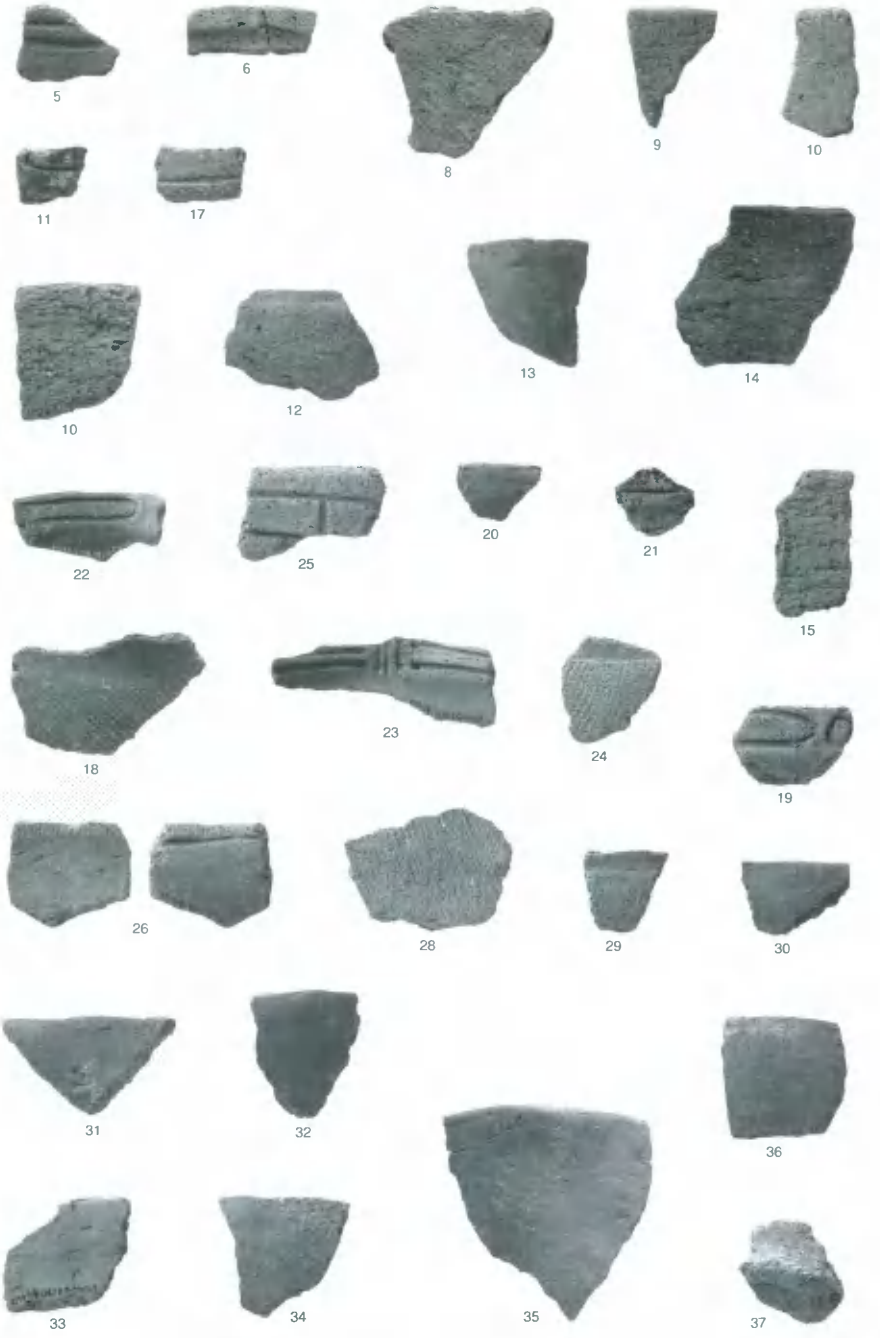
1．土壙７（北西から）

2．土壙７出土の炭化米

4．溝３の断面

3．溝３（南東から）

図版16

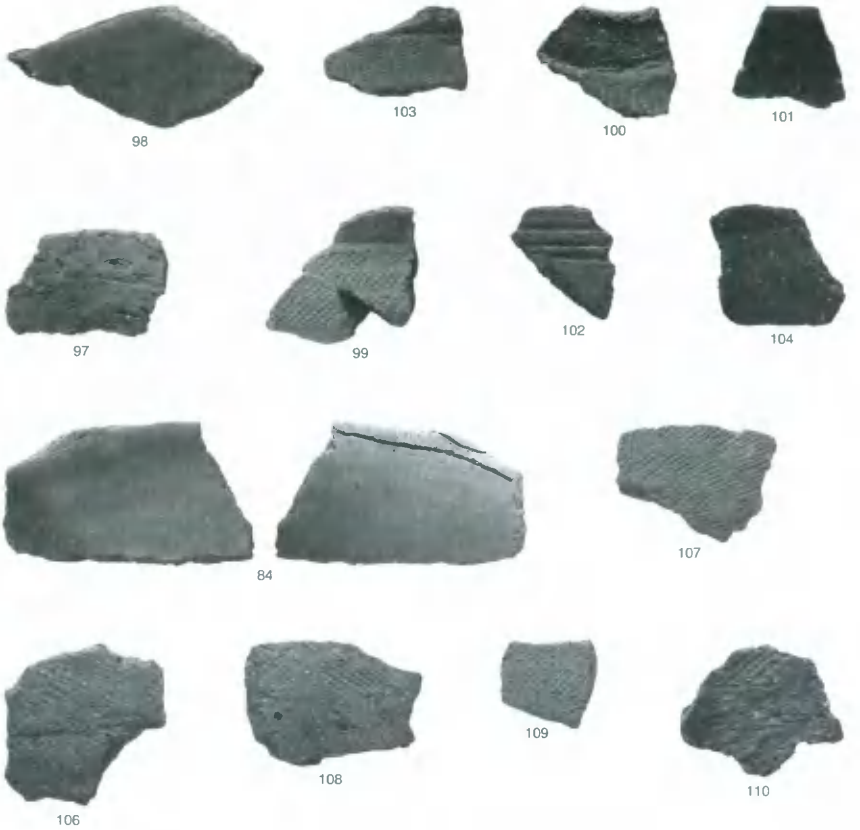


土壙 9 出土の縄文土器

1．溝３出土の石器

2．３区出土の縄文土器

図版18



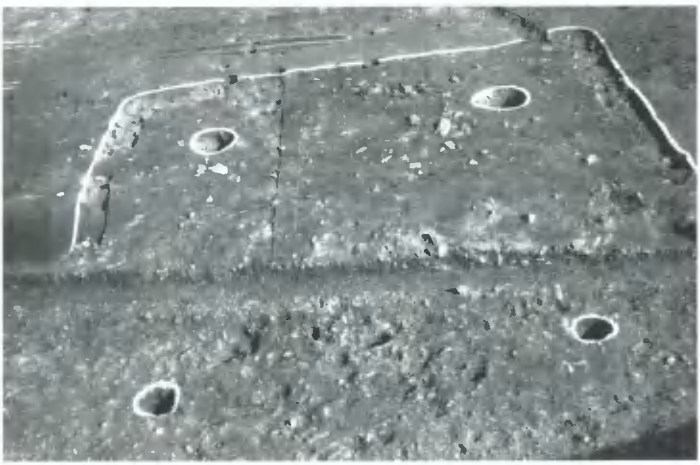
1．3区出土の縄文土器

2．3区出土の石器

九番丁場遺跡

1．４区全景
（南から）

2．竪穴住居１
（北西から）

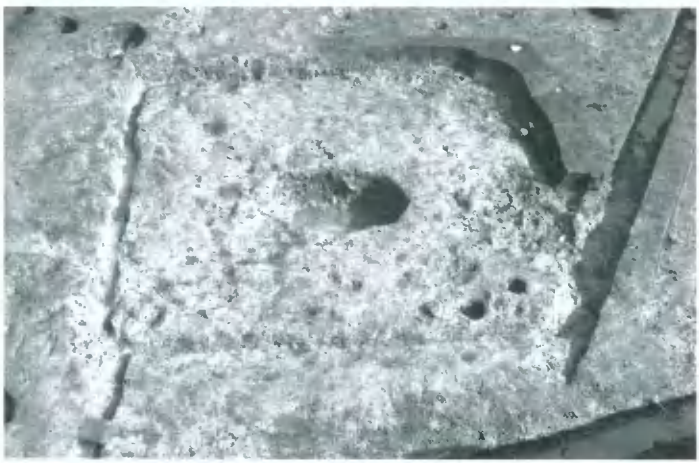


3．竪穴住居２
（西から）

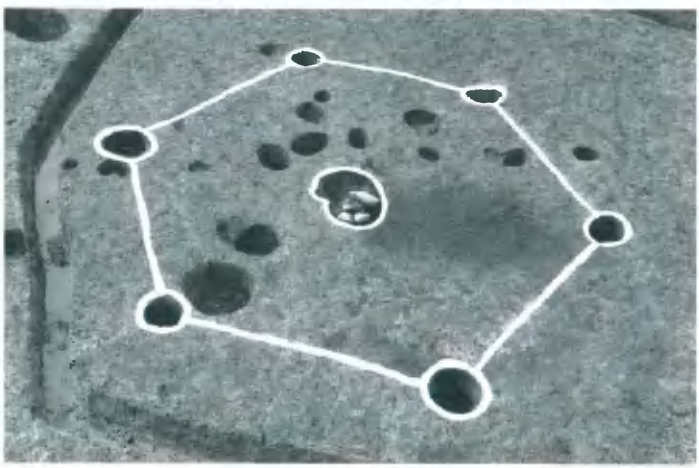
図版20

1．1区全景
（北から）

2．竪穴住居3
（西から）



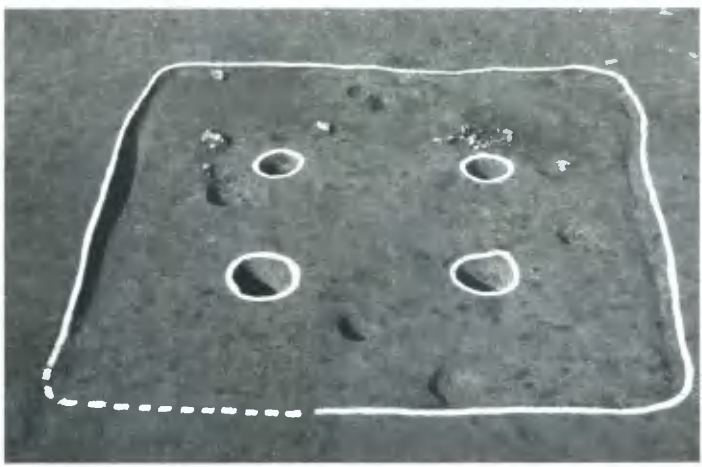
3．竪穴住居4
（東から）



1．竪穴住居５
（西から）

2．2区全景
（北から）

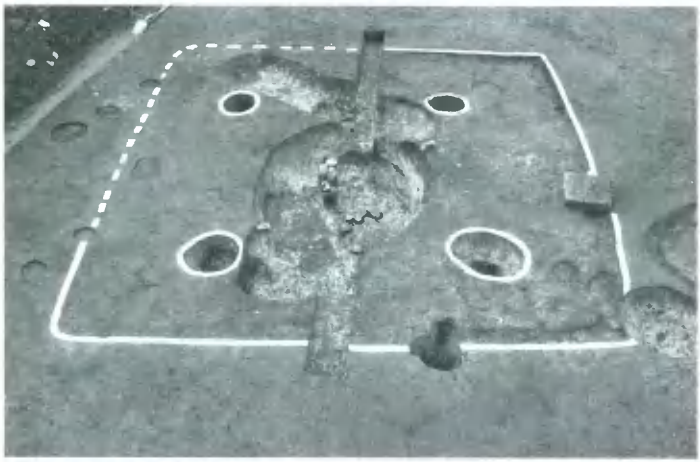
3．竪穴住居６
（南から）



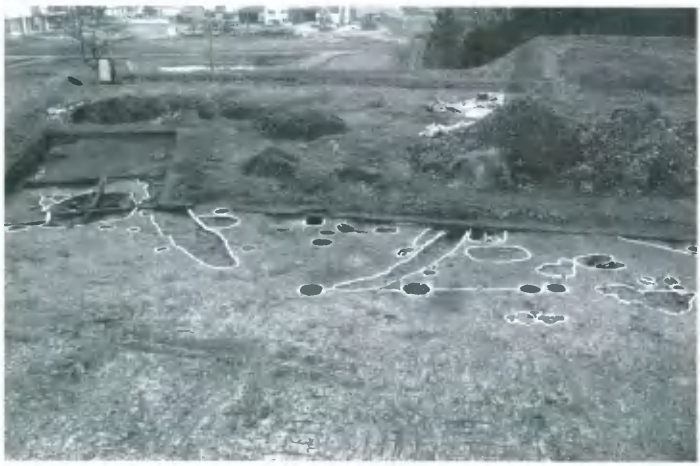
図版22

1．竪穴住居８
（南東から）

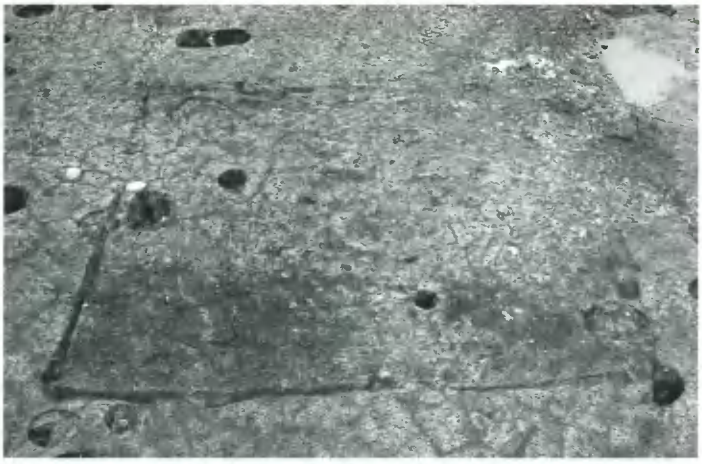
2．竪穴住居10
（東から）



3．３区全景
（北から）

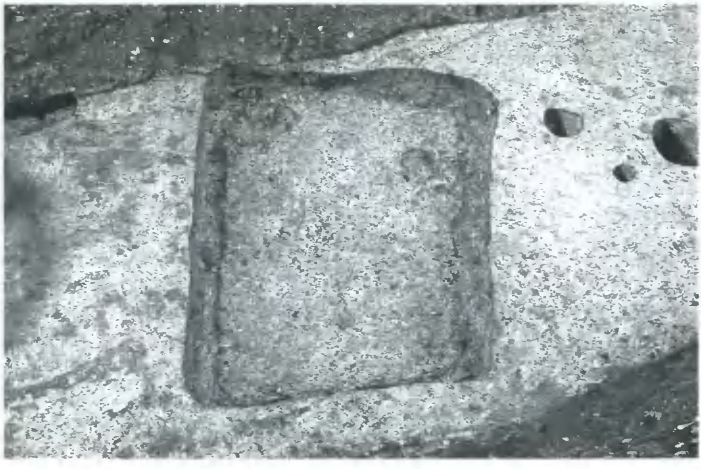


1．竪穴住居11
（東から）



2．竪穴住居12
（東から）

3．竪穴住居13
（東から）



図版24

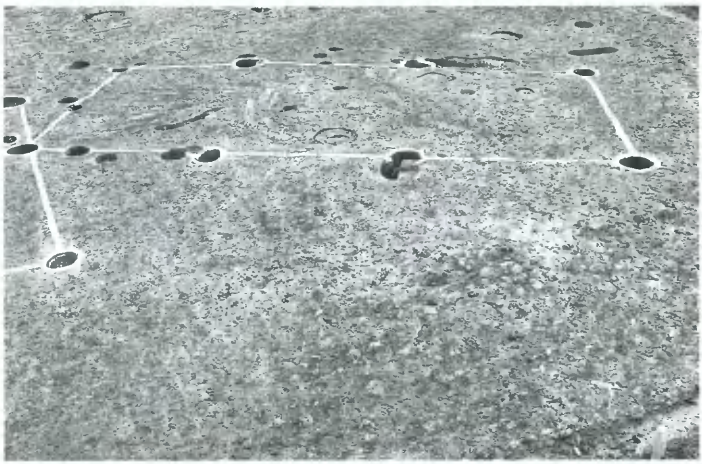
1．竪穴住居14
（東から）

2．竪穴住居15
（北から）

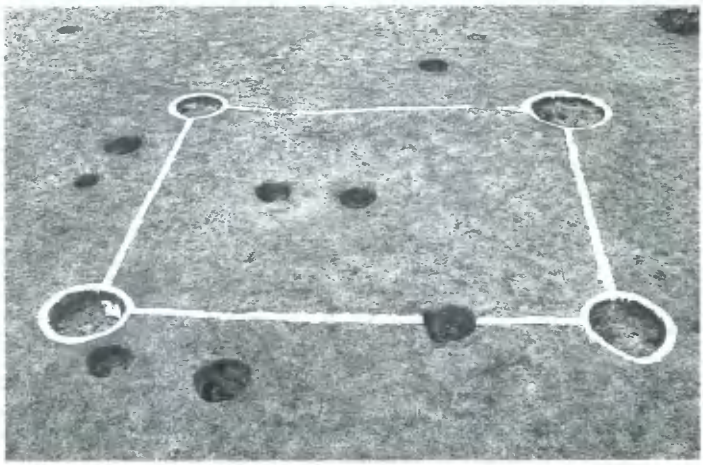
3．竪穴住居16
（東から）

1．竪穴住居17
（東から）

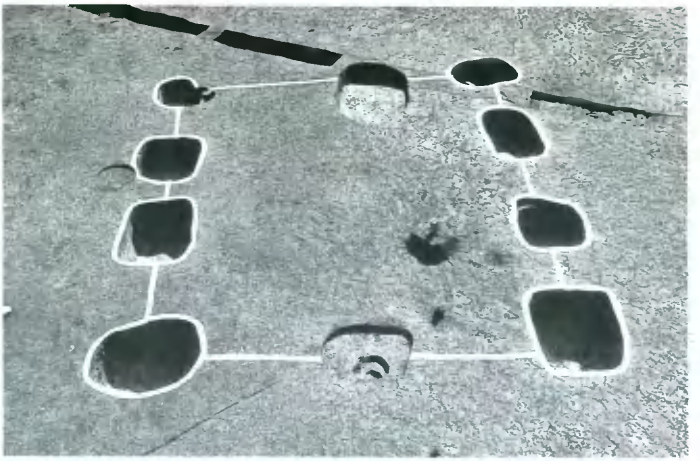
2．掘立柱建物２
（東から）



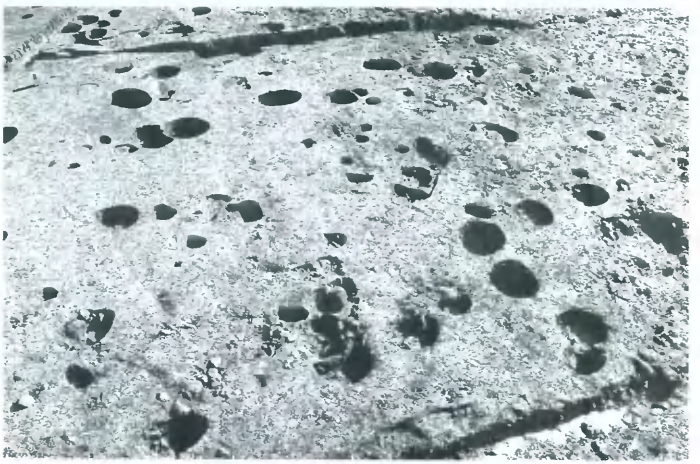
3．掘立柱建物６
（南東から）



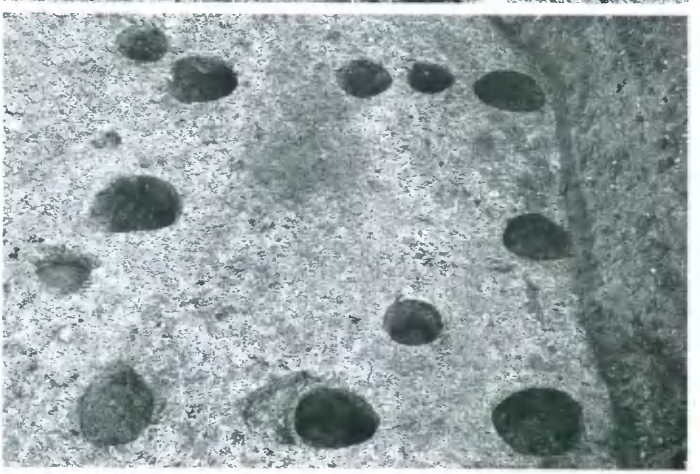
図版26



1．掘立柱建物10
（北から）

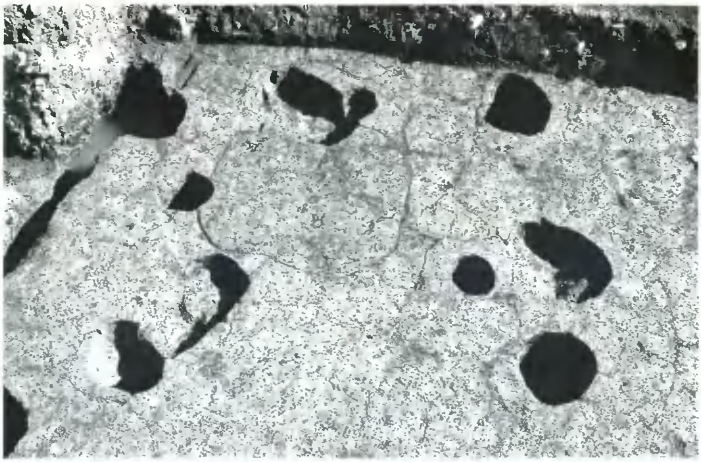


2．掘立柱建物12・13
（東から）



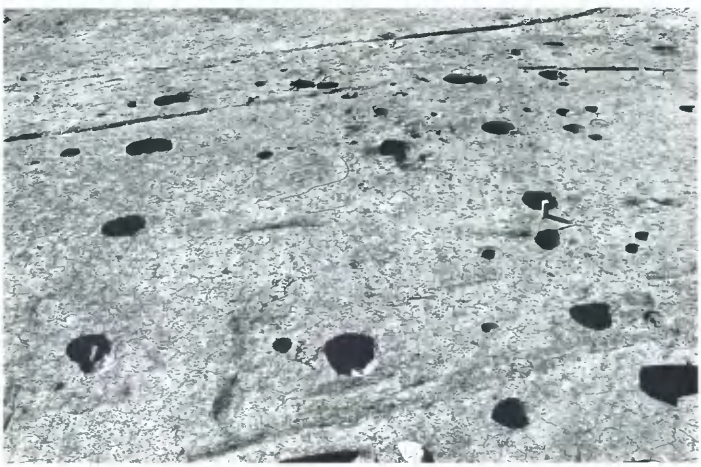
3．掘立柱建物14・15
（北から）

1．掘立柱建物16
（西南西から）



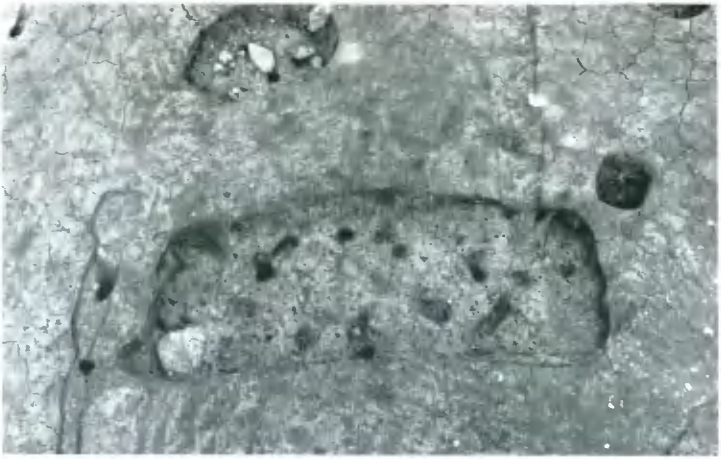
2．掘立柱建物17
（東から）

3．掘立柱建物18
（東から）



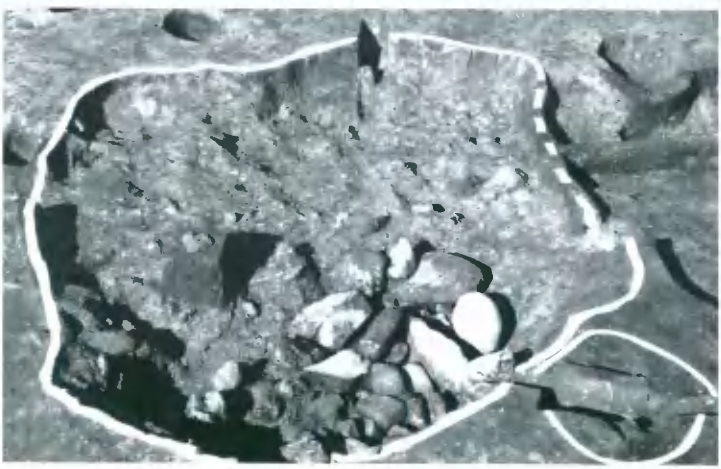
図版28

1．土壙11
（南西から）

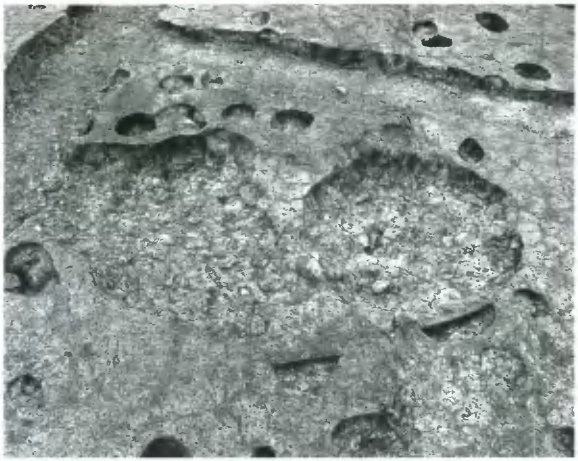


2．土壙12（左側）
・13（右側）
（西から）

3．土壙29
（南東から）



1．土壙37・38
（東から）



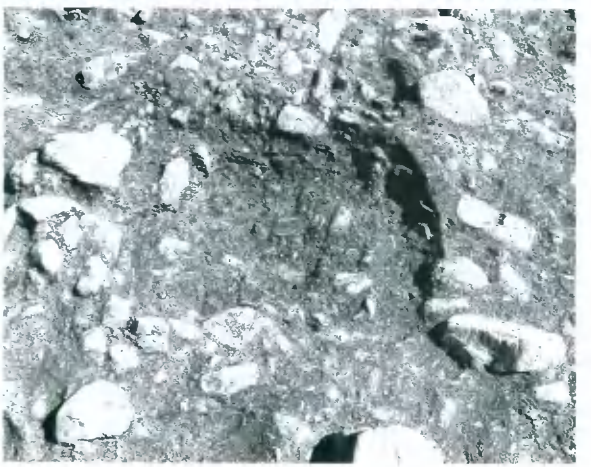
2．土壙39
（西から）

3．土壙43
（北から）

図版30

1．土壙47
（東から）

2．土壙50
（東から）



3．土壙58
（西から）

1．土壙62
（南から）

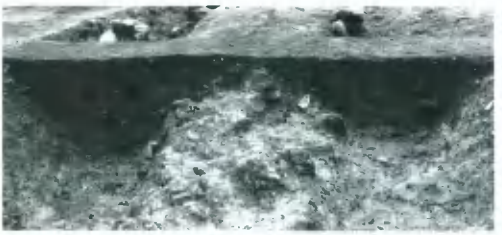
2．土壙64
（北から）

3．土壙66
（東から）

図版32

1．溝1・2・3・5
（北西から）

2．溝1・2の断面



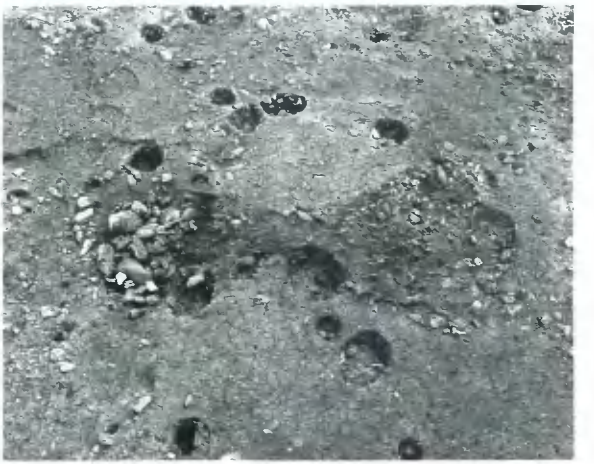
3．溝11・12
（北から）

4．溝14
（東から）

1．溝17
（東から）

2．製鉄遺構全景
（北から）

3．製鉄遺構中心部
（北から）



図版34

1．九番丁場遺跡の遠景
（南上空から）

2．8区の全景
（上空から）

3．6区・9区遠景
（上空から）

5

7

6

1．竪穴住居３の出土遺物

9

10

13

11

12

14

2．竪穴住居５の出土遺物

15

16

19

17

18

21

20

3．竪穴住居６の出土遺物

図版36

竪穴住居７の出土遺物（１）

51

61

53

54

59

60

62

C 1

S 7

22

S 6

G 1

S 4

S 5

1．竪穴住居７の出土遺物（２）

93

94

98

2．土壙25の出土遺物

74

80

82

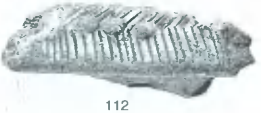
99

111

115

106

115


112

124

107

123

126

150

125

S 9

出土遺物

1．溝の出土遺物

2．包含層出土遺物（1）

208
210
209
M 3
M 4
M 4
S 23
S 20
S 21
S 22
S 24
S 25
S 18
S 26
S 27
S 15
S 16
S 17
S 28

包含層出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	たていしいせき　おおびらきいせき　ろくばんちょうばいせき　くばんちょうばいせき
書名	立石遺跡・大開遺跡・六番丁場遺跡・九番丁場遺跡
副書名	一般国道179号道路改築工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	165
編著者名	平井　勝・井上　弘・柳瀬昭彦・高畑知功・椿　真二・氏平昭則・金田善敬 尾上元規・時實奈歩・重根弘和・大澤正己・鈴木瑞穂
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL. 086-293-3211
発行年月日	2002年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
たていしいせき 立石遺跡	かがみのちょう 鏡野町 おざ 小座	606		35°6′42″	133°55′28″	1989. 8. 1～11 11. 6～12.22 1990.10.31～ 11.13	2720	一般国道179号道路改築工事に伴う発掘調査
おおびらきいせき 大開遺跡	かがみのちょうぬのはら 鏡野町布原			35°4′30″	133°56′30″	1995. 4. 1～ 7.19	4809	
ろくばんちょうばいせき 六番丁場遺跡	かがみのちょうぬのはら 鏡野町布原			35°4′21″	133°56′28″	1995. 7.20～10.24 1997. 6. 2～ 8.25	4710	
くばんちょうばいせき 九番丁場遺跡	かがみのちょう 鏡野町 ぬのはら 布原			35°4′6″	133°56′26″	1995.12. 5～ 1996. 3.21 1997. 9. 1～12.25 1999. 4. 1～ 2000. 3.31	8780	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立石遺跡	集落跡	縄文	住居 1 建物 1 土壙 1	縄文土器・弥生土器	
		弥生	竪穴住居 8 土壙 19		
		弥生～中世	掘立柱建物 10 鍛冶炉 1 溝 8		
大開遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居 1	局部磨製石斧・石包丁 縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器	
		古代	掘立柱建物 2		
		弥生～近世	土壙 6 風倒木痕		
六番丁場遺跡	集落跡	縄文	土壙 1	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・石包丁 太型蛤刃石斧 尖頭器・スクレイパー	・押型文土器 ・縄文後期の土器出土 ・縄文後期の土壙を検出
		古代～中世	掘立柱建物 4		
		弥生～近世	土壙 8 溝 3		
九番丁場遺跡	集落跡	縄文	土壙 1	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器 碧玉・ガラス管玉・鉄製紡錘車 鉄滓	大形竪穴住居 製鉄遺構
		弥生	竪穴住居 6		
		古墳	竪穴住居 9		
		弥生～古代	土壙 69		
		古代～中世	掘立柱建物 22		
		古代	製鉄遺構 1		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 165

立石遺跡・大開遺跡
六番丁場遺跡・九番丁場遺跡
一般国道179号道路改築工事に伴う発掘調査

平成14年3月15日印刷
平成14年3月31日発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社中野コロタイプ
岡山市玉柏390